新潟県埋蔵文化財調査報告書　第165集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XVIII

馬見坂遺跡
正尺A遺跡
正尺C遺跡

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XVIII

馬見坂遺跡
正尺A遺跡
正尺C遺跡

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市の新潟空港インターチェンジを起点に、山形県・秋田県を経て、青森市に至る高速自動車道です。現在、胎内市中条インターチェンジまで開通し、次の村上インターチェンジに向けて工事は着々と進んでいます。また、それに伴う発掘調査も順次行われています。

日本道路公団は平成17年10月に民営化され、高速自動車道建設を取り巻く環境も厳しく不透明な点もありますが、地元の建設要望には強いものがあります。

本書は、この高速自動車道建設に先立って、平成11～13年度に発掘調査をした新発田市馬見坂遺跡、新潟市正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡の発掘調査報告書です。

馬見坂遺跡では縄文時代から古代の遺物が出土し、連綿とこの地に人々が往来していたことがわかります。検出された旧河道からは土石流によって押し流されてきた遺物が出土し、古くから水害と隣り合わせにあった当地の歴史の一端を垣間見ることが出来ます。

正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡では自然堤防上の微高地から古墳時代前期の集落跡が検出されました。出土した大量かつ多様な土器のあり方は、人々の交流のあり方を考える上で貴重な資料となります。

今回の調査結果が、考古学研究者だけでなく、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元の方々や旧豊栄市教育委員会・新潟市教育委員会・新発田市教育委員会・佐々木土地改良区・佐々木コミュニティーセンターには多大なご協力とご援助をいただきました。また、旧日本道路公団北陸支社（現東日本高速道路株式会社）には調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚く御礼を申しあげます。

平成18年10月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本書は新潟県新発田市佐々木字中ノ割1509～1532番地ほかに所在する馬見坂遺跡、新潟県新潟市（旧豊栄市）葛塚字子辰高入3059番地ほかに所在する正尺Ａ遺跡、新潟県新潟市（旧豊栄市）葛塚字正尺644番地の１ほかに所在する正尺Ｃ遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し、平成11～13年度に実施した。

3　整理作業および報告書作成にかかる作業は平成17年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあたった。

4　馬見坂遺跡・正尺Ａ遺跡の遺構平面図・遺物出土位置の記録作成作業にはコンピュータ・システム株式会社のサイトシステムを用いた。

5　出土遺物および調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。資料の有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。

6　遺物の註記は、馬見坂遺跡を「ウマ」、正尺Ａ遺跡を「正尺A」、正尺Ｃ遺跡を「正尺C」とし、出土地点・層位等を併記した。

7　報告書掲載遺物の番号は遺物種別に関わりなく、遺跡ごとに通し番号を付した。本文および観察表・図面図版・写真図版の番号は全て一致している。

8　本書の図版中で示す北は日本平面直角座標第Ⅷ系のＸ軸方向を指す。グリッド杭の打設は委託業者が行った。

9　作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれに出典を記した。

10　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、自然科学分析を除いて巻末に一括して掲載した。

11　馬見坂遺跡の地質については高濱信行氏・卜部厚志氏（新潟大学積雪地域災害研究センター）、田中久夫氏（三条高校）、木村澄枝氏（新発田西高校）に御教示を賜った。

12　正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡の火山灰分析は高濱信行氏・卜部厚志氏（新潟大学積雪地域災害研究センター）が実施し、「正尺Ａ・正尺Ｃ遺跡から産出した火山灰層の鉱物組成と火山ガラスの化学組成」［高濱・卜部2001］として報告されている。

13　馬見坂遺跡の縄文土器については石川日出志氏（明治大学）、田中耕作氏・渡邊美穂子氏（新発田市教育委員会）に御教示いただいた。

14　正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡の土器については、相田泰臣氏（新潟市教育委員会）、石川日出志氏（明治大学）、伊藤秀和氏（加茂市教育委員会）、笹澤正史氏（上越市教育委員会）、野田豊文氏（朝日村教育委員会）、野水晃子氏（㈱吉田建設）、橋本博文氏（新潟大学）、水澤幸一氏（胎内市教育委員会）、渡邊朋和氏（新潟市教育委員会）に御教示いただいた。

15　馬見坂遺跡出土木簡の解読は相沢　央氏（新潟大学小林昌二研究室）に依頼した。

16　自然科学分野に係る分析は以下の機関に委託し、了解を得て再編集した。

　第Ⅲ章7A　高濱信行・卜部厚志（新潟大学積雪地域災害研究センター）、第Ⅲ章7B・第Ⅴ章6A　パリノ・サーヴェイ株式会社、第Ⅴ章6B　植田弥生（パレオ・ラボ）

17　木製品・金属製品の保存処理および遺物のＸ線撮影は三ツ井朋子（埋文事業団班長）が行った。

18　遺物の写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影した。撮影は整理職員があたった。

19　遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真は、デジタル化した遺構写真とあわせて編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。

　本文・挿表・挿図：Word・Excel形式のデータ・トレース原図・貼り込み版下、遺構図面図版：原図（修正済）・レイアウト図・文字データ、遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図、写真図版：デジタルデータ・レイアウト図。

20　本書の執筆・編集は土橋由理子（埋文事業団班長）が担当したが、遺構等については基礎整理段階で調査職員が執筆した原稿を加除・修正した。執筆職員は以下のとおり。

　第Ⅲ章４　高橋　聡・土橋由理子、第Ⅴ章１～４　加藤　学・波多野　孝・小林芳宏・佐藤敦史・片岡千恵・土橋由理子。第Ⅱ章は既刊の埋文事業団報告書の該当部分を参考に執筆した。第Ⅳ章１・２は既刊の正尺Ａ遺跡報告書の第Ⅲ章１・２［尾崎2001］を加除・修正した。

21　各遺跡について『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』等に概要の報告がなされているが、本書の記述をもって正式な報告とする。上記年報等と本書に齟齬がある点は、本書の記述をとるものとする。

22　発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大な御教示と御協力を賜った。厚くお礼申し上げる（五十音順　敬称略）。

朝岡正康　甘粕　健　遠藤恭雄　諫山えりか　小熊博史　小林昌二　佐藤雅一　鈴木　暁
関　雅之　立木宏明　鶴巻康志　廣野耕造　宮崎芳春

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査・整理体制 …… 2

A　調査体制 …… 2

B　整理体制 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

1　地理的環境 …… 5

2　歴史的環境 …… 6

A　砂丘上の遺跡 …… 6

B　自然堤防上の遺跡 …… 8

第Ⅲ章　馬見坂遺跡 …… 9

1　調査の方法と経過 …… 9

A　一次調査 …… 9

B　二次調査 …… 10

2　基本層序 …… 14

3　グリッドの設定 …… 16

4　遺　　構 …… 16

A　概　　要 …… 16

B　各　　説 …… 19

5　遺　　物 …… 23

A　概　　要 …… 23

B　縄文土器 …… 23

C　縄文時代の石器 …… 26

D　弥生土器 …… 26

E　古墳時代の土器 …… 26

F　古代の土器 …… 27

G　木製品 …… 27

6　新発田市馬見坂遺跡出土木簡 …… 27

A　釈　　文 …… 27

B　形　　状 …… 28

C　内　　容 …… 28

7　自然科学分析 …… 28

A　馬見坂遺跡の立地環境に関する自然科学的調査報告書 …… 28

B　馬見坂遺跡から出土した木製品の樹種 …… 36

8　ま　と　め …… 38
A　遺跡の研究史概略 …… 38
B　遺跡の立地 …… 38
C　地形の変遷 …… 39
D　縄文土器について …… 40

第Ⅳ章　正尺Ａ遺跡 …… 41

1　概　　要 …… 41

2　グリッドの設定 …… 41

3　基 本 層 序 …… 42

4　遺　　構 …… 42
A　概　　要 …… 42
B　各　　説 …… 42

5　遺　　物 …… 42
A　概　　要 …… 42
B　出土土器各説 …… 43

6　ま　と　め …… 44
A　遺　　物 …… 44
B　遺　　構 …… 44

第Ⅴ章　正尺Ｃ遺跡 …… 45

1　調査の方法と経過 …… 45

A　一次調査 …… 45
B　二次調査 …… 47

2　基本層序 …… 49

3　グリッドの設定 …… 50

4　遺　　構 …… 51
A　概　　要 …… 51
B　記述の方法と遺構の分類 …… 52
C　各　　説 …… 53

5　遺　　物 …… 60
A　古墳時代前期の土器 …… 61
B　古墳時代前期の土製品・石器・木製品・鉄製品 …… 78
C　古代以降の遺物 …… 79

6　樹種同定結果 …… 79
A　正尺Ｃ遺跡から出土した木材・炭化材の樹種 …… 79
B　正尺Ｃ遺跡出土木製品の樹種同定 …… 84

7　ま　と　め …… 88
A　遺　　物 …… 88
B　遺　　構 …… 91

《要　　約》……93

《引用・参考文献》……94

《観　察　表》……97
馬見坂遺跡　遺構一覧表……97
馬見坂遺跡　土器観察表……98
馬見坂遺跡　土製品・石器観察表……101
馬見坂遺跡　木製品観察表……101
正尺Ａ遺跡　土器観察表……102
正尺Ｃ遺跡　遺構観察表……104
正尺Ｃ遺跡　土器観察表……112
正尺Ｃ遺跡　土製品観察表……133
正尺Ｃ遺跡　石製品・鉄製品観察表……133
正尺Ｃ遺跡　木製品観察表……133

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置……1
第 2 図　砂丘の区分と遺跡分布……5
第 3 図　周辺の遺跡分布……7
第 4 図　馬見坂遺跡　一次調査トレンチ設定図……10
第 5 図　馬見坂遺跡　調査区の呼称……10
第 6 図　馬見坂遺跡　基本層序……14
第 7 図　馬見坂遺跡　グリッド設定図……17
第 8 図　馬見坂遺跡　遺構配置模式図……18
第 9 図　馬見坂遺跡　包含層出土　縄文土器分布図……25
第 10 図　粒度分析結果（平均粒径／淘汰度）……31
第 11 図　粒度分析結果（淘汰度／歪み度）……31
第 12 図　粒度分析結果（平均粒径／歪み度）……31
第 13 図　泥炭層準に認められる液状化跡……31
第 14 図　砂質試料の粒度分布曲線と頻度分布曲線（1）……33
第 15 図　砂質試料の粒度分布曲線と頻度分布曲線（2）……34
第 16 図　砂質試料の粒度分布曲線と頻度分布曲線（3）……35
第 17 図　木材……37
第 18 図　馬見坂遺跡の旧地形……38
第 19 図　福島潟周辺の地形分布図……39
第 20 図　正尺Ａ遺跡　グリッド配置図……41
第 21 図　正尺Ａ遺跡　基本層序……42
第 22 図　正尺Ａ遺跡　大グリッド別出土土器重量分布……43
第 23 図　正尺Ｃ遺跡　一次調査範囲図……45
第 24 図　旧河道と遺跡の位置……46
第 25 図　正尺Ｃ遺跡　市松掘り調査範囲図……48
第 26 図　正尺Ｃ遺跡　基本層序……50
第 27 図　正尺Ｃ遺跡　グリッド設定図……51
第 28 図　遺構の平面形態と断面形態の分類……52
第 29 図　正尺Ｃ遺跡　甕の器高・体部径散布図……63
第 30 図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（1）……64
第 31 図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（2）……65
第 32 図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（3）……66
第 33 図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（4）……67
第 34 図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（5）……68
第 35 図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（6）……69
第 36 図　正尺Ｃ遺跡　縄文施文の土器重量分布図……69
第 37 図　正尺Ｃ遺跡　包含層出土土器重量別分布図……77
第 38 図　木材・炭化材（1）……81
第 39 図　木材・炭化材（2）……82
第 40 図　正尺Ｃ遺跡　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（1）……86
第 41 図　正尺Ｃ遺跡　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（2）……87
第 42 図　正尺Ｃ遺跡　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（3）……88

表 目 次

第 1 表 馬見坂遺跡 縄文時代の石器集計表‥‥26
第 2-1 表 放射性炭素年代測定結果‥‥‥‥‥‥‥29
第 2-2 表 馬見坂遺跡関連年代測定値‥‥‥‥‥‥29
第 3 表 放射性炭素年代と遺物層序‥‥‥‥‥‥29
第 4 表 馬見坂遺跡砂丘粒度分析‥‥‥‥‥‥‥30
第 5 表 樹種同定結果‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥36
第 6 表 正尺Ｃ遺跡 甕の底径別集計表‥‥‥‥63
第 7 表 正尺Ｃ遺跡 主要遺構出土土器器種構成比率‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥74
第 8 表 正尺Ｃ遺跡 主要遺構出土土器大別器種構成比率‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥74
第 9 表 正尺Ｃ遺跡 SZ439・610出土土器比率‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥74
第 10 表 正尺Ｃ遺跡 主要遺構出土土器比率（1）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥74
第 11 表 正尺Ｃ遺跡 主要遺構出土土器比率（2）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥75
第 12 表 正尺Ｃ遺跡 主要遺構出土土器比率（3）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥75
第 13 表 樹種同定結果‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥80
第 14 表 正尺Ｃ遺跡出土木製品樹種同定結果‥‥85
第 15 表 編年対応表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥89

図 版 目 次

馬見坂遺跡

［図面図版］

図版 1 馬見坂遺跡 遺構全体図
図版 2 馬見坂遺跡 遺構分割図（1） Ⅰ区②
図版 3 馬見坂遺跡 遺構分割図（2） Ⅰ区①、Ⅰ区③
図版 4 馬見坂遺跡 遺構分割図（3） 36Tr～Ⅱ区
図版 5 馬見坂遺跡 土層堆積状況セクション図
図版 6 馬見坂遺跡 遺構個別図（1） P27・29・80・81・87・88・97・98・113・114・138・170・193・201・203・219、炭1、SK82・90・104・108・109・122・139・145
図版 7 見坂遺跡遺構個別図（2） SX78・100・102・103・107・111・112・115・141・152・153・202・221、SK146・210・218、風倒木91
図版 8 馬見坂遺跡 遺構個別図（3） 風倒木224、SX225
図版 9 馬見坂遺跡 遺構個別図（4） 遺物出土状況（6D区・16H区）、風倒木134、P26
図版 10 馬見坂遺跡 縄文土器（1） P114、SK8・90・107・108・109・153、SX78・103・111・225、風倒木91・224、包含層
図版 11 馬見坂遺跡 縄文土器（2） 包含層 縄文時代の石器 SK219、包含層
図版 12 馬見坂遺跡 縄文土器（3） 弥生土器 古墳時代の土器 古墳以降の遺物 包含層 自然流路出土遺物

正尺Ａ遺跡

［図面図版］

図版 13 正尺Ａ遺跡 遺構全体図
図版 14 正尺Ａ遺跡 遺構個別図 SI2、SK4
図版 15 正尺Ａ遺跡 古墳時代の土器（1） SK4、包含層
図版 16 正尺Ａ遺跡 古墳時代の土器（2） 包含層
図版 17 正尺Ａ遺跡 古墳時代の土器（3） 包含層

正尺Ｃ遺跡

［図面図版］

図版 18 正尺Ｃ遺跡 遺構全体図（1）
図版 19 正尺Ｃ遺跡 遺構全体図（2）
図版 20 正尺Ｃ遺跡 遺構部分図
図版 21 正尺Ｃ遺跡 遺構分割図（1）

図版 22　正尺Ｃ遺跡　遺構分割図（2）
図版 23　正尺Ｃ遺跡　遺構分割図（3）
図版 24　正尺Ｃ遺跡　遺構分割図（4）
図版 25　正尺Ｃ遺跡　遺構分割図（5）
図版 26　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（1）　SI155
図版 27　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（2）　SI144
図版 28　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（3）　SI144
図版 29　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（4）　SI36、SB800
図版 30　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（5）　SB530
図版 31　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（6）　SB540
図版 32　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（1）　SB81・82・90
図版 33　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（8）　SB731
図版 34　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（9）　SB732
図版 35　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（10）　SZ439
図版 36　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（11）　SZ439
図版 37　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（12）　SZ439-SD214
図版 38　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（13）　SZ439-SD311
図版 39　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（14）　SZ349-SD214
図版 40　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（15）　SZ439-SD311
図版 41　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（16）　SZ439-SD214
図版 42　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（17）　SZ439-SD214
図版 43　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（18）　SI77
図版 44　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（19）　SZ439-SB344、SK226
図版 45　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（20）　SZ610、SD604
図版 46　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（21）　SD38・40・114・203
図版 47　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（22）　SD140、SK164
図版 48　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（23）　SK146・164、SD185
図版 49　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（24）　SK58・456・481・482・746
図版 50　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（25）　SK32・56・59・118
図版 51　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（26）　SK213・215・228・229・230・231
図版 52　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（27）　SK211・213・215・216・218・228～231
図版 53　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（28）　SX405・768、P191・620
図版 54　正尺Ｃ遺跡　遺構個別図（29）　SK26・27・157・654、P122・725、SX487
図版 55　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（1）　SI155・144
図版 56　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（2）　SI144・36、SK164
図版 57　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（3）　SI36
図版 58　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（4）　SI36
図版 59　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（5）　SZ439-SD311
図版 60　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（6）　SZ439-SD311
図版 61　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（7）　SZ439-SD311・214
図版 62　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（8）　SZ439-SD214、SK194
図版 63　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（9）　SZ439-SD209
図版 64　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（10）　SZ439-SD209
図版 65　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（11）　SI439-SD209
図版 66　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（12）　SZ439-SD209・SK226、SI77
図版 67　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（13）　SI77
図版 68　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（14）　SZ610-SD496、SD40・140、SK164
図版 69　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（15）　SD185
図版 70　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（16）　SD185・203・604、SK26・27・58・59

図版 71　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（17）　SK118・146・157・211
図版 72　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（18）　SK213・218・228・229・231・456・457、P319
図版 73　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（19）　SK481、SX217・402・405・768
図版 74　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（20）　SX402、SK23
図版 75　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（21）　SX485、SX403・533、包含層
図版 76　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（22）　包含層
図版 77　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（23）　包含層
図版 78　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（24）　包含層
図版 79　正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土製品・石製品・木製品・金属器
図版 80　正尺Ｃ遺跡　古代以降の遺物

馬見坂遺跡

［写真図版］

図版 81　馬見坂遺跡　全景・基本層序
図版 82　馬見坂遺跡　7D区・8E区・10G区完掘、基本層序
図版 83　馬見坂遺跡　P27・80・82・87・88・90・97・98
図版 84　馬見坂遺跡　SK108・109、P113・201、SX103・115、炭1・2、8E区材
図版 85　馬見坂遺跡　SK139・218、風倒木224、16H一括土器、SK3・5、P26
図版 86　馬見坂遺跡　縄文土器（1）　P114、SK8・90・107・108・109・153、SX78・103・111・225・風倒木91・224、包含層
図版 87　馬見坂遺跡　縄文土器（2）　包含層　縄文時代の石器　SK219、包含層　弥生土器　古墳時代の土器　古代以降の遺物　包含層　自然流路出土遺物（1）
図版 88　馬見坂遺跡　自然流路出土遺物（2）　鉄滓

正尺Ａ遺跡

［写真図版］

図版 89　正尺Ａ遺跡　全景　基本層序　SI2
図版 90　正尺Ａ遺跡　SK4、包含層　土器出土状況
図版 91　正尺Ａ遺跡　古墳時代の土器（1）　SK4　包含層
図版 92　正尺Ａ遺跡　古墳時代の土器（2）　包含層
図版 93　正尺Ａ遺跡　古墳時代の土器（3）　包含層

正尺Ｃ遺跡

［写真図版］

図版 94　正尺Ｃ遺跡　遠景
図版 95　正尺Ｃ遺跡　近景　基本層序　SD185　SZ439-SD209・311
図版 96　正尺Ｃ遺跡　SI144・155
図版 97　正尺Ｃ遺跡　SI36・144・155、SB81・82・90・530・540
図版 98　正尺Ｃ遺跡　SB731・733・SB732-P498、SZ439、SZ439-SD311
図版 99　正尺Ｃ遺跡　SZ439-SD209・214・311
図版 100 正尺Ｃ遺跡　SZ439-SD209・SK226、SI77
図版 101 正尺Ｃ遺跡　SZ439（SB344-P232）、SZ610、SZ610-SD496、SB731、SK481、SD38・40・114・604
図版 102 正尺Ｃ遺跡　SD140・164・203
図版 103 正尺Ｃ遺跡　SK481・482、SD164・185
図版 104 正尺Ｃ遺跡　SK56・58・59・118・231・456
図版 105 正尺Ｃ遺跡　SK213・216・228・229
図版 106 正尺Ｃ遺跡　SK26・32・157・211・215・218・654、P122
図版 107 正尺Ｃ遺跡　P191・301・620・725、SX405・487・768、包含層　遺物出土状況

図版 108 正尺Ｃ遺跡　包含層　遺物出土状況
図版 109 古墳時代の土器（1）　SI36・155
図版 110 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（2）　SZ439・SI77
図版 111 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（3）　SI155・144
図版 112 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（4）　SI144・36
図版 113 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（5）　SI36
図版 114 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（6）　SI36
図版 115 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（7）　SZ439-SD311
図版 116 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（8）　SZ439-SD311
図版 117 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（9）　SZ439-SD311・214
図版 118 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（10）　SZ439-SD214・209、SK194
図版 119 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（11）　SZ439-SD209
図版 120 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（12）　SZ439-SD209
図版 121 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（13）　SZ439-SD209
図版 122 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（14）　SZ439-SD209・SK226
図版 123 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（15）　SI77
図版 124 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（16）　SI77、SZ610-SD496、SD114・140・185、SK164
図版 125 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（17）　SD185
図版 126 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（18）　SK26・27・58・59、SD203
図版 127 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（19）　SK118・146・157・211
図版 128 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（20）　SK213・218・228・229・231・456・457・481、P319
図版 129 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（21）　SK481・SX217・402・405・768
図版 130 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（22）　SX402、SK23
図版 131 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（23）　SK23、SX403・485・533、包含層
図版 132 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（24）　包含層
図版 133 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（25）　包含層
図版 134 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（26）　包含層
図版 135 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（27）　包含層
図版 136 正尺Ｃ遺跡　古墳時代の土器（28）　土製品・石製品・木製品・金属器
図版 137 正尺Ｃ遺跡　古代以降の遺物　旧河道、包含層

第Ⅰ章　序　　説

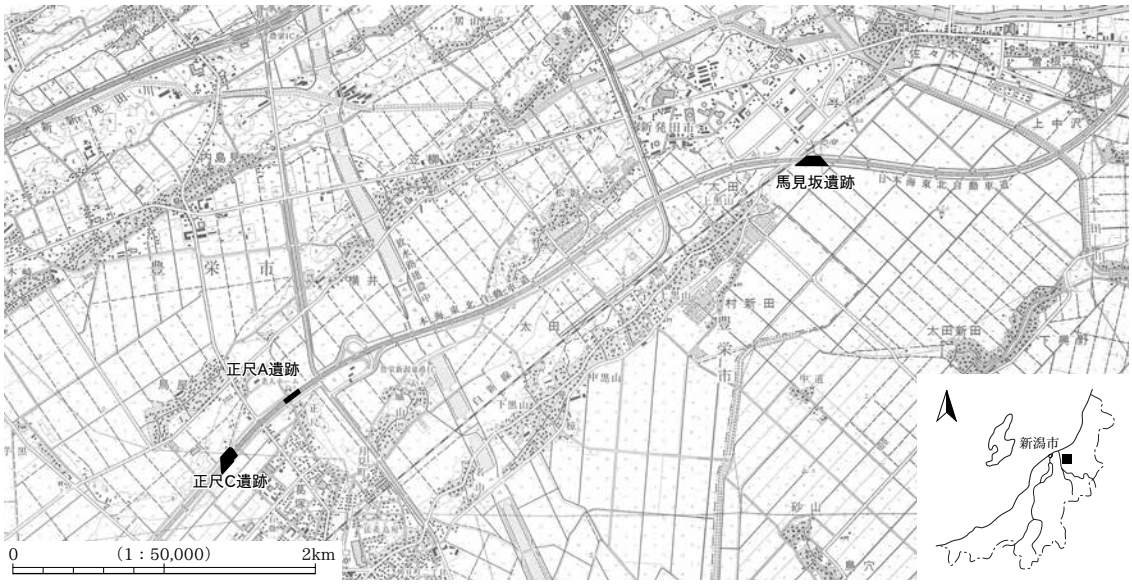
1　調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道（以下、日東道）は、新潟市を起点に青森市に至る高速自動車道である。日東道は平成15年現在、新潟空港インターチェンジから中条インターチェンジまで開通しており、日本海沿岸地域における産業・経済・文化の交流・発展の促進に大きな役割を果たしている。

日東道のうち正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡・馬見坂遺跡にかかる第12次施工命令区間（新潟―中条間　約27.5km）は、平成元年２月に基本計画路線が決定され、平成５年11月、施工命令が出された。これを受けて、道路公団と県教委との間で当該区間の分布調査・一次（確認）調査等に関する協議が本格化した。

埋文事業団は県教委の依頼を受け、平成６年３月１日と11月28日～12月１日に分布調査を実施し、周知の遺跡２か所、遺物採集地点15か所について一次調査が必要である旨、県教委に報告した。その際、地盤沈下の著しい新潟平野を通過している法線においては、現水田面の地下深くに遺跡が埋没している可能性があるため、遺物採集地点以外でも遺跡の有無を確認する調査が必要であることも報告した。その後、遺跡推定地６か所を追加して、総計303,200㎡について一次調査を実施することとなった。

馬見坂遺跡は周知の遺跡ということもあり、一次調査の対象となった。平成10年10月、道路公団から調査対象地のうち用地買収済み部分13,540㎡についての調査実施希望が出され、それに基づいて10月28日～11月６日まで一次調査を実施した。調査の結果、自然流路跡が検出され、そこから縄文時代～平安時代の遺物が出土することが明らかとなり、該当部分3,300㎡を二次調査の対象とすることにした。平成11年１月の協議で、前回未買収だった部分の一次調査と一次調査追加対象地となった部分の調査に、４月から着手することが決められた。調査は４月13日から20日にかけて、6,500㎡を対象として実施された。その結果、縄文土器が比較的良好な状態で包蔵されている場所があることがわかり、該当部分3,370㎡を新たに二次調査対象地に含めることにした。馬見坂遺跡の最終的な調査対象面積は6,670㎡と



第１図　遺跡の位置
〔国土地理院地形図 1：25,000 平成14年「新発田」・「松浜」〕

なり、5月17日から本格的な二次調査に移行した。

正尺Ａ遺跡は周知の遺跡である正尺Ａ遺跡の隣接地にあたることから、推定地11として平成11年6月14・15・17日、平成12年4月14・17・19～21日・5月15～17日に一次調査を行った。調査の結果、古墳時代・平安時代の遺物が出土したので、正尺Ａ遺跡の拡大範囲として県遺跡台帳に登録した。そして、5,240㎡について二次調査が必要である旨報告した。

正尺Ｃ遺跡は推定地10として平成9年12月4～9日、平成11年7月22・27日に一次調査を行った。調査の結果、古墳時代の遺物が出土したため、新たに正尺Ｃ遺跡として県遺跡台帳に登録した。そして、11,000㎡について二次調査が必要である旨報告した。なお、平成11年度の一次調査においては、矢板打設の必要性の有無および掘削深度の資料を得るために、調査範囲西側の深掘りを行った。軟弱地盤であったため作業は困難を極めたが、下層の粗粒砂層から遺物が出土しなかったことから矢板の必要はないと判断し、平成11年9月20日から二次調査を開始した。

2　調査・整理体制

A　調 査 体 制

(1) 一 次 調 査

［平成9年度］

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　平野　清明）			
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団			
管　　理	須田　益輝（事務局長）　　若槻　勝則（総務課長）			
庶　　務	泉田　誠（総務課主事）			
調査総括	亀井　功（調査課長）			
調査指導	藤巻　正信（調査課副参事　調査第一係長）			
調査職員	遺　　跡	担　　当	職　　員	調査期間
	正尺Ｃ遺跡 （推定地10）	野水　仁（調査課文化財調査員）	小池　義人（調査課主任調査員） 江口　志麻（調査課嘱託員）	平成9年12月4～9日

［平成10年度］

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）			
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団			
管　　理	須田　益輝（事務局長）　　若槻　勝則（総務課長）			
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）			
調査総括	本間　信昭（調査課長）			
調査指導	寺﨑　裕助（調査課副参事　調査第一係長）			
調査職員	遺　　跡	担　　当	職　　員	調査期間
	馬見坂遺跡	飯坂　盛泰（調査課文化財調査員）	鈴木　勉（調査課文化財調査員）	平成10年10月28日～ 11月6日

［平成11年度］

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）			
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団			
管　　理	須田　益輝（事務局長）　　若槻　勝則（総務課長）			
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）			
調査総括	本間　信昭（調査課長）			
調査指導	寺﨑　裕助（調査課副参事　調査第一係長）			
調査職員	遺　　跡	担　　当	職　　員	調査期間
	馬見坂遺跡	鈴木　俊成（調査課主査）	高橋　　聡（調査課主任調査員） 池田　岳康（調査課主任調査員） 立木（土橋）由理子（調査課文化財調査員） 山下　　健（調査課嘱託員） 石田　守之（調査課嘱託員） 松井　　智（調査課嘱託員）	平成11年4月13日～20日
	正尺Ａ遺跡（推定地11）	鈴木　俊成（調査課主査）	石田　守之（調査課嘱託員）	平成11年6月14・15・17日
	正尺Ｃ遺跡	鈴木　俊成（調査課主査）	河崎　昭一（調査課主任調査員） 加藤　　学（調査課文化財調査員） 山下　　健（調査課嘱託員） 石田　守之（調査課嘱託員） 轡田　克史（調査課嘱託員）	平成11年7月22・27日

［平成12年度］

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）			
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団			
管　　理	須田　益輝（事務局長）　　長谷川司郎（総務課長）			
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）			
調査総括	戸根与八郎（調査課長）			
調査指導	寺﨑　裕助（調査課公団担当課長代理）			
調査職員	遺　　跡	担　　当	職　　員	調査期間
	正尺Ａ遺跡	小田由美子（調査課主任調査員）	後藤　　孝（調査課主任調査員） 松井　　智（調査課嘱託員）	平成12年4月14・17・19～21日、5月15～17日

（2）二次調査

［平成11年度］

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）			
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団			
管　　理	須田　益輝（事務局長）　　若槻　勝則（総務課長）			
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）			
調査総括	本間　信昭（調査課長）			
調査指導	寺﨑　裕助（調査課副参事　調査第一係長）			
調査職員	遺　　跡	担　　当	職　　員	調査期間
	馬見坂遺跡	立木（土橋）由理子（調査課文化財調査員）	高橋　　聡（調査課主任調査員） 池田　岳康（調査課主任調査員） 松井　　智（調査課嘱託員）	平成11年5月17日～10月15日
	正尺Ｃ遺跡	鈴木　　勉（調査課主任調査員）	佐藤　敦史（調査課主任調査員） 飯坂　盛康（調査課文化財調査員） 鹿野　弘之（調査課文化財調査員） 海津　　知（調査課嘱託員）	平成11年9月20日～12月24日

［平成12年度］

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）			
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団			
管　　理	須田　益輝（事務局長）　　長谷川司郎（総務課長）			
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）			
調査総括	戸根与八郎（調査課長）			
調査指導	寺﨑　裕助（調査課公団担当課長代理）			
調査職員	遺　　跡	担　　当	職　　員	調査期間
	正尺Ａ遺跡	尾崎　高宏（調査課文化財調査員）	栗林　宣明（調査課主任調査員） 相羽　重徳（調査課嘱託員）	平成12年5月22日～10月20日
	正尺Ｃ遺跡	加藤　　学（調査課文化財調査員）	波田野　孝（調査課主任調査員） 小林　芳宏（調査課主任調査員） 佐藤　敦史（調査課主任調査員） 片岡　千恵（調査課嘱託員）	平成12年4月3日～10月27日

［平成13年度］

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）		
調　　査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団		
管　　理	須田　益輝（事務局長）　　長谷川司郎（総務課長）		
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）		
調査総括	岡本　郁栄（調査課長）		
調査指導	寺﨑　裕助（調査課公団担当課長代理）		
調査職員	遺　　跡	担　　当	調査期間
	正尺Ａ遺跡	尾崎　高宏（調査課文化財調査員）	平成13年8月3～31日

B　整理体制

遺構図面・遺構写真の整理及び台帳作成、遺物の水洗・註記作業などの基礎整理は、各遺跡とも調査年度に調査と同様の体制で行った。報告書作成に関わる整理作業は平成17年度に以下の体制で行った。

主　　体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克巳）
整理実施機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管　　理	波多　俊二（事務局長）　　長谷川二三夫（総務課長）
庶　　務	長谷川　靖（総務課班長）
整理総括	藤巻　正信（調査課長）
整理指導	高橋　　保（調査課整理担当課長代理）
整理担当	土橋由理子（調査課班長）
整理職員	小熊　紀子　　島倉はるみ　　鶴田須美子　　広野　　澄　　柳谷　栄子　（以上、嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

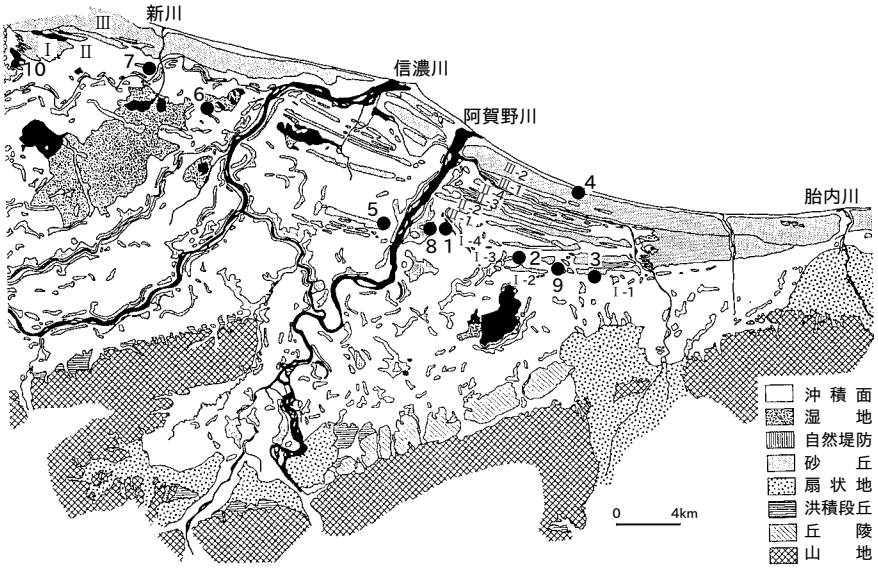
1　地理的環境

馬見坂遺跡・正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡は、越後平野（新潟平野）の中央北寄りの砂丘列上に位置する。

越後平野は全国でも有数の沖積平野であり、東を越後山地・五頭山地・櫛形山地・葡萄山地、西を角田・弥彦山地に囲まれている。さらに山地の平野側には丘陵や段丘が分布する。これらの丘陵や山地は中期更新世中頃に隆起し形成されたが、それに囲まれた越後平野の堆積盆は沈降を続けた。越後平野は、晩氷期以降この堆積盆に信濃川・阿賀野川をはじめ、大小の河川が運搬する土砂が堆積して形成された沖積層であり、最も厚いところで150m以上にも及んでいる。この層厚は他地域に比べて数10m以上厚く、平野の沈降運動が局地的にせよ、完新世も引き続いていたことを示唆する［小林1996］。この地盤沈下は、現在も僅かずつではあるが進行している［柴崎ほか1996］。

越後平野における特徴的な地形として、発達した砂丘列（新潟砂丘）を挙げることができる。新潟砂丘は完新世に形成された新砂丘で、海岸線から内陸へ10kmに及ぶ10列の砂丘列を構成しており、西は角田山麓から北は村上市の三面川河口まで100kmに達する。砂丘列は地形、腐植層の発達と種類、出土遺物の時代をもとに、内陸側から新砂丘Ⅰ・新砂丘Ⅱ・新砂丘Ⅲに分類されており、それぞれ内陸側から新砂丘Ⅰ-1～4、新砂丘Ⅱ-1～4、新砂丘Ⅲ-1・2に区分されている［新潟古砂丘グループ1974］。形成時期は出土遺物から、新砂丘Ⅰ-1・2が縄文時代前期以降、新砂丘Ⅰ-3・4が縄文時代中期以降と推定されているが、Ⅰ-1上の布目遺跡で前期初頭の遺物が出土したので［小野・小熊1987］、形成時期が遡る可能性が出てきた。新砂丘Ⅱは縄文時代後・晩期以降、新砂丘Ⅲ-2は室町時代以降と推定されている［田中ほか1996］。

砂丘列の内陸側に広がる沖積地には、海への排水が砂丘によって阻まれたために、紫雲寺潟（塩津



1.正尺A　2.松影A　3.山三賀　4.出山　5.小丸山　6.緒立　7.六地山　8.正尺C　9.馬見坂　10.布目

［田中ほか1996］を改変

第２図　砂丘の区分と遺跡分布

潟）・福島潟・鳥屋野潟・鎧潟などの潟湖が多数形成された。近世初頭までは越後平野へ注ぐ河川の河口は信濃川か北の荒川しかなく、その他の河川は砂丘列に突き当たると、砂丘列沿いに屈曲し、いずれかの河口から排水されるしかなかった。阿賀野川や加治川、紫雲寺潟を経て胎内川も基本的には信濃川河口から排水されていた。そのため洪水が頻発し、排水不良の強低湿地帯となっていた。現在も随所に残る自然堤防の存在が、河道が頻繁に移動していたことを物語っている。1730年の阿賀野川松ヶ崎放水路の完成を皮切りに、20の河口が設けられた結果、現在の越後平野は治水が完備された穀倉地帯となっている［大熊1996］。

河川の整備とともに潟湖の干拓も進められた。福島潟は享保年間以降干拓が進められ、現在の大きさに縮小されたが、1645年に描かれた「越後国絵図」においては長さ約5km、幅約3.2kmの範囲が示されている。この範囲は「阿賀野川水害地形分類図」［大矢・加藤1986］にみる、北は新砂丘Ⅰ-2、東は天王集落の所在する湖岸堤防、西は駒林川の自然堤防に囲まれた範囲に相当する［南1998］。

このように、現在の越後平野は人工的な排水・干拓によって形成された地形であり、多数の潟湖の存在や頻繁な洪水などにより、居住地・生産地が自然堤防上の微高地等に限定されていた遺跡形成当時の地形から大きく様変わりしていることが伺われる。

2　歴史的環境

周辺の遺跡分布は第３図の通りである。旧豊栄市の遺跡分布については、昭和初期から地元研究者の畠山祐二氏によって進められており、氏の調査成果は、各種の遺跡目録や遺跡地図に収録され、本地域の考古学研究の基礎資料となっている［関ほか1988］。また、近年では鳥屋遺跡・上土地亀遺跡・新五兵衛山遺跡・葛塚遺跡・松影Ａ遺跡・馬見坂遺跡・正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡の発掘調査が実施され、資料が蓄積されつつある。

Ａ　砂丘上の遺跡

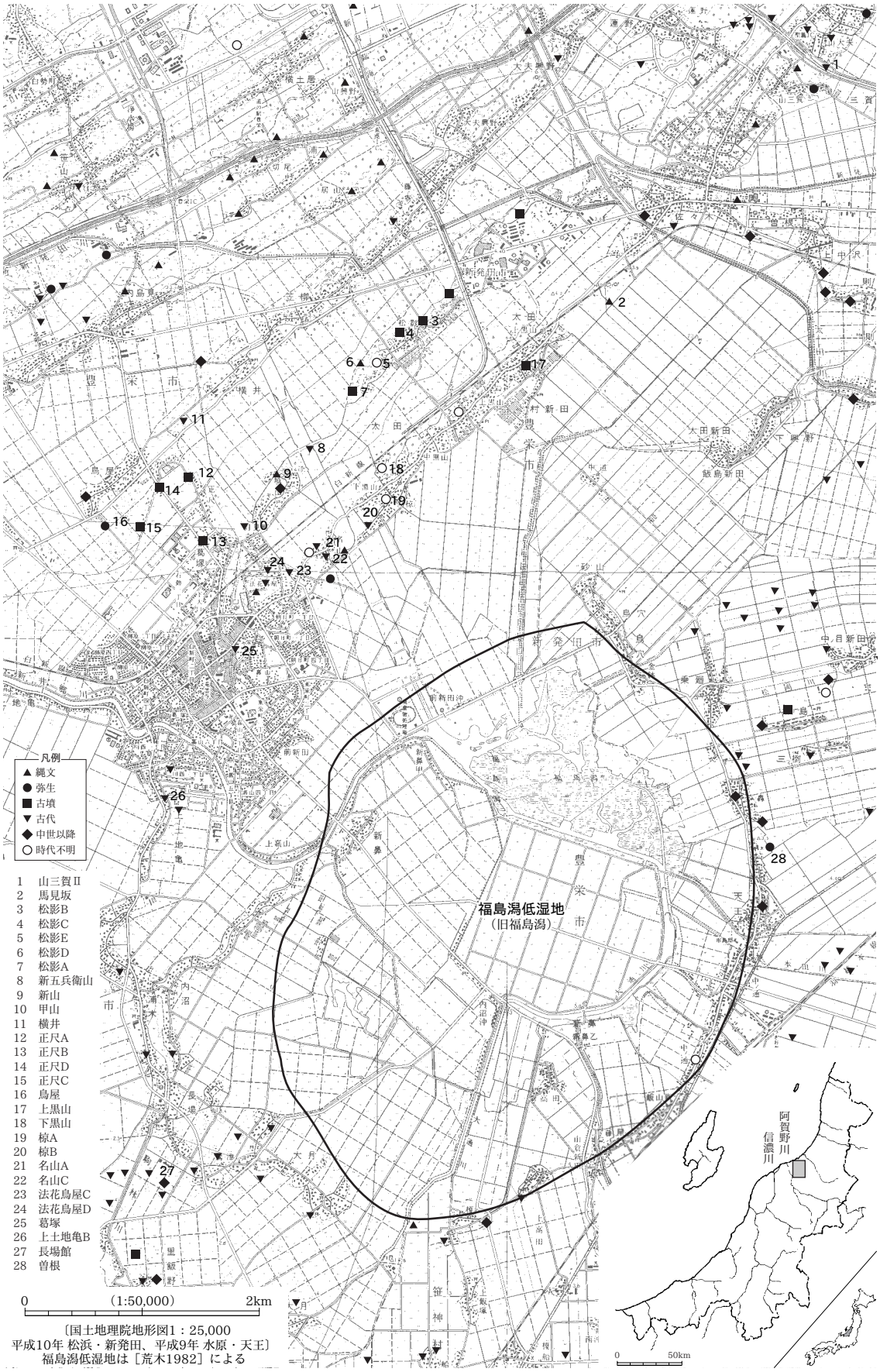
遺跡の所在する阿賀野川右岸地域では、海岸から約8kmの間に３群（新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）10列の砂丘列が分布する。遺跡の立地は、砂丘列と密接に関わっているため、新潟古砂丘グループによる砂丘列の分類（第２図）と対応させながら検討していきたい。なお、断りのない遺跡は、すべて新潟市内の遺跡である。

新砂丘Ⅰにおいては、縄文時代から中世にかけての複合遺跡が多数存在する。

最も内陸に位置する新砂丘Ⅰ-1列には、弥生時代中期の標識遺跡である新発田市山草荷遺跡や縄文時代中期の聖籠町聖籠観音遺跡が所在する。

Ⅰ-2列では、縄文時代から古代にかけての複合遺跡が多数存在する。法華鳥屋遺跡・新発田市馬見坂遺跡では、縄文時代前期後半の土器が出土しており、砂丘の形成時期を考察する上での指標となっている。本報告書掲載の馬見坂遺跡は、縄文時代前期末葉以降の遺物が出土している［土橋2000］。上黒山遺跡および葛塚遺跡は、古墳時代前期の良好な遺跡である。葛塚遺跡では古墳時代前期の良好な土器群とともに続縄文土器等、北方系の遺物が出土している［関1999］。また、奈良・平安時代の大規模な集落跡である聖籠町山三賀Ⅱ遺跡も、本砂丘列に位置する。

Ⅰ-3列では、松影Ａ遺跡が砂丘の南斜面に存在する。発掘調査では縄文時代中期前葉を最古として、縄文時代後期・晩期、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の遺物が出土した。出土遺物から、松影Ａ


凡例
▲ 縄文
● 弥生
■ 古墳
▼ 古代
◆ 中世以降
○ 時代不明
1 山三賀Ⅱ
2 馬見坂
3 松影B
4 松影C
5 松影E
6 松影D
7 松影A
8 新五兵衛山
9 新山
10 甲山
11 横井
12 正尺A
13 正尺B
14 正尺D
15 正尺C
16 鳥屋
17 上黒山
18 下黒山
19 椋A
20 椋B
21 名山A
22 名山C
23 法花鳥屋C
24 法花鳥屋D
25 葛塚
26 上土地亀B
27 長場館
28 曽根
福島潟低湿地
（旧福島潟）
0 (1:50,000) 2km
〔国土地理院地形図1：25,000
平成10年 松浜・新発田、平成9年 水原・天王〕
福島潟低湿地は［荒木1982］による
阿賀野川
信濃川
0 50km

第３図　周辺の遺跡分布

遺跡が多岐にわたる時代・時期の複合遺跡であることが明らかになった。このような状況は、砂丘上に立地する遺跡の特徴といえる。松影集落には、ほかに松影Ｂ～Ｅの各遺跡が存在し、特に松影Ｄ遺跡は底部穿孔壺等、祭祀または墳墓にかかわるとされる古墳時代前期の土器が一括出土しており注目されている［関ほか1988］。また、松影Ａ遺跡の南東600mに位置する新五兵衛山遺跡では、平安時代の土器と土錘が多数出土している［関ほか1988・1996］。

Ⅰ-4列では、縄文晩期後半～最終末の標識遺跡である鳥屋遺跡が存在する。1957・78・79年に3次にわたって発掘調査された結果、土坑群が検出され、多数の土器が出土した［磯崎1957、小出・寺村1962、関ほか1980］。また、シジミもしくはヤマトシジミが発見されたことで、当時の周辺水域が淡水もしくは汽水性であった可能性が指摘されている。鳥屋遺跡の北約2.5kmには引越遺跡が位置し、ここでも縄文時代晩期終末の良好な土器群が出土している［寺村・関1960］。

新砂丘Ⅱは4列から構成される。いずれも古代・中世の遺物が採集された遺跡が多く認められる一方、縄文時代の遺跡は数少ない。縄文時代の遺跡は、畠山祐二氏の所蔵遺物や齊藤秀平氏の「新潟県に於ける石器時代遺蹟調査報告」［齊藤1937］から存在が確認されるもので、現在ではほとんど遺物を採集できない。しかし、齊藤氏の報告において「木崎村大字浦ノ入小字山興野、海抜二十米内外第四紀層で、明治十四五年頃までは盛に石鏃を出したが今は殆ど見ない」と記されていることや、畠山祐二氏所蔵資料の出土地から考えるに、新砂丘Ⅱから縄文時代の遺物が出土していた事実は否定できない。ただし、砂丘のどのような層から出土したものか不明なので、砂丘形成時期を検討する資料としては不足がある。

新砂丘Ⅲは、2列から構成される。形成時期は新砂丘Ⅲ-1が奈良・平安時代以降、海岸側の新砂丘Ⅲ-2が室町時代以降とされている［新潟古砂丘グループ1974］。

Ｂ　自然堤防上の遺跡

頻繁に洪水に見舞われる当地域においては、洪水による河川の流路変更がもたらした自然堤防が、洪水被害を免れるための微高地として集落を営む場所に選ばれてきた。

旧豊栄市周辺において最も内陸側に位置する新砂丘Ⅰ-2列の南側地域には低湿地帯が広がり、駒林川流域に形成された自然堤防上に遺跡が分布する。ここには、古代の土師器・須恵器を主体とする遺跡が多数存在する。とくに、城の潟遺跡は良好な遺跡であり、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺物が多数採集されている。また、遺跡の一部は「長場館」と称する中世城館跡と重複している可能性もある。城の潟遺跡の周辺には、土師器や須恵器が採集された遺跡が点在するが遺物の散布状況は希薄である。そのひとつ上土地亀遺跡は、1992年に発掘調査され、古墳時代中期と平安時代の遺物が出土している。駒林川流域の自然堤防上に集落が形成され始めたのは5世紀前後からで、開発・開墾が大きく進展したのは奈良時代後半から平安時代と推定される。その拠点となったのが城の潟遺跡であり、小遺跡は点在する農民集落であったと考えられる［関1993］。

福島潟から流出する唯一の河川である新井郷川（にいごうがわ）は現在人工堤防によって河道が固定化されているが、古い地形図・空中写真には多くの旧河道が確認されることから、洪水のたびに、かなり河道が動いたことがうかがわれる［島1988］。旧新井郷川流域の自然堤防上には、正尺Ａ～Ｄ遺跡が存在する。本報告書に掲載する正尺Ａ・Ｃ遺跡は古墳時代前期の良好な遺跡である［加藤・尾崎2001］。正尺Ｂ・Ｄ遺跡でも同時期の土器が出土しており、これも含めて考えると正尺地内は古墳時代前期の遺跡密集地帯ということができる。

第Ⅲ章　馬見坂遺跡

1　調査の方法と経過

A　一 次 調 査（第４図）

（1）平成10年度の調査

a　調 査 方 法

調査対象地13,540㎡のうち用地買収済みの9,040㎡を対象として調査を行った。これは二次調査のⅡ区と排土置場にほぼ相当する場所である。

調査は調査対象地内の任意の地点に29か所のトレンチを設定して行った。実質調査面積は794㎡である。作業はトレンチをバックホーで徐々に掘り下げながら遺構・遺物の有無を確認し、記録するという方法で行った。湧水の多いトレンチでは排水ポンプを使用し、可能な限り下層までの確認に努めた。

b　調 査 結 果

旧砂丘の南縁を流れていたと思われる自然流路が検出され、そこから大量の縄文時代晩期の土器と、少量の古墳時代・平安時代の土器が出土した。そのため、自然流路が検出されたトレンチを中心に二次調査必要範囲3,300㎡を決定した。また、一次調査対象地外に近接する４トレンチでも遺物が出土したことから、当初予定していた一次調査範囲を拡大することを決定した。

（2）平成11年度の調査

a　調 査 方 法

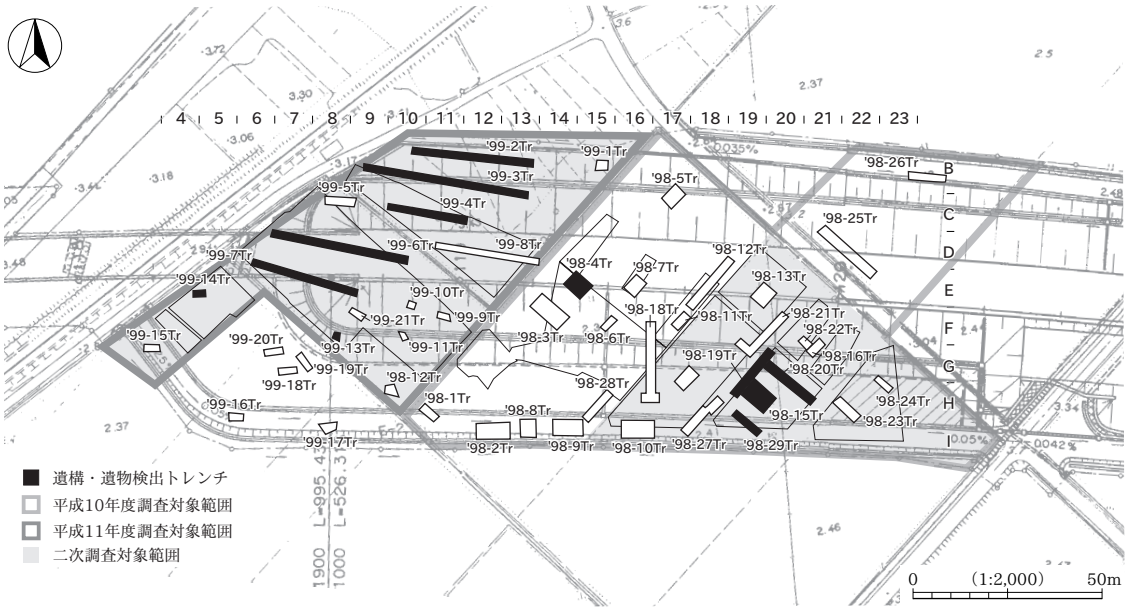
前年度の一次調査で未買収のため調査できなかった4,500㎡と、追加調査することになった2,000㎡について調査を行った。これは二次調査のⅠ区にほぼ相当する場所である。

調査は調査対象地内の任意の地点に21か所のトレンチを設定して行った。実質調査面積は515㎡である。作業は包含層以外をバックホーで徐々に掘り下げ、包含層および包含層相当層は主に人力で掘り下げバックホーを補助的に使用した。出土した遺物は層位と大まかな位置を記録し、取り上げた。遺構についても略測した。また、砂丘の落ち込みにともなってトレンチが深くなる場合、人力精査が危険のため包含層および包含層相当層を地上に掘り上げ、人力で土壌を砕き遺物の有無を確認した。

b　調 査 結 果

砂丘高所は近・現代の造成により大部分が削平を受けたことがわかった。しかし、南および東側の緩斜面は後世の撹乱は受けておらず、縄文時代（前期～後期）・古墳時代・平安時代の遺物包含層および包含層相当層が良好に残存していた。このうち南側は斜面も一段と緩やかで、包含層相当層から数は少ないが遺構・遺物が発見された。また10年度調査で確認された自然流路が12トレンチで確認されたが、これ以上法線に食い込むことはなく、法線の南側へ反れていくものと考えられた。

調査の結果、対象地のうち3,370㎡について二次調査が必要ということになり、10年度の調査範囲と



第４図　馬見坂遺跡　一次調査トレンチ設定図

合わせると、最終的な二次調査対象面積は6,670㎡となった。

B　二 次 調 査

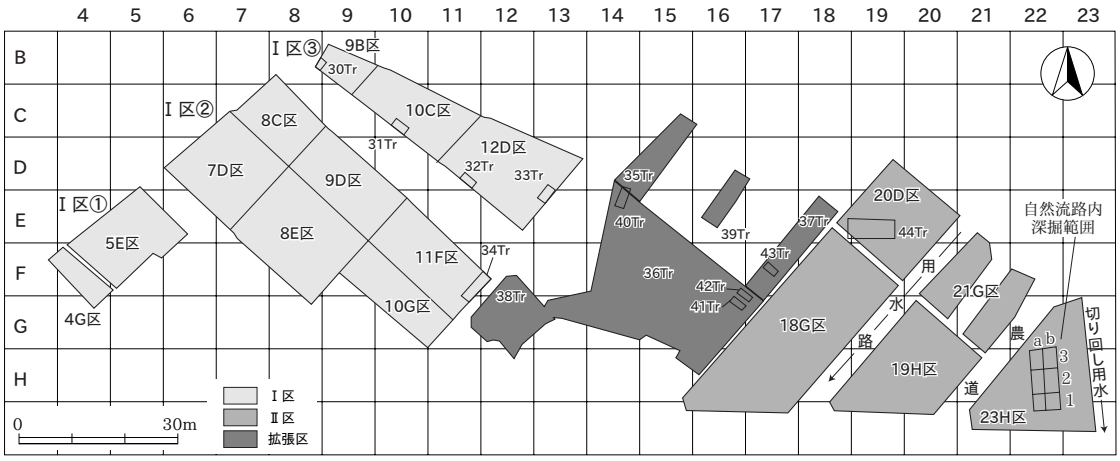
(1) 調 査 方 法

調査区の設定　調査対象地は二次調査不要のため排土置場とした場所を境として、西側を「Ⅰ区」、東側を「Ⅱ区」と呼称することにした。

Ⅰ区は砂丘寄りのやや高まった場所にあり、ほ場整備により３面に区画・段切りされていた。そのため、西の区画から順に「Ⅰ区①（下段）」、「Ⅰ区②（中段）」、「Ⅰ区③（上段）」と呼称した。それぞれの区画はメインセクションベルトで細分されたため、各細分区画に大グリッド名から略称を付した（第５図）。

Ⅱ区も用水路や農道、メインセクションベルトで細分されたため、各細分区画に大グリッド名から略称を付した。

排土置場の一部については、トレンチを拡張する方法で面的な調査を実施した。そのため拡張部分につ



第５図　馬見坂遺跡　調査区の呼称

いてはトレンチ名から「36Tr」、「38Tr」などの地点名を付した。

基本層序の設定　平成11年4月の一次調査で設定した層序を基本層序とした。詳細は「第Ⅲ章2　基本層序」で記述する。

遺構の認定　検出面はⅢ層～砂丘漸移層と砂丘下層の2層に大別されるが、遺構の多くは前者で検出された。周辺と色調が異なったり、炭化物が集中したりしている場所を遺構とした。覆土に青灰色粘土や青灰色砂が入っているものは平安時代以降、Ⅲ層類似の砂や黒色を帯びた砂が堆積しているものは縄文時代の所産とした。

遺構名は、円形・楕円形など形が整っているもののうち比較的大形のものを「土坑（SK）」、小形のものを「ピット（P）」、不定形のものを「性格不明遺構（SX）」とした。覆土の堆積状況から風倒木痕と判断できたものは「風倒木」とした。ほかに地形の凹凸と推定され、やや堆積が乱れている部分については「落ち込み（窪地）」として周囲の発掘面と区別した。

記録の方法　記録には図面と写真がある。図面は遺構平面図をサイトシステムによる測量で、断面図を手取り実測で作図した。縮尺は20分の1を基本とした。メインセクションの図面は、法面が高く勾配が約45度と急だったため斜面にメッシュを張って実測し、あとから傾斜に合わせて標高を割り戻す方法や、光波測距器で測点を取り作図する方法をとった。

写真は6×7版白黒フィルム・35mmカラーリヴァーサルフィルムで撮影した。場合によっては、6×7版カラーフィルム・35mm白黒フィルムを併用した。

遺物の取り上げ　基本的にサイトシステムを用いて、1点ずつ出土地点を記録した。出土層位は荷札に記し、取り上げ後、遺物台帳に記録した。詳細な出土地点が不明の場合は、グリッドあるいは地区名で平面的な出土地点を記録した。なお、自然流路出土の遺物は出土した小グリッドと層位のみ記録した。

排　水　一次調査の段階から二次調査終了まで大量の湧水に見舞われ続けた。調査地周辺が水田のため地下水位を下げることは避けなければならなかったので、矢板や大がかりな排水設備を導入することはできなかった。そのため、法面工法で調査区を維持し、排水には2インチの排水ポンプ7台と6インチのサンドポンプ2台を用いた。Ⅰ区①とⅠ区②では観察井戸で地下水位の観測を行いながら、周囲に影響の出ない範囲でウエルポイントによる排水も行った。

（2）調 査 経 過

a　Ⅰ区の調査

表土除去

Ⅰ区は昭和40年代に行われたほ場整備と発掘調査直前まで行われていた耕作により、旧地形が大きく改変されていた。また、暗渠管を埋設するための溝が北東ー南西方向に約10m間隔でバックホーにより掘削されており、これに伴う撹乱が砂丘漸移層上面まで及んでいた（図版5h-h'）。

5月17日にⅠ区①の4G区から表土除去に着手した。一次調査の結果、Ⅰ区①は東から西へ下る斜面地形を平らにするため西側に厚く客土されており、客土部分に多くの遺物が包含されていると予想されていた。そのため、客土からバックホーで薄く掘削しながら遺物を探す方法をとった。ところが、予想に反して客土中の遺物量が少なかったため、本来の包含層と目されるⅢ層まで掘り進んで行った。Ⅲ層上面に達したところで大量の湧水に見舞われ、バックホーでも掘削不可能となってしまった。そのため後日排水設備を整えてから掘削し直すこととし、安全確保のため埋め戻した。5月19日には5E区の表土除去に取

りかかった。ここでもⅢ層まで掘削したが、西側ほど深くなく、西から東にかけて標高が急激に上がることが確認された。風倒木痕も検出されたが、覆土を掘削すると底面から湧水があり、完掘はできなかった。やはり排水設備なしでは調査不可能と判断されたため、掘削を一次中断することにした。26日には排水設備のウエルポイントを設置し、地下水位が低下するのを待つことにした。

5月21日から26日にはⅠ区③の表土掘削を行った。この場所はほ場整備などによって包含層が削平され旧地形も残っていなかったので、発掘限界面までバックホーで掘削した。湧水もなく作業は順調に進んだが、遺物はほとんど撹乱からの出土であった。

5月26日、Ⅰ区②の表土除去に着手した。一次調査で青灰色粘土・青灰色砂から平安時代の遺物が出土していたが、面的に掘削していてもほとんど遺物が出土しなかったので、Ⅲ層上面までバックホーで掘削した。6月3日までに作業は終了したが、Ⅰ区①と同様に大量の湧水があり、排水設備なしでは調査が困難な状況であった。とくに標高が下がる8E区･10G区は､作業員も立ち入れないほどの湧水量であった。

包含層掘削と遺構精査

Ⅲ層から砂丘漸移層上部にかけての調査を8月6日まで行い、これを上層の発掘とした。その後砂丘下層上部の掘削を行い、これを下層の発掘とした。全体写真は上層をほぼ掘りあげた段階の8月4日に撮影した。

上層の調査

Ⅰ区①　地下水位が下がった6月3日に作業を再開した。21日まで包含層発掘・遺構精査を行い、平安時代の風倒木痕と縄文時代の土坑や炭化物集中範囲を検出した。少数であるがⅢ層の上位に堆積した黒色砂層から縄文土器が出土した。この黒色砂層は斜面が落ち込むところから下に分布している。非常に多くの水分を含む水成層であり、遺物が湿地の縁に沿って分布することが予想された。ウエルポイントを設置したとはいえ、すべての包含層を完掘できるほど水位は低下していなかったため、検出した遺構を完掘した段階で全体写真を撮影し、6月24日で作業を終了した。

Ⅰ区②　6月3日から包含層掘削に着手した。湧水の多い8E区にはトレンチを入れ、遺物の有無を確認する作業を行った。その結果、遺構・遺物の存在が確認されたため、7月1日、Ⅰ区①からウエルポイントを移設し排水を開始して、調査可能な水位に下がるのを待つことにした。そのほかの区画は排水溝を巡らしながら、Ⅲ層から順に掘削していった。掘削が進むにつれて、一次調査で発掘限界面と推定していた砂丘漸移層中からも縄文土器が出土し始めた。そのため、発掘限界面を予定していた面より1面下げて、砂丘下層とすることにした。包含層掘削と並行して遺構精査も行ったが、住居跡など性格を推定できるようなものは検出されなかった。

水位が下がり始めた7月上旬、本格的に8E区の調査を再開すると、標高が下がる部分にⅠ区①から連続する黒色砂層が検出され始めた。ここでも黒色砂層の分布し始める縁辺部分に遺物が集中していた。黒色砂層中には沼沢軽石や自然木も包含されていた。また、ほかの区画には見られない粘土質の砂が不規則に分布しており、そこからも少数の遺物が出土した。

8月4日までに8E区・10G区を除く区画の上層を完掘、全体写真を撮影した。10G区は湧水が多いこともあったが、Ⅱ区に連続すると推定される自然流路の堆積物が検出されたため、Ⅱ区の調査と並行して調査することとした。

Ⅰ区③　5月31日から遺構精査や撹乱に含まれる遺物の掘り出しを開始した。大部分が削平されていたので作業は早く進み、6月2日には全体写真を撮影した。

下層の調査

上層の調査の結果、発掘限界面としていた砂丘下層上部にも遺物が食い込んでいる可能性が高くなった。あわせて、調査区全域が新砂丘Ⅰ-2南斜面に載るという当初の見方も、調査が進むにつれてⅠ区①・②の大部分は砂丘間低地に堆積した水成堆積物に由来すると考え直す必要がでてきた。そこでこれらの事実を確認するため、もう1面掘り下げ、遺物の有無や砂の堆積状況を調査することにした。作業はⅠ区①・②を対象として8月18日から9月21日にかけて行った。調査はバックホーで掘削しながら、人力で精査していく方法をとった。その結果、砂丘漸移層を完全に掘り抜くと非常に堅緻な面に達することがわかった。そこまでの間にごく少量の遺物と遺構を検出した。それより下には遺構・遺物とも存在しない。堅緻な面は3cmほどの厚さで、それを破ると再び柔らかい砂層となり、水が噴き出してくる。よって、最終的な発掘限界面をこの堅緻な面とした。ただし、7D区の南西側の一部と8C区・9D区・11F区では堅緻な面を検出できなかったので、周辺で検出された堅緻な面と連続する面になった時点で掘削を終了した。

b　Ⅱ区の調査

表土除去

7月1日から除草作業や表面採集などを行い、7月7日からバックホーによる表土掘削を開始した。一次調査の結果から、Ⅰ区からⅡ区にかけて砂丘南裾の一部が舌状に張り出してきており、Ⅱ区ではその先端部分と南縁を流れる自然流路が検出されることが予想されていた。そのため、表土除去は自然流路や砂丘先端部の検出を兼ねて行った。7月16日までには予想されたとおり自然流路が検出されたので、遺物が包含される覆土までバックホーで掘削することにした。7月26日になると、砂丘砂が堆積すると予想された18G区北側に粘土が堆積していることがわかった。この時点で、自然流路が単に調査区南縁に沿って流れているのではない可能性が高くなった。8月4日には自然流路検出状況として全体写真を撮影した。その後、近接する水田の稲刈り作業が終了するまで排水が制限されたため、作業を一次休止した。

包含層掘削と遺構精査

9月に入っても排水制限されていたため、中央のベルト（用水路）を挟み、調査しない地区へ水を汲み替えながら作業員による掘削を進めた。包含層発掘は自然流路の覆土である砂利層の掘削と、砂丘地の掘削に大別される。前者は9月6日から8日にかけて行い、磨耗した縄文時代～平安時代の土器を掘り出した。9月9日から13日にかけて砂丘地の掘削を行い、砂丘斜面が流路によってえぐり取られている様子が見え始めた。また、自然流路の覆土の下に縄文時代の包含層であるⅢ層と黒色砂層が分布しており、Ⅰ区同様沼沢軽石に混じり縄文土器が出土することが明かとなった。

20D区にあるⅢ層類似の砂層の掘削も進めたところ、1点だけ遺物が出土した。ある程度掘り下げた段階で土層を観察したところ、掘り下げたⅢ層類似の砂層はⅢ層の二次堆積物であり、自然流路にえぐられた砂丘先端の砂が再堆積した自然堤防であると推定された。あわせて、18G区で検出された粘土層は砂丘先端部がえぐられた場所に堆積した土層であると考えられた。

9月14日から27日の間はとくに厳しい排水制限を受け、Ⅱ区全体が完全に水没した。そのため再び調査を休止した。

9月28日から記録作業を中心に調査を再開した。10月4日には20D区に44Trを設定し、先にⅢ層類似の砂が再堆積層であると推定したことを確認するために砂丘下層まで掘削した。その結果、砂丘下層の上にはしっかりした黒色砂層・青灰色粘土層・青灰色砂層が堆積しており、その上にⅢ層類似の砂が厚く

堆積しているのを確認できた。

9月8日にⅡ区全体写真を撮影し、調査を終了した。

23H区　状況によっては、既に切り回されている用水路や工事用道路を撤去するよう、道路公団と協議する必要が出てくるため、7月15日にバックホーでトレンチを掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、該当部分はすべて自然流路に含まれること、深いところでは3m以上掘削したが遺物を含む粗い砂利層は存在しないことが明らかとなった。より深く掘削すれば砂利層が存在したのかもしれないが、安全確保のため掘削は断念した。もし面的な調査を試みたとしても、法面工法では維持できる限界を超えると判断されたため、掘りあげた自然流路の覆土から遺物を探し出すことにし、道路公団と工事用道路・用水路撤去のための協議はもたないことにした。覆土は6地点に分けて掘り上げた。掘り上げた覆土を探った結果、木簡・斎串などが出土した。

c　拡張区の調査

Ⅱ区の自然流路が一時調査の予想と異なる位置でも検出され、全体の地形を把握しかねていたことと、Ⅱ区と排土置場との境付近でも遺物が出土したことから、排土置場にトレンチを設定し、地形や遺物の分布状況を再確認することにした。作業は8月19日から断続的に行った。始めにⅠ区③とⅡ区を結ぶ4m幅のトレンチ（36Tr）と、これに直交する2m幅のトレンチ（35・37Tr）を設定した。Ⅱ区に沿って設定したトレンチ（37Tr）では、自然流路が砂丘先端をえぐった岸沿いに、アシの茎やアシハラガニの生痕化石が分布しているのが確認された。このことから、ここに潟のような地形が形成されていたと推定することができた。しかし、自然流路形成前の砂丘地形と遺物分布については把握しかねていたので、9月16日には砂丘地形の東西の落ち際に当ると推定される場所に38・39Trを設定した。39TrではⅢ層相当層が検出され、遺物も少数出土した。砂丘地形は北東に向かって標高を下げており、低い部分にはガツボ層が形成されていた。38Trでは10G区やⅡ区に連続する自然流路が検出され、その脇で大量の縄文土器が出土した。そのため、36Trと38Trを流路側に向かって徐々に拡幅し、9月20日には20m幅まで広げた。この部分の調査は調査最終日の10月15日まで実施した。その結果、流路の右岸が全て検出され、覆土の下に存在する黒色砂層やⅢ層には縄文時代の遺物が包含されていることが明らかとなった。

なお、拡張部1,000㎡を調査したことにより、最終的な調査面積は7,670㎡になった。

2　基本層序（第6図）

馬見坂遺跡は新砂丘Ⅰ-2の内陸側に位置する。一次調査開始時点では、調査区全域が砂丘の南斜面に載っていると推定し、発掘限界面を砂丘面と捉えていた。しかし、二次調査が進むにつれて、発掘限界面に見られる砂層の一部が純粋な砂丘堆積物（風成層）ではない可能性が高くなった。1区③を除く調査区の発掘限界面に見られる砂層は、淘汰の進まない角張った砂からなっており、なおかつ直立した状態のアシなどの茎が含まれていた。これはアシなどが生育する止水域に砂が堆積した状態を示すものであり、風成の砂丘とは区別されるものである。しかし、砂丘砂とそれに連続して堆積する水成堆積物を明確に区別することは困難であったので、調査

第6図　馬見坂遺跡　基本層序

を進める際には、発掘限界面の砂層をⅠ区の一次調査開始時点の呼称に従い、便宜的に「砂丘」と呼称することにした。このほかの層名についてもⅠ区一次調査に準じる。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：客土。最近まで存在したビニールハウスの鉄骨基礎や、ごみ穴などが掘込まれている。

Ⅰa層：黒色土。粘性・しまりなし。現表土。

Ⅰb層：黄色砂。粘性・しまりなし。客土。

Ⅱ層：黒灰色砂。粘性なし。しまり強い。旧表土か。Ⅰ区③に分布する。

②層：泥炭層。粘性・しまりなし。（通称：ガツボ）

②' 層：粘質層。粘性・しまり良好。色調は青灰色・褐色などの違いあり。（通称：白粘土）

③層：暗灰色砂。粘性に富む。炭化物・未分解の植物を少量含む。上・下に細分され、上部の③a層は粘性がやや高くシルト質で、下部の③b層は粘性が弱く砂気がちである。（通称：③a層＝青灰粘土、③b層＝青灰砂）

黒色砂層：砂丘落ち際より低い部分のⅢ層上に存在する。Ⅲ層と③層の漸移層に相当し、水分を多く含み黒っぽく見える。沼沢軽石が含まれる。

Ⅲ層：黄褐色砂。粘性・しまり弱い。色調などにより上層からⅢa層・Ⅲb層・Ⅲc層に細分される。Ⅲa層は黄褐色で細い植物根が多く含まれ、やや土壌化が進んでいる。若干標高が高いⅠ区に分布する。Ⅲb層は赤味を帯びた黄褐色を呈し、Ⅲa層よりわずかに砂粒が粗い。Ⅲc層は黄色味が強く、砂粒はⅢb層と同質である。Ⅲb層・Ⅲc層は拡張区からⅡ区にかけての斜面の落ち際に分布する。

砂丘漸移層：褐色砂。角張った砂粒からなる。Ⅲ層と砂丘下層の漸移層。標高が下がるにつれ、多くの直立した植物の茎を含むようになる。

砂丘下層：青色砂。砂丘漸移よりやや大きめの砂粒からなる。Ⅰ区①・③やⅠ区②の南西側では全くしまりがないが、そのほかの部分では砂丘漸移層との境に厚さ２～3cmほどの非常に堅緻な面が存在する。その面を取り去ると、激しい湧水とともに再びしまりの無い層が現われる。

上記のほか、Ⅰ区②の斜面南側落ち際付近（7D区・8E区）には黒色砂およびⅢ層から砂丘下層の間に粘土質の層が点在する。ほかに、Ⅱ区44Trから拡張区39Trにかけての落ち際より北側には黒色砂およびⅢ層の上位、Ⅲ層の下位に泥炭層（ガツボ）の堆積がみられる。

遺物包含層は③層～砂丘漸移層である。③層には古墳時代と平安時代の遺物がわずかに含まれる。黒色砂・Ⅲ層～砂丘漸移層には縄文時代前期～晩期の遺物が含まれるが、層の上下差は遺物の新旧に明確に反映されていなかった。最終的な発掘限界面は砂丘下層の上面とした。

各層位の形成時期を遺物の上限・下限から推定すると、砂丘漸移層までが縄文時代前期後葉以前、Ⅲ層・黒色砂層形成までが前期以降晩期以前と考えられる。そして③層が平安時代以前、②' 層・②層までが近代以前と推定される。ちなみに、^{14}C年代測定値が得られた44Trの黒色砂上位に堆積した泥炭層の測定値は1090±30yBPという平安時代を示すものであり、②層は西暦1250～1500年という鎌倉～室町時代に相当するものであった。

3　グリッドの設定（第７図）

グリッドは国家座標第Ⅷ系（旧座標）に基づき設定した。大グリッドを10m四方とし、その中を2m四方に細分し小グリッドとした。大グリッドの呼称は南北方向を北から南にアルファベット大文字でＡ・Ｂ・Ｃ…、東西方向を西から東に算用数字で１・２・３…とし、その組み合わせで「1A」などとした。小グリッドは算用数字を用いて各大グリッドの北西隅を1、南東隅を25とし、「1A25」などと呼称した。

グリッド杭の打設は委託業者が行った。基準杭には道路公団の基準杭FK.17とFK.17-1を用いた。

日本平面直角座標　第Ⅷ系

杭	旧日本測地系 （第Ⅷ系Ｘ軸との磁北偏差　西偏　約７°　20′）	世界測地系（JGD2000）　（計算値） （第Ⅷ系Ｘ軸との磁北偏差　西偏　約７°　40′）
13Fグリッド杭	X=215,760.000、Y=66,660.000	X=216,109.255、Y=66,377.943
	緯度37°　56′　31″、経度139°　15′　30″	緯度37°　56′　42″、経度139°　15′　18″
	Ｘ軸との真北偏差－０°　27′　59″	Ｘ軸との真北偏差－０°　27′　52″
5Fグリッド杭	X=215,760.000、Y=66,580.000	X=216,109.255、Y=66,297.943
23Iグリッド杭	X=215,730.000、Y=66,760.000	X=216,079.256、Y=66,477.943
FK.17	X=215,806.853、Y=66,625.362	X=216,156.109、Y=66,343.304
FK.17-1	X=215,743.370、Y=66,538.750	X=216,092.625、Y=66,256.693

4　遺　　構

Ａ　概　　要（第８図）

遺構検出面は、Ⅲ層～砂丘下層にかけてで、遺構の形成時期は縄文時代と平安時代以降に大別される。

縄 文 時 代

縄文時代の地形はＩ区北側（Ｉ区③）が白新線工事によって削平を受けたために旧地形をとどめていないが、全体として北側から南側に向けて下るなだらかな斜面となっている。南側に行くにつれてⅢ層が落ち込み、その上層となる黒色砂が広がる。標高は北側の高い場所が約3m、南側の落ち際が約1mである。拡張区からⅡ区の南側にかけてもＩ区から連続する落ち際がみられ、黒色砂が分布している。落ち際の標高は約1.5mである。北側にも落ち際がみられ、それより北には黒色砂層が広がる。縄文時代の地形は緩斜面を基本としながら前期から晩期にかけて若干変化しているが、出土遺物の時期から砂丘漸移層の形成までが前期後葉以前、Ⅲ層・黒色砂層形成までが前期以降晩期以前と考えられる（第８図）。

堆積土や植物痕のあり方から推定すると、前期以前には6Cグリッドから10Gグリッドにかけての北西-南東方向に小河川が流れていたか、湛水域が存在した可能性がある。理由としては、同範囲に砂の固結した部分があり、アシ等の茎が直立した状態で検出されたこと、同じ範囲で砂丘漸移層からⅢ層の間に、ほかと対比ができない粘性の高い土壌の分布が認められたことなどが挙げられる。ほかに、その両脇に砂の固結は見られないがアシの分布する範囲が広がり、Ｉ区①側の標高が高くなる部分になるとアシの分布は見られなくなる点も挙げられる。

前期以降は砂丘からの砂の飛散あるいは流入によりⅢ層・黒色砂層が堆積し、湿地へと変化したと推定される。

縄文時代の遺構はＩ区ではⅢ層～砂丘下層にかけて、Ⅱ区ではⅢｂ層で多く検出されている。多くは落ち際付近に分布している。遺構には土坑20基、ピット84基、性格不明遺構47基があり、ほかに風倒木

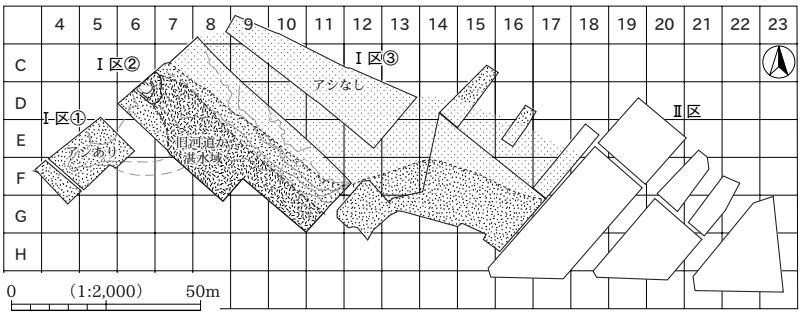
第７図　馬見坂遺跡　グリッド設定図

痕４基がある。性格不明遺構のうち７基は風倒木痕、18基は自然の窪地の可能性がある。遺構覆土は基本的に上層に黒褐色砂、下層に褐色砂が堆積する。遺物を含む遺構は30基あり、出土した遺物の時期は前期から晩期にかけてである。

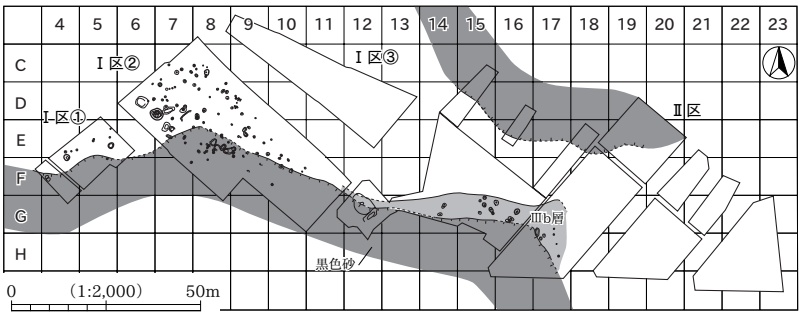
なお、土坑・ピットとしたものについても規則的な配列はみられず、建物などに関わる可能性はない。炭化物・炭化材が入っていたものでも焼土が伴うということはなかったので､炉などの可能性も考え難い。このように、ほとんどが性格不明と言わざるを得ない状況である。ただし、風倒木痕から伸びた木の根痕に土坑などと同様の炭化物の入り込みがみられることがあったので、検出された土坑・ピットの中には木の根痕であったものも含まれていると推定される。そのように仮定すれば、今回の調査区は水辺に形成された林のような場所であったと考えられる。

平安時代以降

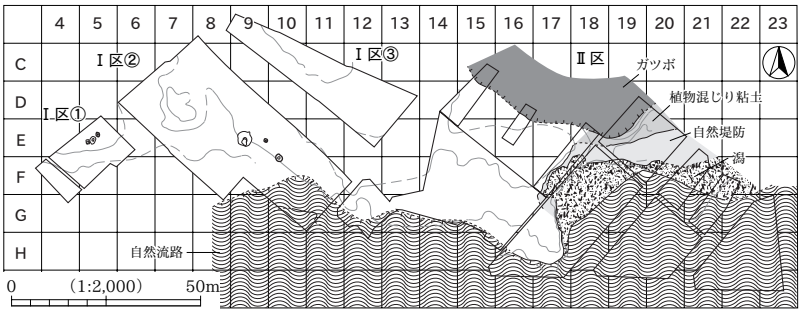
平安時代以降の地形では、Ⅱ区からⅠ区にかけて流れる自然流路が検出された。この自然流路は加治川水系の一支流と推定され、北から南にかけて下る斜面の裾を取り巻くように流れていたようである。Ⅱ区の北西側（18G区）には流路の蛇行によって形成された潟や自然堤防が見られる。自然流路埋没後は、標高の高いⅠ区③を除いた場所に水成堆積物の③層（青灰色粘土・青灰色砂）が堆積していたので、一面に湿地帯が形成されていたと推定される。標高の低い場所には、これ以降も引き続き水成堆積物の②' 層（白



縄文時代前期以前の地形と遺構配置（東側の地形は不明）



縄文時代前期以降～晩期の地形と遺構配置（東側の地形は不明）



平安時代の地形と遺構配置

第８図　馬見坂遺跡　遺構配置模式図

粘土)、②層（泥炭）が堆積している。②層からは明治時代の銅銭が出土しているので、近年まで湿地帯であったと考えられる。

平安時代以降の遺構は、縄文時代の遺構に比べてやや標高の高い場所に分布しており、土坑６基、ピット21基、性格不明遺構４基のほか、風倒木痕２基が検出された。性格不明遺構のうち１基は風倒木痕の可能性が高い。遺構覆土は基本的に上層に青灰色粘土と青灰色砂が、下層には黒褐色砂と褐色砂が堆積する。遺物を含む遺構は２基あった。

B　各　　説

遺物の出土した遺構を中心に記載する。記載は時代別・種別ごとに行う。位置・検出面・法量等は観察表を参照のこと。

（1）縄文時代の遺構

a　砂丘下層検出の遺構

SX176（図版２・５）　北西側は排水路によって切られており、全容は不明である。検出面では暗褐色砂が7m四方の範囲で広がり、中央部には黄褐色粘土が3.5mの範囲に分布する。平面形は不定形で、浅い皿状を呈する。自然の窪地とみられ、周囲の砂が流れ込んで埋没したものと考えられる。覆土はやや粘性を帯びており、ほかの遺構とは区別される。SX176の範囲内から縄文後～晩期の土器が出土した。

b　Ⅲ層～砂丘漸移層で検出された遺構

ピ　ッ　ト（図版６・83・84）

P27　検出面には黒褐色砂が広がり、0.3～0.5cm角の木炭が少量散っていた。掘り形は円錐形を呈す。覆土は黒褐色砂の単層。覆土から縄文前期と思われる土器が出土した。

P29　検出面では、0.3～1cm角の木炭が多く散っていた。掘り形は円錐形である。覆土は２層に分層され、１層に多量の炭化物が含まれる。遺構内に植物遺体がまんべんなく入っていたことから樹木の痕の可能性がある。２層底部から縄文後～晩期の土器が出土した。

P114　検出面では褐色砂が全体を覆っており、木炭が少量散っていた。平面形は円形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は単層で、褐色砂を主体とする。遺構上部から縄文前期末葉の土器（1）が出土した。

P138　検出面では黒褐色砂中に木炭が散っており、中心に特に多く散っていた。平面形は楕円形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は単層で、炭化物がブロック状に含まれる。遺構の西側5cmの位置で縄文後～晩期の土器が出土した。

P170　平面形は円形で、掘り形は半球形である。覆土は黒褐色砂の単層。遺構上部から縄文前期の土器が出土した。

P193　検出面は暗褐色砂が主体で木炭が多量に散っていた。平面形は隅丸方形で、掘り形は皿形を呈し、底部には凹凸が見られる。覆土は単層。

P219　平面形は円形で、掘り形は皿状を呈す。覆土は褐色砂の単層で、炭化物が微量に含まれる。遺構上部から石鏃（54）が出土した。

炭１　炭化木が斜めに立った状態で入っており、検出面では木の年輪の一部が観察された。この炭化木の^{14}C年代測定値は3640±50yBPである。平面形は円形で、掘り形は皿形を呈す。壁面は南西側がや

や立ち上がりが急である。覆土は２層に分層される。レンズ状に堆積しているが、１層内では木の根が見られ、その下に灰を含んだ砂が入り込んでいた。覆土から縄文中期の土器が出土した。

土　　坑（図版６・83～85）

SK82　検出面では中央部の黒褐色砂に0.3cm角の木炭が多く散っていた。平面形は不整楕円形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は２層に分層され、上層は北側が厚く、南側の立ち上がりが急である。２層から縄文土器が出土した。また、遺構上部から縄文前期末葉の土器（2）が出土した。

SK90　中央部で縄文土器が出土した。平面形は楕円形で、掘り形は半球形を呈す。覆土は２層に分層され、上層の南東側の立ち上がりがやや急である。１層から縄文中期初頭の土器（35）が出土した。

SK108　南東側を排水路で切られるが、不整楕円形の皿形の遺構と推定される。覆土は２層に分層され、レンズ状に堆積する。全体に浅い皿状ではあるが周囲の砂の様子とは明らかに違う粘性のある暗褐色砂が上層に見られる。覆土から縄文後期の土器（3）、遺構上部から縄文前期の土器（Ⅲ層上部から出土）が出土した。

SK109　南東側の一部は排水路によって切られるが、円形の皿形を呈す。覆土は２層に分層され、レンズ状に堆積する。遺構上部から縄文晩期の土器（10）が出土した。また、覆土から無文の縄文土器が出土した。

SK139　検出面では黒褐色砂が主体であり、全体に木炭が散っていた。平面形は円形で、掘り形は半球形を呈す。壁面は南西側が急激に立ち上がり、北東側が緩やかな傾斜となっている。覆土は２層に分層され、上層の両端にテラスが形成されるように堆積している。覆土から縄文後期の土器が出土した。

SK145　検出面には木炭が少量散っていた。平面形は楕円形で、掘り形は半球形を呈す。覆土は単層である。北西側にブロック状の炭化物が１か所入り込んでいる。遺構上部から縄文土器が出土した。

性格不明遺構・風倒木（図版７・８・84・85）

SX78　検出面では黒褐色砂が広がり、その中に0.3～0.5cm角の木炭が全面に散っていた。平面形・掘り形ともに不定形である。覆土は黒褐色砂の単層。遺構の下部には当遺構を取り囲むようにSX111が存在し、さらにその下にSX112が存在する。SX78は下部のSX111や周囲の堆積している砂層と明らかに違いが見られることから人為的に掘られた土坑と考えられるが、その性格は不明である。覆土から縄文晩期の土器（7）、遺構上部から縄文後期の土器（8）が出土した。

SX111　SX78を検出後さらに周囲を精査し、Ⅲ層下部にて検出された。検出面の中央部はSX78の影響を受け黒褐色砂が多く、周囲に至ると褐色砂が占める割合が増える。平面形は楕円形で、掘り形は皿形であるが南東側がやや深くなる。覆土は単層で、褐色砂を主体とする。底部の形状などから自然の落ち込みと考えられる。覆土から縄文後期の土器（9）が出土した。

SX100　検出面では、黒褐色砂が主体であり、0.3～0.5cm角の木炭が散っていた。遺構内の南西側にP99が存在する。平面形は隅丸方形で、掘り形は浅い皿形を呈す。覆土は２層に分層され、レンズ状に堆積する。底部の形状から人為的な掘り込みと判断しかねる遺構である。遺構底部から縄文土器が出土した。

SX102　検出面では３か所の木炭集中部分がみられたため、遺構が３基あると考えた。トレンチを入れ確認したところ、それぞれに明確な立ち上がりが見られないことから１つの遺構とした。平面形・掘り形ともに不定形である。覆土は３層に分層され、底部の南側がやや深く、壁面の立ち上がりが急になる。風倒木痕の可能性がある。２層から縄文土器が出土した。

SX103　検出面では中央部に1cm角の木炭が密集していた。平面形は一辺約300cmの隅丸方形で、浅い皿状を呈す。覆土は2層に分層され、レンズ状に堆積する。この遺構は形状や覆土から自然の窪地と考えられる。覆土から縄文晩期末の土器（6）が出土した。また、遺構の南側20cmに出土した縄文土器は覆土から出土した縄文土器と同一個体である。

SX107　検出面では、木炭の集中が3か所見られた。平面形は不定形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は3層に分層される。1層から縄文中期の土器、2層から縄文土器、遺構上部から縄文中期初頭の土器（5）が出土した。形状および覆土の堆積状況から自然の窪地の可能性がある。ただし、北側に分布する覆土1層部分については円形の土坑の可能性もある。

SX115　北西側にSX106があり、平面の切り合いで見るとSX115がSX106に先行する。検出面では暗褐色砂が全面に広がり、木炭が微量に散っていた。平面形は不定形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は単層で、暗褐色砂を主体とする。この遺構は形状からみると人為的な掘り込みというより、自然の窪地に暗褐色砂が堆積した可能性が高い。覆土から縄文前期の土器が出土した。

SX152　検出面では0.2cm角の木炭が全体に散っていた。平面形は円形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は単層である。覆土から縄文前期の土器が出土した。

SX153　検出面では黒褐色砂が主体であり、少量の木炭が全体的に散っていた。平面形は不定形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は単層である。常に水の影響を受けていた低地に位置していたため遺構の全容がはっきりしないが、堆積状況から自然の窪地の可能性が強い。1層から縄文土器が、遺構下部から縄文中期の土器（4）が出土した。

SX221　平面形は楕円形で、掘り形は浅い皿状であるが、東側がやや深く掘り込まれている。覆土は3mm角の炭化物を多量に含む単層で、黒褐色砂を主体として褐色砂が混じる。遺構上部から縄文後期？の土器が出土した。

風倒木91　検出面での覆土状況は、中央に黒褐色砂が広がり周囲に褐色砂が見られる。平面形は楕円形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は2層に分層され、褐色砂の堆積の中央部に黒褐色砂が太い帯状に斜めに入り込む。覆土の様子と植物遺体が多いことからから風倒木痕と考えられる。2層から縄文前期の土器（11）が出土した。

風倒木224　周辺から遺物が多量に出土していたので遺構の存在が予想されたが、範囲を確定するまでに時間を要した。精査を続けているうちに中央の砂丘砂由来の砂を取り巻くように暗褐色砂が巡っていることが判明した。平面形・掘り形ともに不定形である。覆土は8層に分層されるが、大まかに捉えると黒褐色砂の地盤の上に褐色砂を主体とする層、さらにその上層には暗褐色砂を主体とする層が堆積している。中央に砂丘砂由来の黄褐色砂と黒褐色砂が混じる砂が、その北西側に木の根痕と推定される堆積の乱れた部分が見られ、これらの点から風倒木痕であると考えた。遺物が多く出土した層は2層であり、0.5～1cm角の炭化物が少量含まれる。風倒木224の南東側にSX225が掘り込まれている。SX225と接する南東部は斜面の落ち際にあたり、水の影響を強く受けていたために、黒褐色砂がブロックで入り込む地層が見られる。遺物は縄文晩期の甕（12）と、12とは異個体の縄文土器小片が数点出土した。

SX225　検出面では、北西側が風倒木224を破壊している。南東側は自然流路によって壊されている可能性があり、全容ははっきりしない。平面形は不定形で、掘り形は皿形を呈す。覆土は9層に分層されている。堆積状況を見ると、黒褐色砂が各層に含まれているために複雑になり、層によっては他層に切られている状況が見られる。遺物は、隣接する風倒木から流れ込んできた縄文土器（12）の破片がある。

（2）平安時代以降の遺構

自 然 流 路（第８図、図版５）

Ⅱ区からⅠ区南端（10G区）にかけて検出した。検出したのは右岸と推定され、縄文時代に形成された斜面の裾を取り巻くように調査区東側から流れ込み、10G区付近で南西方向に湾曲し、調査区外に流れ出ていた様子がうかがわれる。流れの方向から、福島潟方面へ流れていた加治川水系の一支流であると考えられる。湾曲する地点は、1999年の一次調査で河川堆積物が検出された12トレンチと、河川堆積物が検出されなかった19・20トレンチの位置関係から推定した。湾曲部の手前にあたる18G区付近の川岸では、幅約30m、奥行き約15mにわたり斜面の裾がえぐり取られ、周囲に自然堤防が形成されていた。自然堤防中からは縄文土器１点が出土した。また、自然堤防とそのまわりにはアシハラガニの生痕化石が分布していたので、ここにあまり流れの激しくない潟のような場所が存在したと推測される。調査区内で検出できたのは自然流路の右岸のみであるため、全体の川幅や川底までの深さを確認することはできなかった。しかし、23H区で行った深掘りでは北から南にかけて深さを増し、1a・bグリッドでは4m近く掘削したが川底に達しなかったので、それより深いことは確実である。川幅は調査区内で左岸が検出されなかったことから考えると、50m以上あると推定される。

覆土は青灰色シルトと粗砂に大別される。青灰色シルトが覆土の大部分を占め、流れの激しさを示すようにラミナが波状に入り組んでいる。Ⅱ区の19H区・21G区南東壁において複数回の切り合いを観察できることから、河道は少しずつ移動していたと考えられる。粗砂は青灰色シルトに比べてやや低い位置に堆積する。多量の土器を含むが、激しく摩耗している上に縄文時代から平安時代までのものが渾然一体となって出土することから、上流から流されてきたものと考えられる。土器のほかに大量の流木が含まれており、大きなものでは長さ4m、直径50cmほどもあった。粗砂自体も粒径が3mm程度であまり摩耗しておらず、山砂に近い状態を呈している。以上のことから、粗砂は上流の集落を押し流してきた土石流が遺跡内に堆積したものであると推定される。44Trでは自然堤防の堆積物と黒色砂層との間に泥炭層（ガツボ）が堆積している。この泥炭層の^{14}C年代測定値（試料№19-1）は平安時代にあたる1,090±30yBPが示されているので、馬見坂遺跡においては平安時代に周囲より標高の低い湿地帯が存在し、そこへ洪水が押し寄せることで河道が形成されたと推定される。洪水の発生時期は、河川堆積物を被覆する泥炭層の^{14}C年代測定値（試料№21）が640±60yBPであるので、９世紀半ば以降、13～14世紀以前と推定される。

遺物は粗砂から出土した土器のほかに、23H区の深掘りで青灰色シルトから出土した木簡・斎串・串・曲物底板がある。これらの遺存状況は良好なので、遺跡に近い場所に供給源を求められそうである。

ピット・土坑（図版９・85）

SK3・P26　検出面は暗褐色砂を主体としているが黒褐色砂が多く混じっており、木炭も少量散っていた。北東側にP26が存在し、断面から見るとP26が新しいことがわかる。平面形は円形を呈し、掘り形は不定形で底面には凹凸がある。覆土は２層に分層される。遺構の性格は不明である。１層から土師器、古伊万里が出土した。P26からは長甕の一部とみられる土師器が出土した。SK3の遺物が混入した可能性がある。

SK5　南西側は区画整理時に作られた用水に壊されていたために全容は不明である。検出面は赤褐色砂が2m四方の範囲で広がり、中央には木炭が多量に固まっていた。平面形は不整楕円形で、掘り形は不定

形を呈す。覆土は6層に分層され、黄褐色砂が底部に堆積し、その上に褐色砂、上面に黒色砂が堆積している。遺構全体に赤褐色砂が広がっていることから、この場所で火が使用されていたと考えられる。出土遺物がないので遺構の性格や時期は不明である。なお、多量の鉄滓（図版88）が出土した1999年一次調査4トレンチがSK5に近接しているので、鍛冶関連の遺構であった可能性もある。

風倒木（図版9）

風倒木134　検出面では中央部に褐色砂、それを囲むように青灰色砂、さらに外側に青灰色粘土が堆積していた。平面形は不整円形で、掘り形は不定形を呈す。覆土は7層に分層される。横断面を見ると上面は青灰色粘土と青灰色砂が主体となり、下層では砂丘漸移層が見られ、さらにその下に上面に見られる青灰色砂が潜り込んでいる。以上のような堆積状況から風倒木痕と考えられる。覆土から縄文土器が出土した。

5　遺　　物

A　概　　要

馬見坂遺跡からは浅箱換算で15箱程度の遺物が出土した。遺物には縄文時代前期～晩期の土器・石器、弥生土器、古墳時代の土師器、古代の土師器・須恵器・木製品がある。遺物は遺構・包含層のほか、自然流路中から出土した。自然流路出土土器は一様に水磨が著しいことから、馬見坂遺跡上流の遺跡が土石流等で破壊され、その遺物が運ばれてきたものと考えられる。

B　縄 文 土 器（図版10～12・86・87）

出土遺物の多くは小片で時期の特定が困難なものが大部分を占めた。胎土・器面等の様子から多くは前期後半～中期前葉に属すると推定される。以下、遺構、包含層、自然流路出土土器の順で記載を進める。なお、出土地点等の詳細は観察表を参照のこと。

（1）遺構出土土器（図版10・86）

P114（1）　縄文地文に、本体とは異質な粘土を用いて円形の結節状浮線文が描かれる。前期末葉。

SK82（2）　縄文地文に半截竹管文でＹ字モチーフが描かれる。前期末葉。

SK108（3）　擦り消し縄文で施文される。9と同一個体の可能性あり。後期前葉か。

SK153（4）　縄文のみで文様構成は不明であるが、胎土や器壁の調整の様子から中期と推定される。

SK107（5）　口縁端部が外側に折り返されて厚くなっている。口縁端部および口縁部に撚糸文が施文される。ほかの土器と比べ、堅緻で赤味の強い土器である。中期初頭。

SX103（6）　縄文地文に平行沈線が施文される。晩期。

SX78（7・8）　7は沈線による区画文が認められる。内外面のミガキの様子から晩期末の可能性がある。8は丸棒状工具による刺突が器面を覆う。後期前葉。

SX111（9）　擦り消し縄文による区画文。後期前葉か。

SK109（10）　縄文LR（付加条？）が施文される。内面のミガキの様子から晩期の可能性が高い。

SK90（35）　口縁直下に引かれた沈線によって、口縁部が隆帯状に見える。

風倒木91（11）　結節状浮線文が描かれる。前期末葉。

風倒木224・SX225（12）　頸部がすぼまるものの、口縁部から体部にかけてなだらかに移行する甕である。口縁部に縄文が施文され、頸部の無文帯をはさみ、体部上半に結節縄文が多段に回転施文される。体部下半は条痕である。晩期鳥屋２式の範疇で捉えられる。

（2）包含層出土土器（第９図、図版10・11・86・87）

前期（13～33）　ここで前期とした土器は概ね前期末葉の十三菩提式に併行する。胎土に繊維を含むものが多い点が特徴である。13・14は口縁に半截竹管連続刺突がある。16は口縁に突起があるようだが、形状・単位は不明。17は波状口縁になると推定される。18～22は縄文施文の破片である。22の拓本右下が半円形に欠けているように見えるのは、木の実脱落痕である。23は結節状浮線文で方形に区画された中に同じく結節状浮線文で斜線・円形モチーフが描かれる。25は縄文地文に結節状浮線文で垂下する直線文・弧線文、環状文が描かれる。器形はキャリパー形を呈すと推定される。器形・文様から近畿地方前期末葉の大歳山式に類すると考えられる。大歳山式では結節状浮線文の結節を施文する工具には先端を「V」字形に刻んだ多截の竹管を用いるが［泉1996］、25は半截竹管が用いられている。27は金魚鉢形の器形であると推定される。29～33は新潟市重稲場遺跡の十三菩提式期後葉の枠内で捉えられる3B類［前山1994］に相当する。29は縄文地文にソーメン状の粘土紐を単純貼付して三角形のモチーフが描かれている。30は口縁近くの破片と推定される。小片のため全体像は不明であるが、口縁に隆帯が巡るかもしれない。31～33は半截竹管により平行沈線や集合沈線が描かれる。

中期（36～43・47）　中期初頭～前葉の土器が出土した。多くは北陸系であるが、42は非北陸的である。47は口縁が内屈する北陸系の浅鉢である。全面に縄文が施文された後、口縁部が丁寧になでられ、縄文が消されている。口縁に加飾されない点が47の特徴である。43は土器片の周囲が打ち欠かれ、円盤状を呈する。

後期（44～46・48・49）　44は三十稲場式の深鉢である。４単位の橋状把手が付き、口縁部と体部は刻みのある低い隆帯で区切られる。体部には結節縄文RLが縦施文される。45は隆帯状に円形刺突が連続する。後期初頭～前葉。46は内面が剥落しているが、本来は倍の厚さがあったと推定される。後期初頭。48は口縁部に低い瘤が付く。49は黒色に近い色調を呈することと丁寧な磨きが行なわれているという特徴から後期と考えたが、詳細は不明である。

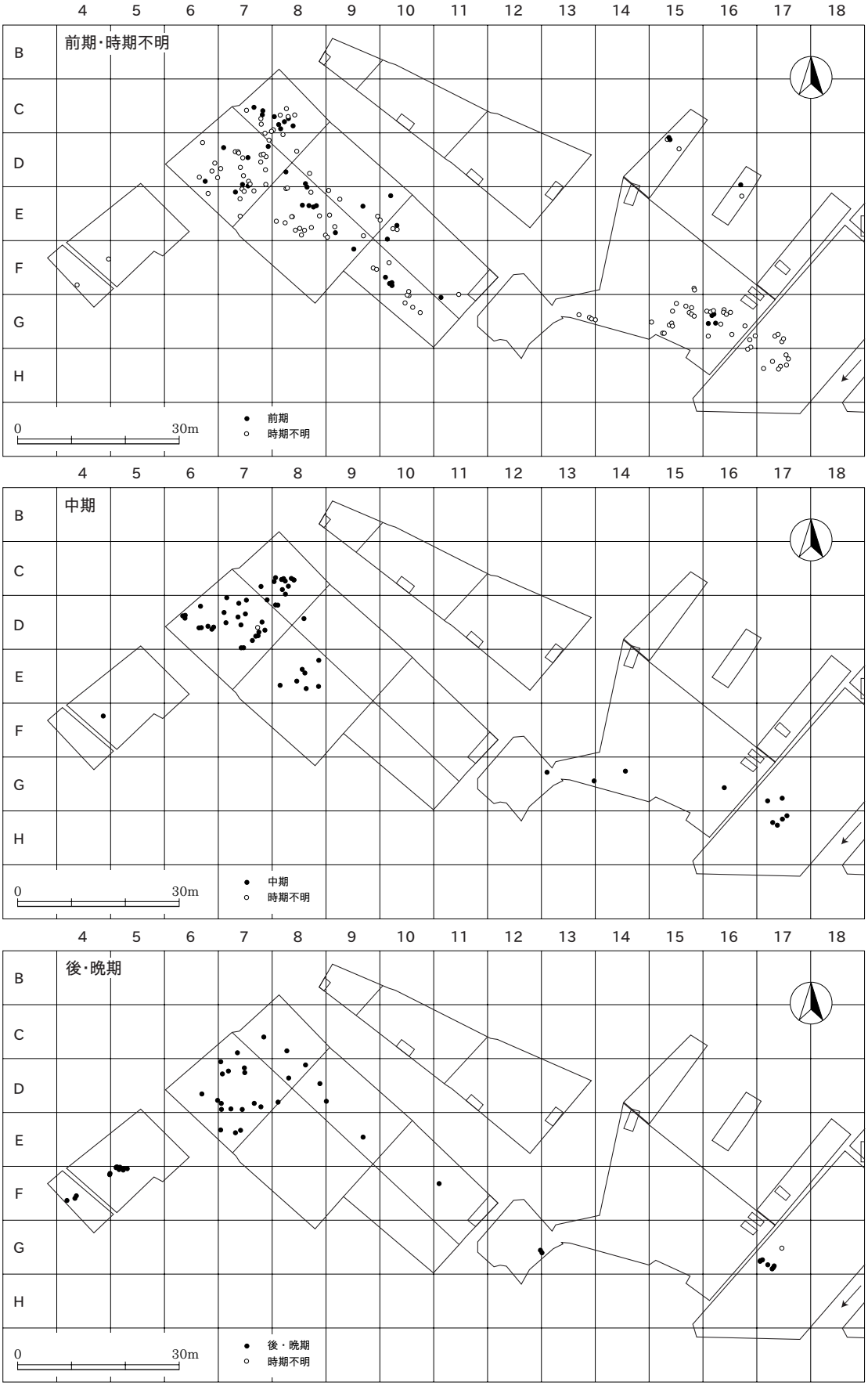
晩期（50～53）　50は器壁が非常に薄く、ほかの土器と一線を画する。縄文地文に植物の茎のような柔らかな工具による沈線が引かれる。晩期末以降の可能性が高いが、詳細は不明。51～53は鳥屋２式に相当する。51は内面の磨きが丁寧である。甕の肩か大型壺の可能性がある。

（3）自然流路出土土器（図版12・87・88）

中期（77～80）　いずれも北陸系の土器である。

後期（81・82）　81は口縁が受け口状を呈し、内面に１条の沈線が巡る。口縁外面には無節縄文が帯状に施文される。口縁の特徴から三十稲場式の前段階に位置付けられる可能性がある。82は後期後葉～晩期前葉か。

晩期（83～91）　83は雲形文が施文される大洞C1式の浅鉢である。84～91は晩期末。85は口縁に結節縄文が施文される。86は鳥屋２式の甕体部破片。上端は擬口縁で破損している。87～89は浮線文が施文される。90・91は三角形のモチーフか。91は弥生前期に入るかもしれない。



第９図　馬見坂遺跡　包含層出土　縄文土器分布図（砂丘下層～黒色砂）

C　縄文時代の石器（図版11・87）

石器は遺構・包含層・自然流路から出土したが総数で25点と少ない。石器組成は第１表参照のこと。土器に相当の時期幅があるので、石器の所属時期の詳細は不明である。

石鏃（54～58）　無茎凹基３点（54～56）、有茎２点（57・58）である。

石核（59）　59は非常に小型の黒曜石製石核である。

両極石器（60）　両極石器としたが、打製石斧の破損品の可能性もある。

磨製石斧（61）　大きく破損しているため、全体の形状は不明であるが、両刃だったと推測される。

磨石類（62～66）　「素材となる礫（転石）の正面及び側縁に磨痕・敲打痕・くぼみ痕を有するもの」［北村1990］。11点出土。使用痕の組合せで分類すると、「磨痕のみ」４点、「磨痕＋敲打痕」４点、「磨痕＋敲打痕＋凹痕」１点、「敲打痕のみ」２点となる。64は小型の扁平礫を素材としており、土器の器面調整などに使用されたか。

	石鏃	石核	剥片	砕片	両極石器	磨製石斧	磨石類	合計
黒　曜　石	2	1						3
玉　　髄	2		1					3
珪 質 頁 岩	1				1			2
チ ャ ー ト		1	1	1				3
鉄　石　英			1					1
砂　　岩						1	2	3
緑色凝灰岩						1		1
凝　灰　岩								0
花　崗　岩							7	7
安　山　岩							2	2
合　　計	5	2	3	1	1	2	11	25

第１表　馬見坂遺跡　縄文時代の石器集計表

D　弥 生 土 器（図版12・87・88）

（1）包含層出土土器

甕（67・68）　67・68は北陸地方に通有の有段口縁の甕。67は口縁部に擬凹線が引かれている。口縁部断面形が三角形を呈する、猫橋式の特徴を示す。後期前半。68は口縁部断面形が直立気味の二等辺三角形を呈するので、67よりも後出的なものと考えられる。弥生時代後期～古墳時代前期。

その他（92）　縄文地文に沈線で施文される弥生前期の緒立式。

（2）自然流路出土土器

甕（93）　有段口縁の甕。口縁部は無文である。

E　古墳時代の土器（図版12・88）

古墳時代の土器は自然流路から出土した。

甕（94）　口縁部の屈曲が弱く、体部との境が不明瞭である。

鉢（95）　口縁内面が有段の小型鉢である。

器台（96・97）　96は外面に弱い段をもつ。

F　古代の土器（図版12・87・88）

古代の土器は『新潟県の考古学』の春日真実氏の編年［春日1999］でⅣ～Ⅵ期の幅がある。

（1）包含層出土土器

土師器長甕（69）　69は短い口縁部が引き出されている。

土師器椀（76）　76は薄手で体部から口縁部にかけて大きく開く。

須恵器杯（70～74）　無台杯（70）、有台（73・74）がある。71・72は佐渡小泊窯産。

須恵器壺（75）　小型・球胴の壺である。

（2）自然流路出土土器

土師器長甕（98）　口縁端部が内屈する。

土師器小甕（99）　体部のロクロナデの凹凸が顕著である。

須恵器壺（100）　壺としたが、詳細は不明。口縁端部はしっかり面取りされる。

須恵器杯（101～103）　102・103は比較的身が深い。

G　木　製　品（図版12・88）

木製品は自然流路から出土した。土器にかなりの水磨が見られたのに対して、遺存状況が良好なので、馬見坂遺跡からそう遠くない所から流れてきたか、馬見坂遺跡に自然流路が流れていた時期に遺跡内で廃棄されたものと考えられる。

木簡（104）　柿経が書かれている可能性がある。「6　新発田市馬見坂遺跡出土木簡」参照。柿経の製作年代にははおおよそ12世紀後半頃から少なくとも18世紀前半までの幅がある［松浦・原田1992］が、104が出土した自然流路を被覆する泥炭層（試料№21）で測定した^{14}C年代は西暦換算で1250～1370年を示す。よって、104は13～14世紀代までの所産である可能性が高い。

斎串（105）　表裏面に文字は認められないが、柿経の形態分類［松浦・原田前掲］に従うなら、「圭頭状かつ、切り込みの入る頭部で、方形の下端部を持つ細身のもの」に分類される。この形態は12世紀半ばから16世紀初頭に見られる形態である。よって、木簡と同様に13～14世紀代までの所産である可能性が高い。

串（106）　左側縁の窪んだ部分2か所と下端が焦げている。火鑽臼の可能性もある。

曲物底板（107）　表面に刃物傷が多数認められる。

6　新発田市馬見坂遺跡出土木簡

相沢　央（新潟大学　小林昌二研究室）

A　釈　　文

〔華ヵ〕

×□光如来過十二小劫授堅×

B　形　　状

（127）×18×3　　081形式

左右端は原状。上下端は欠損。下端は表（オモテ）面および裏面から刃物を入れて折っている。

C　内　　容

『法華経』譬喩品第三の一部を書写したものである。『法華経』譬喩品第三には、「舎利仏。華光仏寿。十二小劫。除為王子。未作仏時。其国人民。寿八小劫。華光如来。過十二小劫。授堅満菩薩。阿耨多羅三藐三菩提記。告諸比丘。」とある。本木簡は厚さが3ミリと厚いため断言できないが、柿経（こけらきょう）である可能性がある。柿経とは、厚さ1ミリ前後に薄く剥いだ細長い木の板に経文等を書写したものであり、通常1枚の経木の1面に17字（表裏両面に書写する場合は34字）ずつの文字を書写し、20枚または40枚で1束とするものである［松浦・原田1992］。ところで、先にも述べたように、本木簡の下端は刃物を入れて切断されている。このように、木簡を切断して廃棄する例としては、符などの公文書の木簡において、その悪用を防ぐために施される例が見られるが、本木簡のような柿経とも考えられる木簡においても、同様の廃棄方法が施されている点は注目される。

7　自然科学分析

A　馬見坂遺跡の立地環境に関する自然科学的調査報告書

高濱信行　卜部厚志（新潟大学積雪地域災害研究センター）

（1）はじめに

本調査は、新潟県新発田市佐々木の馬見坂遺跡について、自然科学的な解析を行ない遺跡の立地環境等を明らかにすることを目的とする。

馬見坂遺跡は、新砂丘Ⅰ-2に区分される砂丘地の南面に位置し、縄文時代から平安時代にかけての遺物が出土した。

調査項目は、放射性炭素年代分析、砂質資料の粒度分析である。このうち放射性炭素年代の測定は（株）地球科学研究所および（財）九州環境管理協会に依頼した。粒度分析は新潟大学大学院の高清水康博氏が行なった。分析結果の取りまとめと考察を新潟大学積雪地域災害センターの高浜、卜部が行なった。

（2）放射性炭素年代分析

遺跡内の試料について放射性炭素年代による年代測定を行なった。測定結果の詳細（第2表）と層序との対比（第3表）を示す。

馬見坂№8-1（Ⅰ区②：砂丘漸移～下層）の木材試料は、1190±30yBPの年代を示している。年代測定値からこの木材試料は、出土状況と合わせて考えると遺跡層序の砂丘漸移～下層中に生息した平安時代の自然木と思われる。

馬見坂№16-1（Ⅱ区北西メインセクション：38層）の試料は、1120±60yBPの年代を示す。試料は、遺跡の遺物層序から平安時代の流路内の堆積物と判断されている。年代測定値と遺物層序からみた年代は

馬見坂遺跡：放射性炭素年代測定結果

試料名	馬見坂No.8-1 砂丘下層～盤中の自然木		地球科学研究所
測定方法	加速器質量分析		
前処理	酸--アルカリ--酸	試料種類	木材
C14年代（yBP）	1190±30	補正C14年代（yBP）	1190±30
δ13C（permil）	-25.2		

試料名	馬見坂No.19-1 9層ガツボ		地球科学研究所
測定方法	加速器質量分析		
前処理	酸--アルカリ--酸	試料種類	木材
C14年代（yBP）	1110±30	補正C14年代（yBP）	1090±30
δ13C（permil）	-26.4		

試料名	馬見坂No.22 3層ガツボ		地球科学研究所
測定方法	β線一計数法（長時間測定）		
前処理	酸--アルカリ--酸	試料種類	木材
C14年代（yBP）	570±90	補正C14年代（yBP）	540±90
δ13C（permil）	-27.1		

試料名	馬見坂No.28 「スミ1」検出層準		地球科学研究所
測定方法	β線一計数法		
前処理	酸--アルカリ--酸	試料種類	炭質物
C14年代（yBP）	3650±50	補正C14年代（yBP）	3640±50
δ13C（permil）	-25.4		

第2-1表　放射性炭素年代測定結果

試料名	馬見坂No.16-1 調査区Ⅱ区（38層）		九州環境管理協会
測定方法	β線一計数法		
前処理		試料種類	木材
C14年代（yBP）	1090±60	補正C14年代（yBP）	1120±60

試料名	馬見坂No.21 調査区Ⅱ区（40層）		九州環境管理協会
測定方法	β線一計数法		
前処理		試料種類	泥炭
C14年代（yBP）	620±60	補正C14年代（yBP）	640±60

第2-2表　馬見坂遺跡関連年代測定値

試料名	層　　位	補正C14年代（yBP）	遺物層序
馬見坂№8-1	Ⅰ区②：砂丘漸移～下層	1190±30	砂丘漸移～下層中の自然木
馬見坂№16-1	Ⅱ区北西メインセクション（38層）	1120±60	平安時代の流路内堆積物
馬見坂№19-1	Ⅱ区44Tr南壁（9層ガツボ）	1090±30	縄文時代以降
馬見坂№21	Ⅱ区北西メインセクション（40層ガツボ）	640±60	Ⅱ区最新のガツボ層（無遺物層）
馬見坂№22	Ⅰ区②南西壁（3層ガツボ）	540±90	明治古銭の出土層準
馬見坂№28	Ⅰ区②8E「スミ1」覆土	3640±50	縄文時代

第3表　放射性炭素年代と遺物層序

調和的結果である。

馬見坂№19-1（Ⅱ区44Tr南壁：9層）の試料は、1090±30yBPの年代を示す。試料は、低湿地に繁茂した水辺の植物であり、遺跡の遺物層序から縄文時代以降の年代が推定されている。年代測定値は平安時代を示しており遺物層序からみた年代とは調和的結果である。

馬見坂№21（Ⅱ区北西メインセクション：40層ガツボ）の泥炭質試料は、640±60yBPの年代を示す。試料は、遺跡調査Ⅱ区の最上位の“ガツボ層”である。無遺物層であるが、遺跡層序からみた年代は平安時代以降と推定される。年代測定値は西暦に換算すると1250年～1370年の鎌倉～室町時代前期を示している。

馬見坂№22（Ⅰ区②南西壁：3層ガツボ）の泥炭質試料は、540±90yBPの年代を示す。試料は、遺跡調査Ⅰ区の最上位の“ガツボ層”であり、明治時代の古銭の出土した層準である。年代測定値は西暦に換算すると1320年～1500年の室町時代を示している。遺物層序では明治時代の古銭が出土することから、年代測定値と調和的結果ではない。古銭の出土状況に関して、地層の撹乱等の有無を再検討する必要がある。なお、馬見坂№21と馬見坂№22試料は、年代測定値からみると誤差範囲内で一致しており同一の年代を示す堆積物であると判断できる。

馬見坂№28（Ⅰ区②8E「スミ1」覆土）の試料は、3640±50yBPの年代を示す。試料は、遺跡調査Ⅰ区の縄文時代の包含層である。年代測定値は縄文時代後期を示しており遺物層序からみた年代と調和

的結果である。

（3）粒 度 分 析

堆積物の粒土は、原岩の性質や風化過程の影響を強く受けるものの、おもに運搬及び沈降の過程と機構を反映している。粒度分布の解析は、その試料の堆積過程と機構を解明し、堆積環境を復元する上で重要な情報をもたらすことができる。

これまで、砂丘地の遺跡調査では、砂質な地盤は砂丘として一括されることが多かった。しかし、馬見坂遺跡のように砂丘地から砂丘間低地にかけて遺物が出土する場合は、砂質な堆積物の層相、固さ、植物片の有無等を観察し、堆積環境を詳細に区分して当時の生活空間を復元する必要がある。特に遺跡地内で

馬見坂遺跡内の粒土分析

試料番号	調査時仮試料名	採取層準	平均粒径	淘汰度	歪み度	尖り度
№1-1	Ⅰ区①砂丘1	砂丘（漸移）	1.7372	0.3725	1.9232	17.9532
№1-2	Ⅰ区①砂丘2	砂丘（下層）	1.4858	0.2971	1.7281	19.3546
№3-1	サンプル4	黄橙色砂，植物有，	1.6207	0.4392	1.5279	11.4266
№6-1	Ⅰ区7D	Ⅲ層	1.7910	0.3797	2.2358	17.0796
№6-2	Ⅰ区7D	砂丘（漸移）	1.7403	0.3682	1.2708	12.6677
№6-3	Ⅰ区7D	砂丘（下層）	1.6035	0.3530	1.1702	12.0393
№7-2	7D砂丘	砂丘（漸移）	1.7047	0.3977	2.0932	17.0621
№7-3	7D砂丘	砂丘（漸移下層）	1.7123	0.3881	1.8009	13.9287
№7-4	7D砂丘	砂丘（下層盤）	1.7445	0.3524	1.5761	14.3306
№11-1		黄橙色砂，植物有	1.7101	0.3279	1.7082	16.2039
№12-1		砂丘（下層）	1.7726	0.2985	1.5361	13.3915
№13-1	Ⅰ区③a30Tr	Ⅲ層	1.7229	0.3654	1.5183	13.0765
№13-2	Ⅰ区③a30Tr	砂丘（漸移）	1.6683	0.3043	0.2223	5.94730
№13-3	Ⅰ区③a30Tr	“砂丘1”黄橙色砂	1.6085	0.3452	1.5005	16.6105
№13-4	Ⅰ区③a30Tr	“砂丘1”褐色砂	1.4945	0.3647	1.8750	17.6278
№13-5	Ⅰ区③a30Tr砂丘sp1	“砂丘2”	1.6285	0.4100	1.8706	16.0220
№13-6	Ⅰ区③a30Tr砂丘sp2	“砂丘2”	1.6136	0.3731	1.4241	14.8630
№15-1	Ⅱ区北西メイン27層a	27層	1.6736	0.3502	1.2205	12.7293
№15-2	Ⅱ区北西メイン28層a	28層	1.7304	0.3112	2.1685	21.3400
№15-3	Ⅱ区北西メイン29層a	29層	1.6905	0.3385	1.9852	17.8129
№17-1	Ⅱ区北西メイン27層b	27層	1.8829	0.5895	2.7026	12.6710
№17-2	Ⅱ区北西メイン28層b	28層	1.7086	0.3207	2.1520	20.4977
№17-3	Ⅱ区北西メイン29層b	29層	1.7525	0.3090	2.5742	24.7627
№18-1	Ⅱ区44Tr3層	3層（45層相当）	1.6427	0.3513	3.5450	32.9278
№18-2	Ⅱ区44Tr南壁4層	4層（45層相当）	1.5387	0.3032	4.3398	46.1228
№18-3	Ⅱ区44Tr南壁7層	7層（砂丘下層）	1.8157	0.4878	3.3223	20.6806
№20-1	Ⅱ区北西メイン36層	36層	1.7592	0.3186	2.1015	19.7747
№38	8E区ウエルポイント中央	4m下	1.6244	0.4153	2.0719	16.1670

砂丘砂標準試料

試料番号	試料採取地点	層位	平均粒径	淘汰度	歪み度	尖り度
99120601	新発田市佐々木付近	新砂丘Ⅰ-2	1.7244	0.4523	2.4285	17.0869
99120602	豊栄市上黒山遺跡付近	新砂丘Ⅰ-2	1.8048	0.3437	2.6585	23.7964
99120603	豊栄市松影地内：砂丘	新砂丘Ⅰ-3	2.0537	0.3303	2.0243	18.6338
99120604	豊栄市松影地内：砂丘	新砂丘Ⅰ-3	2.0619	0.3370	1.5134	17.3121
99120605	聖籠町藤寄付近	新砂丘Ⅰ-4	1.8337	0.3814	2.4322	17.9413
99120606	聖籠町藤寄大宝寺付近	新砂丘Ⅰ-4	1.8238	0.3815	1.6524	14.5846

海成層試料

試料番号	試料採取地点	層位	平均粒径	淘汰度	歪み度	尖り度
Ma-1	青田S-1コア	海成層	1.7262	0.5714	3.5194	22.1236
Ma-2	青田S-1コア	海成層	1.7909	0.7342	3.0207	14.0829

第４表　馬見坂遺跡砂丘粒度分析

は、水辺の植物（アシ等）が水流に流されず（倒れず）直立したまま砂質堆積物に埋積されていることがある。この層相の中から遺物を産出することがあり、このような層相を砂丘地盤と区分して記載する必要がある。現地での観察でこの層相は、水辺の低地に砂丘地の砂が風ないしは非常に弱い水流のもとで運搬され堆積したものと判断できる。

ここでは、この問題も含め遺物を産する砂層の起源を明らかにするため、砂質試料の粒度分析を行なった。

a　分析方法

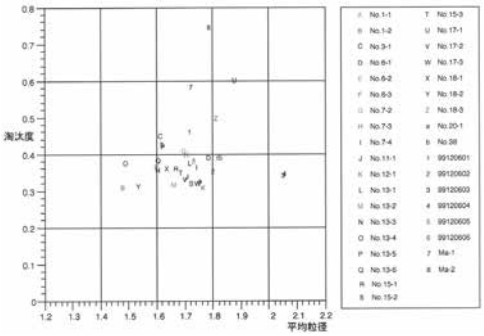
粒度分析は、試料が泥質分が少なく未固結であることから沈降天秤法によって行なった。

沈降天秤法は、時間とともに沈積していく堆積物の量を電子天秤を用いて重量として測定する方法である［伊勢屋1985］。測定は新潟大学の沈降天秤式粒度分析装置を用いて行い、累積頻度曲線を作成しモーメント法に基づいて、平均粒径、標準編差（淘汰度）、歪み度、尖り度を算出した［田村・中山1993］。

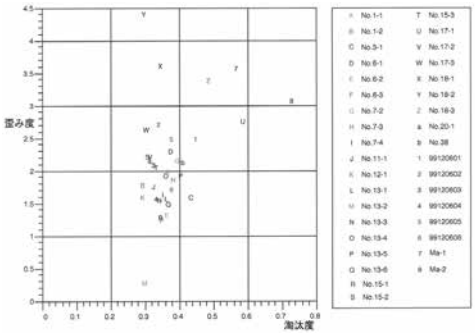
平均粒径は、全ての粒子の大きさの和を個数で割った値（算術平均値）である。淘汰度は、標準偏差からもとめた粒子の大きさの揃い具合を示したもので、粒子の大きさが揃っているほど高い値となる。歪み度は、粒度分布曲線の対称性の歪み具合を示したもので、中央値（曲線のピーク）が両端の対称性からみて、粗粒な方により細粒側に長く尾をひく形態のものを“正の歪み”、逆に中央値が細粒な方により粗粒側に長く尾をひく形態のものを“負の歪み”という。尖り度は、粒度分布曲線におけるカーブの尖り方を示したもので、中央付近への粒径の集中度を示している。

b　分析結果

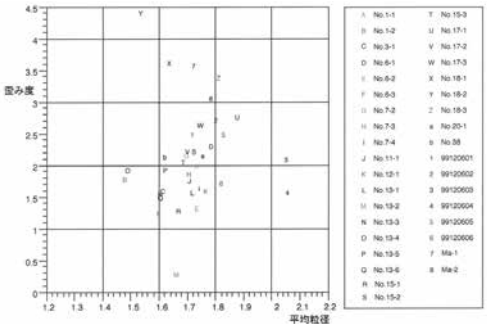
各試料の粒度分布曲線と頻度分布曲線を第14～16図に、平均粒径・淘汰度・歪み度・尖り度の分析結果を第4表に示す。また、比較試料として、新砂丘Ⅰ-2、新砂丘Ⅰ-3、新砂丘Ⅰ-4の各試料と堆積環境



第10図　粒度分析結果（平均粒径／淘汰度）



第11図　粒度分析結果（淘汰度／歪み度）



第12図　粒度分析結果（平均粒径／歪み度）

第13図　泥炭層準に認められる液状化跡

の異なる海成層の試料を分析した。

各試料の平均粒径・淘汰度・歪み度の関係を第10図（平均粒径／淘汰度）、第11図（淘汰度／歪み度）、第12図（平均粒径／歪み度）に示す。一般に、同一の運搬・堆積過程をもつ堆積物は、これらの比において同一の領域を示すことが知られている［村越ほか1991］。

平均粒径と淘汰度の関係（第10図）では、遺跡地内の各試料は多少のばらつきはあるがほぼ同様な領域を示している。採取層準ごとにみると、例えば砂丘漸移層の試料（図中のA、E、G）はほぼ同様な粒度特性であることがわかるが、砂丘下層の試料はばらつきが大きくなる。遺跡地内試料について、全体としてはほぼ同様な粒度特性とみることができるが、個々の採取層準ごとに区分できるか否かは、慎重な扱いが必要である。また、新砂丘Ⅰ-2の試料（図中の1、2）は、遺跡地内の各試料の領域内に位置する。新砂丘Ⅰ-3の試料（図中の3、4）や海成層中の試料（図中の7、8）は、これらと異なる領域に位置することから、遺跡地内の各試料と新砂丘Ⅰ-2の試料は同一の運搬・堆積過程による砂（堆積物）であることがわかる。なお、遺跡地内の各試料と新砂丘Ⅰ-2の試料の平均粒径は、新砂丘Ⅰ-2の試料の方がやや粗粒であることを示している。このことは、砂丘地（砂丘地本体）の試料の方が風による分級を受け細粒部分が少ないことを反映したものであると思われる。

歪み度と淘汰度の関係（第11図）では、遺跡地内の各試料と新砂丘Ⅰ-2の試料は、ほぼ同様な領域を示している。また、海成層中の試料（図中の7、8）は、これらと異なる領域に位置することがわかる。

平均粒径と歪みの関係（第12図）では、ややばらつきが大きいが、遺跡地内の各試料と新砂丘Ⅰ-2の試料は、ほぼ同様な領域を示している。これに対して、新砂丘Ⅰ-3の試料（図中の3、4）や海成層中の試料（図中の7、8）は、これらと異なる領域に位置する。

以上の結果から、遺跡地内の各試料と新砂丘Ⅰ-2の試料は、同一の運搬・堆積過程による堆積物であると考えられる。このことは、遺跡内における砂質堆積物（砂）は、近傍の新砂丘Ⅰ-2からもたらされたものであることが明らかとなった。また、新砂丘Ⅰ-3の試料は、新砂丘Ⅰ-2や新砂丘Ⅰ-4の試料と比較して平均粒径が大きい特徴をもつ可能性が高い。

（4）液状化跡

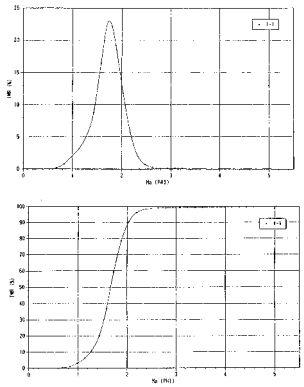
遺跡地内では、複数地点において泥炭層の層準に液状化跡が認められる。液状化は、泥炭層の粘性が高いために、一般的な砂脈や墳砂といった形態を示さず形態的には荷重変形のような流動形態を示している（第13図）。第13図（図版5）の地点では認められないが、液状化に伴う流動変形は、泥炭層と削平時の盛土層の間に分布する黄橙色砂層を巻き込んでいる。この液状化は、この黄橙色砂層の堆積年代以降、削平前の現象と考えられる。泥炭層の年代値は、上記で述べたように中世（鎌倉～室町時代）であることから、液状化の時期は少なくとも中世以降と推定される。

参考文献

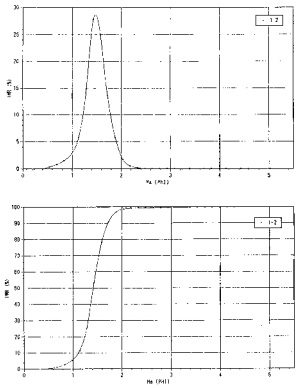
伊勢屋ふじこ　1985　「沈降式粒度分析の手引き」『筑波大学水理実験センター報告』9　115-128

田村嘉之・中山勝博　1993　「沈降法粒度分析装置の使用法と分析結果の特徴」『島根大学地質学研究報告』12　17-22

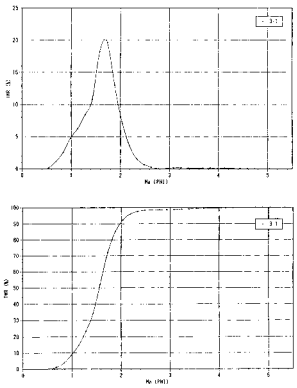
村越直美・伊藤慎・増田富士雄　1991　「古東京湾域の砂の粒度特性」『堆積学研究会報』34　143-147



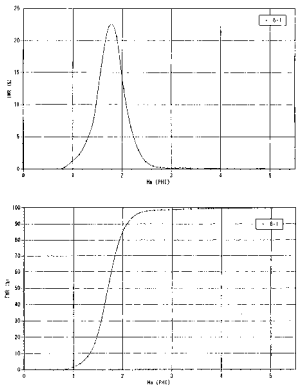
試料番号No.1-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線



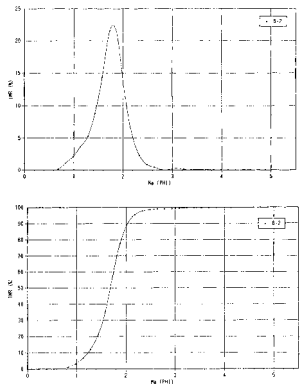
試料番号No.1-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線



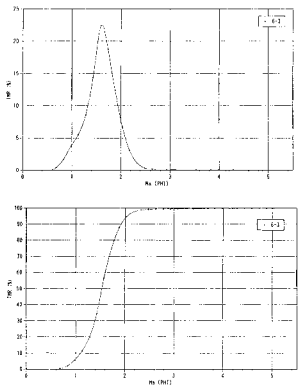
試料番号No.3-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線



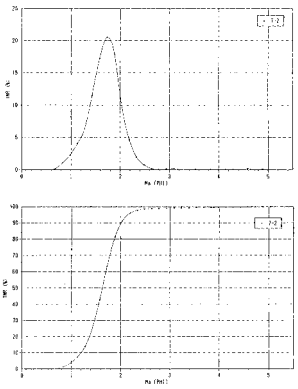
試料番号No.6-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線



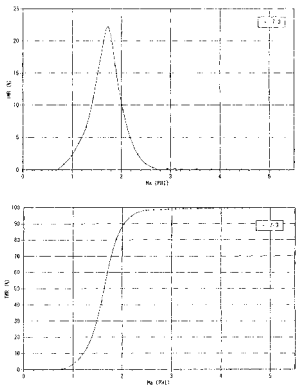
試料番号No.6-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線



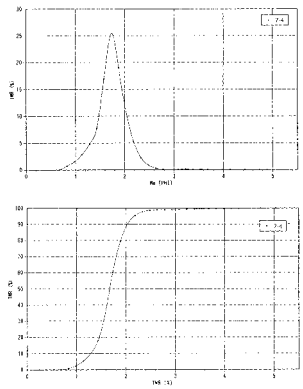
試料番号No.6-3の粒度分布曲線と頻度分布曲線



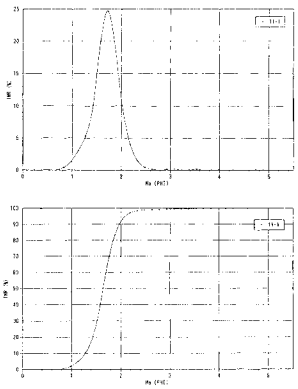
試料番号No.7-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線



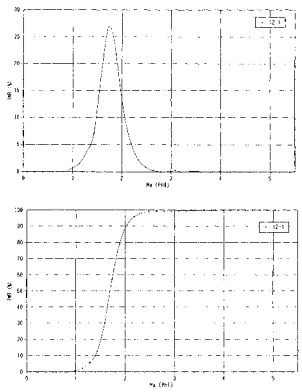
試料番号No.7-3の粒度分布曲線と頻度分布曲線



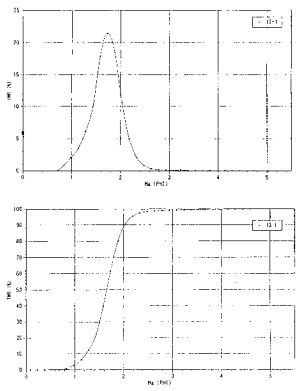
試料番号No.7-4の粒度分布曲線と頻度分布曲線



試料番号No.11-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線

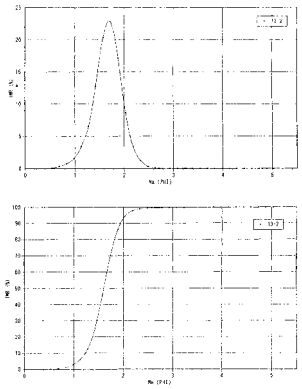


試料番号No.12-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線

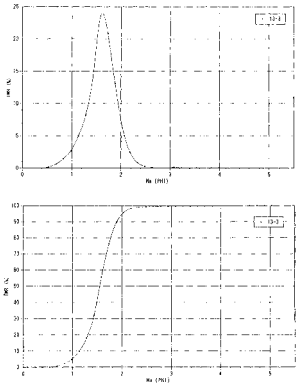


試料番号No.13-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線

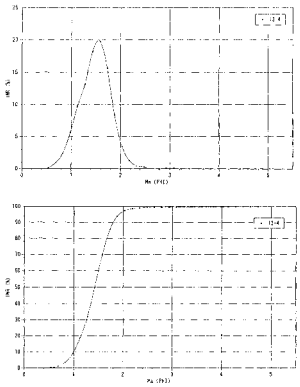
第14図　砂質試料の粒度分布曲線と頻度分布曲線（1）



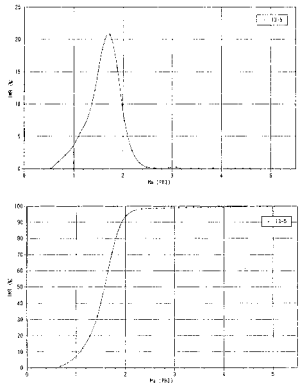
試料番号No.13-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線



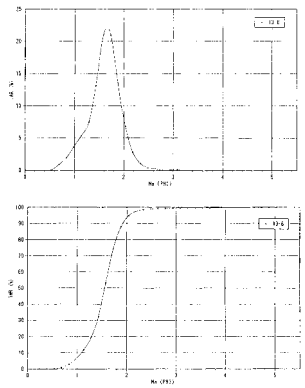
試料番号No.13-3の粒度分布曲線と頻度分布曲線



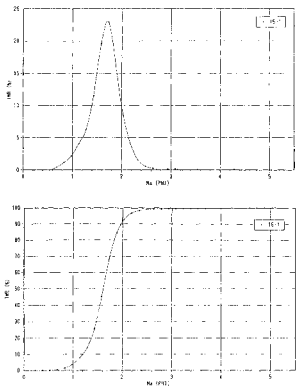
試料番号No.13-4の粒度分布曲線と頻度分布曲線



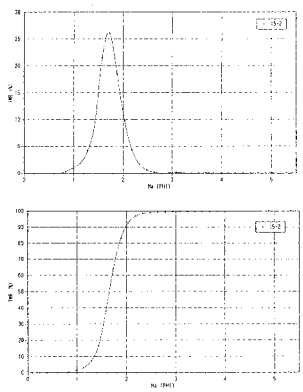
試料番号No.13-5の粒度分布曲線と頻度分布曲線



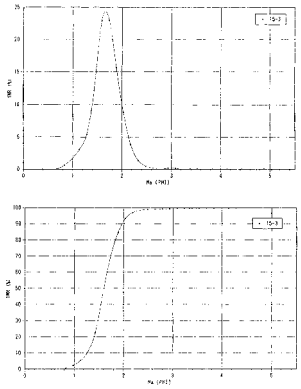
試料番号No.13-6の粒度分布曲線と頻度分布曲線



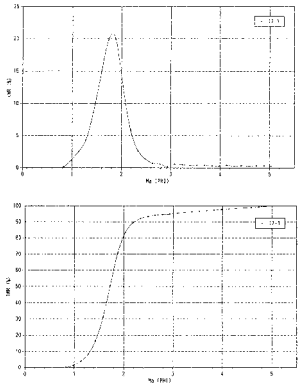
試料番号No.15-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線



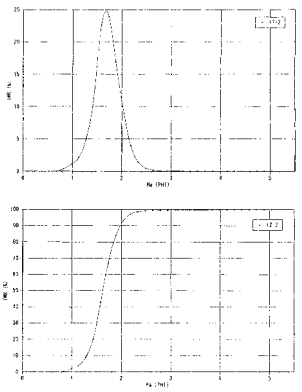
試料番号No.15-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線



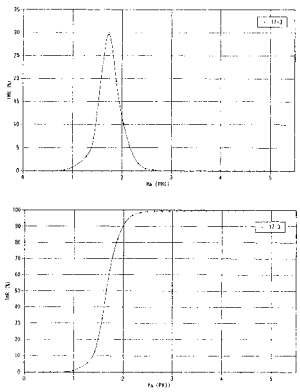
試料番号No.15-3の粒度分布曲線と頻度分布曲線



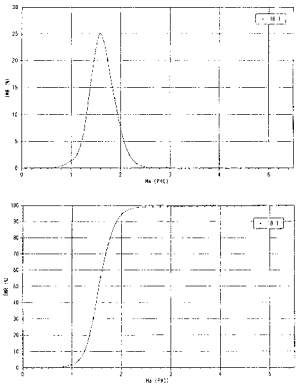
試料番号No.17-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線



試料番号No.17-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線

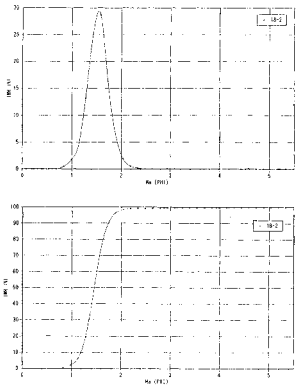


試料番号No.17-3の粒度分布曲線と頻度分布曲線

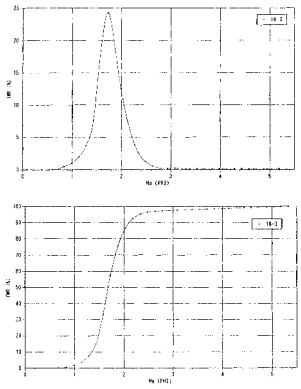


試料番号No.18-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線

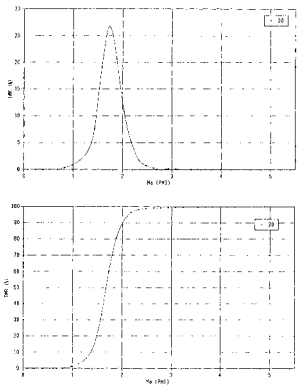
第15図　砂質試料の粒度分布曲線と頻度分布曲線（2）



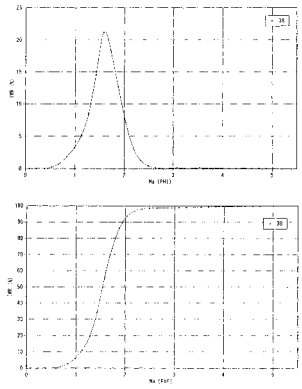
試料番号No.18-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線



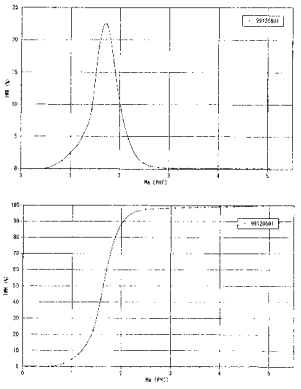
試料番号No.18-3の粒度分布曲線と頻度分布曲線



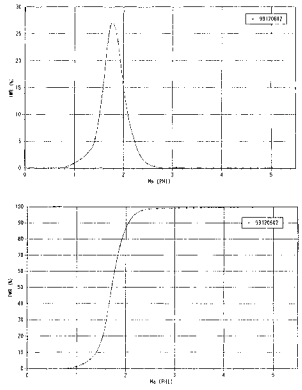
試料番号No.20-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線



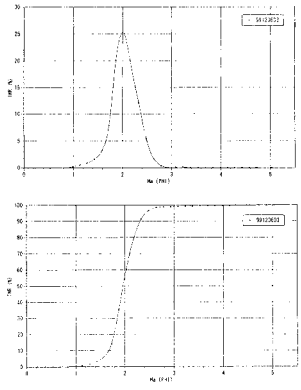
試料番号No.38の粒度分布曲線と頻度分布曲線



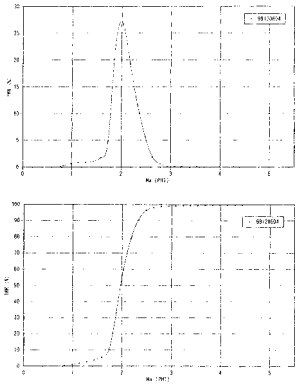
試料番号No.99120601の粒度分布曲線と頻度分布曲線



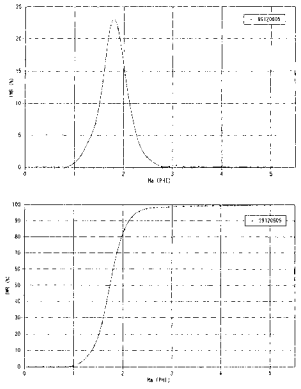
試料番号No.99120602の粒度分布曲線と頻度分布曲線



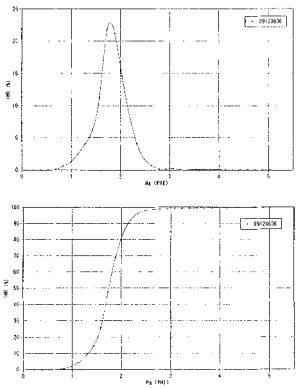
試料番号No.99120603の粒度分布曲線と頻度分布曲線



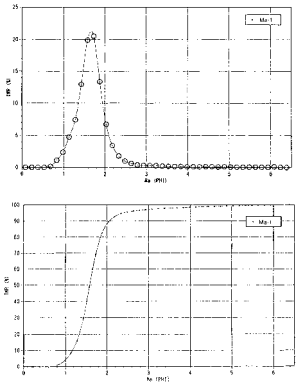
試料番号No.99120604の粒度分布曲線と頻度分布曲線



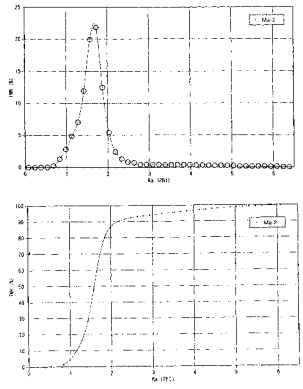
試料番号No.99120605の粒度分布曲線と頻度分布曲線



試料番号No.99120606の粒度分布曲線と頻度分布曲線



試料番号No.Ma-1の粒度分布曲線と頻度分布曲線



試料番号No.Ma-2の粒度分布曲線と頻度分布曲線

第16図　砂質試料の粒度分布曲線と頻度分布曲線（3）

B　馬見坂遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

馬見坂遺跡からは、平安時代の木簡、斎串、串、曲物底板などの木製品が出土している。このうち、串は2箇所に焦げ目があり、発火用具の火鑽臼の可能性も考えられている。

今回の分析調査では、これらの木製品について樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

(1) 試　　料

同定試料は、出土した木製品４点（試料番号１～４）である。

(2) 方　　法

試料のうち、試料番号１と２については、当初実体顕微鏡での観察を試みたが、針葉樹であることや、表面の状況などから、樹種の同定は不可能であった。そのため、全ての製品から3mm角程度の小片を目立たないように採取した。

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結　　果

樹種同定結果を第５表に示す。試料は、全て針葉樹のスギに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

番号	地区・遺構など	用途など	樹種
1	II 区（23H）1・2aトレンチ	木簡	スギ
2	II 区（23H）2aトレンチ	斎串	スギ
3	II 区（23H）2aトレンチ	串(焦げ目有)	スギ
4	II 区（23H）1aトレンチ	曲物底板	スギ

第５表　樹種同定結果

スギ（Cryptomeria japonica（L.f.）D.Don）

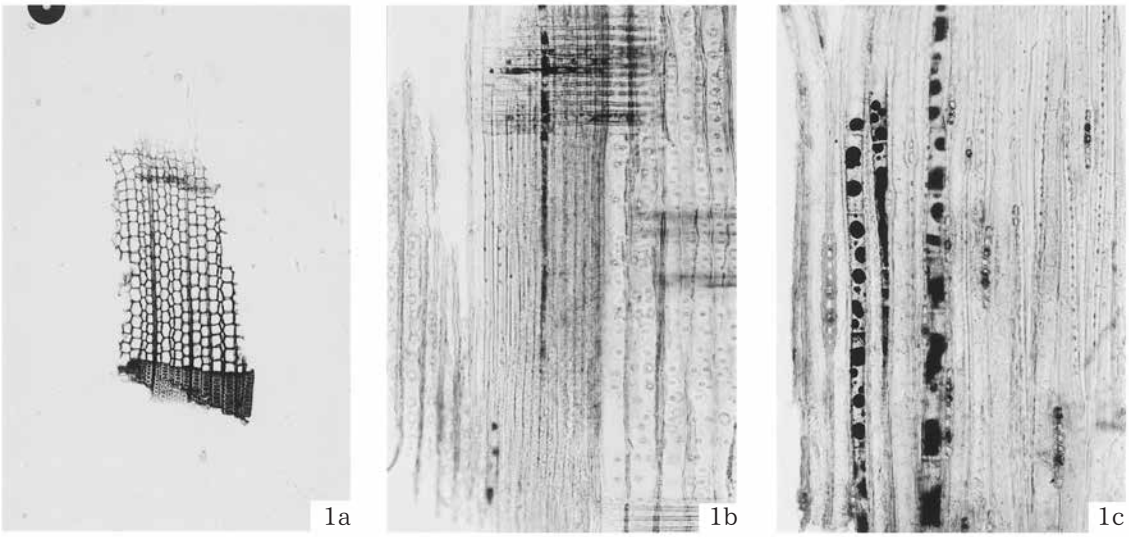
仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹種細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

(4) 考　　察

樹種同定を行なった木製品は、木簡、斎串、串、曲物底板である。このうち、木簡と曲物底板は板目板で、斎串と串は柾目板であった。これらの樹種は、全てスギに同定されたが、針葉樹財が利用されている点では、これまで各地で行われてきた同様の製品の樹種同定結果［島地・伊東1988］と一致している。

日本海沿岸地域では、これまで行われてきた調査でもスギ材の出土例が多く知られており［山田1993］、スギ材の入手が容易な環境であったことが推定される。今回の結果も、比較的入手が容易なスギ材を利用した結果と考えられる。

木簡は、表面に字を書くことから、年輪が出にくい板目板を利用したと考えられる。一方、曲物の底板では、水漏れしにくい等の材質を考慮した木取りと考えられる。一方、斎串や串では、木簡や曲物底板と



1．スギ（試料番号3）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第17図　木材

は異なった木取りで加工されているが、これが意図をもって行われた木取りであるかは不明である。このうち、串については、焦げ目が２箇所に見られ、その状況から火鑽臼の可能性も考えられている。火鑽臼の材質では、スギやヒノキが多く見られ［島地・伊東1988］、今回の試料が火鑽臼としても矛盾しない。火鑽臼には熱伝導率の低いもの、すなわち保温性の高い材質を有していることが重要である。木材では、広葉樹よりも針葉樹が優れており、とくにスギやヒノキが最も保温性が高い［小口1991］。スギやヒノキを多く利用している結果は、材質面からみても調和的といえる。

本地域では、今回のような木製品について樹種同定を行なった例が少なく、今後さらに多くの事例を蓄積してより詳細な用材を明らかにしたい。

引用文献

小口正七　　1991　『火をつくる　―発火具の変遷―』裳華房　182p.
島地　謙・伊東隆夫編　1988　『日本の遺跡出土木製品総覧』　雄山閣　296p.
山田昌久　　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第１号　植生史研究会　242p.

8　ま　と　め

A　遺跡の研究史概略

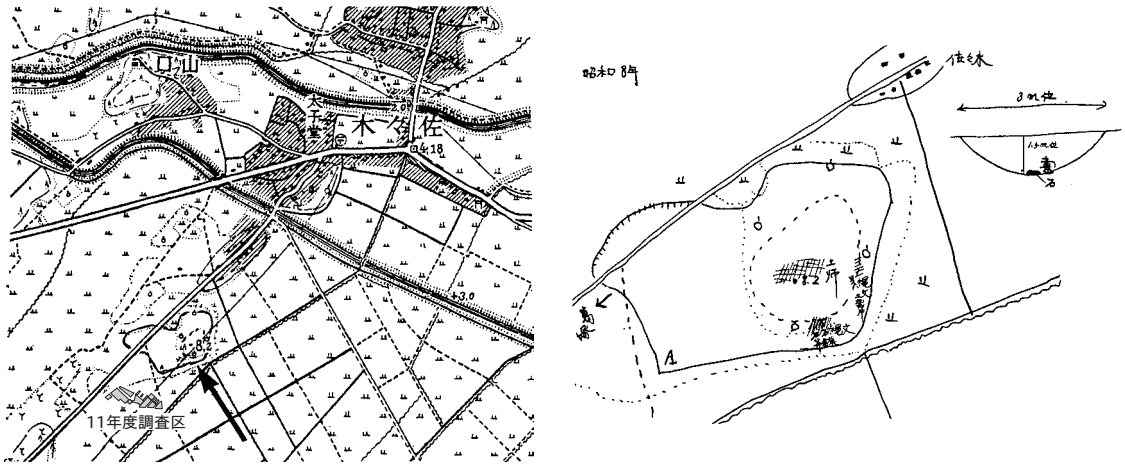
馬見坂遺跡では大正初年の県道改修工事や同10年の耕地整理の際に土器等が出土し、遺跡の存在は予想されていた。1933年、阿賀野川以北の遺跡踏査を進めていた畠山佑二氏によって遺跡は発見され、「蒲原平野の土器・石器について」［畠山1934］中の遺跡一覧表に「北蒲原郡佐々木村馬見坂」で縄文土器・石鏃・土師器・須恵器等が採集されたことが示された。その後1941年に着工された白新線工事によって、竪穴住居6基が発見されるとともに、石器や完形の土師器が100個以上出土した。工事で遺跡は削平され、遺跡の立地する砂丘砂も盛土用に搬出された。このときの様子は畠山佑二氏・田中正治氏の著書に記されている［畠山1979・田中1961］。

当遺跡の名称は「厩坂（うまざか）」［田中1961］、「厩坂（うまんざか）」［新潟県教育委員会1980］などと呼称されることもあったが、現在は畠山氏が1933年に用いた「馬見坂（うまみざか）」が新潟県遺跡台帳の登録名称となっている。

遺跡では畠山氏・田中氏らによって縄文晩期土器・石鏃・磨製石斧、古墳時代土師器・土製品類、奈良～平安時代の土器、中世土器が採集された。畠山氏所蔵品は1987年に豊栄市に寄贈され、『豊栄市史』［関1988］で紹介されている。このうち古墳時代の遺物は関雅之氏によって7世紀第2四半期ころとの位置付けがなされている。［関2001］。

B　遺跡の立地

遺跡の中心は竪穴住居等が検出された場所にあったと考えられ、かつては小山状の砂丘地で通称「ウマザカ」と呼ばれていた［田中前掲］。鉄道敷設前の1933～1941年当時の地形は、1911年測図・1931年修正測図の地図を元に関雅之氏が復元している［関2001］。遺跡の立地する砂丘部は東西約300m、南北約150mの範囲の中で、標高8mの小山状をした高い部分（約60×60m）が南東側にあり、ここが工事による削平を受けた場所、とされた（第18図）。今回発掘調査を行った地点は前述の竪穴住居等が検出された地点から南西へ200mほど離れている。砂丘本体からわずかに南へ外れた砂丘間低地に立地し、遺跡の西縁とでもいうべき場所にあたる。畠山氏が書いた「馬見坂遺跡の往時の現況図」（第18図）をみると縄文土器や石器は砂丘の縁から出土しているが、今回調査区でも水際のような場所に縄文時代の遺物



第18図　馬見坂遺跡の旧地形　　［関2001］を転載・加筆
（左図：地理調査所「新發田」1:25,000原図 昭和23年発行）

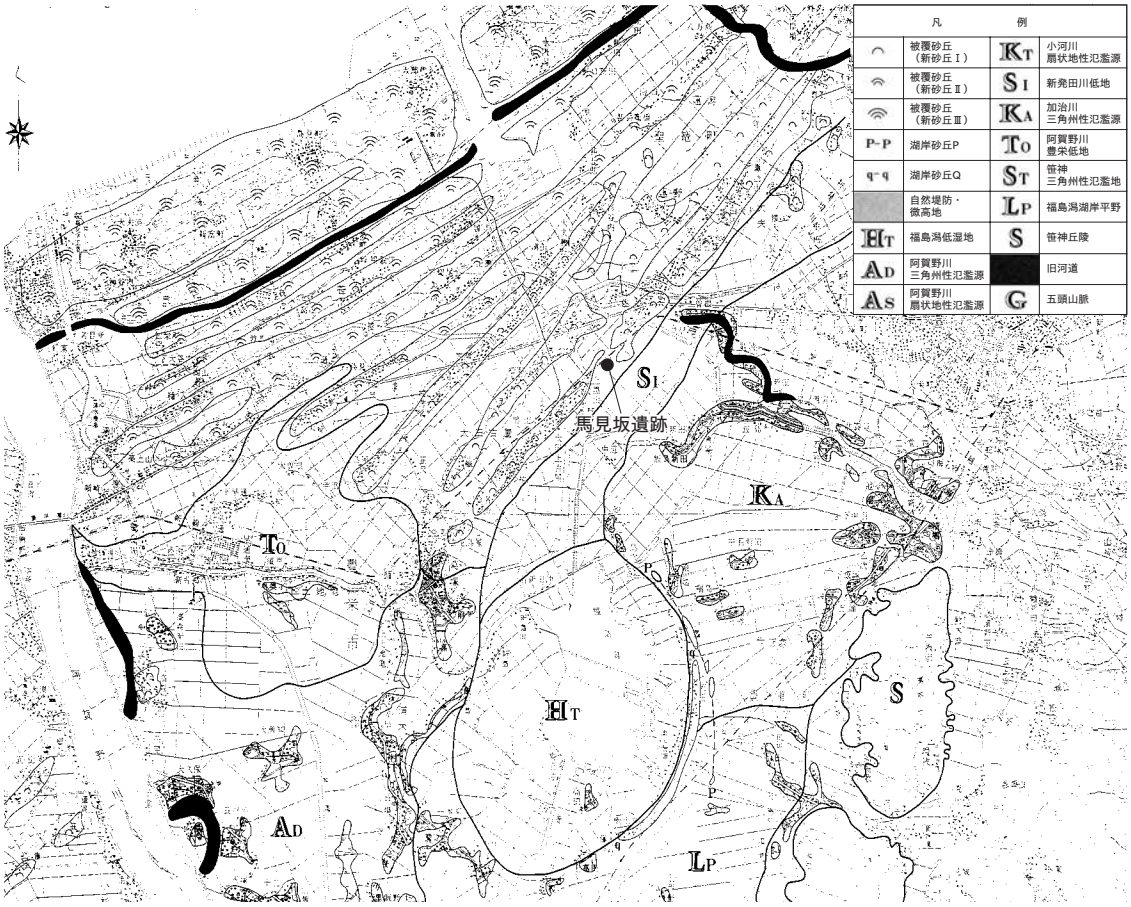
が出土しており、出土状況は共通する。

C　地形の変遷

調査中の排水装置としてウェルポイント（井戸）を掘削したが、そこから上がってくる発掘面より4m下の砂は角張った川砂であった。このことから当調査範囲には砂丘本体は分布しないと考えられた。また、「砂丘」「砂丘漸移層」の粒度分析により、今回調査区に堆積する砂は新砂丘Ⅰ-2に由来することが明らかとなった。よって、当調査区は砂丘間低地に砂丘砂が流入して形成された土地ということが確認された。これまで新砂丘Ⅰ-2では新潟市上黒山遺跡で縄文時代前期後半の土器が採集されており、砂丘列の形成時期も概ねそれと同じくらいと考えられてきた。今回出土した縄文土器のもっとも古いものは上黒山遺跡出土土器とほぼ同じ時期なので、もし、新砂丘Ⅰ-2から砂とともに流入したものだとしても、新砂丘Ⅰ-2形成時期のこれまでの見解を覆すようなものではない。

調査では縄文時代前期末葉～晩期、弥生時代後期～古墳時代、古代、近世以降の遺物が出土した。出土層位は縄文土器が黒色砂・Ⅲ層～砂丘漸移層、古墳時代～古代が③層である。縄文土器の時期差は出土層位に明確に反映されていなかったので、再堆積の可能性もある。

調査区の地形変遷は以下のように推定される。①新砂丘Ⅰ-2形成後、砂丘沿いに小河川あるいは湛水域が形成される（砂丘下層）。②縄文時代前期末葉以降晩期まで砂丘から砂が徐々に流れ込む。砂丘から離れた南西側は湿地帯（黒色砂層）であるが、砂丘に近接する範囲は樹木なども生えるやや安定した土地



第19図　福島潟周辺の地形分布図　［荒木1982］を改変
（国土地理院発行「新潟」「新発田」1:50,000原図）

（砂丘漸移～Ⅲ層）となる。中期以降の土器の遺存率が高いので、中期以降地盤が安定してきたと推定される。

③古代までに洪水などにより湿地帯となる（③層）。④古代以降中世以前に土石流が押し寄せ、調査地内で西へ向きを変え、福島潟方面へ流れていく。遺跡南側に旧福島潟へ連続する新発田川低地が分布することから［荒木1982］（第19図）、流路はこの低地沿いに福島潟へ流入した可能性が高い。⑤中世以降再び湿地帯となり、近代に至る。⑥近代以降客土され、畑などとして利用される。なお、縄文時代前期以前にウェルポイントの砂を供給した河川が、砂丘間低地を抜けて海へ流入していた可能性もある。

上記のように不安定な土地だったため、今回調査区では住居のような定住に関わる遺構は検出されなかった。石鏃が比較的多く出土したので、縄文時代には水辺の狩猟の場であったのかもしれない。

D　縄文土器について

縄文時代前期末葉～晩期、弥生時代後期～古墳時代、古代、近世以降の遺物が出土した。それぞれ出土量は少ないが、縄文時代前期以降、ほぼ途切れることなく存続していることが当遺跡の特徴である。少量ながら様々な時代・時期の遺物が出土するという傾向は砂丘上に形成された遺跡に見られる傾向であり［加藤2001d］、当遺跡もその１例といえる。

縄文時代前期の土器は前期末葉の所産にも関わらず、胎土に繊維を含むものが見られた。胎土に繊維を含む土器は前期前葉の所産とするのが通例であったが、馬見坂遺跡の所在する新発田市周辺では前期後葉の諸磯ｃ式併行期の土器にも見られるということで[1]、当地域の土器の特徴を示している。また、県内ではほとんど出土例のない近畿地方前期末葉の大歳山式土器が出土したことは注目される。

中期は北陸系の土器が主体を占める。後期は三十稲場式の深鉢、晩期は鳥屋１・２式の土器が出土した。風倒木224出土の甕（12）は鳥屋２式に位置付けられ[2]、肩の張り方がなだらかで結節縄文（綾絡文）が多段に施文されているのが特徴である。鳥屋２式土器については石川日出志氏によって、以下の指摘がなされている。馬見坂遺跡の北西約5kmのところに所在する同形式の標識遺跡である鳥屋遺跡の土器は、肩が張り、綾絡文も多用しない。下越地方においてはこのような特徴を示すのが通例で、綾絡文が旋文される土器は下越地方ではまれであり、むしろ信濃川流域の遺跡に顕著である。同様の土器は新発田市青田遺跡でも出土しており、鳥屋遺跡より北にある青田遺跡の方が信濃川流域と結びつきが強いと考えたほうがよい［石川2002］。同様のことは馬見坂遺跡においても指摘でき、当時の物流の一端を示すものといえよう。

1）田中耕作氏のご教示による。
2）石川日出志氏のご教示による。

第Ⅳ章　正尺Ａ遺跡

1　概　　要

発掘調査は平成12年度・13年度の２か年にわたり行われた。平成12年度調査部分については既に発掘調査報告書［尾崎・相羽・栗林2001］が刊行されているので、調査にいたる経緯などはそちらを参照願いたい。

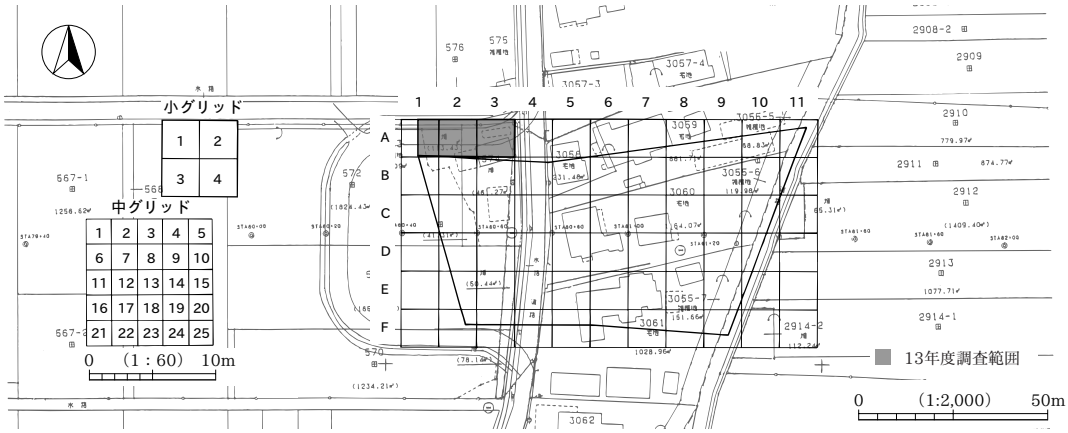
12年度は約3,800㎡について調査を行い、古墳時代の竪穴建物１軒、土坑１基、古代の土坑・ピット各１基、近世の廃棄土坑２基が検出された。遺物は古墳時代前期の土師器を中心に、古代・近世の遺物も出土した。とりわけ古墳時代の遺構・遺物の分布状況や土層の様子から13年度調査分を含む北側への遺構の広がりが予測されていた。平成13年度の調査は、前年度に仮設道路があったために調査できなかった260㎡を対象として実施した。

2　グリッドの設定（第20図）

国家座標（旧座標）の軸に従いグリッドを設定した。グリッドは大・中・小の３種があり、大グリッドは10m四方を単位とし、中グリッドは大グリッドを2m四方に25等分したもの、小グリッドは中グリッドを1m四方に４等分したものである。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として、東西方向は西から算用数字を付し、南北方向は北からアルファベットを付して「5D」のように組み合わせて表示した。中・小グリッドは北西隅の杭を基点に１～25の算用数字を用い、「5F23－1」のように大グリッド表示のあとにつけて呼称した。

日本平面直角座標第Ⅷ系

杭	旧日本測地系 （第Ⅷ系Ｘ軸との磁北偏差　西偏約　7°　50′）	世界測地系（JGD2000）　（計算値） （第Ⅷ系Ｘ軸との磁北偏差　西偏約　7°　50′）
STA. 80+80 （5Dグリッド杭）	X=214,168.591、Y=63,241.116	X=214,517.837、Y=62,959.115
	緯度37°　55′　40″、経度139°　13′　10″	緯度37°　55′　51″、経度139°　12′　58″
	Ｘ軸との真北偏差－0°　26′　32″	Ｘ軸との真北偏差－0°　26′　25″



第20図　正尺Ａ遺跡　グリッド配置図

3 基本層序（第21図）

遺跡は旧河道左岸の南北に走行する自然堤防上に立地する（第24図）。東側には河道が走り、西側には湿地（旧島見前潟）が広がっていたと思われる。調査前の現況は宅地および荒蕪地で標高0.9～2.1mを測る。調査区東側8～10列で流路跡と思われる地山層の落ち込みを確認した。西側では湿地との境界が確認されておらず、調査区外まで自然堤防が延びると思われる。

調査区全体に道路造成のための盛土がなされていたが、基本層序は平成12年度に準じ、以下のように設定した。

Ⅰ層：旧表土。

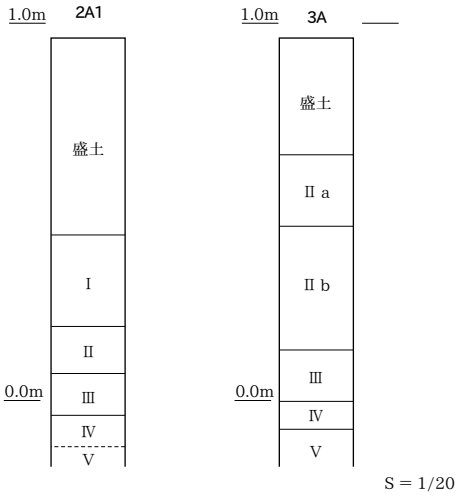
Ⅱ層：灰色シルト。平安～古墳時代の遺物包含層。

Ⅲ層：オリーブ灰色シルト。古墳時代の遺物包含層。

Ⅳ層：灰色シルト。Ⅴ層との漸移層。

Ⅴ層：青灰色砂。地山。遺構確認面。

各層は砂の粒度の違いはあるが、いずれも砂質シルトである。Ⅲ層からは前年度も確認された火山灰が土器に伴って検出されており、当該期の鍵層として認知することができた。



第21図　正尺Ａ遺跡　基本層序

4 遺　　構

A 概　　要（図版13・89）

遺構確認面の状態が悪く遺構検出が困難な状況であったが、古墳時代前期の竪穴住居1軒、土坑1基を検出した。前年度調査範囲とあわせると古墳時代前期の竪穴住居2軒（SI1・2）、土坑2基（SK2・4）、古代の土坑1基（SK3）・ピット1基（Pit4）、近世の廃棄土坑2基（SK5・6）となる。2軒の竪穴住居は主軸をほぼ南北方向にとり、東西に35m離れて存在する。

B 各　　説（図版14・89・90）

SI2　5×4.5mの隅円長方形を呈する。中央付近に炭化物の集積する土坑がある。炉跡の可能性もある。柱穴を検出することはできなかった。

SK4　長辺約1.3mの楕円形で、竪穴住居を掘り込んで構築されている。底部付近からは赤色に塗彩された二重口縁壺や器台が出土しており、墓もしくは祭祀等に関連する遺構であると考えられる。

5 遺　　物

A 概　　要

遺物は遺構・包含層から出土し、浅箱換算で15箱程度である。全て古墳時代前期の土器である。出土量が少ないので器種分類のみ行い細分はしない。観察表や調整の記載方法は第Ⅴ章正尺Ｃ遺跡に準じる。

B　出土土器各説

（1）遺構出土土器各説（図版15・91）

SK4（1）　赤彩の二重口縁壺１点が潰れた状態で出土した。口縁外面有段部に篦状工具による刻みが連続する。

SI2（2～9）　正確にはSI2の範囲にかかる3A13～15・18～20周辺の包含層出土遺物である。遺構覆土と包含層の区別がつかないような検出状況だったということで、周辺包含層出土遺物はSI2出土の可能性が高いと考えられ、ここに掲載した。甕・鉢・器台・結合器台がある。甕には大型（8）、中型（7）、小型（9）がある。結合器台には受部が明瞭な２と、受部が突出しない５がある。２の受部と口縁部の接合面には篦状工具による刻みが付けられている。

（3）包含層出土土器各説（図版５～17・91～93）

甕・壺・鉢・高杯・器台・結合器台がある。包含層の出土土器重量分布図を第22図に示す。やはり竪穴住居等の遺構周辺で出土量が多い。９か所で一括土器が出土したが、これらは2Aグリッドから6Fグリッドにかけての北西-南東方向のライン上に点在する。

甕（10～15）　「く」・「コ」字状の口縁をもつものが主体を占めるが、口縁部と体部の境が不明瞭なものも存在する（10・12）。

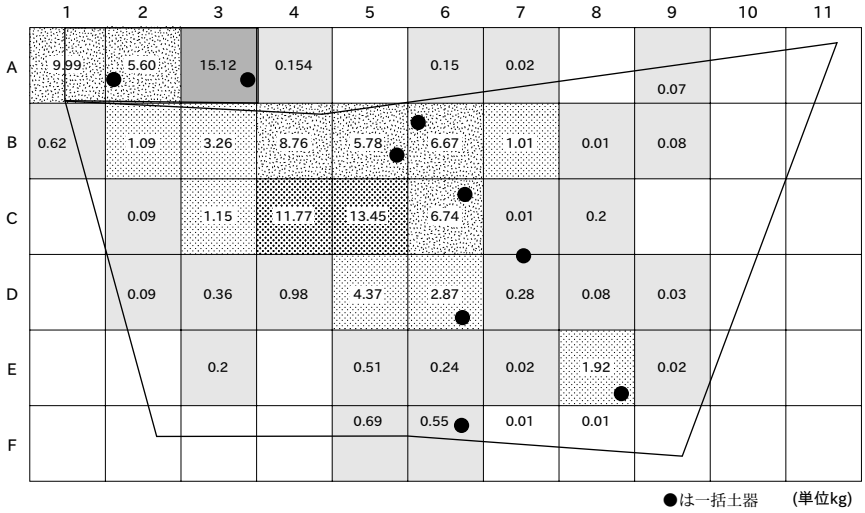
壺（16～24・29・33）　大・中型品（16～19・29）、小型品（20～24・33）がある。16は東海系の二重口縁壺で、口縁部に棒状の貼り付け文をもつ。18は細口で有段口縁を呈す。19～21は直立気味の口縁部をもつが、21は端部が引き出され、先端が摘み上げられる。29は赤彩の精製品である。

鉢（25～28・34）　25は有台で片口をもつ。26は有孔鉢である。底部の孔は中心から大きく外れた場所に開けられている。27は外面が平滑に整えられている。34は脚部を有し、赤彩される。

高杯（30・36・37）　30の口縁は緩やかに外反する。

器台（32・35）　32は口縁が比較的急に立ち上がる。

結合器台（31）　31の口縁部と受部の接合面には篦状工具による刻み痕が連続している。



第22図　正尺Ａ遺跡　大グリッド別出土土器重量分布

［尾崎・相羽・栗林2001］を転載・加筆

6 ま と め

A 遺　　物

正尺Ａ遺跡からは古墳時代前期の土師器が出土した。出土土師器の多くは包含層から出土したため一括性に欠ける面もあるが、『シンポジウム　新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』の「土器の分類と変遷」［滝沢 2005b］で示された編年の６・７期を主体とする土器群である。組成は甕・壺を主体に鉢・高杯・器台・結合器台が伴う。

６～７期の特徴を示すものは、SK4 出土の赤彩二重口縁壺（1）、口縁部に浮線文をもつ東海系の二重口縁壺（16）、鍔付結合器台（2・31）、畿内系屈折脚の高杯（30）。結合器台（5）の受部は平らな底面から口縁部が直立気味に伸び、上半部で外に開く。同様の結合器台は加茂市丸潟遺跡４号土坑に出土例があるが、こちらは底面が漏斗状を呈するやや新しい要素を含んでおり、８～９期に位置付けられている［伊藤・平岡ほか 2000］。これと比較すると平らな底面を持つ５は６～７期に位置付けられる。

７期より新しい様相を示すものに二重口縁壺の名残ともいうべき口縁形態を示す 18、口縁端部を丸く収める９などがある。

B 遺　　構

正尺Ａ遺跡の２か年にわたる調査により、古墳時代の竪穴住居２軒、土坑２基、古代の土坑・ピット各１基、近世の廃棄土坑２基が検出された。遺跡は旧新井郷川右岸の自然堤防上の北西隅に営まれており、調査の結果遺跡の中心部は北西側にあると考えられることから、調査範囲外へ大きく広がっている可能性は低い。

旧新井郷川の自然堤防上には正尺Ｃ遺跡があり、正尺Ａ遺跡と同じ古墳時代前期の集落が営まれていた（第Ⅴ章 7B 参照）。土器の編年的位置からすると、両遺跡は新潟シンポ編年６期において並存しつつも、正尺Ａ遺跡のほうが若干後まで存続していた可能性が高い。集落開発時期は正尺Ｃ遺跡のほうが早いと思われる。

正尺Ａ遺跡がほぼ単一時期の小集落であるのに対して、正尺Ｃ遺跡は存続期間がやや長く、建物数も多くみられる。また、正尺Ａ遺跡では正尺Ｃ遺跡にはみられなかった墓もしくは祭祀にかかわると見られる土坑 SK4 が検出されており、遺跡の性格に若干の違いがあったと考えられる。

第Ⅴ章　正尺Ｃ遺跡

1　調査の方法と経過

A　一 次 調 査（第23図）

(1) 調 査 方 法

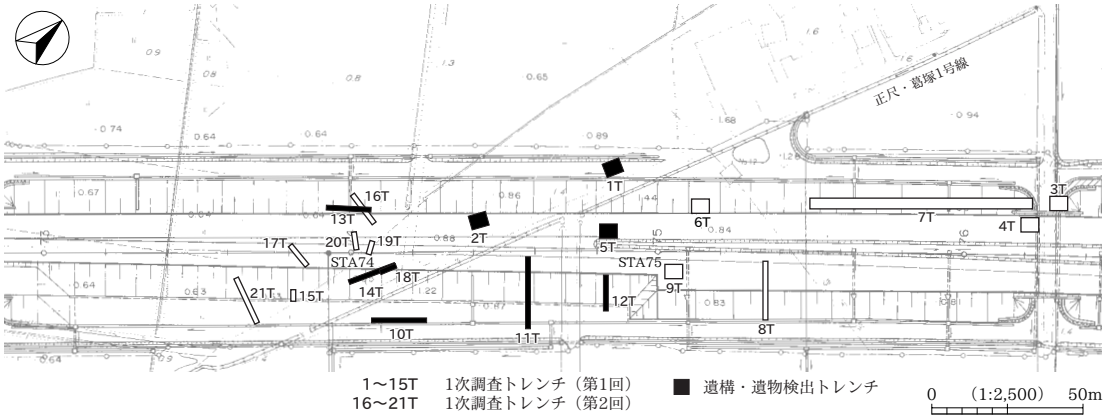
平成９年度は対象地5,500㎡の任意の地点に、15か所のトレンチを設定して行った。作業はトレンチをバックホーで徐々に掘り下げながら遺構・遺物の有無を確認し、記録するという方法で行った。トレンチの土層断面および遺構精査は作業員が行った。遺物の出土が確認されたため、当初の調査対象範囲を11,280㎡まで拡大して遺物包含層の確認を行った。実質調査面積は564㎡、確認率は５％である。

平成11年度は、矢板打設の必要性の有無、および掘削深度の検討資料を得ることを目的として、調査範囲西側の深掘りを実施した。調査方法は平成９年度と同様であるが、バックホーはロング・アームを使用した。調査対象面積3,000㎡に６か所のトレンチを設定した。実質調査面積は92㎡、確認率は3.1％である。

(2) 調 査 結 果

調査範囲の西側では、現水田面から深度50～70cmのところに、腐植の少ない青灰色粘土層が厚さ10～70cmにわたって堆積しており、この層に古墳時代前期の土器が含まれていた。遺物が含まれるのは厚さ20cm程度の範囲に限定されていたが、この部分を青灰色粘土層の中で明確に区別するのは困難であった。

調査範囲西側の11・12・13トレンチ（以下Trと略す）では、耕作土の下に流木などを含む洪水堆積層が存在しており、この層はおそらく1966・67年の羽越水害の堆積物と推定される。調査範囲東側では、厚さ20cmの耕作土の下に鉄・マンガンが沈着した粘質土が約30～60cmあり、その下に西側の包含層に対応する青灰色粘土が堆積していた。掘削深度下半分の層序は、全範囲を通して青灰色の腐植物土・砂質土・粘質土の互層になるところが多かった。



第23図　正尺Ｃ遺跡　一次調査範囲図

遺物や炭化物の集中する場所が遺構であると考えられ、2・10・11Trで確認された。

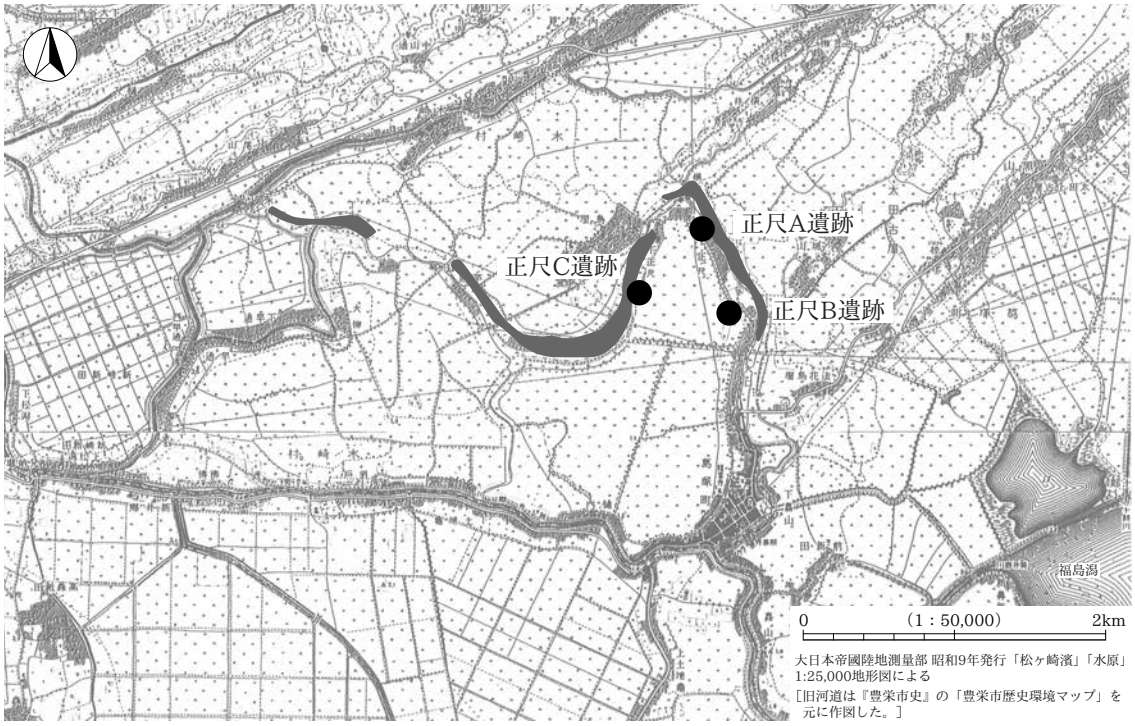
遺物はトレンチ21か所中、9か所で出土したが、とくに2Trに集中していた。ほとんどが古墳時代前期の土器で、高杯・器台・甕・蓋などの器種が見られた。土器片の総数は473点であった。

13・16・17・21Trでは深度140cm程度以下で水成堆積の粗粒砂層が多く存在しており、その南東側とは明瞭に区別され、この粗粒砂層の存在する部分が旧河道に相当すると考えられる。ここでは包含層に対応すると考えられる青灰色粘質土から遺物は出土しなかった。また、その下位の粗粒砂層は土砂の崩落で表土下約2mしか確認できなかったが、遺物は出土しなかった。なお、検出された旧河道は、正尺・鳥屋・芋黒・大柳・下早通・松潟の各集落沿いで古川とよばれる旧新井郷川跡［島1988］に相当すると考えられ、遺跡はこの古川の自然堤防上に立地すると推定された（第24図）。

調査の結果、本地点が遺跡であることが明らかとなった。本地点は前述の通り、新井郷川の旧河道の自然堤防上に立地するが、同じ自然堤防上にはやはり古墳時代前期の集落である正尺Ａ遺跡・正尺Ｂ遺跡が存在する。立地条件や時代に共通性の見られる２遺跡との関連を踏まえて、新たに「正尺Ｃ遺跡」と名称を付し、平成９年度の調査終了時に県遺跡台帳に登録した。

平成11年度の調査は、矢板打設の必要の有無、および掘削深度の検討資料を得ることを目的として、調査範囲西側を深掘りした。ここは旧河道であり、軟弱地盤の水田部分があったためバックホーの進入が不可能であった。そこで、水田部分に入らずに掘削可能なロング・アームのバックホー（0.7級）を用いて深掘りを行った。しかし、アームの重心を取るためにバケットは小型となり（0.4級）、作業効率は低下した。また、軟弱地盤であるためにトレンチの壁面が崩落してしまい、深く掘削することができなかった。

以上２回の調査結果をもとに、二次調査範囲を遺物・遺構が検出された11,000㎡に限定し、矢板は打設しないこととした。矢板不要の理由は、２回目の調査で下層の粗粒砂層から遺物が出土しなかったことによる。



第24図　旧河道と遺跡の位置

B　二次調査

(1) 平成11年度

a　調査方法

平成11年度は1～3区を調査対象地とした。土層観察のため、1区に5本、3区に4本のトレンチを任意の位置に設定して、観察・記録した。表土掘削は遺物包含層直上までバックホーで徐々に掘り下げた。

遺物の取上げは、包含層出土分は小グリッド単位、遺構出土分については遺構単位で行い、必要に応じて遺構毎に取上げ番号を付した。

遺構は検出順に番号を付し、種別は番号の直前に「SK」などの記号を冠した。

検出した遺構は半截して土層断面（セクション）の写真撮影と実測図作成を行ったが、覆土が単層の場合は省略したものもある。遺構平面図は簡易遣り方による実測図面と光波測距器を用いるサイトシステムで測量した図面とがある。縮尺は20分の1を基本に作成した。写真は6×7版モノクロネガフィルムと35mmカラーポジフィルムで撮影することを基本とし、必要に応じて6×7版カラーポジフィルムを用いた。

b　調査経過

9月20日に現場に入り、調査区の除草作業を行った。

9月28日からは旧河道の下に包含層があるかどうかを確かめるために3区に4本のトレンチを設定したが、遺構・遺物は検出されなかった。このトレンチの掘削中に壁面が崩落してしまい、沖積地の地盤の弱さと湧水の多さを改めて認識した。

10月4日からはバックホーで1区の表土除去を開始し、除去を終了したところからグリッド杭を打設して、遺物をグリッド単位で取上げた。10月12日からは作業員を投入し、1区の周囲に開渠を掘削した。それと並行しながら3区でも表土除去を開始し、1区と同様にグリッド杭を打設して、遺物をグリッド単位で取上げた。10月19日、排水効率を高めるために、1区の周囲の開渠を幅1m、深さ1.5mまで広げた。そして旧河道の開渠部分を集水桝にして、ポンプによる強制排水を行った。土質が粘性シルト質で軟弱なため、崩落を防ぐために壁面に土留め板を設置した。あわせて、発掘面の水はけを良くするために、大グリッドごとに深さ50cmの小溝を掘削して排水に努めた。

11月2日、1区の厚さ約20cmの包含層を人力で10cmずつ掘削した。2人1組で1小グリッドを担当した。水分を含むと粘性が高まる土質のため、ジョレンや移植ごてに土が付着してすぐに掘削できなくなるので、竹箆等を利用して掘削し、土塊中の遺物の有無を手探りで慎重に確かめながら掘り進めた。遺構の精査には鎌を用いた。また、発掘面がぬかるんでいたため、作業員の足跡がつきやすそうな所には足場板を設置して対処した。11月17日、遺構発掘を開始した。遺物・炭化物の集中したところを遺構と捉えて掘削したが、形態が不明確な場合はサブトレンチを設定して、断面で壁の立ち上がり等を確認した。

初冬の悪天候が続き、屋外での遺構精査や遺構実測が困難になってくる中で、12月からは発掘面を覆うようにビニールハウスを4棟建て、雨や雪の日も作業を継続した。1区の調査を終了し、2区・3区の表土除去を終了した段階で、12月22日、現地から撤収した。11年度の調査では、発掘対象面積3,600㎡のうち約1,780㎡を終了した。

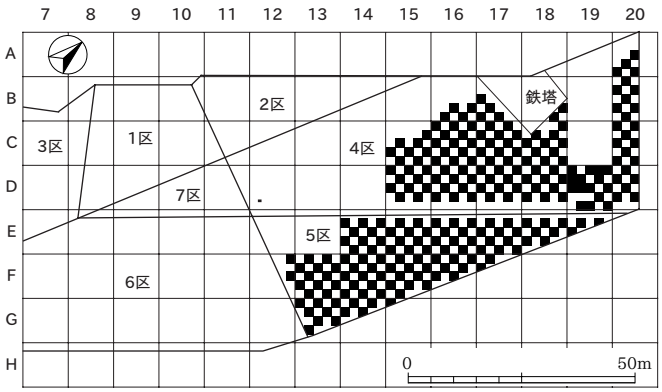
12年度には調査面積が拡張されることもあり、調査を早期に再開できるように、排水を改善するため

の暗渠工事を12年3月に行った。

（2）平成12年度

a　調 査 方 法

調査期間は、平成12年4月6日～10月30日である。平成11年度の調査では排水処理が悪く掘削作業に支障を来たしたため、12年度は調査区全体を囲む形で暗渠を敷設して排水の改善を図った。暗渠は田面からの深さ2.5m、幅1mで掘削し、5か所にポンプ桝を設け、排水ポンプを用いて24時間排水を行った。なお、地下水の汲み上げによる地盤沈下の発生が懸念されたため、鳥屋野地内の農業用井戸で地下水位を計測しながら排水を行うようにした。



第25図 正尺C遺跡　市松掘り調査範囲図

排土はベルトコンベアーで調査区南西隅に運搬した。暗渠上に主軸を設定し、そこから枝線を各調査区に配列した。ただし、農道の切り回しが行われるまでは、農道にかかるベルトコンベアーの通路部分を掘削・土留めして、上を鉄板で覆ってトンネル状にして対処した。

平成12年度は調査期間が夏場にもかかったため、発掘面の乾燥防止対策も講じた。具体的には、日々、散水後にシートで養生することで水分の蒸発を防いだり、遺構についてはフェルト様の生コンクリート養生マット（厚さ約5mm）で覆ったりする方法をとった。

包含層の掘削と遺物の取上げ・遺構精査と遺構の記録方法は平成11年度に準じる。

b　調 査 経 過

3月6日から調査区全体を囲む暗渠敷設工事に着手し、現場開始前には排水設備を整えた。

4月6日に調査員が現場に入り、作業員を投入して調査に着手した。作業は農道切り回し予定地にかかる2・3区を優先した。これと並行して調査区北側の表土除去を開始した。除去が終了したところからグリッド杭を打設していった。4月17日から作業員を80人体制に増員し、18日からは調査区北側の包含層掘削を行った。しかし、4月25日に調査範囲脇の仮設用水路の接続部が欠損し、調査区が水没したため、作業を数日間中止せざるを得なくなった。現場を復旧した5月8日から、作業員120人体制で調査を再開した。

調査区北側と東側では遺構が検出されず、遺物の出土も少なかった。そのため、4・5区では小グリッド単位でホソ等を使っての市松掘り（掘削深度30～50cm）の調査を行い、遺構・遺物の有無の確認を行った（第25図）。

5月29日、対象9,220㎡のうち560㎡の終了を確認し、道路公団と協議した上で引き渡した。

翌5月30日から、調査区中央の農道下を調査するために迂回道路の工事を開始し、6月9日に完了した。そして、6月13日から調査区中央部（3・4・7区）の表土掘削を開始し、22日に完了した。7月14日には新潟大学積雪地域災害研究センターの高濱信行教授・卜部厚志助教授が来跡し、調査区内のボーリング調査を行った。ボーリングは約3m深掘りしたトレンチからさらに2mの深さまで行った。このほか調査区内の地震痕跡について指摘を受けた。また、遺跡内の数か所からブロック状に検出された火山灰の噴出

時期や供給源についての分析を依頼した。

７月25日には豪雨のために調査区中央部北側の農道脇の法面が崩落したため、復旧作業を行った。８月９日からは、６・７区の調査を開始した。

９月14日に最後まで残しておいたメインベルトを崩し、包含層掘削を開始した。９月中旬には包含層掘削がほぼ終了し、それ以降、作業員を減らして遺構調査・図面作成作業を中心に進めていった。９月27日には新潟大学人文学部の橋本博文教授が来跡し、遺跡や遺物に関する指導を受けた。

概ね調査成果が出揃った10月４日、報道関係者に調査成果を公開し、10月８日に現地説明会を開催して豊栄市を中心に892名の参加者を得た。

10月24日には遺跡の航空写真を撮影した。撮影にはラジコンヘリコプターを用いた。10月27日には掘り残しの点検・平面図の点検等を行った。10月30日に道路公団と協議を行い、現場を引き渡した後、遺物の洗浄・註記、図面・写真・遺物の整理作業などの残務整理を行い、11月10日に現場から撤収した。

2　基本層序（第26図）

遺跡は沖積地の低湿地に立地する。調査前の現況は水田および荒地で、標高およそ0.8mの平坦な地形である。調査地点周辺の旧地形は、北へ向かってＵ字状に蛇行する旧河道の自然堤防上に相当すると推定される。微高地であったために低湿の潟地あるいは河川洪水の影響で埋没したものと考えられる。この自然堤防の微高地に古墳時代前期の生活面が存在している。

調査では、現表土から旧河道と考えられる粗粒砂層までをⅠ～Ⅳ層に大別し、土質により各層を細分した。以下に、各層について説明する。

Ⅰａ層：茶灰色シルト質土。現表土（耕作）。層厚約20cm。

Ⅰｂ層：褐灰色粘質土あるいはシルト質土。鉄・マンガンが沈着する。層厚30～60cm。

Ⅰb' 層：暗灰色シルト。洪水堆積物で、流木・腐植を含む。層厚５～25cm。

Ⅰb'' 層：暗オリーブ灰色粘質土。層厚10～20cm。

Ⅱ層上：青灰色粘質土あるいはシルト質土。細粒で堅くしまる。部分的に炭化物粒・火山灰を含む。遺物包含層。層厚20～30cm。

Ⅱ層下：青灰色シルト質土。細粒でややしまりが弱い。部分的に炭化物粒・火山灰を含む。遺物包含層。層厚10～70cm。

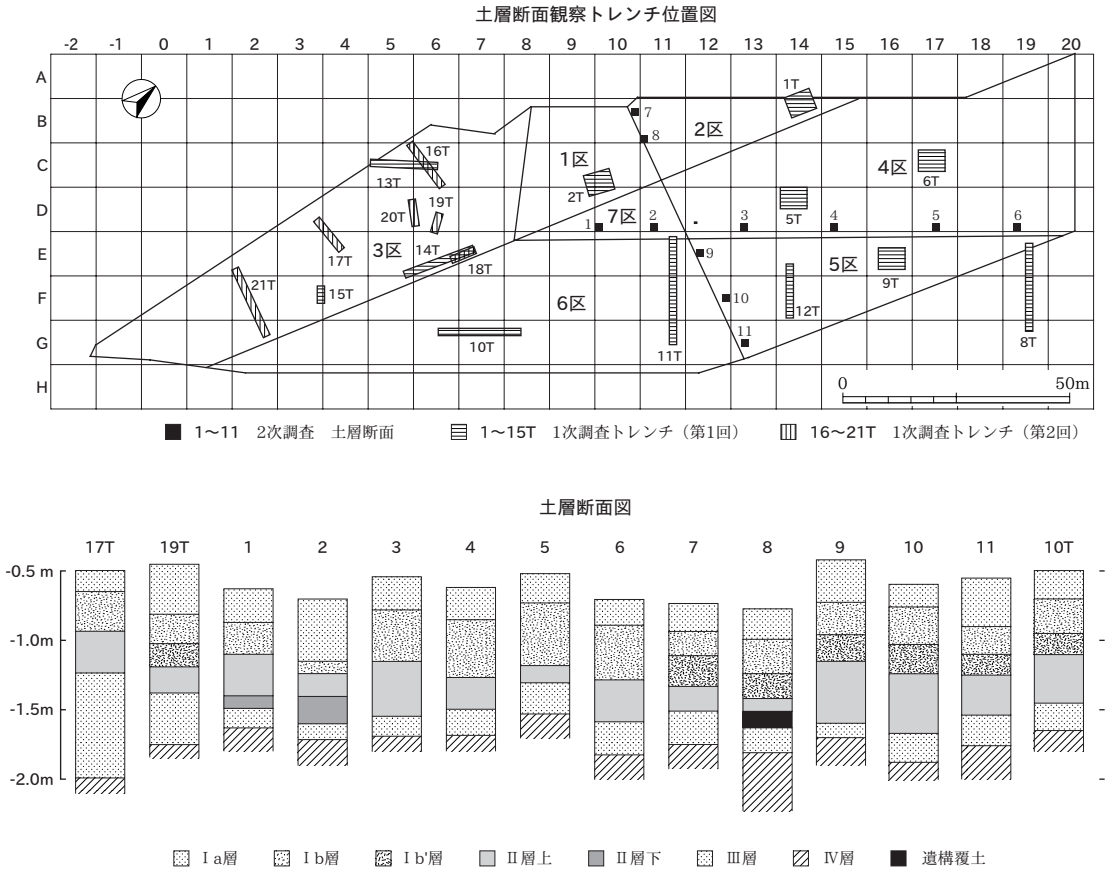
Ⅲ層：暗青灰色砂質土・シルト質土・粘質土の互層。細粒でややしまりが弱い。Ⅱ層とほぼ同質であるが、砂質分が多い。漸移層。層厚10～25cm。

Ⅳ層：暗青灰色砂質土。層厚20～30cm。この層を発掘限界面（地山）とした。

Ⅴ層：暗灰色砂質土・褐灰色シルト質土・暗オリーブ灰色腐植の互層。

Ⅵ層：褐色粗粒砂。

調査範囲の西側では、約20cmの耕作土（Ⅰａ層）の下に流木などを含む洪水堆積層（Ⅰb' 層）が存在している。耕作土から深度50～70cm程度には、包含層である腐植の少ない青灰色粘土層（Ⅱ層）が厚さ10～70cmにわたって堆積し、この層中に古墳時代前期の土器が含まれている。範囲東側では約20cmの耕作土の下に鉄・マンガンが沈着した粘質土（Ⅰｂ層）が約30～60cmあり、その下に包含層に相当する青灰色粘質土が堆積している。また、この層の上位（Ⅱ層上）と下位（Ⅲ層）でも同じ時代の遺物



第26図　正尺Ｃ遺跡　基本層序

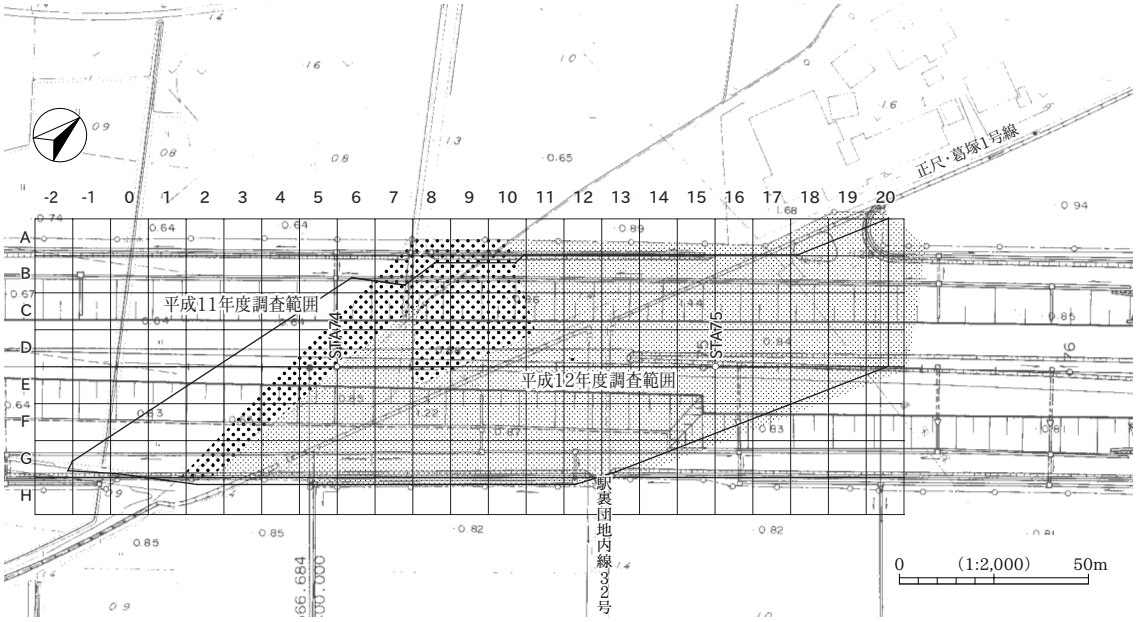
が出土している。しかし、遺物はこの層中すべてにわたって存在しているわけではなく、厚さ20cm程度に限定される。なお、遺物を包含する部分をこの青灰色粘質土層の中で明確に区分するのは困難であることから、Ⅲ層から出土した遺物については、判別できなかった遺構に包含されていた可能性もある。ただし、それはごく少数である。

調査範囲南西部の19トレンチでは、深度140cm程度以下で水成堆積の粗粒砂層（Ⅵ層）が厚く堆積しており、その南東側（自然堤防）とは明瞭に区分される。この粗粒砂層の存在する範囲が旧大口川と考えられる。なお、この層から遺物は出土しなかった。

色調は地点毎にかなりの差があり、集落部分には炭化物を多く含む特徴がある。また、Ⅱ層は遺構などの窪地に火山灰を含み、これらは遺構の覆土の中からも検出された。Ⅲ層は漸移層、Ⅳ層は地山で、いずれも洪水堆積による自然堤防と考えられるが、とくにⅣ層は粘性のない砂層で基本層準把握における鍵層となった。さらに、深掘りトレンチの掘削やボーリング調査により、下位層の堆積は、地表下約5mまで腐植土と砂の互層となっていることがわかり、この一帯がかつて湿地帯であったことを裏付けている。

3　グリッドの設定（第27図）

調査対象地は道路建設予定法線に沿って細長い範囲であったため、これに即してグリッドを設定した。道路法線のセンター杭STA.74とSTA.75を結んだ直線を長軸として、STA75を起点に10m方眼を組んだものを大グリッドとした。大グリッドは南西隅を起点に長軸方向をアラビア数字の－２～20、短軸方



［公団作成　日東道法線図原図］

第27図　正尺Ｃ遺跡　グリッド設定図

向をアルファベットのＡ～Ｈとし、その組合せで「1A」などとした。大グリッドを2m方眼に25分割したものを小グリッドとし、南西を起点にアラビア数字で１～25までの番号を付し、大グリッド名と組み合わせて「1A25」などと呼称した。

なお、グリッドの長軸は、真北から約41度東偏している。

日本平面直角座標　第Ⅷ系

杭	旧日本測地系 （第Ⅷ系Ｘ軸との磁北偏差　西偏約　7°　50′）	世界測地系（JGD2000）　（計算値） （第Ⅷ系Ｘ軸との磁北偏差　西偏約　7°　50′）
STA.74（6Eグリッド杭）	X=213,686.4535、Y=62,763.4022	X=214,035.7063、Y=62,481.4268
	緯度37°　55′　24″、経度139°　12′　50″	緯度37°　55′　36″、経度139°　12′　38″
	Ｘ軸との真北偏差－0°　26′　20″	Ｘ軸との真北偏差－0°　26′　13″
STA.75（16Eグリッド杭）	X=213,762.3403、Y=62,828.5264	X=214,111.5918、Y=62,546.5469

4　遺　　構

A　概　　要（図版19・94・95）

正尺Ｃ遺跡ではⅡ層下部あるいはⅢ層を検出面として、数多くの遺構が検出された。遺構の所属時期は主に古墳時代前期である。古墳時代前期の遺構には、土坑53基、溝状遺構24条、竪穴住居４基、掘立柱建物10棟、周溝２基、ピット403基、性格不明遺構30基がある。

遺跡は北へ向かってＵ字状に蛇行する旧河道の自然堤防上に位置し、このわずかな微高地に古墳時代前期の生活面が存在するが、近世の旧河道によって遺跡の一部は破壊されている。さらに昭和に入って行われたほ場整備によっても遺跡の一部が破壊されているが、全体的に良好な遺存状態を保っており、多くの遺構・遺物を検出することができた。

遺構検出は、遺構覆土が地山の土質と類似していたため、困難を極めた。そのため、遺構確認のための

トレンチを数多く設定し、慎重に調査を進めた。基本層序把握と排水のために縦横に設定したトレンチ壁面で遺構が発見された例も多い。調査終了間際には、確認のためのトレンチをさらに密に入れて、遺構の見落としがないかを確認した。

B　記述の方法と遺構の分類

(1) 基 本 方 針

遺構については、遺構観察表・図面図版・写真図版を作成した。特記事項のある遺構については本文で解説を加えるが、その場合も位置・規模等は遺構観察表を参照されたい。記載内容は、調査者の調査現場での所見をもとにしている。

(2) 遺構種別・遺構番号

遺構種別は、土坑をSK、溝状遺構をSD、竪穴住居をSI、掘立柱建物をSB、周溝をSZ、ピットをP、性格不明遺構をSXと表記した。遺構番号は層位・種別に関係なく、全て通し番号としている。基礎整理段階で遺構種別を変更したものもあるが、遺構番号は調査時に付したものをそのまま使用している。また、基礎整理段階で同一の遺構と判断したものは、早い番号を生かし、後の番号は欠番とした。

なお、土坑・ピット・掘立柱建物の分類は次のような基準で行った。

土坑・ピット　基本的には、長径1m以上の掘り込みを土坑、それ以下をピットに分類した。

掘立柱建物　土坑・ピットのうち、底面標高・覆土・規模が類似し、配列に方形や長方形などの規則性が認められたものを掘立柱建物と判断した。柱根の有無も判断材料とした。

(3) 観察表の記載

a　規　　模

平面形上端・下端の長径・短径の最大値を示している。深度は確認面から最深部までの値である。なお、全体が検出できなかった遺構で規模を推定できる場合は、(　) 付で値を記した。

b　形 態 分 類（第28図）

遺構の形態は、平面形態と断面形態について以下のように分類する。

平面形態

円　形：長径が短径の1.2倍未満のもの

楕円形：長径が短径の1.2倍以上のもの

方　形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの

長方形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの

不整形：上記分類に属さない、整った平面形態をもたないもの

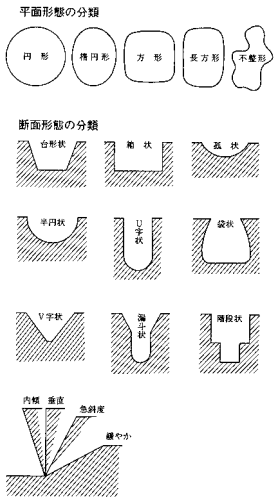
断面形態

台形状：底部に平坦面をもち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの

箱　状：底面に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ち上がるもの

孤　状：底部に平坦面をもたない皿状で、緩やかに立ち上がるもの

半円状：底部に平坦面をもたない椀状で、急斜度に立ち上がるもの



第28図　遺構の平面形態と断面形態の分類

Ｕ字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
袋　状：確認面の長径よりも底部の径が大きく、内傾して立ち上がるもの
Ｖ字状：点的な底部をもち、急斜度に立ち上がるもの
漏斗状：下部がＵ字状、上部がＶ字状の二段構造からなるもの
階段状：階段状の立ち上がりをもつもの

Ｃ　各　　説（図版18～54・95～108）

（1）竪穴住居

SI155（図版26・96・97）　北壁を一次調査トレンチ、西側を近世の旧河道に破壊されているため全容は不明であるが、確認された平面形は不整形である。壁の立ち上がりは西側が急角度であるほかは概ね緩やかである。遺構底面はほぼ平坦だが、西側へ向かって緩やかに標高が上がる。床面では６基のピットが検出された。覆土は炭化物を少量含む明青灰色粘土質シルトの単層である。覆土から壺・甕、赤彩された器台・高杯等が出土した（1～25）。なお、SI155の北側にある一次調査トレンチ下から土器が出土したが、その垂直分布はSI155の土器集中レベルより10cm前後低いレベルに集中している。

SI144（図版27・28・96・97）　南壁を一次調査トレンチに破壊されているが、平面形は隅丸方形と推定される。壁の立ち上がりは残存状況の良好な西壁では比較的急角度である。西・北・東壁からそれぞれ10～60cm内側に入ったところで、本遺構の床面（以下、「床1」とする）よりひとまわり小さな床面（以下、「床2」とする）が１段低く検出されていることから、本遺構は床２を床とする竪穴住居を拡張して構築されたと推定される。床１と床２の段差は４～10cmを測る。床面で検出されたピットは５基あるが、このうち各隅に位置する３基（P525・P526・P527）が柱穴と考えられる。暗渠掘削のため南東隅の柱穴は未検出であるが、主柱穴は４基で構成されていたと推定される。柱掘形は直径31～58cmの楕円ないし円形を呈し、床面からの深さは11～19cm、主柱穴の間隔は２～2.56mを測る。なお、床面拡張に伴う柱の移設は見られない。残りの２基（P534・P535）は深さが４～9cmと浅く、柱穴とは見なし難い。P526とP527の間で貼床が検出されたが、炉・焼土等は検出されていない。

覆土は７層に分層される。床２の上に３層下部と６層が比較的平坦に堆積して床１をなしている。床１の上には主に１層が堆積している。

遺物は全ての層から出土しているが、床１・床２の直上で、多量の炭化物とともに土器が多く出土した。甕・壺・鉢、赤彩された器台・高杯、小型壺など器種も豊富である（26～49）。完形品はないが、南隅で甕１個体が潰れた状態で出土した。ほかに土器片円盤（516）、砥石（523）がある。遺物の垂直分布は床直上に集中が見られるものの、北西側で最も幅広いレベルから出土しており、南東側に向かって薄くなる。

SI144の南北軸と平行して、SD521・SD522が走る。どちらも浅く、遺物は含まない。SD521の覆土は青灰色粘質シルト土の単層で、半円状の立ち上がりに沿うように、ごく薄い炭化物の層が幾重にも堆積している。SD522の覆土も同質の青灰色粘質シルト土の単層であるが、径0.5mm大の炭化物を少量含むのみで、SD521のような特徴的な土層は見られない。

SI36（図版29・97）　西側を流れる旧河道によって、遺構の４分の３以上が破壊されていた。規模は１辺が約6mと推定される。深さは約44cmを測る。覆土は４層に分層され、床面近くの４層に多量の遺物が含まれる。器種が豊富で、完形率が高い。赤彩された小型丸底壺・装飾器台等も出土した（50～87）。ほかに磨石類がある（520・521）。

SI77（図版37・43・100）　周溝のBr3上に位置し、SD209を掘り込んで構築されている。開渠と遺構精査のために設定したトレンチに破壊され、形状の把握が不十分になってしまったが、平面形はほぼ長方形を呈すると推定される。1辺の長さは4.6～5m、深さ40cmを測る。断面観察の結果、掘り込みはSZ439の中心に近いほど高く、周溝に近いほど低いことがわかった。およそ1.5倍ほどの差が認められるものの、底面標高はほぼ一定している。覆土は4層に分層され、1層では多量の火山灰が斑状に認められた。遺物は1層と3層から多量の炭化物および土師器と、炭化材3点が出土した（246～277）。柱穴は北隅でP180を検出したほかは該当するようなものはなかった。開渠やトレンチ掘削に伴い破壊された可能性もある。南西隅では長さ1.5m、幅1.4mほどの土坑状の落ち込みが検出された。この部分の覆土には炭化物が極めて多量に含まれており、遺物も多数出土した。とくに、甕1個体が潰れた状態で出土したことと、赤彩された小型壺胴部（261）が良好な状況で出土したことは特筆される。このほか、北西ー南東方向へ延びる幅30cmほどの溝SD189が検出された。SD189は小刻みに蛇行する。

（2）掘立柱建物

SB800（図版29）　SB530・SB540の東側、約3mのところに位置する。北西隅の柱穴は検出できなかったが、1間（3.96m）×1間（3.64m）のほぼ正方形を呈する掘立柱建物と推定される。その場合、床面積は14.41㎡、主軸は13°西偏する。柱穴掘形の径は23～38cmの円形ないし楕円形で、深さは26～36cmを測る。覆土はP761が3層に分層されるほかは単層である。ほとんどが炭化物をごく少量含むオリーブ灰色土である。粘性は強く、しまりはやや弱い。いずれの柱穴からも柱根は検出されなかった。

SB530（図版30・97）　SI155の南側、約1.5mのところに位置する。SB540と重複するが、新旧関係は不明である。北西隅の柱穴は近世の河道に、南東隅の柱穴は暗渠の設置により破壊されてしまったために検出できなかったが、桁行3間（5.8m）×梁行1間（3.8m）の長方形を呈すると推定される。その場合、床面積は22.08㎡、主軸は77°東偏する。柱穴掘形は径24～56cmで、円形ないし楕円形を呈するが、P148・P149は方形を意識していた可能性がある。深さは30～62cmとばらつきがあるものの、底面標高はほぼ一定している。覆土は単層～6層に分層される。ほとんどが粘性の強い青灰色土である。炭化物を含んでいるが、底部近くには含まれないものが多い。しまりは中間に弱い層が挟在し、上・下層で強い傾向が見られる。いずれの柱穴からも1、2点の土師器細片が出土した。柱根は検出されなかった。

SB540（図版31・97）　SI155の南側、約1.5mのところに位置する。SB530と重複するが、先後関係は不明である。南東隅の柱穴は暗渠の設置により破壊されてしまったために検出できなかったが、桁行2間（3.97m）×梁行1間（2.18m）の長方形を呈すると推定される。その場合、床面積は8.65㎡、主軸は12°西偏する。柱穴掘形は径16～28cmで、円形ないし楕円形を呈する。深さは22～54cmとばらつきがあるものの、底面標高はほぼ一定している。覆土は単層～3層に分層される。ほとんどが炭化物を含む青灰色土である。粘性は強く、しまりもやや強い。土師器片を含む柱穴もある。柱根は検出されなかった。

SB81（図版32・97）　SB90・SB82が西側に隣接する。1間（1.75m）×1間（1.4m）のほぼ長方形を呈する。床面積は2.19㎡、主軸は80°西偏する。柱穴掘形の径は23～30cmの円形ないし楕円形で、深さは13～43cmを測る。覆土はP72が3層のほかは2層に分層される。ほとんどが炭化物を少量含む暗青灰色シルトである。粘性・しまりともに強い。いずれの柱穴からも柱根は検出されなかった。

SB90（図版32・97）　SB81が東側に、SB82が西側に隣接する。1間（2.05m）×1間（1.8m・1.45m）

の台形を呈する。床面積は3.33㎡、主軸は50°西偏する。柱穴掘形の径は13～25cmの円形ないし楕円形で、深さは5～10cmを測る。覆土はすべて単層で、炭化物を少量含む暗オリーブ灰色シルトである。粘性・しまりともに弱い。いずれの柱穴からも柱根は検出されなかった。

SB82（図版32・97）　SB90・SB82が東側に隣接する。北西隅の柱穴は開渠の設置により破壊されてしまったために検出できなかったが、1間（3.1m）×1間（2.7m）の長方形を呈すると推定される。その場合、床面積は8.37㎡、主軸は6°東偏する。柱穴掘形の径は20～25cmの円形で、深さはP50が33cmのほかは5cm程度と極めて浅い。いずれの柱穴からも柱根は検出されなかった。

SB731（図版33・98・101）　西隅の柱穴は暗渠の設置により破壊されてしまったために検出できなかったが、桁行3間（5.05m）×梁行1間（2.55m）の長方形を呈すると推定される。その場合、床面積は12.88㎡、主軸は66°東偏する。検出された柱穴掘形の径は30～60cmの円形ないし楕円形で、深さは40～60cmを測る。いずれの柱穴からも柱根は検出されなかった。

SB732（図版34・98）　1間（2.25m）×1間（2.04m）のほぼ正方形を呈し、床面積は5.54㎡、主軸は60°東偏する。柱穴掘形の径は20～50cmの円形ないし楕円形で、深さは40～78cmを測る。P609はほかの柱穴と比較して小規模であるが、これを柱穴とするとSB800と規模がほぼ一致する掘立柱建物になるので、柱穴とした。北東隅のP498には直径12cm、長さ36cmの柱根が残存していた。樹種はクリである（第Ⅴ章6.A.参照）。柱根の中央から下部は炭化が進み、脆くなっている。とくに接地面では炭化が顕著で明確な形状を確認できなかった。

なお、P498・P460・P323を柱穴とする掘立柱建物が存在した可能性があるが（SB733）（図版34・98）、北西隅の柱穴が存在するはずの所に暗渠が設置されており、検証が困難である。

（3）周溝状遺構

SZ439（図版35～44・95・98～101）

周溝（SD209・SD214・SD311）によって囲まれた1辺約22mの隅丸方形区画の中央に掘立柱建物SB344が配されている。周溝には3か所の陸橋（Br1～3）があり、このうち西側の陸橋Br3上にSI77が築かれている。

概　要　本遺構は2か年にわたり調査されている。1999年度は調査範囲が狭い上に、効率的な排水ができなかった。このため、調査対象範囲であったSD209を周溝状遺構の一部であることが認識できず、大型竪穴住居の一部と推定し、調査が進められた。遺構名も「SI209」と付されていた。2000年度の調査では、SD311・SD214が検出され、3か所の陸橋をもつ周溝であることが明らかとなった。陸橋には、SD214とSD311の間を「Br1」として、時計回りにBr2・Br3の遺構名を付した。

周溝の形状は一部で方形を意識している様子がみられ、特に内周の形状を整えることをより強く意識しているようにみえる。外周は内周に比べて滑らかではなく、弱く蛇行している。周溝を構成するそれぞれの溝の規模は、幅1.2～4mほど、深さ20～40cmほどである。周溝の壁面の立ち上がりは、内周が急で、外周が緩やかな傾向にある。

周溝の内側からは、厚さ10～20cmほどの薄い黄褐色シルトを含む特徴的な土層が検出された。同質の土は、周溝の外側からは検出されておらず、座布団状の低い盛土である可能性が高い。この盛土の分布は、周溝で囲まれた範囲の中央付近で特に顕著に認められる。その周辺ではこの盛土を挟んで遺物包含層Ⅱ層を上位と下位に分離できるが、盛土が薄いため判然としない範囲が広い。そして、この盛土を掘り込

んで、SI77とSB344が築かれている。このほか、SB344の東辺の外側に近接して、SK226が掘り込まれている。

周溝およびSI77の覆土中からは火山灰が検出された。この火山灰を分析したところ、起源と年代が明らかではない新発見の火山灰であることが明らかとなった。火山灰の上位には古墳時代前期の遺物を含む遺物包含層が形成されており、4世紀代の火山灰であると推定される。同じ火山灰は正尺A遺跡の古墳時代前期の遺物包含層中でも確認されており、今後越後平野における鍵層になるものと思われる［高濱・卜部2001］。

遺物の出土状況は陸橋付近に集中することが特徴的である。遺物の集中範囲には炭化物も集中する傾向が強く、層位的にも両者は一致する。炭化物を多量に含む土層は最下層より1層上位に位置しており、多くの遺物はこの層より上位に包含される。換言すれば、最下層の炭化物をまばらに含む層からは遺物がほとんど出土していないことになる。このような状況はほかの遺構にも共通する。

溝の内側では盛土を挟んだ2枚の遺物包含層から遺物が出土している。しかし、盛土下位の遺物包含層であるⅡ層下部の分布を明らかに確認できたのは、遺構の中央を縦断するセクションi-i'・j-j' の付近のみである。

出土遺物は、甕・壺・椀・高杯・器台などの土器が多数出土したほか、管玉・砥石などの石製品の出土も見られた。

以下、SZ439を構成する溝・竪穴住居・掘立柱建物・土坑について説明する。

SD311（図版40・43・95・98・99）　南東側を巡る周溝で、東端をBr1、南端をBr2が区画する。平面形は緩やかな孤状を呈するが、南側1か所にやや角張った部分がある。幅1.3～3.12m、深さ22～52cmを測る。壁面は内周・外周とも比較的緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が激しい。覆土は7層に分層される。3層では灰白色の火山灰が検出され、とくに3層下部で顕著なまとまりが見られる。遺物は、3b層で管玉2点が出土したほか、4層で炭化物・土器が多量に出土した。4層下底では赤色顔料塊も検出された。土器には壺・甕、赤彩された器台・高杯・小型壺等がある（89～135）。ほかに管玉2点（517・518）がある。遺物はBr1とBr2付近に集中的に分布する。

なお、SD311はSK332・P340と重複するが、前後関係は不明である。

SD214（図版39・41・99）　西側から北東側にかけて巡る周溝で、西端をBr3、東端をBr1が区画する。平面形は北東隅が屈曲するL字形を呈する。最大幅は約4m、深さは20～54cmを測る。壁面は内周が急角度、外周は若干緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が激しい。覆土は5層に分層され、2a層・3層・4層には灰白色の火山灰がブロック状に含まれる。遺物は1層上部・2層下部・3層上部で炭化物・土器が多量に出土したほか、長径80cm、短径25cmほどの炭化材が出土した。遺物の平面分布はBr1とBr3付近に集中する。土器は甕を主体に、壺・鉢・蓋等がある（138～179）。ほかに砥石（519）がある。炭化材はエゴノキ属に同定されるが（第Ⅴ章6A参照）、用途は不明である。

なお、12Cグリッドに係る範囲については、1999年度は明瞭に掘り込みを検出することができず、2000年度の精査で遺構の形状を確認した。その理由としては、この範囲の覆土が炭化物をほとんど含まないため地山の土と区別がつけ難かったことと、遺物の分布が希薄だったことが挙げられる。2000年度はわずかに含まれる炭化物の有無のみを根拠に遺構範囲を決定した。覆土としては隣接する周溝の最下層に近い様相を呈する。確認面からの深さは10cm程度であるので、この上位にも覆土（遺構掘形）が存在した可能性もあるが、1999年度は同じ場所を包含層掘削扱いで調査しているので、詳細は不明である。

SD214内ではP190・P193・SK194・SD173が検出され、P190とSK194では土師器がまとまって出土した（180）。これらの遺構覆土は、炭化物をわずかに含むのみで地山との区別は極めて難しいため、トレンチ断面で遺構形状を把握した。それぞれ独立した遺構というよりも、SD214底面の凹凸の１つである可能性が考えられる。

SD173（図版37）　SD214の内周西端近くの覆土中で確認された。SD214より新しいと推定されるが、SD214の内周に沿っているので、周溝の一部である可能性もある。

小刻みに蛇行する溝で、幅30～50cm、長さ6.4mを測る。覆土は炭化物を多量に含み、西端では1個体の土師器がまとまって出土した。

SD209（図版42・95・99・100）　西側から南西側にかけて巡る周溝で、北端をBr3、南端をBr2が区画する。Br3上にはSI77があり、これによりSD209も一部破壊されている。1999年度に調査されたが、開渠の設置により遺構の一部が破壊されてしまい、全容は把握できなかった。また、同年度においては巨大な住居跡として認識していたため、SD209とSI77の境界が不鮮明になっているところがある。調査した部分から推定される平面形は隅丸長方形を呈し、幅3.12～6.11m、深さは30cmを測る。底面は起伏に富む。とくに南西側の急傾斜の立ち上がりをもつ窪みは、SD209とは別の遺構の可能性も考えられる。

覆土は２層に分層され、１層からは多量の炭化物とともに多数の完形土器や土器片が出土した。他の周溝と同様に、遺物はBr2付近に集中する。器種は甕を主体に蓋・壺・鉢・高杯・器台・結合器台等、豊富である（181～243）。

SB344（図版44・101）　周溝の内側の盛土上に構築されている。北西隅の柱穴は暗渠の設置により破壊されてしまったために検出できなかったが、１間（4.68m）×１間（4.55m）のほぼ正方形を呈すると推定される。その場合、床面積は21.29㎡、主軸は20°西偏する。柱穴掘形の径は46～88cmの不整円形で、深さは20～48cmを測る。いずれの柱穴からも柱根は検出されなかった。P307の覆土からは土師器片が出土した。

SK226（図版44・100）　SZ439の周溝内側に位置する。西側にSB344が近接する。北側を開渠に破壊されているため全容は不明であるが、平面形は不整楕円形、断面形は箱状あるいは台形状を呈すると推定される。覆土は６層に分層され、炭化物を多量に含む５層から器台が埋納されるような形で出土した（244・245）。

SZ610（図版45・101）

四隅に陸橋をもつ方形の周溝状遺構である。Ⅱ層下部で検出された。上部は削平されているため、盛土は確認されていない。SD496・SD602・SD603・SD608によって構成される。ほぼ正方形を呈し、周溝に囲まれた内法は１辺約5m、周溝を含む外法は１辺約6.2mを測る。確認標高は約-0.6mである。周溝内側でピット７基が検出されたが、性格は不明である。

SD496　断面形は半円状を呈する。覆土は３層に分層され、１層から多量の土師器が出土した（278・279）。

SD602　覆土は３層に分層され、１層からごく少量の土師器と炭化物が出土した。

SD603　覆土は２層に分層され、１層から少量の土器が出土した。

SD608　覆土は２層に分層される。中央付近をSK482に破壊されている。

（4）溝

SD604（図版45・101）　SZ610の南側に隣接するが、長軸方向はSZ610から35°南へ振れている。長さ6m、幅1.3mであるが、幅は東へ行くに従い狭まる。縄文施文の土器が出土した（334）。

SD203（図版46・102）　東側を開渠に破壊されているが、長さは4.2m以上あると推定される。西端が括れて45cm程度に狭まるほかは、50～120cmで東から西へ行くに従い幅広になる。底面はほぼ平坦で深さ22cmを測る。遺物は10D1グリッドを中心に、甕・器台などが集中して出土した（323～333）。

SD40（図版46・101）　1m北側にSI36が隣接する。軸は34°東偏する。断面はV字状を呈する。覆土は4層に分層され、4層からは遺物が出土した（283～285）。南西隅を近世の旧河道に撹乱されている。

SD114（図版46・101）　東側を開渠に破壊されているが、長さは3.4m以上あると推定される。軸は57°東偏する。覆土は暗オリーブ色を基調として径2～5mmの炭化物が一面に広がり、遺構覆土と地山が明確に区別できた。多数の遺物が出土し、なかには底面から出土したものもあった（287～282）。

SD38（図版46・101）　南西側を開渠に破壊されているが、長さは12.5m以上あると推定される。軸はほぼ南北方向を向いている。西辺の中間あたりにP42が位置する。掘り込みの深さは一定せず、底面の凹凸が激しい。覆土は灰色の粘土質を基調として、下部に炭化物や腐植物が混入する。堆積は一定ではなく、ブロック状の土粒を含む部分や、地山と識別しがたい灰色土の部分などがある。

SD140（図版47・102）　途中を開渠により破壊されているが、幅3m、長さ11m以上を測る大型の溝状遺構である。深さは20cmで比較的浅い。南西から北東にかけて緩やかな孤を描く。覆土は2層に分層される。2層に含まれる炭化物は包含層のそれに比べると径が大きく、量も多い。とくに6F8・9グリッドが炭化物の集中範囲となっている。遺物は2層の6F3・4・8・9と7E17に集中している（287～289）。SK164と重複するが、SD140が新しい。

SD185（図版48・95・103）　東端を開渠に破壊されているが、不整形の溝状遺構と推定される。現存長4.2mで軸はほぼ東西方向を向く。幅は一定せず50～170cmを測る。深さも一定しないが、最深部で60cmを測る。覆土全体にわたって炭化物が広がり、2層上部からは完形に近い器台をはじめ多くの遺物が出土した（307～321）。

（5）土坑・ピット

SK146（図版48）　暗渠とトレンチにより北半分を破壊されているが、土坑と推定される。現存する最大径は2.4m、深さは30cmを測る。遺物は主に底面から出土した（361～366）。

SK164（図版47・48・102・103）　北西端の上端を旧河道に破壊されているが、下端は残存しているので、本来の規模も検出されたものとほぼ同様とみて差し支えないだろう。平面形はJ字状を呈し、現存長は6m以上ある。軸は概ね32°西偏する。幅は1.4mでほぼ一定し、深さは最深部で45cmを測る。壁面は南壁と西壁の立ち上がりが急で、東壁では若干緩やかとなっている。底面は屈曲部付近が最も深く、そこから旧河道へ近づくにつれて浅くなっている。覆土は3・6・7・8層に炭化物が集中し、3・6・8層に遺物を含む。遺物は6E2・3・7グリッドに集中する。屈曲部の東壁においてSD140と重複するが、SD140より新しい。遺物には土師器（291～306）、土器片円盤（515）がある。

SK456（図版49・104）　楕円形の土坑。覆土は3層に分層され、いずれも炭化物を含む。遺物は1層

から土師器片少量、２層から多量の土師器片とともに土圧で完形品が押しつぶされたような状態の甕が出土した（380～382）。

SK481（図版49・101・103）　楕円形の土坑。覆土は２層に分層され、いずれも炭化物を含む。遺物は主に１層から出土した（386～389）。

SK482（図版49・103）　楕円形の土坑で、SZ610のSD608を掘り込んでいる。覆土は４層に分層され、いずれも炭化物を含む。遺物は１層から少量の土師器が出土した。北側20cmのところにSK741がある。

SK741（図版49）　南端を開渠、北端をトレンチに破壊されているが、確認面で炭化物細片が分布する範囲を遺構とした。楕円形の土坑と推定される。覆土は単層で炭化物を含む。遺物はない。南側20cmのところにSK482がある。

SK58（図版49・104）　長楕円形の土坑。底面は比較的平坦である。覆土は灰色シルトを基調とするレンズ状堆積である。遺物は底面中央部に集中する（335～340）。

SK32（図版50・106）　円形の皿状の土坑。覆土は６層に分層される。１～４層は黒色を帯びたシルト質土、５・６層は灰色シルト質土である。遺物は１～４層から出土した。

SK59（図版50・104）　円形の土坑。北西と南東に三日月形のテラス状になっている部分がある。覆土は炭化物を多く含む灰色シルトを基調とする。遺物は北半分に集中していた（341～348）。

SK118（図版50・104）　不整楕円形の土坑。底面は北西部から南東部にかけて急激に落ち込む。覆土は７層に分層され、１・２・７層は炭化物を多量に含む。遺物は東側に集中する（349～358）。

SK56（図版50・104）　隅丸長方形の土坑。底面は平坦である。覆土は４層に分層され、２層に遺物を含む。

SK231（図版51・52・104）　12D・13Dグリッドの土坑群を形成するうちの１つ。土坑群の北西に位置し、緩やかな孤を描きながら北へ延びる。長さ3.6m、幅1.2mの溝状の土坑である。覆土は２層に分層されるが、１・２層ともに炭化物・腐植物・火山灰が少量含まれる。２層は灰色シルトで部分的に粘性が強い。遺物は２層の上部から数点出土した。

SK215（図版51・52・106）　12D・13Dグリッドの土坑群を形成するうちの１つで、土坑群の西側に位置する楕円形の浅い皿状の土坑である。覆土は２層に分層され、灰白色の火山灰がブロック状に含まれる。２層の暗青灰色シルト層に多量の炭化物を含む。遺物は１・２層から少量出土した。

SK229（図版51・52・105）　12D・13Dグリッドの土坑群を形成するうちの１つで、土坑群の南西に位置する楕円形の浅い皿状の土坑である。土坑群の中では比較的浅く、北東部分がSK213を、南東部分がSK228を掘り込んでいる。覆土には灰白色の火山灰がブロック状に含まれる。覆土は２層に分層され、１層の暗青灰色シルトから多量の炭化物・土師器片が出土した（376～378）。遺物は１層上部にとくに集中する。

SK213（図版51・52・105）　12D・13Dグリッドの土坑群を形成するうちの１つで、土坑群の中央に位置する。南西部分をSK229に破壊されているが、楕円形の浅い皿状の土坑である。覆土には灰白色の火山灰がブロック状に含まれる。覆土は２層に分層され、２層の暗青灰色シルトから多量の炭化物・土師器片（368～372）、土錘（512）が出土した。

SK230（図版51・52）　12D・13Dグリッドの土坑群を形成するうちの１つで、土坑群の東側に位置する。

ほかの土坑に比べて小型である。覆土に火山灰は含まれず、炭化物・遺物も少ない。

SK228（図版51・52・105）　12D・13Dグリッドの土坑群を形成するうちの１つで、土坑群の南東に位置する。北西部分をSK229に破壊されているが、隅丸三角形の土坑である。覆土には灰白色の火山灰がブロック状に含まれる。覆土は２層に分層され、２層の暗青灰色シルトから多量の炭化物・土師器片が出土した（373）。遺物はとくに東側に集中する。

SK216（図版52・105）　西側が開渠により破壊され、その先は調査範囲外に連続するため全容は不明であるが、不整楕円形の土坑と推定される。覆土は２層に分層され、１層には火山灰・炭化物が少量含まれる。遺物は、１層下部から完形の甕が倒立した状態で出土した。この甕の中には遺物は入っていなかった。

SK211（図版52・106）　円形の土坑。覆土は２層に分層される。遺物は、１層上部から少量の炭化物とともに多数の土師器片が出土した（367）。

SK26（図版54・106）　不整形の土坑で、SK27を掘り込んでいる。覆土は灰色シルトで少量の炭化物を含み、３層に分層される。２層から１個体分の甕の破片が出土した（322）。セクションで落ち込みを確認できるので、出土した甕はそこに埋められていた可能性がある。

P122（図版54・106）　楕円形の土坑。覆土は灰オリーブシルトの単層で、炭化物や腐植物が広がる。

SK218（図版52・106）　円形の土坑。覆土は２層に分層される。遺物は、１層上部から少量の炭化物とともに多数の土師器片が出土した（374）。

P191（図版53・107）　円柱状のピット。覆土は２層に分層される。遺物は１層から少量の炭化物とともに多数の土師器片が出土した。土師器片はいずれも大破片である。

P620（図版53・107）　漏斗状のピットで、中央に柱根が残存する。柱根は長さ29cm、直径6cmである。樹種はクリである（第Ⅴ章6A参照）。

P725（図版54・107）　SD140の3.5m東側に位置する円形のピット。覆土は５層に分層される。１層は明青灰色シルトで径1mmの炭化物をごく少量含む。２層は青灰色シルトで下部に多量の炭化物が帯状に含まれる。３層は緑灰色粘質シルトで径3mmの炭化物を少量含む。４・５層は３層より粘性の弱い緑灰色シルトで、ほとんど炭化物は含まれていない。

6）性格不明遺構

SX768（図版53・107）　調査範囲で検出された遺構のうち、最も南側で検出された。周辺にはピット３基があるのみで、遺構群から孤立したような形で存在する。皿状の不整形な掘り込みで、底面には小ピットが散在する。遺物は土師器がある（397）。

SX405（図版53・107）　確認面の覆土がドーナツ形に分層されることから、風倒木痕と考えられる。底面は凹凸が激しい。遺物は土師器が出土した（390～396）。

5　遺　　物

正尺Ｃ遺跡からは浅箱換算で約190箱の遺物が出土した。内訳は186箱が古墳時代前期の土師器、２箱が同時代の土製品・石製品・木製品等、２箱が近世陶磁器と近世の木製品である。

以下、遺物について時代・種別ごとに記述を進める。

Ａ　古墳時代前期の土器（図版55～78・109～135）

（1）概要と実測個体の抽出

古墳時代前期の土器は遺構および包含層から出土した。包含層の土器出土重量分布図を第37図に示す。土器は遺構が検出された範囲から集中して出土し、遺構のない16列より東側では分布が希薄である。また、近世の旧河道からは出土していない。

出土土器はいわゆる在地の土師器を主体とするが、装飾器台・結合器台が多いこと、東北地方の影響を受けた縄文施文の土器が一定量存在することが特徴である。時期は2005年に開催された「シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」で示された時期区分の６期にほぼ限定されるが、縄文施文の甕については6期を遡る可能性もあり、検討を要する。

土器の接合作業は遺構単位に行ったのち、当該遺構周辺の包含層・遺構出土土器との接合を行った。報告書掲載遺物の抽出は、出土量が多く土器組成を捉えることができる遺構
を中心に行った。遺構単位での抽出にあたっては、器種・器形の組成を網羅するよう行い、甕等で同様の器形のものが多量にある場合は遺存状況が良好であっても割愛した。包含層出土遺物からの抽出は、遺構出土遺物に見られなかったものを中心に行った。

（2）観察表の記載

個々の遺物の詳細は観察表に記す。観察表の記載内容は以下のとおりである。

① 遺 構 名　出土遺構名を記す。遺構名の後ろの「－№」は調査時の取上げ№である。

② グリッド　出土グリッドである。実測破片以外の同一個体破片の出土グリッドは改行して、「外」として記載した。

③ 層　　位　遺構名があるものは遺構の層位、他は包含層名である。

④ 時　　代　所属する時代。

⑤ 器　　種　本節ｄ．に示す器種を記載した。

⑥ 残 存 率　実測図で表現されている部分に対する実測個体の残存率。

⑦ 口縁部残存率（法量）　口径を36分割し、0.5単位まで計測した。

⑧ 法　　量　口径は口縁端部を結んだ径、底径は接地面の径。（　）付きは推定値。

⑩ 胎　　土　胎土中の混和物を記した。鉱物名不明の場合は色調を記した。

⑪ 調　　整　基本的には［春日1994］の表現方法を踏襲した。調整にはハケメ調整・ヘラナデ調整・ヘラケズリ調整・ヘラミガキ調整・ナデ調整・ヨコナデ調整などがあるが、以下の記述では「調整」を省略し、単に「ハケメ」・「ヘラミガキ」・「ナデ」などと表す。主な調整の内容は次の通りである。

ハケメ：板の木口面を使い土器の表面を調整するもので、器面には平行する条線が残される。原体幅は1cm以上の幅広のものと1cm未満の狭いものがあり、２種が同一個体に併用されることもある。

ヘラナデ：「ハケと同じ工具で使用頻度が少なく、木目の凹凸が明瞭でないもの、もしくは、作業面を木目に平行する方向で切ったものを想定している」［春日前掲］。

ヘラケズリ：ハケメ等に類似する原体幅で、砂礫の移動痕が明瞭に残るもの。

ミガキ：器面を磨いているもので、工具痕が明瞭に残るものと残らないものがある。

ナ　デ：不定方向のナデ。

ヨコナデ：回転を用いるナデ。

指頭圧痕：指による強い圧痕。

（3）図化の方法

報告遺物は残存率の高いものを抽出し、両面実測あるいは部分的な反転実測を行ったが、器種・器形を網羅する都合上、遺存状況の良好ではないものも実測した。この場合は反転実測を行い、推定径に検討の余地がある場合は口縁あるいは調整の横線を中心線付近で白抜きとした。

調整の表現方法は、ヘラナデは単位幅を表現し、調整の方向が明らかな場合は単位幅の中に方向を→で示した。ヘラケズリも同様とし、調整の方向は移動した砂粒の終点を短線で区切って示した。ミガキは方向が明瞭な場合は⟷で示した。

調整の変換点は実線、同一調整内の方向転換は２点破線で示した。口縁部・脚部の端部調整については面取りがある場合は実線、面取りがない場合は２点破線で示した。

（4）土 器 分 類

縄文施文の土器を除き、甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台などの大別器種に分類後、器種毎に細分した。分類は全体形状が分かるものを中心に、器形・調整・系統等を考慮して行った。分類にあたっては「シンポジウム　新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」の滝沢規朗氏の分類［滝沢 2005b］等を参考にした。

a　甕（第30・31図）

甕は法量で３大別できる（第29図）。区分は、器高・体部最大径とも18cm以下を小型、同27cm以下を中型、器高30cmを超えるものを大型とする。遺構・包含層出土土器を対象に、甕底部残存率を計量したところ第６表の結果が得られた。底径は3cm未満のものと3cm以上6cm未満のものがほぼ４割強で拮抗し、6cm以上のものが１割弱を占める。丸底は１％に満たない。

A類　有段口縁の甕。出土数は少ない。

B類　近江系の甕。出土数は少ない。

B1類：近江系長浜甕。口縁端部の作りが粗雑で弱く波打つ。口縁端部までハケメが施され、口縁部には指頭圧痕が残る。

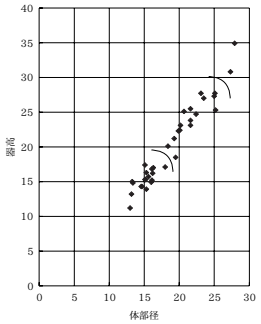
B2類：近江系受口状甕。

C類　口縁部が「く」字ないしは「コ」字に屈曲する口縁部をもつものを一括した。基本的な調整は内外面ハケメ後、口縁部が引き出されてヨコナデで整えられている。このとき、口縁上半分は丁寧にヨコナデされるが、下半にはハケメがナデ消されずに残存していることが多い。甕の大部分はここに分類される。口縁形態の違いで細分した。

C1類：口縁端部が摘み上げられるもの。

C2類：面取りが強く、口縁端部内面が強くヨコナデされ、外側に若干引き出されるもの。

C3類：面取りが弱く、口縁が緩やかに外反するもの。



第29図　正尺Ｃ遺跡　甕の器高・体部径散布図

底径（cm）	出土位置	底残存率（X/36）	底径別残存率小計（X/36）	底残存率比率	底破片数（点）	底径別破片点数（点）	破片数比率	穿孔（点）
3cm未満	遺構	2244	7028	49.56%	85	296	42.96%	3
	包含層	4784			211			3
3～6cm未満	遺構	2034	5826	41.08%	105	327	47.46%	
	包含層	3792			222			1
6cm以上	遺構	909	1240	8.74%	39	62	9.00%	
	包含層	331			23			
丸底	遺構		88	0.62%		4	0.58%	
	包含層	88			4			
合　計		14182	14182	100.00%	689	689	100.00%	7

第６表　正尺Ｃ遺跡　甕の底径別集計表

C4類：面取りされないもの。

C5類：口縁が短く外反するもの。

D類　長めの口縁が外側に強く引き出されるもの。数は少ない。

E類　口縁端部が強く外側に引き出され、口縁部が明瞭な「コ」字状を呈するもの。

F類　短い口縁部が強く外側に引き出され、体部の張りが弱いもの。

G類　短い口縁部が外側に引き出され、体部が張る鉢状のもの。

H類　口縁部と体部の境が不明瞭なもの。

I類　大型で直線的に開く口縁部のもの。

J類　口縁端部が片口状に引き出されるもの。図示したものが全てである。

K類　底部に穿孔されたもの。基本的には焼成前の穿孔である。底部は他の甕より小さく、孔とほぼ同じ1cm程度のものが多い。既存の甕の底部に穿孔するというよりは、あらかじめ孔を開ける甕を区別して製作していた可能性がある。遺跡全体で８点出土（図版136）。

b　壺（第31・32図）

A類　頸部が直立する畿内系二重口縁壺。赤彩されるものが少数ある。

B類　二重に外反する二重口縁壺。畿内系と考えられる。外面段部に連続刺突が施されるものもある。

C類　二重口縁壺に類するが、段が不明瞭なもの。

D類　細口で有段口縁を呈し、口縁部下段が長いもの。

E類　細口で有段口縁を呈し、口縁部下段が短いもの。

F類　「く」字状の短い口縁をもつもの。

F1類：小型・球胴。

F2類：中・大型。

G類　口縁が外反して立ち上がる広口壺。

G1類：口縁端部が丸く収められる。

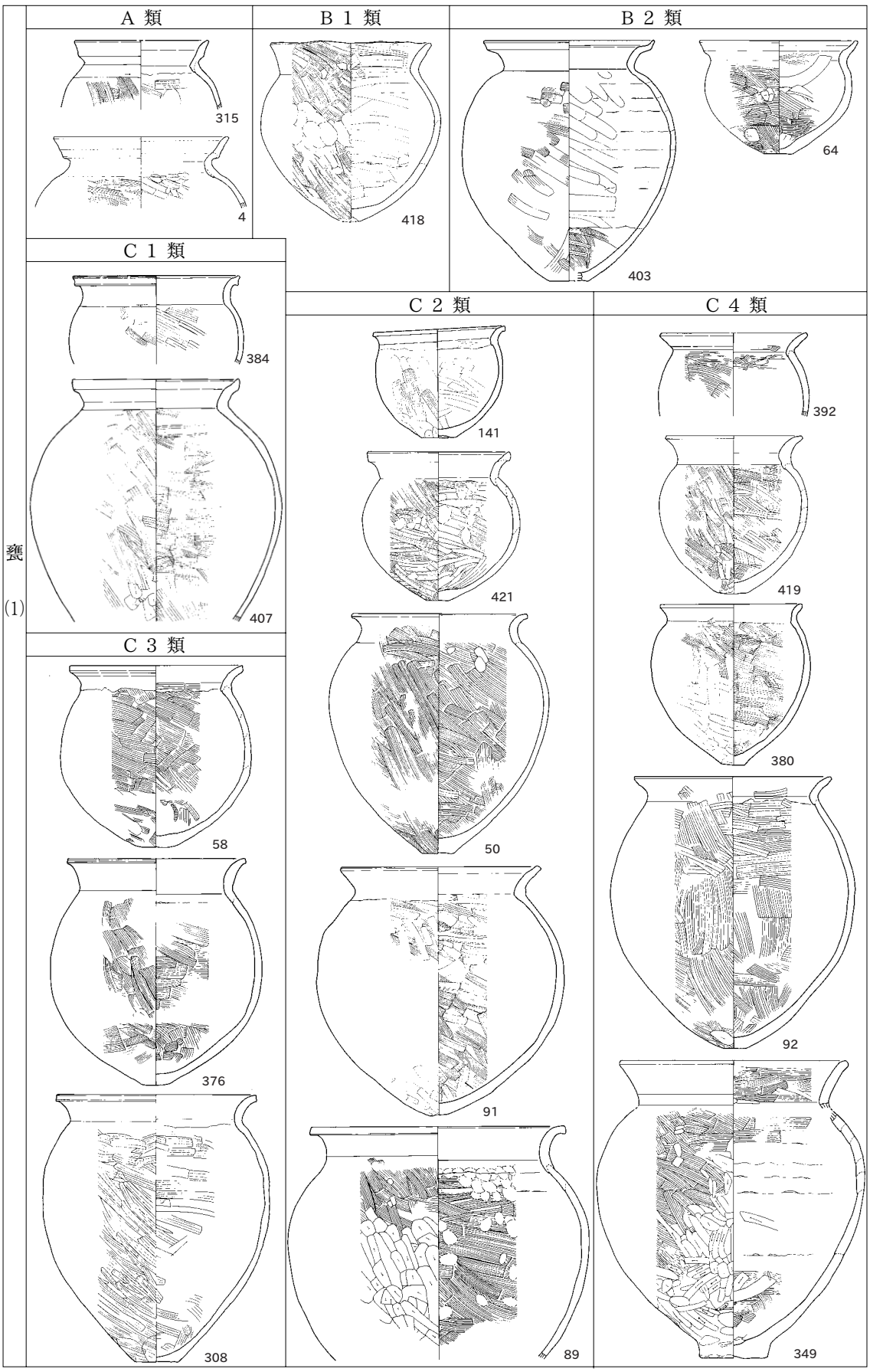
G2類：口縁端部が外側に引き出され面取りされる。

H類　短頸直口壺。

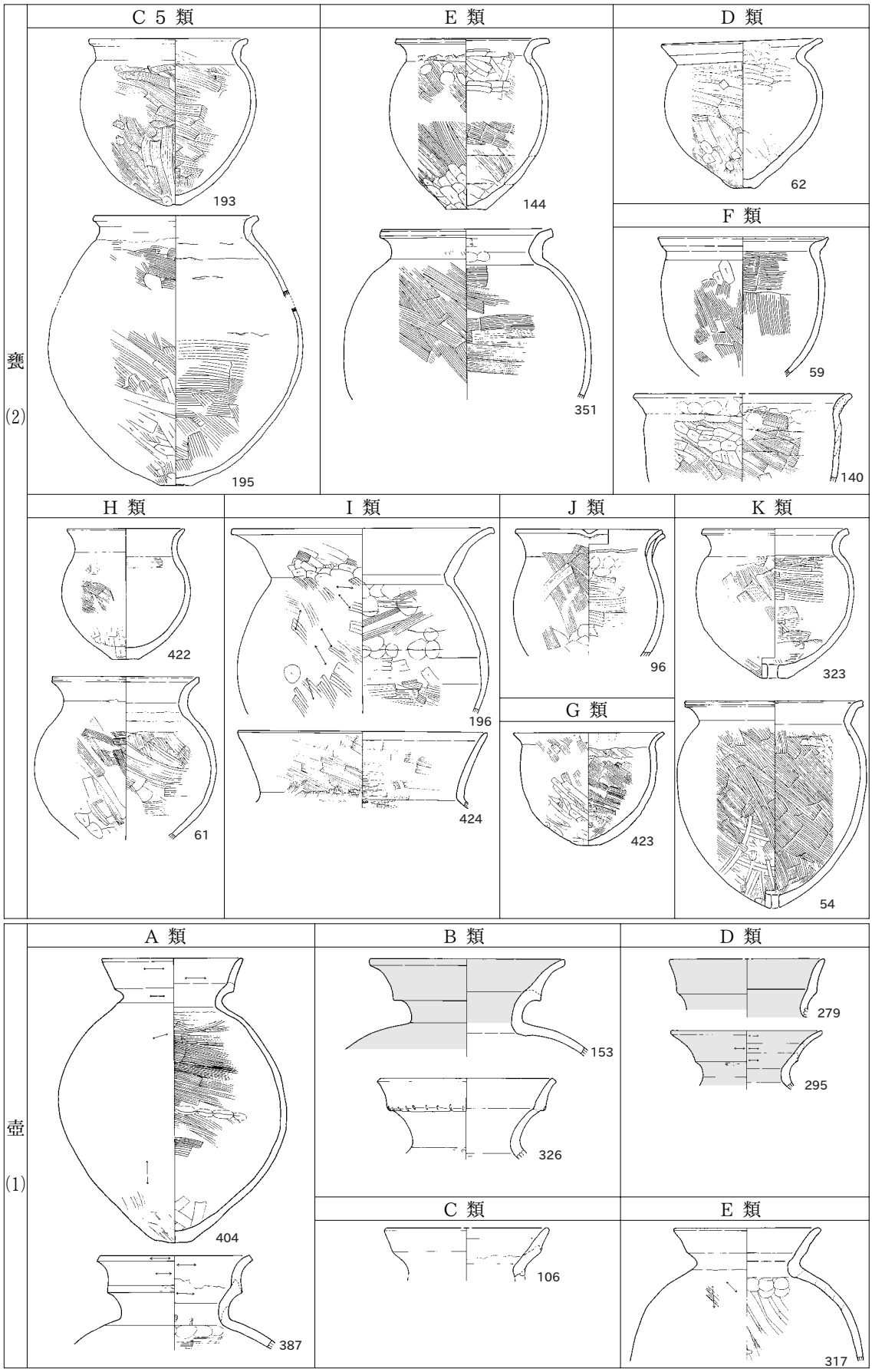
H1類：球胴を呈するもの。

H2類：体部が下膨れとなるもの。

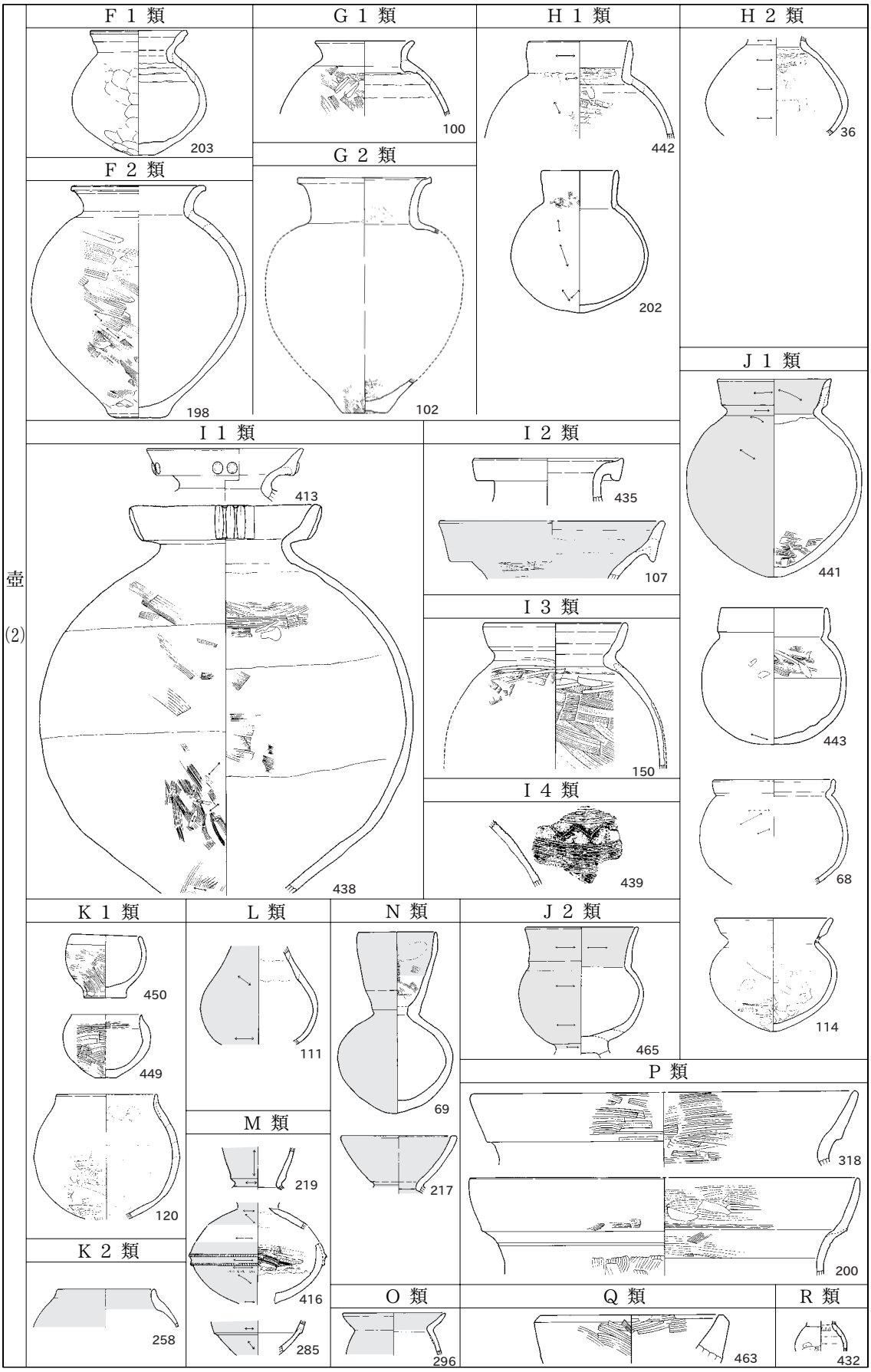
I類　東海系二重口縁壺。



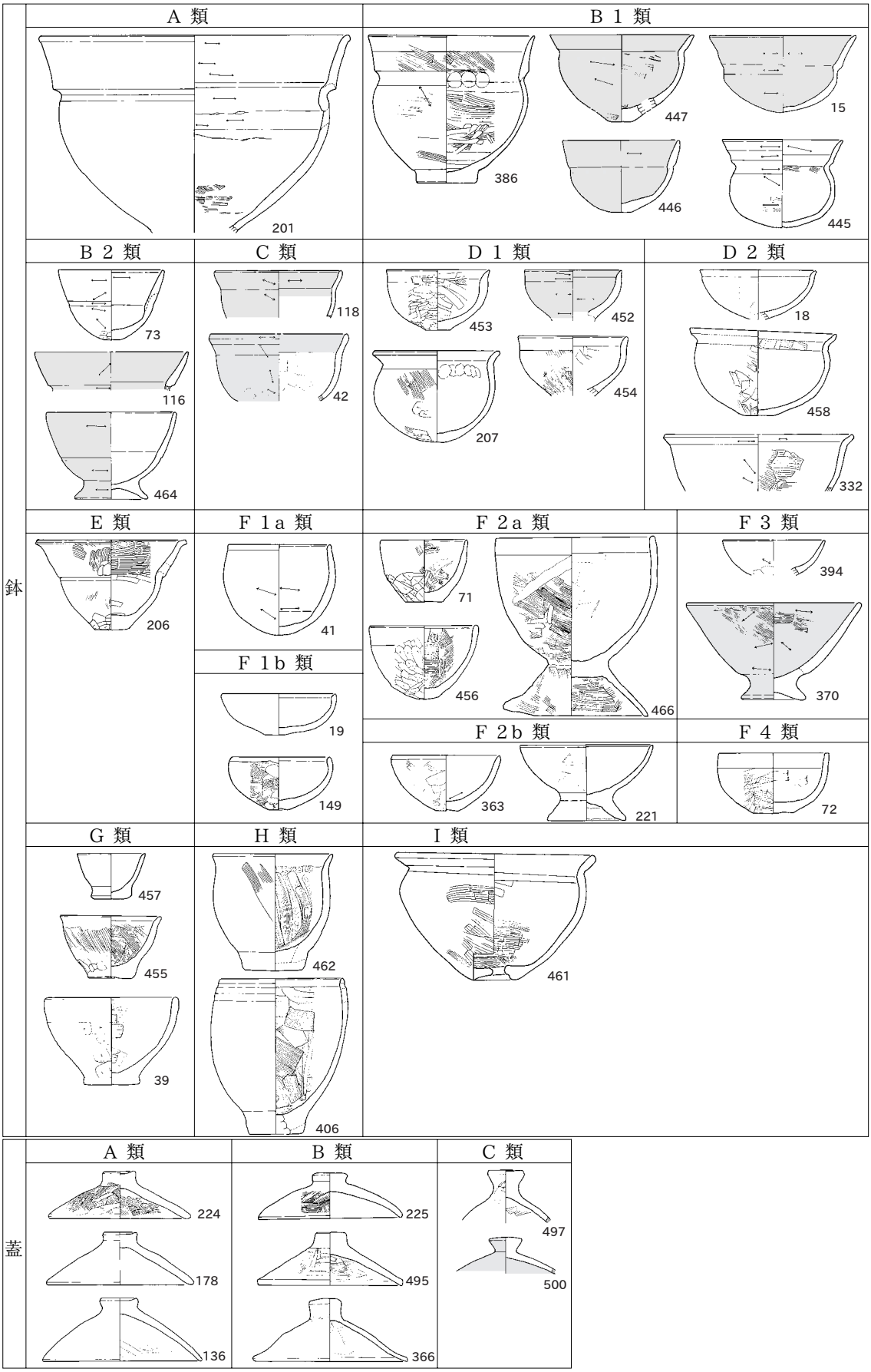
第30図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（1）



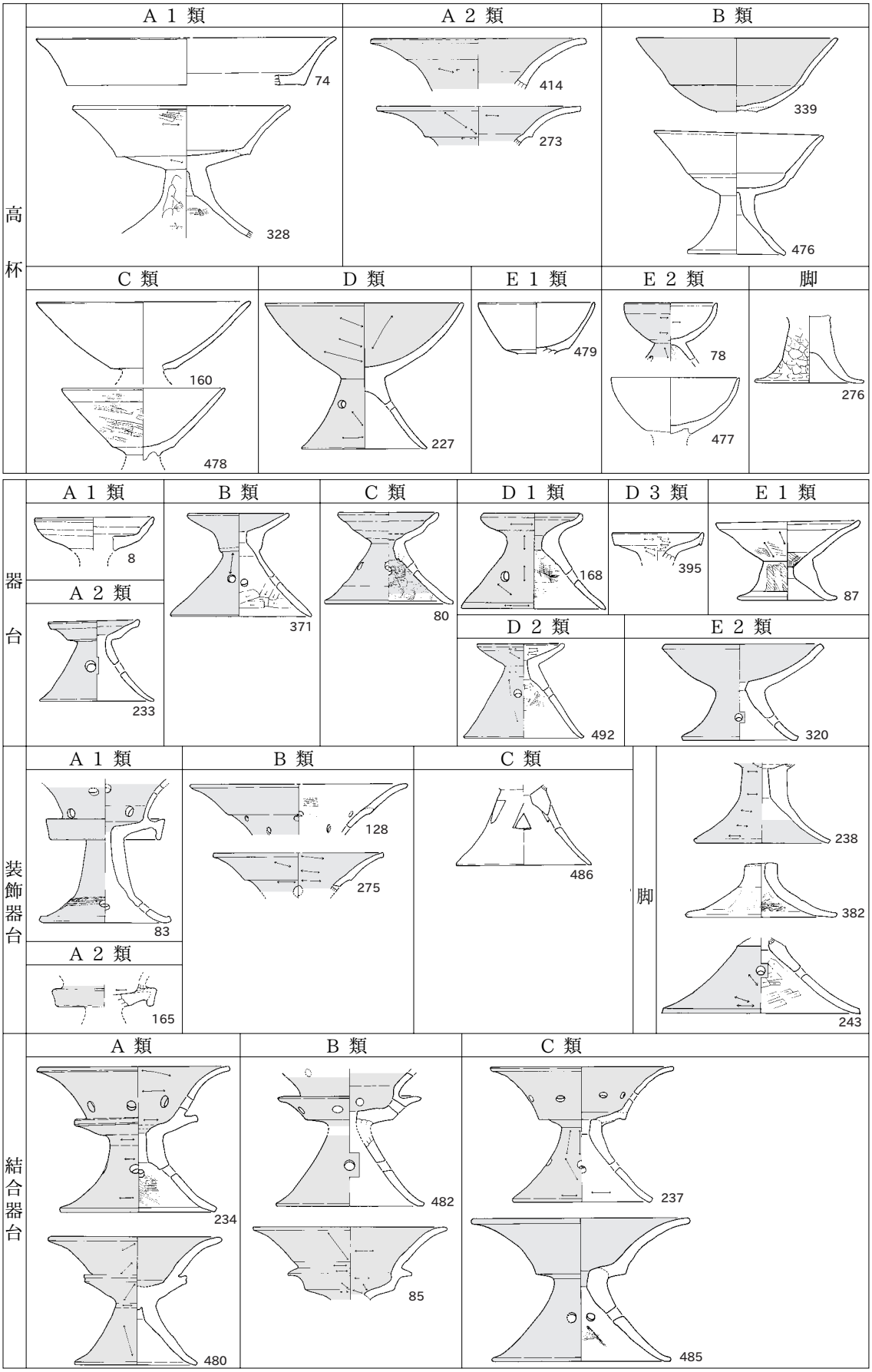
第31図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（2）



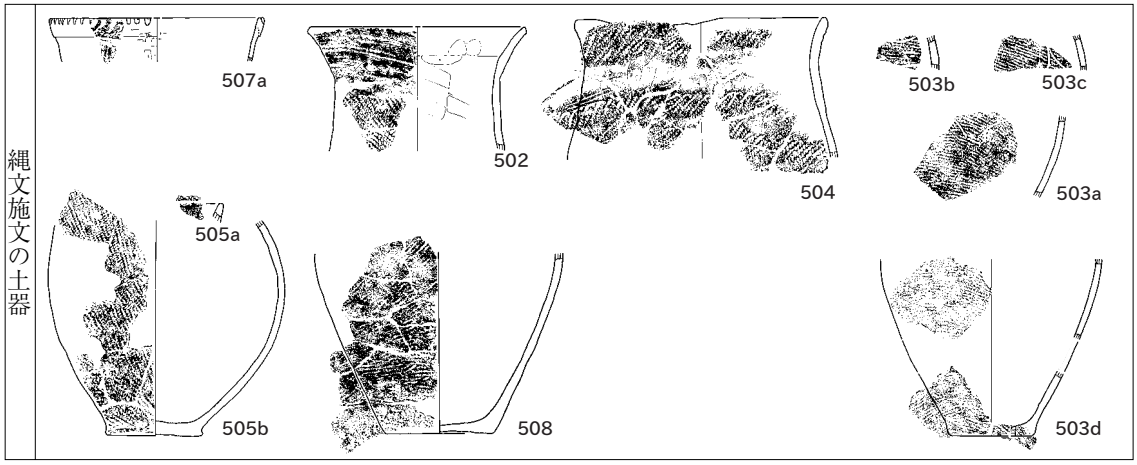
第32図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（3）



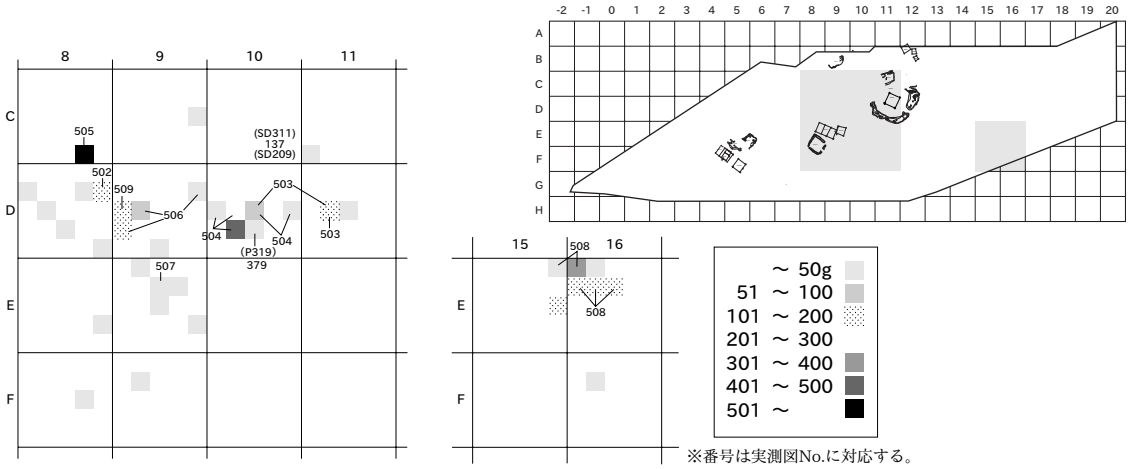
第33図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（4）



第34図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（5）



第35図　正尺Ｃ遺跡　土器分類図（6）



第36図　正尺Ｃ遺跡　縄文施文の土器重量分布図

I1類：頸部が外反して短い口縁部に至るもの。口縁部にボタン状の貼り付け文をもつ。

I2類：頸部が直立あるいは外反して短い口縁部に至るもの。

I3類：口縁部が内弯して立ち上がるもの。

I4類：体部に櫛歯状工具による平行沈線・鋸歯状文が施文されるもの。

J類　有段口縁壺。

J1類：無台のもの。

J2類：有台のもの。赤彩される。数は少ない。

K類　無頸壺。

K1類：器面にハケメを残す粗製品。

K2類：赤彩される精製品。

L類　口縁部と体部の境が不明瞭なもの。赤彩される。脚が付く可能性もある。

M類　扁平な体部で細長い口頸部を有する小型壺。体部に突帯を有する。脚が付くと推定される。

N類　東海系のひさご壺またはそれを模した小型壺。内弯ないしは直線的に立ち上がる細長い口頸部を有する。多くは赤彩される。

O類　「く」字状の短い口縁部をもつ小型壺。赤彩される。

P類　口縁部が有段で、内弯気味に立ち上がる大型壺。

Q類　非常に器壁が厚く、口縁部が直線的に開くもの。1点出土した。

R類　ミニチュア壺。

体部～底部破片のみ残存し、上記分類に当てはめられないものに関しては、便宜的に小型品と中・大型品、赤彩品と非赤彩品に分類した。小型赤彩品は「小型r」、小型非赤彩品は「小型」と分類欄に記載した。

c　鉢（第33図）

A類　有段口縁で大型のもの。把手付き鉢の影響を受けている可能性がある。

B類　有段口縁で中・小型のもの。

B1類：口縁が外反気味に開くもの。

B2類：口縁が内弯気味に立ち上がるもの。台を有する464は東海系の可能性がある。

C類　短く内弯気味の口縁が開くもの。

D類　短頸のものを一括した。精製品と非精製品がある。身の深さ、法量で大・中・小に分類される。法量は口径で区分し、大型が20cm前後、中型が13～15cm、小型が13cm未満を目安とする。

D1類：口径に比して身が深いもの。台を有するものもある。

D2類：口径に比して身が浅いもの。

E類　内弯気味の口縁が開く。口縁端部は外側に引き出される。粗雑な作りの鉢である。1点出土。

F類　椀形の鉢。各細分類とも身の深さ、法量で大・中・小に分類される。身の深さは深いものをa類、浅いものをb類とする。法量区分の目安はD類と同じ。

F1類：体部から口縁部にかけて内弯するもの。身の深いものと浅いものがある。

F2類：内弯気味に開くもの。身の深いものと浅いもの、台を有するものもある。

F3類：単純に開くもの。台を有するものもある。

F4類：直立気味に開くもの。

G類　体部と底部の境が明瞭で、底部が厚手のもの。

H類　身が深く、口径の2倍程度の深さのもの。

I類　有孔鉢。数は少ない。

口縁部がないため上記分類に当てはめられないもののうち、小型のものは観察表の分類欄に「小型」と記載した。

d　蓋（第33図）

A類　摘みが環状を呈するもの。

B類　摘みが中実で横断面形が長方形を呈するもの。

C類　摘みが中実で横断面形が逆三角形を呈するもの。

e　高　　杯（第34図）

A類　有段口縁で、外傾して端部に至るもの。

A1類：杯部が浅いもの。

A2類：杯部が深いもの。

B類　杯部が有段鉢型のもの。

C類　杯部が内弯気味に立ち上がるもの。

D類　杯部が浅く、椀型のもの。

E類　小型のもの

E1類：杯部が内弯気味に立ち上がるもの。

E2類：杯部が椀型のもの。

高杯の脚部は「八」字状に開くものがほとんどであるが、276のように全体に裾部だけ開くものもある。276はケズリで仕上げられ、胎土も他の土器と比較してかなり白っぽいので非在地土器の可能性もある。

f　器　　台（第34図）

A類　北陸系小型器台。

A1類：口縁部の立ち上がりが急なもの。

A2類：大きく開く有段口縁のもの。

B類　受部外面のみ有段状を呈するもの。

C類　受部が直線的に開いて立ち上がるもの。

D類　受部が内弯して立ち上がるもの。

D1類：口縁端部が面取りされないもの。

D2類：口縁端部が面取りされるもの。

D3類：口縁端部が折り返され、面をもつもの。

E類　扁平で脚部と受部の高さ・径がほぼ等しいもの。畿内系Ｘ字脚の高杯と関連があるかもしれない。

E1類：受部と脚部の接合部の器壁が厚く、口縁端部が弱く摘み上げられるもの。ハケメが明瞭に残る。非赤彩。

E2類：ミガキ後、赤彩されるという調整方法は他の器台と共通するが、受部と脚部の比率が他の器台と著しく異なり、全体的に扁平なもの。

器台の脚部は「八」字状に開くものが多いが、少数ながら上半が筒状で裾部が大きく開くものや、大きく扁平に「八」字状に開くものもある。このほかに、蓋のような形状で中央に穿孔された382がある。

g　装 飾 器 台（第34図）

A類　北陸南西部が分布の中心とされる装飾器台、またはその類似土器。赤彩される。

A1類：受部の上下端が大きく突出するもの。図示した１点のみ。

A2類：受部の下端が大きく突出するもの。

B類　有段の口縁部が大きく外傾する「中島廻りタイプ」［滝沢2005］に分類されるもの。

C類　脚部に三角形の透孔をもつ。系譜等は不明。図示した１点のみ。

h　結 合 器 台（第34図）

A類　口縁部が無段で、受部が鍔状に巡る、「鍔付き結合器台」［滝沢前掲］。基本的に赤彩される。受部

外面が無段もの。本遺跡においては一定量存在する。

B類　A類と同様に鍔付き結合器台であるが、受部外面が有段である点で区別される。

C類　受部が突出しないが、装飾器台・鍔付き結合器台に類似するもの。

上記A～C類はいずれも有透・無透のものがある。

i　縄文施文の土器（第35図）

完形品がないので、全体の形状は不明である。残存部分から推測すると、口縁部は開き、頸部で若干すぼまり、膨らみ気味の体部から平底に至るという、甕と壺の中間的な器形である。底部はドーナツ状を呈する。調整はヘラナデ・ヘラケズリ後、縄文施文を基本とする。口縁部文様帯・頸部文様帯が認められるもの（504）と口縁部文様帯が退化したもの（502）がある。多くは縄文RL施文のみであるが、1個体だけ沈線による弧状の文様が描かれている（503）。口縁端部に刻みを有するものもある（508a）。

縄文施文の土器の包含層出土分布図を第36図に示す。508を含む一部の土器が15・16Eグリッドに分布するのを除けば、大部分が8～11・C～Fグリッドに分布し、遺構集中範囲と重なる。

（5）胎　　土

本遺跡出土土器の胎土は基本的に石英・長石・金雲母を含み、海面骨針を含むものも散見される。また、甕や壺では2～3mm程度の玉髄を含むものもある。ただし、縄文施文の土師器は大粒の石英・長石、ものによっては海面骨針を含むが、金雲母を含まない点で在地土器とは区別される。色調も在地の土器より黒色を帯び、一線を画する。

（6）遺構出土土器各説

主な遺構出土土器については口縁部残存率計測法［宇野1992］により、器種構成比率を求めた（第7・8表）。内訳は甕6割、壺・鉢が各1割、高杯・器台・小型壺などの所謂精製品が1割である。各遺物の説明は遺物観察表に記し、ここでは特記事項のみを記す。

SI155（1～25）　甕・鉢・器台・高杯・壺のほか結合器台がある。結合器台（9）は器台と口縁部の2段にわたり透孔が巡る。

SI144（26～49）　甕・壺・鉢・蓋・器台・結合器台がある。蓋（37）は摘み上面に「×」印のような箆記号がある。

SI36（50～88）　甕・壺・鉢・高杯・器台・結合器台がある。土器の出土量は多く、遺構全体の口縁部残存率に対して1割を占める。また、各器種内の組成もほかの遺構に比べて非常に多様である。甕は「く」「コ」字状の口縁をもつC類を主体に、近江系のB2類（53・64）や長めの口縁が外側に強く引き出されるD類（62）等、遺跡全体でみても少ないものが組成する。鉢についてもF4類（72）や、灯明皿に転用されたのか、口縁部が打ち欠かれ煤が付着した71のような他遺構では見られないものがある。装飾器台A1類（83）、結合器台B類（84・85）・C類（86）、器台E1類（87）は他遺跡に目を転じても決して出土量の多い遺物ではなく、これらが共伴している点は特記される。

SZ439（89～245）　当遺跡でもっとも大きい遺構で、SD311・214・209等から構成される。SZ439出土土器は遺構出土土器全体の4割強を占める。器種構成比率はおおむね甕6割、壺1割、鉢1割、高杯・器台1割である（第9表）。注目されるのは、縄文施文の土器（137a・b）である。137aは

SD209、137bはSD311から出土したが、同一個体とみられる。137bの出土層位は４層と盛土である。縄文施文の土器以外で盛土から出土した土器片は15点余りあり、出土位置はSD311の11D11・16・19グリッドである。縄文施文の土器はその他の土器と時期差がある可能性があるが、出土位置・層位からは明確に区別できない。このほか特記事項として、壺に東海系が多いことが挙げられる。I1類（430）、I2類（107）、I3類（150）が揃っており、他の遺構より充実している。また、器台関係も豊富で、装飾器台Ａ2類（165）・Ｂ類（128）、結合器台Ａ類（130・166・234・235・236）・Ｂ類（129）・Ｃ類（167・237）がある。

SI77（246～277）　甕・壺・鉢・高杯・器台・結合器台がある。遺構全体の0.5割の出土量である。口縁を打ち欠かれた壺（261）をはじめとして、精製品（供献具）の占める割合が35％と高い。全体がケズリで調整された高杯の脚部（276）は東北系の可能性がある。

SZ610（278・279）　遺物量は少なく、口縁部残存率で28/36に過ぎない。土器には甕・壺がある（第８表）。

SD114（280～282）　在地の甕とともに、縄文施文の土器が出土した。

SD40（283～286）　甕・壺・鉢がある。壺には遺跡でも数少ないＭ類（285）がある。

SD140（287～289）　甕・壺・鉢・器台がある。甕には底部穿孔のＫ類がある。

SK164（290～306）　甕・壺・鉢・高杯・器台がある。306は台部分であるが、剥落した接合部に網代痕のようなものが残る。

SD185（307～321）　甕・壺・鉢・器台がある。点数は少ないが、甕Ａ類（315）・Ｃ類（307～313）・Ｆ類（314）、壺Ａ類（316）・Ｅ類（317）・Ｐ類（318）など、変化に富む。

SK26・27（322）　甕Ｃ類（322）がある。

SD203（323～333）　甕・壺・鉢・高杯・器台・結合器台がある。壺Ｂ類（326）は有段部に刻みが巡る。

SD604（334）　縄文施文の土器（334）がある。

SK58（335～340）　甕・壺・高杯・結合器台・蓋がある。

SK59（341～348）　甕・鉢・高杯・台付壺？がある。345は一応鉢としたが、壺あるいは高杯の可能性もある。実測図も十分検討して作図したが、口径が若干広がる可能性もある。

SK118（349～358）　甕・壺・鉢・高杯がある。甕はＣ類（349～351）・Ｉ類（352）、壺はＢ類（356）・Ｃ類（353）・Ｎ類（355）に分類される。

SK157（359・360）　甕・高杯・器台・台付鉢（360）がある。器台Ｄ2類（359）は口縁端部が強くヨコナデされ、しっかり面取りされている。

SK146（361～366）　甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台がある。甕B1類（362）は口縁部に指頭圧痕が残り、端部の作りも雑である。

SK211（367）　甕・壺・鉢がある。

SK213（368～372）　甕・壺・鉢・器台がある。鉢（370）は大型だが、赤彩される精製品である。

SK228（373）　甕（373）は平底ながら球胴に近い形態である。

SK218（374）　甕がある。374は全体に磨耗が顕著である。

SK231（375）　壺・器台がある。375は磨耗が顕著。

SK229（376～378）　甕・壺・鉢がある。壺にはＡ類（377）・G1類（378）がある。

大別	器種	口残存率（X/36）	残存率比率（%）	口破片数（点）	破片数比率（%）
赤彩品（供献具）	高杯	359.5	3.91	96	3.87
	器台	662	7.20	117	4.72
	装飾器台	4.5	0.05	2	0.08
	結合器台	73.5	0.80	20	0.81
	器台か高杯	73	0.79	32	1.29
	壺	84	0.91	27	1.09
	鉢	187.5	2.04	62	2.50
	台付鉢	15	0.16	2	0.08
	壺か鉢	28	0.30	10	0.40
	小型壺	148	1.61	29	1.17
	小型鉢	26	0.28	6	0.24
	赤彩不明	36	0.39	15	0.60
	小　計	1697	18.46%	418	16.85%
非赤彩	甕	5599	60.91	1598	64.44
	壺	603.5	6.57	160	6.45
	鉢	389.5	4.24	130	5.24
	台付鉢	15	0.16	1	0.04
	甕か壺	3.5	0.04	2	0.08
	壺か鉢	2	0.02	1	0.04
	甕か壺か鉢	3	0.03	1	0.04
	小型壺	310	3.37	63	2.54
	小型鉢	444	4.83	86	3.47
	蓋	126	1.37	20	0.81
	小　計	7495.5	81.54%	2062	83.15%
主要遺構全体　合計		9192.5	100.00%	2480	100.00%

第７表　正尺Ｃ遺跡　主要遺構出土土器器種構成比率

大別	器種	口残存率（X/36）	残存率比率（%）	大別残存比率（%）	口破片数（点）	破片数比率（%）	大別残存比率（%）
高杯	高杯	359.5	3.91	3.91	96	3.87	3.87
器　台	器台	662	7.20	8.05	117	4.72	5.61
	結合器台	73.5	0.80		20	0.81	
	装飾器台	4.5	0.05		2	0.08	
小型壺小型鉢	小型壺（赤彩）	148	1.61	10.09	29	1.17	7.42
	小型壺	310	3.37		63	2.54	
	小型鉢（赤彩）	26	0.28		6	0.24	
	小型鉢	444	4.83		86	3.47	
鉢	鉢（赤彩）	187.5	2.04	6.6	62	2.50	7.86
	鉢	389.5	4.24		130	5.24	
	台付鉢（赤彩）	15	0.16		2	0.08	
	台付鉢	15	0.16		1	0.04	
甕	甕	5599	60.91	60.91	1598	64.44	64.44
壺	壺（赤彩）	84	0.91	7.48	27	1.09	7.54
	壺	603.5	6.57		160	6.45	
蓋	蓋	126	1.37	1.37	20	0.81	0.81
不　明	壺か鉢	2	0.02	0.09	1	0.04	0.16
	甕か壺	3.5	0.04		2	0.08	
	甕か壺か鉢	3	0.03		1	0.04	
	器台か高杯	73	0.79	0.79	32	1.29	1.29
	壺か鉢（赤彩）	28	0.30	0.30	10	0.40	0.40
	赤彩不明	36	0.39	0.39	15	0.60	0.6
合　計		9192.5			2480		

第８表　正尺Ｃ遺跡　主要遺構出土土器大別器種構成比率

遺　構	大別	器　種	口縁部残存率合計（x/36）	口縁部残存率比率（%）	口縁部破片数合計（点）	口縁部破片数比率（%）
SZ439-SD214・SD209・SD311	供献具	高杯	115	2.89	29	2.68
		器台	279.5	7.01	60	5.55
		結合器台	39.5	1.00	11	1.02
		装飾器台	2	0.05	1	0.10
		器台か高杯	57	1.43	29	2.68
		壺	41	1.03	12	1.11
		鉢	97.5	2.45	36	3.33
		壺か鉢	28	0.70	10	0.93
		小型壺	79.5	2.00	19	1.76
		小型鉢	14	0.35	5	0.46
		赤彩不明	36	0.90	15	1.39
		甕	2241	56.24	637	58.93
		壺	267	6.70	74	6.85
		鉢	156	3.92	53	4.90
		壺か甕	2	0.05	1	0.10
		壺か鉢	2	0.05	1	0.10
		蓋	101	2.53	12	1.11
		小型壺	206	5.17	37	3.42
		小型鉢	205.5	5.16	38	3.52
		台付鉢	15	0.38	1	0.10
	合　計		3984.5	100.00	1081	100.00

遺　構	大別	器　種	口縁部残存率合計（x/36）	口縁部残存率比率（%）	口縁部破片数合計（点）	口縁部破片数比率（%）
SZ610-SD496・SD602・SD603・SD604	供献具	壺	3.5	12.50	2	13.33
		甕	21.5	76.79	11	73.33
		壺	1	3.57	1	6.67
		小型壺	2	7.14	1	6.67
	合　計		28	100.00	15	100.00

第９表　正尺Ｃ遺跡　SZ439・610出土土器比率

遺構名	大別	器種	口残存率（X/36）	残存率比率（%）	口破片数（点）	破片数比率（%）
SZ439-SD209	供献具	高杯	52	3	11	2
		器台	112.5	6	20	5
		結合器台	39.5	2	11	2
		器台か高杯	46.5	3	23	5
		壺	4	0	2	0
		鉢	14	1	6	1
		小型壺	44.5	2	12	3
		甕	1041.5	58	276	62
		壺	93.5	5	22	5
		壺か甕	2	0	1	0
		鉢	90	5	27	6
		台付鉢	15	1	1	0
		小型鉢	117.5	7	25	6
		小型壺	49	3	4	1
		蓋	60	3	2	0
	小　計		1781.5	100	443	100
SZ439-SD214	供献具	高杯	57	5	16	5
		器台	109	9	29	9
		高杯・器台	10.5	1	6	2
		壺	21	2	4	1
		鉢	29.5	2	12	4
		小型鉢	7	1	2	1
		小型壺	17	1	2	1
		赤彩不明	36	3	15	4
		甕	601.5	50	187	55
		壺	99.5	8	30	9
		鉢	31	3	9	3
		蓋	24	2	5	1
		小型壺	67	6	11	3
		小型鉢	83	7	12	4
	小　計		1193	100	340	100
SZ439-SD311	供献具	高杯	6	1	2	1
		器台	58	6	11	4
		装飾器台	2	0	1	0
		壺	16	2	6	2
		鉢	54	5	18	6
		壺か鉢	28	3	10	3
		小型壺	18	2	5	2
		小型鉢	7	1	3	1
		甕	598	59	174	58
		壺	74	7	22	7
		鉢	35	3	17	6
		壺か鉢	2	0	1	0
		蓋	17	2	5	2
		小型壺	90	9	22	7
		小型鉢	5	0	1	0
	小　計		1010	100	298	100
SZ610-SD496	供献具	壺	3.5	64	2	67
		甕	2	36	1	33
	小　計		5.5	100	3	100
SZ610-SD602		甕	6	75	2	67
		小型壺	2	25	1	33
	小　計		8	100	3	100
SZ610-SD603		甕	1.5	100	1	100
SZ610-SD604		甕	12	92	7	88
		壺	1	8	1	13
	小　計		13	100	8	100
SB81-P72		甕	2	100	1	100
SB81-P73		甕	1	100	1	100
SB731-P471		甕	2	100	1	100
SB731-P605		甕	4	100	2	100
SI　36	供献具	高杯	69.5	7	13	6
		器台	84	9	4	2
		結合器台	5	1	1	1
		小型壺	33	3	1	1
		鉢	26	3	8	4
		小型鉢	12	1	1	1
		甕	561	59	145	70
		壺	26	3	7	3
		鉢	29	3	12	6
		小型壺	33	3	10	5
		小型鉢	65	7	4	2
	小　計		943.5	100	206	100
SI　77	供献具	器台	49	9	9	7
		装飾器台	2.5	0	1	1
		結合器台	11	2	2	1
		高杯	95	18	24	18
		鉢	3	1	1	1
		小型壺	19	4	4	3
		甕	272.5	52	74	55
		壺	23	4	8	6
		鉢	17.5	3	5	4
		甕か壺か鉢	3	1	1	1
		小型壺	12	2	2	1
		小型鉢	19	4	4	3
	小　計		526.5	100	135	100
SI144	供献具	器台	11	3	1	1
		器台か高杯	16	4	3	2
		高杯	1	0	1	1
		小型壺	10	2	2	1
		壺	12	3	7	5
		鉢	10	2	5	3
		甕	221	53	81	54
		壺	35	8	14	9
		鉢	76	18	29	19
		蓋	3	1	1	1
		小型鉢	19	5	6	4
	小　計		414	100	150	100
SI155	供献具	器台	29	13	3	5
		高杯	10	4	3	5
		壺	2	1	1	2
		鉢	33	14	7	12
		甕	120	52	32	56
		鉢	10.5	5	3	5
		小型鉢	25	11	8	14
	小　計		229.5	100	57	100

第10表　正尺Ｃ遺跡　主要遺構出土土器比率（1）

遺構名	大別	器種	口残存率 (X/36)	残存率 比率（%）	口破片数 （点）	破片数 比率（%）
SD　40	供献具	小型壺	4.5	14	2	13
		甕	20.5	65	10	67
		壺	4	13	2	13
		鉢	2.5	8	1	7
	小　計		31.5	100	15	100
SD114	供献具	高杯	3	4	2	7
		甕	67	87	22	81
		壺	3	4	2	7
		小型壺	4	5	1	4
	小　計		77	100	27	100
SD140		甕	70	88	28	85
		壺	3	4	1	3
		鉢	5	6	3	9
		小型壺	2	3	1	3
	小　計		80	100	33	100
SD185	供献具	器台	31	6	14	9
		器台か高杯	1	0	1	1
		甕	399	80	123	75
		壺	35.5	7	10	6
		小型壺	3	1	1	1
		鉢	31	6	14	9
	小　計		500.5	100	163	100
SD203	供献具	高杯	22	11	9	18
		器台	18	9	3	6
		甕	114	55	25	49
		壺	37	18	9	18
		鉢	12	6	4	8
		小型鉢	3	1	1	2
	小　計		206	100	51	100
SD215		甕	3	100	1	100
SD216		甕	3	100	1	100
SK　21		甕	2.5	100	1	100
SK　23		甕	100	96	25	96
		鉢	4	4	1	4
	小　計		104	100	26	100
SK　26・27		甕	17	100	4	100
SK　32	供献具	器台	2	22	1	33
		甕	7	78	2	67
	小　計		9	100	3	100
SK　56		甕	15.5	100	4	100
SK　58	供献具	高杯	28.5	24	11	28
		結合器台	18	15	6	15
		甕	72	60	21	54
		鉢	1	1	1	3
	小　計		119.5	100	39	100
SK　59	供献具	高杯か鉢	1	1	1	3
		鉢	5	6	2	6
		甕	76	93	29	91
	小　計		82	100	32	100
SK　63		甕	14	100	6	100
SK118	供献具	高杯	2	1	1	3
		小型壺	2	1	1	3
		甕	183	86	30	77
		壺	3	1	2	5
		鉢	1	0	1	3
		小型壺	6	3	3	8
		小型鉢	17	8	1	3
	小　計		214	100	39	100
SK136		壺	2	100	1	100
SK146		甕	46	46	13	48
		壺	2	2	1	4
		鉢	3	3	1	4
		蓋	22	22	7	26
		小型鉢	28	28	5	19
	小　計		101	100	27	100
SK157	供献具	器台	17	39	4	25
		高杯	5	11	2	13
		甕	22	50	10	63
	小　計		44	100	16	100
SK164	供献具	器台	46	13	2	2
		壺	27	8	7	7
		鉢	12	3	4	4
		甕	206	58	72	70
		壺	10	3	3	3
		鉢	15	4	7	7
		小型壺	30	8	4	4
		小型鉢	10.5	3	4	4
	小　計		356.5	100	103	100
SK211	供献具	鉢	3	12	1	20
		甕	13	52	2	40
		壺	9	36	2	40
	小　計		25	100	5	100
SK213	供献具	器台	26	31	6	25
		台付鉢	15	18	2	8
		甕	22	27	10	42
		壺	6	7	2	8
		小型鉢	14	17	4	17
	小　計		83	100	24	100
SK218		甕	16	100	5	100
SK226	供献具	鉢	1	25	1	50
		甕	3	75	1	50
	小　計		4	100	2	100
SK228		甕	12	100	4	100
SK229		甕	26	78	11	79
		壺	5.5	16	2	14
		鉢	2	6	1	7
	小　計		33.5	100	14	100
SK231	供献具	器台	4	38	1	25
		壺	1.5	14	1	25
		小型壺	5	48	2	50
	小　計		10.5	100	4	100
SK266		小型鉢	7	100	2	100
SK313		甕	10	100	4	100
SK456		甕	94	98	25	96
		壺	2	2	1	4
	小　計		96	100	26	100
SK457		甕	35	100	9	100

第11表　正尺Ｃ遺跡　主要遺構出土土器比率（2）

遺構名	大別	器種	口残存率 (X/36)	残存率 比率（%）	口破片数 （点）	破片数 比率（%）
SK481		甕	26	31	8	50
		壺	19	23	2	13
		鉢	28	33	4	25
		小型鉢	11	13	2	13
	小　計		84	100	16	100
SK482		甕	23	100	9	100
SK654		甕	4	50	2	67
		壺	4	50	1	33
	小　計		8	100	3	100
SK661		甕	3	100	1	100
P　41		甕	2	100	1	100
P　49		甕	5.5	100	3	100
P　57	供献具	壺	2.5	100	1	100
P120		鉢	2.5	100	1	100
P124		甕	4	100	1	100
P126		鉢	3	100	2	100
P166	供献具	高杯	2.5	56	1	50
		甕	2	44	1	50
	小　計		4.5	100	2	100
P169		甕	2	100	1	100
P183		甕	4	100	1	100
P187		甕	4	57	1	50
		鉢	3	43	1	50
	小　計		7	100	2	100
P301		器台	12.5	24	2	18
		甕	37.5	71	8	73
		壺	3	6	1	9
	小　計		53	100	11	100
P321		甕	2	100	1	100
P499		甕	4	100	2	100
P505		甕	14	100	3	100
SX217		壺	25	100	4	100
SX228		甕	16	100	3	100
SX327		甕	21	100	5	100
SX328		甕	49	62	15	83
		壺	26	33	2	11
		鉢	4	5	1	6
	小　計		79	100	18	100
SX401		甕	52	83	15	83
		壺	6	10	1	6
		鉢	4.5	7	2	11
	小　計		62.5	100	18	100
SX402	供献具	器台	18	13	1	3
		甕	84.5	59	26	70
		壺	28	20	5	14
		小型鉢	12	8	5	14
	小　計		142.5	100	37	100
SX405	供献具	器台	26	14	5	9
		甕	143	74	43	80
		壺	15	8	4	7
		鉢	2	1	1	2
		小型鉢	6	3	1	2
	小　計		192	100	54	100
SK485	供献具	器台	9	25	1	20
		甕	27	75	4	80
	小　計		36	100	5	100
SX487		甕	9	100	4	100
SX533	供献具	高杯	9	38	1	17
		甕	6	26	1	17
		甕か壺	1.5	6	1	17
		壺	7	30	3	50
	小　計		23.5	100	6	100
SX662		壺	3	100	1	100
SX768		甕	24	83	6	75
		鉢	5	17	2	25
	小　計		29	100	8	100

註1）大別で「供献具」としたものは、赤彩された精製品を対象とした。希に赤彩されない高杯等もあるがこれらも含む。
註2）細片のため口径が不明の場合は、各器種の口径の平均値に当てはめて口縁部残存率を求めた。
甕17㎝、壺18.5㎝、鉢14㎝、
高杯19.5㎝、器台12.5㎝、赤彩壺14.5㎝、小型壺10.0㎝、赤彩不明15㎝

第12表　正尺Ｃ遺跡　主要遺構出土土器比率（3）

P319（379）　縄文施文の土器細片（379）がある。

SK456（380～382）　甕・壺・器台がある。382は器台脚部としたが、受部との剥落痕にあたる部分は他の器面と同様の色調を呈し、「剥落痕」という雰囲気ではない。加えて、ほかの器台脚部の剥落面に見るような接合のための刻み等も観察されない。むしろ、もともと蓋状の器形で中央に穿孔されていると捉えた方が適当なようである。

SK457（383～385）　甕・壺がある。甕にはC類（384）とH類（383）がある。

SK481（386～389）　甕・壺・鉢がある。鉢A類（386）は平底のがっちりした作りである。

SX405（390～396）　甕・壺・鉢・器台がある。口縁端部を折り返す器台D3類は遺跡全体でも少数である。

SX768（397）　甕・鉢がある。

SX217（398）　壺がある。壺の底部と見られる398の底面には「×」印の箆記号がある。図示していない壺A類は器面の磨耗が顕著である。

SX402（399～406）　甕・壺・鉢・器台がある。鉢H（406）はいびつだが、重量感のある土器である。

SK23（407～411）　SK23は9D12・17周辺の遺物集中域である。甕・鉢・縄文施文の土器がある。遺物の依存状況は良好である。

SX533（412～415）　SX533は7D11周辺の遺物集中域である。甕・壺・高杯・結合器台がある。壺I1類（413）はボタン状浮線文をもつ。当遺跡の壺I1類の多くが棒状浮線文である中では珍しい存在である。

SX403（416）遺物集中域であるが、位置の詳細は不明。突帯に刺突が巡る壺M類（416）は、当遺跡では唯一の出土品である。

SK485（417）　器台（417）がある。

（7）包含層出土土器各説（418～510）

甕（418～427・440）　B1類の418は口縁端部が先細るような弱々しい印象を受ける。425は口縁部にハケメ原体を押し付けたような痕跡がある。あるいは、ハケメのあとのヨコナデで消え残っただけのものかもしれない。部分的にしか残存しないので、連続的な施文となるのかは不明である。484は口縁端部に刻みが巡る。440は壺のような器形であるが、スス等が付着するので甕とした。

壺（428～439・441～444・448～450）　485は底面にヘラ記号がある。448はミニチュア土器のような小型で粗雑な作りの土器である。

鉢（445～447・451～471）　461は底部外面の孔周辺が浅い皿状に窪んでいる。

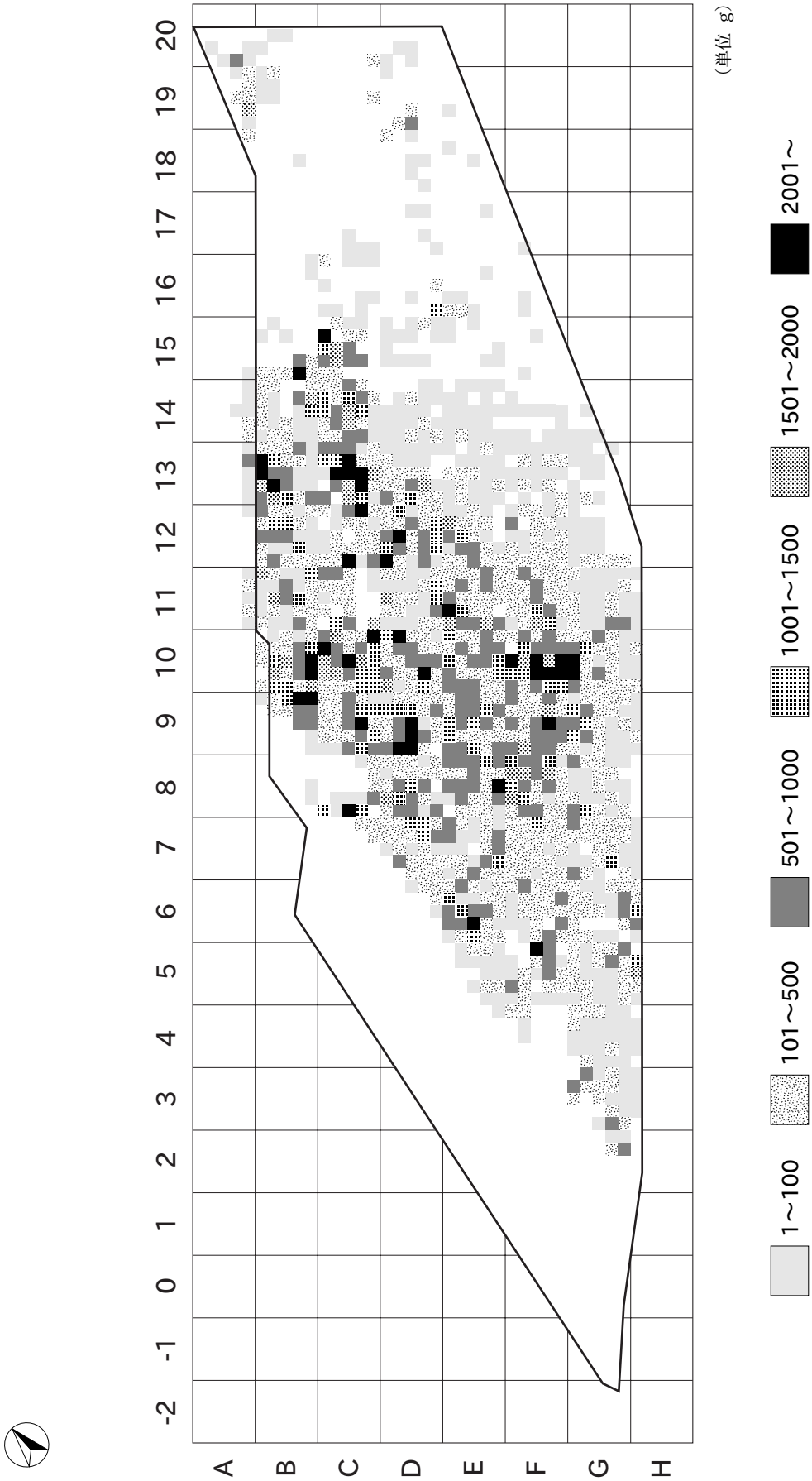
高杯（472～479）　474・475は非常に小型で薄い作りなので、ミニチュア土器の可能性もある。

結合器台（480～485）　480は脚部と受部を貫通する孔も、装飾のための透孔もない。器面は非常に丁寧に磨かれている。

装飾器台（486）　486は脚部に二等辺三角形の透孔がある。北陸の装飾器台の口縁部に同様の透孔をもつ例はあるが、脚部にある例は見ない。弥生時代の中部高地の栗林式や箱清水式に脚部に三角形の透孔をもつものがあるが、それとの関連は不明である。

器台（487～494）　494は器壁が非常に薄く、脆い印象を受ける。

なお、土器破片の中には製作過程で粘土を接合した部分が破損面となっているものが各器種で見られ



第37図　正尺Ｃ遺跡　包含層出土土器重量別分布図

た。この中には、接合面の接着をよくするためにつけた刻みや凹みが観察されるものも存在した。（図版136-外２～11）ほかに籾圧痕のある破片が１点ある（図版136-外1）。

蓋（495～501）　496・501は摘みが非常に低い。

縄文施文の土器（502～510）　503は本遺跡で唯一縄文地文に沈線で施文される個体である。体部に横走する沈線が引かれ、その下に弧線が連続する文様構成が推定される。ただし。503bは拓本右上にも沈線らしきものがあるので、ほかの文様構成をとっていた可能性もある。503dは底部との境まで縄文が施文される。504は口縁部に縄文帯をもち、頸部無文帯を挟んで胴部文様帯へ至る。胴部文様帯は縄文が施文されるが、最上段のみ付加条が用いられ、２段目以下は普通の縄文LRが用いられる。507aの口縁部は有段を呈し、端部には丸棒状工具による連続刺突が巡る。口縁部直下の体部にはケズリ・ハケメが施される。同一個体と推定される507bには縄文が施文される。

B　古墳時代前期の土製品・石器・木製品・鉄製品（図版79・136）

（1）土　製　品（511～516）

紡錘車（511）　１点出土した。施文前に表面から裏面に向かって穿孔されている。表面は基本的に左側から右側に向かって施文が進行している。始めに左から２～４本目の弧線、次に左から１・２本目の逆「V」字が引かれている。引き続き右半分にも逆「V」字が上から順に４本引かれ、全体として「M」字状を呈する。最後に右半分の逆「V」字内に「N」字状の波線が４本充填され、仕上げに右下に２本弧線がひかれている。裏面は始めに外周を縁取る２本が引かれ、次に中央の孔の周りに１本円が描かれている。その後、外周と中心の円の間を充填しながら、外側から内側の順で花形の模様が描かれている。

土錘（512）　管状のものが２点出土した。512の表面は平滑で、弱い光沢を帯びる。

ミニチュア土器（513）　513のほかにもミニチュアかと思われる小型土器は数点出土したが、成形が手づくねで、明らかにほかの土器と異質な作りのものはこの１点である。底面には篦状工具の痕跡が残る。

円盤状土製品（514）　１点出土した。胎土は土器と異なり、繊維を含む。表裏面に繊維脱落痕のようなもののほか、篦状工具による線描が認められる。

土器片円盤（515・516）　515はSK164出土だが、同遺構ではもう１点同様の遺物が出土した。土器片円盤の周縁は打ち欠きではなく、摩耗している。

（2）石　　器（517～526）

管玉（517・518）　SZ439－SD311から２点、近接して出土した。

砥石（519・521～523・524・525）　砥石は７点出土し、２点が筋砥石である。522・523は砂岩製の筋砥石である。519・524・525は金属製品を研磨の対象としたのか、鋭い擦痕が認められる。519は下端の破損面にも擦痕がある。８はSI36床面出土で、被熱している、磨痕は顕著ではない。

磨石類（520）　１点出土した。520は１面に磨り面がある。

両極石器（526）　１点出土した。526は鉄石英（赤玉）製である。ほかに同石材の砕片１点がある。

（3）木　製　品（527・528）

柱根（527・528）　527はP620、528はP498出土である。材質はクリである。528の末端は面取りの痕跡が認められる。

（4）鉄　製　品（529）

不明鉄製品（529）　長方形の板の上下が折り返されているが、性格は不明である。SI144から出土したので一応古墳時代の所産としたが、遺存状況が比較的良好なので当該期のものではない可能性もある。

C　古代以降の遺物（図版80・137）

（1）土　　器（530～532）

須恵器（530・531）　遺跡全体で古代の須恵器無台杯片は３点出土した。いずれも小片である。530は体部に篦状工具による平行沈線が縦に引かれている。

珠洲焼（532）　遺跡全体でこの珠洲焼甕破片（532）１点のみ出土した。

（2）木　製　品（533～547）

大部分が近世の旧流路から出土した（533～541）。この流路から近世陶磁器はほとんど出土していないが、流路の形成時期からみて出土木製品は近世の所産と推定される。箸状木製品（536・537）、下駄（538）、漆器椀（539～541・544・545）、曲物側板（542）、杓子（543）などがある。

6　樹種同定結果

A　正尺Ｃ遺跡から出土した木材・炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

正尺Ｃ遺跡は、標高約0.8mの自然堤防上に位置し、遺構・遺物は、標高０～-0.8mで検出される。今回の発掘調査により、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝、柱穴などの遺構が検出されている。これらの遺構は、出土した土器から、古墳時代前期の遺構と考えられる。竪穴住居跡や土坑の中には、それぞれの遺構で使用されたと考えられる炭化材が出土しているものもある。また、掘立柱建物跡等の柱穴内には、柱材の一部が残存しているものも認められた。

今回の分析調査では、これらの木材や炭化材について樹種同定を行い、当時の用材や古植生などに関する資料を得る。

（1）試　　料

試料は、各遺構から出土した木材・炭化材９点（試料番号１～９）である。このうち、試料番号８、９を除く７点が炭化材である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに第13表に記した。

（2）方　　法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観

察し、種類を同定する。

（3）結　　果

樹種同定結果を第13表に示す。木材（試料番号8、9）は、2点とも落葉広葉樹のクリに同定された。炭化材（試料番号1～7）は、全て落葉広葉樹で、6種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・カツラ・サクラ属・エゴノキ属・トネリコ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・**コナラ属コナラ亜属クヌギ節**（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・**コナラ属コナラ亜属コナラ節**（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. Prinus）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・**クリ**（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

試料には年輪界が認められないが、道管径の変化から環孔材と判断できる。小道管は火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・**カツラ**（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合して、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性?型、1～2細胞幅、1～30細胞高。

・**サクラ属**（*Prunus*）　　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性?型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・**エゴノキ属**（*Styrax*）　　エゴノキ科

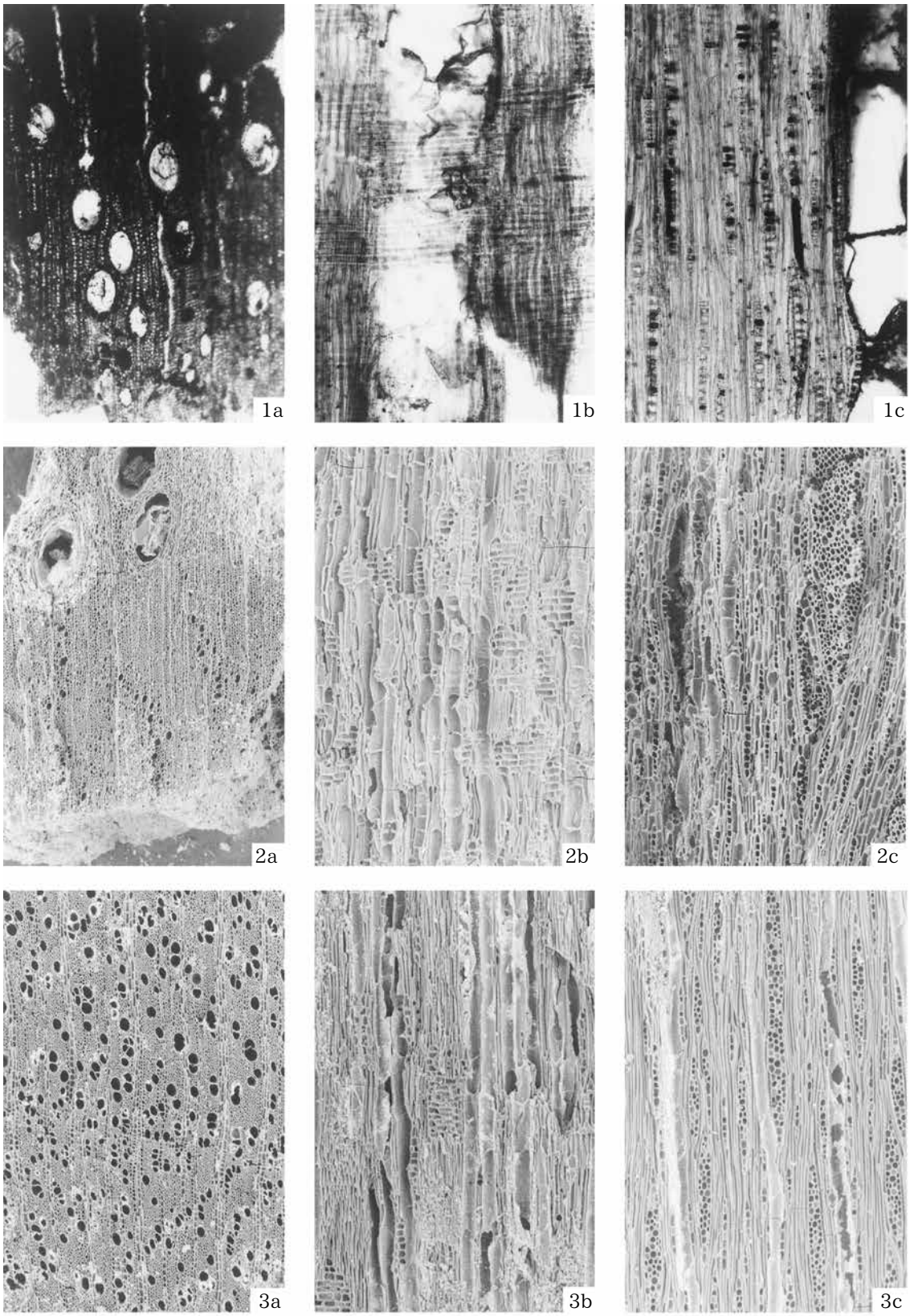
散孔材で、横断面では楕円形、単独または2～4個が複合して散在し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性?型、1～3細胞幅、1～20細胞高。

・**トネリコ属**（*Fraxinus*）　　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が放射芳香に複合し、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

番号	実測№	出土層位	グリッド	取上番号	地区	状態	樹　種
1	SI77	1層	11C8	№487	2区	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
2	P187	3層	8C21-8D1		3区	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	SX405	Ⅱ層下	11E2	№134	6区	炭化材	サクラ属
4	SK482	1層	8F10	№12	6区	炭化材	トネリコ属
5	SK654	1層	7F21,7G1・2	№5	6区	炭化材	サクラ属
6	SX768	1層	3G10	№1	6区	炭化材	カツラ
7	SD214				4区	炭化材	エゴノキ属
8	P498	6層	9E10		6区	生木	クリ
9	P620	7層	7F19・24		6区	生木	クリ

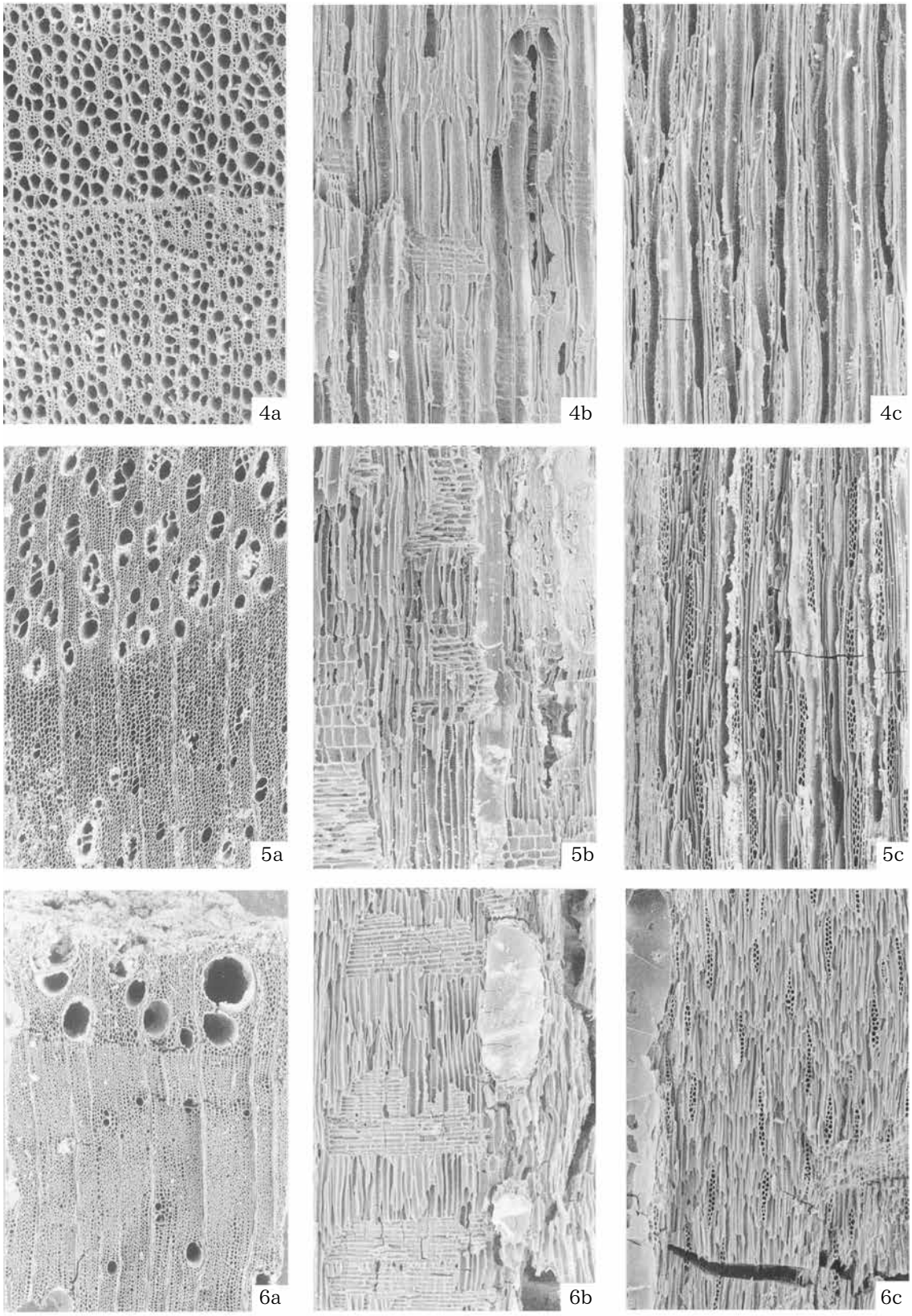
第13表　樹種同定結果



1．クリ（試料番号9）
2．コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号1）
3．カツラ（試料番号6）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：1a
200μm：1b, c
200μm：2, 3a
200μm：2, 3b,c

第38図　木材・炭化材（1）



4．サクラ属（試料番号3）
5．エゴノキ属（試料番号7）
6．トネリコ属（試料番号4）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第39図　木材・炭化材（2）

（4）考　　察

木材・炭化材は、古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の柱穴、土坑、溝から出土している。このうち、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の木材・炭化材は柱材などの構築材、土坑から出土した炭化材は燃料材などの可能性がある。

住居跡から出土した炭化材にはコナラ節、柱穴から出土した木材・炭化材にはクヌギ節とクリが認められた。いずれも堅く強度の高い材質を有する種類であり、柱穴に認められたクリは耐朽性も優れている［平井1979、1980］。構築材には、強度を考慮した用材が行われ、柱材では耐朽性なども考慮されていたことが推定される。これらの種類のうち、クヌギ節とコナラ節は、関東地方を中心とした地域で、古墳時代の住居構築材に多く利用されていたことが指摘されている［千野1991；高橋・植木1994］。今回の結果から、本地域でもこれらの種類が住居構築材として多く利用されていたことが推定される。また、クリは、新潟県内の縄文時代や平安時代の住居構築材・柱材に多く認められている［西田1977；川村1983；越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社1992；パリノ・サーヴェイ株式会社1997］。今回の結果から、クリは古墳時代にも柱材として利用されていたことが推定される。

土坑から出土した炭化材には、トネリコ属とサクラ属が認められ、これらの種類が燃料材として利用されていたことが推定される。遺構によって種類が異なることから、目的等により用材が異なっていた可能性があるが、試料数が少ないため、詳細は不明である。いずれも比較的普通に見られる種類であることから、遺跡周辺に生育していた種類を利用したことが推定される。SD214、SX405、SX768から出土した炭化材については、用途などの詳細が不明である。これらの種類では、サクラ属、カツラ、エゴノキ属が認められた。このうち、エゴノキ属とサクラ属は、普通に見られる種類であり、土坑と同様に遺跡周辺に生育していた種類を利用したと考えられる。カツラは、谷沿いなどに生育する種類であることから、周辺の河川沿いなどに生育していた可能性がある。

今後、周辺低地で花粉分析などによる古植生復原を行い、それらの結果と合わせた検討をすることが望まれる。

引用文献

千野裕道　1991　「縄文時代に二次林はあったか　－遺跡出土の植物性遺物からの検討－」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅹ　p.215-249

平井信二　1979　『木の事典』第２巻　かなえ書房

平井信二　1980　『木の事典』第４巻　かなえ書房

川村恵洋　1983　「曽根遺跡出土木材の識別」『新潟大学農学部演習林報告』16　p.75-82

越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社　1992　『岩田遺跡出土遺物自然科学分析報告書』 p.33

西田正規　1977　「樹種同定」『津南町文化財調査報告書 №12 新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会　p.40-41

パリノ・サーヴェイ株式会社　1997　「岩田遺跡第２次調査における自然科学分析調査報告」『越路町文化財報告書第21輯 岩田遺跡 第２次発掘調査報告書』 越路町教育委員会　p.18-24

高橋　敦・植木真吾　1994　「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYNO』2　パリノ・サーヴェイ株式会社　p.5-18

B　正尺Ｃ遺跡出土木製品の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

ここでは、古墳時代前期～近世であるが時期は特定できていない木製品15点の樹種同定結果を報告する。

（2）試料と方法

新潟県埋蔵文化財調査事業団において木製品から採取された切片をもとに、樹種同定を行なった。

採取された材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の薄片を、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）にした。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し、材組織の特徴を観察し、同定した。

材組織標本は、新潟県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

（3）結　　果

同定結果の一覧を第14表に示した。

15点から検出された分類群は、針葉樹のヒノキ（3点）・スギ（3点）、広葉樹のブナ属（5点）・モクレン属（2点）・ハンノキ属（1点）・ケヤキ（1点）、合計６分類群であった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向または特徴的な材組織写真を提示した。

スギ（Cryptomeria japonica D.Don）　　スギ科　図版１　1a-1c（遺物№.9　報告№.536）　2c（遺物№.3　報告№.535）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は多く、晩材の仮道管壁は極めて厚く肥厚している。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大型、孔口は楕円形に大きく開いたスギ型、１分野に主に２個ある。壁孔縁は典型的なスギ型よりやや厚いものが多く見られた。また、遺物№.3は分野壁孔の輪郭は円形で孔口は広く開きヒノキ科ネズコの分野壁孔に類似しているが、分野壁孔の数は２個前後とネズコより少なく、１年輪分がない切片であったことからも、スギの晩材部の分野壁孔と判断した。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。

ヒノキ（Chamaecyparis obtusa Endl.）　　ヒノキ科　図版１　3a・3c（遺物№.1・報告№.533）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。早材から晩材の移行が急で晩材部の量が非常に少ない試料（3a）と、移行は緩やか（4a）な試料がある。分野壁孔の輪郭は円形、孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型、１分野に主に２個が水平に整然と配列している。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育する常緑高木である。

ハンノキ属（Alnus）　　カバノキ科　図版２　5a-5c（遺物№.14　報告№.546）

単独または２～３個の小型の管孔が複合し管孔の分布はやや疎らな散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は階段数が15～20本前後の階段穿孔である。放射組織はほぼ単列同性、道管との壁孔は小型で交互状に密在する。横断面の切片は非常に狭く小さいため、集合放射組織の有無は不明である。そのため、集合放射組織があるハンノキ亜属と、放射組織は主に単列であるヤシャブシ亜属との識別はできていない。

保存処理遺物№	報告№	遺物種類	地区	遺構	層位	グリッド	層位	備考	樹種	時期
1	533	不明	１区	旧河道	上				ヒノキ	古墳時代前期～近世
2	534	不明(棒状)	１区	旧河道	上				ヒノキ	古墳時代前期～近世
3	535	破片	１区	旧河道	上				スギ	古墳時代前期～近世
5	537	箸状木製品		3Tr旧河道	V				スギ	古墳時代前期～近世
6	540	漆器		旧河道					ブナ属	古墳時代前期～近世
7	539	漆器		旧河道					ブナ属	古墳時代前期～近世
8	538	下駄		旧河道	上				モクレン属	古墳時代前期～近世
9	536	箸状木製品		3Tr	V				スギ	古墳時代前期～近世
11	547	不明		3Tr		3A2			モクレン属	古墳時代前期～近世
12	544	漆器				9C4			ブナ属	古墳時代前期～近世
14	546	杭状				11C4			ハンノキ属	古墳時代前期～近世
15	543	杓子					耕作土下黒色土		ブナ属	古墳時代前期～近世
18	541	漆器	３区	旧河道				農道下	ケヤキ	古墳時代前期～近世
20	545	漆器						不明	ブナ属	古墳時代前期～近世
21	542	部材(板状)				8E21		カクラン	ヒノキ	

第14表　正尺Ｃ遺跡出土木製品樹種同定結果

ヤシャブシ亜属は寒帯から暖帯の山地に生育する落葉小高木または低木である。ハンノキ亜属は主に亜寒帯から暖帯の陽光地や湿地に生育する。

ブナ属（Fagus）　　ブナ科　図版２　6a-6c（遺物№20　報告№545）

丸みをおびた小型の管孔が密在し除々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、細胞幅が太く大きなものが含まれ、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は北海道南部以南の温帯域の極相林を構成する主要樹種で、大木となる落葉広葉樹である。

モクレン属（Magnolia）　　モクレン属　図版２　7a-7c（遺物№8　報告№538）

小型の管孔が単独または２～数個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は単穿孔、内腔には水平や弧状のチロースがある。放射組織は同性に近い異性、主に２細胞幅、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。

モクレン属は暖帯または温帯に分布する落葉高木または小高木である。北海道以南の山地に生育するホオノキ・コブシ、本州と九州に生育するタムシバ、関東北部以西に生育するオオヤマレンゲ、中部地方西南部に生育するシデコブシがあるが、材組織から種類は特定できない。

ケヤキ（Zelkova serrata（Thunb.）Makino）　　ニレ科　図版３　8a-8c（遺物№18　報告№541）

年輪の始めに大型の管孔が１層配列し、その後は非常に小型の管孔が多数集合して塊状・接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は、主に５～10細胞幅の紡錘形、同性に近く見えるが放射断面では上下端に結晶細胞や方形細胞や大型の細胞が見られる事から、同性のニレ属ではなくケヤキと同定した。

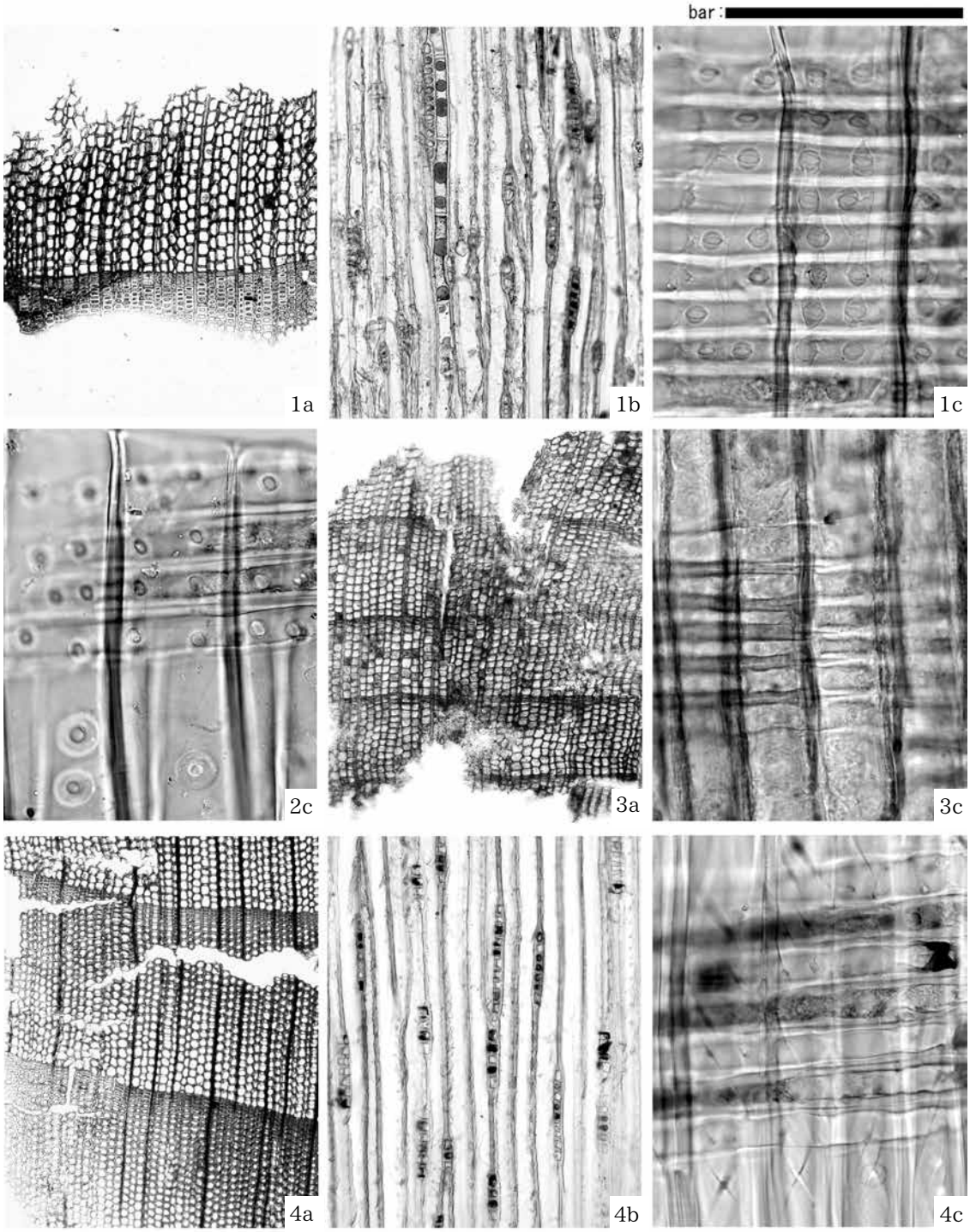
ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。

（4）考　　察

漆器５点は、４点がブナ属、１点がケヤキであり、やはりよく利用される樹種が選択利用されていた。杓子も漆器木胎と同様に木地師により作成されることから、ブナ属が利用されていたことは符号する。

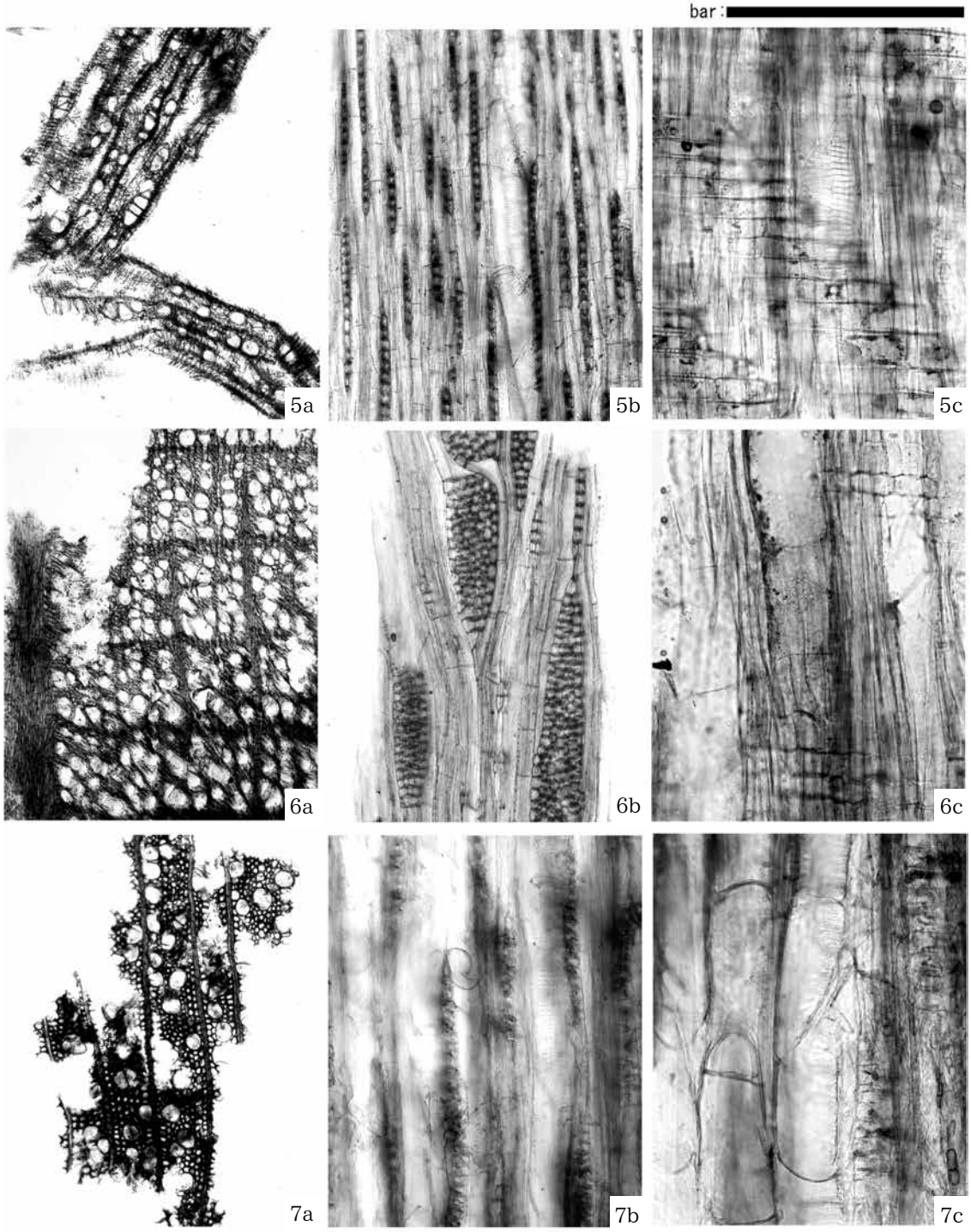
下駄はモクレン属であった。下駄材として近世ではモクレン属ホオノキの利用がよく知られているが、材組織からこの下駄材がホオノキと特定はできない。

杭状はハンノキ属であったことから､周辺で入手容易な雑木であるハンノキ属を伐採利用したと想像される。



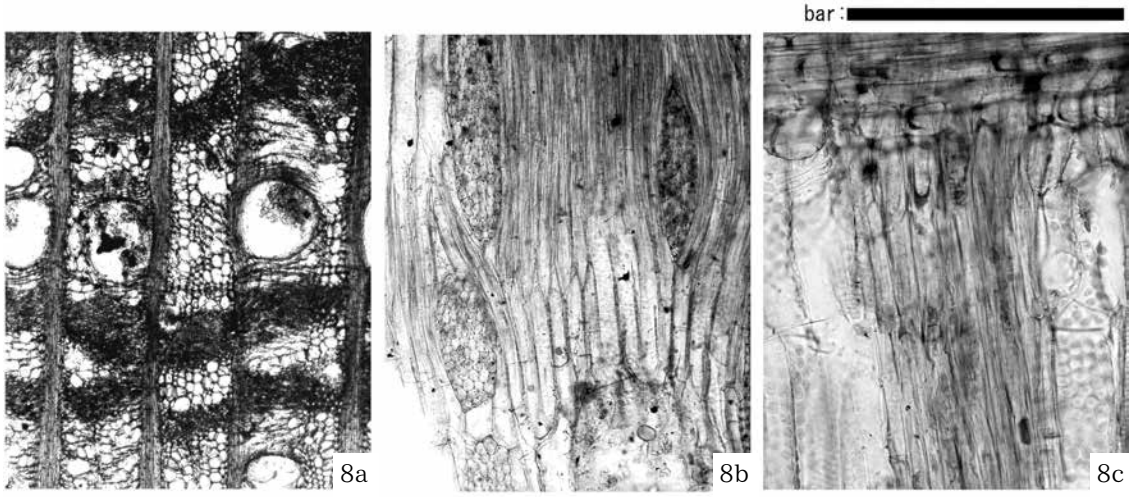
1a-1c：スギ（遺物No.9 報告No.536）　2c：スギ（遺物No.3 報告No.535）
3a・3c：スギ（遺物No.1 報告No.533）　4a-4c：ヒノキ（遺物No.17 報告No.528）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面　bar：a=0.1mm、b=0.4mm、c=0.1mm

第40図　正尺Ｃ遺跡　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（1）



5a-5c：ハンノキ属（遺物No.14 報告No.546）　6a-6c：ブナ属（遺物No.20 報告No.545）
7a-7c：モクレン属（遺物No.8 報告No.538）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面　bar：a=1.0mm、b=0.4mm、c=0.2mm

第41図　正尺Ｃ遺跡　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（2）



8a-8c：ケヤキ（遺物No.18 報告No.541）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面
bar：a=1.0mm、b=0.4mm、c=0.2mm

第42図　正尺Ｃ遺跡　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（3）

箸状木製品２点は共にスギであった。スギは県内ではもちろん日本海側の弥生時代以降から様々な木製品に多く利用されている樹種で、今回の試料中では箸状木製品に特徴的にスギが確認された。

ヒノキは県内には分布していないが、旧河道上層から多く検出されたことから、時期は特定できないが新しい時代に材または製品として持ち込まれるようになったと思われる。

7　ま　と　め

A　遺　　物

（1）正尺Ｃ出土土器の編年的位置付け

正尺Ｃ遺跡からは古墳時代前期の土師器が大量に出土した。『シンポジウム　新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』の「土器の分類と変遷」で示された編年（第15表）［滝沢2005b］に照らせば、6期を主体に一部７期まで下る。5期に遡ることはない（以下、断りがない限り［滝沢2005b］での各期を指す）。ここでは、主な遺構について検討を加える。土器組成は第７～12表参照。

SZ439　SZ439は主にSD209・311・214から構成される。土器組成は甕６割、壺１割、鉢１割、高杯・器台１割である。この比率は新潟シンポ編年［川村1993］6期に位置付けられている胎内市西川内南遺跡Ⅰ期の比率［野水2005］に近い。甕は「く」の字口縁で面取りが顕著な89・91、口縁端部を丸く収める92のほか、有段口縁の184がある。壺は畿内系（215・153・154）、東海系（152）、小型壺は北陸的な111・158、東海系の109・217がある。器台が多く見られ、小型器台のほか、装飾器台（128・165）、結合器台・鍔付結合器台（129・130・234・237）がある。このような内容を各期の基準資料と比較する。二重口縁の壺（153・154）は7期の基準資料とされている新潟市緒立遺跡２号住［金子1983］のものと比較して口縁部の稜線が明瞭なので、より古相を呈すると考えられる。同じく５期の緒立遺跡３号住［金子前掲］に見られるような有段口縁擬凹線の甕を組成しないので、これより新相を呈すると考えられる。よって、SZ439は6期に位置付けられる。

SI155　出土量は少ないが、甕５割、鉢３割、器台１割に少量の高杯・壺が伴う。器台には結合器台（9）、北陸系の小型器台（8）がある。甕は比較的しっかりした有段口縁の甕（4）、「く」字口縁の甕（1～3）がある。ほかに大型の有段口縁大型壺（25）、有段口縁の鉢（15）がある。いずれの器種も有段部が明瞭なので６期の中でも古い段階に位置付けられる。

SI36　甕６割、鉢１割、高杯１割弱、器台１割、に壺が伴う。組成的には西川内南遺跡Ⅰ期の比率［野水前掲］に近い。甕は口縁に面取りがある「く」字口縁を主体に、近江系（53・64）、口縁が強く外側に引き出される62、口縁と体部の境が不明瞭な61など、多様である。壺は畿内系の二重口縁壺（65）がある。SI36最大の特徴は小型器台・装飾器台・結合器台など、多様な器台を組成することである。87は畿内系Ｘ字脚の高杯と関連があるかもしれない。装飾器台83は受部端部が突出する。類似資料は５期に位置付けられている三条市狐崎遺跡にあるので［金子1981］、83も比較的古相を呈する資料と考えられる。鍔付結合器台85は受部に稜をもつ、ほかに類例のない形態である。SI36総体としては、６期の中でも古い段階に位置付けられよう。

SI144　土器組成は甕５割強、鉢２割、器台・高杯、壺が各１割弱、これに少量の蓋・結合器台が伴う。７期に位置付けられている西川内南遺跡Ⅱ期SK1002の組成［野水前掲］に近いといえる。「く」字口縁の甕は面取りされるものが多い。有段口縁壺（32・33）の有段部は明瞭に作り出されている。脚部の裾が大きく開く高杯（48）は７期に位置付けられている正尺Ａ遺跡［尾崎2001e］に類例がみられる。

SI77　土器組成は、甕５割、高杯２割、器台１割でほかは１割に満たない。やや偏った組成であるが、甕がSZ439より少ない点に着目すれば、西川内南遺跡Ⅱ期SK1002の組成に近いといえる。甕は退化した有段口縁甕（249）、体部最大径が下の方にある250がある。口縁の面取りはしっかりしたものが多い。壺は畿内系の二重口縁壺（259）、小型壺は無頸壺（258）や東海系（256）がある。蓋（255）の摘みは大きく、新しい要素をもつ。高杯は在地（273）、東海系（271・272）がある。276は外面がケズリで仕上げられた異質な高杯脚部である。棒状中実で裾が開く器形は、会津坂下町樋渡台畑遺跡［吉田・古川ほか1990］をはじめ東北南部に多く見られることから、東北系の可能性が高い。樋渡台畑遺跡出土土器は新潟シンポ編年９～10期に位置付けられているので［辻1993］、276も比較的新しい要素をもつと考えられる。器台は小型器台のほか装飾器台（275）、結合器台（274）がある。274は底面が漏斗状を呈する。類似する器形は加茂市丸潟遺跡［伊藤・平岡2000］にある。装飾器台は北陸南西部では全体が横長から縦長へと変化することが明らかとなっているが［楠2003］、274は９期に位置付けられている丸潟遺跡

新潟シンポ	坂井・川村（1993）	滝沢（2000）	川村（2000）	能登・栃木（1995）	加賀・田嶋（1986）	東海・赤塚（1990）	畿内・米田（1992）
１期		１期			１群	山中式後期	
２期		２期古・新		７期１～４	２群（＋）	廻間Ⅰ式 0 1 2 3 4	
３期		３期		８期１～４	３群		庄内Ⅰ
４期	Ⅰ最新	４期			４群		
５期	Ⅱ－１		１段階	９期１	５群	廻間Ⅱ式 1 2 3 4	庄内Ⅱ
６期	Ⅱ－２		２段階	９期２	６群		庄内Ⅲ
７期	Ⅱ－３		３段階	９期３	７群	廻間Ⅲ式 1 2 3 4	庄内Ⅳ
８期	Ⅲ		４段階	９期４	８群		布留Ⅰ
９期	Ⅳ		５段階	10期１	９群		布留Ⅱ
10期			６段階	10期２	10群	松戸式前期	

第15表　編年対応表

のものほど縦長化していないので、7～8期に収まるのだろう。SI77は総体的に新しい要素をもつ土器が多いので6期最終段階から7期にかけて位置付けられる。

以上、主な遺構出土土器について概観したが、6～7期の中で新旧関係が認められそうである。まず、6期の中でも古い段階に位置付けられるのがSI36・SI155。次の6期の新しい段階にSZ439、6期の新しい段階から7期にかけてSI144・SI77と続く。SI77はSZ439を掘り込んで作られているので、遺構の切り合い関係からも妥当といえる。

(2) 装飾器台・結合器台について

正尺C遺跡からは大量の装飾器台・結合器台が出土した。これほど多様な形態がまとまって出土した例はほかにはないと思われる。

装飾器台・結合器台については滝沢規朗氏が集成・分類を行い、変遷と意義について考察を加えている[滝沢2005a]。以下に要約を記す。

「装飾器台」は狭義では弥生時代終末期～古墳時代前期に北陸南西部で盛行した、有段口縁で口縁部に涙滴形の透孔が施され、棒状ないしは「八」字状を呈し、脚裾部には有段脚をもつものを指す。ところが、口縁部が有段を呈さず、受部が突出するのみで垂下せず、脚部形態も裾部に段をもたないものも「装飾器台」とされることが多い。後者は関東・東北では出土例が増加するものの、北陸内では新潟県以外の出土例は少なく、前者とは分けて考える必要があろう。そこで後者については「鍔付き結合器台」として名称を区別し、その出現においては越後が果たした役割が大きいと考えた。ただし、受部が突出しないものについては類似する資料として検討を要する。なお、口縁部が有段であっても、口縁部が大きく外傾し、受部の突出が弱い「装飾器台」とは異なる特徴をもつものがある。これについては「中島廻りタイプ」と呼称することを提唱する。中島廻りタイプは新潟県のほか、関東・東北地方で出土例がある。

以上が要約であるが、正尺C遺跡では狭義の「装飾器台」は出土しなかったが、類似土器（装飾器台A類）（83・165）、「中島廻りタイプ」（装飾器台B類）（128・275等）、鍔付き結合器台（結合器台A・B類）（234・480・482・85）、鍔付き結合器台類似土器（結合器台C類）（237・485）など、ほぼ全ての形態が出土した。中でも注目されるのが結合器台B類の存在である。これは受部外面が有段を呈するもので、これまで出土例がないものである。単純に捉えれば、受部が急角度で立ち上がる北陸系小型器台に外反する口縁部が付加されたようにもみえる。結合器台B類はSI36（84・85）、SZ439（129）から出土しているので、6期までには成立していたと考えられる。鍔付き結合器台の盛行時期は7～8期が中心［滝沢前掲］ということからみると、その中では古い様相を示す土器なのかもしれない。鍔付き結合器台の成立と北陸との関係を考えるとき、重要な資料になると思われる。

(3) 縄文施文の土器について

正尺C遺跡では、縄文施文の土器が遺構・包含層から出土した。この縄文施文の土器は東北系の天王山式系土器と考えられるが、同土器はこれまでの阿賀野川流域及びその以北の調査事例では概ね5期までには消滅すると見られてきた［滝沢2005b、野田・野水2005］。ところが正尺C遺跡では6期主体の土土器群に混じり、10数個体の縄文施文の土器が出土したのである。そこで、この土器の編年的位置付けについて検討を加える。

まず出土状況であるが、遺構・包含層から出土しておりほかの土器と大きく区別されることはない。包

含層での出土地点も約１個体（508）が16Eグリッドから出土したのを除けば、ほとんどの土器が遺構密集範囲から出土しており、ほかと大きく異なるとは言い難い。

次に土器の形態・文様であるが、器形は口縁部から体部にかけてなだらかに移行する、甕と壺の中間のような形態である（502・504）。文様は縄文のみの施文が多く、沈線で施文されるものは１個体である（503）。縄文にはRLが多用されるが、LRや付加条縄文もみられる（504）。口縁部が有段を意識し、そこに刻みを加えたものもある（207a）。

このような特徴を類似の既存資料と比較してみる。村上市砂山遺跡の２～３期に位置付けられた土器は、口縁部・胴部文様帯が広がり、縦横に間延びした文様が施されるものの、無文化するものや壺か甕か判別しにくい器形のものが認められる［滝沢ほか2003］。神林村衣田遺跡の土器は口縁から体部へとなだらかに移行する器形で縄文が施文されており［鶴巻・磯部1990、田辺・土生2001］、４・５期に位置付けられている［野田・野水前掲］。このほか、新潟市八幡山遺跡［渡邉2001］では東北系土器の変遷試案が示されているが、502・504のような口縁から体部へなだらかに移行する器形で縄文のみ施文される土器は八幡山遺跡３期に位置付けられている。503のような沈線で施文されるものや207aのような口縁部が作り出されるものは八幡山遺跡２期までの所産とされている。ちなみに、八幡山遺跡２期は法仏式段階、同３期は月影式段階に比定されており［渡邉前掲］、それぞれ２期、３期に対比される［滝沢前掲］。なお、八幡山遺跡には正尺Ｃ遺跡511類似の、沈線で施文された土製紡錘車も出土しているので、511も２～３期に位置付けられる可能性がある。

上記のように、正尺Ｃ遺跡の縄文施文の土器は形態的に見ると２～５期までに位置付けられる可能性が出てきた。その場合、５期を遡ることがないほかの出土土器とは共伴しないことになる。ただし、はじめに触れたように出土状況からは区別できるような状況にはない。そこで、ほかの遺跡の出土状況について検討する。県内では良好な出土例に恵まれないが、福島県会津坂下町杵ガ森古墳２号周溝墓［吉田ほか1995］、中西遺跡５号土坑［和田1990］に天王山式系土器と北陸的な土器の共伴事例がある。前者は６期、後者は７期に位置付けられている［辻1993］。地理的に離れているため、これをもって阿賀北地域６～７期にも北陸的な土器と天王山式系土器が共存する、と言うには心もとないが、共伴の可能性があることを示唆していると思う。

以上、縄文施文の土器の編年的位置付けについて見てきたが、資料が少ない現段階においては結論を出すのは難しい状況である。よって、正尺Ｃ遺跡の縄文施文の土器について、現時点で指摘できるのは以下の点である。

①形態的に見ると２～５期に位置付けられる。この場合、その他の土器とは共伴しない。

②出土状況から縄文施文の土器とその他の土器を分離することは難しい。会津に６～７期の共伴事例があるので、正尺Ｃ遺跡においても共伴の可能性がある。その場合、502・504などは天王山式系土器の器形や装飾が退化した最終形態ともいうべきものといえる。

③共伴とした場合、形態的に２～５期までの幅がある全ての縄文施文の土器が伴うのか、その一部が伴うのかは問題点として残る。

Ｂ　遺　　構

（1）集落の変遷

正尺Ｃ遺跡では旧新井郷川の自然堤防上に古墳時代前期の集落が営まれていたことが明らかとなった。

出土土器の編年的位置付けは6期を主体に一部7期に下る。ほかの時代・時期の混入はほとんどないので、集落形成時期も出土土器と一致するとみて差し支えない。検出された遺構には周溝状遺構・掘立柱建物・竪穴住居・土坑等がある。周溝状遺構のうち、SZ439は、発掘調査当時は類例が少なかったので性格付けが難しかったが、近年の調査事例［前川2005など］からみて、周溝を有する建物跡と評価できる。住居について遺構の軸や出土遺物に着目すると、短い幅であるが集落の変遷を追うことができる。

正尺Ｃ遺跡Ⅰ期　6期の中でも古い段階に相当する。SI36・SI155等、軸が約10°東偏する一群。出土遺物から検証できないが、軸を同じくするSB81・82もここに含まれる。調査区西側に位置し、旧河道によって削平されている。

正尺Ｃ遺跡Ⅱ期　6期の中でも新しい段階に相当する。SZ439等、軸が約20°西偏する一群。出土遺物から検証できないが、軸を同じくする731・732もここに含まれる。本遺跡の主体となる時期であり、調査区中央に位置する。

正尺Ｃ遺跡Ⅲ期　6期の新しい段階から7期にかかる時期に相当する。遺物からSI77・144がここに位置付けられる。ただし、遺構の軸はSI77が約17°東偏し、SI144が約10°西偏するので、短い期間で変遷していたと推定される。遺物の時期から考えるとSI144が先行すると思われる。SI144と軸を同じくする掘立柱建物にSB530・540・800があり、いずれもSI144の7m南側に位置する。SI77と軸が近い掘立柱建物にSB90があり、SI77の10m北側に位置する。SI144の一群は調査区南側に位置するが、SI77の一群は調査区北側へと移動している。

上記のように、正尺Ｃ遺跡では6～7期の間に少しずつ場所を移動しながら3～4回ほど集落構成が変化し、各期とも1～2軒の竪穴住居あるいは周溝を有する建物に1～2棟の掘立柱建物が伴うという構成をとっていたことが明らかとなった。

（2）周溝状遺構SZ610について

周溝状遺構として報告したSZ610については調査当初4隅が切れる方形周溝の形態から、方形周溝墓と捉えられていた。しかし、方形周溝墓の変遷を追うことができた頸城地方の事例ではそのような形態の方形周溝墓は2期までは確認されているが、6期以降は円形周溝墓へと変化している［笹澤2005］。阿賀北地域においても聖籠町二本松東山遺跡［伊藤ほか1993］で検出された円形周溝墓が6～7期に位置付けられている［野田・野水2005］。よって集落に伴う方形周溝墓の可能性は低いと考えられる。ただし、SZ610を6～7期ではなく2～3期の遺構とすれば、方形周溝墓の可能性も出てくる。縄文施文の土器のなかには2～3期の可能性があるものも含まれているので、両者を合わせて慎重に評価する必要がある。

SZ610を方形周溝墓ではなく、SZ439と同様に住居として捉えようとすると、同時期の周溝を有する住居はSZ439のような規模・形状を有するか、正尺Ａ遺跡のような周溝が途切れない方形を呈する［尾崎・相羽・栗林2001］ので、やはり形態が異なる。方形の住居であるなら、掘り込みが確認されておらず不自然であるし、周溝を有する建物跡であるなら、中央に柱穴が検出されておらず、これも不自然である。正尺Ｃ遺跡のほかの竪穴住居では大量の土器が出土したのに対してSZ610はごく少量の出土量である点も、性格の違いを反映しているように受け止められる。

以上のことから、SZ610の性格については住居あるいは方形周溝墓の可能性をもちながらも決定材料に欠けるので、保留したい。

要　　約

馬見坂遺跡

1　馬見坂遺跡は新潟県新発田市佐々木字中ノ割1509～1532番地ほかに所在する。新潟砂丘Ⅰ-2内陸側砂丘間低地に立地し、標高は約1～3mを測る。現況は畑および道路であった。

2　発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成11年5月17日から10月15日にかけて実施した。調査面積は7,670㎡である。

3　調査の結果、縄文時代前期～晩期の遺構と古代以降の自然流路跡を検出した。遺物は遺構・包含層・自然流路跡から出土した。遺物は量的には少ないが、縄文時代前期～晩期の土器・石器を主体に、弥生時代後期～古墳時代前期、古代以降の土器など多様である。

4　縄文土器のうち前期後半の土器は、これまで新潟砂丘Ⅰ-2上の遺跡で出土した最古の土器に近い時期のものであり、同砂丘列形成時期を検討するための好資料である。

5　古代の自然流路跡は福島潟へ流入する加治川水系の一支流と考えられ、形成年代は^{14}C年代測定値から13世紀代以前の流路跡であると推定される。流路埋没後は近代まで泥炭層が広がっていたとみられ、当地の地形変遷の一端を知ることができた。

正尺Ａ遺跡

1　正尺Ａ遺跡は、新潟市葛塚字子辰高入3059番地ほかに所在する。遺跡は旧河道の自然堤防上に立地し、現況は宅地および水田であった。標高は現況で約2mを測る。

2　発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成12年5月22日から10月20日と平成13年8月3日から31日にかけて実施した。調査面積は平成12年度が3,800㎡、平成13年度が260㎡である。本報告書は平成13年度分の調査報告書である。

3　調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居1軒、土坑1基を検出した。遺物は土坑・包含層から古墳時代前期の土師器が出土した。土師器の所属時期は限定され、当該期の土器様相を示す好資料である。

正尺Ｃ遺跡

1　正尺Ｃ遺跡は、新潟市葛塚字正尺644番地の1ほかに所在する。遺跡は旧河道の自然堤防上に立地し、現況は水田および荒蕪地であった。標高は現況で約0.85mを測る。

2　発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成11年9月20日から12月24日と平成12年4月3日から10月27日にかけて実施した。調査面積は11,000㎡である。

3　調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居4軒、掘立柱建物9棟、周溝状遺構2基、土坑・溝などが検出された。遺物は遺構・包含層から古墳時代前期の土師器が大量に出土した。土師器の所属時期は限定され、当該期の土器様相を示す好資料である。ほかに少量の土製品・石器、古代の須恵器、近世の木製品が出土した。

4　2基の周溝状遺構のうちSZ439は中央に掘立柱建物があるので住居跡と考えられる。SZ610は周溝の形態が四隅の途切れる方形を呈し中央に掘立柱建物を伴わないので、住居とは捉えがたい面もあり、性格は不明である。

5　出土土器は北陸系在地土器を主体に、東海系・畿内系・近江系・東北系などが存在する。東北系の縄文施文の土師器の所属時期については主体となる土器群より遡る可能性もある。

6　土器群の特徴として、装飾器台・結合器台が多量に組成し、その形態が多様である点が挙げられる。結合器台の成立に関しては未だ不明な点もあり、当遺跡で多様な形態が出土したことはその成立を考える上で重要である。

引用・参考文献

赤塚次郎　1990　「Ⅴ 考察 1 廻間式土器」『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター

阿部朝衛　1989　「新潟県阿賀野川以北の古墳時代前期」『北越考古学』第２号　北越考古学研究会

荒木繁雄　1982　「福島潟周辺の地形分類図」 新潟県豊浦町教育委員会

石川日出志　2002　「青田遺跡の土器を読む」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団設立10周年記念公開シンポジウム よみがえる青田遺跡 資料集 川辺の縄文集落』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会

泉　拓良　1996　「大歳山式土器」『日本土器事典』 雄山閣

磯崎正彦　1957　「新潟県鳥屋の晩期縄文式土器（予報）」『石器時代』第４号

伊藤廉倫ほか 1993　『二本松東山遺跡』 新潟県聖籠町教育委員会

伊藤秀和・平岡和夫ほか　2000　『丸潟遺跡－国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－』 新潟県加茂市教育委員会・山武考古学研究所

宇野隆夫　1992　「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館　研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館

大熊　孝　1996　「越後平野の治水と河川開発史」『第四紀研究』Vol.35 No.3

大矢雅彦・加藤恭彦　1986　『阿賀野川水害地形分類図』建設省北陸地方建設局阿賀野川工事事務所

尾崎高宏　2001a　「正尺Ａ遺跡調査の概要」『埋文にいがた』No.34（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2001b　「正尺Ａ遺跡ー古墳前期の集落跡ー」『埋文にいがた』No.36（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2001c　「正尺Ａ遺跡」『平成12年度　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2001d　「第Ⅲ章１ グリッドの設定、２ 層序」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ　正尺Ａ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2001e　「第Ⅴ章1Ｂ出土土器の編年的位置付け」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ　正尺Ａ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2002　「正尺Ａ遺跡」『平成13年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏・相羽重徳・栗林宣明　2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集　日本海東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ 正尺Ａ遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小野　昭・小熊博史　1987　「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅲ　新潟県巻町

春日真実　1994　「第Ⅳ章4.（3）遺物各説」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999　「第４章古代 第２節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院

片岡千恵　2000　「正尺Ｃ遺跡」『埋文にいがた』No.32 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2000a　「基礎整理作業の進む遺物ー平成11年度調査遺跡からー 正尺Ｃ遺跡」『埋文にいがた』No.33（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2000b　『正尺Ｃ遺跡現地説明会～県内有数の規模と内容を誇る古墳時代前期の集落跡～』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育庁文化行政課・日本道路公団北陸支社

加藤　学　2001a　「豊栄市　正尺Ｃ遺跡の調査」『新潟県考古学会第13回大会 研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会

加藤　学　2001b　「正尺Ｃ遺跡」『平成12年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2001c　「第Ⅱ章１．地理的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ 松影Ａ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2001d　「第Ⅶ章　まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ 松影Ａ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学・尾崎高宏　2001　「正尺Ｃ遺跡・正尺Ａ遺跡 古墳時代の集落跡」『第８回 発掘調査報告会資料』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤　学・轡田克史・川崎昭一　2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ 松影Ａ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
金子拓男　1981　「４狐崎遺跡」『三条市史』資料編第１巻　考古・文化　新潟県三条市
金子拓男　1983　『緒立遺跡発掘調査報告書』 新潟県黒埼町教育委員会
河崎昭一　2001　「第Ⅱ章２．歴史的環境―砂丘と遺跡―」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ 松影Ａ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
川村浩司　1993　「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『日本考古学協会　1993年度新潟大会 シンポジウム２ 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第５号　上越市
北村　亮　1990　「第Ⅲ章4B 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 関越自動車関係発掘調査報告書 岩原遺跡・上林塚遺跡』 新潟県教育委員会
楠　正勝　2003　「装飾器台の成立と展開」『庄内土器研究』26　庄内土器研究会
小出義治・寺村光晴　1962 「鳥屋遺跡発掘調査報告書」『越佐研究』第17集
小林巌雄　1996　「越後平野地下の第四系」『第四紀研究』Vol.35 No.3
小山正忠・竹原秀雄　1996　『新版　標準土色帖』　農林水産省農林水産技術会議事務局　（財）日本色彩研究所
齊藤秀平　1937　「新潟県における石器時代遺蹟調査報告」『新潟懸史跡名勝記念物調査報告書』第７輯　新潟懸
坂井秀弥・川村浩司　1993 「越後における古墳出現前後の土器様相」『磐越地方における古墳形成過程の研究』「磐越地方における古墳形成過程の研究」 研究者グループ
笹澤正史　2005　「頸城地域における弥生時代から古墳時代前期の集落動態」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』「シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」実行委員会・新潟県考古学会
柴崎達雄・小林巌雄・小野　昭・立石雅昭　1996 「平野の自然と人類史－越後平野を例にして－」『第四紀研究』Vol.35 No.3
島　吾郎　1988　「第１章 第２節」『豊栄市史 資料編Ⅰ 考古編』 新潟県豊栄市
鈴木　勉　1999　「正尺Ｃ遺跡」『埋文にいがた』No.30 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木　勉　2000　「正尺Ｃ遺跡」『平成11年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成　2000a　「日本海沿岸東北自動車道 馬見坂遺跡一次調査の概要」『平成11年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成　2000b　「日本海沿岸東北自動車道 正尺Ｃ遺跡一次調査の概要」『平成11年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
関　雅之　1988　「付編」『豊栄市史』資料編１　考古編　新潟県豊栄市
関　雅之　1993　『上土地亀遺跡』 新潟県豊栄市教育委員会
関　雅之　1999　『葛塚遺跡』 新潟県豊栄市教育委員会
関　雅之　2001　「新潟県新発田市馬見坂遺跡出土の土師器－阿賀北地域の７世紀の土器様相とその意義－」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
関　雅之ほか 1980　『鳥屋遺跡Ⅰ』 新潟県豊栄市教育委員会
関　雅之ほか 1988　『豊栄市史』 資料編Ⅰ　考古編　新潟県豊栄市
関　雅之ほか 1996　『新五兵衛山遺跡Ⅱ』 新潟県豊栄市教育委員会
高橋　聡　2000a　「馬見坂遺跡―縄文時代からの水辺の遺跡―」『北へのびる歴史の道　発掘調査報告会2000』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　聡　2000b　「新潟・馬見坂遺跡」『木簡研究』第22号　木簡学会
高濱信行・卜部厚志　2000 「馬見坂遺跡の立地環境に関する自然科学的調査概要」『平成11年度　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高濱信行・卜部厚志　2001 「正尺Ａ・Ｃ遺跡から産出した火山灰層の鉱物組成と火山ガラスの化学組成」『平成12年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗　2000　「新潟県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生後期の土器編年』第１分冊　東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
滝沢規朗　2005a　「新潟県における古墳時代前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会
滝沢規朗　2005b　「土器の分類と変遷―いわゆる北陸系を中心に―」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』「シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」実行委員会・新潟県考古学会
滝沢規朗ほか 2003　「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相―村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に―」『三面川流域の考古学』　第２号　奥三面を考える会
田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県埋蔵文化財センター
田中正治　1961　『我が郷土の曙 佐々木うまざか厩坂遺跡を語る』
田中久夫・長谷川　正・木村澄江・岡本郁栄・坂井陽一　1996　「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』Vol.35 No.3
田辺早苗・土生朗治　2001　『衣田遺跡・道上遺跡』 新潟県神林村教育委員会
寺村光晴・関　雅之　1960　「新潟県引越遺跡出土の土器」『古代』35　早稲田大学考古学会
立木由理子　1999　「日本海沿岸東北自動車道 馬見坂遺跡」『埋文にいがた』No.28 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
立木由理子　2000　「馬見坂遺跡」『平成11年度　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鶴巻康志・磯部保衛　1990　『岩船郡神林村衣田遺跡の弥生土器と土師器』『北越考古学』第３号　北越考古学研究会
辻　秀人　1993　「東北南部の古墳出現期の様相」『日本考古学協会 1993年度新潟大会 シンポジウム２　東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
栃木英道　1995　「第８章 考察」『谷内・杉谷遺跡群』 石川県埋蔵文化財センター
土橋由理子　2000　「基礎整理作業の進む遺物―平成11年度調査遺跡から― 馬見坂遺跡」『埋文にいがた』No.30 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子　2005　「正尺Ｃ遺跡」『埋文にいがた』No.52 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟県教育委員会　1980　『昭和54年度新潟県遺跡地図』
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2000　『砂丘に埋もれた縄文の遺跡　馬見坂遺跡』（現地説明会資料）
新潟古砂丘グループ　1974　「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史Ⅰ」『第四紀研究』Vol.13 No.2
野田豊文・野水晃子　2005　「阿賀北地域の様相」『シンポジウム　新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』「シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」実行委員会・新潟県考古学会
野水晃子　2005　「第Ⅳ章5B2 a)出土土器の編年的位置付け　b)器種構成比率　c)甕の底部形態」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第146集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅹ　西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
畠山佑二　1934　「蒲原平野の土器石器について」『初等教育』６月号　新潟師範附属小学校
畠山佑二　1979　「出土品は語る（16） 上黒山の遺跡」『豊栄広報』第232号
畠山佑二　1991　「土器を求めて五十年」『北越考古学』第４号　北越考古学研究会
南　憲一　1998　「第二編 第一章 第四節 市域の景観と村の成立」『豊栄市史　通史編』 新潟県豊栄市
前川雅夫　2005　「第Ⅶ章４ 本遺跡の円形周溝状遺構の性格について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第142集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ 道端遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
前山精明　1994　「Ⅱ３ 重稲場遺跡」『巻町史 資料編１　考古』 新潟県巻町
松浦五輪美・原田憲二郎　1992　「柿経の考察－分類と編年について－」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』奈良県奈良市教育委員会
吉田博行ほか 1995　「杵ガ森古墳」『杵ガ森古墳・稲荷塚遺跡』 福島県会津坂下町教育委員会
吉田博行・古川利意ほか　1991　「樋渡台畑遺跡」『若宮地区遺跡発掘調査報告書』 福島県会津坂下町教育委員会
米田敏峯　1992　「畿内における前半期古墳の土器年代についての予察」『考古学論集』４　考古学を学ぶ会
渡邉朋和　2001　「第Ⅶ章１　弥生土器」『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新潟県新津市教育委員会
和田　聡　1990　『宮東遺跡・中西遺跡・男檀遺跡・御稷神塚』 福島県会津坂下町教育委員会
渡邉　晶　2004　『日本建築技術史の研究－大工道具の発達史』 中央公論美術出版

馬見坂遺跡　遺構一覧表

遺構種別	遺構No.	検出面		地区	位置	法量（cm）			炭化物	備考
		大別	層序		グリッド	長軸	短軸	深さ		
SX	176	縄文下層	砂丘下層	Ⅰ区②	6D5・8～10・14・15、7C21、7D1・6・11	725	470	20	少	窪地？縄文土器（後～晩期）
P	27	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8C16	37	27	25	少	縄文土器（前期）
P	29	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	7D3	35	30	20	大多	縄文土器（後～晩期）
P	80	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	6D5	47	32	17	大多	
P	81	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8D16	27	24	21	大多	
P	87	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	10F10	50	42	18	大多	
P	88	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	10F10	33	25	11	大多	
P	97	縄文上層	③～Ⅲ層漸移	Ⅰ区②	8E22	63	60	24	多	木の根 残存
P	98	縄文上層	③～Ⅲ層漸移	Ⅰ区②	8E23	63	60	20	多	木の根 残存
P	113	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	7C21	40	37	15	大多	
P	114	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	7D23	65	53	12	少	縄文土器
P	138	縄文上層	③～Ⅲ層漸移	Ⅰ区②	8E17・18	70	43	20	大少	縄文土器
P	170	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	7C19	63	60	25	少	縄文土器
P	193	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	10F16	55	50	8	多	
P	201	縄文上層	Ⅲc	Ⅱ区	17H3	45	38	18	少	
P	203	縄文上層	Ⅲb	Ⅱ区	17H14・19	43	42	17	大多	
P	219	縄文上層	Ⅲc	Ⅱ区	15G15	60	56	15	少	石鏃
	炭1	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8E18	55	－	19	大多	縄文土器（中期）
SK	82	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8C17・18・22・23	145	110	19	少	縄文土器（前期）
SK	90	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8C16・21	75	57	24	少	縄文土器（中期）
SK	104	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	7D1	90	90	28	少	
SK	108	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	7D20・24・25、7E4	357	－	22	少	縄文土器（後期）
SK	109	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	7E3・7・8	－	125	17	少	縄文土器（晩期）
SK	122	縄文上層	③～Ⅲ層漸移	Ⅰ区②	7C18・19・23・24	107	107	30	少	
SK	139	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8D17	92	90	37	少	縄文土器（後期）
SK	145	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	9E21	70	46	23	少	縄文土器
SK	146	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8E18・23	70	62	15	多	縄文土器
SK	210	縄文上層	Ⅲb	Ⅱ区	16G8・9・13・14	159	120	38	少	
SK	218	縄文上層	Ⅲc	Ⅱ区	15G10・15	130	85	23	少	
SX	78	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	6D25、7D21	200	130	7	少	縄文土器（後～晩期）
SX	100	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8E19・20・24	174	100	8	少	縄文土器
SX	102	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8E20・25、9E16・21	304	155	35	多	風倒木？　縄文土器
SX	103	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	6D8・9・13～15・18・19	300	274	18	少	窪地？　縄文土器（晩期）
SX	106	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	7D17	107	105	27	少	窪地？
SX	107	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	7D19・20・24	221	135	26	少	窪地？　縄文土器（中期）
SX	111	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	6D20・25、7D16・21	345	302	22	無	縄文土器（後期）
SX	112	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	6D25、7D16・21	120	115	15	無	
SX	115	縄文上層	砂丘漸移	Ⅰ区②	7D16～18・21～23	345	147	18	少	窪地？　縄文土器（前期）
SX	141	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	10F2・7	110	85	20	少	窪地？　縄文土器（前期）
SX	152	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8E9・14	58	55	15	大少	縄文土器（前期）
SX	153	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	8E13・14・18・19	181	140	15	少	窪地？　縄文土器
SX	202	縄文上層	Ⅲc	Ⅱ区	17H2	86	68	18	少	窪地？　縄文土器
SX	221	縄文上層	Ⅲc	Ⅱ区	14F23・24	116	72	18	多	風倒木？　縄文土器（後期？）
SX	225	縄文上層	Ⅲb	Ⅱ区	12G9・10・13～15・18・19	462	150	22	少	縄文土器（晩期）、砂岩磨斧破片
風倒木	91	縄文上層	Ⅲ	Ⅰ区②	7E2・6・7	245	165	27	多	縄文土器（前期）
風倒木	224	縄文上層	Ⅲb	Ⅱ区	12F22・23、12G2～4・7～10・12～14	590	450	67	少	縄文土器（晩期）、チャート砕片
SK	3	平安以降	Ⅲ	Ⅰ区③	9B23	112	100	26	少	土師器・古伊万里
P	26	平安以降	SK3内	Ⅰ区③	9B23	17	15	22	少	
SK	5	平安以降	Ⅲ	Ⅰ区③	10C6・7・11・12・17	191	137	26	大多	鍛治関連？
風倒木	134	平安以降	③～Ⅲ漸移	Ⅰ区②	9E7・8・11～13・17・18	400	335	106	少	縄文土器

馬見坂遺跡　土器観察表（2）

報告No.	遺構名	取上げNo.	グリッド	層位	時代	時期	器種	残存部位	残存率（図化）	法量（cm）			口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
										口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）				内・外面	内面	外面	
1	P114の上	255	7D23		縄文	前期末葉	深鉢	胴						英・長	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ナデ	粘土紐貼付、粘土紐上半截竹管押引	十三菩提式
2	SK82	273 278	8C17 8C22	Ⅲ Ⅲ	縄文	前期後葉	深鉢	口～体						英・長	内：褐灰 外：灰褐		ミガキ	地文縄文、半截竹管文（Y字モチーフ）	
3	SX108	167	7D24	黒色砂 Ⅲ層下	縄文	後期前葉	深鉢	胴						英・長・金雲角	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	地文縄文、沈線による区画文	
4	SX153		8E13	覆土	縄文	中期	深鉢	胴						英・長	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		ナデ	縄文LR	大木8～10式併行
5	SX107 — —	168 297 93	7D19 8D1 8C18	Ⅲ Ⅲ 砂丘	縄文	中期初頭	深鉢	口	1/10	16.8			4.5	英・長	内：明赤褐（5YR） 外：明赤褐（5YR）		ナデ	絡条体・撚糸L	
6	SX103	174	6D19		縄文	晩期末葉	深鉢	胴						英・長・黒雲	内：灰褐 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	ナデ	地文縄文、丸棒状工具による平行沈線	鳥屋2式
7	SK78?	164	6D20		縄文	晩期末？	深鉢	胴						英・長・黒雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄橙（10YR）		ミガキ	沈線による区画文	
8	SK78?	78	7D22		縄文	後期前半		胴						英・長	内：にぶい黄（2.5Y） 外：にぶい黄（2.5Y）		ナデ	丸棒状工具刺突	三十稲場式
9	SX111	216	7D21		縄文	後期前葉	深鉢	胴						英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	地文縄文、沈線による区画文	
10	SK109	226	7E8		縄文	晩期	深鉢	胴						英・長・金雲	内：褐灰 外：にぶい黄橙		ミガキ	縄文LR（付加条?）	
11	風倒木91	165	7E2		縄文	前期末葉	深鉢	胴						英・長	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ナデ	粘土紐貼付、粘土紐上半截竹管押引	十三菩提式
12	風倒木224 SX225		12G3～5・7・8～11・13・14・19	1～3	縄文	晩期	甕	口～底	1/2	35.8	9.5	（48.7）	18	英・長・玉髄	内：明褐灰 外：にぶい橙（5YR）		ナデ	口：ナデ、縄文LR、体：結節縄文LR、条痕、底：網代	
13	—	314	8E9	Ⅲ	縄文	前期後葉	深鉢	口						英・長・白砂 繊維	内：灰黄 外：黄灰		ナデ	口唇：半截竹管連続刺突、口：ナデ、体：縄文LR	大木5～6式
14	—	350	10E1	遺構覆土	縄文	前期後葉	深鉢	口						英・長・繊維	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）		ナデ	口：半截竹管連続刺突	大木5式
15	—	293	8E8	Ⅲ	縄文	前期後葉	深鉢	口						英・長・金雲 繊維	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ（ケズリ）	ナデ、縄文LR、口：突起?	大木5～6式
16	—	279	8C22	Ⅲ層下の黒褐色砂	縄文	前期後葉	深鉢	口						英・長・白砂 繊維	内：黄灰（2.5Y） 外：にぶい黄（2.5Y）		ナデ	口：突起・縄文擦り消し、体：縄文LR	大木5～6式
17	‘99-13Tr			Ⅲ層上面	縄文	前期後葉	深鉢	口						英・長・角	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）		ナデ	縄文RL	
18	—	322	9F3	Ⅲ	縄文	前期後葉	深鉢	胴						英・長・繊維	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	結束羽状縄文LR	
19	—	319	7C15	砂丘漸移	縄文	前期後葉	深鉢	胴						繊維	内：にぶい黄橙（10YR） 外：褐灰（10YR）		ナデ	結束羽状縄文LR・RL	
20	—	325	7C20	砂丘漸移	縄文	前期後葉	深鉢	胴						英・長・金雲 繊維	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	縄文LR	
21	‘99-4Tr	2		Ⅲ	縄文	前期後葉	深鉢	胴						英・長・繊維	内：橙 外：黒褐		ナデ	結束羽状縄文LR・RL	
22	—	83	9E9	Ⅲ	縄文	前期後葉	深鉢	胴						英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	羽状縄文RL・LR、木の実脱落痕（拓本右下の丸い欠損部）	
23	—	347	10E17	砂丘漸移	縄文	前期末葉	深鉢	口						白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	粘土紐貼付、粘土紐上半截竹管連続刺突	十三菩提式
24	—		18G	トレンチ埋土	縄文	前期末葉	深鉢	口						英・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	半截竹管押引	十三菩提式
25	—	2175・2176 2169	16G7 16G12	Ⅲc Ⅲc	縄文	前期末葉	深鉢	胴	1/8					英・長	内：褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	地文縄文RL、粘土紐貼付、粘土紐上に半截竹管による連続刺突	大歳山式
26	—	51・248	8C17	砂丘	縄文	前期末葉	深鉢	把手						英・長	内：にぶい橙 外：にぶい橙		指頭圧痕	半截竹管文	
27	35Tr	2201	15D2	Ⅲc	縄文	前期末葉	深鉢	胴						英・長	内：褐 外：褐		ナデ	ナデ	金魚鉢形
28	—	265	10E21	Ⅲ	縄文	前期末葉	深鉢	口						英・長・白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		剥落	粘土紐貼付、粘土紐上半截竹管連続刺突	鍋屋町式か 十三菩提式

馬見坂遺跡　土器観察表（3）

報告No.	遺構名	取上げNo.	グリッド	層位	時代	時期	器種	残存部位	残存率（図化）	法量（cm） 口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物 内・外面	調整（施文） 内面	外面	備考
29	—	217	7D23	砂丘	縄文	前期末葉	深鉢	胴						長	内：灰黄（2.5Y） 外：灰黄（2.5Y）		ナデ	粘土紐貼付、縄文RL	
30	—	301	7D10	砂丘	縄文	前期末葉	深鉢?	口?						英・長	内：にぶい褐 外：にぶい褐		ナデ	地文縄文、半截竹管文、粘土粒貼付	
31	—	280	8C16	砂丘	縄文	前期末葉	深鉢	口						英・長・白砂	内：褐灰 外：灰褐		ナデ	半截竹管文	
32	—	323	8C21	砂丘	縄文	前期末葉	深鉢	口						英・長・黒砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ナデ	半截竹管文	
33	‘99-6Tr	2		Ⅲ	縄文	前期末葉	深鉢	胴						英・長・チャ	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ナデ	地文縄文LR、半截竹管文	
34	—		8D17	Ⅲ	縄文	不明	深鉢	口	1/8	16.4			4.5	英・長・白砂	内：黄褐（2.5Y） 外：オリーブ褐（2.5Y）		ナデ	複節LRL	
35	SK90	55	8C21		縄文	中期初頭	深鉢	口						英・長・黒砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ナデ	半截竹管文	
36	—	284	8E19	Ⅲ	縄文	中期前葉	深鉢	口						英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	半截竹管による施文、蓮華文	新崎式併行
37	—	2083	17H6	漸移層	縄文	中期前葉	深鉢	胴						英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	半截竹管押引	新崎式併行
38	—	2136	17H3	漸移層	縄文	中期前葉	深鉢	胴						英・長	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙		ナデ	半截竹管文	新崎式併行
39	—	213	7D1	砂丘	縄文	中期前葉	深鉢	胴	1/10					英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：黒斑	ナデ	地文縄文、半截竹管による区画文	
40	—	2130	17H8	Ⅲ	縄文	中期初頭	深鉢	胴						英・長	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	半截竹管文、ヘラ状工具による斜線	新崎式併行
41	—	262	6D15	砂丘	縄文	中期前葉	深鉢	胴						英・長・金雲	内：にぶい黄橙 外：灰白		ナデ	地文縄文、半截竹管文	大木8a式
42	—	2216	13G15	Ⅲc	縄文	中期初頭	深鉢	胴						英・長・チャ	内：明褐 外：明褐		ナデ	結束縄文LR・RL	大木7b式
44	—	一括	16H5 16H5・9	Ⅲ Ⅲ・漸移層	縄文	後期前半	深鉢	口～胴	2/3	13.6			30	英・長・黒雲 玉髄	内：灰白 外：灰白		ナデ	口：橋状突手4単位、体：結節縄文RL縦回転	三十稲場式
外	—	一括	16H5 16H5・9	Ⅲ 漸移層															
45	‘99-6Tr	3		Ⅲ	縄文	後期前葉	深鉢	口						英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	ナデ	地文縄文、隆帯区画、隆帯上に丸棒状工具による連続刺突	波状口縁?
46	—	2027～2029	17G16	Ⅲ	縄文	後期前葉	深鉢	口						英・長・白砂	外：灰黄（2.5Y）		剥落	沈線区画内縄文LR充填	大木10式？
47	—	一括	6D8	Ⅲ	縄文	中期前葉	浅鉢	口～底	2/3	33.0	8.2		16	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：明褐		ミガキ	口：ナデ→ミガキ、体：縄文LR、底：ミガキ	
外	—	一括	6D8	Ⅲ															
48	—	42	4F12	黒色砂	縄文	後期		口～胴		10.8				英・長・角 針	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）		ナデ	口：瘤、撚糸→ミガキ、胴：ミガキ→沈線	瘤付土器
49	—	109	8D4	Ⅲ	縄文	後期前葉？	深鉢	突起						英・長・金雲	内：灰白（2.5Y） 外：灰白（2.5Y）		ナデ	ナデ、円盤状の突起	
50	—	258	7D6	砂丘下層	縄文	晩期末葉？	深鉢	胴						英・長・金雲	内：にぶい褐 外：黒		ナデ	地文縄文、沈線	
51	—	317	7C15	砂丘	縄文	晩期末葉	甕か壺	胴						英・長	内：浅黄（2.5Y） 外：浅黄（2.5Y）		ミガキ	結節縄文LR	鳥屋2式
52	—	2030	17G22	Ⅲ	縄文	晩期末葉	深鉢	口～胴						英・長・金雲	内：にぶい褐 外：にぶい褐		ナデ	浮線網状文、縄文	鳥屋2式
53	—	2033～2035	17G22	Ⅲ	縄文	晩期末葉	浅鉢	口～胴						英・長	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）		ナデ	口：浮線網状文、胴：縄文	鳥屋2式
67	—	2038・2089 2094～2096	17G13 17G18	青灰色粘土	弥生	後期前半	壺	口～体底	1/10	13.6	（2.0）	（17.0）	6	英・長	内：明褐灰 外：明褐灰		口：ヨコナデ、体：ナデ（ヘラナデ）、底付近：ケズリ	口：ヨコナデ（擬凹線）、体：ナデ、底付近：ケズリ	（図上復元） 猫橋式
外	—	2087・2091		青灰色粘土															

馬見坂遺跡　土器観察表（4）

報告No.	遺構名	取上げNo.	グリッド	層位	時代	時期	器種	残存部位	残存率（図化）	法量（cm）			口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
										口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）				内・外面	内面	外面	
68	21Tr				弥生後期～古墳前期		壺	口～体	1/10	（21.4）			（1）	英・長・針	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口～頸：ヨコナデ、体：ハケメ	ヨコナデ	
69	‘99-21Tr				古代	Ⅳ期（Ⅳ-2）	長甕	口～体	1/8	23.3			5	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ロクロナデ、体：ナデ	口：ロクロナデ、体：カキメ	
70	‘99-15Tr				古代		須恵器無台杯	口～底		11.4	8.0	3.1	4.5	英・長・白砂	内：灰（5Y） 外：灰（5Y）		ロクロナデ	ロクロナデ	
71	‘99-19Tr			客土	古代	Ⅴ～Ⅵ期	須恵器杯	口		（11.4）			（1）	精良	内：灰（5Y） 外：灰（5Y）		ロクロナデ	ロクロナデ	小泊窯
72	‘99-6Tr	4		③層	古代	Ⅴ～Ⅵ期	須恵器無台杯	口～体		（13.4）			（1）	英	内：灰（5Y） 外：灰（5Y）		ロクロナデ	ロクロナデ	小泊窯
73	Ⅰ区上段			表採	古代	Ⅳ期（Ⅳ-2）山三賀Ⅲ	須恵器有台杯	底	1/3		7.4			英・金雲	内：灰黄（2.5Y） 外：にぶい黄（2.5Y）		ロクロナデ	回転糸切	
74	‘99-19Tr			客土	古代		須恵器有台杯	体～底	1/4		8.4			英	内：灰 外：灰		ロクロナデ	体：ロクロナデ、底：ナデ	内面磨耗使用痕？
75	4Tr				古代		須恵器壺	体						英・長	内：灰白（2.5Y） 外：黄灰（2.5Y）		ロクロナデ	ロクロナデ	
76	29Tr				古代		土師器杯	口		（11.4）			（1）	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ロクロナデ	ロクロナデ	
77	自然流路		21G8	川粗砂	縄文	中期?	深鉢	口						英・白砂	内：灰褐 外：灰褐		ナデ	口：縄文LR、体：ナデ	水磨
78	自然流路		19G25	川粗砂	縄文	中期初頭	深鉢	口						英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：褐灰（10YR）		ナデ	口：縄文RL、体：縄文RL縦位	水磨
79	自然流路		20G24	川粗砂	縄文	中期前葉	深鉢	口						英・長・金雲	内：にぶい褐 外：にぶい褐		ナデ	半截竹管文、蓮華文	水磨
80	自然流路		19G25	川粗砂	縄文	中期前葉	深鉢	胴						英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		ナデ	地文縄文、半截竹管文	北陸系、水磨
81	自然流路		19G24	川粗砂	縄文	後期前葉	深鉢	口		14.0			5	英・長	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		ナデ	口：縄文 *l*	水磨
82	自然流路		18H4	川粗砂	縄文	後期後葉～晩期前葉	台付鉢?	脚	4/5		5.7			英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	ナデ	水磨
83	自然流路		20F25	川粗砂	縄文	晩期中葉	浅鉢	口						白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：黒漆 外：黒漆	ミガキ?	雲形文、磨消縄文	大洞C1式、水磨
84	自然流路		20G21	川粗砂	縄文	晩期末葉	甕	口	1/10	（18.0）			（4）	英・長	内：黒褐 外：にぶい黄橙		口：沈線、ナデ	口唇：突起、平行沈線	鳥屋2式、水磨
85	自然流路		19G25	川粗砂	縄文	晩期末葉	甕	口～体						英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		ナデ	口：結節縄文	鳥屋2式、水磨
86	自然流路		19H3	川粗砂	縄文	晩期末葉	甕	口						英・長・白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：灰白（10YR）		ナデ	口：沈線・擬口縁、胴：条痕	鳥屋2式、水磨
87	自然流路		20F25	川粗砂	縄文	晩期末葉	深鉢	口						英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：沈線、ナデ	浮線文	鳥屋2式、水磨
88	自然流路		19H19	川粗砂	縄文	晩期末葉	深鉢	口						英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：沈線、ナデ	浮線網状文	鳥屋2式、水磨
89	自然流路		19H	川粗砂	縄文	晩期末葉	深鉢	口						英・長	内：褐灰（10YR） 外：褐灰（10YR）		ナデ	浮線網状文	鳥屋2式、水磨
90	自然流路		20H1	川粗砂	縄文	晩期後葉	浅鉢	胴						英・長・白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		ナデ	工字文？	鳥屋1式、水磨
91	自然流路		20G2	川粗砂	縄文	縄文晩末～弥生前期	浅鉢？	口～胴						英・長・白砂	内：灰（N） 外：灰黄褐（10YR）		ナデ	三角形モチーフ？	水磨
92	自然流路		19G25	川粗砂	弥生	前期	深鉢	胴						英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	地文縄文LR、沈線	緒立式、水磨
93	自然流路		20F25	川粗砂	弥生～古墳	弥生後期～古墳前期	壺	口	1/20	（15.0）			（2）	英・長・チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）		不明	不明	水磨
94	自然流路		19G25	川粗砂	古墳		甕	口～体	1/10	（17.0）			（4）	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		不明	不明	水磨
95	自然流路		21G12	川粗砂	古墳		鉢	口～体	1/8	（10.4）			（5）	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		不明	不明	水磨

馬見坂遺跡　土器観察表（5）

報告No.	遺構名	取上げNo.	グリッド	層位	時　代	時期	器種	残存部位	残存率（図化）	法　量（cm）			口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
										口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）				内・外面	内面	外面	
96	自然流路		20G4	川粗砂	古墳		器台?	受	1/36	（9.0）			（1）	精良	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR		不明	不明	水磨
97	自然流路		19G25	川粗砂	古墳		器台	受～脚	1/5					精良	内：受：赤彩、にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、にぶい黄橙（10YR）		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	水磨
98	自然流路		19G25	川粗砂	古代		長甕	口～体	1/5	15.0			4	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ	口：ヨコナデ、体：カキメ	水磨
99	自然流路		19G25	川粗砂	古代		小甕	口～体	1/8					精良	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ロクロナデ	ロクロナデ	水磨
100	自然流路		19H5	川粗砂	古代		須恵器壺?	口		15.0			3	長	内：灰（N） 外：灰（N）		ロクロナデ	ロクロナデ	水磨
101	自然流路		19G25	川粗砂	古代		須恵器無台杯	底	1/20		（8.0）			英・白砂	内：灰（N） 外：灰（N）		ロクロナデ	底：回転ヘラ切	水磨
102	自然流路		21G13	川粗砂	古代		須恵器無台杯	口～体	1/15	（11.0）			（3）	英	内：褐灰（10YR） 外：褐灰（10YR）		ロクロナデ	ロクロナデ	水磨
103	自然流路		19H5	川粗砂	古代		須恵器無台杯	口～体	1/36	（13.0）			（1）	英	内：灰（5Y） 外：灰（5Y）		ロクロナデ	ロクロナデ	水磨

胎土色調凡例
英：石英、長：長石、角：角閃石、金雲：金雲母、黒雲：黒雲母、チャ：チャート、針：海綿骨針、白砂：鉱物名不明の白砂で角礫が多い、繊維：獣毛あるいは植物繊維の脱落痕。色調は『新版　標準土色帖』［小山・竹原1996］による。断りがない限り7.5YRでの色調を表す。

馬見坂遺跡　土製品・石器観察表

掲載No.	グリッド	遺構	取上げ番号	層位	器種	最大長（mm）	最大幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	被熱	破損	備　考
43	8E20		321	黄褐色粘土	土器片円盤	28	28	12	11.39	胎土（英・長）	×	×	周縁磨耗
54	15G15	P219の上部	2184	Ⅲc	石鏃	24.55	15	4.5	0.99	玉髄	×	○	先端磨耗
55	7D4		224	砂丘	石鏃	22.5	13.5	4.55	0.82	黒曜石	×	×	
56	8C17		52	砂丘	石鏃	20	14.8	5	0.99	黒曜石	×	○	
57	7E2		169	Ⅲ下、黒色砂	石鏃	25.55	12.2	4.85	1.4	玉髄	×	×	
58	17H3		2038	Ⅲ	石鏃	31.5	17.2	4.25	1.48	珪質頁岩	×	×	
59	7D12		99	Ⅲ	石核	12	18.5	20	4.4	黒曜石	×	×	
60	10F16		388	黄褐色砂	両極石器?	33	32.5	17	23.31	珪質頁岩	×	○	打斧破損品?
61	11F	（SD　94）			磨製石斧	47.6	33.85	15.75	29.18	緑色凝灰岩	×	○	
62	8E18		9－2	Ⅲ	磨石類	73	21.65	8.9	25.59	砂岩	×	×	敲打痕
63	17H17		2106	漸移	磨石類	107	81.5	33.5	370	砂岩	×	○	磨痕・敲打痕・凹痕
64	7D7		374	砂丘	磨石類	49.6	35	10.3	27.85	凝灰岩	×	×	磨痕
65	6D19		38962	Ⅲ	磨石類	141.5	91	50	860	安山岩	×	ガ	磨痕・敲打痕
66	17H6		2082	漸移	磨石類	107	92	70	980	安山岩	×	×	磨痕・敲打痕

馬見坂遺跡　木製品観察表

掲載No.	遺構	グリッド	層位	遺物種類	最大長（mm）	最大幅（mm）	厚さ（mm）	樹種	時期	備　考
104	自然流路	23H区　1・2aトレンチ	青灰色シルト	木簡	123.4	19.0	3.0	スギ	古代～中世	柿経
105	自然流路	23H区　2aトレンチ	青灰色シルト	斎串	118.0	12.2	2.0	スギ	古代～中世	
106	自然流路	23H区　2aトレンチ	青灰色シルト	串	83.8	16.8	2.0	スギ	古代～中世	焦げ目あり
107	自然流路	23H区　1aトレンチ	青灰色シルト	曲物底板	277.3	86.8	9.3	スギ	古代～中世	

正尺A遺跡　土器観察表（1）

報告No.	遺構名・取上げNo.	グリッド	層位	時代	器種	残存部位	残存率（図化）	法量（cm） 口径（cm）	法量（cm） 底径（cm）	法量（cm） 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
1	SK4	3A14・15		古墳前期	壺	口～体	2/3	18.6	(6.0)	(31.0)	15	英・長・黒雲 玉髄	内：口：赤彩、にぶい橙（10YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		口：ハケメ→ミガキ、頸：ハケメ、体上半：ナデ？ 体下半：ハケメ・ヘラナデ	ミガキ、口有段部に丸棒状工具、側面圧痕が連続	（図上復元）
2	—	3A22	Ⅳ	古墳前期	結合器台	受	1/7					英・長	内：橙 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ?	ミガキ	口と受の接合部に刻み
3	一括No.8 —	3A20 3A15	Ⅲ Ⅲ	古墳前期	器台	受	1/2	(11.0)			(4)	英・長	内：浅黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ミガキ	ミガキ	
4	—	3A15	Ⅲ	古墳前期	器台	受～脚	9/10		13.8			英・長	内：橙（5YR） 外：赤彩、橙（2.5YR）		受：ミガキ、脚上半：ケズリ、脚下半：ヨコナデ（ハケメ）	ミガキ	透孔　上下2個一対が3組
5	—	3A18	Ⅲ	古墳前期	結合器台	杯～脚	4/5					英・長	内：浅黄橙 外：浅黄橙		杯：ミガキ、脚：ハケメ・ナデ	杯：ミガキ、脚：ミガキ	透孔　杯：6（残存4）、脚：3（残存3）
6	—	3A15	Ⅲ	古墳前期	鉢	口～体	1/8	(12.8)			(5.5)	英・長	内：明赤褐（5YR） 外：明赤褐（5YR）		口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ヘラケズリ、磨耗・剥落	
7	—	3A13・15・19・20・23	Ⅲ	古墳前期	甕	口～体	1/3	15.8			32	英・長・黒雲 チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体上半：ヘラナデ・ハケメ、体下半：ハケメ	
8	一括No.22 —	3A20 3A17-3、3A18	Ⅲ	古墳前期	甕	口～体	1/3	30.0			25	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい橙 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：ハケメ、体：ハケメ→ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ	
8	一括No.23・24 サブトレ — —	3A22-1 3A14・19 3A17-3、3A18・22 3A20-1	Ⅲ 覆土														
9	一括No.12・24 —	3A20 3A14・18・20	Ⅲ Ⅲ	古墳前期	甕	口～体	2/3	13.2			16	英・長・金雲 黒雲・玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	器面剥落
10	—	1A15-1	Ⅲ	古墳前期	甕	口～体	1/3	(24.0)			(15)	英・長・玉髄 白砂	内：黒褐 外：橙		口端：ヨコナデ、口：ハケメ、体：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
11	No.1・2	1A13-4	Ⅱ	古墳前期	甕	口～体	1/4	15.6			8.5	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口端：ヨコナデ、口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	
12	—	1A15-1	Ⅲ	古墳前期	甕	口・体 底	1/5	(25.5)	7.2		(7)	英・長・金雲 玉髄	内：褐灰～黒 外：褐灰～にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ、体上：ヘラナデ、体中：ケズリ、体下：ヘラケズリ→ヘラナデ、底：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ケズリ	（図上復元）
13	—	2A24・25	Ⅲ	古墳前期	甕	口～体	1/5	18.0			4	英・長・金雲 玉髄・チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、体上半：ヘラナデ、体下半：ハケメ・ヘラナデ・ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
14	—	2A1-1	Ⅲ	古墳前期	壺	口～体	1/5	13.8			9	英・長・チャ	内：にぶい橙 外：赤彩? にぶい橙		口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ、体：ナデ・ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ミガキ? 剥落	
15	—	2A21	Ⅲ	古墳前期	甕	口～体	1/4	19.8			12	英・長・玉髄 チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
16	一括	1A15-1		古墳前期	壺	口・頸 体～底	1/10	20.4	7.0	(31.4)	13	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ、剥落	ハケメ→ミガキ、磨耗、口：ハケメ原体による連続刺突	（図上復元）3本一組の棒状浮線文が3組
17	—	3A2-4 3A3-3	Ⅲ Ⅲ	古墳前期	壺	口～体	1/2	23.3			1	英・長・玉髄 チャ	内：浅黄橙 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ミガキ、口・体の接合部：指頭圧痕、体：ハケメ	口上半：ヨコナデ、口下半：ミガキ、体：ハケメ	
18	—	2A1-1	Ⅲ	古墳前期	壺	口～頸	1/4	(18.3)			(13.5)	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		口端：ヨコナデ、口～頸：ハケメ	口：ミガキ、頸：ハケメ→ミガキ	
19	—	1A20-3	Ⅱ	古墳前期	壺	口～体	1/8	(13.3)			(1)	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい褐 外：橙		口端：ヨコナデ、口：ハケメ、口・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ・ナデ	口端：ヨコナデ、口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	
20	—	2A1-1	Ⅱ	古墳前期	壺	口～体	1/4	11.6			9	英・長・チャ 白砂	内：橙 外：橙		口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ、体：ナデ	口：ヘラナデ→ミガキ?　体：ハケメ→ミガキ?　磨耗	
21	一括No.2・3 — —	1A13-4 1A5 1A9	Ⅱ Ⅱ～Ⅲ Ⅲ	古墳前期	壺	口～体	1/2	11.0			28	英・長 赤粘土	内：黒（10YR） 外：黒（10YR）		剥落	剥落	全体が被熱（調理に伴うものではない）
22	—	1A3-8	Ⅲ	古墳前期	壺	体	1/2					英・長・チャ	内：褐灰（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		ハケメ	ミガキ	
23	—	3A13・15・19・20	Ⅲ	古墳前期	小型壺	体	1/2					英・長・金雲 玉髄	内：褐灰 外：明褐		ヘラナデ→ナデ、輪積痕明瞭	ハケメ→ミガキ	
24	—	2A1-1	Ⅲ	古墳前期	壺	体・底	1/3		丸			英・長・玉髄	内：黒（10YR） 外：灰白（10YR）		体上半：輪積痕明瞭・指頭圧痕・ハケメ、体下半～底：ハケメ・ヘラナデ	体：ハケメ、底：ナデ	（図上復元）
25	一括No.4～6	1A12	Ⅲ	古墳前期	台付鉢	口～脚	1/2	(10.6)			(6)	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：剥落	磨耗（ミガキ?）	片口状

正尺A遺跡　土器観察表（2）

報告№	遺構名・取上げ№	グリッド	層位	時代	器種	残存部位	残存率（図化）	法量（cm）			口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
								口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
26	－	1A20-2	Ⅱ・Ⅲ	古墳前期	鉢	口～底	4/5	15.5	丸	8.7	1	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：にぶい橙		ハケメ	口：ナデ、体：ハケメ	底付近：焼成前穿孔
27	－	1A12-2	Ⅲ	古墳前期	鉢	口～体	1/4	14.0			9	英・長・金雲 チャ	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ハケメ→ナデ	ナデ（ケズリに近い）	
28	一括	2A1-3		古墳前期	鉢	口～底	1/2	10.7	4.5	8.0	11	英・長	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		ミガキ?　磨耗	口：ミガキ、体上半：ミガキ、体下半：ケズリ→ミガキ、磨耗	
29	－	3B1	Ⅲ	古墳前期	壺	口	1/8	（16.0）			（7）	英・長・玉髄	内：浅黄橙（10YR） 外：赤彩、橙（5YR）		磨耗	口端：ヨコナデ、口：ミガキ	
30	－	2A5-2	Ⅱ	古墳前期	高杯	口	1/8	（20.0）			（5）	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	
31	－	2A5	Ⅲ	古墳前期	結合器台	受	1/8					英・長	内：にぶい橙 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	口と受の接合部に刻み
32	－	3A1-5	Ⅲ	古墳前期	器台	受	1/4	4.6			9	英・長	内：赤彩 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	
33	－	1A4	Ⅱ～Ⅲ・Ⅲ	古墳前期	小型壺	口～底	1/3		2.6			白砂	内：にぶい橙 外：赤彩、橙（2.5YR）		ナデ	ミガキ?　磨耗・剥落	被熱?
34	－	1A15-1	Ⅲ	古墳前期	台付鉢	口～脚	1/2	12.7	6.8	10.0	19	英・長・玉髄	内：赤彩 外：赤彩、橙（5YR）		口：ハケメ、体～底：剥落（ナデ?）、脚：ハケメ	剥落	
35	－	3A1	Ⅲ	古墳前期	器台	脚	9/10		11.8			英・長	内：浅黄橙（10YR） 外：赤彩、明暗褐（2.5YR）		上半：ケズリ、下半：ハケメ	ミガキ	透孔3
36	－	3A2-1	Ⅲ	古墳前期	高杯	脚	1/2		（15.0）			英・長・金雲 黒雲・玉髄	内：橙 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ハケメ→ミガキ	ミガキ	透孔3
37	－	3A1	Ⅲ	古墳前期	高杯	杯底～脚	1/10		（11.8）			英・長・玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：浅黄橙		脚上半：ヘラナデ、脚下半：ハケメ→ナデ、杯：ミガキ	ミガキ	器面磨耗

胎土色調凡例
英：石英、長：長石、角：角閃石、金雲：金雲母、黒雲：黒雲母、チャ：チャート、針：海綿骨針、白砂：鉱物名不明の白砂で角礫が多い、繊維：獣毛あるいは植物繊維の脱落痕。色調は『新版　標準土色帖』［小山・竹原1996］による。断りがない限り7.5YRでの色調を表す。

正尺C遺跡　遺構観察表（1）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
29	SI 36	9B14・16・18・19・21～23	Ⅲ	方形？	弧状	緩やか	(600)		44	-0.800	○	
43・37	SI　77	11C2～4・9・13・14	Ⅲ	長方形	孤状	緩やか	460~500	450	18	-0.870	○	
43	SI　77－P180	11C4	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	45	32	15	-1.010		SI77柱穴
43	SI　77－P188	11C4	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	25	20	21	-0.940		
43	SI　77－P198	11C9	Ⅲ	円形			19	18	5			
43	SI　77－P199	11C12	Ⅲ	楕円形			36	17	6			
43	SI　77－SD189	11C3・4	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	(180)	20	7	-0.955		
27・28	SI144	5E15・19・20・25 6E11・16・17・21・22、6F	Ⅲ	方形	孤状	緩やか	480	450	33	-0.880	○	
27	SI144－P525	5E19・20	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	55	37	20	-1.050		SI144柱穴
27	SI144－P526	6E16	Ⅲ	楕円形	弧状	急斜度	34	27	11	-1.000		SI144柱穴
27	SI144－P527	6E16	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	57	54	15	-0.950		SI144柱穴
27	SI144－P534	6E21	Ⅲ	ほぼ円形			20	18	5			
27	SI144－P535	5E19	Ⅲ	楕円形			25	19	10			
26	SI155	5E16・17・21・22、5F2～4	Ⅲ	不整形	弧状	緩やか	(570)	(310)	(15)	-0.780	○	
26	SI155－P509	5E22	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	(44)	(30)	30	-1.010		
26	SI155－P510	5E22	Ⅲ	ほぼ円形			44	38	9			
26	SI155－P511	5E22・23	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	(36)	(34)	9	-0.880		
26	SI155－P512	5F2	Ⅲ	楕円形			34	26	12			
26	SI155－P513	5F4	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	(60)	(46)	20	-0.990		
26	SI155－P514	5F3	Ⅲ	円形			16	15	15			
32	SB　81	12B9・13・14	Ⅲ	長方形			175	140				
32	SB　81－P71	12B14	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	28	23	39	-1.044		SB81柱穴
32	SB　81－P72	12B9	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	30	20	45	-1.034		SB81柱穴
32	SB　81－P73	12B14	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	31	26	21	-0.834		SB81柱穴
32	SB　81－P74	12B13	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	23	16	13	-0.694		SB81柱穴
32	SB　82	12A21・22、12B1～3・6・7	Ⅲ	長方形			310	270				
32	SB　82－P304	12B1～3・6	Ⅲ	円形	台形状	急斜度	20	19	6			SB82柱穴
32	SB　82－P50	12B1	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	28	20	32	-0.850		SB82柱穴
32	SB　82－P93	12B3	Ⅳ	円形	箱状	垂直	25	24	12			SB82柱穴
32	SB　90	12B3・4・8・9	Ⅲ	台形			205	180				
32	SB　90－P91	12B4	Ⅲ	方形	V字状	急斜度	25	20	8	-0.592		SB90柱穴
32	SB　90－P92	12B9	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	20	14	10	-0.652		SB90柱穴
32	SB　90－P94	12B3	Ⅲ	ほぼ円形	半円状	急斜度	13	12	4	-0.557		SB90柱穴
32	SB　90－P95	12B8	Ⅲ	円形	半円状	急斜度	15	14	6	-0.597		SB90柱穴
44	SB344	11D		方形			460	455				
44	SB344－P232	11D5	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	60	47	20	-0.800		SB344柱穴
44	SB344－P307	11D7・8	Ⅱ下	ほぼ円形	U字状・弧状	垂直・緩やか	70	65	48	-0.960	○	SB344柱穴
44	SB344－P320	11D14・15	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	62	58	36	-0.850		SB344柱穴
	SB344－SX310	11D5					18	15				種子集中
30	SB530	4F、5F	Ⅱ・Ⅲ	長方形			580	380				
30	SB530－P145	4F9	Ⅱ下	ほぼ円形	U字状	垂直	(24)	(23)	62	-1.075		SB530柱穴
30	SB530－P147	4F5、5F1	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	24	22	32	-0.980		SB530柱穴
30	SB530－P148	5F6	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	31	30	35	-0.995		SB530柱穴
30	SB530－P149	5F7	Ⅲ	円形	U字状	垂直	34	32	39	-1.025		SB530柱穴
30	SB530－P169	4F15	Ⅱ下	楕円形	U字状	垂直	56	47	45	-0.890	○	
30	SB530－P182	4F15	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	22	20	55	-1.090		
30	SB530－P184	4F9・14	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	31	25	30	-0.938		SB530柱穴
31	SB540	4F15、5F	Ⅲ	長方形			397	218				
31	SB540－P150	5F1	Ⅲ	円形	U字状	垂直	22	21	28	-0.930		SB540柱穴
31	SB540－P151	5F7	Ⅲ	円形	U字状	垂直	15	14	21	-0.858		SB540柱穴
31	SB540－P152	4F16	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	21	15	15	-0.920		
31	SB540－P153	5F6	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	21	17	29	-0.930		SB540柱穴
31	SB540－P154	5F6	Ⅲ	円形	U字状	垂直	18	17	15	-0.810		
31	SB540－P156	4F10、5F6	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	28	23	40	-1.060		SB540柱穴
31	SB540－P182	4F15	Ⅱ下	円形	U字状	垂直	22	19	55	-0.660		
31	SB540－P183	4F15	Ⅱ下	円形	U字状	垂直	20	17	23	-0.673		
33	SB731	8E4・5・9・10・14・15 9E1・6～8・11～13・16・17	Ⅲ	長方形			505	255				
33	SB731－P458	9E7	Ⅲ	円形	U字状	垂直	26	25	48	-1.095		SB731柱穴
33	SB731－P466	9E17	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	45	40	43	-0.987		SB731柱穴
33	SB731－P471	9E8	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	50	40	55	-1.113		SB731柱穴
33	SB731－P486	9E11・16	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	49	48	38	-0.917		SB731柱穴
33	SB731－P605	8E15	Ⅲ	円形	U字状	垂直	26	25	50	-0.450		SB731柱穴
33	SB731－P606	9E14	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	40	40	26	-0.480		SB731柱穴
33	SB731－P607	9E1	Ⅲ	円形	U字状	垂直	28	28	34	-0.970		SB731柱穴
34	SB732	9E8～10・13・14・19	Ⅲ	方形			225	204				
34	SB732－P472	9E13	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	45	44	40	-0.975		SB732柱穴
34	SB732－P479	9E8	Ⅲ	楕円形	U字状・台形状	垂直・緩やか～急斜度	47	39	53	-1.116		SB732柱穴
34	SB732－P498	9E10	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	40	25	80	-1.450		SB732・733？柱穴、柱根残存
34	SB732－P609	9E14・19	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	19	17	10	-0.720		SB732柱穴

正尺C遺跡　遺構観察表（2）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
34	P323	9D20・25	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	25	23	40	-1.000		柱穴　SB733？
34	P460	9E	Ⅲ	円形	U字状	垂直	26	25	32	-0.890		柱穴　SB733？
29	SB800	5F13・14・17～20・22～24 5G3・4	Ⅲ	方形	弧状	緩やか	396	364				
29	SB800－P756	5F22	Ⅲ	方形	U字状	垂直	29	26	37	-0.900		SB800柱穴
29	SB800－P757	5F22	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	25	23	36	-0.900		SB800柱穴
29	SB800－P761	5F20	Ⅲ	ほぼ円形	半円状	急斜度	(40)	(35)	27	-0.810		SB800柱穴
29	SB800－P770	5F24	Ⅲ	円形	U字状	垂直	33	30	32	-0.850		
29	SB800－P782	5G3・4	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	50	34	25	-0.760		SB800柱穴
35～44	SZ439	10C・D、11C・E、12C～E	Ⅱ・Ⅲ	方形			2200	2100	20~40			
44	SZ439－SB344	11D4～10・14・15	Ⅲ	方形			460	455				SZ439中央に位置する
42	SZ439－SD209	10B25、10C5・9・10・14 10C15・18・19・23・24 10D4・5、11B21・22、11C1・2	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	1100	200	29	-0.900	○	
37・39・41	SZ439－SD214	12C・D	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	730	400	20~54	-0.820	○	
38・40	SZ439－SD311	12D11・16・17・22	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	2000	(130~312)	22～52	-0.900	○	
44	SZ439－SK226	11D10、12D6	Ⅲ	不整楕円形	台形状	緩やか～急斜度	94	74	46	-0.800	○	
45	SZ610	8F13・14・18～20・22・23 8E2・3・5・8～10	Ⅲ	方形			(620)	(500)		-0.600		
45	SZ610－P648	8E25	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	25	24	12	-0.710		
45	SZ610－P649	8E25	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	26	25	10	-0.680		
45	SZ610－P701	8F4・5	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	26	23	9	-0.650		
45	SZ610－P702	8F5	Ⅲ	ほぼ円形	箱状	垂直	35	33	14	-0.640		
45	SZ610－P703	8E18・23	Ⅲ	ほぼ円形	弧状	緩やか	45	(40)	18	-0.660		
45	SZ610－P722	8F4	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	28	26	12	-0.720		
45	SZ610－P724	8F4	Ⅲ	方形	台形状	緩やか～急斜度	29	25	12	-0.720		
45	SZ610－SD496	8F2・3・8・9	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	460	70	20	-0.720	○	
45	SZ610－SD602	8E13・18・22・23	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	490	65	10	-0.670	○	
45	SZ610－SD603	8E13・14・19・20・25	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	540	80	10	-0.650	○	
45	SZ610－SD608	8E25、9E21、8F5・10	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	430	75	10	-0.610	○	
46	SD　38	8C20、9B25 9C3～5・7～9 9C11～13・16・17	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	1250	140	27	-0.870	○	
46	SD　40	8C5・21～23、9B5、9C1～3	Ⅲ	楕円形	V字状	垂直	510	100	42	-0.900	○	
32	SD　48	12B3・7・8	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	235	40	6	-0.560	○	
46	SD114	9D12・13	Ⅲ	楕円形	台形状・孤状	緩やか～急斜度	340	80	29	-0.780	○	
47	SD140	6E・7E	Ⅱ	楕円形	孤状	緩やか	1120	300	20	-0.660	○	
35	SD181	10・11C	Ⅲ	楕円形							○	
48	SD185	7D24・25、7E4・5・10	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	420	50~170	60	-1.180	○	
46	SD203	10C21、10D1・2・7	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	420	50~120	22	-0.640	○	
37	SD214	12C・D	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	730	400	20~54	-0.820		
37	SD214－P190	11C5	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	(64)	(41)	13	-0.885		
37	SD214－P193	12C6	Ⅱ下	楕円形			44	27	6			
37	SD214－SD173	11C5・10	Ⅲ	不整形	U字状	垂直	640	30~50	30	-1.010		
37	SD214－SK192	12C6・7	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	77	56	10	-0.936		
37	SD214－SK194	12C6	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	247	95	29	-1.030		
	SD308	11D9	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	97	15	9	-0.585	○	SB344内
	SD311－SX315	11D22	4層下									赤色顔料検出地点
27	SD521	5E14・15	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	187	12	4	-0.640		
27	SD522	5E19	Ⅲ	楕円形			48	8	4			
45	SD604	8F6～8・11～15	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	600	130	15	-0.720	○	
	SD656	7E20・24・25	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	240	125	13	-0.730	○	
	SK　23	9D12・17	Ⅲ								○	遺物集中地点
	SK　24	9C16・17・21・22	Ⅲ	隅丸長方形	孤状	緩やか	198	160	14	-0.680		
54	SK　26	8D7・12	Ⅲ	不整形	孤状	緩やか	60	50	16	-0.700		
54	SK　27	8D7・12	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	210	90	11	-0.650	○	
50	SK　32	8C22・23、8D2・3	Ⅲ	不整形	弧状	緩やか	220	163	20	-0.690	○	
50	SK　56	13B4・9	Ⅲ	隅丸長方形	台形状	急斜度	72	60	11	-0.536	○	
	SK　57	14B10	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	(80)	(50)	36	-0.770	○	
49	SK　58	13B11・12	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか	422	120	19	-0.600	○	
50	SK　59	13B2・3・7・8	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	156	140	45	-0.785	○	
	SK　63	13B9・14	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	175	65	29	-0.735		
	SK103	9D8	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	92	70	24	-0.740		
	SK110	9D8	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	12	10	19	-0.710	○	
50	SK118	9C21、9D1・6	Ⅲ	不整楕円形	孤状	緩やか	310	125	30	-0.820	○	
	SK136	10B22・23、10C2・3	Ⅲ	不整形	孤状	緩やか	170	130	16	-0.760	○	
	SK137	10C2	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	80	75	25	-0.840		
48	SK146	7D13・18	Ⅲ	不整形	孤状	緩やか	240	80	30	-0.730	○	
54	SK157	4F18・19	Ⅲ	不整形	U字状	垂直	(100)	(75)	47	-0.980	○	
	SK161	8E1	Ⅲ	楕円形			116	79	30		○	
47	SK164	6D22・23、6E2・3・6～8	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	630	140	45	-0.890	○	
	SK170	8D16	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	70	45	10			

正尺C遺跡　遺構観察表（3）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
	SK208	10C21・22	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	123	81	15	-0.650	○	
52	SK211	13C14	Ⅲ	円形	浅い弧状	緩やか～急斜度	150	147	18	-0.730	○	
51・52	SK213	12D・E、13D・E	Ⅲ	楕円形	浅い台形状	緩やか～急斜度	258	207	10	-0.810	○	
51・52	SK215	12D19・20・24・25、13D	Ⅲ	楕円形	浅い台形状	緩やか～急斜度	180	124	18	-0.800	○	
52	SK216	15B16・21	Ⅲ	不整楕円形	孤状・階段状	緩やか 階段状立ち上がり	216	106	44	-0.730	○	
52	SK218	13C13・18	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	90	80	22	-0.720	○	
	SK219	14B22・23	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	117	85	30	-0.890	○	
51・52	SK228	12・13D	Ⅲ	楕円形	浅い弧状	緩やか	312	192	15	-0.760	○	
51・52	SK229	12D24・25、12E4・5、13D	Ⅲ	楕円形	浅い台形状	緩やか～急斜度	240	140	13	-0.828	○	
51・52	SK230	12・13D	Ⅲ	楕円形	浅い台形状	緩やか～急斜度	110	64	14	-0.820		
51・52	SK231	12D15・20・25、13D11・16	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	360	120	14	-0.800	○	
38	SK313	10D9・10・14	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	150	100	19	-0.770	○	
	SK326	9D22・23、9E2・3	Ⅱ下	楕円形	弧状	緩やか	150	100	18	-0.620		
38	SK332	10D20・25、11D16・21	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	200	90	21	-0.790	○	
49	SK456	9E25、10E21	Ⅱ下	楕円形	半円状	急斜度	310	90	26	-0.900	○	
	SK457	10E6	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	122	45	17	-0.760	○	
49	SK481	9E18・19	Ⅱ下	楕円形	半円状	急斜度	300	60	23	-0.770	○	
49	SK482	8F5、9F1・6	Ⅱ下	楕円形	弧状	緩やか	290	100	20	-0.700	○	SZ610-SD608を切る
	SK485	8F7・8										遺物集中地点
	SK516	7D19	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	134	87	11	-0.600	○	
54	SK654	7F21、7G1・2	Ⅲ	楕円形	台形状・弧状	緩やか～急斜度	197	104	30	-0.400	○	
	SK655	6F12・13	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	220	167	14	-0.580	○	
	SK657	8F21、8G1	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	147	95	16	-0.740		
	SK660	5F15	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	63	53	9	-0.500	○	
	SK674	7G5	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	79	60	29	-0.860		
49	SK741	9F1・2・6	Ⅱ下	楕円形	半円状	急斜度	160	80	14	-0.700		
	P　6	9C6	Ⅲ	長方形	U字状	垂直	47	35	28	-0.720		
	P　25	8D22	Ⅲ	長方形	孤状	緩やか	50	35	8	-0.680		
	P　28	8D14	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	28	25	7	-0.600		
	P　29	8D14	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	29	25	7	-0.580		
	P　30	8D7	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	27	19	12	-0.650		
	P　31	8D2	Ⅲ	長方形	U字状	垂直	34	22	25	-0.700	○	
	P　33	8D18	Ⅲ	楕円形			18	13	20			
	P　34	8D2	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	24	20	5	-0.500		
	P　35	8C18・23	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	65	55	11	-0.600		
	P　37	8C13	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	50	48	4	-0.600		
	P　39	8C23	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	30	23	5	-0.520		
	P　41	9C17	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	50	48	15	-0.630	○	
	P　42	9C12	Ⅲ	楕円形	V字状	急斜度	45	40	46	-0.940	○	SD38内
	P　43	9C12	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	40	32	19	-0.670		
	P　44	9C2	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	30	25	5	-0.610	○	
	P　45	8D10	Ⅲ	円形	半円状	急斜度	20	16	10	-0.640	○	
	P　46	9D11	Ⅲ	円形	半円状	急斜度	18	17	10	-0.600	○	
	P　47	9C17	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	25	24	10	-0.600		
	P　49	11B5・12B6	Ⅲ	楕円形	V字状	急斜度	77	55	35	-0.820	○	
	P　51	11B15	Ⅲ	円形	半円状	急斜度	14	13	8	-0.690		
	P　53	13B2	Ⅲ	ほぼ円形	孤状	緩やか	16	15	7	-0.675		
	P　55	13B4	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	28	17	31	-0.895		
	P　60	11B19	Ⅲ	楕円形			23	15	6			
	P　61	12B13	Ⅲ	楕円形		緩やか	26	17	23		○	
	P　65	14B12	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	(42)	(35)	30	-0.695	○	
	P　66	13B4	Ⅳ	ほぼ円形	U字状	垂直	15	13	13	-0.715		
	P　67	13B4	Ⅳ	楕円形	U字状	垂直	21	15	15	-0.735		
	P　68	14B4	Ⅳ	ほぼ円形			20	19	15			
	P　69	13B4	Ⅳ	円形			24	23	14			
	P　70	12B5	Ⅳ	楕円形			17	9				
	P　78	13B2	Ⅳ	円形			10	9	7			
	P　80	13B16	Ⅳ	円形			20	20	19			
	P　83	13B12	Ⅳ	円形	孤状	緩やか	16	15	8	-0.723		
	P　84	13B7	Ⅳ	ほぼ円形			13	12				
	P　85	13B6	Ⅳ	楕円形	U字状	垂直	13	9	13	-0.729		
	P　86	13B1	Ⅳ	ほぼ円形			11	10	10			
	P　87	13B8	Ⅳ	楕円形	半円状	急斜度	14	12	5	-0.675		
	P　88	13B8	Ⅳ	楕円形	U字状	垂直	10	6	8	-0.685		
	P　89	13B2	Ⅳ	楕円形			13	10	7			
	P　97	11B3	Ⅳ	楕円形			30	20	17			
	P101	9D3	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	20	17	10	-0.620		
	P102	9D9	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	37	25	7	-0.590		
	P105	9D13	Ⅲ	ほぼ円形	台形状	緩やか～急斜度	20	19	8	-0.550		
	P106	9D7	Ⅲ	円形	箱状？	垂直	20	18	15	-0.620		
	P107	9D7	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	25	23	6	-0.530		

正尺Ｃ遺跡　遺構観察表（4）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
	P108	9D13	Ⅲ	ほぼ円形			20	20				
	P109	9D8・13	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	40	35	6	-0.550		
	P111	9D8	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	25	8	27	-0.810		
	P112	9D8・13	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	30	6	10	-0.600		
	P116	9D3	Ⅲ	楕円形	箱状	垂直	24	10	14	-0.620	○	
	P117	9C23	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	16	15	14	-0.670	○	
	P119	9D7・8	Ⅲ	ほぼ円形	台形状	緩やか～急斜度	32	30	18	-0.610	○	
	P120	9D13	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	20	19	12	-0.600	○	
	P121	9C22	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	46	36	4	-0.600	○	
54	P122	9D7	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	40	24	10	-0.530	○	
	P123	9D2	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	14	13	3	-0.590		
	P124	9D11	Ⅲ	楕円形			40	30			○	
	P125	9D11	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	22	12	16	-0.650	○	
	P126	10B21	Ⅲ	円形	U字状	垂直	30	26	20	-0.760	○	
	P132	10C6	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	20	17	4	-0.560		
	P133	10C6	Ⅲ	円形			10	8	3			
	P134	9C5	Ⅲ	円形	箱状	垂直	20	20	10	-0.580	○	
	P135	10B17	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	26	18	28	-0.770	○	
	P138	9C10	Ⅲ	楕円形			35	20	9			
30	P139	4F9	Ⅱ下	円形	U字状	垂直	19	18	18	-0.570		
	P159	7D16・17	Ⅲ	円形			17	15	16			
	P160	7D16	Ⅲ	楕円形			17	12	6			
31	P162	5F2	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	(24)	(22)	28	-0.950		
	P163	8E1	Ⅲ	楕円形			20	13	11			
	P165	7E2	Ⅲ	ほぼ円形			14	12	13			
	P166	6D15	Ⅲ	ほぼ円形	孤状	緩やか	65	61	21	-0.805	○	
	P167	7D21・7E1	Ⅲ	楕円形			30	20	6			
	P171	4F10	Ⅱ下	楕円形	U字状	垂直	21	14	14	-0.650		
	P172	4F10	Ⅱ下	楕円形	孤状	緩やか	22	18	6	-0.594		
	P174	4F14	Ⅲ	ほぼ円形	台形状	緩やか～急斜度	15	14	9	-0.710		
	P175	4F9	Ⅲ	ほぼ円形	孤状	緩やか	12	10	5	-0.680		
	P176	4F14	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	14	8	6	-0.685		
	P177	4F14	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	19	15	7	-0.690		
	P179	11C9	Ⅲ	楕円形			30	25	6			
	P186	8D1・6	Ⅲ	円形			19	16	7			
53	P191	10F11・12	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	21	18	26	-0.390		
37	P196	11C10	Ⅲ	ほぼ円形	U字状	垂直	(22)	(19)	20	-0.960		
	P197	8D2	Ⅲ	楕円形			32	22	32			
	P201	10C17	Ⅲ	楕円形	孤状	緩やか	31	24	16	-0.680		
	P202	9C20	Ⅲ	ほぼ楕円形	U字状	垂直	37	23	50	-0.970		
	P204	9C20・10C16	Ⅲ	ほぼ円形	孤状	緩やか	25	23	10	-0.610		
	P205	10C16	Ⅲ	ほぼ円形	孤状	緩やか	22	21	9	-0.600		
	P206	10C17	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	(18)	(16)	19	-0.680		
	P207	10C17	Ⅲ	円形	孤状	緩やか	32		14	-0.680		
	P220	13C12	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	35	30	15	-0.750		
	P221	14C4	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	34	28	19	-0.773		
	P222	14C5	Ⅲ	ほぼ円形	台形状	緩やか～急斜度	23	20	18	-0.763		
	P223	14C9	Ⅲ	円形	半円状	急斜度	16	15	8	-0.650		
	P224	14C4、14B24	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	45	34	14	-0.725		
	P225	14C11	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	33	25	14	-0.716		
	P227	12D23	Ⅲ	ほぼ円形	V字状	急斜度	30	30	20	-0.769		
	P301	13B11	Ⅳ	ほぼ円形	U字状	垂直	15	14	14	-0.810	○	
	P302	13B11	Ⅳ	円形	弧状	緩やか	16	15	8	-0.744		
	P303	13B16	Ⅳ	楕円形	箱状	垂直	19	11	7	-0.725		
	P305	12B11・16	Ⅲ	ほぼ円形	台形状	緩やか～急斜度	51	49	20	-0.810		
	P309	11D4	Ⅲ	不整楕円形	弧状	緩やか	40	30	10	-0.620		
	P312	11D9	Ⅲ	円形	U字状	垂直	20	15	16	-0.660		
	P314	11D14	Ⅲ	円形	U字状	垂直	11	8	14	-0.615		
	P316	10D17	Ⅲ	円形	半円状	急斜度	25	20	15	-0.700		
	P317	10D18	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	31	21	14	-0.670		
	P318	10D18	Ⅲ	ほぼ円形	半円状	急斜度	19	18	12	-0.650		
	P319	10D18	Ⅲ	楕円形	U字状 台形状	垂直・緩やか～ 急斜度	38	19	19	-0.735	○	
	P321	9D19	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	20	20	10	-0.715		
	P322	9D24	Ⅲ	円形	U字状	垂直	20	18	32	-0.935		
	P324	10D16	Ⅲ	円形	U字状	垂直	23	22	24	-0.830		
	P325	10D18・19	Ⅲ	円形	U字状	垂直	24	23	15	-0.710		
	P334	11D14	Ⅲ	円形			18	17	15			
	P335	10D14	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	20	19	18	-0.760		
	P336	10D18	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	29	24	15	-0.750		
	P337	10D14・19	Ⅲ	楕円形	U字状	垂直	30	25	22	-0.820		
38	P340	10D5	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	70	52	22	-0.780		

正尺Ｃ遺跡　遺構観察表（5）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
	P341	11D9	Ⅰ	円形			10	9	8			
	P408	11F3	Ⅲ	楕円形			30	25	4			
	P409	11F1・6	Ⅲ	楕円形			25	13	6			
	P410	11F6	Ⅲ	円形			13	11	8			
	P411	11F6	Ⅲ	ほぼ円形			20	20	16			
	P412	11F6	Ⅲ	ほぼ円形			20	19	10			
	P413	11F7	Ⅲ	不整形			49	30	7			
	P414	11F7	Ⅲ	楕円形			15	12	7			
	P415	11F7	Ⅲ	円形			10	9	6			
	P416	11F7	Ⅲ	円形			8	7	4			
	P417	11F7・8	Ⅲ	楕円形			40	15	10			
	P418	11F12	Ⅲ	ほぼ円形			20	17	14			
	P419	11F12	Ⅲ	円形			18	16	14			
	P420	11F7・8	Ⅲ	円形			21	20	25			
	P421	11F13	Ⅲ	楕円形			31	26	11			
	P422	11F13	Ⅲ	円形			15	13	4			
	P423	11F13	Ⅲ	円形			16	15	11			
	P424	11F13	Ⅲ	ほぼ円形			30	28	8			
	P425	10F7	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	20	20	19	-0.445		
	P426	10F7	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	17	17	19	-0.445		
	P427	10F12	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	23	15	12	-0.385		
	P428	10F2	Ⅲ	円形			15	14				
	P429	10F7	Ⅲ	楕円形			11	8	5			
	P430	10F7	Ⅲ	楕円形			10	6	5			
	P431	10F7	Ⅲ	楕円形			25	18	15			
	P432	10F8	Ⅲ	楕円形			25	20	5			
	P433	10F9	Ⅲ	方形			33	32	4			
	P434	10F13	Ⅲ	円形			16	15	8			
	P435	10F13	Ⅲ	円形			18	16	19			
	P436	10F13	Ⅲ	円形			25	21	32			
	P437	10F19	Ⅲ	楕円形			17	15	6			
	P438	10F19	Ⅲ	楕円形			25	19	19			
	P440	10F23	Ⅲ	円形			14	13	6			
	P441	10F11	Ⅲ	楕円形			20	15	21			
	P442	10F11・12	Ⅲ	円形			24	22	24			
	P443	9F5・10	Ⅲ	楕円形			75	55	7			
	P444	9F3	Ⅲ	ほぼ円形			43	37	12			
	P445	9F13・14	Ⅲ	楕円形			18	15	16			
	P446	9F17	Ⅲ	円形			16	15	8			
	P453	12E12	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	29	28	18	-0.870		
	P454	12E2	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	6	4	12	-0.860		
	P455	12E13	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	22	17	8	-0.780		
	P459	9E17	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	35	25	12	-0.679		
34	P461	9E18	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	32	27	38	-0.917		
	P462	9E8	Ⅲ	ほぼ楕円形	Ｕ字状	垂直	37	21	15	-0.725		
	P464	9E6・7	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	26	22	12	-0.715		
	P465	9E12	Ⅲ	円形	漏斗状	下部Ｕ字状 上部Ｖ字状	25	20	26	-0.818		
	P467	9E17	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	40	38	18	-0.738		
	P468	9E17	Ⅲ	円形			38	34	7	-0.617		
	P469	9E11	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	35	30	14	-0.700		
	P470	9E7	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	30	29	15	-0.725		
34	P473	9E7・12	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	47	38	30	-0.888		
	P474	9E17・18	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	25	15	22	-0.761		
	P476	8E25	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	61	60	16	-0.681		
	P478	9E13	Ⅲ	円形	箱状	垂直	25	23	16	-0.728		
	P480	9E13	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	29	25	23	-0.848		
	P483	9E12	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	18	18	14	-0.708		
	P484	9E13	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	19	14	9	-0.652		
	P488	9E7	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	26	19	15	-0.760		
	P489	9E21	Ⅲ	ほぼ円形	Ｕ字状	垂直	26	24	16	-0.706		
	P491	9E18	Ⅲ	不整楕円形	弧状	緩やか	41	25	10	-0.643		
	P492	9E16	Ⅲ	不整長方形	台形状	緩やか～急斜度	33	16	10	-0.674		
	P493	9E19	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	27	24	38	-0.991		
	P499	9E4・5	Ⅲ	楕円形	箱状	垂直	(80)	(40)	17	-0.780		
	P500	9E22	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	54	41	9	-0.670		
	P501	8C16・21	Ⅲ	円形	階段状	階段状の立ち上がり	15	14	7			
	P502	8C16	Ⅲ	円形	箱状	垂直	15	11	6			
	P503	7D15	Ⅲ	円形			11	10	11			
	P504	8D16	Ⅲ	円形			10	9	6			
	P505	8D21	Ⅲ	円形			19	17	18			
	P506	8D21	Ⅲ	円形			25	24	11			

正尺Ｃ遺跡　遺構観察表（6）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
	P507	8D16	Ⅲ	円形			15	13	18			
	P508	7D10	Ⅲ	方形	Ｕ字状	垂直	26	20	31	-0.870		
	P515	5F2	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	18	13	6	-0.736		
	P517	8D11	Ⅲ	長方形			32	23	18			
	P518	8D1	Ⅲ	円形			15	13	7			
	P519	8D6	Ⅲ	円形			15	15	16			
	P520	8D1	Ⅲ	ほぼ円形			20	19	18			
	P523	8C21	Ⅲ	楕円形			18	8	7			
	P524	8C21	Ⅲ	円形			15	14	5			
	P528	5F1	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	22	16	7	-0.756		
	P529	7E2	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	15	11	6	-0.740		
	P531	4F5	Ⅲ	円形			14	12	14			
	P601	9E22	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	17	16	5	-0.595		
	P611	8E8	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	18	18	6	-0.640	○	
	P612	8E7	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	30	18	7	-0.640		
	P613	8E12	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	22	21	10	-0.650		
	P614	8E11・12	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	31	30	9	-0.570		
	P615	8E11	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	25	24	10	-0.610		
	P616	8E16	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	37	35	10	-0.600		
	P617	7E20	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	17	15	14	-0.830		
	P618	7E15・20	Ⅲ	円形	半円状	急斜度	25	(25)	11	-0.680		
	P619	7E20	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	19	18	14	-0.710		
53	P620	7E19・24	Ⅲ	円形	漏斗状	下部Ｕ字状 上部Ｖ字状	31	31	60	-1.190		
	P621	8F15	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	17	15	11	-0.710		
	P622	8F15	Ⅲ	円形	箱状	垂直	20	18	15	-0.760		
	P624	8F13	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	(32)	(20)	8	-0.980		
	P625	8F12	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	17	15	8	-0.760		
	P626	8F12	Ⅲ	楕円形	箱状	垂直	20	15	15	-0.780		
	P627	8F8	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	18	14	18	-0.740		
	P628	8F7	Ⅲ	ほぼ円形	Ｕ字状	垂直	20	17	20	-0.690		
	P629	8F7	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	16	13	18	-0.700		
	P630	8F1	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	20	19	20	-0.710		
	P633	7E24	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	19	18	14	-0.730		
	P634	8F15	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	28	28	8	-0.660		
	P635	8F15	Ⅲ	円形	箱状	垂直	25	24	14	-0.740		
	P636	8F15	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	16	15	16	-0.760		
	P637	8F15	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	20	19	7	-0.720		
	P638	8F15	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	11	10	8	-0.680		
	P639	8F10	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	18	14	11	-0.710		
	P640	8F10	Ⅲ	円形	箱状	垂直	16	15	11	-0.700		
	P642	8E11	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	14	10	7	-0.560		
	P643	8E12	Ⅲ	ほぼ円形	半円状	急斜度	25	24	16	-0.660		
	P644	8F10	Ⅲ	楕円形	半円状	急斜度	19	15	10	-0.710		
	P645	10F18・19	Ⅲ	楕円形			31	14	11			
	P646	9F1	Ⅲ	ほぼ円形	台形状	緩やか～急斜度	26	25	17	-0.740		
	P647	9E21	Ⅲ	ほぼ円形	半円状	急斜度	26	24	15	-0.800		
	P650	7G10	Ⅲ	楕円形			30	27	16			
	P651	7F25	Ⅲ	円形			25	24	16			
	P653	7E24	Ⅲ	楕円形	Ｕ字状	垂直	43	35	41	-0.900		
	P658	6F5	Ⅲ	ほぼ円形	半円状	急斜度	33	29	13	-0.650		
	P663	6F24・25	Ⅲ	円形			24	19	12			
	P664	6F24	Ⅲ	円形			30	29	24			
	P665	6F24	Ⅲ	楕円形			30	20	13			
	P666	6F19	Ⅲ	楕円形			26	18	11			
	P667	6F19	Ⅲ	楕円形			21	16	10			
	P668	6F25	Ⅲ	円形			20	18	18			
	P669	6G5	Ⅲ	円形			21	20	10			
	P671	7F21	Ⅲ	円形			21	20	26			
	P672	7F16	Ⅲ	円形			15	14	11			
	P673	6G5	Ⅲ	ほぼ円形			26	25	9			
	P675	6F24	Ⅲ	楕円形			25	21	35			
	P676	5F25	Ⅲ	円形			25	24	14			
	P677	6F20	Ⅲ	円形			19	16	19			
	P678	6F19	Ⅲ	ほぼ円形			16	14	21			
	P679	6F18	Ⅲ	楕円形			25	20	17			
	P680	6F20	Ⅲ	ほぼ円形			20	20	11			
	P681	7G1	Ⅲ	円形			24	22	14			
	P683	7F1	Ⅲ	円形			20	19	21			
	P684	6F18	Ⅲ	円形			28	27	17			
	P686	6F5	Ⅲ	円形			20	15	13			
	P687	6E25	Ⅲ	円形			35	30	12			

正尺Ｃ遺跡　遺構観察表（7）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
	P688	6F3	Ⅲ	円形			22	20	19			
	P689	6E25	Ⅲ	方形			25	22	25			
	P690	6F3	Ⅲ	円形			29	29	10			
	P691	6F7	Ⅲ	楕円形			25	20	18			
	P692	6F11	Ⅲ	楕円形			22	13	15			
	P693	6F11	Ⅲ	円形			24	22	17			
	P694	7E21	Ⅲ	楕円形			50	35	23			
	P695	5F25	Ⅲ	長方形			28	19	12			
	P697	5F25	Ⅲ	方形			29	25	11			
	P698	5F24	Ⅲ	円形			30	27	12			
	P699	5F24	Ⅲ	方形			25	20	14			
	P704	8D24	Ⅲ	円形			21	20	15			
	P705	8D24	Ⅲ	楕円形			20	7	13			
	P706	8D24	Ⅲ	円形			22	21	8			
	P707	9D7	Ⅲ	楕円形			26	17	23			
	P708	9D4	Ⅲ	円形			22	20	14			
	P709	9D9	Ⅲ	円形			25	21	33			
	P710	9C23	Ⅲ	ほぼ円形			26	22				
	P712	9B23	Ⅲ	楕円形			42	30	13			
	P713	9C7	Ⅲ	円形			49	(48)	13			
	P717	8E11	Ⅲ	不整形	台形状	緩やか～急斜度	25	20	9	-0.570		
	P718	7F14	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	20	19	18	-0.800		
	P719	7F14	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	23	18	8	-0.740		
	P720	7F15	Ⅲ	楕円形	台形状	緩やか～急斜度	31	26	25	-0.850		
	P721	7F15	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	34	32	29	-0.900		
	P723	9E21	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	30	29	11	-0.700		
54	P725	7F3	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	28	25	38	-1.000		
	P726	10G3		円形	半円状	急斜度	33	33	20	-0.874		
	P727	7E22	Ⅲ	ほぼ円形	Ｕ字状	垂直	21	21	19	-0.780		
	P728	7E22	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	23	22	25	-0.850		
	P729	7F6	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	20	18	15	-0.750		
	P730	7F13	Ⅲ	円形	弧状	緩やか	19	18	10	-0.690		
	P734	7F2	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	22	17	10	-0.700		
	P735	7F3	Ⅲ	円形	Ｕ字状	垂直	15	15	11	-0.710		
	P742	9E15	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	40	40	10			
	P743	9E20	Ⅲ	円形	台形状	緩やか～急斜度	30	29	10			
	P750	5F19	Ⅲ	楕円形			44	31	32			
	P751	5F20	Ⅲ	円形			23	21	20			
	P752	5F20、6F16	Ⅲ	円形			20	20	12			
	P753	5F18	Ⅲ	円形			19	17	11			
	P754	5F18	Ⅲ	方形			28	25	21			
	P755	5F23	Ⅲ	円形			18	16	8			
	P758	5F23	Ⅲ	ほぼ円形			16	14	12			
	P759	5F22	Ⅲ	円形			20	20	13			
	P760	5G4	Ⅲ	楕円形			39	20	15			
	P762	5G2	Ⅲ	円形			18	17	16			
	P763	5F16	Ⅲ	円形			17	14	19			
	P764	5F21	Ⅲ	円形			25	24	19			
	P765	5F21	Ⅲ	円形			17	16	16			
	P766	5G1	Ⅲ	円形			19	18	12			
	P767	5G1	Ⅲ	方形			18	15	18			
	P769	5G2	Ⅲ	ほぼ円形			20	18	14			
	P771	5G3	Ⅲ	方形			23	20	15			
	P772	5G7	Ⅲ	楕円形			30	16	9			
	P773	5G1	Ⅲ	楕円形			25	16	10			
	P774	5G7・8	Ⅲ	楕円形			53	30	18			
	P775	5F16	Ⅲ	楕円形			20	15	13			
	P776	5F21	Ⅲ	楕円形			25	20	11			
	P777	4F25	Ⅲ	楕円形			23	15	26			
	P779	5G5	Ⅲ	円形			36	35	14			
	P780	5G4・5	Ⅲ	楕円形			40	30	11			
	P781	5F25	Ⅲ	円形			40	40	17			
	P783	4F25	Ⅲ	円形			17	16	12			
	P784	4G5	Ⅲ	円形			23	22	8			
	P785	4G5	Ⅲ	長方形			20	13	16			
	P786	6G1	Ⅲ	円形			22	21	29			
	P787	4G8	Ⅲ	円形			24	23	12			
	P788	4G7	Ⅲ	円形			23	22	16			
	P789	4G12	Ⅲ	楕円形			20	16	23			
	P790	6G5	Ⅲ	円形			(45)	(44)	16			
	SX141	8D21	Ⅲ	円形			26	23		-0.376		赤色顔料集中地点
	SX142	7E22	Ⅱ下	長方形			25	13		-0.348		赤色顔料集中地点

正尺Ｃ遺跡　遺構観察表（8）

個別図版	遺構名	グリッド	検出層位	形状			規模（cm）			底面標高（m）	出土遺物	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	長径	短径	深さ			
	SX143	7D22	Ⅱ下	円形			13	12		-0.397		赤色顔料検出地点
	SX168	8D1・6	Ⅲ	ほぼ円形		緩やか	30	19		-0.385		赤色顔料検出地点
	SX178	7D25	Ⅲ	楕円形		緩やか	19	13		-0.405		赤色顔料検出地点
	SX217	13C15	Ⅱ									赤色顔料検出地点
	SX329	10E1・2	Ⅱ下	不整形		緩やか	55	24	51	-0.596		火山灰検出地点
	SX402	8G5、9G1	Ⅲ								○	赤色顔料検出地点
53	SX405	10E9・10・14・15・20・25 11E6・10・11・17・21	Ⅲ	不整形	弧状	緩やか	740	420	38	-0.860	○	
	SX450	9F19・20	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	200	170	24	-0.510	○	
54	SX487	8E4・9	Ⅲ	不整形	弧状	緩やか～急斜度	130	-63	19	-0.679	○	
	SX533	7D7・11・12・18	Ⅱ下								○	遺物検出地点
	SX659	7G7・8・12・13	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	270	145	12	-0.65		
53	SX768	3G9・10・14・15、4G6・11	Ⅲ	楕円形	弧状	緩やか	414	-250	25	-0.62	○	

正尺C遺跡　土器観察表（1）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
1	SI155-P236～239･242	5E19･23	Tr	古墳前期	甕	C4	口～体	3/4	12.3			36	英･長･金雲チャ	内：にぶい黄橙（10R） 外：にぶい黄橙（10R）	外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ･ヘラナデ、体：ハケメ･ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ	
2	SI155-P161･162･166･167	5F4	1	古墳前期	甕	C2	口～体	1/2	15.4			36	英･長	内：にぶい橙 外：にぶい橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗剥落	
外	SI155-P158･161･165･167	5F3	1															
3	SI155-P7･22･23･165	5E21･22、5F4	1	古墳前期	甕	E	口～体	1/5	16.0			9	英、長（大･多）針	内：浅黄橙 外：浅黄橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	
4	SI155-P46	5E21	1	古墳前期	甕	A	口～体	1/5	18.0			9	英･長･金雲玉髄･白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口･体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SI155-P40･43･45･56	5E21	1															
5	SI155-P133	5F2	1	古墳前期	高杯	D	杯	1/6	(17.2)			(7)	英･針	内：赤彩、橙（5YR） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ	ハケメ→ミガキ	
6	SI155-P90	5F2	1	古墳前期	高杯		杯～脚	4/5					英･長･黒雲	内：浅黄橙 外：にぶい橙		杯：ナデ、磨耗	ナデ、磨耗	
7	SI155-P105	5E23	1	古墳前期	高杯		杯	1/3					英･長	内：浅黄橙 外：橙（5YR）		磨耗	磨耗	
8	SI155-P8･11･17	5E21	1	古墳前期	器台	A1	受	1/1	12.2			29	英･長･金雲	内：橙 外：橙		ヨコナデ	ヨコナデ	
9	SI155-P35･155･164	5E23	1	古墳前期	結合器台	C	口～受	1/2					英･長･針	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	透孔2段　各8?
外	SI155-P35･155･164	5E23																
10	SI155-P10	5E21	1	古墳前期	器台		受～脚	4/5		17.0			英･長･金雲	内：脚：赤彩、にぶい橙（5YR）、受：浅黄橙 外：赤彩、にぶい橙（5YR）		上半：ケズリ、下半：ハケメ･ケズリ、裾：ヨコナデ	ミガキ	透孔3
11	SI155-P7･63	5E22	1	古墳前期	器台		脚	1/2		12.8			長･金雲白砂	内：橙 外：赤彩、赤（10YR）		ナデ	ミガキ	透孔3
12	SI155-P202	5E18	Tr	古墳前期	器台		受～脚	9/10					英･長	内：受：赤彩、橙 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ･ナデ	ミガキ	透孔4
13	SI155	5E23	Tr	古墳前期	高杯		杯～脚	9/10		10.3			精良	内：杯：赤彩、脚：橙 外：赤彩、赤（10R）		杯：ミガキ、脚上半：指頭圧痕、脚下半：ハケメ、脚端：ヨコナデ	ミガキ	脚の杯との接合部に爪形の刻み巡る
14	Pit509（SI155内）	5E22	1	古墳前期	高杯		杯～脚	1/2					英･長	内：杯：赤彩、脚：明褐 外：赤彩、暗赤褐（10R）		杯：ミガキ、脚上半：ナデ、脚下半：ハケメ	ハケメ→ミガキ	透孔4
15	SI155-P55･98･100･101･141･145	5E22、5F2	1	古墳前期	鉢	B1	口～底	1/1（完形）	15.1	丸	7.8	33	英･長･針	内：赤彩、にぶい橙（5YR） 外：赤彩、にぶい橙（5YR）		ミガキ	ミガキ	被熱?
16	SI155-P123･127	5F2	1	古墳前期	鉢	B2	口～頸	1/5	(15.5)			(8)	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		磨耗	磨耗	
17	SI155	5E23	Tr	古墳前期	鉢	D1	口～体	1/8	(7.8)			(5)	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：赤彩、にぶい橙		ナデ、磨耗	ミガキ?　磨耗	
18	SI155-P12	5E21	1	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/8	(12.0)			(8)	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙		口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
19	SI155-P111･116～118･138･139	5F2	1	古墳前期	鉢	F1b	口～底	2/3	(11.9)	1.7	4.2	(8)	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：灰褐		ミガキ	ミガキ、磨耗･剥落	
20	SI155-P69･70	5E22	1	古墳前期	壺	小型r	体～底	1/2		1.8			英･長･金雲	内：にぶい橙 外：赤彩、にぶい橙（5YR）		ナデ、指頭圧痕	ミガキ	
21	SI155-P211	5E19	Tr	古墳前期	壺	小型	底	1/2		2.4			英･長･金雲	内：橙 外：橙		ハケメ	体：ハケメ、底付近：ケズリ、底：ナデ	
22	SI155	5E18	Tr	古墳前期	台付鉢?		脚	1/1		5.9			英･長	内：灰白 外：灰白		ナデ	指頭圧痕	
23	SI155-P31	5E22	1	古墳前期	台付壺?		体～脚	2/3		9.0			英･長･白砂	内：暗赤灰（2.5YR） 外：明赤褐（2.5YR）		ナデ、磨耗	ハケメ→ナデ、磨耗	
24	SI155	5E23	Tr	古墳前期	台付壺?		体～脚	1/2		6.45			英･長･金雲玉髄	内：明褐 外：橙		ナデ	体：ミガキ、脚：指頭圧痕、底：ナデ	
25	SI155-P244	5E19	Tr	古墳前期	壺	P	口～頸	1/16					英･長･金雲	内：灰褐 外：黒褐	外：スス	ミガキ	口：ハケメ→ミガキ、頸：ヨコナデ	
26	SI144-P1203･1204･1206	6E16	床1	古墳前期	甕	I	口～体	1/8	(22.0)			(8)	英･長･金雲玉髄	内：橙 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ･ナデ、口･体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ナデ･一部ケズリ、体：ナデ･一部ケズリ	
外	SI144-P385･614･880･881･884･1202･1204～1209	5E15、6E16･21	1･床1･Ⅱ下															

正尺C遺跡　土器観察表（2）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
27	SI144-P867	6E21	床1	古墳前期	甕	I	口～体	1/10	（23.7）			（7）	英・長・白砂	内：灰黄（2.5YR） 外：にぶい橙		口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
28	SI144-P111・1264	5E20	Ⅱ下・6	古墳前期	甕	C2	口～体	1/4	16.6			10	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ、体：ハケメ	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SI144-P135・156・157・160・161・179・212・221・234・235・240・252・264・274・515・529・544・545・636・660・698・1254・1260・1270	5E15・20、6E11・16	Ⅱ下・3・6															
29	SI144-P152・237・265・268	5E15、6E11	Ⅱ下	古墳前期	甕	C3	口～体	1/3	（14.5）			（20）	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SI144-P31・137・150・158・159・220・263・268・1142・1148・1291・1299・1352・1359・1395	5E15・20、6E11・16	Ⅱ下・床1・6															
30	SI144-P1284・1303・1312・1391	6E16	6	古墳前期	甕	H	口	9/10	14.0			36	英・長・金雲	内：灰白 外：灰白		ハケメ	ハケメ→ミガキ	
31	SI144-P1277～1279・1281・1282・1301	5E20、6E16	6	古墳前期	甕	C2	口～底	1/3	17.8	1.5	22.3	28	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ・指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ケズリ、底：ハケメ→ナデ	
外	SI144-P1277・1279・1281・1282	5E20、6E16																
32	SI144-P289	6E11	Ⅱ下	古墳前期	壺	A	口～頸	1/10	（20.0）			（5）	英・長・金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（7.5YR）		ハケメ・ナデ	磨耗	
33	SI144-P1128	6E11	6	古墳前期	壺	A	口～頸	1/7	（20.0）			（5）	英・長・金雲 白砂	内：黒褐 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ハケメ→ミガキ、頸：ミガキ	口端：ヨコナデ、口：ハケメ→ミガキ、頸：ヨコナデ→ミガキ	
34	SI144-P1109・1141・1145・1160・1263・1270	5E15・20、6E11	床1・6	古墳前期	壺		頸～体	3/4					英・長・金雲 白砂・チャ	内：褐灰 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ、粘土接合痕明瞭	ハケメ・ケズリ→ミガキ	
外	SI144-P909・1140・1164・1182・1240・1280	5E20、6E16、6F5																
35	SI144-P465・466・468～471・965	5E25	1・床1	古墳前期	壺	N	口～頸	2/3	7.2			10	英・長・金雲	内：口：赤彩、赤（10R）、にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		口：ヘラナデ、頸：ハケメ	ハケメ→ミガキ	
36	SI144-P79・101・273・1354・1368 SK164	5E15・19・20、6E11 6E7	6・Ⅱ下 1	古墳前期	壺	H2	口・体	1/3					英・長・金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙		ハケメ・ミガキ・ヘラナデ	ミガキ	
外	SI144-P251・1165 SK164-P476・503・636・665・667・690	5E15・20 6D23、6E2・3・7	Ⅱ下・床1 1・3・4															
37	SI144-P431	5E20	Ⅱ下	古墳前期	蓋	A	鈕～体	2/3					英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	ナデ	鈕上面「×」印
38	SI144-P602	6E21	Ⅱ下	古墳前期	蓋	B	鈕～体	2/3					英・長・金雲	内：灰白（10YR） 外：赤彩剥落、にぶい黄橙（10YR）		ナデ	ミガキ	
39	SI144-P192・195・197	5E19	Ⅱ下	古墳前期	鉢	G	口～底	1/4	13.2	5.6	9.0	13	英・長・金雲 玉髄・白砂	内：にぶい褐 外：にぶい褐	外：スス	口端：ナデ、口～底：ハケメ	口：ナデ、体：ケズリ、底：ナデ	
外	SI144-P193・194・196・198・199・225・256・965	5E19・20・25、6E11	Ⅱ下・床1															
40	SI144-P45	6E16	Ⅱ下	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/15	（12.4）			（3）	英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙		口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ケズリ	
41	SI144-P709・710・712・713・908・910・926	5E25、5F5、6F1・21	Ⅱ下・床1	古墳前期	鉢	F1a	口～底	1/2	10.6	0.7	9.2	11	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ミガキ	ミガキ	
外	SI144-P706・707・711・714・922	5E20・25、6E21 5F5、6F1																
42	SI144-P817	6E16	床1	古墳前期	鉢	C	口～体	1/10	（14.0）			（4）	英・長	内：口：赤彩、赤橙（10R）、にぶい橙 外：赤彩、赤橙（10R）		口：ヨコナデ、体：ヘラナデ	口：ヨコナデ→ミガキ、体上半：ハケメ→ミガキ、体下半：ケズリ→ミガキ	
43	SI144-P1154	5E20	床1	古墳前期	鉢	F2b	口～体	1/12	（14.0）			（3）	英・長	内：浅黄橙（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		ナデ、磨耗	口：ヨコナデ、体：ケズリ→ミガキ、磨耗	
44	SI144-P204	5E20	Ⅱ下	古墳前期	器台	A2	受	1/4	10.5			11	英・長・金雲	内：赤彩？　にぶい橙 外：赤彩？　にぶい橙		ナデ	ヨコナデ	

正尺C遺跡　土器観察表（3）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
45	SI144-P787･796	6E16	1	古墳前期	高杯		杯	1/4					英	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ、磨耗	ミガキ、磨耗	
46	SI144-P381	5E20、6E16	1･Ⅱ下	古墳前期	結合器台	C	受	1/8					英	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ、磨耗	ミガキ、磨耗	
47	SI144-P313	6E16	Ⅱ下	古墳前期	器台		受～脚	1/1		12.3			英･長･赤色粒子	内：にぶい橙 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ→ナデ	ハケメ→ミガキ、磨耗	透孔5
48	SI144-P1210	6E21	床1	古墳前期	高杯		杯～脚	4/5		15.4			英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		杯：ミガキ、脚：ハケメ	杯：ハケメ、脚：ミガキ	透孔3
49	SI144-P371	6E16	Ⅱ下	古墳前期	高杯		杯～脚	4/5		12.4			英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		杯：ミガキ、脚：ハケメ	ミガキ	透孔4
50	SI36-P30･32･36･42･44･45	9B14･19	床面	古墳前期	甕	C2	口～底	1/2	18.0	3.0	24.7	22	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ハケメ（求心的）	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ケズリ	底部充填技法？（外面凹みあり）
51	SI36-P36･38	9B19	床面	古墳前期	甕	C2	口～体	1/2	21.0			32	英･長･金雲 玉髄･白砂	内：黒褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ（原体複数）指頭圧痕、底付近：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ（原体複数）・指頭圧痕	
52	SI36-P36･42･44	9B14･19	床面	古墳前期	甕	E	口～体	1/2	18.0			18	英･長･金雲	内：にぶい黄褐 外：にぶい黄褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ･指頭圧痕･輪積痕明瞭	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
53	SI36-P3	9B17	床直	古墳前期	甕	B2	口～体	1/4	18.5			8	英･長･金雲	内：橙 外：橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ケズリ	
54	SI36-P33･36･37	9B19	床面	古墳前期	甕	K	口～底	2/3	18.2	1.0	21.3	24	英･長･玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口端：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ、口･体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ（原体2種2本/4mm･4本/9mm）、底付近：ケズリ	底：焼成前穿孔
55	SI36	―	床面	古墳前期	甕	E	口～体	9/10	15.6	3.0	15.7	16	英･長･金雲	内：褐 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ヘラナデ、底付近：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラナデ、底付近：ケズリ→ハケメ、底：ハケメ	
56	SI36-P29･30･40	9B19	床面	古墳前期	甕	C2	口～体	1/6	14.5			15	英･長･金雲 チャ	内：褐灰 外：褐灰		口：ヨコナデ･指頭圧痕、体：ヘラナデ･ハケメ･指頭圧痕	口：ヨコナデ･指頭圧痕、体：ハケメ（原体2種幅10mm･4～5mm）	
外	SI36	―	覆土															
57	SI36-P12～14	9B16･21	床直･旧河道滑落	古墳前期	甕	C2	口～底	1/2	13.8	3.0	14.1	32	英･長･金雲	内：灰白（10YR） 外：灰白（10YR）	外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラナデ、底：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ナデ	
58	SI36-P12～16	9B16･21	床直･旧河道滑落	古墳前期	甕	C3	口～底	1/3	17.6	3.8	18.6	20	英･長･金雲 チャ	内：黄褐（10YR） 外：黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口端：ヨコナデ、口下半：ハケメ、体：ハケメ、底：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ナデ･ハケメ	（図上復元） 底部充填技法？（内面凹みあり）
59	SI36-P16･17	9B13		古墳前期	甕	F	口～体	1/3	17.4			21	英･長･金雲 玉髄	内：にぶい褐 外：褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ケズリ	
60	SI36-P27･34･36･38･42･44	9B14･19	床面･覆土	古墳前期	甕	C4	口～体	2/3	17.0			28	英･長･金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ→ナデ、体下半：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ケズリ･ナデ	
61	SI36-P36･38･42	9B19	床面	古墳前期	甕	H	口～体	2/3	15.0			32	英･長･金雲 白砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙	外：スス	口：ヨコナデ、口･体の境：ナデ、体上半：ハケメ、体下半：ハケメ･ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラナデ、底付近：ケズリ	
外	SI36-P38･42	9B19																
62	SI36-P34･36･38	9B19	床面･覆土	古墳前期	甕	D	口～体 底	4/5	16.3	2.0	(15.4)	18	英･長･金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ･指頭圧痕、体：ヘラナデ･ナデ、底：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ヘラケズリ･ヘラナデ	底部充填法
63	SI36	9B18		古墳前期	甕	C4	口～体	1/3	17.0			25	英･長･金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ、口･体の境：ケズリ、体：指頭圧痕	口：ナデ、体：ハケメ	
64	SI36-P30･34･36･37	9B19	床面	古墳前期	甕	B2	口～体	9/10	16.0	3.0	11.6	26	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口･体との境：ハケメ、体上半：ヘラナデ、体下半：ハケメ、底付近：ケズリ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ケズリ、底付近：ケズリ	
65	SI36-P12	9B21	床直	古墳前期	壺	B	口～体	1/5	17.9			12	英･長･金雲	内：褐灰 外：橙		口：ヨコナデ、口･体の接合部：指頭圧痕、体：ケズリ	ハケメ→ナデ	
66	SI36-P19･29	9B18･19	床面	古墳前期	壺	r	頸～体	1/2					英	内：にぶい黄橙 外：赤彩、にぶい黄橙		頸：ヨコナデ、体：ハケメ→指頭圧痕	ミガキ、剥落	
67	SI36-P28･36	9B19	床面	古墳前期	壺	小型	体	1/4					英･長	内：黒（5Y） 外：灰黄褐（10YR）		上半：ハケメ、下半：ナデ	ハケメ→ミガキ	
68	SI36	―	床面･覆土	古墳前期	壺	J1	口～体	1/3	12.4			21	英･長･金雲	内：橙 外：橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ミガキ、剥落	
69	SI36-P7	9B22	床直	古墳前期	壺	N	口～底	1/1（完形）	8.0		18.6	33	英･長	内：口：赤彩、明赤褐（2.5YR）橙（7.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		口：ハケメ･ナデ	ミガキ	

正尺C遺跡　土器観察表（4）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
70	SI36-P40	9B19	床面	古墳前期	鉢	F2a	口 体～底	1/5	（13.0）	2.4	（7.5）	（4）	英・長・白砂	内：赤彩?　橙 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ・ヘラナデ→ナデ、底付近：ヘラナデ	ハケメ→ミガキ	（図上復元） 底部充填技法？（底部内外に凹みあり）
71	SI36-P39	9B19	床面	古墳前期	鉢	F2a	口～底	1/1	9.0	3.8	6.2	27	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	ハケメ	口～体上半：ハケメ、体下半：ケズリ、底：ナデ	倒れた状態で被熱または灯明皿に転用
72	SI36-P36	9B19	床面	古墳前期	鉢	F4b	口～底	9/10	11.3	4.2	6.1	30	英・白砂	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ハケメ→ヨコナデ、体：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ハケメ→ナデ	
73	SI36-P20	9B13	床面	古墳前期	鉢	B2	口～底	1/3	10.9	2.0	7.1	12	英・長・金雲	内：赤彩、暗赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ	ミガキ、底：ケズリ→ミガキ	
74	SI36	―		古墳前期	高杯	A1	杯～体	1/8	（30.9）			（1.5）	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：橙		ナデ、磨耗	ナデ、磨耗	
75	SI36-P4 SD209	9B18 10C25	床面	古墳前期	高杯		口～体	1/2	21.8			21	英・長・金雲 針	内：にぶい黄橙（10YR） 外：明黄褐（10YR）	外：黒斑	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
76	SI36	―	覆土	古墳前期	高杯	B	口	1/10	（14.5）			（4）	英・長	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ハケメ→ミガキ	
77	SI36-P2	9B17	床直・覆土	古墳前期	高杯		杯	3/5					英・長	内：赤彩、にぶい橙（2.5YR） 外：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	籾痕? 脚との接合面に爪形の刻みが連続
78	SI36-P25	9B18	床直	古墳前期	高杯	E2	杯～脚	4/5	9.7			22	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		杯：ミガキ、脚：ハケメ	ミガキ	透孔3
79	SI36-P44	9B14	床面	古墳前期	高杯		杯～脚	2/3					英・長・金雲	内：杯：赤彩、脚：灰黄褐（10YR）、外：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）		杯：ミガキ、脚：ハケメ・ケズリ	ミガキ	透孔4、器面剥落顕著
80	SI36-P41	9B19	床面	古墳前期	器台	C	受～脚	1/1（完形）	10.0	13.0	9.4	36	英・長・金雲	内：受のみ赤彩、赤褐（2.5YR）、脚：にぶい橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）	脚内：スス	受：ミガキ、脚：ハケメ	ミガキ	
81	SI36	9B18		古墳前期	器台	C	受～脚	4/5	9.0	12.3	10.4	6	英・長	内：受のみ赤彩、赤（10R）、脚：にぶい黄褐（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		受：ミガキ、脚上半：ナデ、脚下半：ハケメ、脚端：ヨコナデ	ミガキ	透孔3
外	SI36	―	覆土															
82	SI36-P1	9B17・18	床直	古墳前期	器台	D2	受～脚	2/3	10.8			18	英・長・金雲	内：受のみ赤彩、橙（2.5YR）、脚：にぶい橙 外：赤彩、橙（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ハケメ	ハケメ→ミガキ	透孔3
83	SI36-P24	9B13	床直	古墳前期	装飾器台	A1	口～脚	1/2		13.6			英・長 チャ（円レキ多く、他と異質）	内：口・受：赤彩、橙（2.5YR）、脚：明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、橙（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ、脚：沈線間に爪形連続刺突	口透孔：2段　上段4（残存3）、下段4（残存4）、脚透孔：4（残存3）
84	SI36-P12	9B21	覆土	古墳前期	結合器台	B	口～受	1/10					英・長・金雲 玉髄	内：赤彩 外：赤彩		口：ナデ、受：ケズリ	ヨコナデ	（図上復元）透孔2段　上段9（残存2）、下段7（残存2）
85	SI36-P21	9B13	床直	古墳前期	結合器台	B	口～受	1/8	20.0			5	精良	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、灰赤（2.5YR）		口：ヨコナデ→ミガキ、受：ハケメ→ミガキ	口：ヨコナデ→ミガキ、受：ハケメ→ミガキ	
86	SI36-P3	9B17	床面・覆土	古墳前期	結合器台	C	口～脚	1/3					英・長	内：口・受：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）、脚：にぶい褐 外：赤彩、にぶい橙（2.5YR）		受：ミガキ、脚上半：ケズリ、脚下半：ナデ	ハケメ→ミガキ	受透孔：（残存1）、脚透孔：（残存1）
87	SI36-P43	9B19	床面	古墳前期	器台	E1	受～脚	9/10	14.5	10.0	8.1	24	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙		口：ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ、脚：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ミガキ、脚：ハケメ→ミガキ（面取）、脚裾：ヨコナデ	
88	SI36-P8	9B22	床面	古墳前期	台付鉢		体～脚	9/10		8.2			英・長・金雲	内：橙 外：橙		杯：ミガキ、脚：ナデ	ナデ	
89	SD311-P264・270	10D20	4	古墳前期	甕	C2	口～体	1/7	26.0			7	英・長・金雲	内：灰褐 外：灰褐	外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ・指頭圧痕	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ハケメ・ケズリ・ヘラナデ	
90	SD311-P239	10D10	4	古墳前期	甕	C3	口～体	1/2	16.2			35	英・長・金雲	内：明褐灰 外：明褐灰	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ・一部ケズリ	
91	SD311-P1・3～6・8・9・11～14・16	10D10	Ⅱ下	古墳前期	甕	C2	口～底	4/5	20.0	1.7	25.7	34	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：黄橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ（原体2種幅13mm・幅7mm）	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ・ヘラナデ、体下半：ヘラケズリ	
92	SD311-P359	10D15	3b	古墳前期	甕	C4	口～底	4/5	20.2	2.4	26.0	18	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、体～底：ハケメ	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ・ハケメ、底：ハケメ	
93	SD311-P608	12D21	4	古墳前期	甕	C4	口～体	1/6	（17.0）			（6）	英・長・金雲	内：灰白 外：浅黄橙	外：スス	口：ヨコナデ→指頭圧痕、体：ハケメ→ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ナデ、磨耗	

正尺C遺跡　土器観察表（5）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
外	SD311-P403·475·476·482・575·608～610·615·633～635	12D16·21	3b·4·6															
94	SD311-P95·113·115·208·211·220	11D16·17·21	1·3b·4·6	古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	15.0			35	英·長	内：にぶい橙 外：にぶい橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ヘラナデ（ハケメに近い）・ハケメ	
外	SD311-P95·113·219	11D16·17·21	1·3b·4															
95	SD311-P238·349	10D15、11D16	1·4·Tr	古墳前期	甕	C2	口～体	2/3	18.5			25	英·長·金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ケズリ→ヨコナデ、体上半：ナデ、体下半：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口端にヘラ状工具による刻み
96	SD311-P240	10D20	4	古墳前期	甕	J	口～体	1/2	15.0			21	英·長·金雲 白砂	内：浅黄橙 外：浅黄橙	外：スス	口：ヨコナデ、口·体の境：指頭圧痕、体：ハケメ（ヘラナデに近い）	口：ハケメ·ヨコナデ、体：ハケメ·ヘラナデ	
外	SD311	10D10	Tr															
97	SD311-P565·572	12D22	3C	古墳前期	甕	C4	口～体 底	1/4	（17.4）	4.3		（11）	英·長·チャ	内：灰白 外：灰白	外：スス	口：ヨコナデ、口·体の境：指頭圧痕、体上半：ヘラケズリ、体下半：ハケメ	磨耗	（図上復元） 底部充填技法?（上げ底気味）
98	SD311-P633	12D21	4	古墳前期	甕	C2	口～体	1/4	15.0			11	英·長·金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		口：ヨコナデ、口·体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ·ヘラナデ·ナデ	
99	SD311-P359	10D15	3b	古墳前期	甕	C3	口～体	1/4	13.1			11	英·長·金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口端：ヨコナデ、口：ハケメ→指頭圧痕、口·体の境：指頭圧痕→ハケメ、体：指頭圧痕·ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
100	SD311-523·579·615	12D16·21·22	1·3a·3b·4	古墳前期	壺	G1	口～体	1/3	10.0			20	英·長·金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ヘラナデ·ナデ	
外	SD311-P646	12D22	1·4															
101	SD311-P615	12D21	4	古墳前期	壺		体 体～底	3/10		5.8			英·長·白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙		ハケメ·ナデ·一部ミガキ	ミガキ、底：ミガキ	（図上復元） 底部充填技法
102	SD311-P505·517	12D17	4	古墳前期	壺	G2	口～体 体～底	1/3	13.6	4.4		16	英·長·金雲	内：褐灰（10YR） 外：灰白（10YR）		口端：ヨコナデ、口：ハケメ·ケズリ→ミガキ、体上半：ナデ、体下半：ハケメ、底：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ドーナツ状·ナデ	（図上復元） 底部充填技法
外	SD311-P507·510·512·518・578	12D16·17·21	3b·4															
103	SD311-P637	12D16	4	古墳前期	壺	G2	口～体	1/20	（22.2）			（1）	英·長·金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		口·頸：ヨコナデ→ミガキ、頸·体の境：指頭圧痕	口·頸：ヨコナデ→ミガキ	
104	SD311-P424	12D22	3b	古墳前期	壺	B	口～体	1/20	（19.8）			（1）	英·長·玉髄 針	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ヨコナデ	ヨコナデ	
105	SD311-P421·425·426	12D17·22	3b	古墳前期	壺	A	口～頸	1/10	（21.0）			（8）	英·長·金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		口：ハケメ→ナデ、磨耗	ハケメ→ミガキ	
106	SD311-P92	11D16	1	古墳前期	壺	C	口～頸	1/6	（16.5）			（7）	英·長·金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：黒褐（10YR）	外：スス	ヨコナデ	ヨコナデ	
107	SD311-P430	12D17	3b	古墳前期	壺	I2	口～頸	1/8	（23.0）			（5）	英·長·針	内：赤彩剥落、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩剥落、にぶい黄橙（10YR）		ミガキ	口：ミガキ、頸：ハケメ	
108	SD311-P593	12D16	4	古墳前期	壺	B	口～頸	1/6	（19.0）			（6）	英·長·金雲	内：赤彩? 赤褐（5YR）、浅黄橙、外：赤彩、赤褐（5YR）		ヨコナデ、剥落	ハケメ→ヨコナデ、剥落	
109	SD311-P250·332	10D20、11D16	4	古墳前期	壺	N	口	1/2	9.8			18	英·長·金雲	内：浅黄橙 外：赤彩、暗赤褐（5YR）		ナデ、磨耗	ミガキ	
110	SD311-P434	12D22	3b	古墳前期	壺	N	口	1/4	（7.8）			（3）	英·長·金雲	内：灰白（10YR） 外：赤彩剥落?　浅黄橙		ナデ	ミガキ	
111	SD311-P84	11D16	3b	古墳前期	壺	L	体	1/3					英·長·金雲 白砂·針	内：褐灰（10YR） 外：赤彩、赤褐（5YR）		ナデ	ミガキ	
外	SD311-P121	11D16、11E4	3b·Tr															
112	SD311-P277·331	10D20、11D16·22	3a·4	古墳前期	壺	小型	体	1/4					英·長·チャ	内：灰白（10YR） 外：灰白（10YR）		ハケメ→ナデ、磨耗	ハケメ→ミガキ（ヘラナデ）、磨耗	
113	SD311-P322·328	11D16	4	古墳前期	壺	小型	底	2/3		3.8			英·長·金雲 玉髄	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		ヘラナデ	ハケメ、底：無調整	
114	SD311-P518	12D17	4	古墳前期	壺	J1	口～頸 頸～底	1/3	12.0	0.8	11.6	16	英·長	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		口～頸：ヨコナデ、体：ナデ、磨耗	口～頸：ヨコナデ、体：ハケメ·ケズリ、磨耗	（図上復元）
115	SD311-P630	12D16	4	古墳前期	鉢	F3b	口	1/8	（12.0）			（5）	英·長·金雲	内：灰白 外：灰白		ミガキ	ハケメ→ミガキ	

正尺C遺跡　土器観察表（6）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
116	SD311	12D16･19･21	4	古墳前期	鉢	B2	口	1/30	(15.4)			(2)	英･長･金雲	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	
117	SD311	12D16･21	Tr	古墳前期	鉢	B2	口～体	1/8	(13.6)			(1)	英･長	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		口：ハケメ→ミガキ、体：ミガキ?剥落	ハケメ→ミガキ	
118	SD311	11D16	4	古墳前期	鉢	C	口～体	1/8	(12.4)			(5)	英･長･金雲針	内：口：赤彩、にぶい赤橙（10R）、外：赤彩、にぶい赤橙（10R）		口：ミガキ、体：ナデ	ミガキ	
119	SD311-P607	12D21	4	古墳前期	鉢	G	体～底	4/5		6.5			英･長･金雲	内：赤彩、赤橙（10YR） 外：赤彩、赤橙（10YR）	底部内面：赤色顔料	ミガキ、底：上げ底で、ミガキ	ミガキ	
120	SD311-P42･77･265･290･291	10D20、11D16	3･3b･4	古墳前期	壺	K1	口～体	9/10	10.2			28	英･長･金雲玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ナデ･指頭圧痕、体：ナデ･輪積痕明瞭、底付近：ハケメ･ヘラナデ	口：ナデ（ヨコナデ）、体上半：ナデ、体下半：ハケメ	
121	SD311-P343	11D16	4	古墳前期	鉢	F2b	口～体	1/3	14.8			16	英･長･金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）	外：黒斑	ハケメ	内：ヨコナデ、体：ハケメ	
122	SD311-P69･481･483	12D16･21	2･3b･4	古墳前期	鉢	B1	口～体	2/3	22.6			34	英･長･金雲	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ミガキ、剥落（使用痕?）	ミガキ	
123	SD311-P61～63･65	11D17･22	2下	古墳前期	高杯		杯	2/3					英･長･金雲白砂	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ハケメ→ミガキ、剥落	ミガキ	
124	SD311	12D22	Tr	古墳前期	高杯		杯～脚	2/3					英･長･白砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙		杯：ミガキ、脚：ナデ	杯：ミガキ、脚：ハケメ→ミガキ	
125	SD311	12D17	3a	古墳前期	高杯		杯～脚	4/5					英･長･金雲	内：杯：赤彩、浅黄橙（10YR） 外：赤彩、橙（2.5YR）		杯：ミガキ、脚：ハケメ、磨耗	ミガキ	
126	SD311	12D18～23	3	古墳前期	高杯		杯～脚	4/5					英･長･玉髄	内：にぶい黄橙 外：にぶい橙		杯：ケズリ、脚：ヘラケズリ･ナデ	ミガキ	
127	SD311	11E6	3b	古墳前期	高杯		脚	1/1					英･長･金雲	内：灰白 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ	ミガキ	
128	SD311	12D22	Tr	古墳前期	装飾器台	B	口	1/20	(22.0)			(2)	英･長	内：明褐灰 外：赤彩、明褐		ハケメ→ナデ	ミガキ	透孔2段　各8?（残存各1）
129	SD311	11D16	Ⅱ下	古墳前期	結合器台	B	口～受	1/8					英･長	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	透孔2段 上段8（残存1）、 下段8（残存2）
130	SD311	12D22	Tr	古墳前期	結合器台	A	口～受	1/4					英･長･針	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ハケメ→ミガキ	ミガキ	透孔8（残存3）
131	SD311	12D22	4	古墳前期	器台	D1	受	1/5	(8.2)			(5)	英･長	内：赤彩、赤（7.5R） 外：赤彩、赤（7.5R）		剥落	ミガキ	
132	SD311	12D22	3a	古墳前期	器台	C	受～脚	4/5	9.1			19	英･長･金雲白砂	内：浅黄橙 外：橙		磨耗	磨耗	
133	SD311	12D16	Tr	古墳前期	器台		受～脚	4/5					英･長	内：灰白 外：赤彩、にぶい赤褐（7.5R）		受：磨耗、脚：ハケメ→ナデ	ミガキ	透孔4
134	SD311-P236	10D15	1	古墳前期	器台		脚	4/5		10.9			英･長･金雲	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		ハケメ	ハケメ→ミガキ	透孔3
135	SD311-P234	10D15	4	古墳前期	器台		受～脚	2/3		15.0			英･長･白砂	内：受：赤彩、赤（10R）、浅黄橙 外：赤彩、赤（10R）	脚内：スス?受～脚の孔：タール	受：ミガキ、脚：ハケメ→ナデ	ミガキ	透孔4
136	SD311	12D21	3b	古墳前期	蓋	A	鈕～口	9/10	16.2		6.4	17	英･長･白砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ナデ･ハケメ、剥落	ミガキ、剥落	
137a	SD209	10C25		弥生～古墳前期	甕	縄文	体			6.6			英･長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	ナデ	縄文RL（直前段多（3）条?）、底：無調整	（図上復元） 天王山式系
137b	SD311-P333･715	11D16･17	4･M	弥生～古墳前期	甕	縄文	体～底	1/3		6.6			英･長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	ナデ	縄文RL（直前段多（3）条?）、底：無調整	（図上復元） 天王山式系
138	SD214-P5･182～185･191･228	12D2･7	2	古墳前期	甕	I	口～体	1/2	23.6			26	英･長･金雲玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ･ハケメ、体：ハケメ	
139	SD214-P19･529･536～540･550･552	12C23･24	1･2	古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	18.6			18	英･長･金雲玉髄･白砂チャ	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SD214-P9･179･448･457･529～534･544･547	12C17･18･23･24、12D8	2･3															
140	SD214-P385	12D4	2	古墳前期	甕	F	口～体	1/7	(22.2)			(5)	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･指頭圧痕、輪積痕明瞭	口：ヨコナデ･指頭圧痕、体：ハケメ･ケズリ→ナデ	
141	SD214	12D8	Ⅱ	古墳前期	甕	C2	口～底（完形）	1/1	13.5	3.6	11.2	36	英･長･金雲白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ、体：ヘラナデ、底：ヘラナデ	口：ヨコナデ､体上半：ヘラナデ、体下半：ハケメ､底付近：ケズリ、底：ドーナツ状･ケズリ	底部充填技法

正尺C遺跡　土器観察表（7）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
142	SD214-P287･288･486	12C18、12D13	2･3	古墳前期	甕	C4	口～体	1/3	13.6			22	英･長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ケズリ	
143	SD214-P5･21･153･402	12C18･23･24	1･2･3	古墳前期	甕	E	口～底	1/2	17.3	1.6	17.3	22	英･長･白砂	内：にぶい褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体中：ヘラケズリ（ヘラナデに近い）、体下半：ケズリ	
144	SD214-P330･357	12D3	3	古墳前期	甕	E	口～底	4/5	15.6	4.2	17.5	12	英･長･金雲チャ	内：にぶい褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体上半：ヘラナデ、体下半：ハケメ、底付近：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ、底：ドーナツ状･ナデ	底部充填技法
145	SD214-P364	12D3	3	古墳前期	甕	C2	口～体	1/5	15.6			7	英･長･金雲玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ、口･体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ケズリ	
146	SD214-P238･435	12D7･8	3	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/10	（11.0）			（4）	精良	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ナデ（ヘラナデ）、体：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ･指頭圧痕	
147	SD214-P119	12D8	1	古墳前期	鉢	B1	口～体	1/8	（12.0）			2	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
148	SD214-P295	12D8	1	古墳前期	鉢	D1	口～底	1/3	11.8	3.0	7.9	7	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：黒斑	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ナデ、底付近：ケズリ→ハケメ、底：ハケメ	
149	SD214-P296	12D12	3	古墳前期	鉢	F1b	口～底	9/10	9.9	2.2	5.4	34	英･長･金雲玉髄･白砂	内：明褐 外：にぶい橙		ナデ	口：ナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ→ハケメ、底：無調整	底部充填技法
150	SD214	12D3	3	古墳前期	壺	I3	口～体	1/5	14.5			8	英･長･金雲白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		口：ヨコナデ、口･体の境：指頭圧痕→ヘラナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、剥落	
151	SD214-P262～264･266	12C22･23	2･3	古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	13.5			15	英･長･金雲白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口端：ヨコナデ､口：ハケメ→ナデ、体：ハケメ	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ･ナデ、体：ハケメ	
152	SD214-P366 —	12D3 12D2･8･15	3 Ⅱ上･Ⅱ下	古墳前期	壺	I1	口～頸	4/5	12.6			34	英･長･針	内：橙 外：橙		口：ヨコナデ、頸：ハケメ･ヨコナデ	口：ミガキ･2本1組の棒状浮文（5単位）、頸上半：ヨコナデ、頸下半：ミガキ	
153	SD214-P213･371	12D3･8	1･2･3	古墳前期	壺	B	口～体	1/4	20.0			18	英･長･金雲玉髄･白砂	内：赤彩剥落、にぶい黄橙（10YR）、外：赤彩剥落、にぶい黄橙（10YR）		口･頸：ヨコナデ、体：剥落	口･頸：ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ	
外	SD214-P109･217･363･365･372･373･480･484	12D3･4･7･8	1･2･3															
154	SD214-P348～350･525	12D3	2･3･Tr	古墳前期	壺	A	口～体	2/3	21.6			21	英･長･金雲黒雲	内：灰白（10YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		口：ヨコナデ、頸：ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ	
155	SD214-P11･197･356	12C23、12D3･7･8	1･2･3･Tr	古墳前期	壺	B	口	3/4	19.2			25	英･長	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	
156	SD214-P108･178･196	12D8･9	1･2	古墳前期	甕	C3	口～体	4/5	16.0			36	英･長･金雲白砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙		口：ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
157	SD214-P233	12D7	3	古墳前期	壺	N	口	1/4	12.6			10	英･長･金雲	内：灰褐 外：赤彩、にぶい赤褐（2.5Y）		口端：ヨコナデ、口：ハケメ	ミガキ	
158	SD214	12D3	Tr	古墳前期	壺	M	口～頸	1/9					精良	内：赤彩、赤（10YR） 外：赤彩、赤（10YR）		口：ミガキ、頸：ケズリ･ナデ	ミガキ	
159	SD214-P130	12D8	1	古墳前期	壺	小型	体	1/4					英･長･金雲	内：黄灰（2.5Y） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ、指頭圧痕	ミガキ	
160	SD214-P324･328	12D3	3	古墳前期	高杯	C	杯	1/2	21.8			17	英･長･金雲白砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ハケメ→ミガキ、剥落	ミガキ、磨耗	
161	SD214-P406	12D3	1･Tr	古墳前期	高杯	C	杯	1/10	（21.4）			（5）	英･長	内：灰褐 外：赤彩剥落、にぶい褐		ミガキ	ミガキ	
162	SD214-P319	12D3	3	古墳前期	鉢か高杯		口～体	1/10	（18.0）			（4）	英･長･金雲	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	
163	SD214-P142	12C18･23	2	古墳前期	高杯	C	杯～脚	8/9	13.6			31	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：橙		杯：ナデ、脚：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ケズリ･ハケメ→ミガキ、脚：ハケメ→ミガキ	
164	SD214-P386	12D4	2	古墳前期	高杯	E1	杯～脚	2/3					英･長･白砂	内：赤彩剥落?　橙 外：赤彩剥落?　橙		杯：ミガキ、脚：ナデ、磨耗	杯：ミガキ、脚：ハケメ→ミガキ?　磨耗	
165	SD214-P29･125･138	12D3･8	1	古墳前期	装飾器台	A2	受	4/5					英･長･金雲白砂	内：褐灰、外：赤彩剥落、明赤褐（2.5YR）		受：ナデ	受：ミガキ	
166	SD214-P205	12D3	2	古墳前期	結合器台	A	受	1/8					英･長･針	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	
167	SD214-P298	12D12	3	古墳前期	結合器台	C	口～受	1/3					英･長･金雲	内：灰白（10YR） 外：赤彩剥落? 灰白（10YR）		ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	透孔8（残存4）
168	SD214-P1	12D2	Ⅱ上	古墳前期	器台	D1	受～脚	4/5	10.1	14.9	9.8	21	英･長･金雲	内：受：赤彩、にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、灰黄褐（10YR）	内：脚：スス	受：ミガキ、脚上半：指頭圧痕･ハケメ、脚下半：ハケメ→ヨコナデ	ミガキ	透孔3

正尺C遺跡　土器観察表（8）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
169	SD214-P526	12D3	3	古墳前期	器台	D1	受～脚	1/4	10.4	13.0	9.2	8	英・長・金雲 玉髄・角	内：受：赤彩、赤褐（2.5YR）、 脚：浅黄橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		受：ミガキ・剥落、脚：ハケメ・一部ミガキ	ミガキ、剥落	透孔4（2個1対）
170	SD214-P325	12D3	3	古墳前期	高杯		脚	4/5		14.2			英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ハケメ・ナデ	ミガキ、脚端：ヨコナデ	透孔3
171	SD214	12D8	3	古墳前期	台付鉢		体～脚	8/9					英・長・金雲	内：灰褐、 外：赤彩剥落?　にぶい橙		鉢：ミガキ、脚：ハケメ・ナデ・ケズリ	ケズリ・ハケメ→ミガキ	
172	SD214-P110	12D8	1	古墳前期	高杯		杯～脚	4/5		10.0			英・長・金雲	内：杯：赤彩、明赤褐（2.5YR）、脚：にぶい褐 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）	脚内面：赤色顔料	杯：ミガキ、脚：ナデ（ヘラナデ）・ケズリ	脚：ミガキ	透孔3
173	SD214-P20・26	12D3・7	Ⅱ上	古墳前期	器台		受～脚	1/2		13.4			英・長・金雲 針	内：受：赤彩 脚：にぶい黄橙 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔4
174	SD214-P218	12D4	2	古墳前期	器台		受～脚	2/3					英・長・赤色粒子	内：浅黄橙 外：浅黄橙		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔4（残存3）
175	SD214-P523	12C23	1	古墳前期	器台		脚	4/5		11.3			英	内：褐灰、外：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）		ナデ	ミガキ	
176	SD214-P134	12D9	1	古墳前期	器台		受～脚	4/5					英・長・玉髄	内：褐灰 外：灰褐		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔4
177	SD214-P257	12D3	3	古墳前期	台付壺		体～脚	4/5		8.0			英・長	内：黒褐 外：にぶい黄橙（10YR）		体：ハケメ、脚：ナデ	ミガキ、脚端：ヨコナデ	
178	SD214-P278・279・282～286	12C18	3	古墳前期	蓋	A	鈕～口	1/3	15.0		5.4	22	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ハケメ→ナデ	ナデ	
外	SD214-P285・291・454	12C17・18	1・2・3															
179	SD214-P410	12D3	2	古墳前期	蓋	B	鈕～口	1/2	12.8			2	英・長・金雲 白砂	内：にぶい褐 外：にぶい褐		ハケメ	鈕：指頭圧痕、体～口：ハケメ・ケズリ→ミガキ	
180	SK194（SD214内）-P799	12C6	5	古墳前期	器台		受～脚	2/3		12.4			赤色粒子・針	内：橙（5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	透孔4
181	SD209	―		古墳前期	甕	C2	口～底	1/2	16.9	2.5	25.8	20	英・長・金雲 玉髄	内：灰褐 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ→ナデ、体：ハケメ・ナデ・ケズリ	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ・ケズリ、底：ナデ	
外	SD209-P16・18・19	10C20																
182	SD209-P38	10C25		古墳前期	甕	C2	口～体	2/3	18.3			34	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、剥落	
183	SD209-P36	10C25		古墳前期	甕	C3	口～体	1/3	19.5			12	英・長・金雲	内：浅黄橙 外：浅黄橙	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、一部指頭圧痕、口・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ、一部砂粒の移動顕著	
184	SD209	11C17		古墳前期	甕	A	口～体	1/4	13.4			27	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SD209	10C20																
185	SD209	10C24		古墳前期	甕	C3	口～体	1/3	18.0			12	英・長・金雲	内：浅黄（2.5Y） 外：浅黄（2.5Y）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ、指頭圧痕（ナデ）	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ	口縁歪み
186	SD209-P72	11C6		古墳前期	甕	C4	口～体	2/3	17.0			28	英・長・チャ	内：にぶい黄橙 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、体上半：ハケメ→ヘラナデ、体下半：ヘラケズリ	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ、体下半：ケズリ	
187	SD209-P77・79	11C6		古墳前期	甕	C2	口～体 体～底	1/5	16.0	4.0	（22.5）	30	英・長・白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体～底：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ハケメ（原体幅4mm）・ヘラナデ、底付近：ケズリ、底：ハケメ	（図上復元）
188	SD209-P53・76	10C19、11C11		古墳前期	甕	C4	口～底	2/3	15.5	2.2	14.4	20	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ（砂粒移動痕顕著）、体：ヘラナデ、底：簾状ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ・ヘラナデ、ハケメ（原体2種）、底：ナデ	
189	SD209-P53	10C19		古墳前期	甕	C5	口～体	1/4	14.2			11	英・長・金雲 玉髄・針	内：にぶい褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕、体：ヘラナデ・ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
190	SD209-P49	10C24		古墳前期	甕	C4	口～体	1/5	15.8			9	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：褐灰	外：スス	口：ハケメ・ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
191	SD209-P49	10C24		古墳前期	壺	B	口～体	9/10	17.6			33	英・長・玉髄	内：橙（5YR） 外：橙（5YR）		ハケメ→ミガキ	口：ハケメ→ミガキ、頸：ハケメ→ヨコナデ	
192	SD209	―		古墳前期	甕	C2	口～底	1/2	16.8	2.6	（20.1）	26	英・長・金雲 黒雲	内：にぶい褐 外：明赤褐（2.5YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラケズリ、底：ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ハケメ・ナデ、底：ハケメ	（図上復元）
外	SD209-P30	11C11																

正尺C遺跡　土器観察表（9）

報告№	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
193	SD209-P26･29	11C11		古墳前期	甕	C5	口～底	2/3	16.1	1.1	17.2	30	金雲･白砂	内：にぶい褐 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ	底部充填法?（外面ハケメが底部に対し求心的）
194	SD209-P20･25	10C20、11C11		古墳前期	甕	C2	口～底	3/4	15.0	2.4	14.1	24	英･長･金雲 玉髄･白砂	内：にぶい橙 外：にぶい橙		口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ、底：ケズリ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ、底：ナデ	底部充填法？
195	SD209-P45	10C15		古墳前期	甕	C5	口～体 体～底	1/3	16.8	3.3	(27.8)	12	英･長	内：にぶい橙 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･輪積痕明瞭、底：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラケズリ、底：無調整	(図上復元)
外	SD214-P369	12D3	3															
196	SD209-P13	10C10･14･15･19		古墳前期	甕	I	口～体	1/2	26.6			22	英･長･金雲	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ケズリ、粘土紐接合痕を中心に指頭圧痕	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ･ヘラナデ･ケズリ、体：ハケメ･ケズリ→ミガキ	
197	SD209-P21･22	10C15･25		古墳前期	壺	F2	口～体 体～底	1/3	13.6	5.9		32	英･長･金雲 針	内：にぶい橙 外：にぶい橙	外：黒斑	口：ハケメ→ミガキ、体：ハケメ→ヘラナデ、底：ハケメ→ミガキ	口：ヨコナデ→ハケメ、体：ハケメ→ミガキ･一部ケズリ、底：ミガキ	(図上復元)
198	SD209	10C19		古墳前期	壺	F2	口～底	1/2	13.2	5.6	(23.8)	6	英･長･金雲 チャ	内：橙 外：明褐		口：剥落、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラケズリ→一部ミガキ、底：ハケメ	
199	SD209-P73･81･82	10C5･15、11C1		古墳前期	壺		体～底	1/2		6.9			英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		体：ハケメ･ヘラナデ･粘土接合部に指頭圧痕、底：ケズリ･ナデ	体：ハケメ→ミガキ、底：ナデ･ケズリ	
200	SD209	10C14		古墳前期	壺	P	口～体	1/10	(39.8)			(4)	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：橙		口：ハケメ･ヘラナデ、頸：ハケメ、体：ナデ	口：ハケメ→ヨコナデ、頸：ヨコナデ、体：ハケメ	
201	SD209-P24	11C11		古墳前期	鉢	A	口～体	1/7	31.4			5	英･長･金雲	内：灰褐 外：橙	内：コゲ	口～体上半：ハケメ→ミガキ、体下半：ハケメ→ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ	
202	SD209-P70	11C11		古墳前期	壺	H1	口～底	9/10	7.8	丸	14.6	25	英･長･玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ハケメ→ナデ、体：ハケメ	ハケメ→ミガキ	
203	SD209-P45･47～49	10C24･25		古墳前期	壺	F1	口～底	2/3	9.8	2.5	12.8	24	英･長･金雲 黒雲	内：黒褐（2.5Y） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ナデ･輪積痕明瞭、底：簾状ハケメ	口：ヨコナデ、体：ケズリ→ミガキ	
204	SD209	10C15		古墳前期	壺	H?	口～底	1/3		丸			英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい褐	外：スス	口：ハケメ、体：ヘラケズリ、底：ヘラナデ･ナデ	ハケメ	
205	SD209	10C5		古墳前期	鉢	D1	口～底	1/2	10.0			15	英･長･白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：黒（10YR）		口：ハケメ、口･体の境：指頭圧痕、体：ナデ	口：ハケメ、体上半：ハケメ→ナデ、体下半：ハケメ	
206	SD209	10C19･20･25		古墳前期	鉢	E	口～底	1/2	15.0	3.8	9.2	22	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		口端：ヨコナデ、口：ハケメ、体：ヘラナデ	口端：ヨコナデ、口：ハケメ→ナデ、体：ハケメ→ナデ、底付近：ケズリ、底：ナデ	
207	SD209	10C19･20		古墳前期	鉢	D1	口～底	4/5	12.8	1.4	9.3	27	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、口･体の境：指頭圧痕、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ･ヘラナデ	
208	—	11C17		古墳前期	鉢	B1	口～体	1/4	12.6			(8)	英･長･チャ 針	内：にぶい橙（5YR） 外：にぶい橙（5YR）		ミガキ	ハケメ→ミガキ	
209	SD209	10C19･20		古墳前期	鉢	小型	口～体	1/5					英･長	内：にぶい橙 外：にぶい橙		口：ハケメ、体：ナデ	口：剥落、体：ハケメ→ナデ	
210	SD209	11C16		古墳前期	鉢	D	口～体	1/8	(9.6)			(5)	英	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ハケメ→ナデ、口･体の境：指頭圧痕、体：ケズリに近いナデ	ハケメ→ナデ	
211	SD209-P74･75	11C6		古墳前期	鉢	D1	口～底	4/5	10.7	2.1	6.6	19	英･長	内：にぶい橙（5YR） 外：にぶい橙（5YR）		口：ヨコナデ、体：ナデ、磨耗	口：ヨコナデ･磨耗、体：ハケメ→ナデ、底付近：ケズリ→ハケメ	
212	SD209	10C20		古墳前期	鉢	H	口～体	1/9	(13.4)			(4)	英･長･玉髄	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ケズリ	
213	SD209-P14	10C20		古墳前期	鉢	F2b	口～体	1/4	14.2			9	英･長･金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ハケメ･ヘラナデ	
214	SD209	10C20		古墳前期	鉢	F2a	口～体	1/5	9.0			6	英･長	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい褐		ナデ	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ケズリ	
215	SD209-P71	10C5、11C11		古墳前期	壺	A	口～体	1/4					英･長	内：灰白 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		口～頸：ハケメ→ナデ、体：指頭圧痕	ミガキ	
216	SDD209	10C25		古墳前期	壺	B	口～頸	1/9	(21.5)			(4)	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	
217	SD209	10C24		古墳前期	壺	N	口	1/2	11.6			15	長･金雲	内：赤彩剥落、にぶい橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ナデ	ハケメ→ミガキ	
218	SD209	10C25		古墳前期	壺	N	口	1/3	9.6			9	英･長･金雲 チャ	内：赤彩、にぶい橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ハケメ	口端：ヨコナデ→ミガキ、口：ハケメ→ミガキ	
219	SD209 SI77	11C6 11C7	Tr	古墳前期	壺	M	口～頸	1/2					英･長･金雲	内：灰白 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ハケメ→ナデ	ミガキ	
220	SD209-P25･26	11C11		古墳前期	台付壺		体～脚	2/3		9.6			英･長	内：褐灰 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		体：ナデ、底：ハケメ、脚：ナデ･ハケメ	ミガキ	

正尺C遺跡　土器観察表（10）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
221	SD209	11C16		古墳前期	鉢	F2b	鉢～脚	1/3	13.6	7.8	7.7	15	英･長･金雲	内：浅黄橙 外：浅黄橙		ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ケズリ、脚：ナデ	台付鉢
222	SD209-P0	10C14		古墳前期	台付鉢		体～脚	4/5		9.0			英･長･チャ	内：にぶい橙 外：にぶい橙		鉢：ナデ、脚上半：ナデ、脚下半：ハケメ	ナデ	
223	SD209-P13	10C15		古墳前期	台付鉢?		底	9/10		7.4			英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	ナデ、磨耗、底：高台状（ドーナツ状）・ナデ	
224	SD209-P46	11C24		古墳前期	蓋	A	鈕～口	9/10	14.2		4.7	24	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ･ナデ	鈕：ナデ、体：ハケメ･指頭圧痕、口：ヨコナデ	
225	SD209-P34	10C25		古墳前期	蓋	B	鈕～口	1/1	14.7		4.5	36	英･長	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ナデ	ハケメ、器面荒れ	
226	SD209	10C13		古墳前期	蓋	B	鈕～天井	1/2					長	内：にぶい橙 外：にぶい橙		ハケメ･ナデ、磨耗	ハケメ･ナデ、磨耗	
227	SD209-P17･47	10C24		古墳前期	高杯	D	杯～脚	4/5	20.4	12.7	15.0	28	英･長･金雲白砂	内：杯：赤彩、赤褐（2.5YR）、脚：にぶい橙（5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		杯：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔3
228	SD209	10C19		古墳前期	高杯		杯～脚	1/2					英･長	内：杯：赤彩、明赤褐（2.5YR）、黄褐（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		杯：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔3
229	SD209-P27	11C11		古墳前期	高杯		杯～脚	1/2					英	内：杯：赤彩、明赤褐（2.5YR）、脚：灰白（2.5Y） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		杯：ミガキ、脚：ハケメ→ナデ	ミガキ	被熱?（はじけ）
230	SD209	10C5		古墳前期	高杯		杯～脚	3/4					英･長･白砂	内：橙、外：にぶい橙		杯：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	
231	SD209-P41	10C25		古墳前期	高杯		脚	4/5					チャ	内：灰白 外：赤彩、暗赤褐（2.5YR）		ナデ	ミガキ	
232	SD209-P28	11C11		古墳前期	器台	D1	受～脚	9/10	10.0	12.4	9.2	23	英･長	内：受：赤彩、赤褐（2.5YR）、にぶい橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔4
233	SD209-P42	10C25		古墳前期	器台	A2	受～脚	4/5	9.2	11.7	8.3	34	英･長	内：にぶい橙、外：赤彩剥落、明赤褐（2.5YR）		受：ミガキ?　磨耗、脚：ハケメ･ナデ	ミガキ?　磨耗	透孔3
234	SD209-P53	10C19		古墳前期	結合器台	A	口～脚	3/4	19.4	15.7	15.0	14	英･長･金雲チャ	内：口･受：赤彩、暗赤褐（7.5R）、脚：にぶい橙 外：赤彩、暗赤褐（7.5R）		口～受：ハケメ→ミガキ、脚：ハケメ、脚端：ヨコナデ	口：ハケメ→ミガキ、受：ヘラナデ･ハケメ→ミガキ、脚：ハケメ→ミガキ	口透孔：7、脚透孔：4（残存3）
235	SD209	10C14		古墳前期	結合器台	A	口～受	2/3	(17.8)			(1)	英･長	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	（図上復元） 透孔8
236	SD209	10C19･25		古墳前期	結合器台	A	口～脚	4/5		13.0			長･金雲	内：口･受：橙（5YR）、脚：浅黄橙、外：浅黄橙		口：ナデ、受：ハケメ、脚上半：ケズリ、脚下半：ナデ	受：ミガキ、脚：ミガキ	（図上復元）
237	SD209	10C20		古墳前期	結合器台	C	受～脚	1/3	19.0	14.0	13.9	11	英･長	内：口：赤彩、脚：黒褐 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		口：ミガキ、脚：ミガキ	口：ミガキ、脚：ミガキ	口透孔：8?（残存6）、脚透孔：4
238	SD209-P32	10C10		古墳前期	器台		受～脚	1/1		13.6			英･長･チャ	内：赤彩、暗赤褐（2.5YR） 外：赤彩、暗赤褐（2.5YR）	外：黒斑	受：ナデ、脚：ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	
239	SD209	10C19		古墳前期	器台		受～脚	2/3		(11.4)			英･長･金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		受：ミガキ、脚：ナデ	ケズリ･ハケメ→ミガキ	透孔3
240	SD209-P84	11C1		古墳前期	器台		脚	4/5		11.5			英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ･ケズリ	ミガキ	
241	SD209-P68	11C12		古墳前期	器台		脚	1/3		(12.0)			英･長･チャ	内：灰白（10YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ハケメ	ミガキ	透孔3
242	SD209-P9	10C14		古墳前期	器台		受～脚	4/5		13.5			英･長･金雲	内：赤彩、赤褐（2.5YR）、脚：浅黄橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		受：ミガキ･磨耗、脚：ナデ･磨耗	ミガキ	透孔4
243	SD209-P6･64	11C14･19		古墳前期	器台		脚	1/3		20.4			英･長･玉髄チャ	内：黒（10YR） 外：赤彩、暗赤褐（2.5YR）		ケズリ･ナデ	ミガキ	透孔4?（残存2）
244	SK226-P2･4	11D10		古墳前期	鉢	F2a	口～底	1/4	10.2	2.5	6.7	7	英･長･玉髄	内：灰白 外：灰白		ナデ、磨耗	ナデ、底付近：ケズリ、磨耗	（図上復元）
245	SK226-P7	11D10、12D6		古墳前期	器台		受～脚	1/2		14.4			英･長･金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙		受：ミガキ、脚：ハケメ→ナデ	ミガキ	透孔4
246	SI77-P203･681･683･692･781･783･788	11C2･3･4	1･2･3	古墳前期	甕	C2	口～体	1/2	20.8			36	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SI77-P298･423･609･672･691･693･701･745･751･757･758･761･782･783･788	11C2･3･7･9	1･2･3															

正尺C遺跡　土器観察表（11）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
247	SI77-P1006	11C9	Tr	古墳前期	甕	C2	口～体	4/5	17.6			19	英・長	内：にぶい褐 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ・ハケメ、底付近：ハケメ	口：ヨコナデ・ヘラナデ、体：ハケメ・ヘラナデ	
248	SI77-P583	?		古墳前期	甕	C4	口～体	1/5	11.9			8	英・長・玉髄 チャ・針	内：褐灰 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ナデ、磨耗	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	
249	SI77	11C3・8	Tr	古墳前期	甕	A	口～頸	1/5	(13.1)			(8)	英・長・金雲	内：橙 外：にぶい褐	外：スス	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	
250	SI77-P419	11C7	1	古墳前期	甕	E	口～体	1/2	17.5			19	英・長・白砂	内：にぶい橙 外：明赤褐	内：コゲ 外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ、体上半：ハケメ・ナデ、体下半：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ヘラケズリ・ケズリ	
251	SI77-P535	11B22、11C2		古墳前期	甕	C4	口～体	1/4	19.2			17	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ→ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ（原体2種3本/8mm・6本/9mm）、体下半：ヘラケズリ	
252	SI77-P79	11C9	Ⅱ下	古墳前期	甕	I	口～体	1/10	(25.4)			4.5	英・長・玉髄 白砂	内：明赤褐（5YR） 外：明赤褐（5YR）	外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：ナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ	
253	SI77-P422	11C2	1	古墳前期	甕	E	口～体	1/8	(20.0)			(5)	英・長・金雲	内：橙 外：灰褐	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
254	SI77-P394・395・397・398・410・411	11C8	1	古墳前期	甕	C3	口～体	1/3	18.8			14	英・長・金雲 玉髄	内：橙 外：にぶい橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ（原体幅が変化するのでヒゴを紐で束ねているものを使っている可能性あり）	
255	SI77-P172	11C9	1	古墳前期	蓋	A	鈕～口	2/3					英・長・金雲	内：にぶい橙 外：赤彩磨耗、赤（10R）		ナデ	ミガキ	
256	SI77	11B、11C	Tr	古墳前期	壺	N	口	1/4	8.5			10	英・長	内：浅黄橙（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		磨耗	ミガキ	
257	SI77	11C3・8	Tr	古墳前期	壺	N	口	1/10	(6.5)			(4.5)	英・長・金雲	内：赤彩、にぶい橙 外：赤彩、赤（10R）		磨耗	ミガキ	
258	SI77-P146	11C9	Ⅱ下	古墳前期	壺	K2	口～体	1/5	9.8			8	英・長	内：口：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ヨコナデ、剥落	口：ヨコナデ、体：剥落	
259	SI77-P426	11C7	1	古墳前期	壺	B	口～体	1/10	(18.2)			(1)	英・長・金雲	内：褐灰 外：明褐		口：ハケメ→ミガキ、頸：ハケメ、体：ヘラナデ（ハケメ）	ハケメ→ミガキ	
260	SI77-P636	11C7	3	古墳前期	壺	小型r	体～底	4/5		3.5			英・長・金雲	内：褐灰 外：赤彩、暗赤褐（7.5R）		ナデ	体：ミガキ、底：無調整	底部充填技法
261	SI77-P766	11C2	3	古墳前期	壺	小型r	体～底	1/1		2.8			英・長・金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ナデ	ミガキ	頸・体の接合部、打ち欠きの可能性あり
262	SI77-P778	11C2	3	古墳前期	壺	小型r	体	1/3					英・長・白砂	内：褐灰 外：橙（5YR）	外：黒斑	頸・体の境：指頭圧痕、体上半：ハケメ、体下半：ヘラナデ	ミガキ	台付？
263	SI77-P529・627	11C13	1・2	古墳前期	鉢	小型r	体～底	3/4		2.4			チャ	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ナデ	口・体の境：ヨコナデ、体：ハケメ、体・底付近：ハケメ・ケズリ	
外	SI77-P613	11C13	1下															
264	SI77-P700・771・772	11C2	1・3	古墳前期	鉢	小型r	体	2/3		2.8			英・長・金雲	内：赤彩、褐灰 外：赤彩剥落、赤褐（2.5YR）		ハケメ→ヘラナデ（ケズリに近い）、ナデ	ミガキ	
265	SI77	11B、11C	Tr	古墳前期	鉢	B1	口～体	1/12	(15.4)			(3)	英・長	内：赤彩、橙（5YR） 外：赤彩?　橙（5YR）		ミガキ	ミガキ、磨耗	
266	SI77-P376	11C7	1	古墳前期	鉢	B1	口～体	1/6	(15.8)			(6)	英・長	内：浅黄橙 外：浅黄橙		磨耗、ヨコナデ?	磨耗、ヨコナデ?	
267	SI77-P462	11C7	1	古墳前期	鉢	F1a	口～底	4/5	8.9	1.5	6.9	13	英・長・金雲	内：浅黄橙 外：灰白		磨耗	磨耗、底部付近・底部：ケズリ	
268	SI77-P121	11C9	Ⅱ下	古墳前期	器台	D2	受	9/10	9.0			29	英・長・白砂	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ミガキ、剥落顕著	ミガキ、剥落顕著	
269	SI77	11C9・14	Ⅱ・Tr	古墳前期	器台	A2	受	1/3	9.4			12	英・長	内：灰白（5YR） 外：赤彩、暗赤褐（2.5YR）		磨耗	ミガキ	
270	SI77-P1002	11C3	Tr	古墳前期	器台		脚	2/3		10.4		8	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		ナデ	ミガキ	
271	SI77-P14	11C4	1	古墳前期	高杯	D	杯	9/10	16.2			32	英・長・金雲	内：赤彩?　橙 外：赤彩?　にぶい橙		ハケメ→ミガキ	口：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ、磨耗	
272	SI77-P353 SD209	11C13 11C16	1	古墳前期	高杯	C	杯	1/3	23.0			13	精良	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）	外：黒斑	ミガキ	ミガキ	
外	SI77-P242	11C13	1															
273	SI77-P1001	11C3	Tr	古墳前期	高杯	A2	杯	1/20	(20.8)			(2)	英・長・金雲	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ	ミガキ	

正尺C遺跡　土器観察表（12）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
274	SI77-P1008（サブトレ）	12C6	炭化物白色粒混じり	古墳前期	結合器台	C	口～受	1/3	20.1			11	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：黒（10YR）	外：黒斑	ハケメ→ミガキ、磨耗	ハケメ→ミガキ	透孔9（残存3）
275	SI77-P239	11C13	1	古墳前期	装飾器台	B	口	1/18	(17.2)			(2.5)	英・長・金雲	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ	ミガキ	透孔（残存1）
276	SI77-P265	11C9	床	古墳前期	高杯		脚	4/5		11.3			英・長・金雲	内：灰白 外：灰白		ハケメ→ナデ	脚：ケズリ、脚裾：指頭圧痕・ナデ	東北系？
277	SI77-P260	11C9	1	古墳前期	高杯		杯底～脚	2/3					英・長・角	内：杯：赤彩、赤褐（2.5YR）、橙、外：赤彩、赤褐（2.5YR）		杯：ミガキ、杯・脚の境：指頭圧痕、脚下半：ハケメ→ナデ	ミガキ	
278	SD496-P7	8F9	1	古墳前期	壺	小型r	頸～体	1/8					英・長・金雲	内：口：赤彩、赤（10R）、にぶい橙、外：赤彩、赤（10R）		頸：ナデ、体：ハケメ・ナデ	ミガキ	
279	SD496-P14	8F3	1	古墳前期	壺	D	口～頸	1/10	(16.0)			(1.5)	英・長	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		磨耗	ミガキ	
280	SD114	—	覆土	古墳前期	甕	C2	口～体	3/4	17.2			32	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ・ナデ	口：指頭圧痕→ヨコナデ、体：ハケメ・一部ケズリ	
281	SD114	—	覆土	古墳前期	甕	E	口～体	1/6	19.0			6	英・長・白砂チャ	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
282	SD114	—		弥生～古墳前期	甕	縄文	体						長	内：褐灰、 外：明褐灰		ナデ	縄文LR	天王山式系
283	SD40	—	床面	古墳前期	壺	A	口～体	1/10					英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：黒斑 外：黒斑	口：ミガキ、頸：ハケメ→ミガキ、体：指頭圧痕	口：ハケメ→ミガキ、頸：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ	
284	SD40	—		古墳前期	壺	N	口	1/4	8.5			1	英・長	内：上半：赤彩、にぶい橙 外：赤彩、赤（10R）		ヘラナデ・ハケメ、磨耗	ミガキ、磨耗	
285	SD40	—		古墳前期	壺	M	体	1/10					英・長・金雲	内：にぶい橙 外：赤彩、赤（10R）		ナデ・輪積痕顕著	ミガキ	
286	SD40	—		古墳前期	高杯		脚	9/10					英・長・金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		脚：ナデ	ミガキ	透孔3
287	SD140-P41	6E9	Ⅱ	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/20	(20.6)			(1)	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ（ケズリ）、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ヘラケズリ	
288	SD140-P304・305	6E9		古墳前期	甕	K	底	2/3		2.0			英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：スス 外：コゲ	ハケメ・ケズリ	上半：ケズリ、下半：ハケメ	底：焼成前穿孔
289	SD140-P137	6E8	Ⅱ	古墳前期	器台		受～脚	4/5					英・長・金雲	内：受：赤彩、赤橙（10R）、脚：黄橙 外：赤彩、赤橙（10R）		磨耗	磨耗	
290	SK164-P338	6D23	1	古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	17.5			13	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
291	SK164-P680	6D23	1	古墳前期	甕	C2	口～体	1/10	18.0			4	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口端：ヨコナデ、口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
292	SK164	6E7	Tr	古墳前期	甕	I	口～体	1/12	(23.0)			(3)	英・長・金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（7.5YR）		口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	
293	SK164	—	Tr	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/10	(11.0)			(3.5)	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
294	SK164-P663	6D22・23	1・4	古墳前期	鉢	A	口～頸 体～底	1/10	(32.0)	6.1		(4)	英・長	内：にぶい橙 外：浅黄橙（10YR）	内：黒斑 外：黒斑	口：ハケメ→ミガキ、頸：ハケメ→ミガキ、体～底：ハケメ	口：ハケメ→ミガキ、頸：ナデ→ミガキ、体：ミガキ、底付近：ケズリ→ミガキ、底：ケズリ	
295	SK164-P544・546・568・585	6E2・7	3	古墳前期	壺	D	口～頸	1/3	15.6			23	英・長	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	
外	SK164-P188・542・543・569・600	6D22、6E2～8	1・3・4・6・Tr															
296	SK164-P232・273	6E3	1・8	古墳前期	壺	O	口～体	1/4	10.5			8	英・長	内：口：赤彩、にぶい黄橙（10YR）、外：赤彩、赤（10R）		剥落	ミガキ	
297	SK164-P532	6D23	4	古墳前期	壺	N	口	2/3	9.5			18	英・長	内：にぶい橙 外：橙		ハケメ・ヘラナデ	ミガキ（磨耗）	
298	SK164-P461・492・493・495・496・538	6E2	3・4	古墳前期	壺	小型r	体	1/2					英・長・金雲	内：灰 外：赤彩、赤（10R）		ヘラナデ	ミガキ	
外	SK164-P466・478・516・656	6D22・23、6E2～7	1・3・4・Tr															
299	SK164	6E7	Tr	古墳前期	鉢	B1	口～体	1/6	(14.8)			6	英・長	内：口：赤彩、橙（2.5YR） 外：赤彩、橙（2.5YR）		ミガキ	ケズリ→ミガキ	

正尺C遺跡　土器観察表（13）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
300	SK164	6E7	Ⅱ下	古墳前期	器台	D1	受～脚	1/1	10.1			36	英	内：受：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）、外：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ハケメ→ナデ	ミガキ	透孔3
301	SK164-P79	6E2	1	古墳前期	器台	C	受	1/4	9.0			10	英・長	内：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR） 外：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）		ヘラナデ→ミガキ	ミガキ	
302	SK164	6E7	Ⅱ下	古墳前期	器台		受～脚	4/5					英・長	内：にぶい橙（5YR） 外：赤彩、にぶい橙（5YR）		脚：ハケメ	ミガキ	透孔4
303	SK164-P660	6D23	1	古墳前期	高杯		杯～底	9/10					英・長	内：赤彩、明赤褐（2.5YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）	内：タール?	ミガキ	ミガキ	
外	SK164	6E3	4															
304	SK164-P692 —	6E2 6E2・3	3 4	古墳前期	高杯		杯～脚	4/5		(13.1)			英・長	内：杯：赤彩、脚：黒褐（5YR） 外：赤彩、暗赤褐（5YR）		杯：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔3
305	SK164-P445・452・618・635	6E3・7	3・4・8	古墳前期	高杯	A1	杯～脚	2/3					英・長・金雲	内：杯：赤彩、にぶい橙（5YR） 外：赤彩、にぶい赤褐（5YR）		杯：ミガキ・剥落、脚：ハケメ→ナデ	ミガキ	
外	SK164-P443	6E7	8															
306	SK164-P531	6E7	4	古墳前期	台付鉢？		脚	1/1		4.4			英・長・金雲	内：にぶい黄橙 外：赤彩、赤（10R）		ナデ	ミガキ	剥落部に網代痕
307	SD185-P83・89・96・132・158～161・173・193・309	7D24・25、7E5	2・Tr	古墳前期	甕	C2	口～底	1/2	17.0	2.4	27.0	16	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい黄橙 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ（原体2種幅18mm・11mm）	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ（原体幅11mm）、底付近：ケズリ	底部充填技法
外	SD185-P1・75・85・120・245	7D24・25、7E4・5	2															
308	SD185-P263・264・298・301・305・307・308・312	7E5	2	古墳前期	甕	C3	口～底	1/2	20.3	4.6	27.5	14	英・長・金雲 玉髄	内：褐 外：褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ、磨耗	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ→ハケメ、底：ナデ	
309	SD185-P41・115・162・164～166・170・171・195・211・229・241・242・244・266・274	7E5	2	古墳前期	甕	C2	口～体	1/2	15.7			18	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：にぶい褐	外：スス	口上半：ヨコナデ、口下半：横方向ハケメ、体：ハケメ（原体2種幅11mm・13mm）	口：ヨコナデ、体：ハケメ（原体2種幅14mm・9mm）	
外	SD185-P36・99・110・131・205・240・267・269・272	7D24・25、7E5	2															
310	SD185-P82・105・176	7E4・5	2	古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	14.5			16	英・長・金雲 玉髄・白砂	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ・ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SD185-P9・21・72・181	7D24・25、7E4・5	2・Tr															
311	SD185-P64・66・67・68・87・136・137・147～149	7D24・25、7E5	2・Tr	古墳前期	甕	C2	口～体	1/2	14.3			25	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	
外	SD185-P91・108・127・132・136・139・223	7D24・25、7E5	2・Tr															
312	SD185-P35	7D24	2	古墳前期	甕	C2	口～体	1/20	(17.3)			(2)	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：磨耗	口：ヨコナデ、体：ハケメ・磨耗	
313	SD185-P138・236～238・253・261・311	7E5	2	古墳前期	甕	C4	口～体	2/3	14.0			30	英・長・針	内：にぶい橙 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、下半剥落	
314	SD185-P93・97・113・141・144・145	7E5	2	古墳前期	甕	F	口～体	4/5	15.5			16	英・長・金雲 玉髄	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：ハケメ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、剥落顕著	
315	SD185-P49・109	7E5	3	古墳前期	甕	A	口～体	1/6	13.6			7	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・指頭圧痕	口：ヨコナデ、口・体の境：ヨコナデ（ケズリ）、体：ハケメ	
316	SD185-P37	7E5	2	古墳前期	壺	A	口～頸	1/20	(19.0)			(1.5)	英・長・金雲	内：明褐灰 外：灰褐		ハケメ→ナデ	口：ヨコナデ→ミガキ、頸：ケズリ・ハケメ→ミガキ	
317	SD185-P18・62・75・100・101・103・111・138～140	7D24、7E4・5	2	古墳前期	壺	E	口～体	3/4	14.6			28	英・長・白砂	内：褐灰（10YR） 外：浅黄橙（10YR）	外：黒斑	口：ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ→ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ミガキ	
外	SD185-P13・22・42・50・83・116・180・211・235・236	7D24・25、7E5	2・Tr															
318	SD185	7D24・25		古墳前期	壺	P	口～頸	1/36	(39.2)			(1)	英・長・金雲 玉髄・チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：褐灰		ハケメ	口：ハケメ、頸：ヨコナデ	
319	SD185-P71・75・76・147～151・156・167・189・190・250・259・275	7D24、7E4・5	2	古墳前期	鉢	B1	口～底	2/3	16.5	2.2	(13.9)	28	英・長・白砂	内：にぶい褐 外：褐灰	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ナデ	
320	SD185-P69・78	7D24、7E5	Ⅱ・2	古墳前期	器台	E2	口～脚	2/3	16.0	12.0		3	針	内：赤彩、脚：にぶい橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔4?（残存3）

正尺C遺跡　土器観察表（14）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
321	SD185-P11･142･143･160･212･234	7E5	2	古墳前期	器台		受～脚	1/2		12.4			英･長･チャ	内：赤彩、赤褐（2.5YR）、脚：にぶい黄橙 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ハケメ･ナデ	ミガキ	透孔4
322	SK26-P2･4～7 SK27	8D7		古墳前期	甕	C2	口～体	1/6	20.0			16	英･長･金雲 玉髄･白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ（ケズリに近い）	
外	SK26-P1～3･7～9･11～13　SK27	8D7･12	覆土															
323	SD203	―	覆土	古墳前期	甕	K	口～体 底	1/3	14.6	2.7	15.4	35	英･長･金雲	内：にぶい褐 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ、剥落	底：焼成後穿孔
324	SD203	―	覆土	古墳前期	甕	C4	口～体	1/2	14.8			19	英･長	内：灰褐 外：褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ケズリ	
325	SD203	―	覆土	古墳前期	甕	C4	口～体	1/4	12.0			10	英･長･金雲 チャ	内：橙 外：橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラケズリ	
326	SD203 ―	10D1		古墳前期	壺	B	口～体	2/3	17.7			35	英･長･金雲	内：にぶい橙 外：浅黄橙		磨耗、体：ケズリ	口～頸：ヨコナデ･段部にヘラ状工具による連続刺突、体：ハケメ	
327	SD203	―	覆土	古墳前期	壺	小型 r	体～底	2/3		3.7			英･長･金雲	内：橙 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ→ミガキ	体：ミガキ、底：無調整	
328	SD203	―	覆土	古墳前期	高杯	A1	杯～脚	1/2	21.8			22	英･長･金雲	内：赤彩?　橙 外：赤彩?　橙		杯：ミガキ、脚：ハケメ･ナデ	杯：ハケメ→ミガキ、脚上半：ケズリ→ミガキ、脚下半：ハケメ→ミガキ	
329	SD203	―		古墳前期	結合器台	A	口～受	1/4					英･長･金雲	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	透孔12（残存3）
330	SD203	―		古墳前期	器台	D1	受～脚	2/3	10.4			18	英･長･金雲	内：受：赤彩、赤（10R）、脚：褐灰（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		口：ヨコナデ、体：ミガキ、脚上半：ナデ、脚下半：ハケメ	口：ヨコナデ、体～脚：ミガキ	透孔4
331	SD203	―	覆土	古墳前期	鉢	F1b	口～体	1/6	(18.8)			(7)	英･長･金雲	内：橙、外：橙		ナデ	ミガキ･ナデ	
332	SD203	―	覆土	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/20	(19.1)			(2)	英･長･金雲	内：橙 外：橙		口：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ	口：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ	
333	SD203	―		古墳前期	鉢	D2	口～体	1/12	(12.6)			(3)	英･長	内：橙、外：橙		ナデ、磨耗	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	
334	SD604	8F13	2	弥生～ 古墳前期	甕	縄文	体						長	内：にぶい橙 外：褐	外：スス	ナデ	縄文RL（直前段多（3）条?）	天王山式系
335	SK58-P9･10･19･22～24･31	13B12		古墳前期	甕	C4	口～体	1/3	17.7			10	英･長･白砂	内：にぶい橙 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、ナデ	
外	SK58-P26･75	13B3･7･12																
336	SK58-P65･120	13B11･12		古墳前期	甕	C3	口～体	9/10	13.6			36	英･長･金雲	内：浅黄橙、外：浅黄橙		口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
337	SK58-P119･147	13B11･12		古墳前期	壺	小型 r	体	1/8					英･長･金雲	内：褐灰（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ、指頭圧痕	ミガキ	
外	SK58-P111･112	13B11･12･20･21	Ⅱ･Ⅲ･カクラン															
338	SK58-P41･44･91･106 107･114･117･138	13B11･12･16	Ⅱ	古墳前期	結合器台	A	口～受	1/3	16.8			18	英･長･金雲	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ	ミガキ	(図上復元) 透孔10?（残存4）
外	SK58-P40･49	13B12																
339	SK58-P70･83～87	13B12		古墳前期	高杯	B	杯	1/3	20.2			13.5	英･長･金雲	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ、磨耗	ミガキ、剥落	
外	SK58-P38･86･90･106	13B11･12･21	Ⅱ･カクラン															
340	SK58-P131	13B11		古墳前期	蓋	B	鈕	1/1					英･長･針	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙		ナデ	ハケメ→ナデ	
341	SK59-P28～30	13B8		古墳前期	甕	C2	口～体	1/4	18.0			12	英･長･金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SK59-P31	13B8																
342	SK59-P48･69	13B8		古墳前期	甕	C2 口～ 体		1/5	17.6			10	英･長･金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SK59-P7･26･99･116･128	13B8																
343	SK59-P3	13B8		古墳前期	高杯		杯～脚	1/2					英･長･金雲 白砂	内：灰褐 外：灰褐	外：スス	杯：ミガキ、脚：ハケメ･指頭圧痕･ナデ	脚：ミガキ	
344	SK59-P100	13B8		古墳前期	高杯		杯～脚	1/1		12.6			英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ハケメ、脚端：ヨコナデ	ミガキ	透孔4
345	SK59-P46･62･108	13B8		古墳前期	鉢	B2	口	1/8	(22.0)			(5)	英･長･金雲 玉髄	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ	ハケメ→ミガキ	(図上復元) 壺?高杯?

正尺C遺跡　土器観察表（15）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
346	SK59	—		古墳前期	鉢	B2	口～体	1/8					英・長・金雲	内：赤彩、赤（10R） 外：赤彩、赤（10R）		口：ハケメ、体：ナデ	ミガキ	
347	SK59-P66・110・122	13B8		古墳前期	壺	小型r	体	1/2					英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ハケメ・ヘラナデ・輪積痕明瞭、口・体の境：指頭圧痕	ハケメ→ミガキ	
外	SK59-P64	13B8																
348	SK59-P61	13B8		古墳前期	台付壺?		脚	1/1		9.8			英・長・金雲	内：灰褐（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		ハケメ	ミガキ	
349	SK118-P19・40・60・62・68～70・76・88・89・95～98・100	9D1		古墳前期	甕	C4	口～底	1/3	23.2	7.0	(30.6)	9	英・長・金雲 玉髄・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ・ヨコナデ、体：ハケメ・ナデ・ヘラナデ、底：ナデ	口：ハケメ→ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ナデ（ミガキ）・ ヘラナデ、底：ドーナツ状・無調	（図上復元） 底部充填技法
350	SK118-P5・75	9D1		古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	17.0			26	英・長・金雲 白砂	内：明褐灰 外：明褐灰	内：黒斑	口：ヨコナデ、体：ハケメ・指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ナデ	
外	SK　1	—																
351	SK118-P10・11・14・18・19・34・64・65・68・83・96	9D1		古墳前期	甕	E	口～体	2/3	15.0			36	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい褐 外：にぶい灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SK118-P50・54・93 SK1	9D1・6																
352	SK118	—		古墳前期	甕	I	口～体	1/6	(27.0)			(6)	英・長・金雲 玉髄・白砂	内：灰白 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
353	SK118 SK1	—		古墳前期	壺	C	口	1/12	(21.0)			(3)	長・白砂	内：にぶい褐 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ→ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	
354	SK118-P45・53・67 SK1	9D1・6		古墳前期	甕	C3	口～体	2/3	15.0			36	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい褐 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ナデ・一部ケズリ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ハケメ・ヘラナデ・ケズリ	
355	SK118	—		古墳前期	壺	N	口	1/20	(9.8)			(2)	英・長	内：にぶい橙、外：にぶい橙		ミガキ	ミガキ	
356	SK118	—		古墳前期	壺	B	口～頸	1/10					英・長・金雲	内：灰白（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ→ミガキ	口：ハケメ→ミガキ、頸：ヨコナデ→ヘラナデ→ミガキ	
357	SK118-P1	9D1		古墳前期	高杯	A	杯	1/20	(18.3)			(2)	英・長	内：赤彩?　灰白 外：赤彩、赤（10R）		ミガキ、磨耗	ミガキ	
358	SK118-P75	9D1		古墳前期	鉢	F1a	口～底	4/5	9.4	1.6	7.8	17	英・長・金雲	内：灰白（10YR） 外：灰白（10YR）		磨耗	上半：ナデ、下半：ハケメ、磨耗	
359	SK157-P47	4F18	2・Tr	古墳前期	器台	D2	受～脚	1/3	9.2			17	英・長	内：受：赤彩、赤褐（2.5YR）、 脚：浅黄橙（10YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ハケメ	口：ヨコナデ、受：ミガキ・磨耗、脚：ハケメ・ミガキ	透孔3（残存2）
360	SK157-P56	4F18	2	古墳前期	台付鉢		体～脚	2/3		12.5			英・長・チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		鉢：ミガキ、脚：ナデ	ハケメ→ミガキ	
361	SK146-P32・34・37～34・45・46・52・63～67	7D13	2	古墳前期	甕	C4	口～体	1/2	17.7			19	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SK146	7D13	Ⅱ下															
362	SK146-P31・50	7D13	2	古墳前期	甕	B1	口～体	1/4	19.4			11	英・長・金雲 玉髄・針	内：にぶい橙 外：にぶい橙	外：スス	口：ハケメ→指頭圧痕、体：ヘラナデ・ハケメ	口：指頭圧痕→ハケメ→ナデ、体：ハケメ	口縁内面をハケメで整えたのち、内外をつまんで外へ引き出して器形を作り最後に外面をハケメ・ナデで整える
363	SK146-P40・42～44・66	7D13	2	古墳前期	鉢	F2b	口～底	3/4	10.9	2.3	5.7	28	英・長・金雲 玉髄	内：黄灰（2.5Y） 外：黄灰（2.5Y）		ナデ・一部ミガキ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ケズリ、底：無調整	底部充填法
364	SK146	7D13	Tr	古墳前期	高杯		杯～脚	1/2					英・長・金雲 チャ・針	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ミガキ	ミガキ	
365	SK146-P58	7D13	2	古墳前期	器台		受～脚	1/1					英・長・金雲	内：受：赤彩、赤灰（2.5YR） 外：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）		脚：ナデ	ミガキ	透孔3
366	SK146-P59・60～62・73・77	7D13	2	古墳前期	蓋	B	鈕～口	2/3	16.0	6.4		22	英・長・チャ	内：にぶい橙 外：にぶい橙		天井：ヘラナデ・ケズリ、体：ハケメ→ナデ、口：ヨコナデ、磨耗	鈕：ヘラナデ、体：ハケメ→ミガキ、口：ヨコナデ→ミガキ、磨耗	
367	SK211-P1・7	13C14		古墳前期	甕	C3	口～体	1/4	13.1			13	英・長	内：浅黄橙 外：にぶい橙		口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	口上半：ヨコナデ→下半ハケメ・ヘラナデ、体：ハケメ、磨耗	
368	SK213-P45	12D25、12E4	1・2	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/3	12.0			(17)	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ハケメ、体：ナデ	ハケメ→ヘラナデ	
外	SK213-P10・53	12D25、12E5、13E1	2															

正尺C遺跡　土器観察表（16）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
369	SK213-P10・19	12D21、13E1	1・2	古墳前期	鉢	F1b	口～体	1/20	(11.2)			(2)	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩剥落、赤（10R）		ナデ	ハケメ→ナデ・ミガキ、磨耗	
370	SK213-P17・53	12D25、12E5	2	古墳前期	鉢	F3b	鉢～脚	1/2	17.8	6.6	10.0	15	英・長・金雲	内：杯：赤彩、赤褐（2.5YR）、脚：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		鉢：ハケメ→ミガキ、脚：ナデ	口～体：ハケメ→ミガキ、底付近：ケズリ→ミガキ、脚：ナデ	
371	SK213-P21～23・26～28	12D25、13D21	2	古墳前期	器台	B	受～脚	4/5	10.5	14.3	10.7	26	英・長・金雲	内：杯：赤彩、明赤褐（2.5YR）、にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚上半：ナデ、脚下半：ケズリ、脚端：ヨコナデ	ミガキ	透孔4
372	SK213-P24	13D21	2	古墳前期	高杯		脚	3/4					英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		ナデ	ミガキ	透孔4
373	SK228-P30	12E5	2	古墳前期	甕	C2	口～体底	1/3	16.2	2.0	(16.4)	15	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：橙（5YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ハケメ→ナデ	（図上復元）
374	SK218-P12	13C13	2下	古墳前期	甕	H	口～体	1/5	14.0			10	英・長	内：橙、外：橙		磨耗	体：ナデ?、磨耗	
375	SK231-P3	12D20		古墳前期	壺	G2	口～頸	1/36	(18.0)			(1.5)	英・長・チャ白砂	内：明黄灰 外：にぶい橙		ヨコナデ、磨耗	ヨコナデ、磨耗	
376	SK229-P2・3・5・37・42・51・63・66・69・70・73～76・80・86・88・89	12D24・25、12E4	1	古墳前期	甕	C3	口～底	1/5	18.2	3.0	(23.4)	21	英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ・一部ケズリ、底：指頭圧痕	（図上復元）
外	SK229-P1～4・6・26・36・40・41・43・72	12D24・25、12E4	1															
377	SK229-P90	12D25	1	古墳前期	壺	A	口～頸	1/20	(23.0)			(1.5)	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：黒斑	口：ミガキ、頸：ヨコナデ	口：ミガキ、頸：ハケメ→ミガキ	
378	SK229-P34・35	12D25	1	古墳前期	壺	G1	口～体	1/10	(14.0)			(4)	英・長・金雲チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ナデ、磨耗	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ→ミガキ、磨耗	
379	Pit319	10D	覆土	弥生～古墳前期	甕	縄文	体						英・長	内：灰褐 外：にぶい褐	内：コゲ	ナデ	縄文LR	天王山式系
380	SK456-P16・27	10E21	2	古墳前期	甕	C3	口～底	1/2	14.5	2.3	16.5	20	英・長・金雲玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ナデ・指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ケズリ・ヘラナデ、底：無調整	
381	SK456-P27	10E21	2	古墳前期	甕	C3	口～底	9/10	16.6	4.5	24.2	33	英・長・白砂	内：にぶい褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ（3～4本/10mm）、底：簾状ハケメ（10本/10mm）	口：ハケメ、体：ハケメ（原体10本/10mm）・ケズリ、底：無調整	
382	SK456-P13	10E21	2	古墳前期	器台		脚	9/10		15.1	5.4		英・長・金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		ハケメ、脚裾：ヨコナデ	ハケメ、脚裾：ヨコナデ	受部なし?上端は剥落面ではない可能性が高い
383	SK457	10E6・7	1	古墳前期	甕	H	口～体	1/2	14.5			26	英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ、口・体の境：ケズリ、体上半：ハケメ・ヘラナデ、体下半：ヘラナデ・ナデ	口：ナデ、体：ハケメ・一部ミガキ	
384	SK457	10E6	1	古墳前期	甕	C1	口～体	1/3	16.8			9	英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
385	SK457	10E6	1	古墳前期	壺		口～体	1/4					英・長	内：灰白 外：灰白		口：ハケメ・ナデ、頸：ケズリ、体：ハケメ	磨耗	
386	SK481-P25	9E19	2	古墳前期	鉢	B1	口～底	3/4	17.0	6.2		28	英・長	内：浅黄橙 外：浅黄橙	内：コゲ	口：ハケメ→ヨコナデ、頸：指頭圧痕、体上半：ハケメ・ミガキ、体下半：ナデ	口：ハケメ→ヨコナデ、頸：ヨコナデ、体：ハケメ→ミガキ・ケズリ、底：無調整	
387	SK481-P20	9E18	2	古墳前期	壺	A	口～体	1/3	15.4			19	英・長・金雲	内：褐灰・灰白（10YR） 外：褐灰・灰白	内：コゲ 外：スス	口：ミガキ、頸：ハケメ→ナデ、頸・体の境：指頭圧痕、体：ハケメ	口：ハケメ→ミガキ、頸：ヨコナデ、体：ナデ（ミガキ?）	
388	SK481-P7	9E19	1	古墳前期	鉢	B1	口～体	1/6	(12.0)			(6)	英・長・金雲	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		ミガキ	ミガキ、磨耗	
外	SK481-P9	9E19	1															
389	SK481-P15	9E18	2	古墳前期	鉢	D	口～体	1/7	(11.0)			(5)	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、口・体の境：指頭圧痕、体：ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
390	SX405-P48・49	11E8・12	Ⅱ下・1	古墳前期	甕	E	口～体	1/3	18.0			14	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ、指頭圧痕	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SX405-P50	11E8	Ⅱ下															
391	SX405-P10・19・133・142・144	11E2・11	Ⅱ下	古墳前期	甕	C2	口～体	1/20	(19.0)			(10)	英・長・金雲玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SX405-P12・17～19・20・117・129・143・145	11E2・6・7・11・12・16	Ⅱ下・Ⅲ・1・3															
392	SX405	―	1	古墳前期	甕	C4	口～体	1/8	(15.0)			(5)	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ、剥落	口：ヨコナデ、体：ハケメ、剥落	

正尺C遺跡　土器観察表（17）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率（x/36）	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
393	SX405-P115	11E12	Ⅱ下	古墳前期	壺	C	口～頸	1/4	15.0			10	英・長	内：浅黄橙（10YR） 外：褐灰		剥落	剥落	
394	SX405-P126	11E13	Ⅱ下	古墳前期	鉢	F3b	口～体	1/4	（10.5）			（7）	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	ミガキ、底付近：ケズリ→ミガキ	
395	SX405-P73・78・100・101	11E12	Ⅱ下	古墳前期	器台	D3	受	2/3	9.3			26	英・長・金雲	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	内：黒斑	口：ヨコナデ、体：ミガキ	ミガキ	
396	SX405	11E12	3	古墳前期	器台		受～脚	4/5					英・長・金雲	内：受：赤彩、橙（2.5YR）、脚：浅黄、橙（10YR） 外：赤彩、橙（2.5YR）		受：磨耗、脚：ナデ	ミガキ	透孔4（残存3）
397	SX768-P19～26	3G15	1	古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	17.0			13	英・長・金雲 玉髄	内：灰褐、外：にぶい橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
外	SX768	3G9	1															
398	SX217-P8	13C15		古墳前期	壺?		底	1/1		4.1			英・長	内：明褐灰、外：浅黄橙		剥落	体：ケズリ、底：ミガキ	底：ヘラ記号「×」
399	SX402ー P2・3・5	8G5、9G1・21	Ⅱ上	古墳前期	甕	C4	口～体	1/3	22.0			5	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ→指頭圧痕・ヘラナデ、体下半：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	（図上復元）
外	SX402-P1・3・5	9F21、8G5、9G1	Ⅱ上															
400	SX402-P2・4	9F21、9G1	Ⅱ上	古墳前期	甕	C3	口～底	1/3	18.0	2.8	25.1	15	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ、底：ハケメ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ケズリ、底：ナデ	
外	SX402-P4	9G1	Ⅱ上															
401	SX402-P2・3	9F21、9G1	Ⅱ上	古墳前期	甕	C3	口～体	1/3	15.0			9.5	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：灰褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ・磨耗、体下半：剥落	
外	SX402-P3	9G1	Ⅱ上															
402	SX402-P2・3	9F21、9G1	Ⅱ上	古墳前期	甕	C4	口～底	1/2	13.0	1.7	16.8	29	英・長・金雲 玉髄・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ・指頭圧痕	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ケズリ、粘土接合部に指頭圧痕、底：ケズリ	
403	SX402-P1・2	9F21、9G1	Ⅱ上	古墳前期	甕	B2	口～底	1/2	17.4	3.9	24.7	18	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体上半：ナデ・ヘラナデ、輪積痕明瞭、体下半：ハケメ、底：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ハケメ	
外	SX402-P1・2・4	9F21、9G1	Ⅱ上															
404	SX402-P2・3・5	9F21、8G5、9G1	Ⅱ上	古墳前期	壺	A	口～底	3/4	14.6	3.8	29.3	28	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	外：黒斑	口：ミガキ、体：ハケメ、粘土紐接合部に指頭圧痕、底：ヘラナデ	口：ミガキ、体：ハケメ→ミガキ、底：無調整	
外	SX402-P1・2・3・5	9F21、8G5、9G1	Ⅱ上															
405	SX402-P2	9F21、9G1	Ⅱ上	古墳前期	器台	D1	受～脚	2/3	8.5			18	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		受：ミガキ、脚：ナデ	受：ミガキ、脚：ミガキ	
406	SX402-P2・3	9F21、9G1		古墳前期	鉢	H	口～底	1/2	12.5	5.6	16.0	12	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ナデ	口：ヨコナデ、体：ナデ（ミガキ）、底：ナデ（ミガキ）	
外	SX402-P5	8G5、9G1																
407	SK23-P143・189・192・193・195・199・200～202・204・210・213・216・218・233	9D16・17		古墳前期	甕	C1	口～体	1/2	17.2			20	英・長・金雲 白砂・チャ	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底付近：ケズリ	
外	SK23-P62～64・66・67・69・183・184・190・203・222・236	9D12・16・17																
408	SK23-P49・100・101・108・110・115・120～123・126・140・141・145・147・150・151	9D12・17		古墳前期	甕	C2	口～底	2/3	21.0	2.8	35.1	24	英・長・金雲 玉髄・白砂 チャ	内：灰黄（2.5Y） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ハケメ→ヨコナデ、体上半：ハケメ→ナデ、体下半：ハケメ、底：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ケズリ、底：ケズリ	
外	SK23-P45・92～94・96・97・102・104・107・109～111・114・116～118・129・130・135・138・142～144・146・147・153・154・174	9D12・16・17																
409	SK23-P74	9D12		古墳前期	甕	C4	口～体	1/4	15.2			13	英・長・金雲 白砂	内：黄橙（10YR） 外：にぶい橙	外：スス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、体下半：ヘラケズリ	
外	SK23-P75・159	9D12・17																
410	SK23-P34・53・55～57	9D12		古墳前期	甕	C2	口～体	1/5	18.4			26	英・長・金雲 白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、口・体との境：ハケメ、体上半：ハケメ・ナデ、体下半：指頭圧痕	口上半：ヨコナデ、口下半：ナデ・ヘラナデ、体：ハケメ・ヘラナデ	

正尺C遺跡　土器観察表（18）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
411	SK23-P105	9D17		弥生～古墳前期	甕	縄文	体						英・長	内：灰褐 外：黒褐		ナデ	縄文RL（直前段多（3）条?）	天王山式系
412	SX533-P11	7D7		古墳前期	甕	C2	口～体	1/6	（17.0）			（6）	英・長・白砂	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	内：コゲ 外：ス	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	
413	SX533-P22・24	7D11・12		古墳前期	壺	I1	口～頸	1/2	16.0			7	英・長・針	内：にぶい橙（5YR） 外：にぶい橙（5YR）		磨耗	磨耗、口：2個1組のボタン状浮文（5単位）	
外	SX533-P22・24 S区Bトレンチ	7D11・12																
414	SX533-P2	7D7		古墳前期	高杯	A2	杯	1/4	22.0			9	英・長・金雲	内：赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）、浅黄橙（10YR）		磨耗	ミガキ、磨耗	
415	SX533-P18	7D8・13		古墳前期	結合器台	C	口～受	1/8					英・長・金雲	内：赤彩、赤褐（5YR）、にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、赤褐（5YR）、にぶい黄橙（10YR）		ミガキ、磨耗	ミガキ、磨耗	透孔2段　上段4（残存1）下段4（残存1）
416	SX403-P1～5・7・8	10H5		古墳前期	壺	M	体	1/3					英・長・玉髄白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、にぶい黄橙（10YR）		ヘラナデ（ハケメ）・ナデ	ミガキ、突帯2本、突帯上にヘラ状工具による連続刺突、突帯下にも一部連続刺突	（図上復元）
外	SX403-P6・9～11	10H5																
417	SK485-P3	7D7		古墳前期	器台	D2	受	1/8	9.4			9	英・長	内：赤彩、浅黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		ミガキ	ミガキ	
418	—	10C25		古墳前期	甕	B1	口～底	4/5	16.4	（2.0）	（18.4）	10	英・長・金雲	内：灰褐 外：灰褐	内：コゲ 外：ス	口：ハケメ、体：ヘラナデ（ハケメ）	ハケメ・一部ヘラナデ、体中央：指頭圧痕	外面：被熱により剥落
419	—	13C18	Ⅱ下	古墳前期	甕	C4	口～底	2/3	14.0	3.2	16.3	17	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：ス	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	口：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ、底：ハケメ	
420	—	11B13		古墳前期	甕	C2	口～底	4/5	14.0	2.0	14.8	27	英・長・金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：ス	口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：無調整	底部充填技法
421	SK481？　SK482？	—		古墳前期	甕	C2	口～底	2/3	14.6	2.2	15.3	14	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：ス	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ→指頭圧痕、体下半：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ・ヘラナデ	
422	—	14C14・15	Ⅱ上	古墳前期	甕	H	口～底		12.0	2.8	13.4	8	英・長・金雲	内：にぶい黄褐（10YR） 外：にぶい黄褐（10YR）		口：ヨコナデ、体：ハケメ・ナデ	口：ヨコナデ→ナデ、体：剥落、体上半：ハケメ・ヘラナデ→ナデ、体下半：ヘラケズリ、底：無調整	
423	—	10F12	Ⅱ上・Ⅱ下	古墳前期	甕	G	口～底	4/5	15.4	2.5	11.6	5.5	英・長・チャ	内：にぶい褐 外：明褐	内：コゲ 外：ス	口：ナデ・指頭圧痕、体上半：ハケメ（原体20本/10mm）、体下半：ハケメ（原体6本/8mm）	口：ナデ・指頭圧痕、体上半：ハケメ・ナデ、体下半：ヘラケズリ、底：ナデ	
424	—	9F6	Ⅱ下	古墳前期	甕	I	口～体	1/3	25.6			13	英・長・金雲	内：明褐灰（10YR） 外：にぶい橙（10YR）		口端：ヨコナデ、口～体：ハケメ	口端：ヨコナデ、口～体：ハケメ	
外	—	9F1・3・4・11・18	Ⅱ上															
425	—	12B17		古墳前期	甕	E	口～体	1/20	（15.0）			（0.5）	英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：ス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ	口：ヨコナデ・板状工具による刺突？　体：ハケメ	
426	—	11C11	開渠	古墳前期	甕	C2	口～体	1/3	16.9			9	英・長・金雲	内：灰白（10YR） 外：灰白（10YR）		口上半：ヨコナデ、口下半：ハケメ→ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ	口端に丸棒状工具側面圧痕
427	—	10B12		古墳前期	甕	J	口～体	1/6	（17.8）			（6）	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ	
428	—	12F4	Ⅱ上	古墳前期	壺	A	口～体	4/5	17.4			36	英・長・白砂	内：にぶい褐 外：にぶい黄橙（10YR）		口～頸：ヨコナデ、体：ナデ、磨耗	口～頸：ヨコナデ、体：ハケメ、磨耗	
429	—	9D	開渠	古墳前期	壺	B	口～体	2/3	19.0			9	英・長	内：浅黄橙 外：浅黄橙		口～頸：ヨコナデ、体：ナデ、磨耗	口～頸：ヨコナデ、体：ハケメ?磨耗	
430	—	10F13	Ⅱ・Ⅱ下	古墳前期	壺	小型r	頸～体	4/5					英・長・金雲	内：頸：赤彩、赤（10R）、にぶい褐、外：赤彩、赤（10R）		頸：ハケメ→ミガキ、体：ナデ・指頭圧痕	ハケメ→ミガキ	
431	—	11F11・16、11G11・12・16	Ⅱ上・Ⅱ下	古墳前期	壺	小型	体	4/5					英・長	内：褐灰（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ・指頭圧痕、輪積痕残存	磨耗、ハケメ→ミガキ?	
外	—	11G13・17・18	Ⅱ上・Ⅱ下															
432	—	5E25	Ⅱ	古墳前期	壺	R	体	1/8					英・長・金雲	内：褐灰、外：褐灰		ナデ・輪積痕明瞭	ナデ、下半：ハケメ・ケズリ	
433	—	12G21	Ⅱ上	古墳前期	壺	小型r	底	1/4		3.3			英・長・金雲	内：にぶい橙 外：赤彩、赤（10R）		ナデ	ミガキ、底：ナデ	
434	—	10C13・17・18		古墳前期	壺		体～底	1/2		6.2			英・長	内：橙、外：橙		体：ハケメ・ナデ・ケズリ、底：ナデ	体：ナデ→ミガキ?、底：ナデ	底：ヘラ記号「┘」
435	—	15C19	Ⅱ	古墳前期	壺	I2	口～頸	1/1	15.2			36	英・長・白砂	内：褐灰（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ヨコナデ?　磨耗	ヨコナデ	

正尺C遺跡　土器観察表（19）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量 口径（cm）	法量 底径（cm）	法量 器高（cm）	口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文） 内面	調整（施文） 外面	備考
436	—	10G3	Ⅱ上	古墳前期	壺	I1	口～頸	4/5	18.4			29	英・長・チャ 針	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ヨコナデ	口：2本1組の棒状浮文（単位不明、4単位?）・剥落	
437	—	9G1	Ⅱ上	古墳前期	壺	I1	口～頸	9/10	19.4			33	英・長・チャ	内：暗褐 外：にぶい橙	内：黒斑	ヨコナデ	口：ハケメ→ミガキ・4本1組の棒状浮文（4単位）、頸：ハケメ→ミガキ、粘土接合剥落面にハケメ	
438	—	15B24	Ⅱ上	古墳前期	壺	I1	口～体	3/4	20.0			36	英・長	内：浅黄橙（10YR） 外：赤彩?　浅黄橙（10YR）		口～頸：ヨコナデ、体：ハケメ・一部ミガキ	口：ヨコナデ、3本1組の棒状浮文（4単位）、頸～体：ハケメ・ヘラナデ→ミガキ、体下半：ハケメ・ヘラナデのミガキ残し多い	
439	—	10G3	Ⅱ上	古墳前期	壺	I4	体						英・長	内：にぶい褐 外：にぶい褐		ミガキ?　剥落	櫛歯状工具（ハケメ原体?）押圧による平行沈線・鋸歯状文（東海系パレス壺のモチーフ）	
440	—	15C17	Ⅱ	古墳前期	甕	C3	口～底	2/3	11.5	2.4	15.1	1	英・長・金雲	内：にぶい橙 外：にぶい橙	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ・ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：無調整	
441	—	13D11・16	Ⅱ・Ⅱ下	古墳前期	壺	J1	口～底	2/3	11.6	2.0	20.4	18	英・長・玉髄 針	内：口のみ赤彩、赤（10R）、橙、外：赤彩、赤（10R）	外：スス	口：ミガキ、体上半：ナデ、体下半：ハケメ	ミガキ、下半剥落	
442	—	8F24	Ⅱ上	古墳前期	壺	H1	口～体	1/3	10.2			19	英・長・金雲 玉髄・白砂	内：にぶい褐 外：にぶい褐		口：ハケメ→ヨコナデ、頸：ヘラケズリ、体：ハケメ・ヘラナデ	口：ミガキ、体：ハケメ・ヘラナデ→ミガキ	
443	—	10B23		古墳前期	壺	J1	口～体	1/3	11.0	丸	14.0	7	英・長・金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口～頸：ヨコナデ、体上半：ハケメ・指頭圧痕、体下半：ナデ	口：ハケメ→ミガキ、頸：ヨコナデ、体上半：ケズリ→ナデ、体下半：ミガキ	
444	—	14D1	Ⅱ	古墳前期	壺	N	口	1/3	7.4			13	英・長・金雲	内：にぶい褐 外：にぶい黄褐（10YR）		口端：ヨコナデ、口上半：ハケメ→ミガキ、口下半：ハケメ	口端：ヨコナデ→ミガキ、口：ミガキ	
445	—	9F5	Ⅱ上	古墳前期	鉢	B1	口～底	1/2	12.4	1.6	9.0	12	英・長・チャ	内：口：赤彩、赤褐（2.5YR）、灰褐 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		口上半：ミガキ、口下半：ヨコナデ、頸：ハケメ、体：ナデ	口：ミガキ、体：ハケメ→ミガキ、底付近：ケズリ→ミガキ、底：ケズリ	
446	—	5F7・8	Ⅱ	古墳前期	鉢	B1	口～底	4/5	11.9	2.1	7.3	30	英・長	内：赤彩、橙（5YR） 外：赤彩、橙（5YR）		ミガキ	ミガキ	
外	—	9D8・9・14・19																
447	—	9D8		古墳前期	鉢	B1	口～体 体～底	1/3	14.8	2.0	（8.9）	12	英・長	内：赤彩 外：赤彩、赤（10R）		口・頸：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ、底：ハケメ	口：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ、底：無調整	（図上復元）
448	—	14C2	Ⅱ上	古墳前期	壺	K1	口～体	1/15	（7.3）			（3）	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		ナデ・輪積痕明瞭	ナデ・輪積痕明瞭	
449	—	6H3	Ⅱ	古墳前期	壺	K1	体～底	1/2	7.2	2.2	6.4	2	英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ハケメ、体：ナデ	ハケメ、底付近：一部ケズリ、底：無調整	
450	—	10G18	Ⅱ	古墳前期	壺	K1	口～底	9/10	7.0	4.4	6.55	34	英・長・金雲 白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、底：ドーナツ状・ナデ	
451	—	10F17	Ⅱ上	古墳前期	鉢	B1	口～底	1/3	10.1	2.0	6.1	1	英・長・金雲	内：灰白（10YR） 外：灰白（10YR）		ミガキ	磨耗	
452	—	13D3	Ⅱ下	古墳前期	鉢	D1	口～体	1/2	9.9			18	英・長	内：赤彩、にぶい橙（5YR） 外：赤彩、にぶい橙（5YR）		ミガキ、磨耗	ハケメ→ミガキ、磨耗	台付鉢
453	5区Cトレンチ	—		古墳前期	鉢	D1	口～底	9/10	10.5	2.5	6.1	10	英・長・金雲	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		口：ヘラナデ、口・体の境：ハケメ、体：ヘラナデ	口：ハケメ、体：ハケメ・ミガキ、底：ミガキ	
454	—	12D8	Ⅱ下	古墳前期	鉢	D1	口～体	1/4	11.2			18	英・長・金雲	内：にぶい橙、外：にぶい橙		口：ヨコナデ、体：ヘラナデ・ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ→ナデ	台付鉢
455	—	11F22	Ⅱ上	古墳前期	鉢	G	口～底	4/5	10.3	4.6	6.4	13	英・長・玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ハケメ	口：ヨコナデ、体上半：ハケメ、体下半：ヘラナデ→ナデ、底：ドーナツ状・無調整	
456	—	10C25		古墳前期	鉢	F2a	口～底	4/5	11.0	丸	7.5	18	英・長・玉髄	内：にぶい橙 外：にぶい橙		口：ナデ（ヨコナデ）、体：ハケメ	口：ナデ（ヨコナデ）、体：ケズリ→ナデ	
457	—	6E11・12	Ⅱ・Ⅱ下	古墳前期	鉢	G	口～底	4/5	6.9	4.1	4.65	12	英・長・金雲	内：褐灰（10YR） 外：褐灰（10YR）		ナデ	ナデ、底：ケズリ・ナデ	手づくね
458	—	11C15		古墳前期	鉢	D2	口～底	4/5	14.8	2.8	9.1	25	英・長・金雲	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		口：ヨコナデ、頸：ハケメ、体：ヘラナデ→ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	
459	—	7G13・19	Ⅱ上	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/2	16.4			28	英・長・金雲	内：黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ（単位不明瞭）	口：ヨコナデ、体：ハケメ、剥落	
460	—	15B2・6	Ⅱ・Ⅱ下	古墳前期	鉢	D2	口～体	1/4	20.6			13	英・長・金雲 玉髄	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		口：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ	口：ヨコナデ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ	
外	—	10D10・17・18・23	Ⅱ下															

正尺C遺跡　土器観察表（20）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
461	—	10D17･18	Ⅱ上･Ⅱ下	古墳前期	鉢	I	口～底	4/5	20.0	4.4	13.0	20	英･長･金雲 玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ	底：焼成前穿孔
462	—	9G1	Ⅱ上	古墳前期	鉢	H	口～底	4/5	12.0	5.7	12.0	14	英･長･金雲 黒雲･チャ	内：明褐 外：にぶい褐	内：コゲ 外：スス	口：ナデ、体：ハケメ（ヘラナデ）	口：ナデ、体：ハケメ、底：ナデ	
463	—	9E6	Ⅱ上	古墳前期	壺	Q	口	1/4	17.9			11.5	英･長･白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		口端：ナデ、口：ハケメ	口端：ナデ、口：ハケメ	
464	—	10E20	Ⅱ下	古墳前期	鉢	B2	口～脚	1/2	13.3	7.5	8.9	9	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR）、 脚：にぶい褐 外：赤彩、にぶい橙		鉢：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ、鉢の中程に沈線が全周する	台付鉢
465	—	14C19	Ⅱ上	古墳前期	壺	J2	壺	2/3	11.5			27	英･長	内：口：赤彩、体：灰白（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		口：ミガキ、体：ハケメ→ナデ、剥落	口：ヨコナデ→ミガキ、頸：ヨコナデ、体：ハケメ→ミガキ、底：ナデ	脚欠損部磨滅→使用痕か
外	—	12E3	Ⅱ															
466	—	12E8	Ⅱ	古墳前期	鉢	F2a	口～脚	2/3	16.5	14.9	18.3	9	英･長	内：灰白（2.5Y） 外：灰黄（2.5Y）	内：黒斑	口：ヨコナデ、体：ヘラナデ、脚：ハケメ	口：ヨコナデ、体：ハケメ･ヘラナデ、脚：ハケメ	台付鉢
467	—	11C14	開渠	古墳前期	台付鉢		体～脚	4/5		10.5			英･長･チャ	内：鉢のみ赤彩、赤褐（2.5YR） 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		鉢：ミガキ、脚：ナデ	鉢：ハケメ→ミガキ、脚：ハケメ･ヘラナデ、脚端：ヨコナデ	
468	—	10C1		古墳前期	台付鉢		体～脚	4/5		8.8			英･長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、にぶい橙（5YR）		ナデ、磨耗	ハケメ→ミガキ、磨耗	
469	—	12F11	Ⅱ上	古墳前期	台付鉢?		脚	1/1		4.4			白砂	内：灰黄褐（10YR） 外：灰黄褐（10YR）		ナデ	指頭圧痕･ナデ	
470	—	8F14	Ⅱ下	古墳前期	台付壺?		体～脚	4/5		8.6			英･長･玉髄 白砂	内：褐灰、脚：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ、磨耗	ミガキ、磨耗	
471	—	12D8	Ⅱ下	古墳前期	台付壺?		脚	1/1		8.4			英･長･チャ	内：褐灰、脚：にぶい橙（5YR） 外：赤彩、橙（2.5YR）		ナデ	ハケメ→ミガキ、脚端：ヨコナデ	
472	—	10B22		古墳前期	高杯		杯～脚	4/5					英･長･金雲	内：にぶい橙、杯：赤彩? 外：赤彩、にぶい橙		杯：ミガキ、脚：ナデ･ケズリ	ミガキ	
473	—	10C13		古墳前期	高杯		脚	4/5					英･長･金雲	内：杯：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）、脚内：にぶい黄橙（10YR）、外：赤彩、にぶい赤褐（2.5YR）		杯：ミガキ、脚：ハケメ･ケズリ→ナデ	ミガキ	
474	—	12C14	Ⅱ上	古墳前期	高杯	E1	杯～脚	4/5					英･長	内：にぶい橙（5YR） 外：赤彩?　にぶい橙（5YR）		磨耗	磨耗	
475	—	5G21	Ⅱ下	古墳前期	高杯		脚	9/10		6.2			英	内：灰白（10YR） 外：灰白（10YR）		ナデ	ナデ	
476	—	13D16	Ⅱ	古墳前期	高杯	B	杯～脚	9/10	17.5	10.0	12.4	28	英･長･金雲 玉髄･白砂	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		杯：ミガキ、脚：ナデ、磨耗	ミガキ、磨耗	
477	—	6E12	Ⅱ	古墳前期	高杯	E2	杯	4/5	13.3			10	英･長･金雲 玉髄	内：橙 外：橙		ハケメ→ミガキ	ミガキ	
478	—	11C8･13･14	開渠	古墳前期	高杯	C	杯	1/2	16.5			9	英･長	内：にぶい褐 外：橙		ミガキ	口：横方向ハケメ→ミガキ、体：ハケメ→ミガキ	
479	—	11C12		古墳前期	高杯	E1	杯	4/5	11.8			13	金雲･針	内：浅黄橙（10YR） 外：灰白（10YR）		ナデ	ナデ	
480	—	11D5	Ⅱ上	古墳前期	結合器台	A	受～脚	4/5	17.9	12.6		18	英･長･金雲	内：口･受：赤彩、脚：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		口･受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	
外	—	7F10･15	Ⅱ下															
481	—	7F15	Ⅱ下	古墳前期	結合器台	A	口～脚	1/2	17.2	(14.6)		21	英･長･チャ	内：口･受：赤彩、橙（2.5Y）、脚：にぶい橙 外：赤彩、橙（2.5Y）		口：ヨコナデ･ハケメ･ケズリ→ナデ、受：ナデ、脚：ナデ	ハケメ→ミガキ	口透孔：6?（残存4）、脚透孔：4
482	—	13B7	Ⅲ	古墳前期	結合器台	B	口～脚	1/5		15.0			英･長･金雲	内：口･受：赤彩、赤褐（2.5YR）、脚：灰褐 外：赤彩、赤褐（2.5YR）		口･受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	口透孔：2段　上段（残存1）、下段6?（残存5）、脚透孔4?（残存2）
483	—	13C22	Ⅱ上	古墳前期	結合器台	C	口～脚	2/3	21.5	16.7	15.2	18	英･長	内：口と受のみ赤彩、赤（10R）、脚：浅黄橙 外：赤彩、赤（10R）		口･受：ミガキ、脚：ハケメ･ナデ、脚端：ヨコナデ	ミガキ	口透孔：4、脚透孔：4

正尺C遺跡　土器観察表（21）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
484	—	10B6		古墳前期	結合器台	C	口～脚	1/3					英・長・金雲玉髄	内：橙 外：橙		口・受：ミガキ？　剥落、脚：ナデ	ミガキ	口透孔：7（残存3）、脚透孔：4（残存3）
485	—	7D7・8	Ⅱ	古墳前期	結合器台	C	口～脚	1/2	22.0	（18.2）	14.7	10	英・長	内：杯：赤彩、赤（10R）、脚：浅黄橙 外：赤彩、赤（10R）		口・受：ミガキ、脚：ハケメ・ナデ、剥落	ミガキ、剥落	透孔4
486	—	15B19	Ⅱ上	古墳前期	装飾器台	C	脚	1/3		（14.0）			英・長・チャ	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙		磨耗	磨耗	透孔三角形（残存4）
487	—	—		古墳前期	器台	E1	受～脚	4/5	12.7	11.5	7.0	35	英・長・金雲	内：浅黄橙 外：にぶい橙		口：ヨコナデ、体：ハケメ、脚：ハケメ・ナデ	口：ヨコナデ、体：ハケメ、脚：ハケメ・ヘラナデ、脚裾：ヨコナデ	
488	—	13C17	Ⅱ上	古墳前期	器台	D1	受～脚	2/3	8.2	12.2	8.8	13.5	英・長・針	内：受：赤彩、赤（10R）、脚：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、赤（10R）		受：ミガキ、脚：ナデ	ミガキ	透孔4（2個1組が対時、孔の大きさに差あり）
489	—	13C12	Ⅱ上	古墳前期	器台	D1	受～脚	4/5	8.3	11.6	8.0	19	英・長・針	内：受：赤彩、明赤褐（2.5YR）、脚：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ナデ・ハケメ	ミガキ	透孔4（2個1組が対時）
490	—	13C9	Ⅱ上	古墳前期	器台	D1	受～脚	2/3	8.5	11.8	8.3	11	英・長・針	内：受：赤彩、脚：にぶい黄橙（10YR） 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		受：ミガキ、脚：ナデ	ハケメ→ミガキ	透孔4、受中央の孔は充填されていた粘土が剥落したか?
491	—	14C13	Ⅱ上	古墳前期	器台		脚	4/5		13.6			英・長	内：にぶい黄橙 外：赤彩、橙（5YR）		脚：ハケメ、脚裾：ケズリ	ハケメ→ミガキ	透孔4（2個1対が対時）
492	—	13F17	Ⅱ	古墳前期	器台	D2	受～脚	4/5	9.0	12.0	9.7	15	英・長・金雲	内：にぶい黄橙 外：赤彩、明赤褐（2.5YR）		受：ハケメ→ミガキ、脚上半：ハケメ→ナデ、脚下半：ナデ	ミガキ	透孔4
493	—	9G13・14	Ⅱ上・Ⅲ	古墳前期	器台	B	受～脚	3/4	8.7	11.5		28	英・長・針	内：にぶい橙、外：赤彩? にぶい黄橙（10YR）		受：磨耗、脚：ケズリ・ナデ	ミガキ	歪みあり、透孔3
494	—	11F16	Ⅱ下	古墳前期	器台		脚	1/2					英・長	内：浅黄橙 外：赤彩、橙（2.5YR）		ナデ、剥落	ミガキ、剥落	透孔4（残存3）
495	Cトレンチ	—		古墳前期	蓋	B	鈕～口	4/5	14.8		5.4	6	英・長	内：橙 外：橙		体：ハケメ、口：ヨコナデ	鈕：ナデ、体：ハケメ、口：ヨコナデ	
496	—	8C	開渠	古墳前期	蓋	B	鈕～体	4/5					精良	内：浅黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）		磨耗	磨耗	
497	—	7G21	Ⅱ上	古墳前期	蓋	C	鈕～体	1/2					英・長・白砂	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ・ナデ	鈕：ヘラナデ、体：ヘラナデ・ハケメ・ナデ	
498	—	9F12	Ⅱ上	古墳前期	蓋	A	鈕～体	1/7					英・長・金雲玉髄	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	ナデ、鈕：指頭圧痕	
499	—	13B7	Ⅱ	古墳前期	蓋	B	鈕～体	1/2					英・長・針	内：赤彩、赤（10R）、にぶい黄橙、外：赤彩、赤（10R）、にぶい黄橙		ミガキ、磨耗	ミガキ、磨耗	
500	—	10F16	Ⅱ上	古墳前期	蓋	C	鈕～体	2/3					英・長・黒雲	内：赤彩、赤（10R）、浅黄橙 外：赤彩、赤（10R）、浅黄橙		ミガキ？　磨耗	ミガキ？　磨耗	
501	—	10C18		古墳前期	蓋	A	鈕～体	1/2					英・長・白砂	内：橙、外：橙		ナデ・ケズリ	ハケメ→ナデ	
502	—	8D10		弥生～古墳前期	甕	縄文	口～体	1/6	（17.0）			（8）	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	口：ナデ・指頭圧痕、頸：ケズリ、体：ヘラナデ	口：ヘラナデ、体：縄文RL	天王山式系
503 a～c	—	11D12・13	Ⅱ下	弥生～古墳前期	甕	縄文	体						英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	ナデ	ハケメ→縄文RL→沈線	天王山式系
503 d	—	10D13、11D12	Ⅱ上・Ⅱ下	弥生～古墳前期	甕	縄文	体～底			6.4			英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	ナデ	縄文RL、底：ナデ	（図上復元） 天王山式系
504	—	8D9、10D11～13・17	Ⅱ下・Ⅲ	弥生～古墳前期	甕	縄文	口～体	2/3	19.7			29	英・長・チャ	内：灰白（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	ナデ	口：縄文LRヨコ、頸：ナデ（無文帯）、頸直下：付加条LR、体：LR	（図上復元） 天王山式系
505 a・b	—	8C24		弥生～古墳前期	甕	縄文	口 体～底			7.4		（1）	英・長	内：にぶい黄橙（10YR） 外：浅黄橙（10YR）	内：コゲ 外：スス	ナデ	口唇：縄文、口：ナデ、体：縄文RL、底：ナデ	（図上復元） 天王山式系
506	—	9D10・12・16		弥生～古墳前期	甕	縄文	体～底	1/2		6.9			英・長	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	内：コゲ 外：スス	ナデ	縄文RL、底：ナデ	天王山式系
507 a	—	9E13	Ⅱ上	弥生～古墳前期	甕	縄文	口	1/36	（17.0）			（1）	英・長	内：灰褐 外：黒褐	内：コゲ 外：スス	ケズリ	口端：丸棒状工具の連続刺突、ケズリ・ハケメ	天王山式系
507 b	—	9E13	Ⅱ上	弥生～古墳前期	甕	縄文	体						英・長	内：褐 外：黒褐	内：コゲ	ナデ	縄文RL	天王山式系

正尺C遺跡　土器観察表（22）

報告No.	遺構名－取り上げ番号	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部位	残存率（図化）	法量			口縁残存率(x/36)	胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
									口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）					内面	外面	
508	—	16E1･5～8	Ⅱ	弥生～古墳前期	甕	縄文	体	1/4		8.5			英･長	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	内：コゲ 外：スス	ナデ	縄文LR斜位、底：無調整	天王山式系
509	—	9D11		弥生～古墳前期	甕	縄文	体						英･長	内：灰黄褐（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）	内：コゲ	ナデ	縄文RL（原体2種）	天王山式系
510	—	9E2	Ⅱ下	弥生～古墳前期	甕	縄文	体						英･長	内：灰褐 外：灰褐		ナデ	縄文RL	天王山式系
513	—	13C23	Ⅱ上	古墳前期	ミニチュア鉢		口～底	1/1	4.6			29	英･長･金雲	内：にぶい黄橙（10YR） 外：にぶい黄橙（10YR）		ナデ	ナデ	手づくね、底：焼成後穿孔
530	—	9E8	Ⅱ上	古代	須恵器無台杯		体～底	1/4		7.6			英･長	内：灰白（10YR） 外：灰白（10YR）		ロクロナデ	ロクロナデ、底：回転ヘラ切	
531	—	9E13	Ⅱ上	古代	須恵器無台杯		口	1/10	（13.0）			（2）	英･長	内：灰白（N） 外：灰白（N）		ロクロナデ	ロクロナデ	
532	—	—	排土	中世	珠洲焼甕		体						—	内：灰（N） 外：灰（N）		無文当て具痕	平行タタキ	

胎土色調凡例
英：石英、長：長石、角：角閃石、金雲：金雲母、黒雲：黒雲母、チャ：チャート、針：海綿骨針、白砂：鉱物名不明の白砂で角礫が多い、繊維：獣毛あるいは植物繊維の脱落痕。色調は『新版　標準土色帖』［小山・竹原1996］による。断りがない限り7.5YRでの色調を表す。

正尺C遺跡　土製品観察表

報告No.	遺構名	グリッド	層位	器種	法量				胎土	色調	付着物	調整（施文）		備考
					最大長（mm）	最大幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）				表面	裏面	
511		10D6		紡錘車	72.5	72.5	20.0	88.5	英・長	明褐灰		串状工具による施文	串状工具による施文	
512	SK213-P33	12D25	2	土錘	43.5	39.5	39.5	62.4	英・長	外：黒（10YR）		ミガキ	丸棒状のものに粘土板を巻きつけて成形	1/3程度欠損
514		10C21		円盤状土製品	40.5	47.0	13.0	21.7	英・長・繊維	にぶい黄橙（10YR）			ヘラ状工具による△模様？	
515	SK164-P598・599	6E7	3	土器片円盤	53.0	45.0	5.0	19.9	英・長	内：にぶい黄橙（10YR）、外：灰黄褐（10YR）	内：コゲ　外：スス	ハケメ	ハケメ	
516	SI144-P1179	6E16	床1	土器片円盤	52.5	47.0	8.0	25.7	英・長	内：灰褐、外：にぶい黄橙（10YR）		ハケメ	ハケメ	周縁磨耗

正尺C遺跡　石製品・鉄製品観察表

掲載No.	遺構	グリッド	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	厚さ（mm）	重量（g）	石材・材質	被熱	破損	備　考
517	SD311-P519		3b	管玉	20.5	6.5	6.5	1.33	緑色凝灰岩	×	×	
518	SD311-P540		3b	管玉	17.00	7.0	7.0	1.34	緑色凝灰岩	×	○	
519	SD214‐P9			砥石	50.0	28.0	26.5	51.92	凝灰岩	×	○	下端の破損面に擦痕
520	SI36-P5		床直	磨石類	90.0	72.0	45.0	89.13	軽石	×	×	
521	SI36			砥石?	149.0	122.0	79.0	2220.00	砂岩	○	○	
522		12C6	Ⅱ下	筋砥石	60.5	42.0	35.5	87.85	砂岩	×	○	
523	SI144-P609	5F5	1	筋砥石	36.0	36.0	39.5	64.48	砂岩	×	○	
524		9C4		砥石	48.0	44.5	11.5	31.81	粘板岩	×	○	
525		12C1		砥石	78.5	51.0	21.5	88.03	粘板岩	×	○	表面右半分・裏面剥落
526		13D11	Ⅱ下	両極石器	17.5	29.5	11.0	5.84	鉄石英（赤玉）	×	×	
529	SI144	5E18？19？25	Tr	不明	153.5	32.5	4.0	97.69	鉄	×	○	

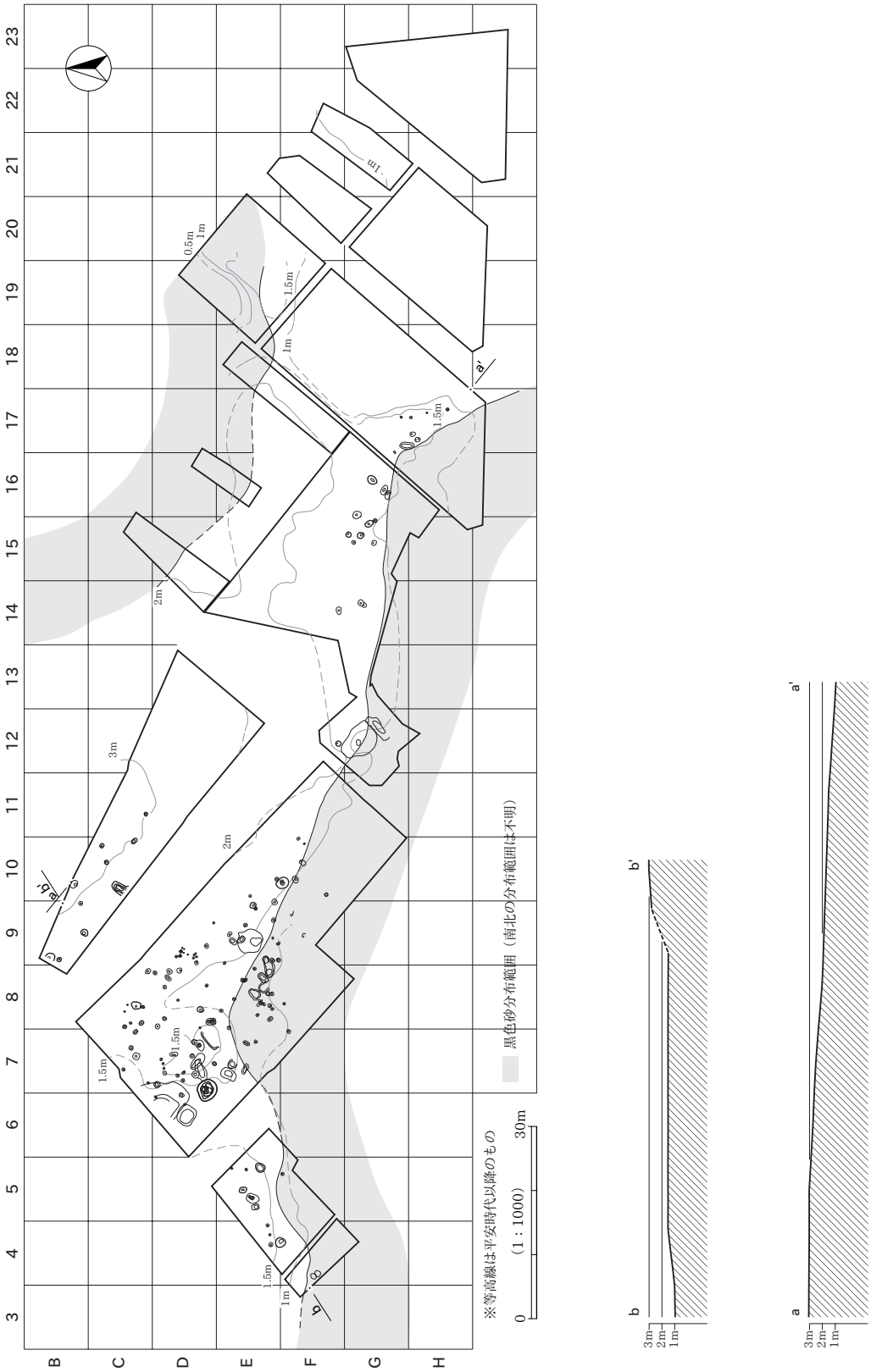
正尺C遺跡　木製品観察表

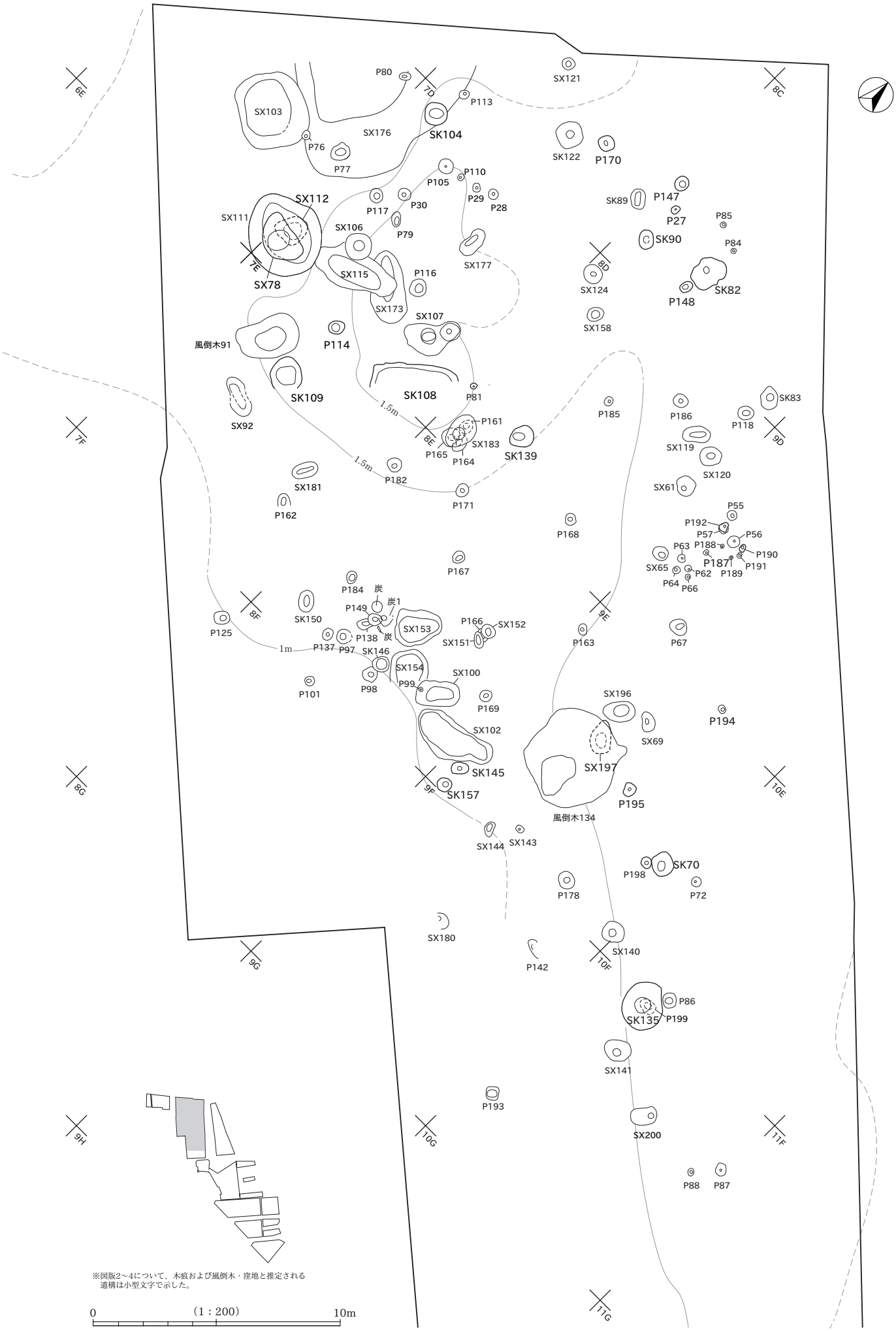
掲載No.	遺構	グリッド	層位	遺物種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	厚さ（mm）	樹種	時期	備　考
527	P620	7E19・24	Ⅱ、7	柱根	286.0	84.0	74.0	クリ	古墳時代前期	丸木
528	P498	9E10	Ⅱ、6	柱根	374.0	100.0	110.0	クリ	古墳時代前期	丸木
533	旧河道		上	不明	106.0	17.0	12.0	ヒノキ	古代以降	部材、枘出
534	旧河道		上	不明（棒状）	117.0	15.0	12.0	ヒノキ	古代以降	
535	旧河道		上	板材	101.0	20.0	3.0	スギ	古代以降	
536	3Tr		V	箸状木製品	139.0	7.0	5.0	スギ	古代以降	
537	3Tr 旧河道		V	箸状木製品	204.5	8.0	4.5	スギ	古代以降	
538	旧河道		上	下駄	231.0	75.0	43.0	モクレン属	古代以降	差歯一部残存、枘穴は表面まで貫通
539	旧河道			漆器（椀）			3.0	ブナ属	古代以降	内外：赤漆
540	旧河道			漆器（椀）	底径58.0			ブナ属	古代以降	内外：黒色漆
541	旧河道			漆器（椀）				ケヤキ	古代以降	内外：黒漆地に赤漆で施文
542		8E21	攪乱	曲物側板	251.5	44.0	5.0	ヒノキ	古代以降	木製釘一部残存
543			耕作土下黒色土	杓子	78.0	101.0	26.0	ブナ属	古代以降	内外：黒漆
544		9C4	1	漆器（椀）	底径50.0			ブナ属	古代以降	内外：赤漆
545				漆器（椀）				ブナ属	古代以降	内外：赤漆
546		11C4		加工痕ある材	61.0	23.0	23.0	ハンノキ属	古代以降	
547	3Tr	3A2	開渠	加工痕ある材	123.0	58.0	23.0	モクレン属	古代以降	

図　　版

凡例

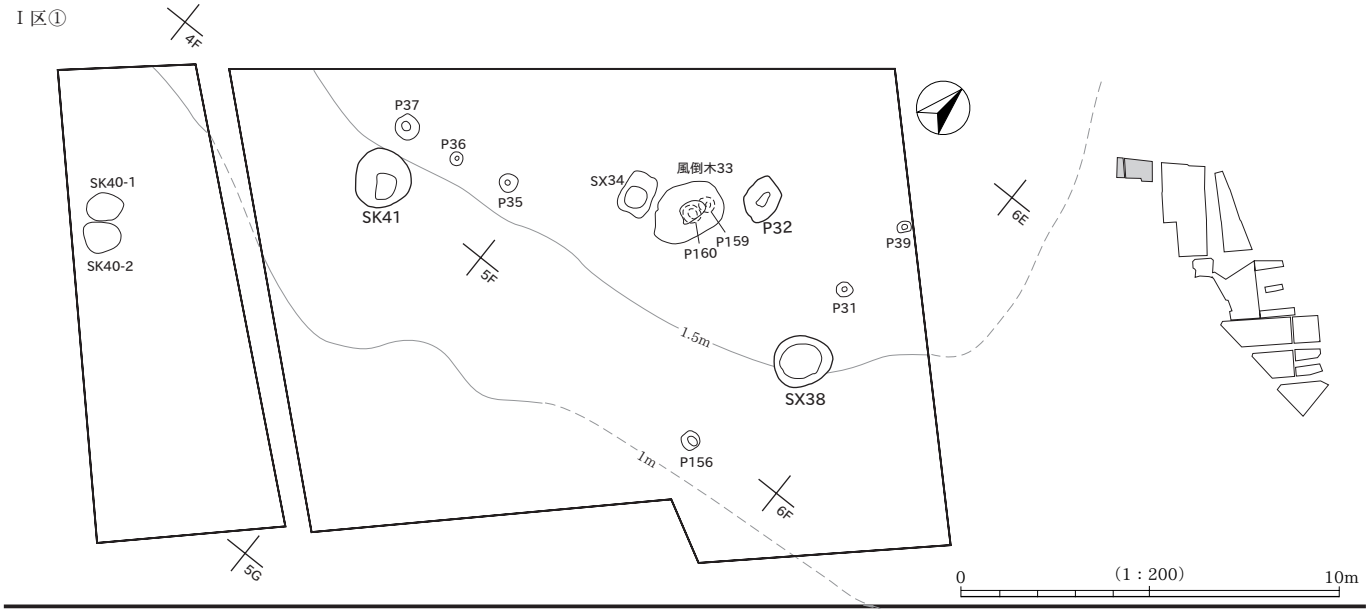
正尺Ｃ遺跡遺構図面中の遺物No.は遺物実測図No.に対応する。「P」「S」は「土器」「石」の略号である。


3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
B
C
D
E
F
G
H
1m
0.5m
1m
1.5m
1m
1.5m
2m
3m
2m
1.5m
1.5m
1.5m
1m
a
a'
b
b'
※等高線は平安時代以降のもの
0
(1：1000)
30m
黒色砂分布範囲（南北の分布範囲は不明）
b
b'
3m
2m
1m
a
a'
3m
2m
1m

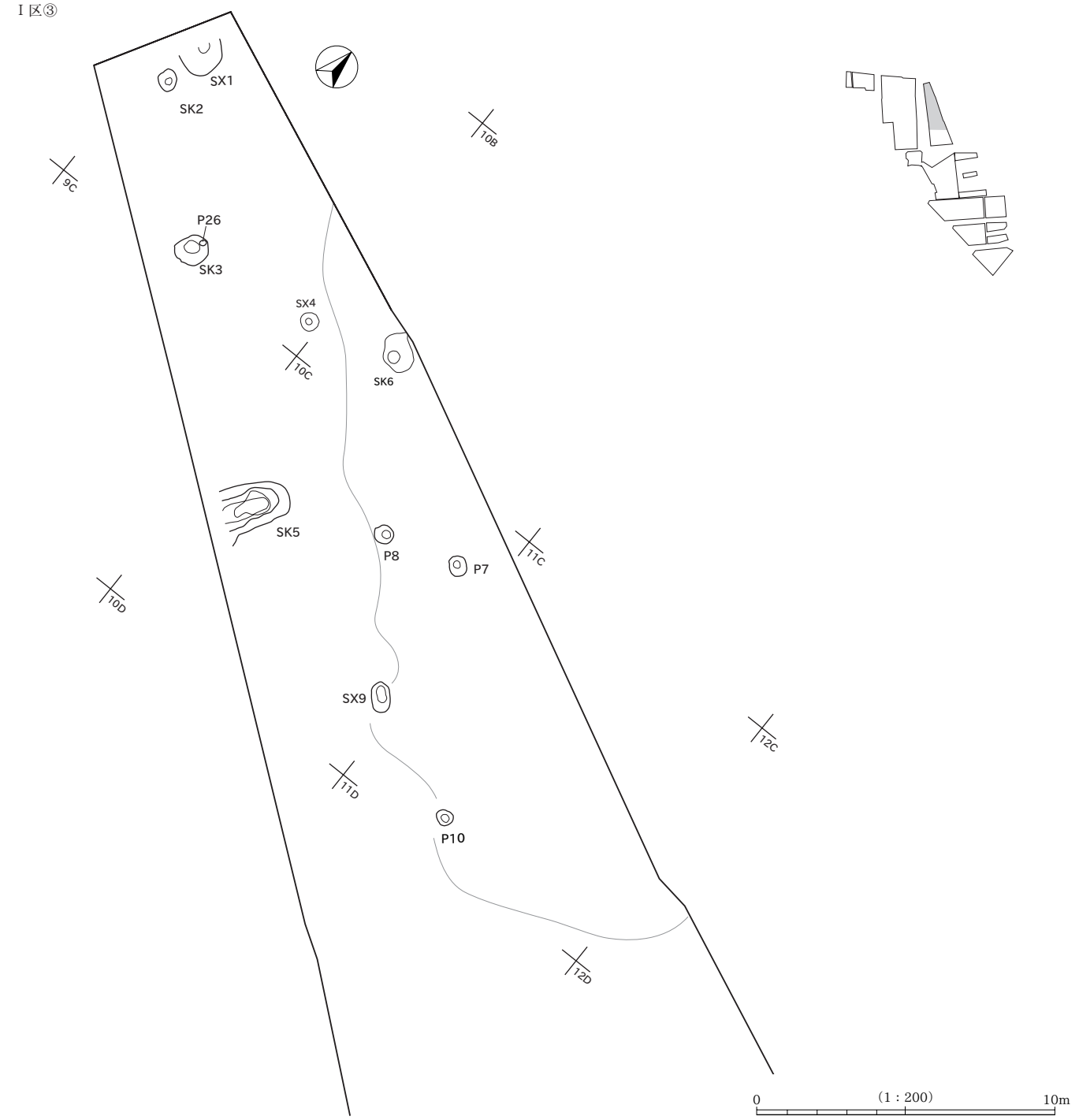


※図版2～4について、木痕および風倒木・窪地と推定される遺構は小型文字で示した。

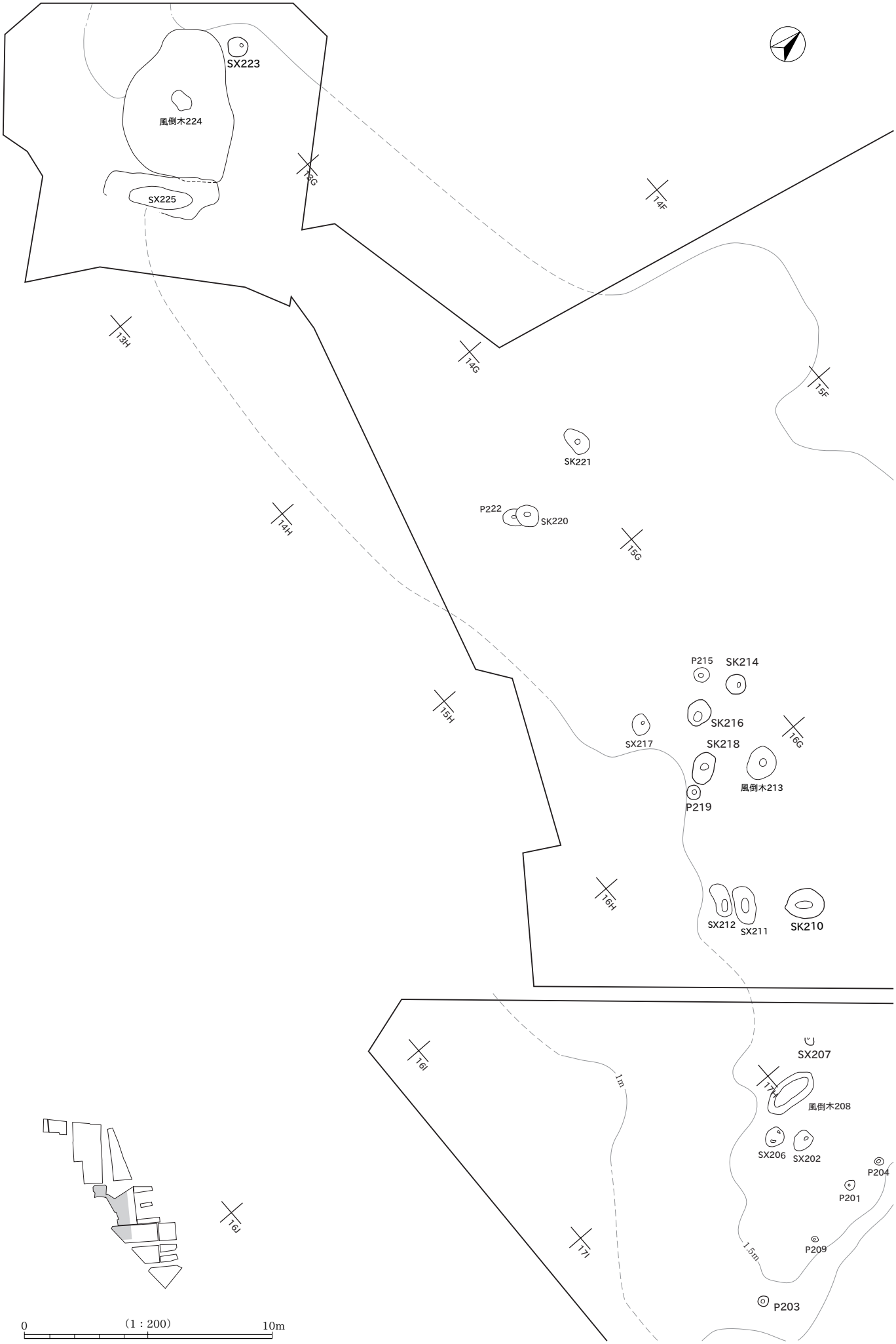
Ⅰ区①


4F
SK40-1
SK40-2
P37
P36
SK41
P35
SX34
風倒木33
P159
P160
P32
P39
6E
5F
P31
1.5m
SX38
1m
P156
6F
5G
0
(1：200)
10m

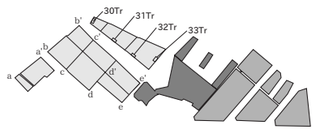
Ⅰ区③

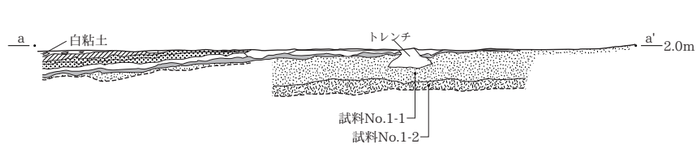

SX1
SK2
10B
9C
P26
SK3
SX4
10C
SK6
SK5
P8
P7
11C
10D
SX9
12C
11D
P10
12D
0
(1：200)
10m

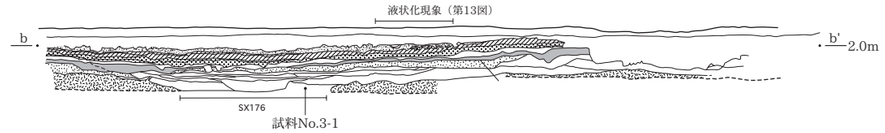
馬見坂遺跡　遺構分割図（3）　36Tr～Ⅱ区

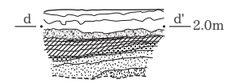


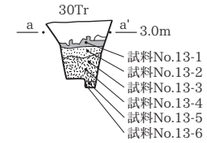
Ⅰ区東西セクション

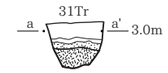


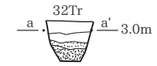


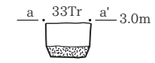




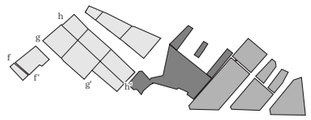


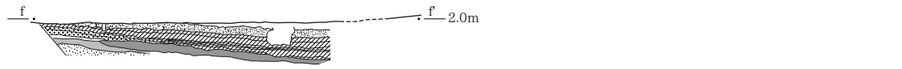


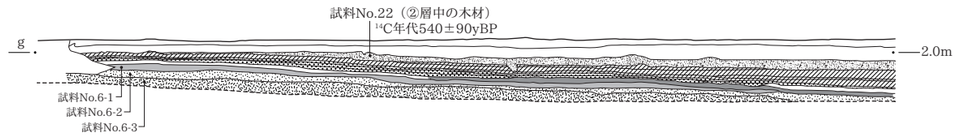


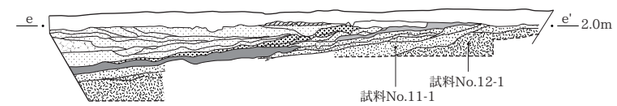


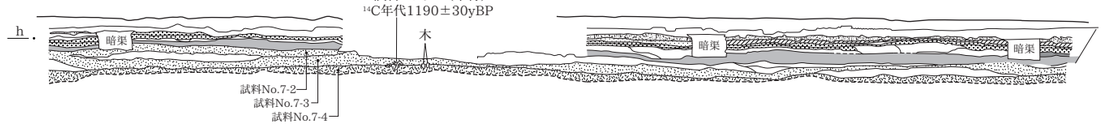
Ⅰ区南北セクション

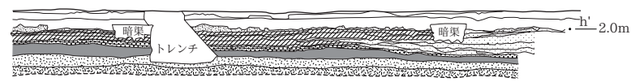




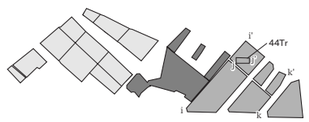


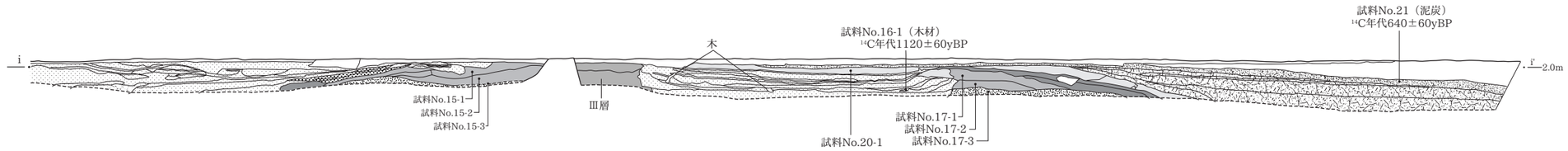


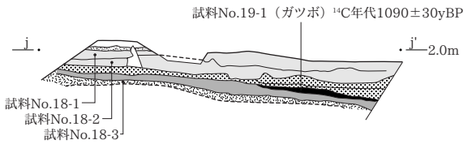


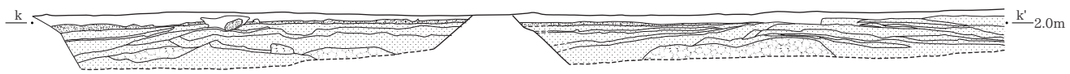


Ⅱ区セクション









②層：平安時代より後、明治時代以前に形成された通称"ガツボ層"。

②'層：平安時代以降形成された粘土層（湿地）。通称"白粘土"。炭化物の混入の度合や還元状態で細分可能。

③層："青灰色粘土"と"青灰色砂"。古墳時代と平安時代の遺物をわずかに含む。水成層。

黒色砂層：縄文時代の遺物や軽石を含む。水成層。

Ⅲ層：黄褐色砂。やや土壌化が進んだ砂丘砂層。砂丘砂の二次堆積の可能性が高い。

砂丘漸移層：砂粒は粗く、しまりがない。縄文時代の遺物が少量出土する。

砂丘下層：砂粒は粗く、砂丘漸移層よりやや大きめ。場所によっては表面が2～3cmの厚さで固結しており、その面を除去すると激しい湧水とともに再びしまりのない砂層が現れる。

平安時代以降の河川堆積物。粘土～細粒から成る。青灰色シルト。

平安時代以降の土石流。粗砂。縄文～平安時代の遺物を含む。

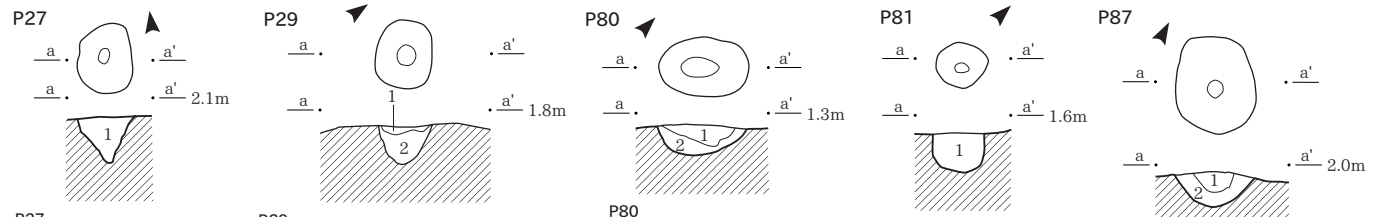
平安時代以降の河川形成に伴う自然堤防のうち、Ⅲ層由来の砂から成る層。

平安時代の河川形成後、その東側に堆積した粘土層（湿地）。

平安時代以前縄文時代以降に形成されたガツボ層。

※試料No.は第Ⅲ章7A中のNo.に対応する

0　（1：200）　10m



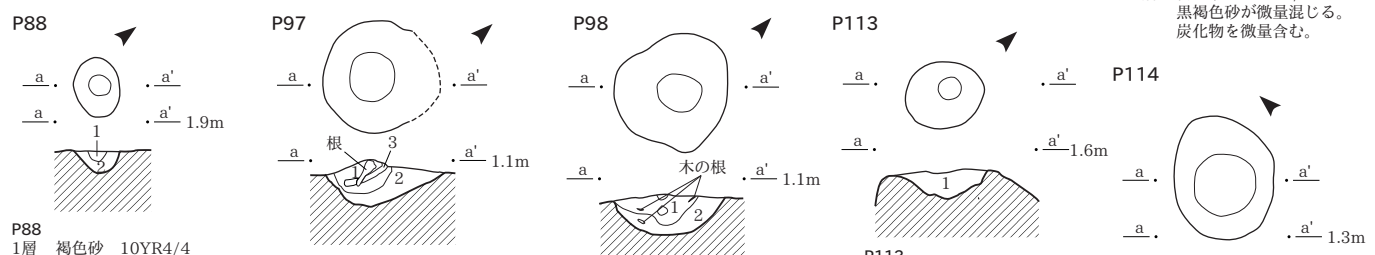
P27
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
炭化物を微量含む。
植物遺体が入る。

P29
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
下部に褐色砂が混じる。
0.5～1cm角の炭化物を多く含む。
植物遺体が入る。
2層　褐色砂　10YR4/4
炭化物を微量含む。植物遺体が入る。
底部から縄文土器出土。

P80
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
少量の褐色砂が混じる。
大量の炭化物を含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
炭化物が少量散在。

P81
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
下部に褐色砂が混じる。
1cm角の炭化物が集中する。

P87
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が混じる。
炭化物が全体に含まれる。
植物遺体が微量入る。
2層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂が微量混じる。
炭化物を微量含む。



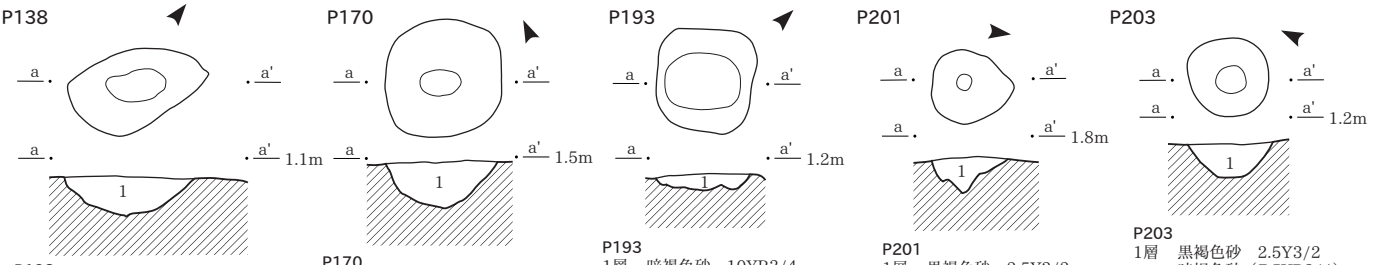
P88
1層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂が微量混じる。
2層　褐色砂　10YR4/4
5㎜角の炭化物を微量含む。

P97
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
オリーブ黒色粘質土（5Y3/2）
が帯状に混じる。
3～5㎜角の炭化物が散在。
木の根が斜めに刺さっている。
2層　黄褐色砂　2.5Y5/3
粘性強。上部に黒褐色砂が混じる。
3～5㎜角の炭化物が散在。
植物遺体が少量入る。
3層　オリーブ黒粘土

P98
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
青灰色粘質土（10BG5/1）が混じる。
炭化物を微量含む。木片出土。
2層　褐色砂　10YR4/4
上部に黒褐色砂が微量に混じる。
3～5㎜角の炭化物が散在。
木片5点出土。

P113
1層　褐色砂　10YR4/4
上部に炭化物塊を含む。
植物遺体を含む。

P114
1層　褐色砂　10YR4/4
黄褐色砂と黒褐色砂が混じる。
植物遺体を含む。



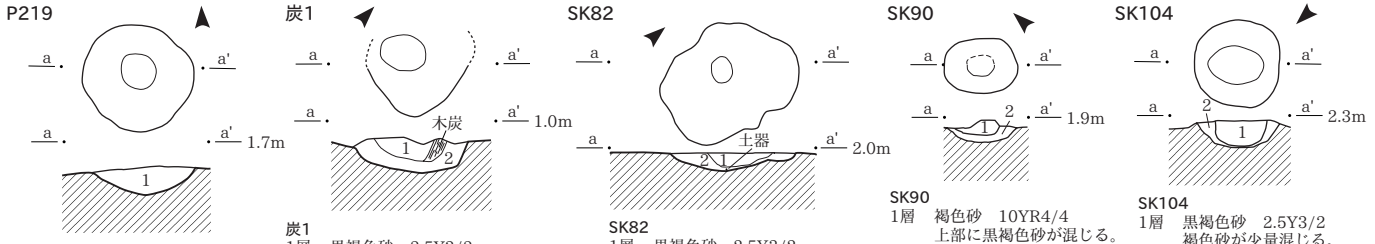
P138
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が少量混じる。
1～2cm角の炭化物ブロックを
含む。

P170
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が少量混じる。
炭化物や植物遺体を含む。

P193
1層　暗褐色砂　10YR3/4
褐色砂が混じる。
3㎜角の炭化物をブロック状に
多量に含む。

P201
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が少量混じる。
少量の炭化物や
植物遺体を含む。

P203
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
暗褐色砂（7.5YR3/4）
が少量混じる。
1cm角の炭化物を多量に、
植物遺体を少量含む。



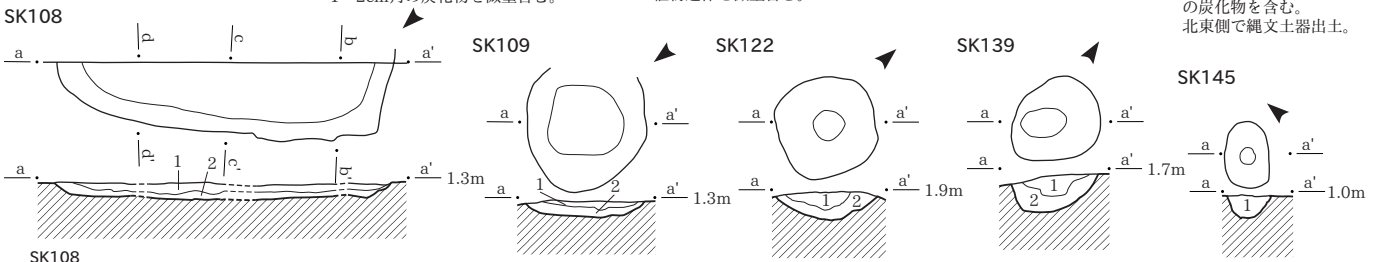
P219
1層　褐色砂　10YR4/6
微量の炭化物と植物遺体を含む。
石鏃1点出土。

炭1
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
炭化木が縦断し、
その下に灰色砂が堆積する。
炭化物を多量に含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
1～2cm角の炭化物を微量含む。

SK82
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が少量混じる。
3～5㎜角の炭化物や
植物遺体を含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
植物遺体を微量含む。

SK90
1層　褐色砂　10YR4/4
上部に黒褐色砂が混じる。
植物遺体を微量含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
植物遺体を微量含む。

SK104
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が少量混じる。
3～5㎜角の炭化物や
植物遺体を含む。
2層　黒褐色砂　2.5Y3/2
黄褐色砂（2.5Y5/4）
が混じる。3～5㎜角
の炭化物を含む。
北東側で縄文土器出土。



SK108
1層　暗褐色砂　7.5YR3/4
微量の炭化物と植物遺体含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
黄褐色砂が混じる。
2㎜角の炭化物を微量と、植物遺体を微量含む。

SK109
1層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂が斑状に混じる。
2層　褐色砂　10YR4/4
植物遺体を微量含む。

SK122
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
青灰色粘土がブロック
状に混じる。
炭化物塊や植物遺体を
含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
微量の炭化物・植物遺
体を含む。

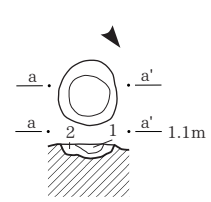
SK139
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が混じる。
3～5㎜角の炭化物や
植物遺体を含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
植物遺体を微量含む。

SK145
1層　褐色砂　10YR4/4
上面に黒褐色砂が
混じる。
ブロック状や2㎜角の
炭化物を少量含む。

（SK82・90・104・108・109・122・139・145）　0　（1：80）　4m

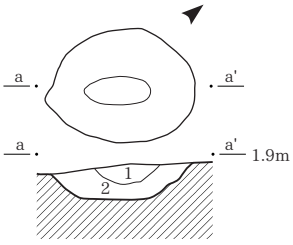
（その他）　0　（1：40）　2m

SK146



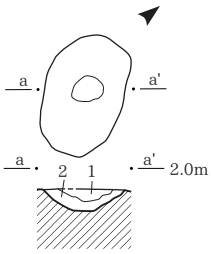
SK146
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
炭化物塊を含むほか、
2㎜角の炭化物が
散在する。
2層　褐色砂　10YR4/4
炭化物を微量含む。

SK210



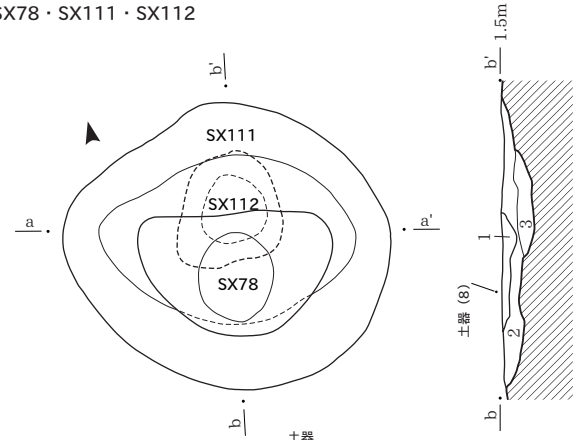
SK210
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
1㎜角の炭化物を微量含む。
植物遺体が入る。
2層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂が混じる。
炭化物を少量含む。
植物遺体が入る。

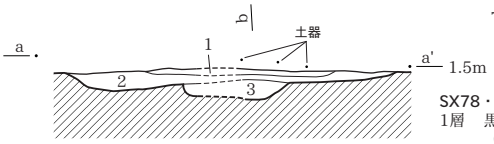
SK218



SK218
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
炭化物を少量、
植物遺体を多量に含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
上部を中心に黒褐色砂が
混じる。
植物遺体を微量含む。

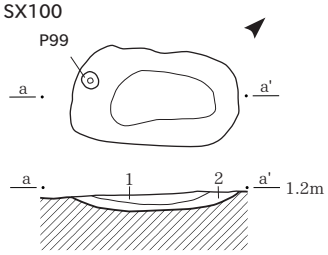
SX78・SX111・SX112





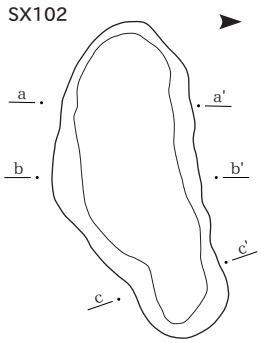
SX78・SX111・SX112
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
（SK78）3～5㎜角
の炭化物少量と植物
遺体を含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
（SX111）黄褐色砂
と黒褐色砂が混じる。
植物遺体を含む。
3層　暗褐色砂
7.5YR3/4（SX112）
1cm角の炭化物を多
量に含む。植物遺体
を含む。

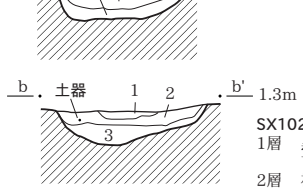
SX100



SX100
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
炭化物を微量含む。
2層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂が部分的に混じる。
炭化物を微量に含む。

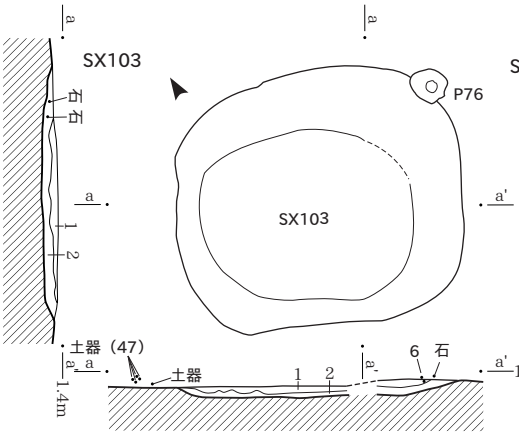
SX102





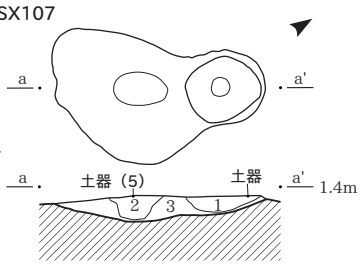
SX102
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
下部に褐色砂が少量混じる。
2層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂が混じる。炭化物を微量含む。植物遺体が入る。
3層　褐色砂　10YR4/4
下部に黒褐色砂が少量混じる。植物遺体が入る。

SX103



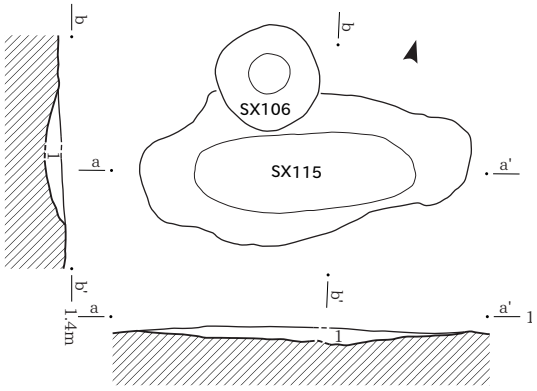
SX103
1層　褐色砂　10YR4/4
炭化物を微量含む。植物遺体が入る。
2層　黄褐色砂　2.5YR5/4
黒褐色砂（2.5Y3/2）が混じる。炭化物を微量含む。
植物遺体が入る。

SX107



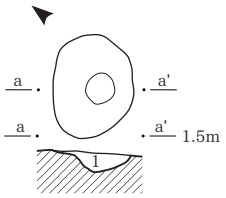
SX107
1層　暗褐色砂　7.5YR3/3
3～5㎜角の炭化物を微量含む。
植物遺体が入る。縄文土器出土。
2層　暗褐色砂　7.5YR3/3
黄褐色砂（2.5YR5/4）が混じる。
3～5㎜角の炭化物を微量含む。
植物遺体が入る。
3層　黄褐色砂　2.5YR5/4
黒褐色砂（2.5Y3/2）が混じり、
上部には暗褐色砂も少量混じる。
炭化物を微量含む。植物遺体が入る。

SX115



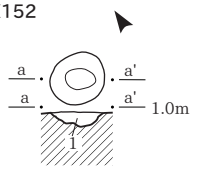
SX115
1層　暗褐色砂　7.5YR3/3
下部に褐色砂が混じる。炭化物を少量含む。
植物遺体が入る。

SX141



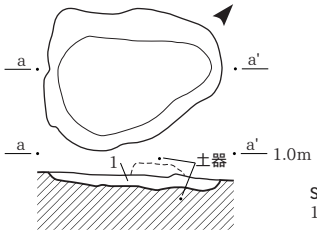
SX141
1層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂を斑状に含む。
3～5㎜角の炭化物を少量含む。
植物遺体が入る。

SX152



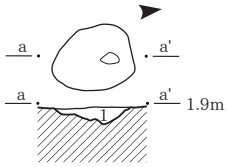
SX152
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が混じる。
北西側下部には粘性のある
黄褐色砂が含まれる。
炭化物塊を含む。
縄文土器出土。

SX153



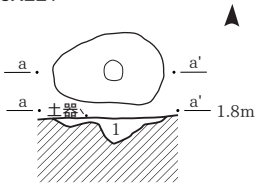
SX153
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
2㎜角の炭化物を微量含む。
植物遺体が入る。
下部から縄文土器出土。
遺構直上で縄文土器出土。

SX202



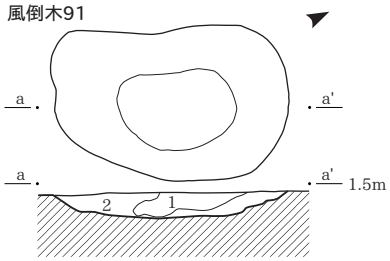
SX202
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が斑状に少量混じる。
3㎜角の炭化物と植物遺体を
少量含む。

SX221



SX221
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
褐色砂が少量混じる。
3㎜角の炭化物を多量に含む。
植物遺体を少量含む。
縄文土器出土。

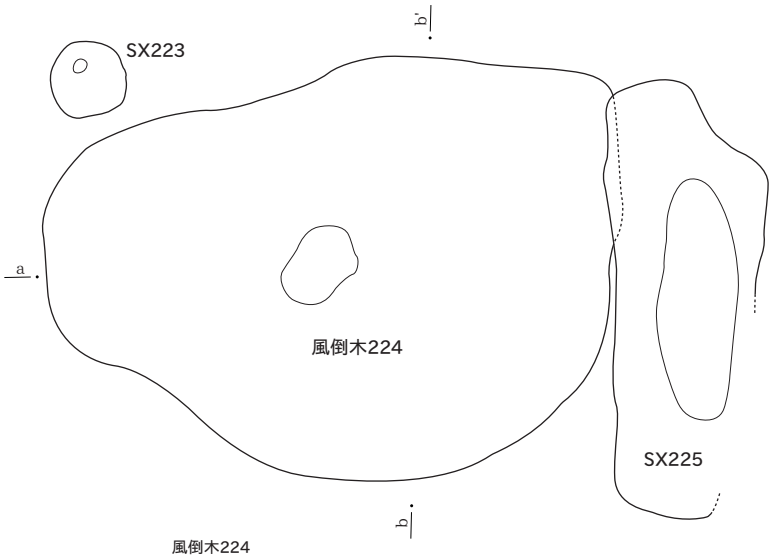
風倒木91

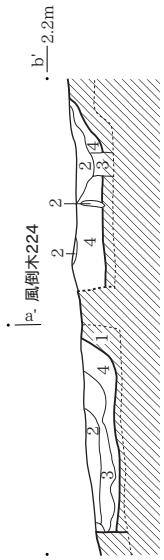


風倒木91
1層　黒褐色砂　2.5Y3/2
3～5㎜角の炭化物を多量に含む。植物遺体が入る。
2層　褐色砂　10YR4/4
植物遺体が入る。3～5㎜角の炭化物を多量に含む。

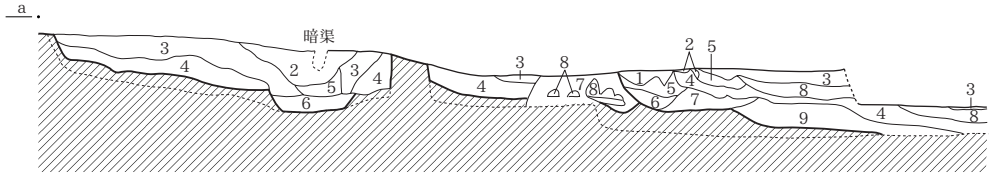
0　（1：80）　4m

風倒木224・SX225



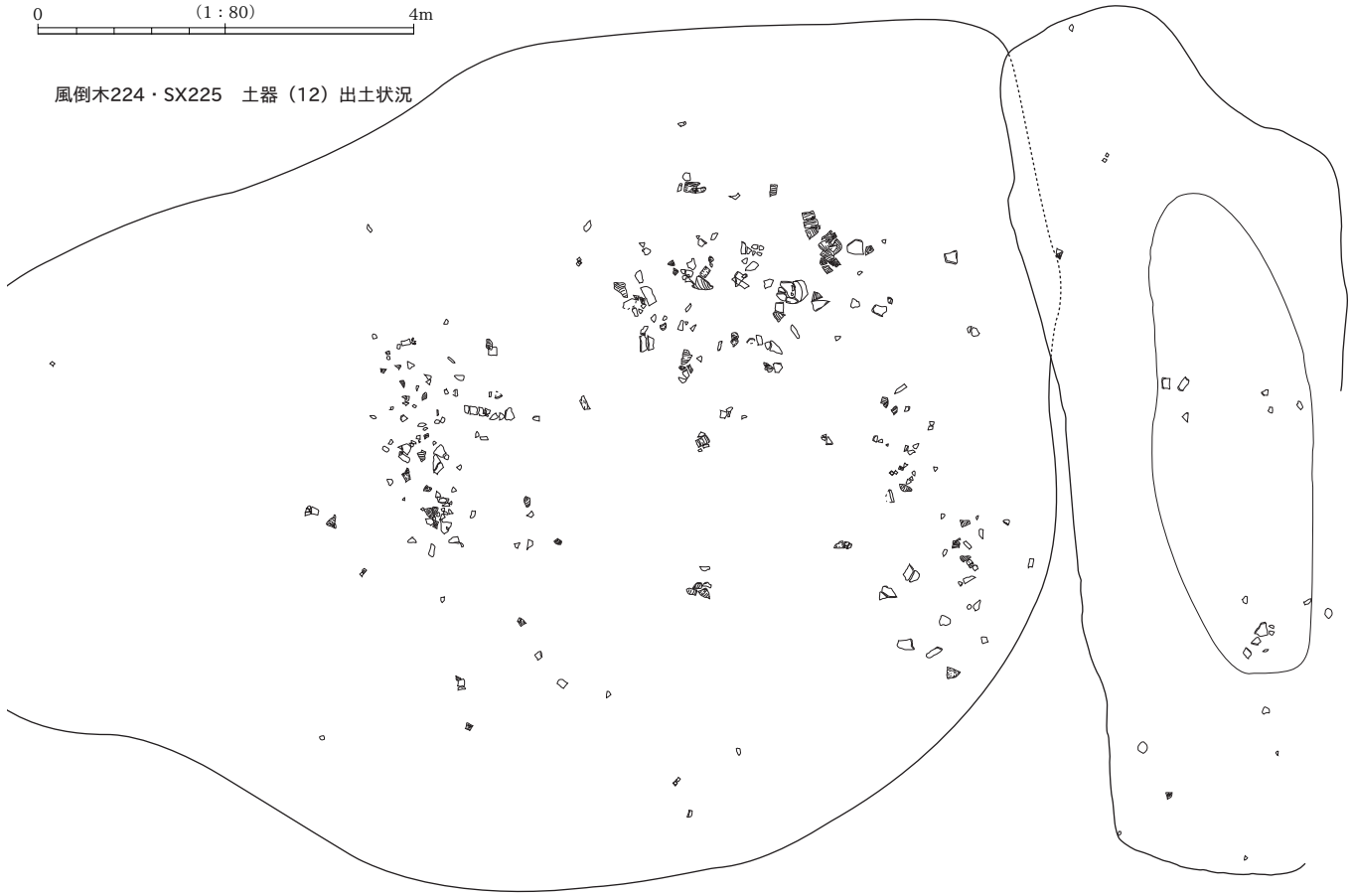


風倒木224
1層　黄褐色砂　10YR5/6
2層　黄褐色砂（10YR2/3）が混じる。植物遺体が多量に含む。
3層　黄褐色砂（10YR2/3）
5mm角の炭化物を微量含む。植物遺体が入る。
4層　褐色砂　10YR4/4
植物遺体多量に入る。
5層　暗褐色砂　10YR3/3
5mm角の炭化物を多量に含む。植物遺体が多量に入る。
6層　褐色砂（10YR2/3）
植物遺体多量に入る。
7層　暗褐色砂（10YR2/3）が混じる。植物遺体が入る。
8層　褐色砂　10YR4/4
黄褐色砂（10YR2/3）ブロックが混じる。



0　（1：80）　4m

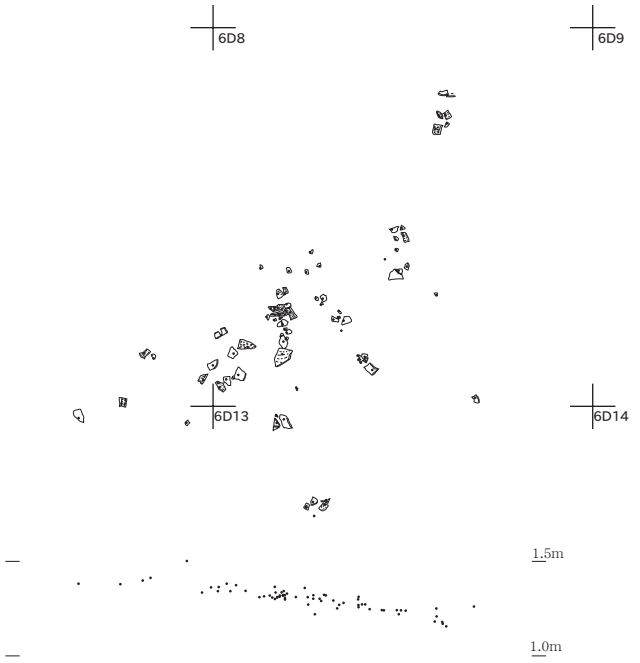
風倒木224・SX225　土器（12）出土状況



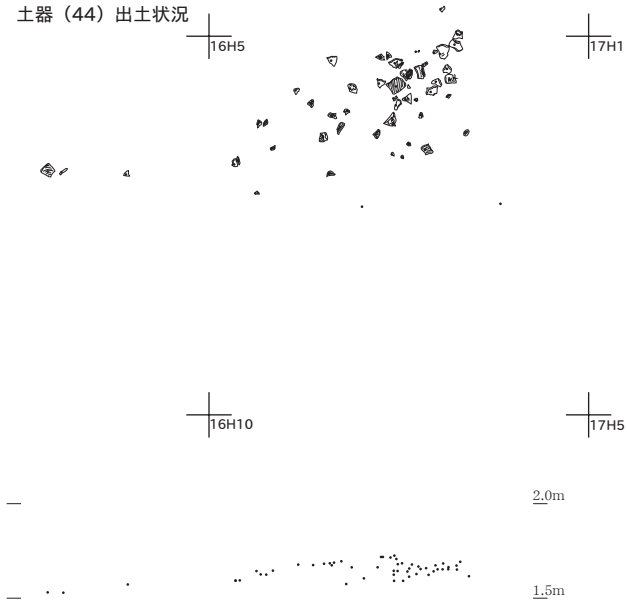
SX225
1層　暗褐色砂　10YR3/3
黒褐色砂（10YR2/3）ブロックが混じる。3mm角の炭化物を微量含む。植物遺体が入る。
2層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂（10YR2/3）が混じり、全体に青灰色に見える。
3層　黒褐色砂　10YR2/3
褐色砂（10YR4/4）が少量混じり、全体に青灰色に見える。3mm角の炭化物を微量含む。植物遺体が入る。
4層　褐色砂　10YR4/4
暗褐色砂ブロックが混じる。南東側に植物遺体が入る。
5層　褐色砂　10YR4/4
暗褐色砂が少量混じる。植物遺体が少量入る。
6層　褐色砂　10YR4/4
植物遺体が少量入る。
7層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂（10YR2/3）が微量混じる。植物遺体入る。
8層　黒褐色砂　10YR2/2
炭化物を微量含む。植物遺体が多量に入る。
9層　褐色砂　10YR4/4
黒褐色砂と黄褐色砂の混じった砂が少量混じる。植物遺体が多量に入る

0　（1：40）　2m

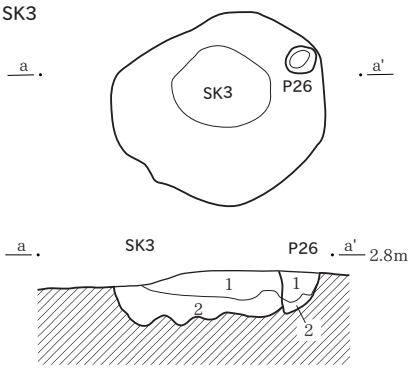
6D区　土器（47）出土状況



16H区　土器（44）出土状況



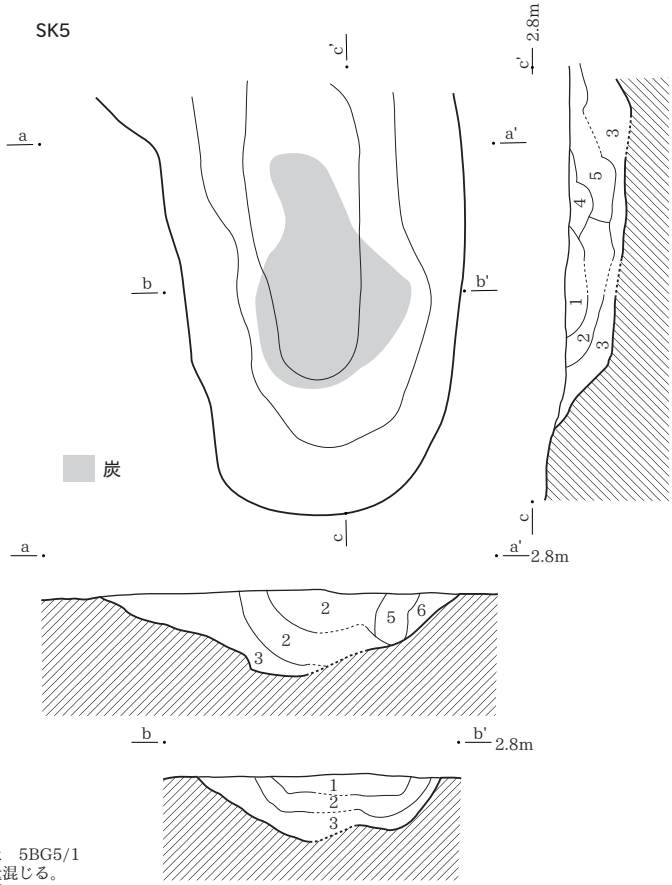
SK3



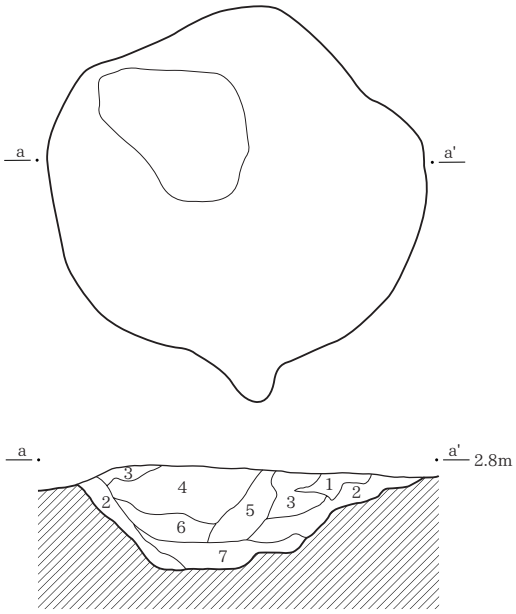
SK3
1層　暗褐色砂　10YR3/4
　　黒褐色砂（2.5Y3/2）がまだらに入る。
　　5mm四方の木炭を多く入る。
　　4cm四方の土器1点。
2層　黄褐色砂　10YR5/8
　　暗褐色砂が1cm四方のブロック状に入る。

P26
1層　黒褐色砂　2.5YR3/2
　　3mm四方の炭化物が多く入る。
　　遺物無し。
2層　黄褐色砂　10YR5/8
　　暗褐色砂（10YR3/4）が帯状に入る。
　　3cm四方の土器出土。

SK5



風倒木134

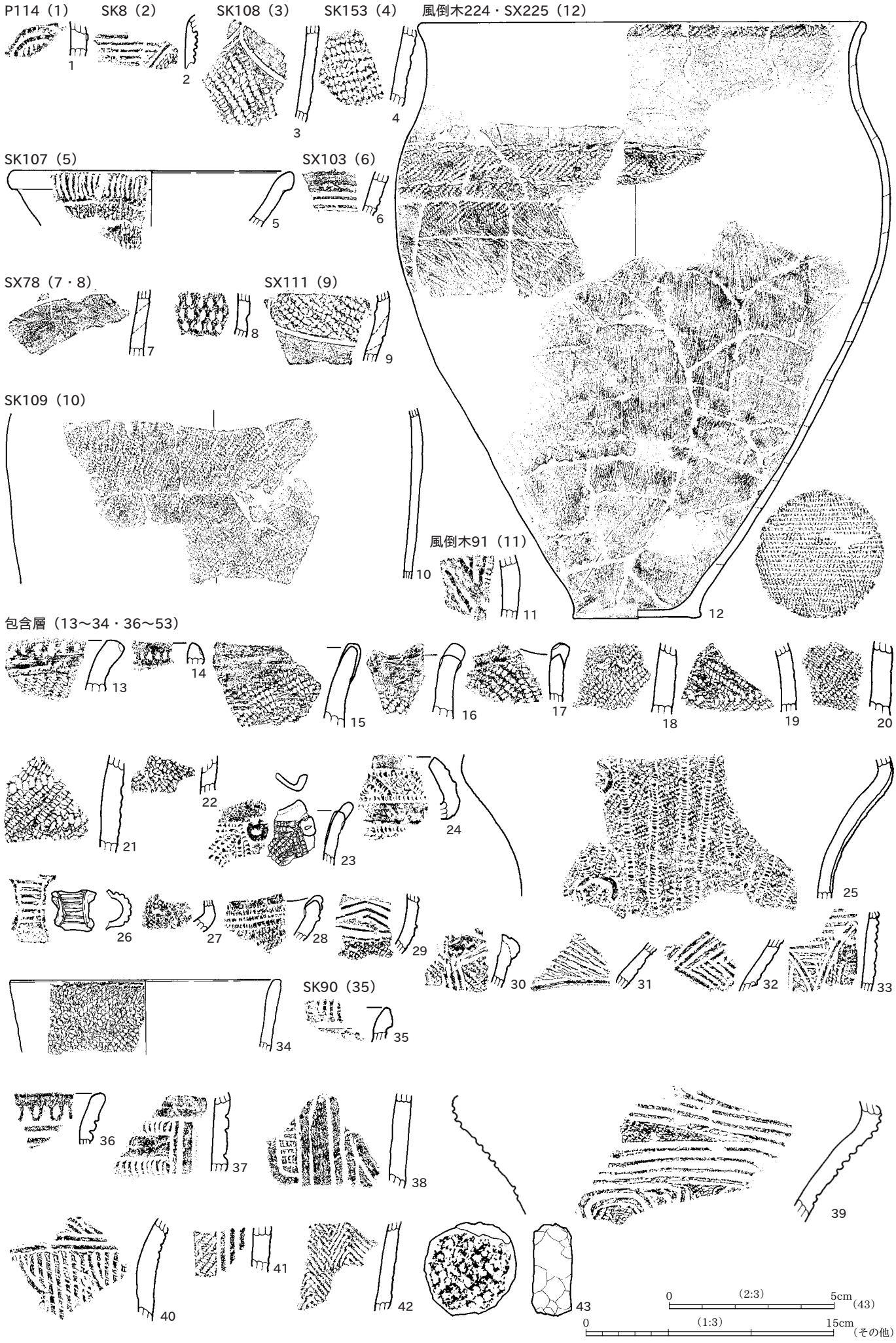


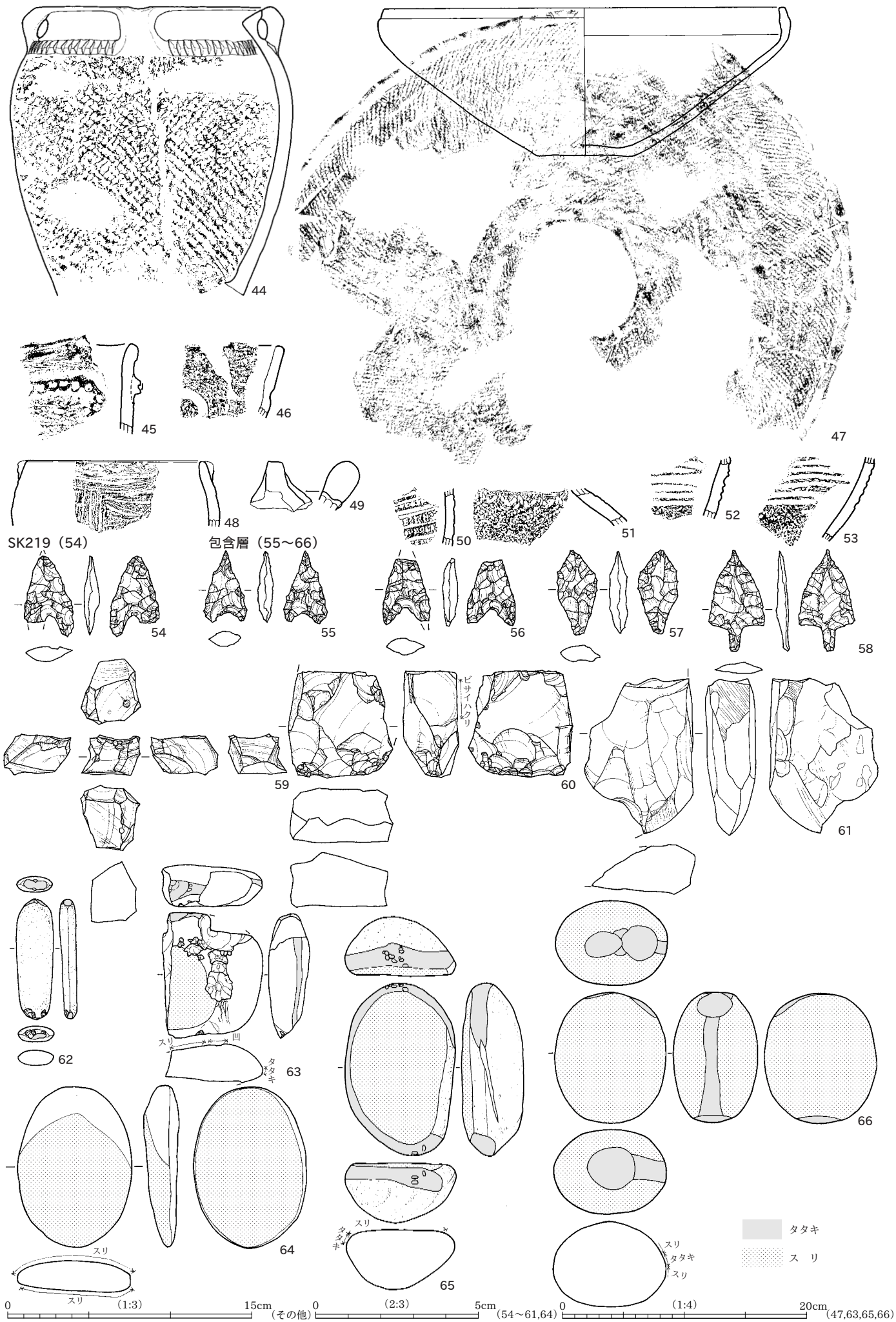
風倒木134
1層　青灰色粘土　5BG5/1
　　褐色砂少量混じる。
　　植物遺体が入る。
2層　青灰色砂　5BG5/1
　　北西・南東の立ち上がりには
　　褐色砂が少量混じる。
　　中央下部には黒色砂が混じる。
3層　褐色砂　10YR4/4
　　青灰色粘土・青灰色砂が少量
　　混じる。3～5mm角の炭化物
　　が散在。植物遺体入る。
4層　褐色砂　10YR4/4
　　植物遺体多量に入る。
5層　褐色砂　10YR4/4
　　青灰色砂が少量混じる。
　　植物遺体入る。
6層　褐色砂　10YR4/4
　　黄褐色砂が混じる。
　　植物遺体入る。
7層　黄褐色砂　10YR5/8
　　黒褐色砂が混じる。
　　植物遺体入る。

SK5
1層　黒色砂　10YR2/1
　　褐色砂を少量含む。（右上は多く混入）
　　炭化物1～1.5cm角が数多く含まれている。
2層　褐色砂　10YR4/4
　　黒色砂が混じる。
　　右側は赤褐色砂（5YR4/6）が混じってくる。
3層　黄褐色砂　10YR5/8
　　黒色砂が少量混じる。
　　炭化物が微量に含まれている。
4層　赤褐色砂　5YR4/6
　　炭化物が微量に混じる。
5層　赤褐色砂　10YR4/4
　　左側に炭化物のかたまりがあり、
　　多く散らばっている。
6層　黄褐色砂　10YR5/8
　　炭化物が微量に含まれている。

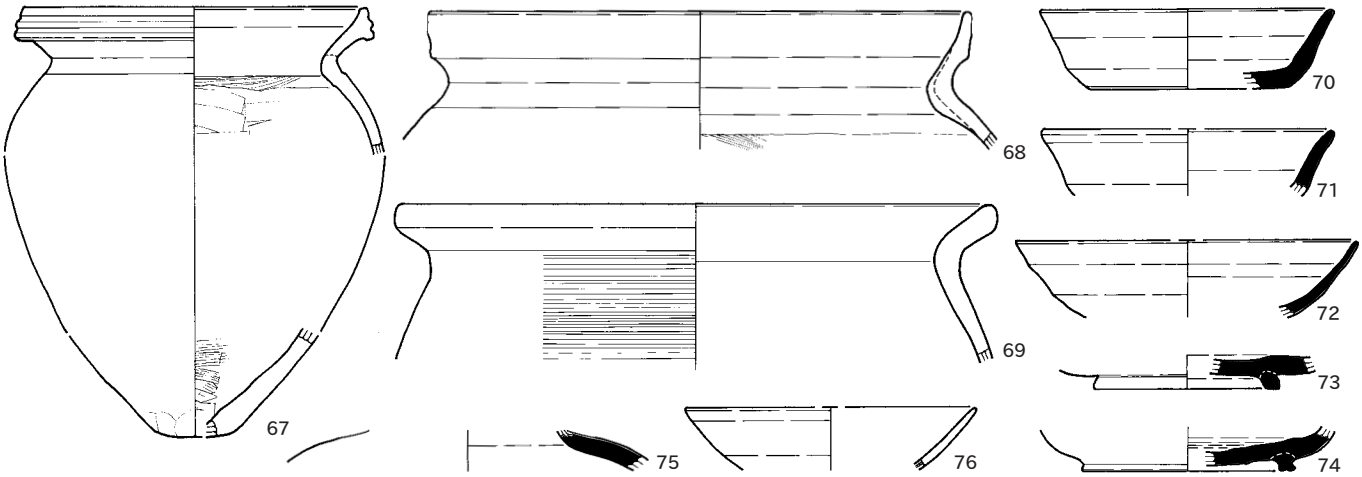
風倒木134　0　（1：80）　4m

その他　0　（1：40）　2m


P114（1）
SK8（2）
SK108（3）
SK153（4）
風倒木224・SX225（12）
SK107（5）
SX103（6）
SX78（7・8）
SX111（9）
SK109（10）
風倒木91（11）
包含層（13～34・36～53）
SK90（35）
0 (2:3) 5cm (43)
0 (1:3) 15cm (その他)

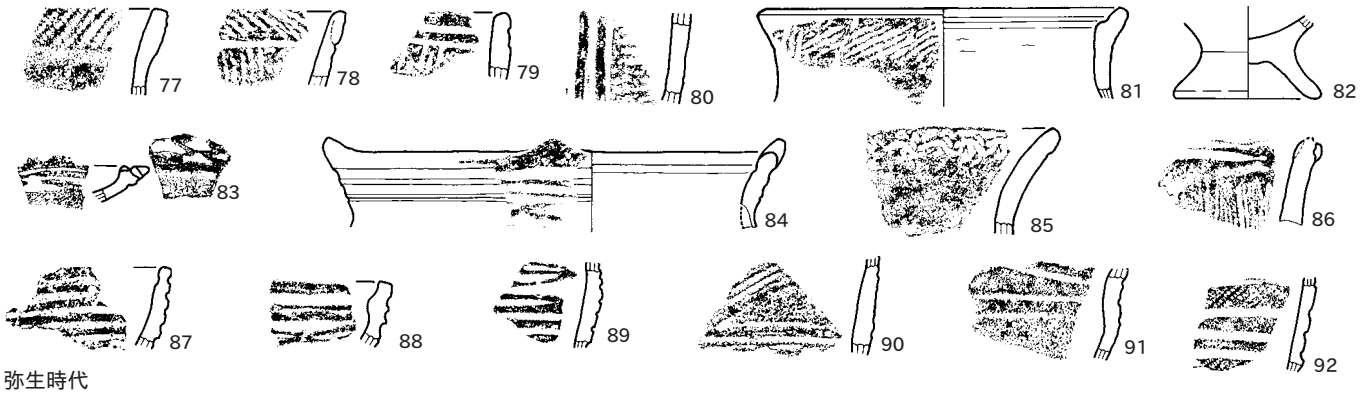

44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
SK219（54）
包含層（55～66）
54
55
56
57
58
59
60
61
ビサイハクリ
62
63
スリ
凹
タタキ
64
65
66
タタキ
スリ
0
(1:3)
15cm
(その他)
0
(2:3)
5cm
(54～61,64)
0
(1:4)
20cm
(47,63,65,66)

包含層（67～76）



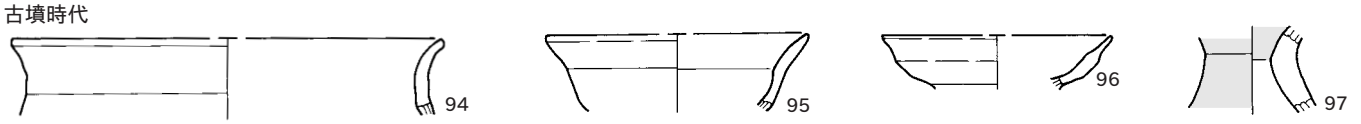
自然流路（77～107）

縄文時代

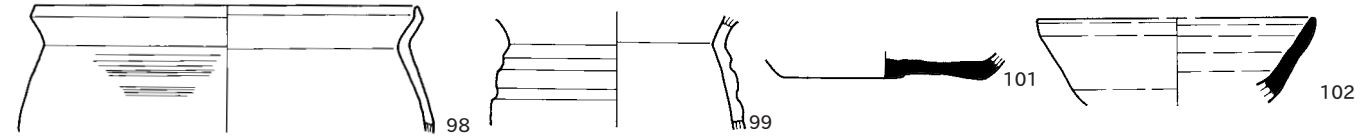


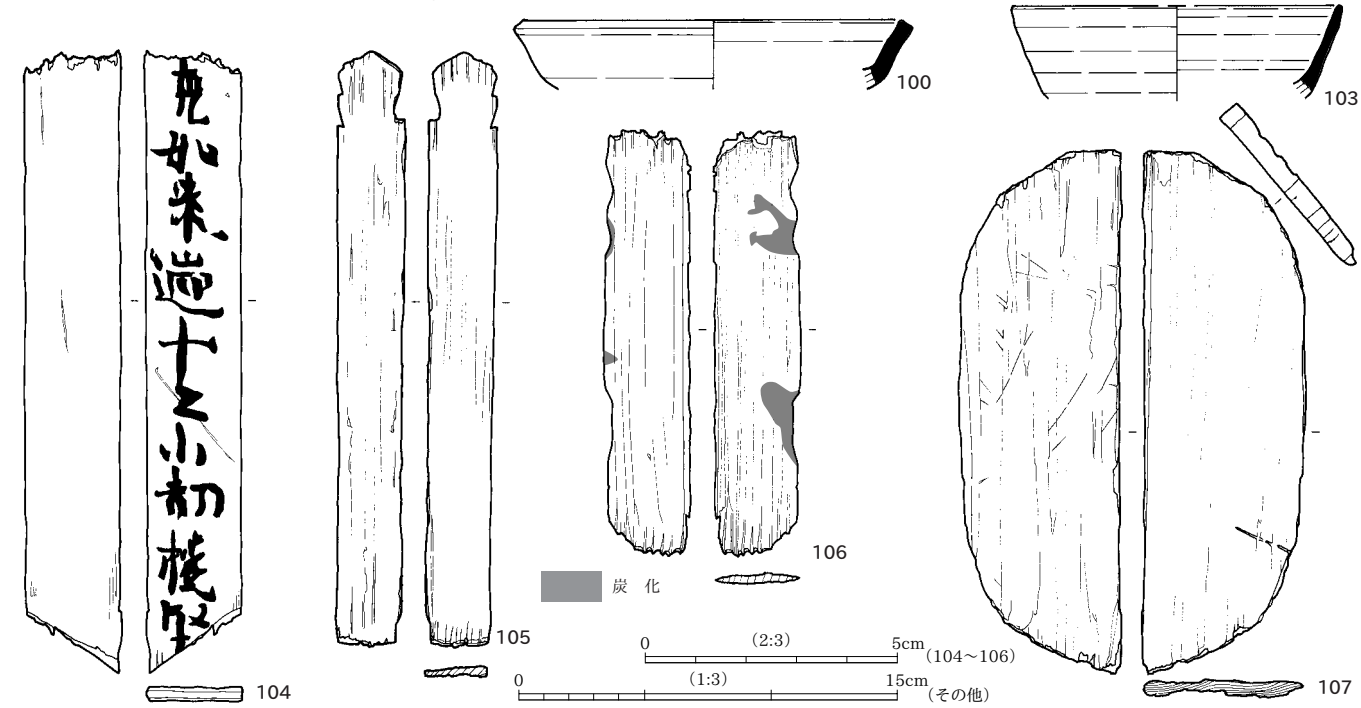
弥生時代

古墳時代

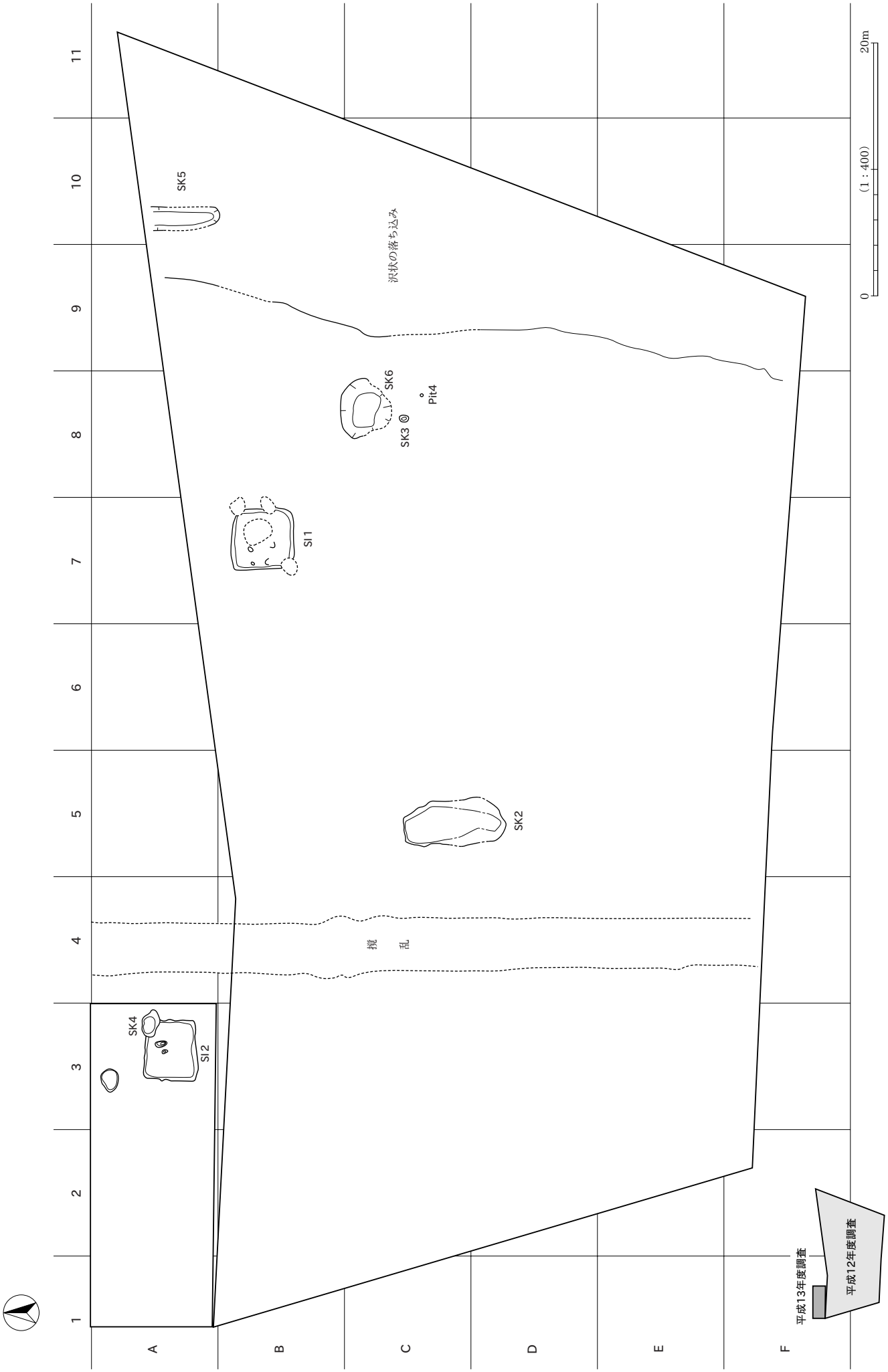


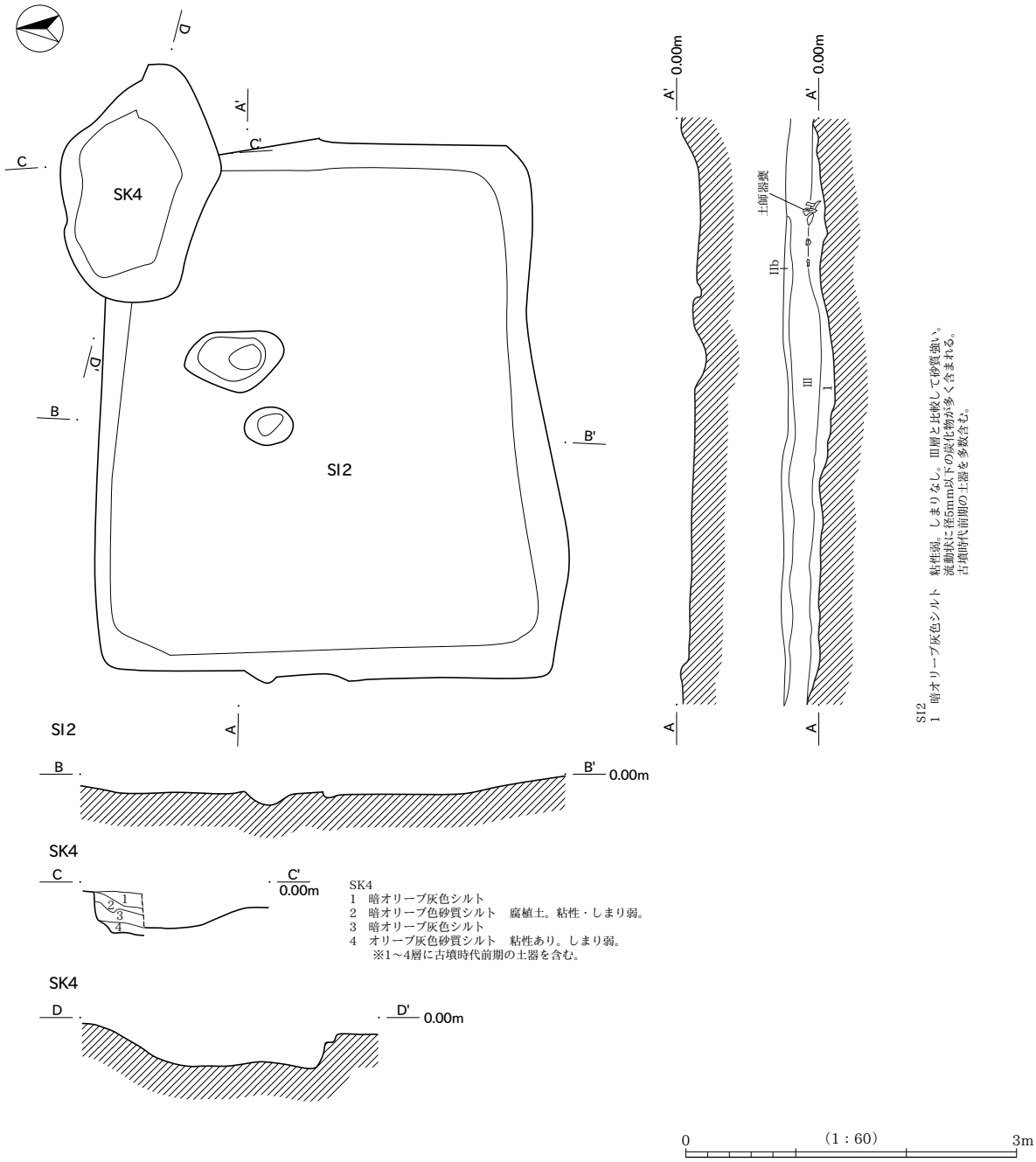
古代以降

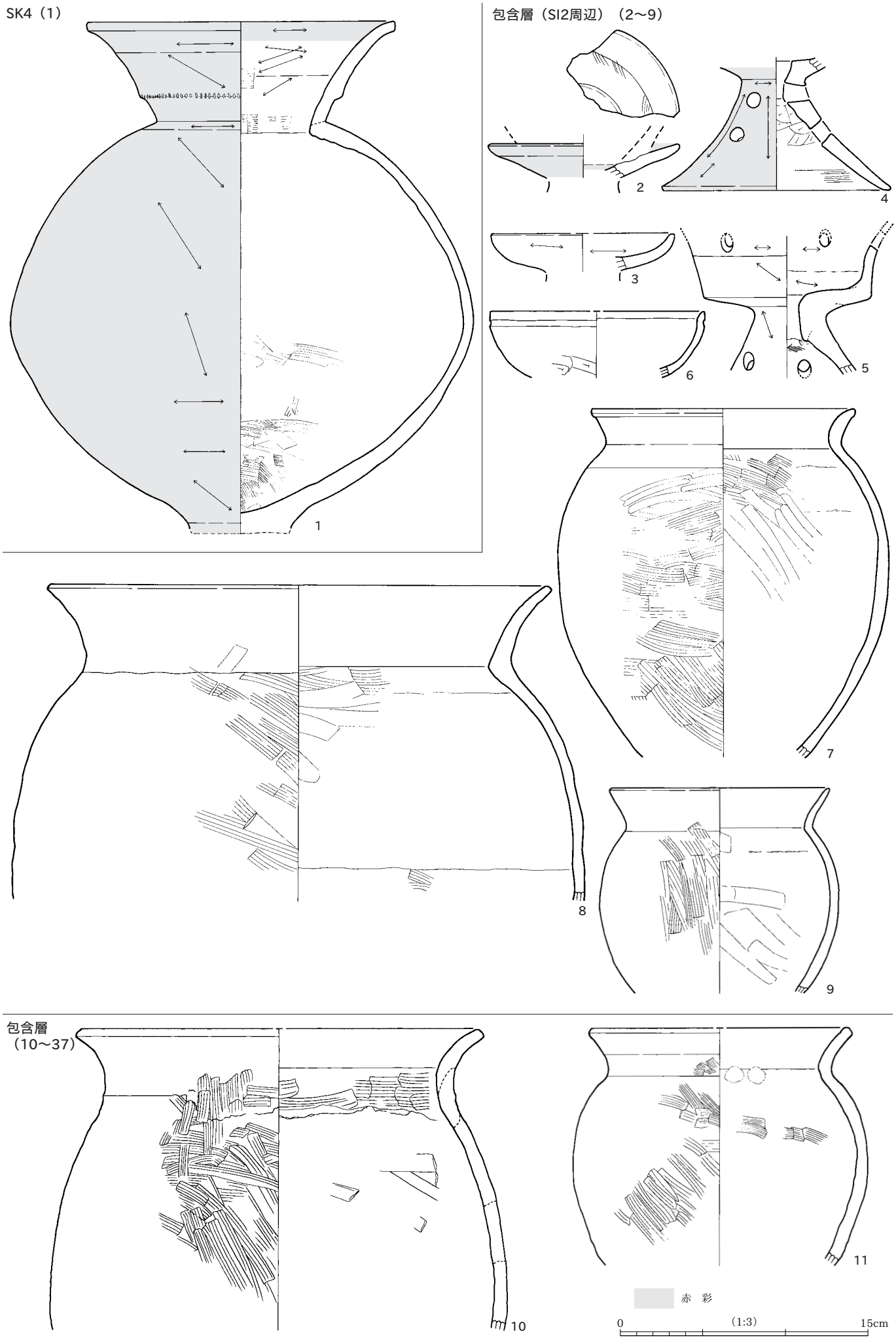


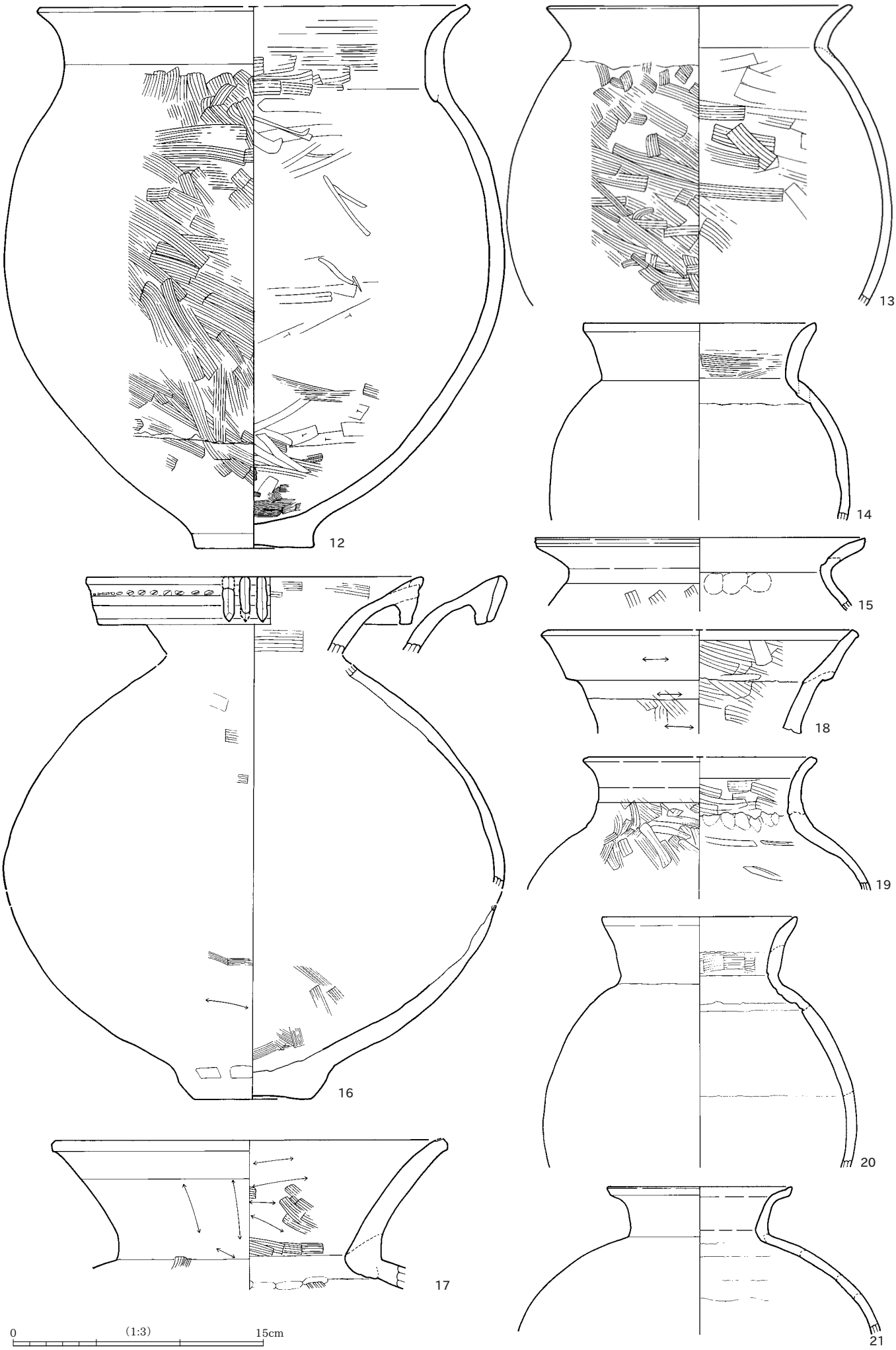


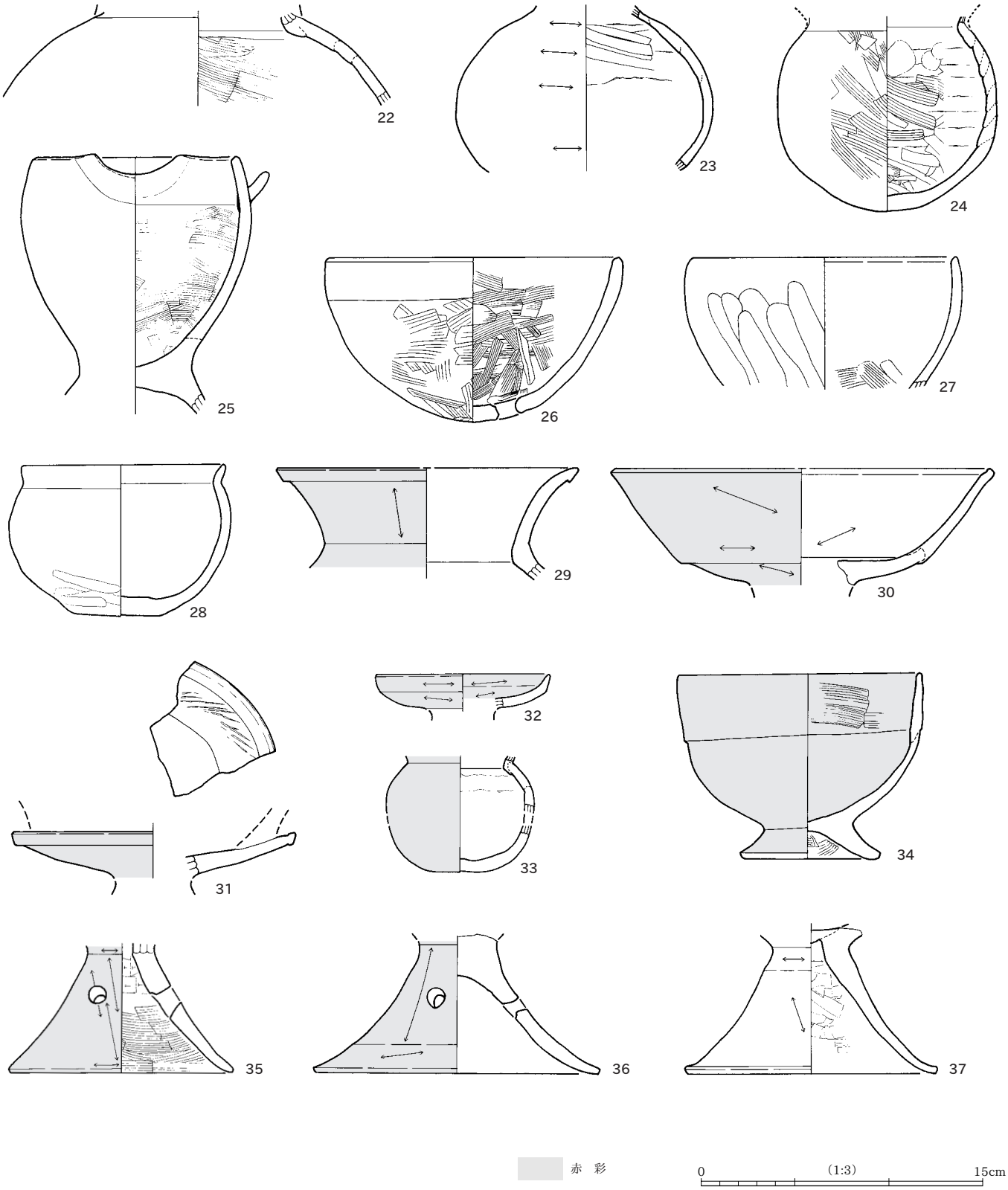
正尺Ａ遺跡　遺構全体図


SK5
沢状の落ち込み
SK6
Pit4
SK3
SI1
SK2
撹乱
SK4
SI2
0
(1：400)
20m
平成13年度調査
平成12年度調査
A
B
C
D
E
F
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

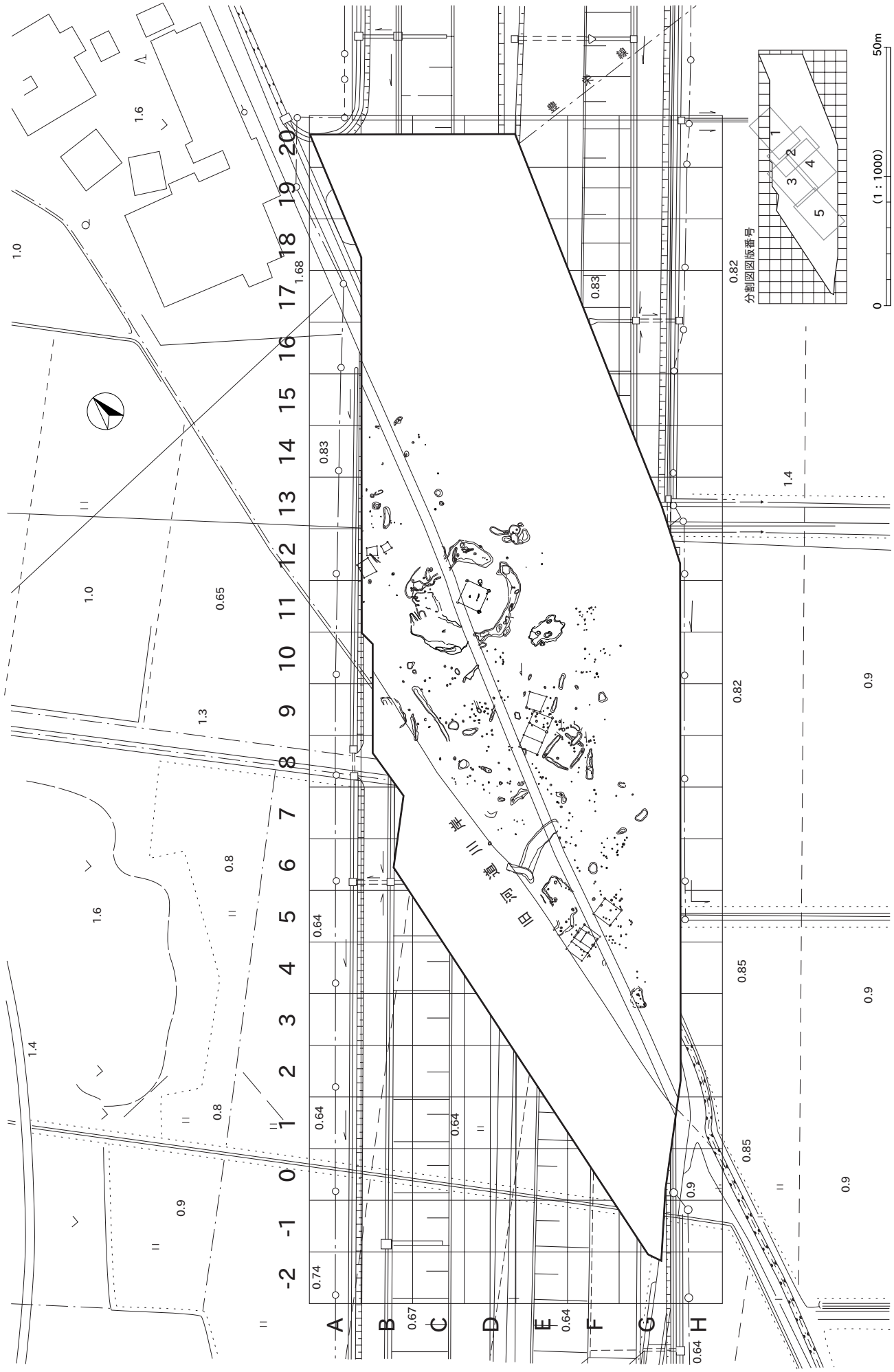

SK4
SI2
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
0.00m
土師器甕
IIb
III
I
SI2
1 暗オリーブ灰色シルト　粘性弱。しまりなし。III層と比較して砂質強い。
流動状に径5mm以下の炭化物が多く含まれる。
古墳時代前期の土器を多数含む。
SK4
1 暗オリーブ灰色シルト
2 暗オリーブ色砂質シルト　腐植土。粘性・しまり弱。
3 暗オリーブ灰色シルト
4 オリーブ灰色砂質シルト　粘性あり。しまり弱。
※1～4層に古墳時代前期の土器を含む。
0
(1：60)
3m

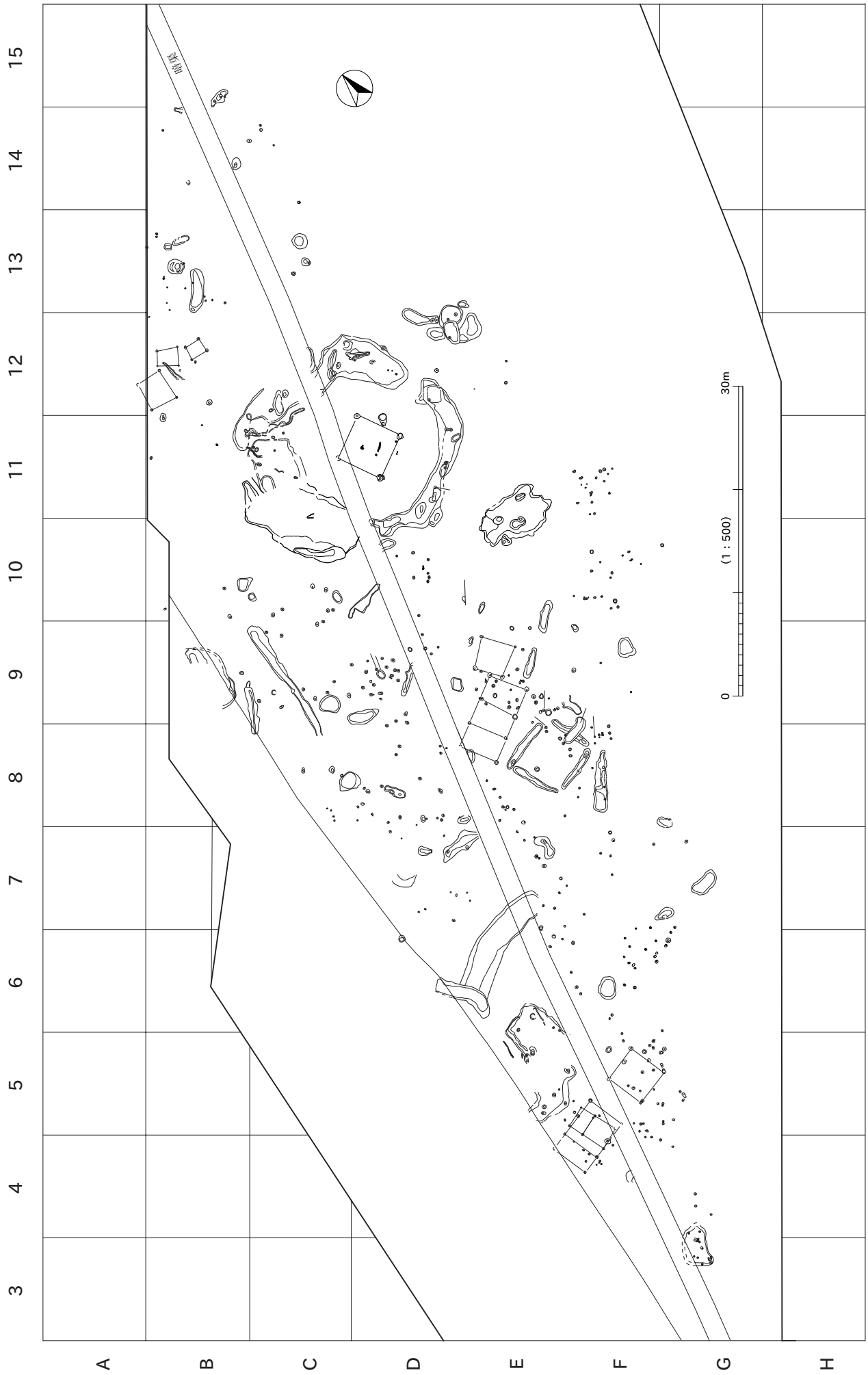

SK4（1）
包含層（SI2周辺）（2～9）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
包含層
（10～37）
10
11
赤　彩
0
(1:3)
15cm

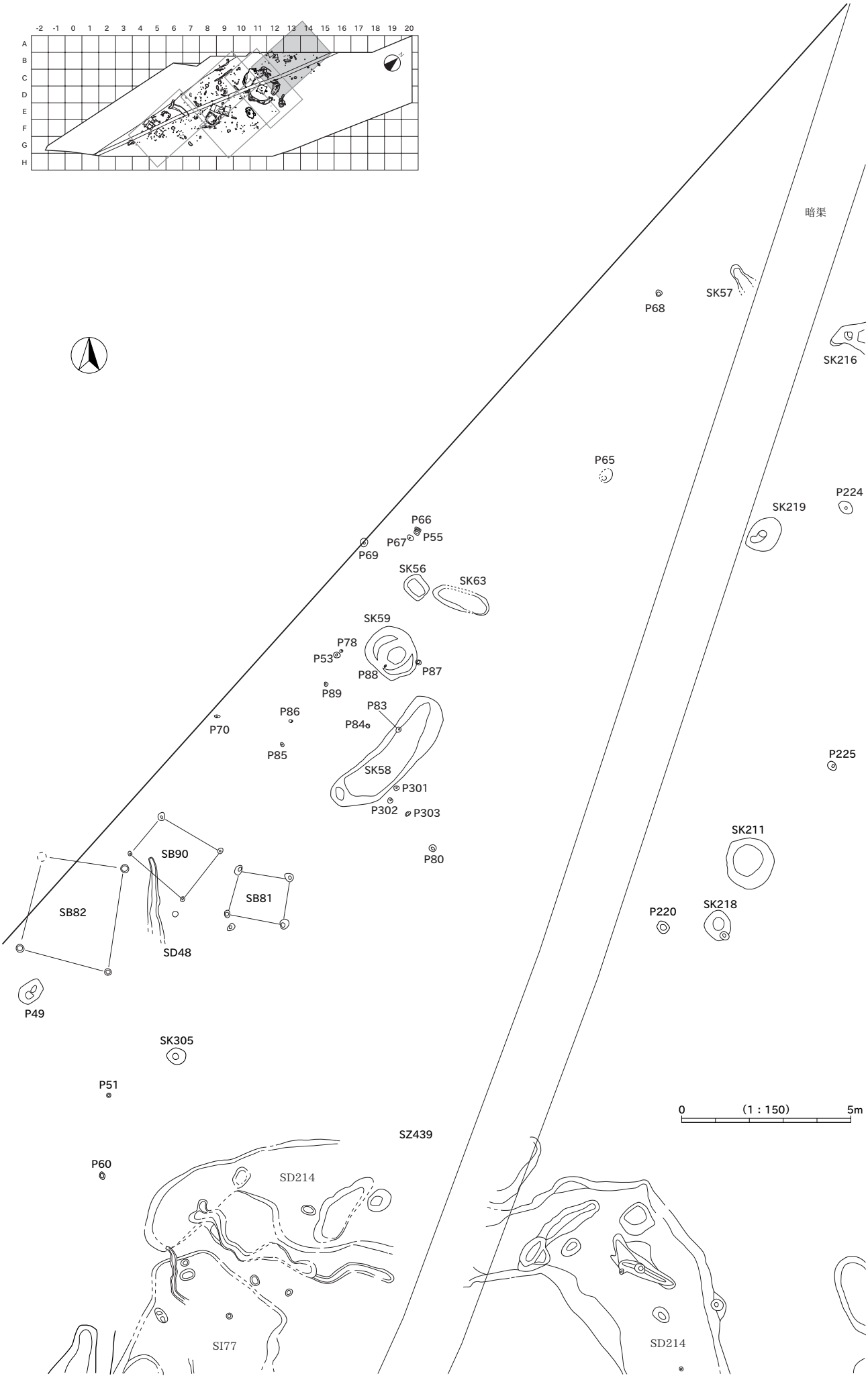

12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
(1:3)
15cm


22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
赤　彩
0
(1:3)
15cm

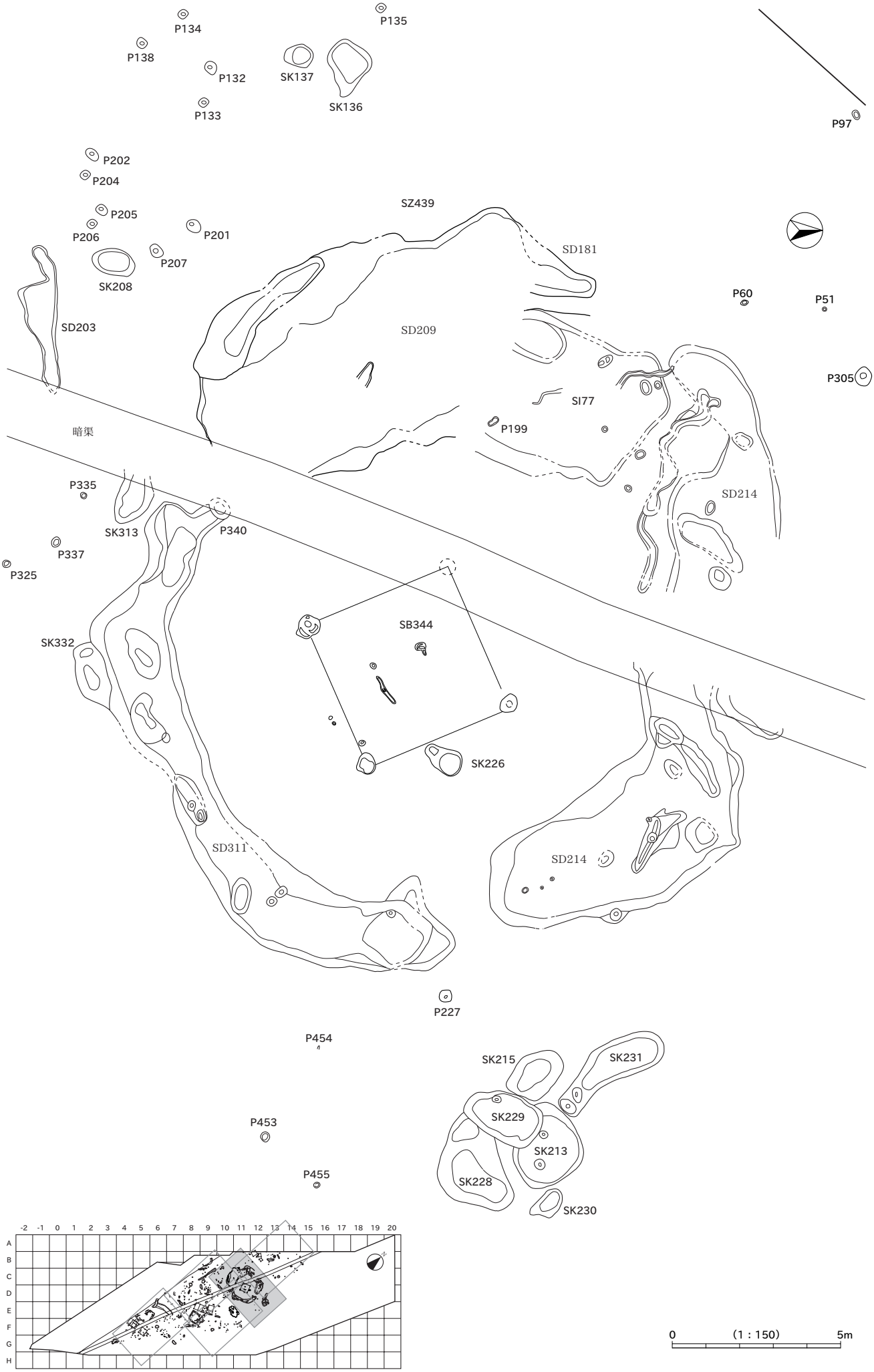
-2
-1
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
A
B
C
D
E
F
G
H
旧河道川岸
（1：300）
0
5
10
15m

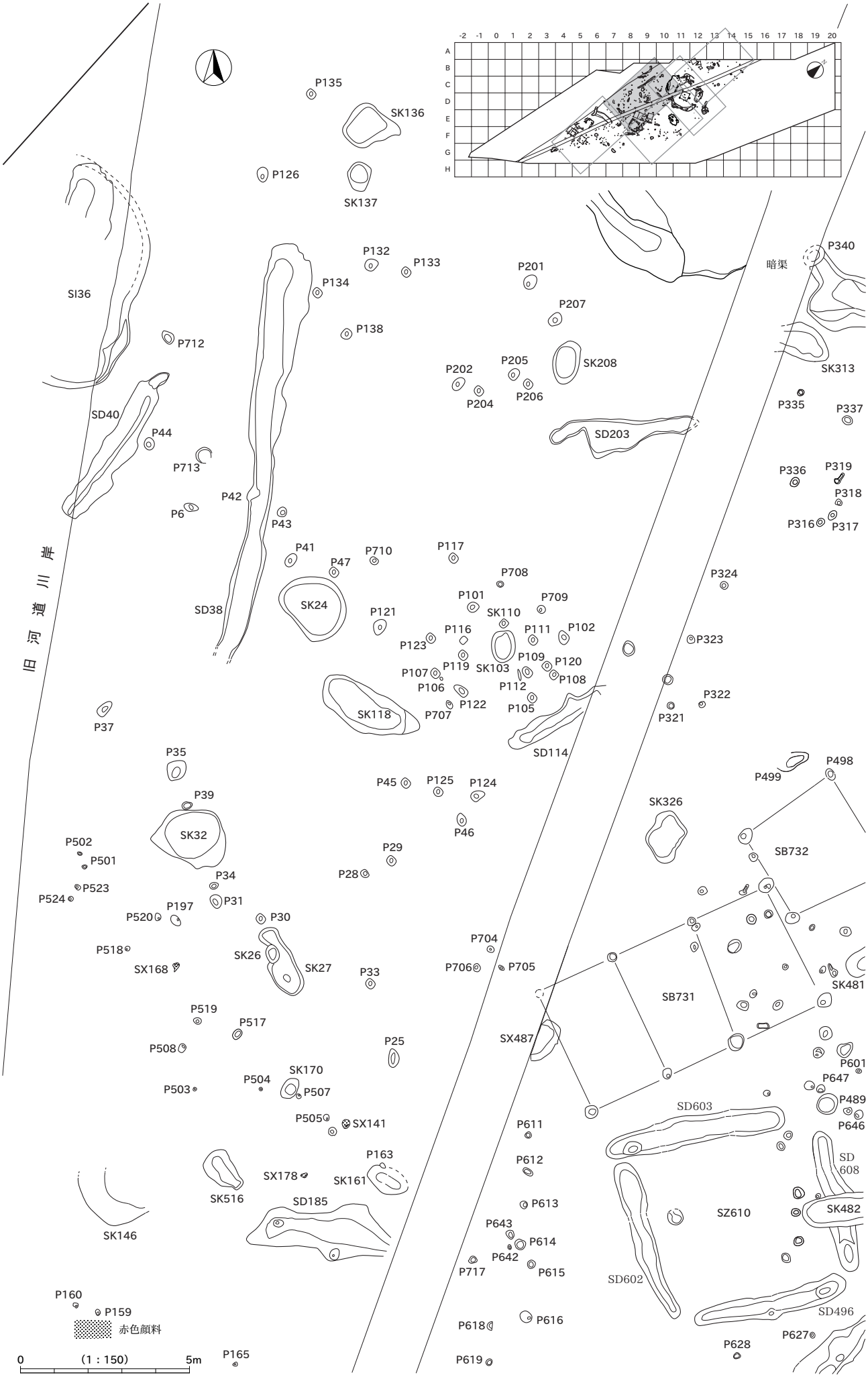

分割図図版番号
0
(1 : 1000)
50m
豊 栄 線
旧 河 道 川 岸
A
B
C
D
E
F
G
H
-2
-1
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

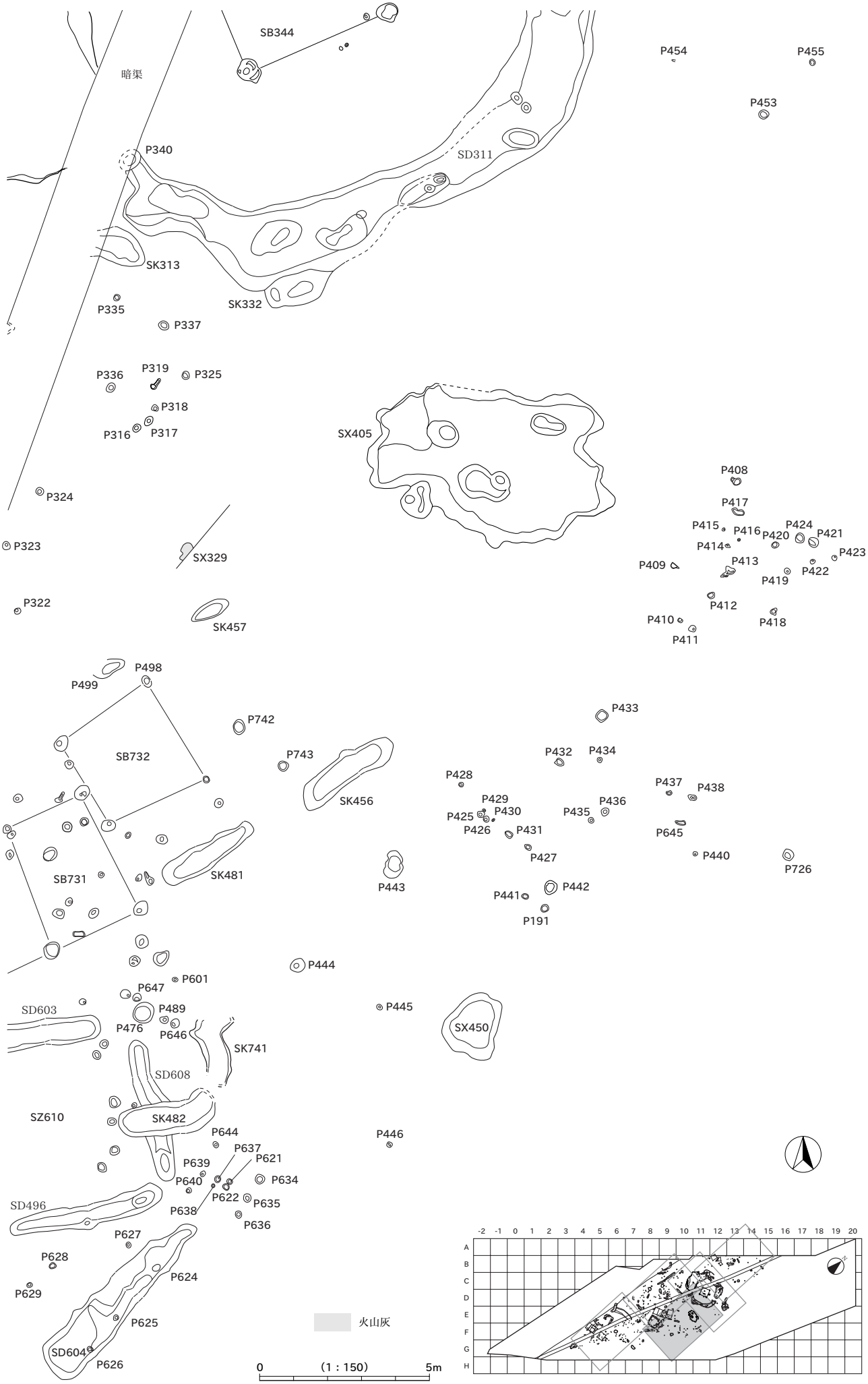

15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
A
B
C
D
E
F
G
H
0
(1 : 500)
30m

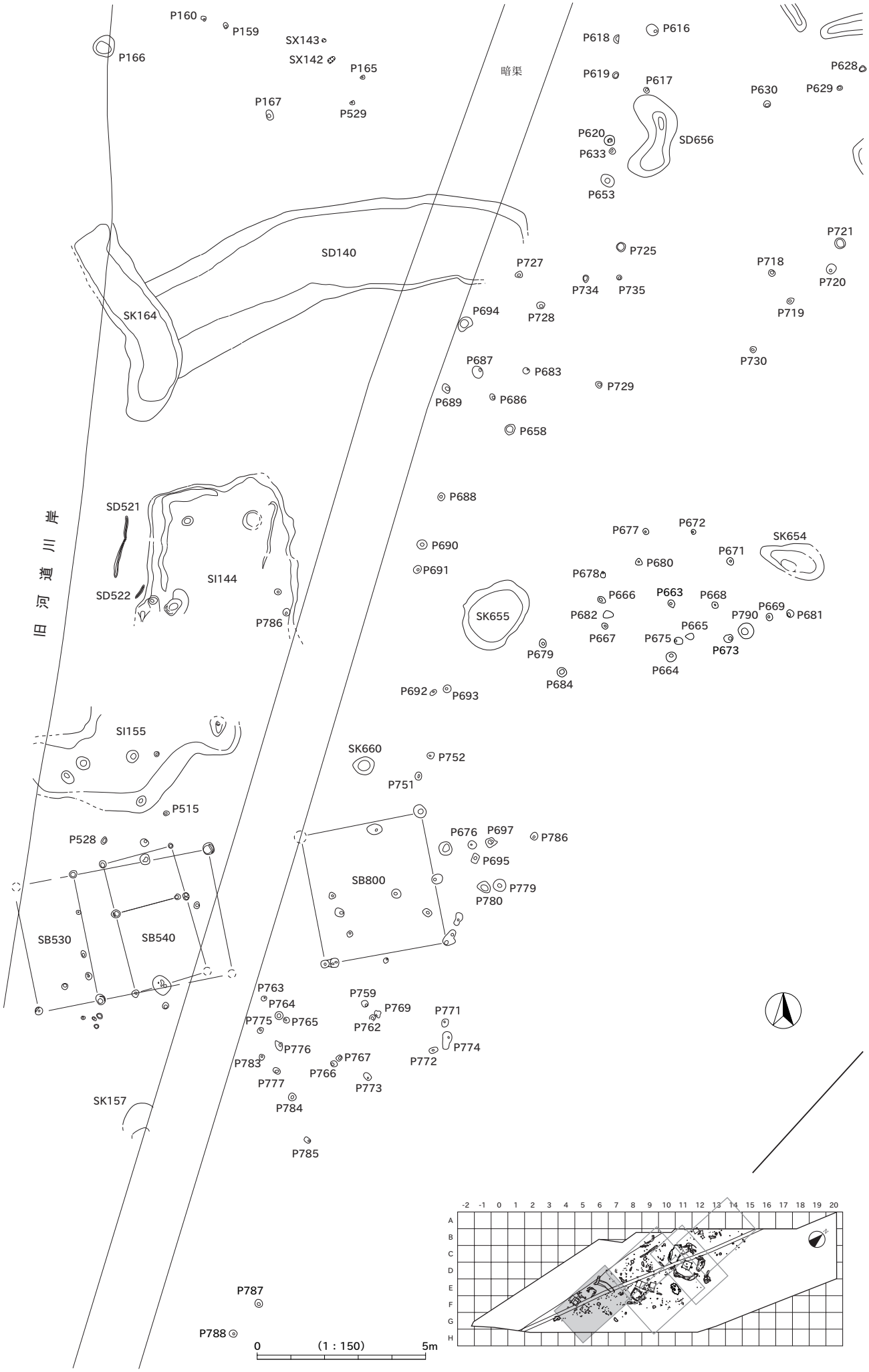

暗渠
SK57
P68
SK216
P65
P224
SK219
P66
P67
P55
P69
SK56
SK63
SK59
P78
P53
P88
P87
P89
P83
P86
P84
P70
P85
P225
SK58
P301
P302
P303
SK211
SB90
P80
SB81
SB82
P220
SK218
SD48
P49
SK305
P51
0
(1 : 150)
5m
SZ439
P60
SD214
SI77
SD214

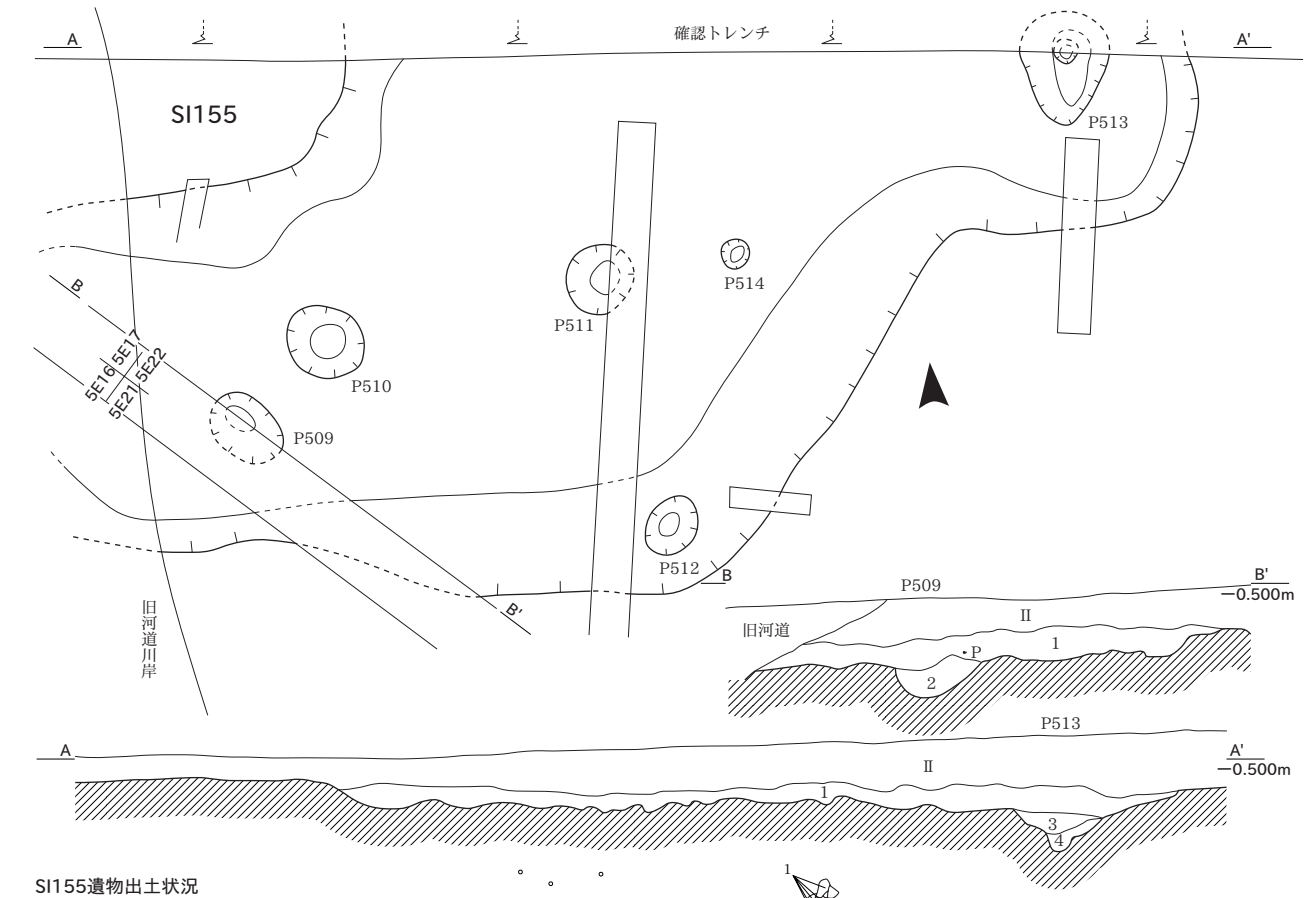
正尺Ｃ遺跡　遺構分割図（2）



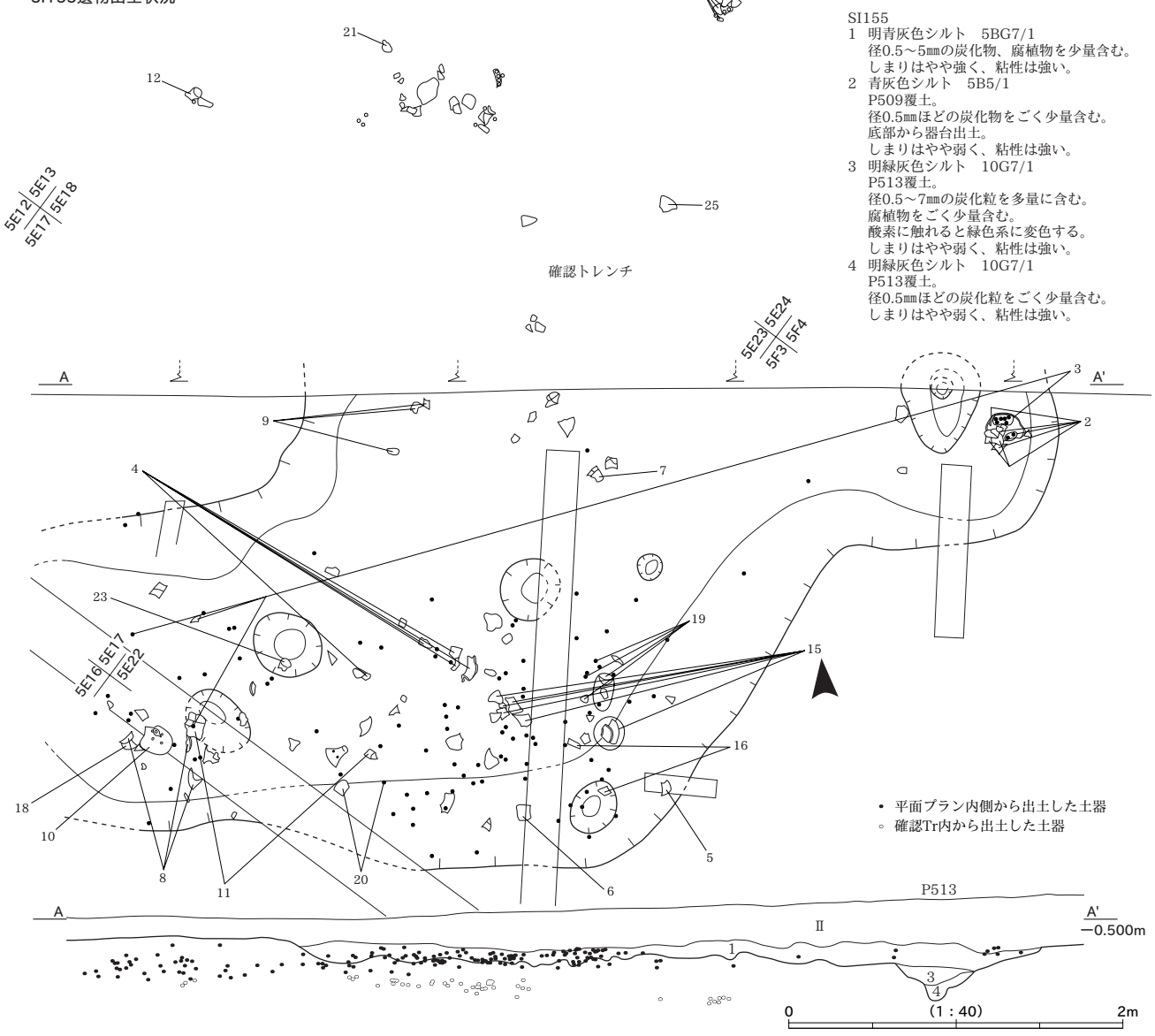

-2 -1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
A B C D E F G H
P135
SK136
P126
SK137
P132
P133
P134
P138
SI36
P712
SD40
P44
P713
P42
P6
P43
P41
P47
P710
P117
SD38
SK24
P121
P708
P101
P709
SK110
P116
P111
P102
P123
P119
SK103
P109
P120
P107
P106
P112
P108
P122
P105
P707
SK118
SD114
P37
P35
P39
SK32
P502
P501
P523
P524
P34
P31
P197
P520
P30
P518
SK26
SK27
SX168
P33
P519
P517
P508
P25
P504
SK170
P503
P507
P505
SX141
P163
SX178
SK161
SK516
SD185
SK146
P160
P159
赤色顔料
0 (1：150) 5m
P165
旧河道川岸
P201
P207
P202
P205
SK208
P204
P206
SD203
暗渠
P340
SK313
P335
P337
P336
P319
P318
P316
P317
P324
P323
P322
P321
P498
P499
SK326
SB732
P46
P45
P125
P124
P29
P28
P704
P706
P705
SB731
SK481
SX487
P601
P647
P489
P646
SD603
P611
P612
SD 608
P613
SZ610
SK482
P643
P614
P642
P717
P615
SD602
P616
P618
P619
SD496
P627
P628


暗渠
SB344
P454
P455
P453
P340
SD311
SK313
SK332
P335
P337
P336
P319
P325
P318
P316
P317
SX405
P324
P408
P417
P415
P416
P420
P424
P421
P414
P423
P413
P409
P419
P422
P323
SX329
P412
P322
SK457
P410
P418
P411
P498
P499
P433
P742
SB732
P743
P432
P434
P428
P437
P438
SK456
P429
P436
P425
P430
P435
P426
P431
P645
P427
P440
P726
SB731
SK481
P443
P442
P441
P191
P444
P601
P647
SD603
P489
P445
P476
P646
SX450
SK741
SD608
SZ610
SK482
P644
P446
P637
P621
P639
P634
P640
P622
P635
SD496
P638
P636
P627
P628
P624
P629
P625
火山灰
SD604
P626
0
(1：150)
5m
-2 -1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
A B C D E F G H


P160
P159
SX143
SX142
P166
P165
P167
P529
暗渠
P618
P616
P619
P617
P628
P630
P629
P620
P633
SD656
P653
SD140
P721
P725
P727
P718
P720
P734
P735
P719
SK164
P694
P728
P730
P687
P683
P729
P689
P686
P658
P688
SD521
P677
P672
SK654
P690
P671
P680
P691
P678
SI144
SD522
P666
P663
P668
P669
P790
P681
SK655
P682
P665
P786
P667
P675
P673
P679
P664
P684
P692
P693
旧河道川岸
SI155
SK660
P752
P751
P515
P676
P697
P786
P528
P695
SB800
P779
P780
SB530
SB540
P763
P759
P764
P769
P771
P775
P765
P762
P776
P774
P783
P767
P772
P766
P777
P773
SK157
P784
P785
P787
P788
0
(1：150)
5m

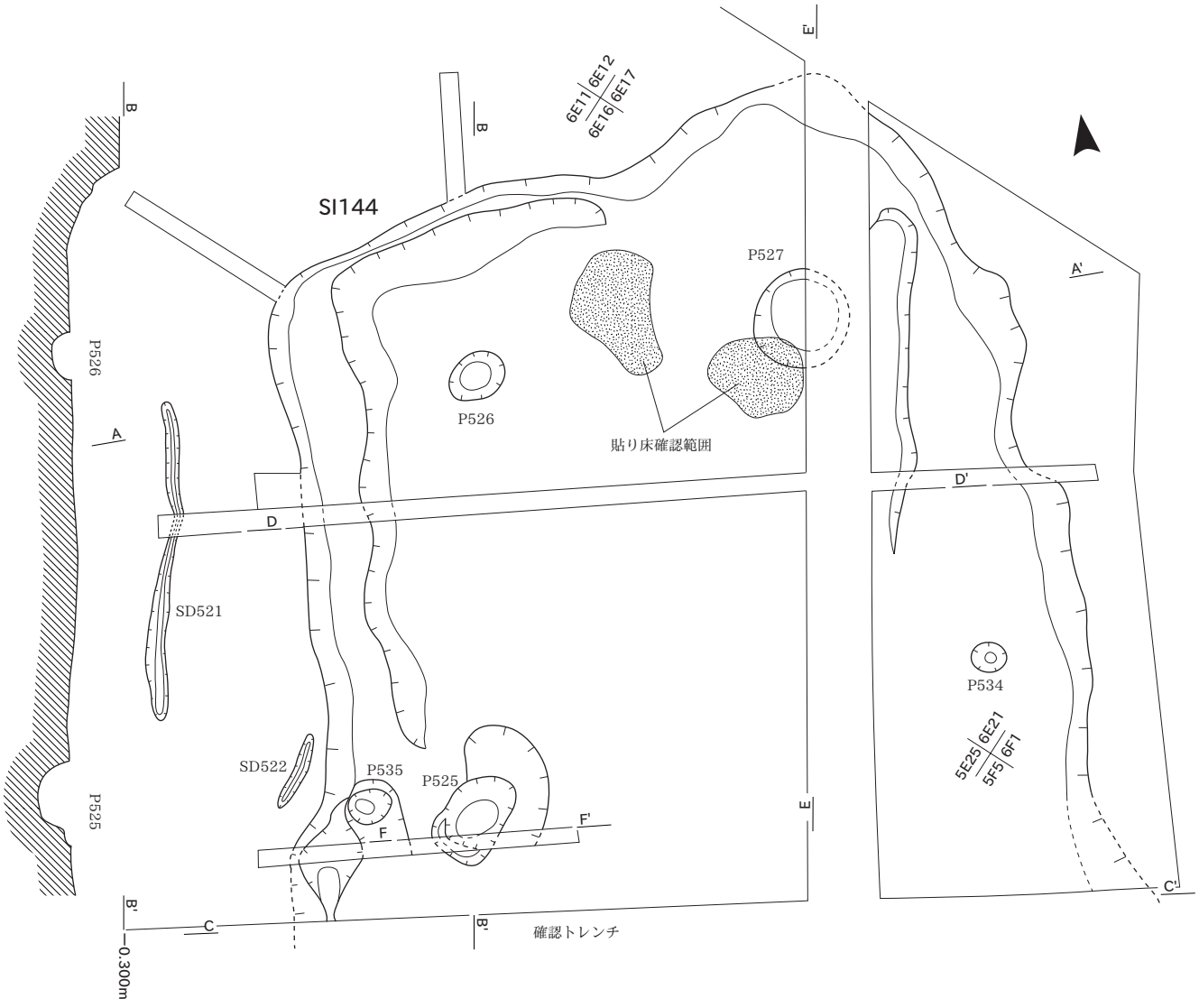


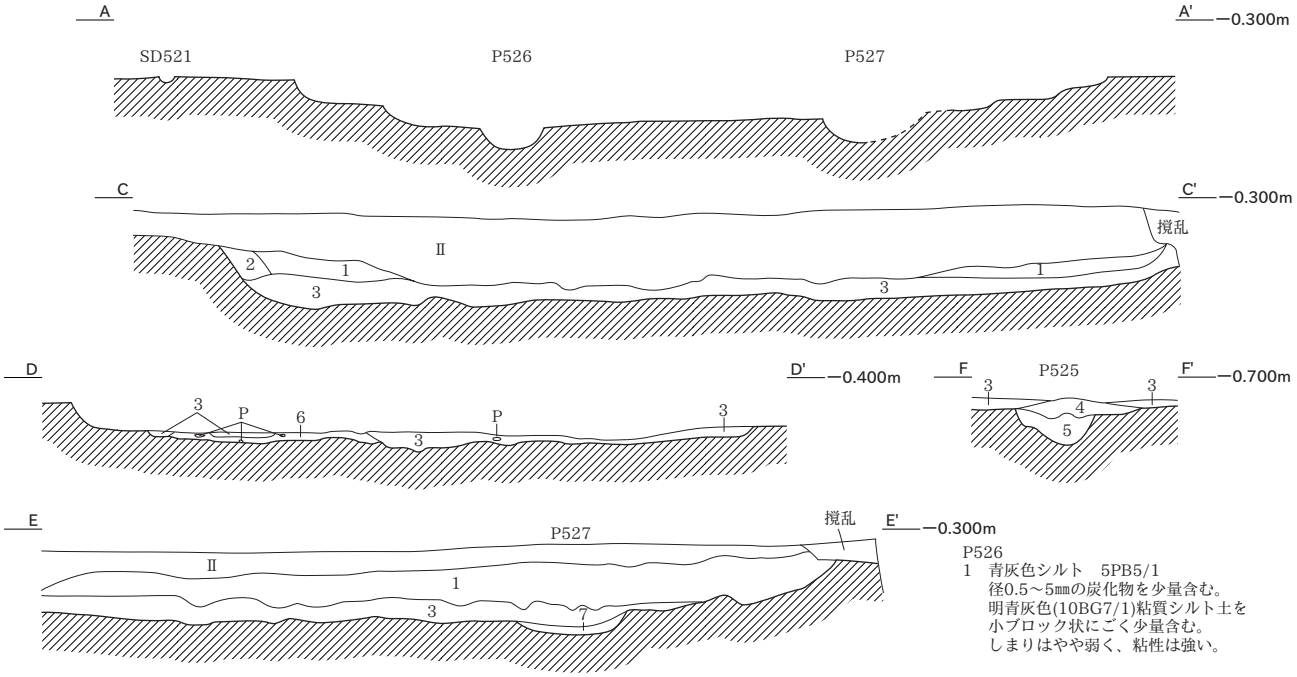
SI155遺物出土状況



SI155
1　明青灰色シルト　5BG7/1
　径0.5～5㎜の炭化物、腐植物を少量含む。
　しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5B5/1
　P509覆土。
　径0.5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　底部から器台出土。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。
3　明緑灰色シルト　10G7/1
　P513覆土。
　径0.5～7㎜の炭化粒を多量に含む。
　腐植物をごく少量含む。
　酸素に触れると緑色系に変色する。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。
4　明緑灰色シルト　10G7/1
　P513覆土。
　径0.5㎜ほどの炭化粒をごく少量含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。

• 平面プラン内側から出土した土器
◦ 確認Tr内から出土した土器

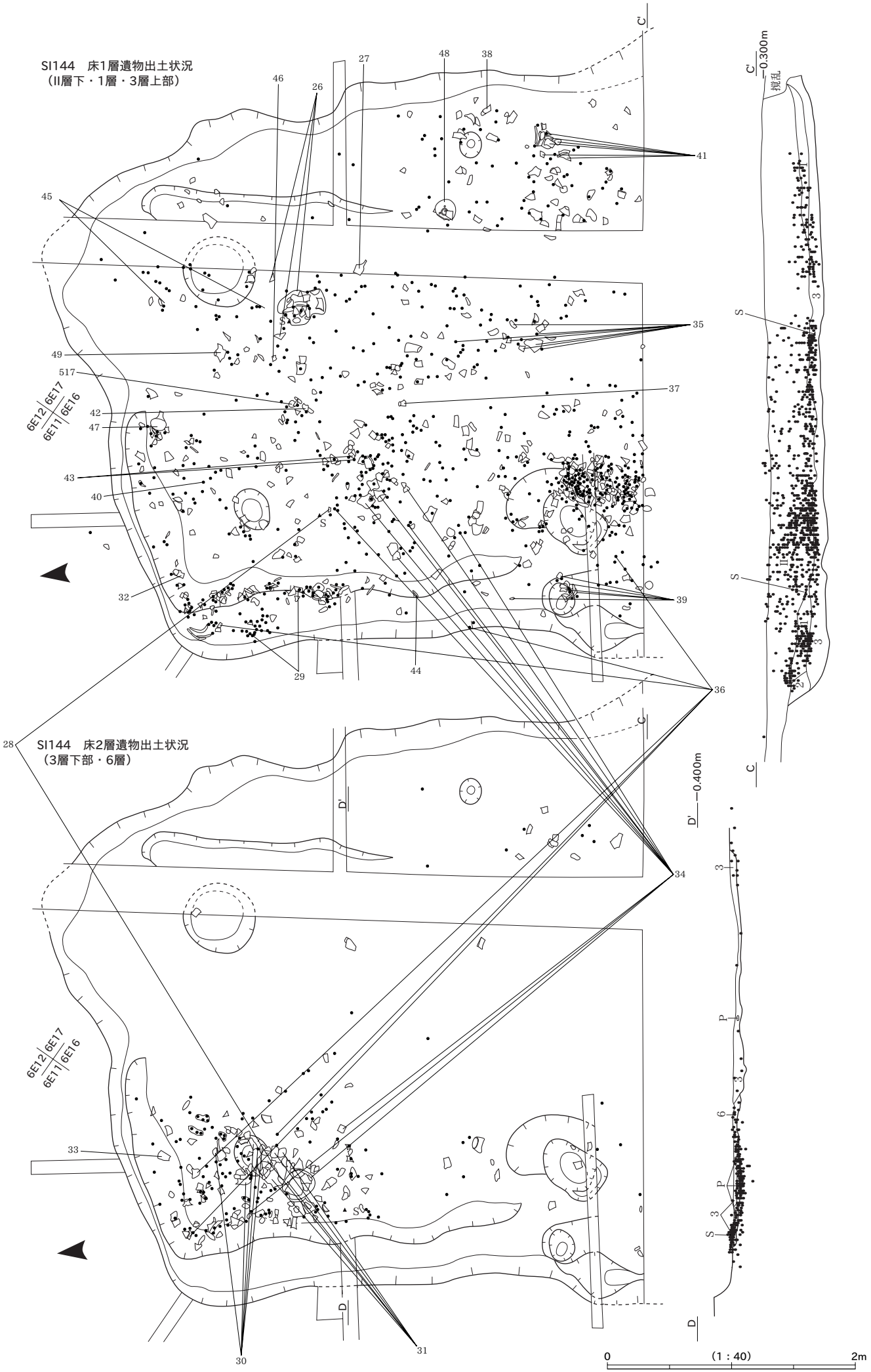


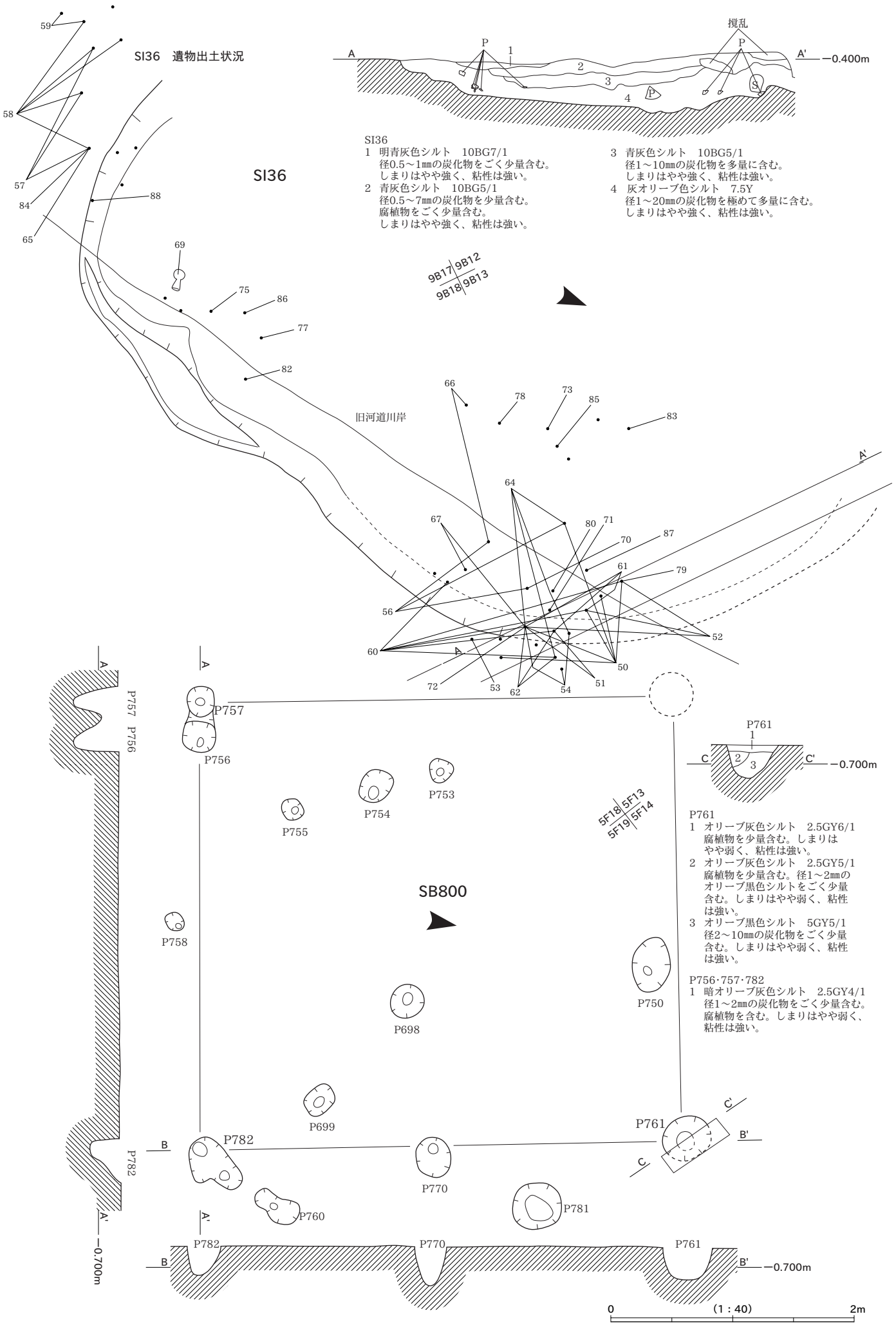


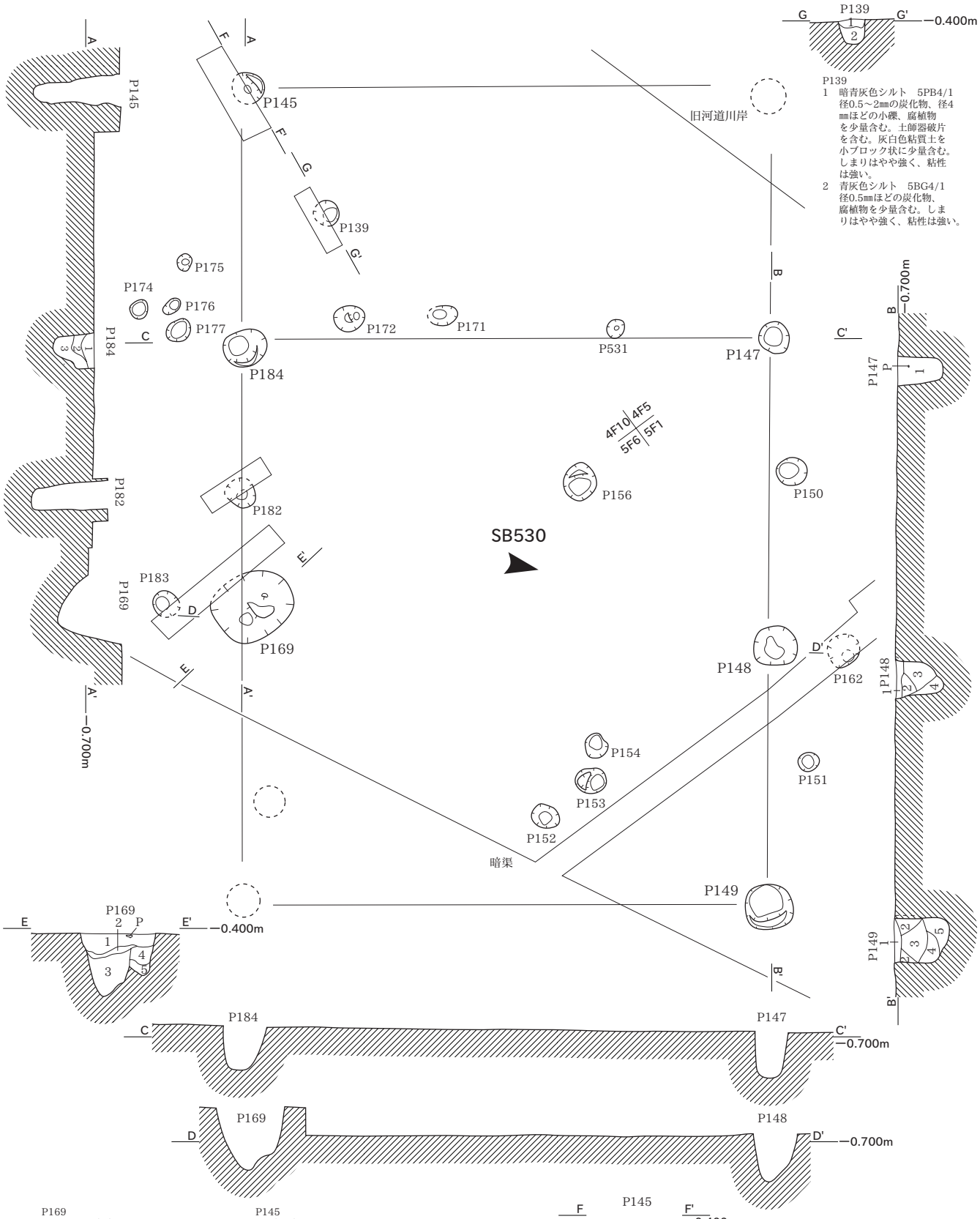
P526
1　青灰色シルト　5PB5/1
径0.5～5㎜の炭化物を少量含む。
明青灰色(10BG7/1)粘質シルト土を
小ブロック状にごく少量含む。
しまりはやや弱く、粘性は強い。

0　(1：40)　2m

SI144・P525
1　青灰色シルト　5B6/1
径0.5～7㎜の炭化物を多量に含む。腐植物をごく少量含む。
しまりはやや弱く、粘性は強い。
2　明青灰色シルト　10BG7/1
径0.5～1㎜の炭化物、腐植物をごく少量含む。
小ブロック状に1層が少量混じり、1層よりシルト質が強い。
しまりはやや強く、粘性は強い。
3　明青灰色シルト　5BG7/1
径0.5～5㎜の炭化物、腐植物をごく少量含む。1層より粘性が弱い。
しまりはやや弱く、粘性は強い。
4　青灰色シルト　10BG5/1
P525覆土。径0.5～8㎜の炭化物を少量含む。淡黄色(5Y8/4)砂質土(Ⅲ層)をブロック状に少量含む。酸化しやすく、オリーブ灰色(5GY6/1)に変色する。
灰色(N8/)粘質土をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は極めて強い。
5　青灰色シルト　10BG5/1
P525覆土。径0.5～2㎜の炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
6　青灰色シルト　5B5/1
径0.5～10㎜の炭化物を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
7　青灰色シルト　10BG6/1
P527覆土。径0.5～2㎜の炭化物を少量含む。
淡黄色砂質土(Ⅲ層)を小ブロック状にごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。


SI144　床1層遺物出土状況
（II層下・1層・3層上部）
SI144　床2層遺物出土状況
（3層下部・6層）
6E12 6E17
6E11 6E16
C'
C
D'
D
0.300m
0.400m
撹乱
0
(1：40)
2m

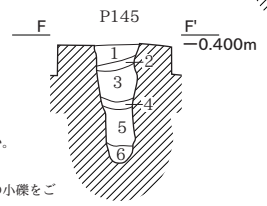

SI36　遺物出土状況
SI36
SI36
1　明青灰色シルト　10BG7/1
径0.5～1㎜の炭化物をごく少量含む。
しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　10BG5/1
径0.5～7㎜の炭化物を少量含む。
腐植物をごく少量含む。
しまりはやや強く、粘性は強い。
3　青灰色シルト　10BG5/1
径1～10㎜の炭化物を多量に含む。
しまりはやや強く、粘性は強い。
4　灰オリーブ色シルト　7.5Y
径1～20㎜の炭化物を極めて多量に含む。
しまりはやや強く、粘性は強い。
撹乱
−0.400m
9B17 9B12
9B18 9B13
旧河道川岸
SB800
5F18 5F13
5F19 5F14
P757
P756
P755
P754
P753
P758
P698
P750
P699
P782
P770
P760
P781
P761
P761
1　オリーブ灰色シルト　2.5GY6/1
腐植物を少量含む。しまりは
やや弱く、粘性は強い。
2　オリーブ灰色シルト　2.5GY5/1
腐植物を少量含む。径1～2㎜の
オリーブ黒色シルトをごく少量
含む。しまりはやや弱く、粘性
は強い。
3　オリーブ黒色シルト　5GY5/1
径2～10㎜の炭化物をごく少量
含む。しまりはやや弱く、粘性
は強い。
−0.700m
P756･757･782
1　暗オリーブ灰色シルト　2.5GY4/1
径1～2㎜の炭化物をごく少量含む。
腐植物を含む。しまりはやや弱く、
粘性は強い。
−0.700m
0　(1：40)　2m



P139
1　暗青灰色シルト　5PB4/1
径0.5～2㎜の炭化物、径4㎜ほどの小礫、腐植物を少量含む。土師器破片を含む。灰白色粘質土を小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5BG4/1
径0.5㎜ほどの炭化物、腐植物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

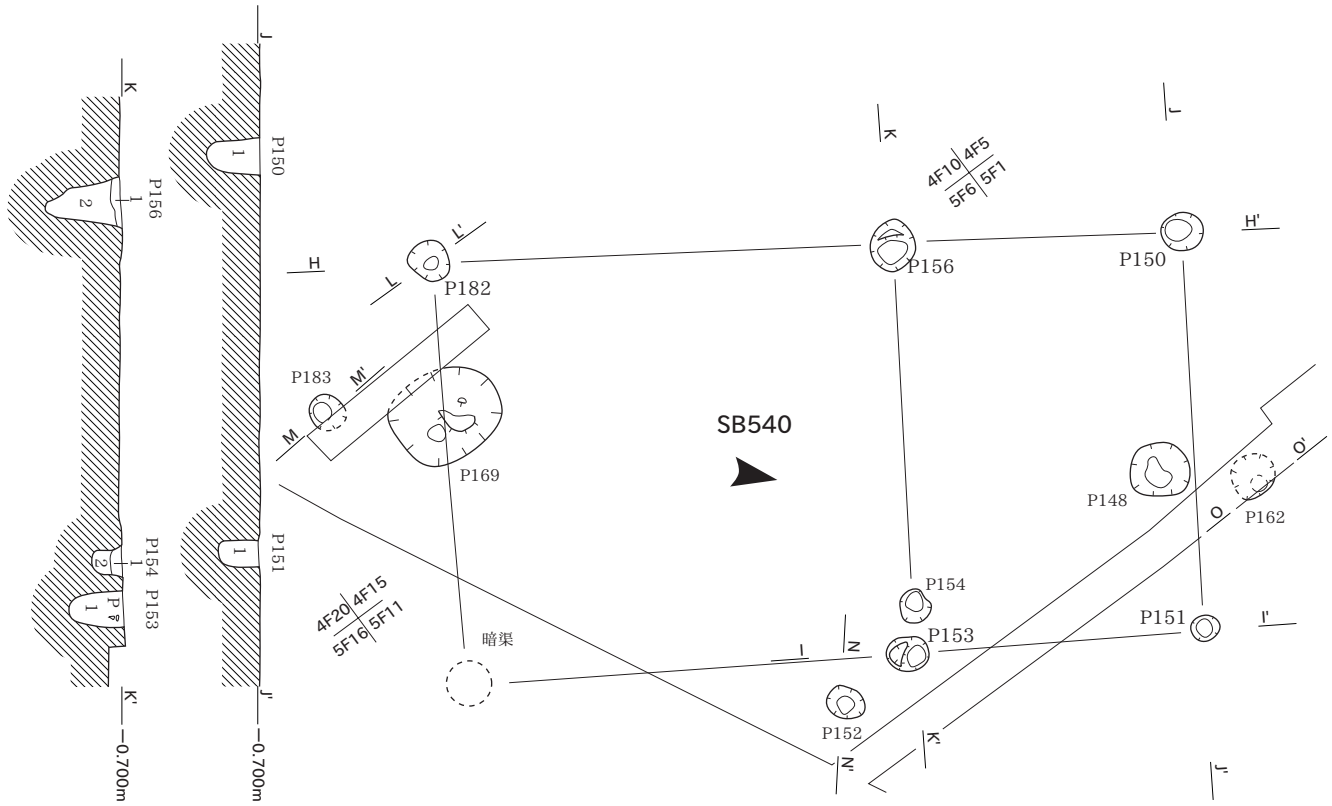
P169
1　にぶい黄橙色シルト　10YR6/3
径0.5～10㎜の炭化物を多量に含む。土器片、腐植物を少量含む。灰白色(2.5Y8/2)シルト質土を小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　10BG5/1
径0.5～15㎜の炭化物を多量に含む。腐植物を少量含む。1層を小ブロック状に少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
3　明緑灰色シルト　10G7/1
径0.5㎜ほどの炭化物を少量含む。2層を小ブロック状に少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。2層よりシルト質がやや強い。
4　緑灰色シルト　10G6/1
炭化物は含まない。腐植物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。5層より粘性がやや強い。
5　明緑灰色シルト　10G7/1
炭化物は含まない。しまりはやや強く、粘性は強い。4層よりシルト質がやや強い。

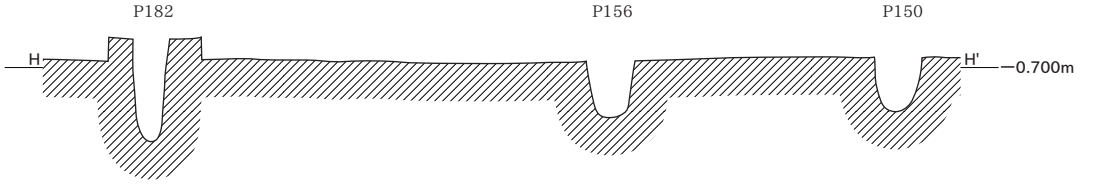
P145
1　青灰色シルト　5PB6/1
径0.5～5㎜の炭化物、腐植物を少量含む。径4㎜ほどの小礫をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　明青灰色シルト　5B7/1
径0.5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。小ブロック状に3層を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
3　青灰色シルト　5PB6/1
径0.5～5㎜の炭化物を少量含む。シルト質土(Ⅲ層)を小ブロック状にごく少量含む。径5㎜ほどの小礫をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
4　明青灰色シルト　5B7/1
径0.5～5㎜の炭化物を多量に含む。5層を小ブロック状に多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。シルト質が5層より強い。
5　明青灰色シルト　5B7/1
径0.5～15㎜の炭化物を少量含む。腐植物をごく少量含む。砂質土(Ⅳ層)を小ブロック状にごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。粘性が4層より強い。
6　明青灰色シルト　5B7/1
腐植物を少量含む。砂質土(Ⅳ層)を小ブロック状に少量含む。ブロック状に暗オリーブ灰色（7.5GY3/1)粘質シルト土をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

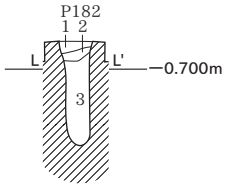


P147･148･149･184
1　青灰色シルト　5BG6/1
径0.5～2㎜の炭化粒、腐植物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5BG6/1
径0.5～10㎜の炭化粒をごく少量含む。砂質土(Ⅲ･Ⅳ層)を小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
3　緑灰色シルト　10G5/1
径0.5～10㎜の炭化物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
4　緑灰色シルト　10G5/1
径0.5～10㎜の炭化物をごく少量含む。3層よりシルト質が強い。しまりはやや強く、粘性は強い。
5　緑灰色シルト　10G5/1
砂質土(Ⅲ・Ⅳ層)を小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

0　(1：40)　2m







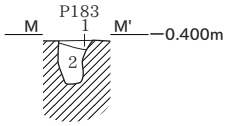
P182
1　灰黄褐色シルト　10YR6/2
　径0.5～5㎜の炭化物を少量含む。灰白色（7.5YR2/2)シルト質土を小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　オリーブ灰色シルト　2.5GY6/1
　径0.5～3㎜の炭化物、腐植物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
3　青灰色シルト　5BG6/1
　径0.5㎜ほどの炭化物、腐植物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
　2層よりややシルト質が強い。

P156
1　青灰色シルト　10BG6/1
　径0.5～10㎜の炭化物、腐植物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5BG5/1
　径0.5～10㎜の炭化物を多量に含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

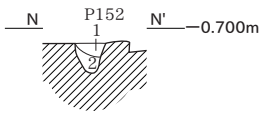
P153
1　青灰色シルト　5BG5/1
　径0.5～5㎜の炭化物をごく少量含む。砂質土(Ⅲ、Ⅳ層)を小ブロック状にごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

P150
1　明青灰色シルト　5BG7/1
　径0.5～4㎜の炭化物をごく少量含む。砂質土(Ⅲ、Ⅳ層)を小ブロック状にごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

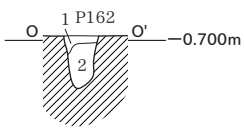
P151
1　青灰色シルト　5BG6/1
　径0.5～1㎜の炭化粒、腐植物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。



P183
1　灰黄色シルト　7.5Y7/2
　径0.5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。小ブロック状に1層をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5PB5/1
　径0.5～10㎜の炭化物を多量に含む。腐植物を少量含む。淡黄色(7.5Y8/3)粘質シルト質土を小ブロック状に多量に含む。底部から土器片出土。しまりはやや強く、粘性は強い。



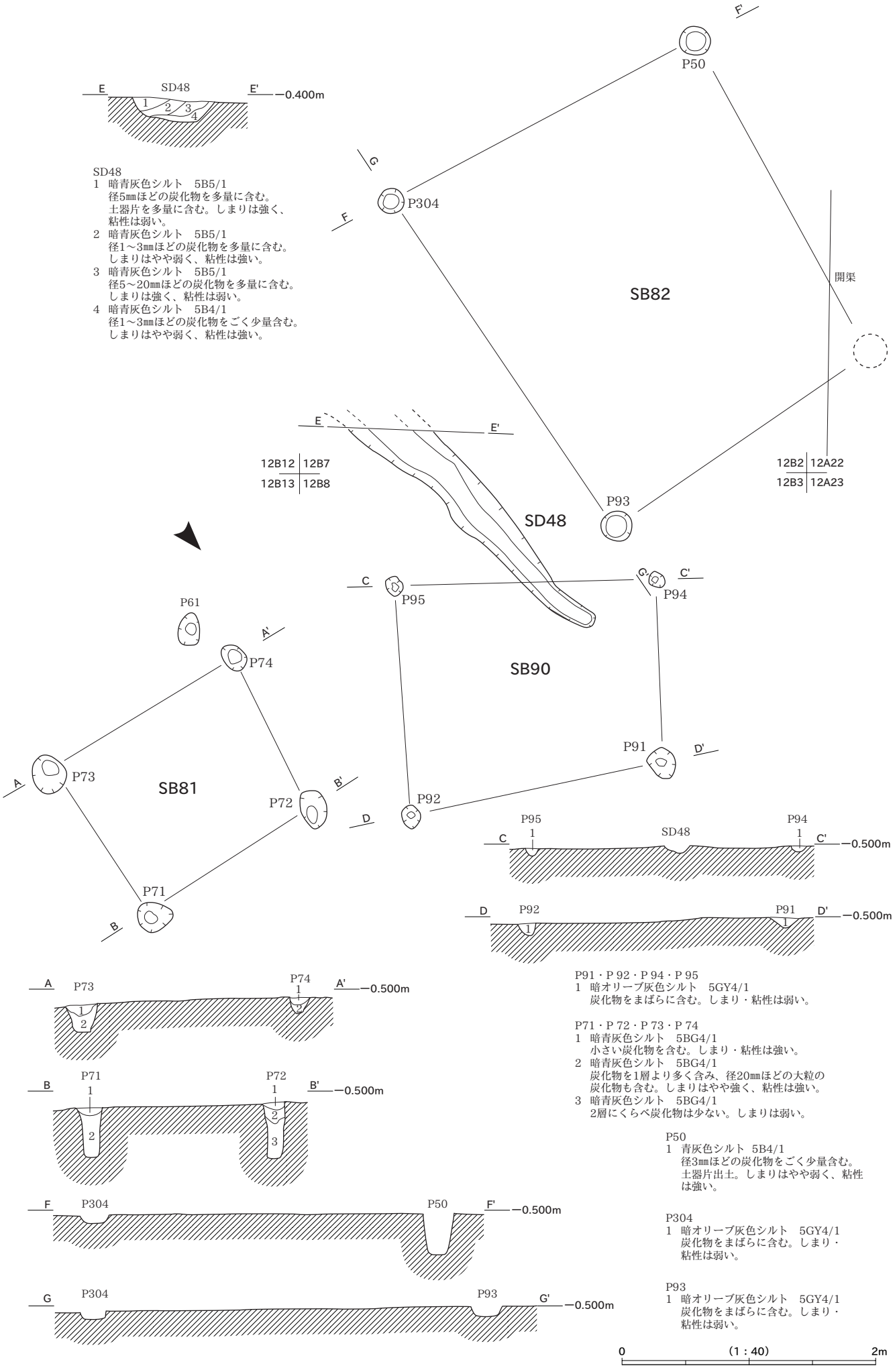
P152
1　青灰色シルト　5BG5/1
　径0.5～5㎜の炭化物、腐植物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5BG5/1
　径0.5～5㎜の炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

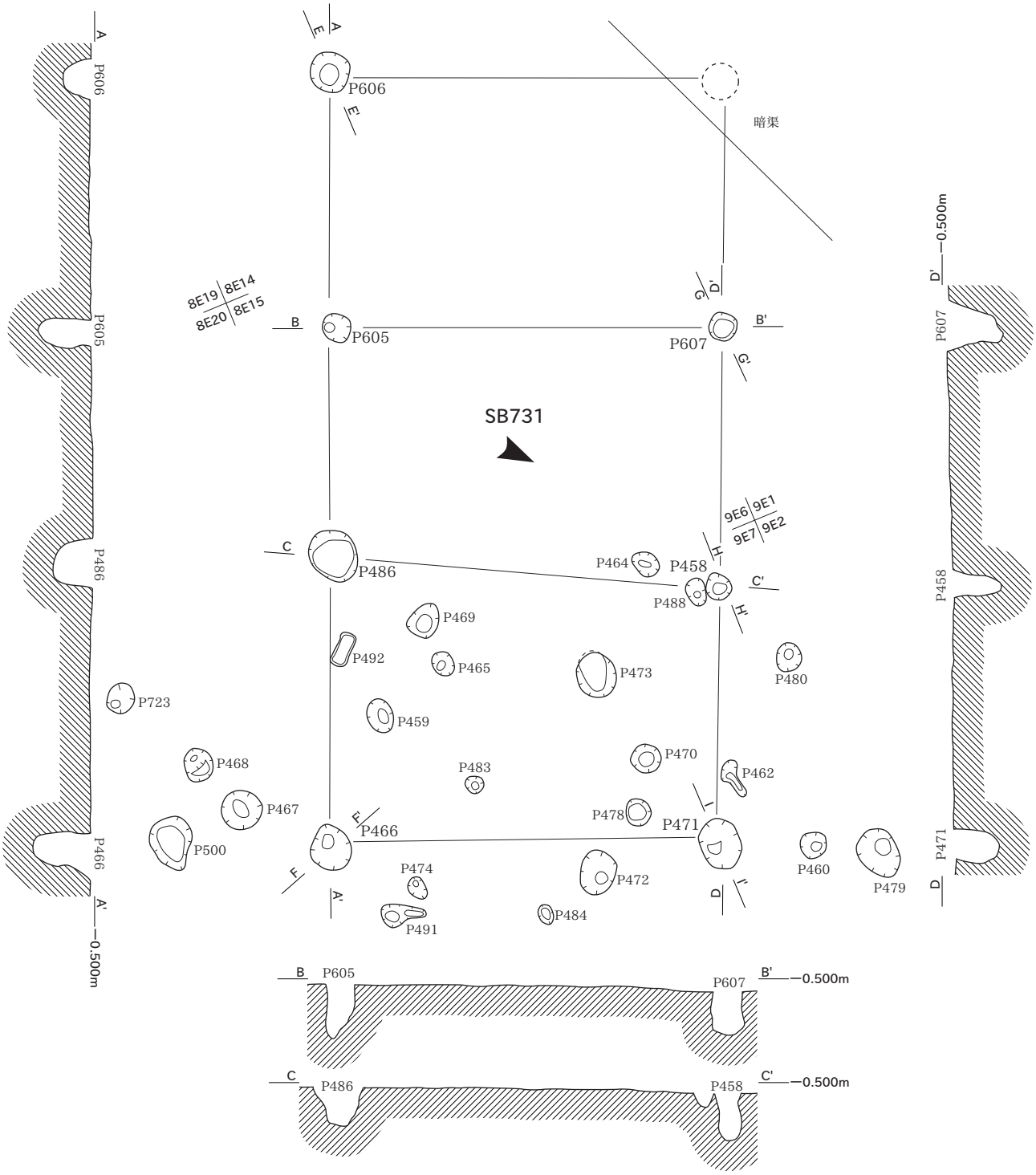


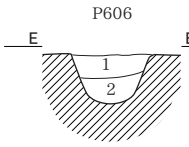
P162
1　明青灰色シルト　10BG7/1
　腐植物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5B5/1
　径0.5㎜ほどの炭化粒をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

P154
1　青灰色シルト　5BG5/1
　径0.5～5㎜の炭化物をごく少量含む。腐植物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5BG5/1
　径0.5～5㎜の炭化物をごく少量含む。シルト質土(Ⅲ層)を小ブロック状にごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

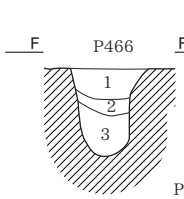
0　(1：40)　2m


SD48
E
E'
−0.400m
1
2
3
4
SD48
1 暗青灰色シルト　5B5/1
径5㎜ほどの炭化物を多量に含む。
土器片を多量に含む。しまりは強く、
粘性は弱い。
2 暗青灰色シルト　5B5/1
径1～3㎜ほどの炭化物を多量に含む。
しまりはやや弱く、粘性は強い。
3 暗青灰色シルト　5B5/1
径5～20㎜ほどの炭化物を多量に含む。
しまりは強く、粘性は弱い。
4 暗青灰色シルト　5B4/1
径1～3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
しまりはやや弱く、粘性は強い。
F
F'
P50
G
P304
SB82
開渠
E
E'
12B12
12B7
12B13
12B8
12B2
12A22
12B3
12A23
P93
SD48
C
P95
G'
C'
P94
SB90
P61
A'
P74
P73
A
SB81
P72
B'
D
P92
P91
D'
P95
1
SD48
P94
1
C
C'
−0.500m
D
P92
1
P91
1
D'
−0.500m
A
P73
P74
1
A'
−0.500m
1
2
2
B
P71
1
P72
1
B'
−0.500m
2
2
3
F
P304
P50
F'
−0.500m
G
P304
P93
G'
−0.500m
P91・P 92・P 94・P 95
1 暗オリーブ灰色シルト　5GY4/1
炭化物をまばらに含む。しまり・粘性は弱い。
P71・P 72・P 73・P 74
1 暗青灰色シルト　5BG4/1
小さい炭化物を含む。しまり・粘性は強い。
2 暗青灰色シルト　5BG4/1
炭化物を1層より多く含み、径20㎜ほどの大粒の
炭化物も含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
3 暗青灰色シルト　5BG4/1
2層にくらべ炭化物は少ない。しまりは弱い。
P50
1 青灰色シルト　5B4/1
径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
土器片出土。しまりはやや弱く、粘性
は強い。
P304
1 暗オリーブ灰色シルト　5GY4/1
炭化物をまばらに含む。しまり・
粘性は弱い。
P93
1 暗オリーブ灰色シルト　5GY4/1
炭化物をまばらに含む。しまり・
粘性は弱い。
0
(1：40)
2m

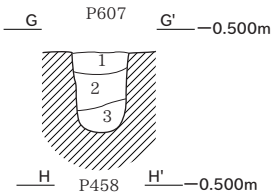


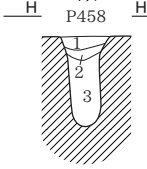


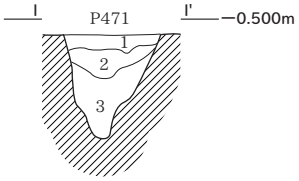
P606
1　青灰色シルト　10BG6/1
　径3～5㎜の炭化物をごく少量含む。
2　青灰色シルト　5BG6/1
　しまりはやや強く、粘性は弱い。
P605
1　P466の1層に同じ
P486
1　P466の1層に同じ



P466
1　青灰色シルト　5BG6/1
　径5～10㎜の炭化物をごく少量含む。
　しまりは強く、粘性は弱い。
2　青灰色シルト　10BG6/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　1層より炭化物は少ない。しまりは
　やや強く、粘性は強い。
3　明青灰色シルト　10BG7/1
　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。





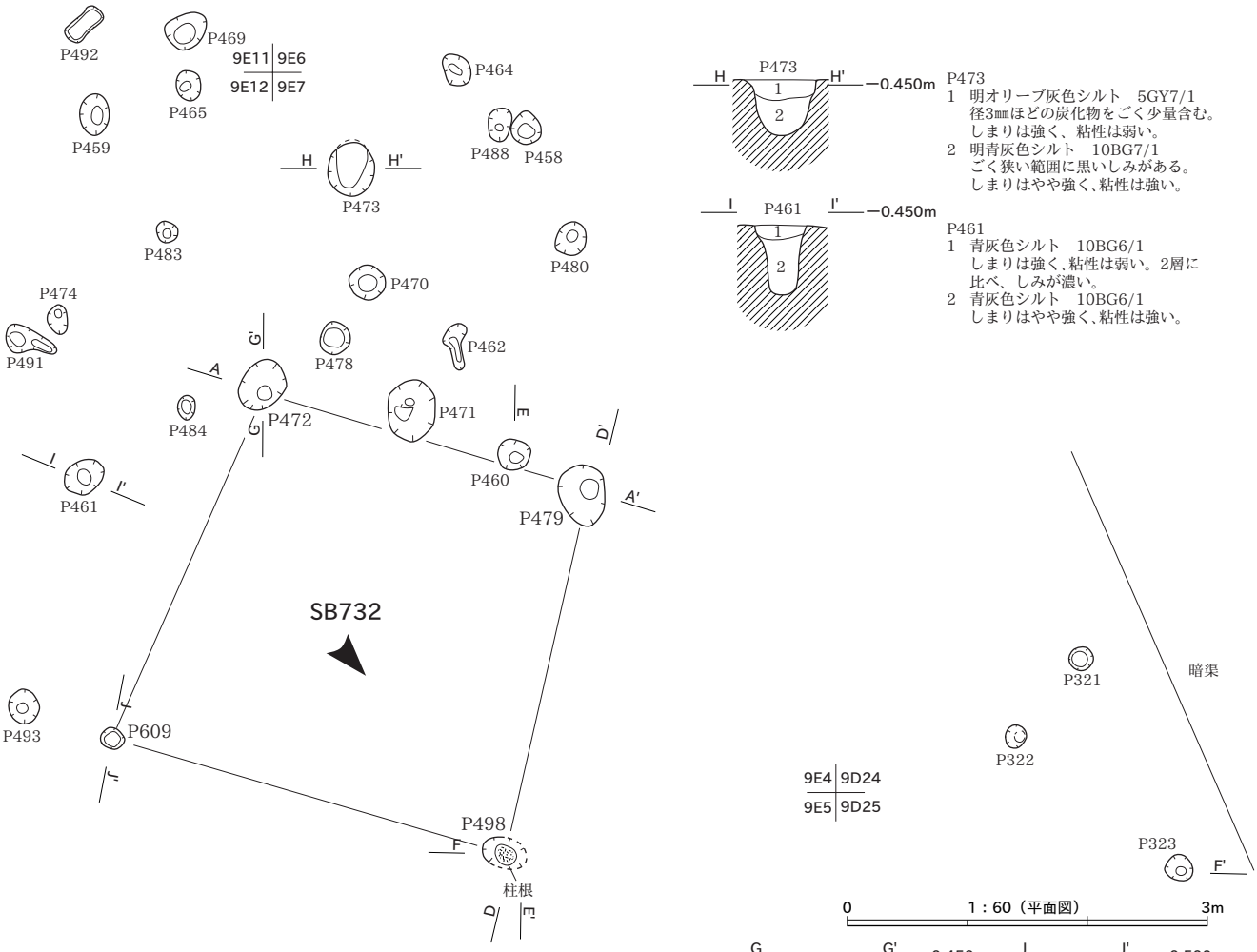


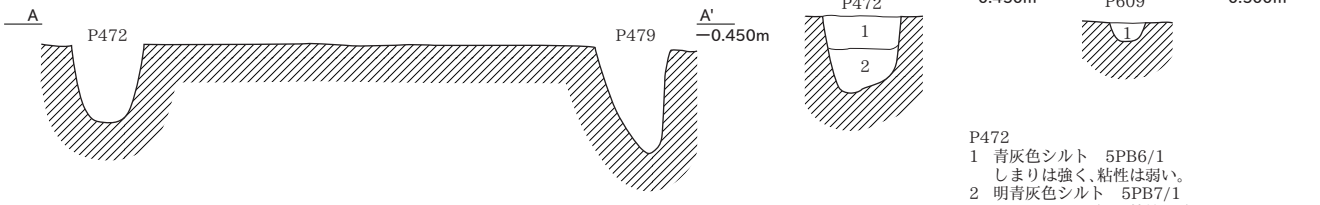
P607
1　明緑灰色シルト　7.5GY7/1
　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しみの
　濃いところあり。
2　青灰色シルト　5PB5/1
　径3～10㎜の炭化物を少量含む。1層に比べ、
　しみが濃い。
3　明青灰色シルト　5B7/1
　しまりはやや強く、粘性は強い。

P458
1　明緑灰色シルト　5G7/1
　しまりは強く、粘性は弱い。
2　明青灰色シルト　5BG7/1
　しまりはやや強く、粘性は強い。
3　明青灰色シルト　10BG7/1
　炭化物をごく少量含む。

P471
1　明青灰色シルト　10BG7/1
　炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、
　粘性は弱い。
2　青灰色シルト　10BG6/1
　1層に比べ、炭化物を多く含む。遺物を含む。
　しまりはやや強く、粘性は弱い。
3　青灰色シルト　10BG6/1
　径10㎜の炭化物を含む。しまり・粘性は強い。

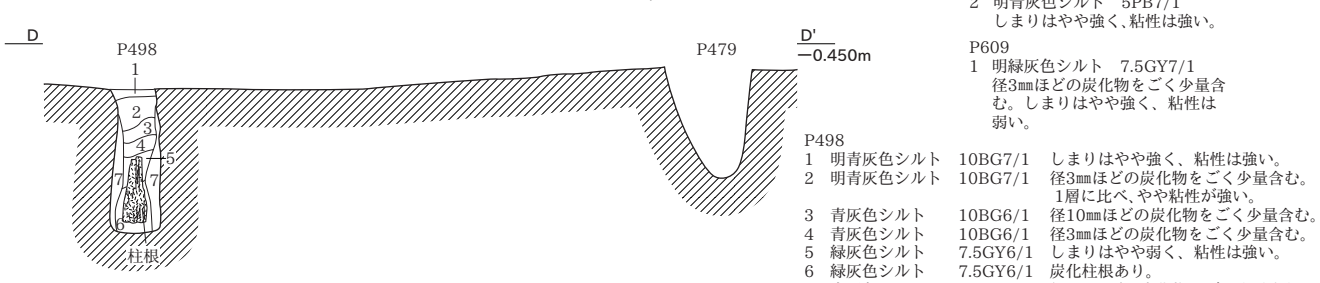
0　1：40（セクション図）　2m





P473
1　明オリーブ灰色シルト　5GY7/1
　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　しまりは強く、粘性は弱い。
2　明青灰色シルト　10BG7/1
　ごく狭い範囲に黒いしみがある。
　しまりはやや強く、粘性は強い。

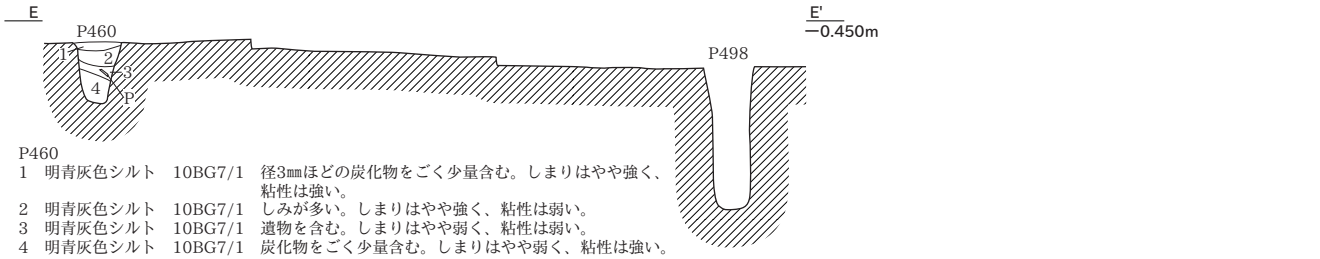
P461
1　青灰色シルト　10BG6/1
　しまりは強く、粘性は弱い。2層に
　比べ、しみが濃い。
2　青灰色シルト　10BG6/1
　しまりはやや強く、粘性は強い。



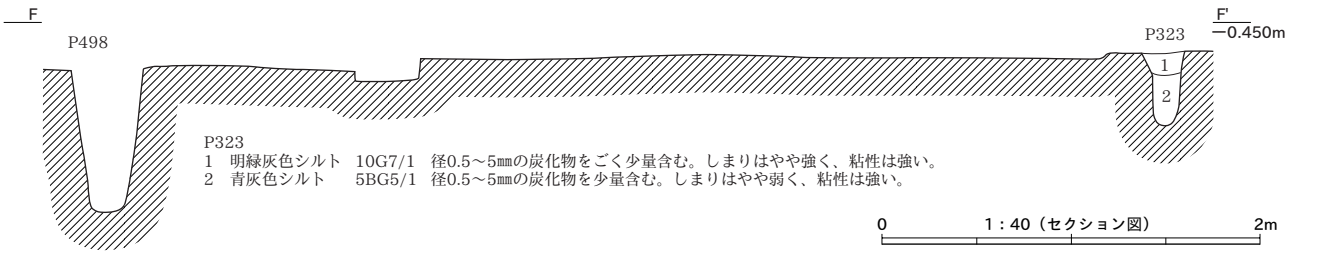
P472
1　青灰色シルト　5PB6/1
　しまりは強く、粘性は弱い。
2　明青灰色シルト　5PB7/1
　しまりはやや強く、粘性は強い。

P609
1　明緑灰色シルト　7.5GY7/1
　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含
　む。しまりはやや強く、粘性は
　弱い。

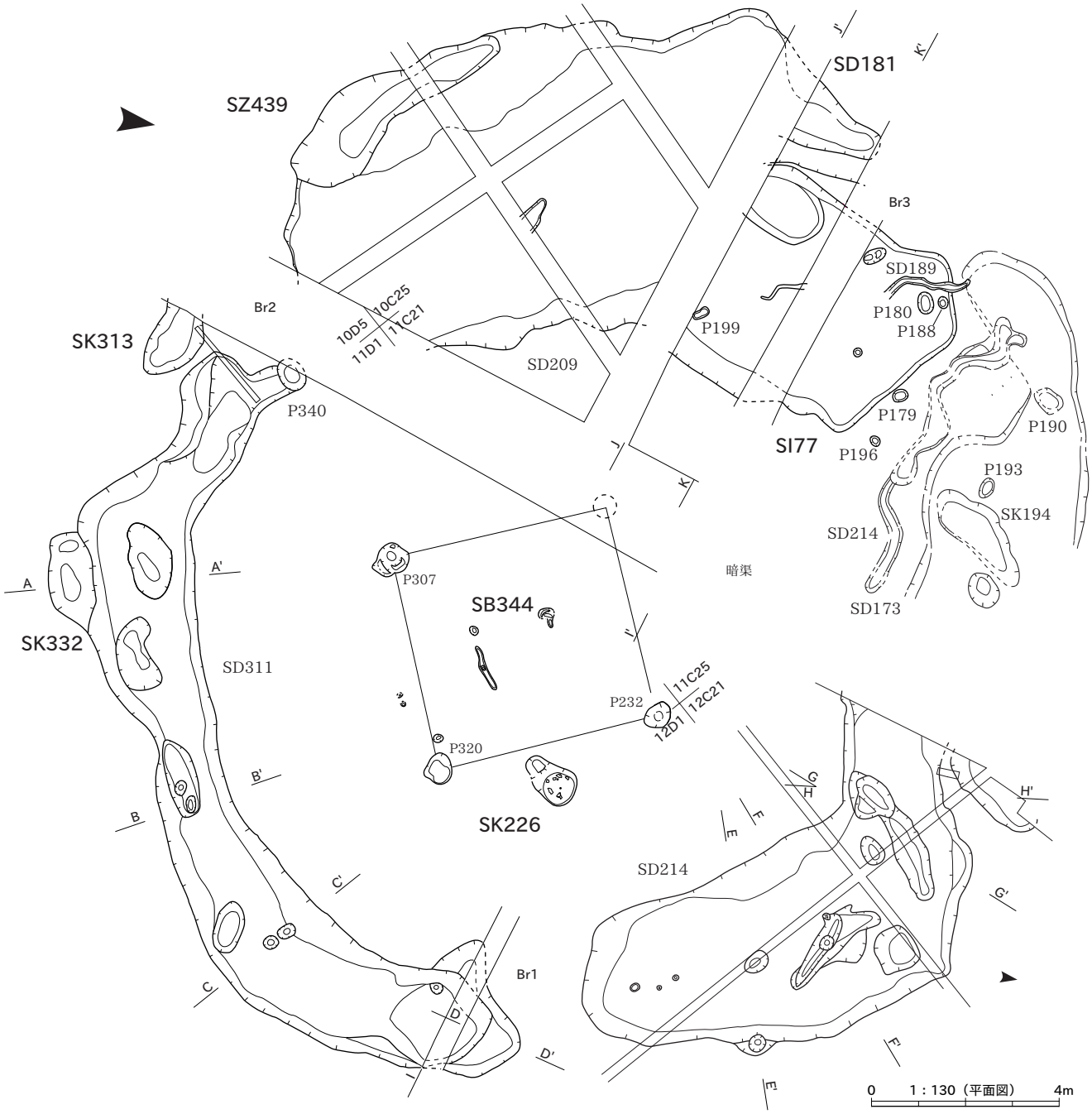
P498
1　明青灰色シルト　10BG7/1　しまりはやや強く、粘性は強い。
2　明青灰色シルト　10BG7/1　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　1層に比べ、やや粘性が強い。
3　青灰色シルト　10BG6/1　径10㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
4　青灰色シルト　10BG6/1　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
5　緑灰色シルト　7.5GY6/1　しまりはやや弱く、粘性は強い。
6　緑灰色シルト　7.5GY6/1　炭化柱根あり。
7　青灰色シルト　5BG5/1　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。

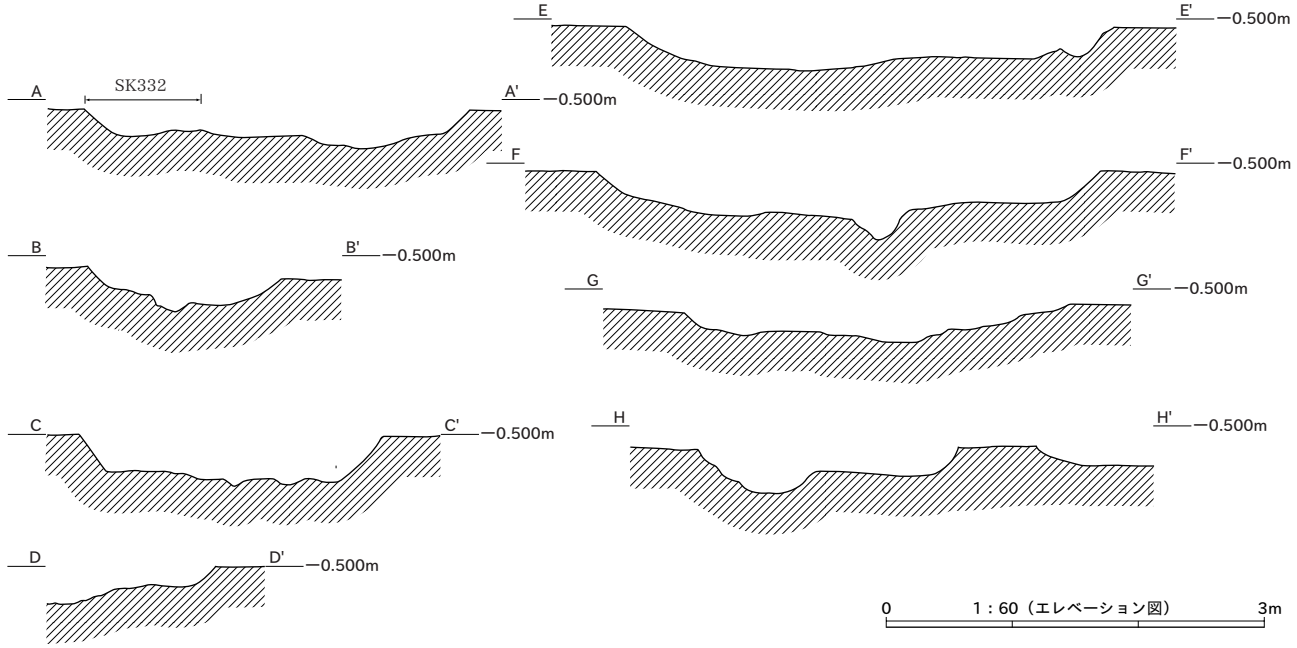


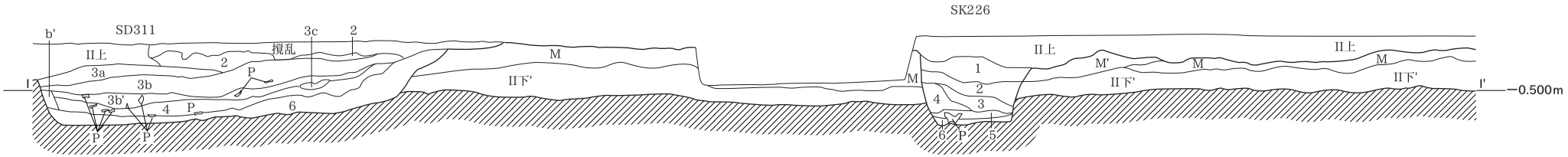
P460
1　明青灰色シルト　10BG7/1　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、
　粘性は強い。
2　明青灰色シルト　10BG7/1　しみが多い。しまりはやや強く、粘性は弱い。
3　明青灰色シルト　10BG7/1　遺物を含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
4　明青灰色シルト　10BG7/1　炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

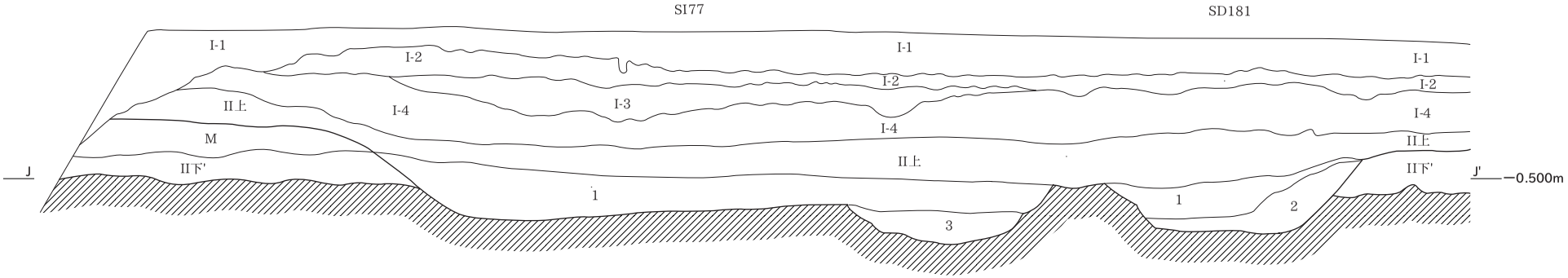


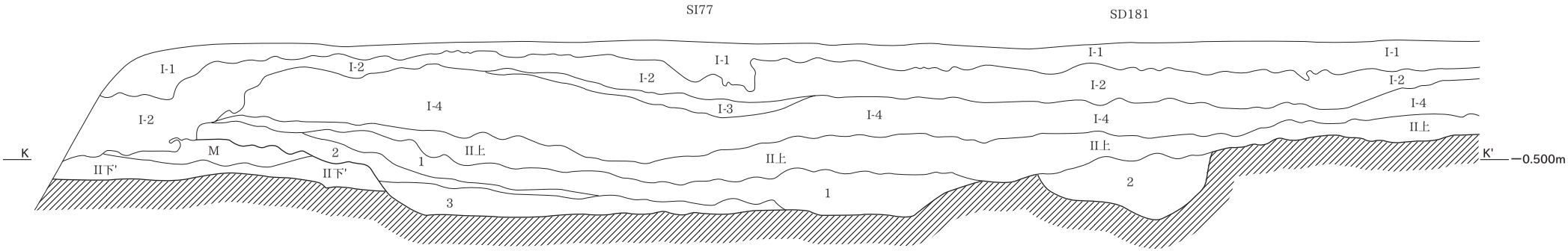
P323
1　明緑灰色シルト　10G7/1　径0.5～5㎜の炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5BG5/1　径0.5～5㎜の炭化物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。


SZ439
SD181
Br3
SD189
P180
P188
P199
Br2
10D5
10C25
11D1
11C21
SK313
SD209
P340
P179
P190
SI77
P196
P193
SK194
SD214
SD173
暗渠
P307
SB344
SK332
SD311
P232
11C25
12D1
12C21
P320
SK226
SD214
Br1
0　1：130（平面図）　4m


E
E'
−0.500m
A
SK332
A'
−0.500m
F
F'
−0.500m
B
B'
−0.500m
G
G'
−0.500m
C
C'
−0.500m
H
H'
−0.500m
D
D'
−0.500m
0　1：60（エレベーション図）　3m







Ⅰ-1　水田床土
Ⅰ-2　オリーブ灰色シルト　2.5GY5/1
小斑点状の鉄分の沈着がみられる。遺物を含まない。しまりはやや強く、粘性は強い。
Ⅰ-3　明オリーブ灰色シルト　2.5GY7/1
砂質が少なく、かたくしまる。しまりはやや強く、粘性は強い。
Ⅰ-4　オリーブ灰色シルト　2.5GY7/1
鉄分の沈着が多く、全体的に赤味を帯びる。しまりはやや強く、粘性は強い。
Ⅱ上　灰色シルト　5Y5/1
径5mmほどの炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。
Ⅱ下'　灰色シルト　5Y5/1
径1～5mmほどの炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。

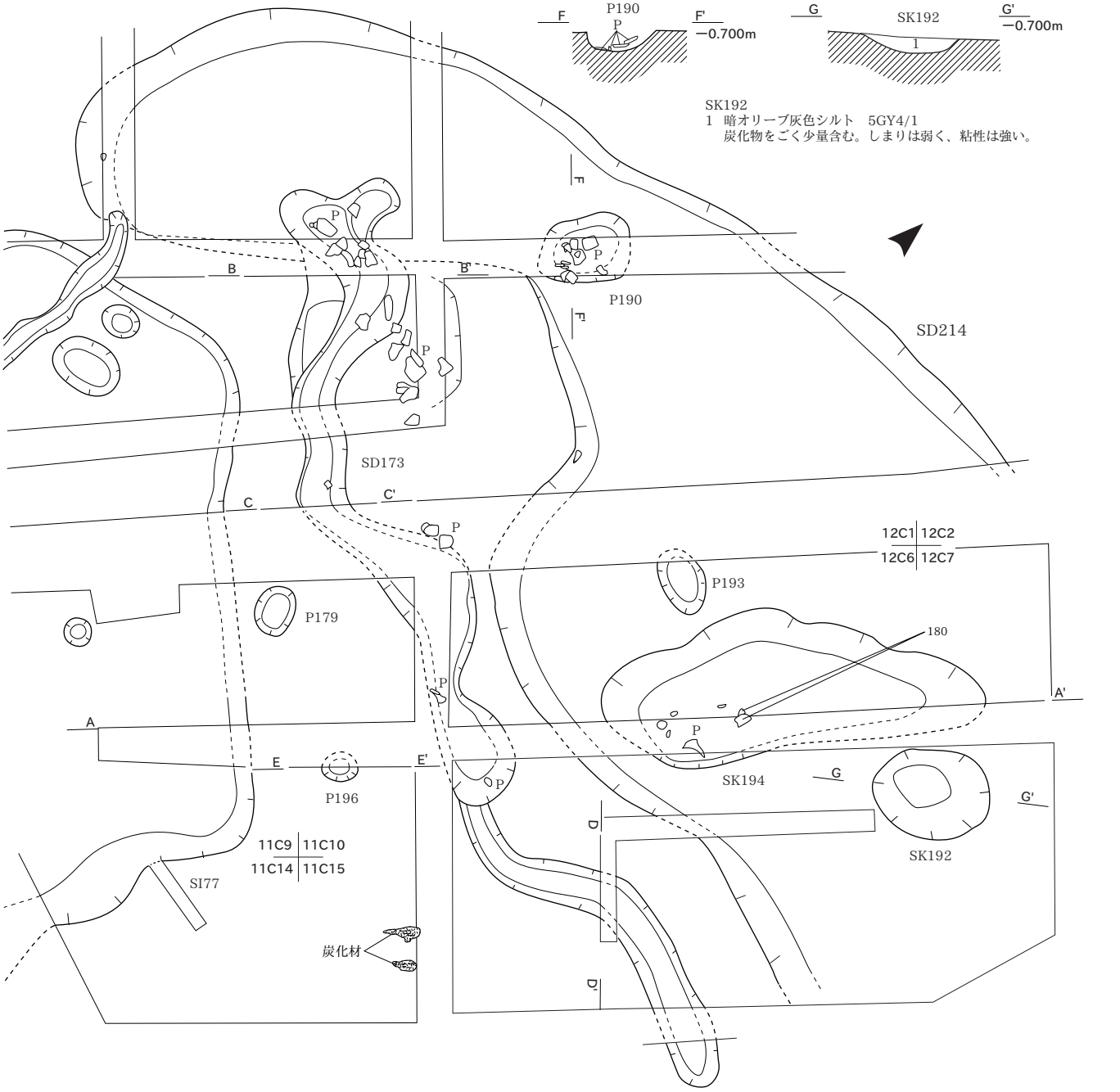
SI77
1　緑灰色シルト　10GY6/1
径5～15mmの炭化物を多量に含む。火山灰を斑点状に多く含む。しまりはやや強く、粘性は極めて強い。
2　緑灰色シルト　10GY6/1
火山灰のブロックを少量含む。しまりはやや強く、粘性は極めて強い。
3　オリーブ黒色シルト　5Y3/2
径5mmほどの炭化物を極めて多量に含む。しまりは弱く、粘性は弱い。

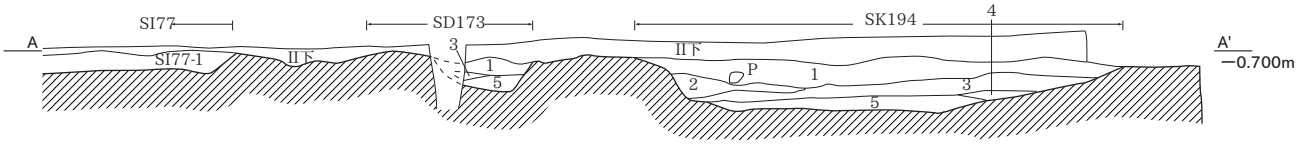
SD181
1　オリーブ灰色シルト　10Y4/2
径2mm以下の炭化粒、径5mm以上の炭化物を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
2　オリーブ灰色シルト　10Y4/2
径2mm以下の炭化粒、径5mm以上の炭化物を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

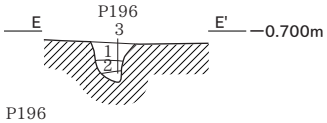
M　灰オリーブ色シルト　5Y5/2
黄褐色（2.5Y5/4)のしまりの強い粘質シルトを部分的に含む。径1mm以下の白色粒子を多量に含む。SZ439の溝の内側のみに存在することから、盛土の可能性がある。しまりはやや強く、粘性は強い。

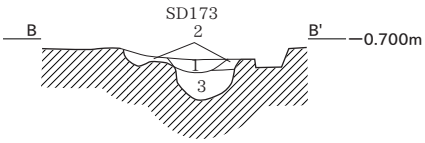
M'　灰色シルト　7.5Y5/1
径1mmほどの炭化物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

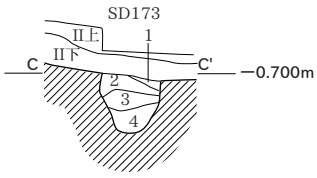
0　(1：40)　2m

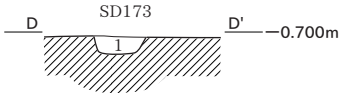




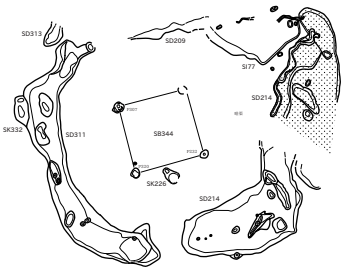








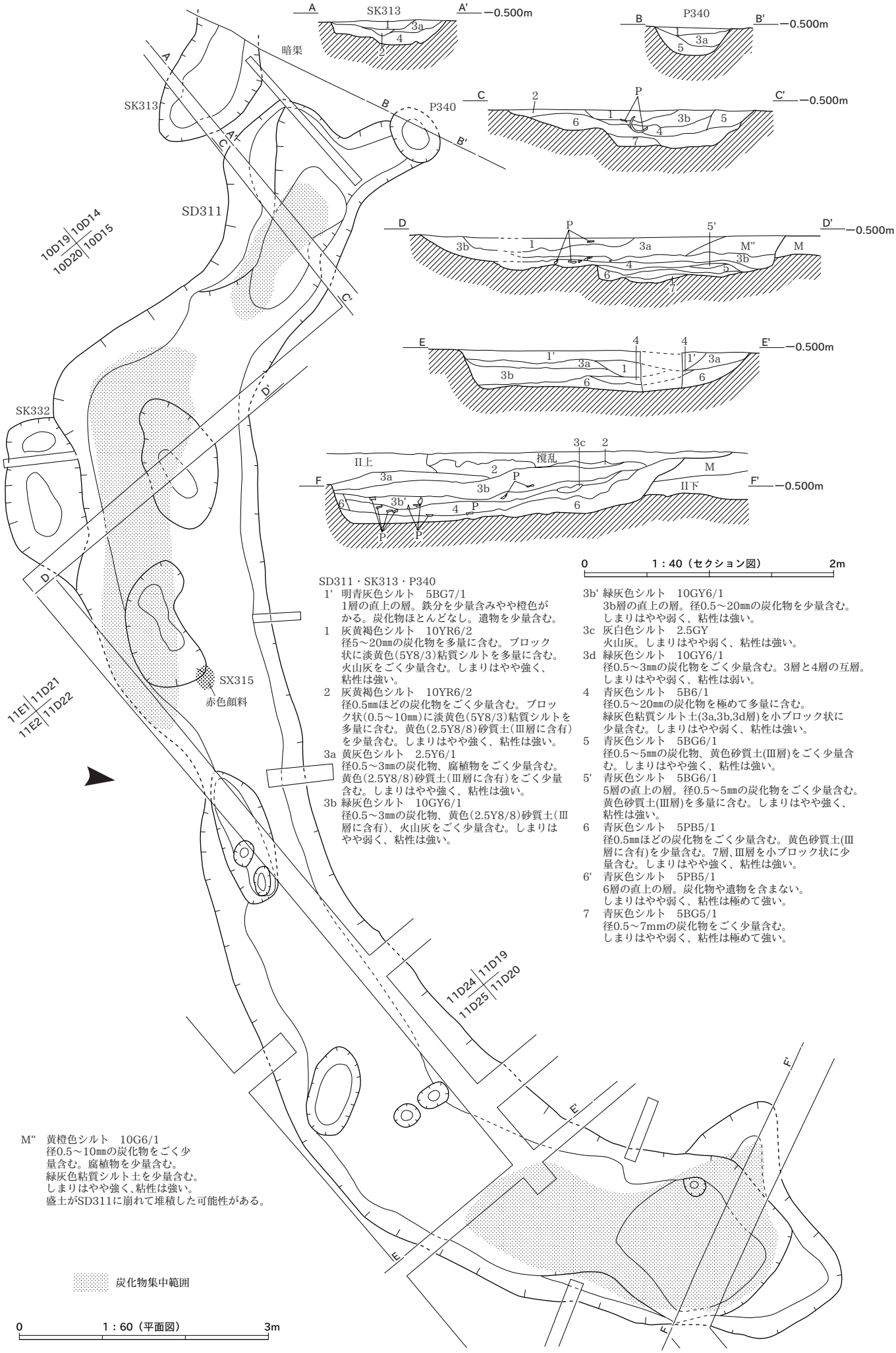
P196
1　灰黄色シルト　2.5Y7/2
炭化物をごく少量含む。しまりは弱く、粘性は強い。
2　浅黄色シルト　2.5Y7/3
径20㎜ほどの炭化物を含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
3　オリーブ灰色シルト　2.5GY6/1
径1㎜ほどの炭化物をまばらに含む。しまりは弱く、粘性は強い。



SD173
1　にぶい橙色シルト　7.5YR7/3
径2～10㎜の炭化物を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
2　にぶい褐色シルト　7.5YR6/3
砂質のⅢ層を切っている。しまりは弱く、粘性は強い。
3　オリーブ灰色シルト　5GY5/1
しまり・粘性は弱い。
4　灰色シルト　7.5Y5/1
粘質シルトが部分的に存在し、3層より粘性が強い。しまりは弱く、粘性は強い。

SK194
1　灰黄色シルト　2.5Y6/2
径5～10㎜の炭化物を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。SD214の覆土。
2　灰オリーブ色シルト　5Y6/2
混入物がほとんどない純粋なシルト。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
3　灰オリーブ色シルト　5Y6/2
径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
4　灰色砂質シルト　5Y6/1
浅黄色の細砂がブロック状に混入している。しまりはやや弱く、粘性はない。
5　灰色シルト　10Y4/1
土坑の最下層で、土器を多く含む。しまりはやや弱く、粘性は極めて強い。

0　（1：40）　2m



SD311・SK313・P340

1' 明青灰色シルト　5BG7/1
1層の直上の層。鉄分を少量含みやや橙色がかる。炭化物ほとんどなし。遺物を少量含む。

1 灰黄褐色シルト　10YR6/2
径5～20㎜の炭化物を多量に含む。ブロック状に淡黄色(5Y8/3)粘質シルトを多量に含む。火山灰をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

2 灰黄褐色シルト　10YR6/2
径0.5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。ブロック状(0.5～10㎜)に淡黄色(5Y8/3)粘質シルトを多量に含む。黄色(2.5Y8/8)砂質土(Ⅲ層に含有)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

3a 黄灰色シルト　2.5Y6/1
径0.5～3㎜の炭化物、腐植物をごく少量含む。黄色(2.5Y8/8)砂質土(Ⅲ層に含有)をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

3b 緑灰色シルト　10GY6/1
径0.5～3㎜の炭化物、黄色(2.5Y8/8)砂質土(Ⅲ層に含有)、火山灰をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

3b' 緑灰色シルト　10GY6/1
3b層の直上の層。径0.5～20㎜の炭化物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

3c 灰白色シルト　2.5GY
火山灰。しまりはやや弱く、粘性は強い。

3d 緑灰色シルト　10GY6/1
径0.5～3㎜の炭化物をごく少量含む。3層と4層の互層。しまりはやや弱く、粘性は弱い。

4 青灰色シルト　5B6/1
径0.5～20㎜の炭化物を極めて多量に含む。緑灰色粘質シルト土(3a,3b,3d層)を小ブロック状に少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。

5 青灰色シルト　5BG6/1
径0.5～5㎜の炭化物、黄色砂質土(Ⅲ層)をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

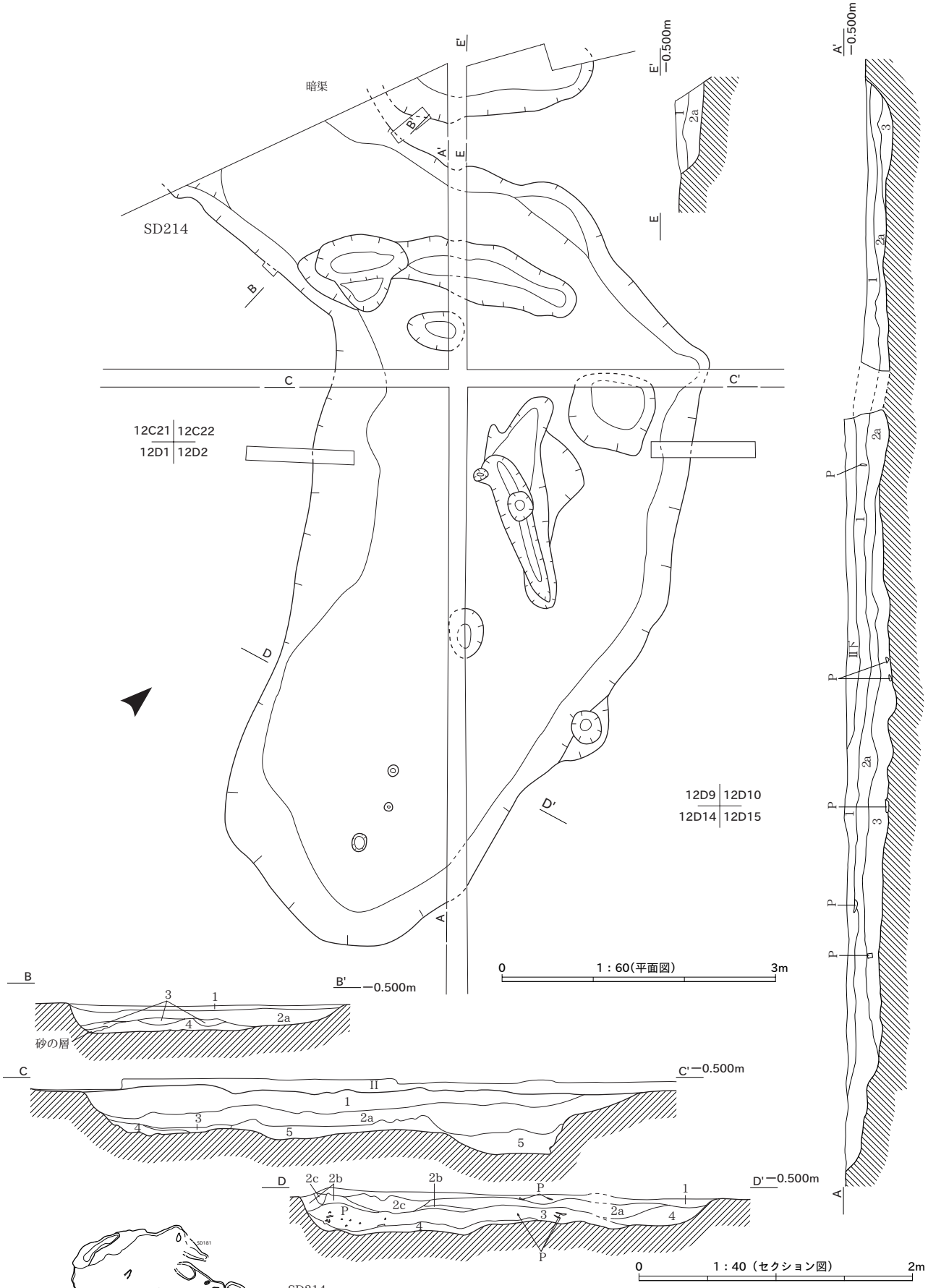
5' 青灰色シルト　5BG6/1
5層の直上の層。径0.5～5㎜の炭化物をごく少量含む。黄色砂質土(Ⅲ層)を多量に含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

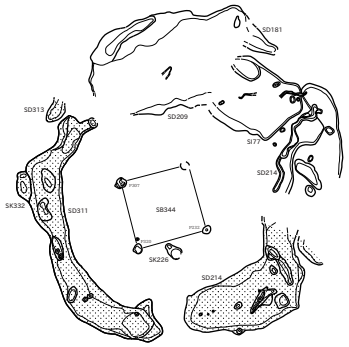
6 青灰色シルト　5PB5/1
径0.5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。黄色砂質土(Ⅲ層に含有)を少量含む。7層、Ⅲ層を小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

6' 青灰色シルト　5PB5/1
6層の直上の層。炭化物や遺物を含まない。しまりはやや弱く、粘性は極めて強い。

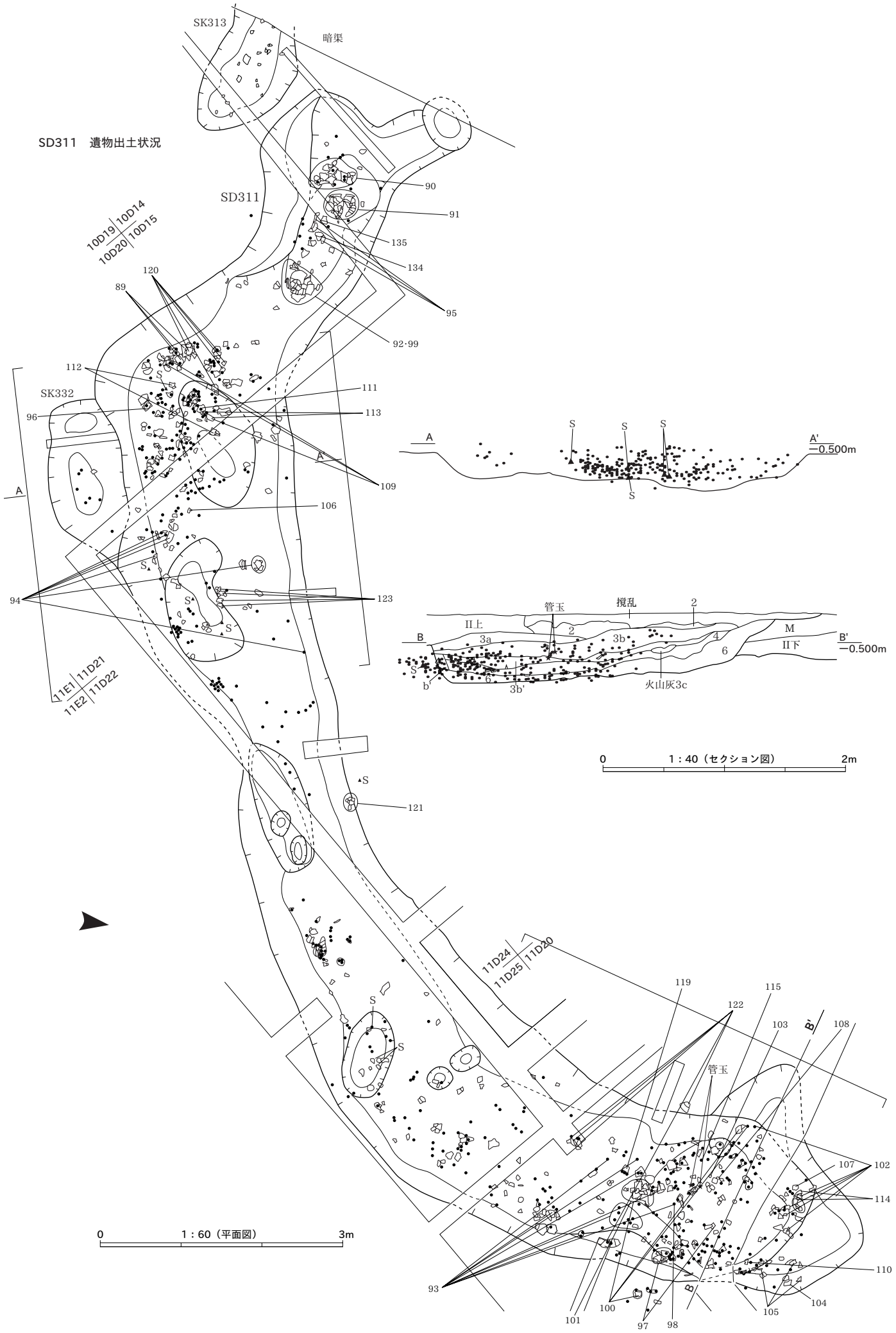
7 青灰色シルト　5BG5/1
径0.5～7mmの炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は極めて強い。

M" 黄橙色シルト　10G6/1
径0.5～10㎜の炭化物をごく少量含む。腐植物を少量含む。緑灰色粘質シルト土を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。盛土がSD311に崩れて堆積した可能性がある。

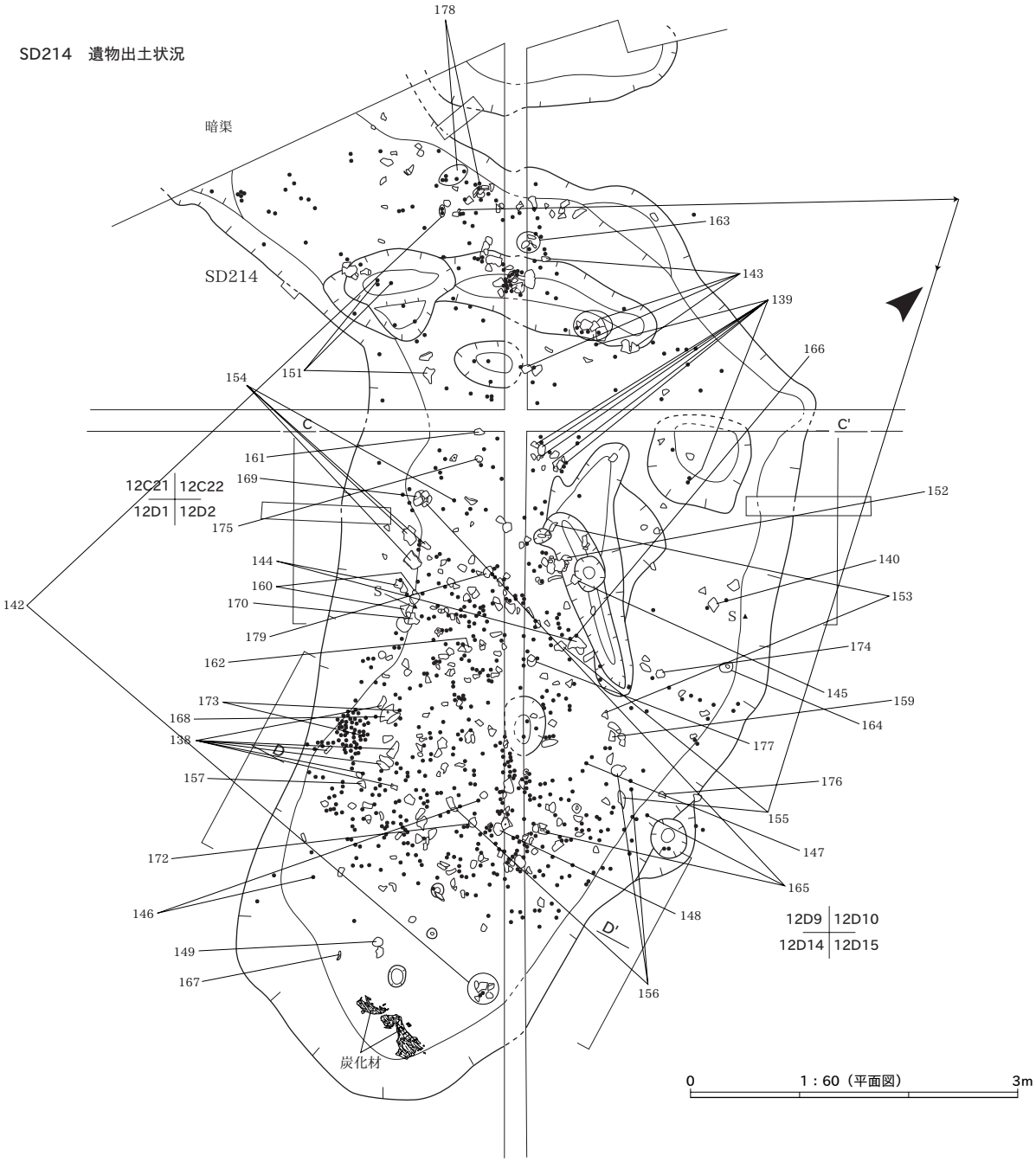


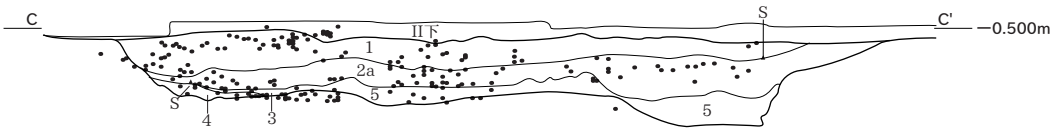


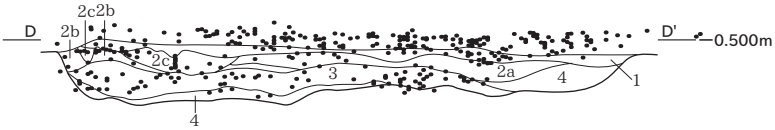
SD214
1　黄灰色シルト　2.5Y5/1
　径1～3mmの炭化物をごく少量含む。土器片を少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。
2a 黄灰色シルト　2.5Y5/1
　径3～10mmの炭化物を少量含む。火山灰をところどころに含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
2b 黄灰色シルト　2.5Y5/1
　径3mmほどの炭化物を3a層より多く含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
2c 黄灰色シルト　2.5Y5/1
　径3～10mmの炭化物を少量含む。黄色砂質土を大量に含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
3　暗緑灰色シルト　10G4/1
　径2～10mmの炭化物、土器片を多量に含む。火山灰がところどころにブロック状にまとまって堆積している。
　しまりは弱く、粘性は強い。
4　青灰色シルト　5PB5/1
　炭化物をほとんど含まず、火山灰を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
5　青灰色シルト　5PB5/1
　径1～3mmの炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。


SK313
暗渠
SD311　遺物出土状況
SD311
10D19 10D14
10D20 10D15
90
91
135
134
95
92·99
120
89
112
111
113
SK332
96
109
106
94
123
11E1 11D21
11E2 11D22
121
11D24
11D25 11D20
119
115
122
103
108
管玉
107
102
114
110
93
101
100
97
98
105
104
A
A'
0.500m
管玉
撹乱
2
II上
3a
3b
4
6
M
II下
B
B'
b'
3b'
火山灰3c
0
1：40（セクション図）
2m
0
1：60（平面図）
3m

SD214　遺物出土状況

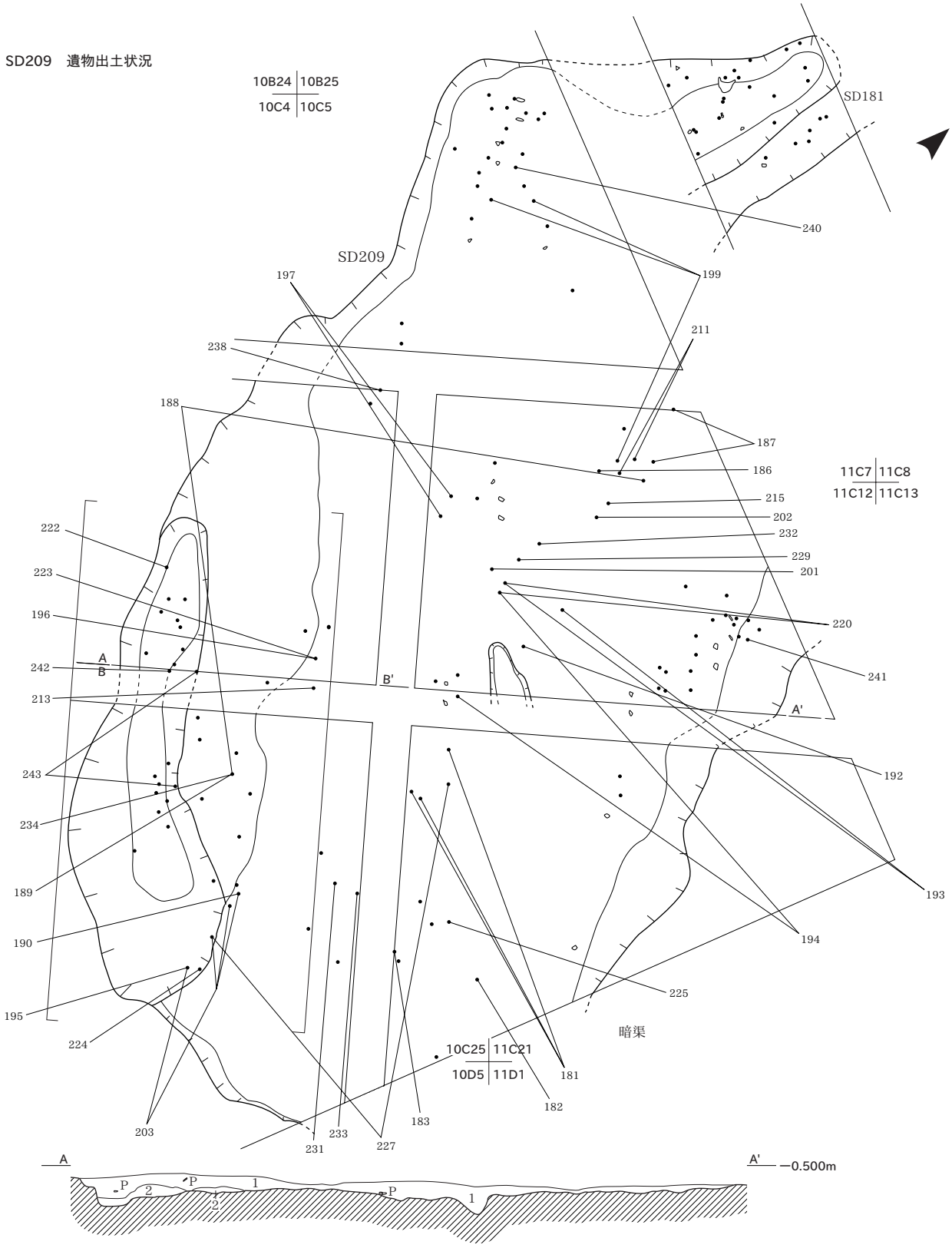




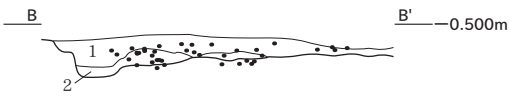


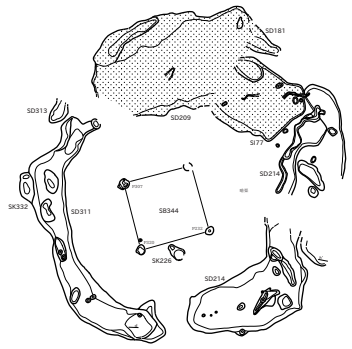
0　1：40（セクション図）　2m

SD209　遺物出土状況

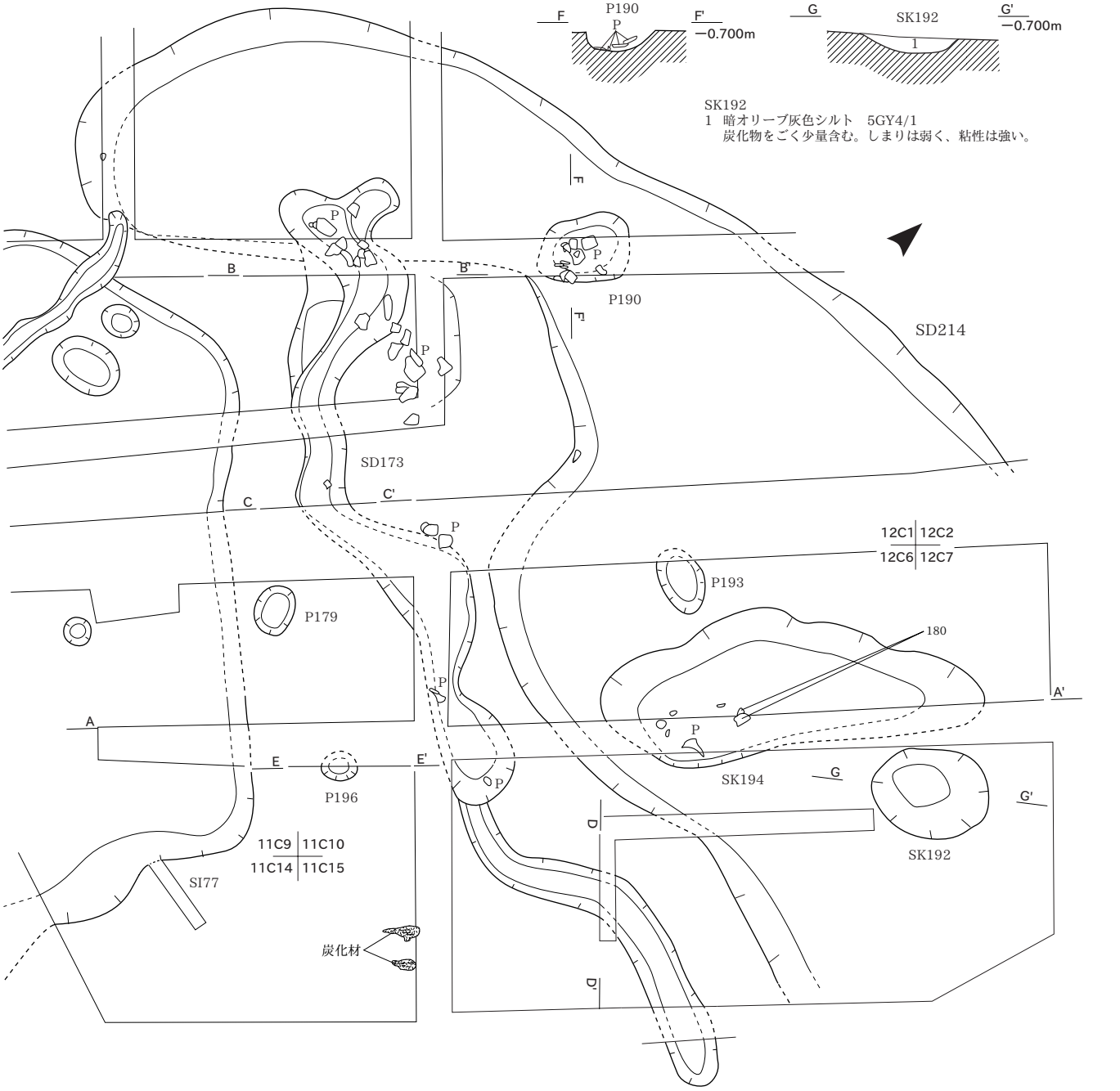


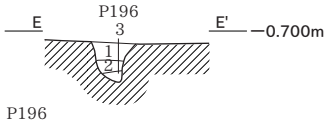
SD209
1　オリーブ灰色粘質土　10Y4/2
　径2mm以下の炭化物・径5～10mmの炭化物を多量に含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　暗オリーブ灰色砂質土　2.5GY4/1
　径5～10㎜の粘質土ブロック・径2㎜以下の炭化粒を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。



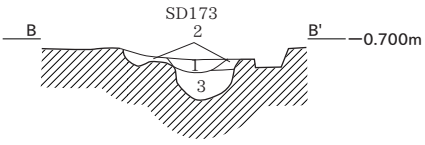


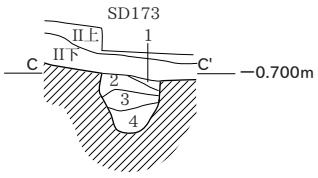
0　（1：60）　3m

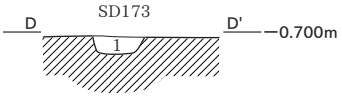




P196
1　灰黄色シルト　2.5Y7/2
炭化物をごく少量含む。しまりは弱く、粘性は強い。
2　浅黄色シルト　2.5Y7/3
径20㎜ほどの炭化物を含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
3　オリーブ灰色シルト　2.5GY6/1
径1㎜ほどの炭化物をまばらに含む。しまりは弱く、粘性は強い。

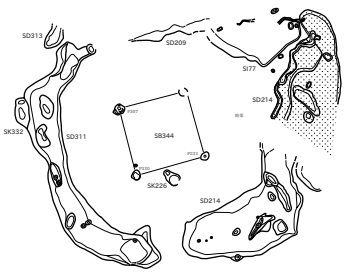




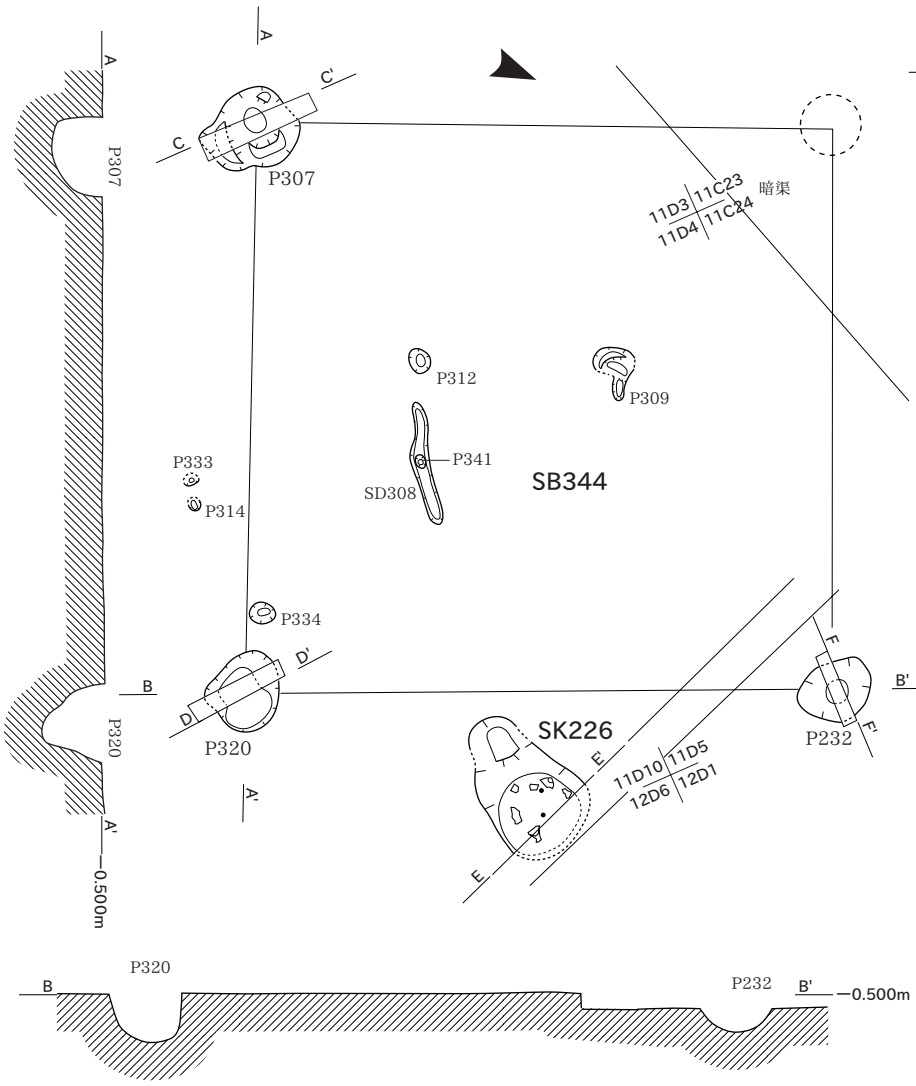


SD173
1　にぶい橙色シルト　7.5YR7/3
径2～10㎜の炭化物を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
2　にぶい褐色シルト　7.5YR6/3
砂質のⅢ層を切っている。しまりは弱く、粘性は強い。
3　オリーブ灰色シルト　5GY5/1
しまり・粘性は弱い。
4　灰色シルト　7.5Y5/1
粘質シルトが部分的に存在し、3層より粘性が強い。しまりは弱く、粘性は強い。

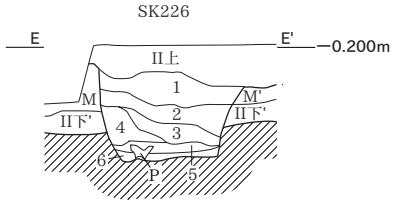
SK194
1　灰黄色シルト　2.5Y6/2
径5～10㎜の炭化物を少量含む。しまりは強く、粘性は弱い。SD214の覆土。
2　灰オリーブ色シルト　5Y6/2
混入物がほとんどない純粋なシルト。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
3　灰オリーブ色シルト　5Y6/2
径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
4　灰色砂質シルト　5Y6/1
浅黄色の細砂がブロック状に混入している。しまりはやや弱く、粘性はない。
5　灰色シルト　10Y4/1
土坑の最下層で、土器を多く含む。しまりはやや弱く、粘性は極めて強い。



0　(1：40)　2m

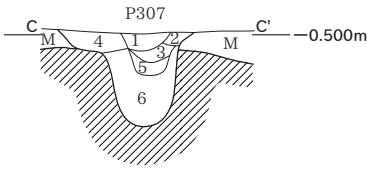


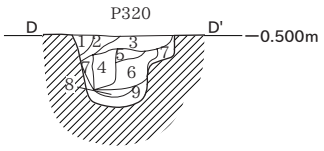
0　1：60（平面.エレベーション図）　3m

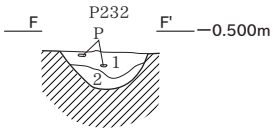


SK226
1　灰色シルト　7.5Y5/1
径2㎜ほどの炭化物を少量含む。SZ439のM'層に極めて近いが、より粘質が強い。しまりはやや弱く、粘性は強い。
2　灰色シルト　7.5Y5/1
径2㎜ほどの炭化物を少量含む。1層より砂質。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
3　灰色シルト　7.5Y4/1
径5～10㎜の炭化物を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
4　灰色シルト　7.5Y5/1
径2㎜ほどの炭化物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
5　灰色シルト　7.5Y4/1
径5㎜ほどの炭化物を多量に含む。器台の完形品を含む。しまりは弱く、粘性は強い。
6　オリーブ黒色シルト　7.5Y3/1
径5㎜ほどの炭化物を極めて多量に含む。しまり・粘性は弱い。

SZ439
II上　灰色シルト　5Y5/1
径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。
II下　灰色シルト　5Y5/1
径1～5㎜ほどの炭化物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
M　灰オリーブ色シルト　5Y5/2
黄褐色(2.5Y5/4)のしまりの強い粘質シルトを部分的に含む。径1㎜以下の白色粒子を多量に含む特徴的な土。SZ439の溝の内側のみに存在し、盛土の可能性がある。しまりはやや強く、粘性は強い。
M'　灰色シルト　7.5Y5/1
径2㎜ほどの炭化物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。





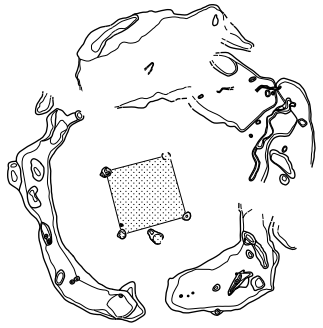


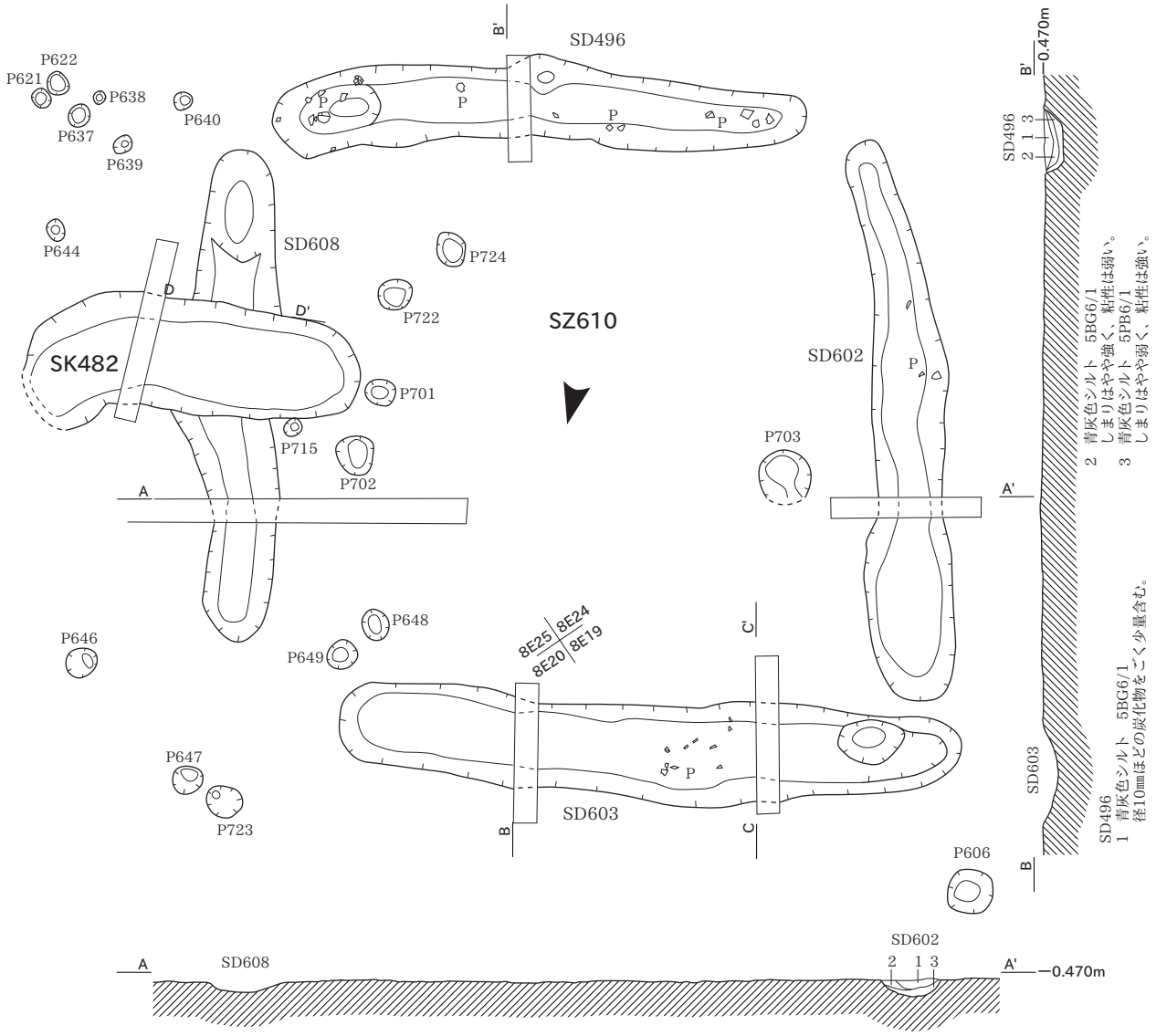
P232
1　灰色シルト　7.5Y5/1
径5㎜ほどの炭化物を少量含む。土器片出土。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
2　灰色シルト　7.5Y5/1
径1㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。

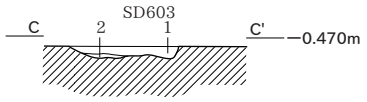
0　1：40（セクション図）　2m

P307
1　灰黄褐色シルト　10YR5/2
径0.5～10㎜の炭化物、腐植物を少量含む。黄色(2.5Y8/6)砂質土をブロック状に多量に含む。灰白色(7.5Y8/2)粘質シルト土を小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5B6/1
径0.5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。黄色砂質土を少量含む。灰白色粘質シルトを小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
3　灰黄褐色シルト　10YR5/2
径0.5～10㎜の炭化物、腐植物を少量含む。黄色砂質土をブロック状に多量に含む。灰白色粘質シルト質土を小ブロック状に少量含む。明青灰色(5BG7/4)粘質シルト質土を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
4　青灰色シルト　5B6/1
径0.5～2㎜の炭化物をごく少量含む。灰黄褐色(10YR6/2)粘質シルト質土をブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
5　黒褐色シルト　2.5Y3/1
径0.5～7㎜の炭化物を少量含む。腐植物を極めて多量に含む。灰白色粘質シルト質土をブロック状に少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
6　明緑灰色シルト　10GY7/1
径0.5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。土器片を含む。灰色(N4/)粘質シルトを小ブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

P320
1　緑灰色シルト　10G6/1
径0.5～5㎜の炭化粒をごく少量含む。Ⅲ層を小ブロック状に少量含む。黄色(2.5Y8/6)砂質土を少量含む。撹乱土を含む。土器出土。しまりは強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5B6/1
径0.5～5㎜の炭化粒をごく少量含む。Ⅲ層を小ブロック状に少量含む。黄色(2.5Y8/6)砂質土を少量含む。撹乱土を含む。しまり・粘性は強い。
3　青灰色シルト　5B6/1
径0.5～5㎜の炭化粒をごく少量含む。Ⅲ層を小ブロック状に少量含む。黄色(2.5Y8/6)砂質土を少量含む。灰白色(7.5Y8/2)粘質シルト土を径5㎜ほどのブロック状に少量含む。撹乱土を含む。しまり・粘性は強い。
4　青灰色シルト　5PB5/1　径1～10㎜の炭化物を極めて多量に含む。灰白色粘質シルト土を径5㎜ほどのブロック状に多量に含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
5　青灰色シルト　5B5/1
径0.3～3㎜の炭化物をごく少量含む。灰白色粘質シルト土を径5㎜ほどのブロック状に多量に含む。黄色砂質土を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
6　青灰色シルト　5PB5/1
径0.5～5㎜の炭化物を少量含む。灰白色粘質シルト土を径5㎜ほどのブロック状に少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
7　明青灰色シルト　5BG7/1
径0.5～2㎜の炭化物をごく少量含む。土器出土。しまりはやや強く、粘性は弱い。5層よりシルト質が強い。
8　青灰色シルト　5BG6/1
径0.5㎜ほどの炭化粒を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
9　明青灰色シルト　5BG7/1
径0.5㎜ほどの炭化粒をごく少量含む。8層を小ブロック状にごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。



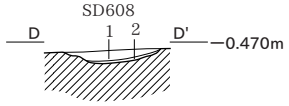




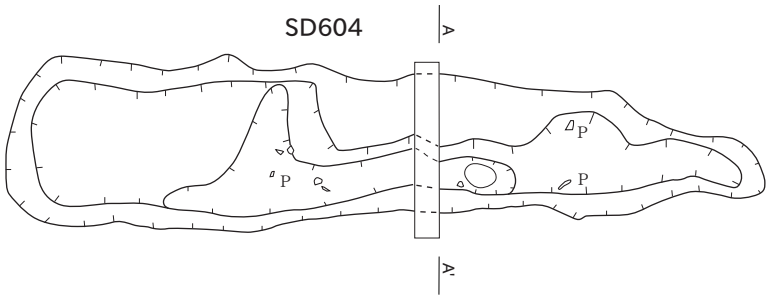
SD603
1　青灰色シルト　10BG6/1
　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
2　明青灰色シルト　10BG7/1
　しまりはやや弱く、粘性は強い。

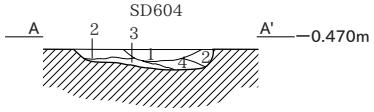
SD602
1　明青灰色シルト　5PB7/1
　径3～10㎜の炭化物をごく少量含む。
2　明青灰色シルト　5P7/1
　炭化物を含まない。しまりはやや強く、粘性は強い。
3　明青灰色シルト　5B7/1
　炭化物を含まない。しまりはやや強く、粘性は強い。

8F2	8F3
8F7	8F8



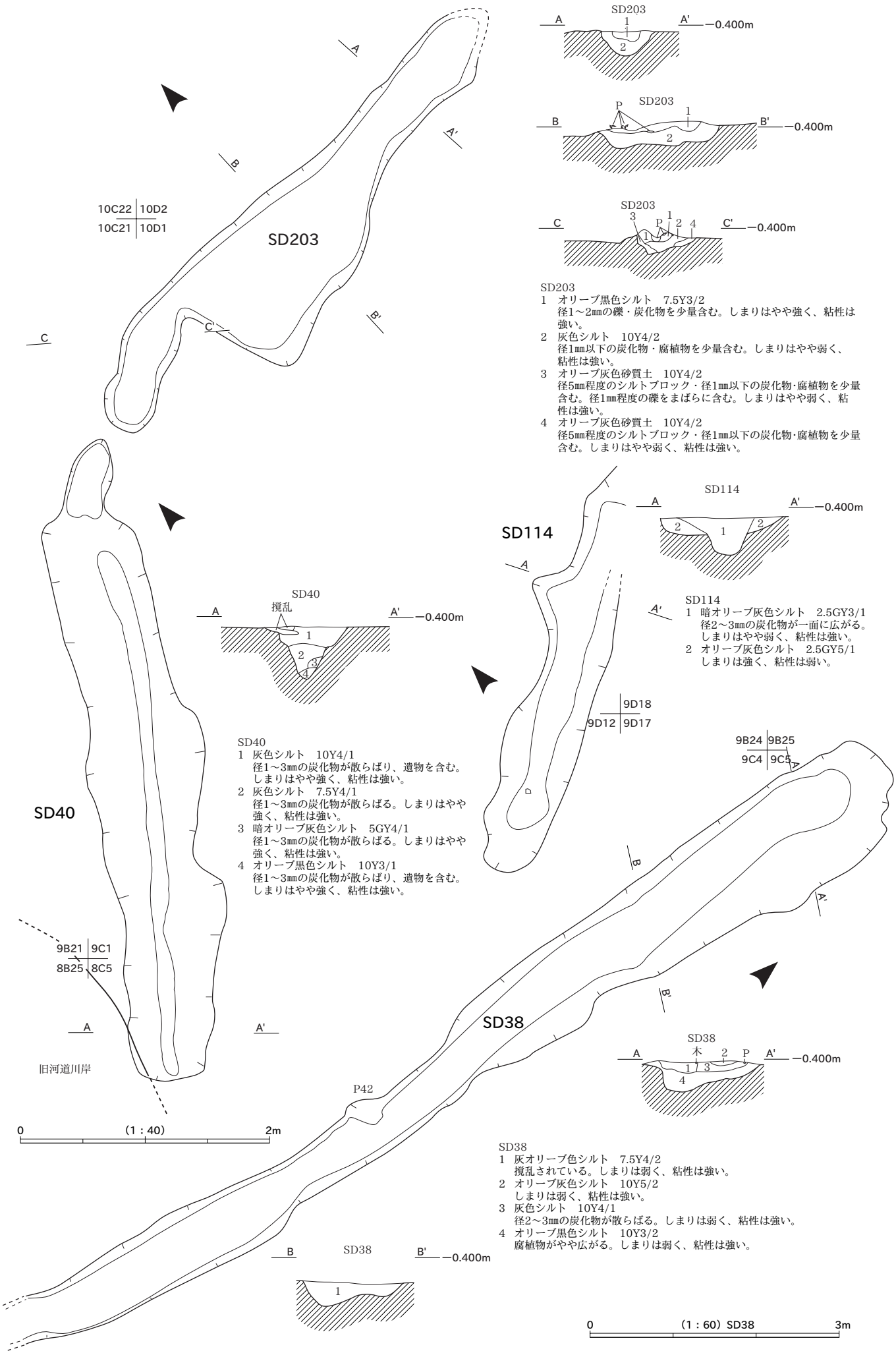
SD608
1　明青灰色シルト　5PB7/1
　2層に比べ、粘質が強い。
2　明青灰色シルト　5PB7/1
　しまり・粘性は弱い。

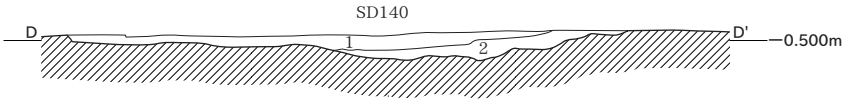




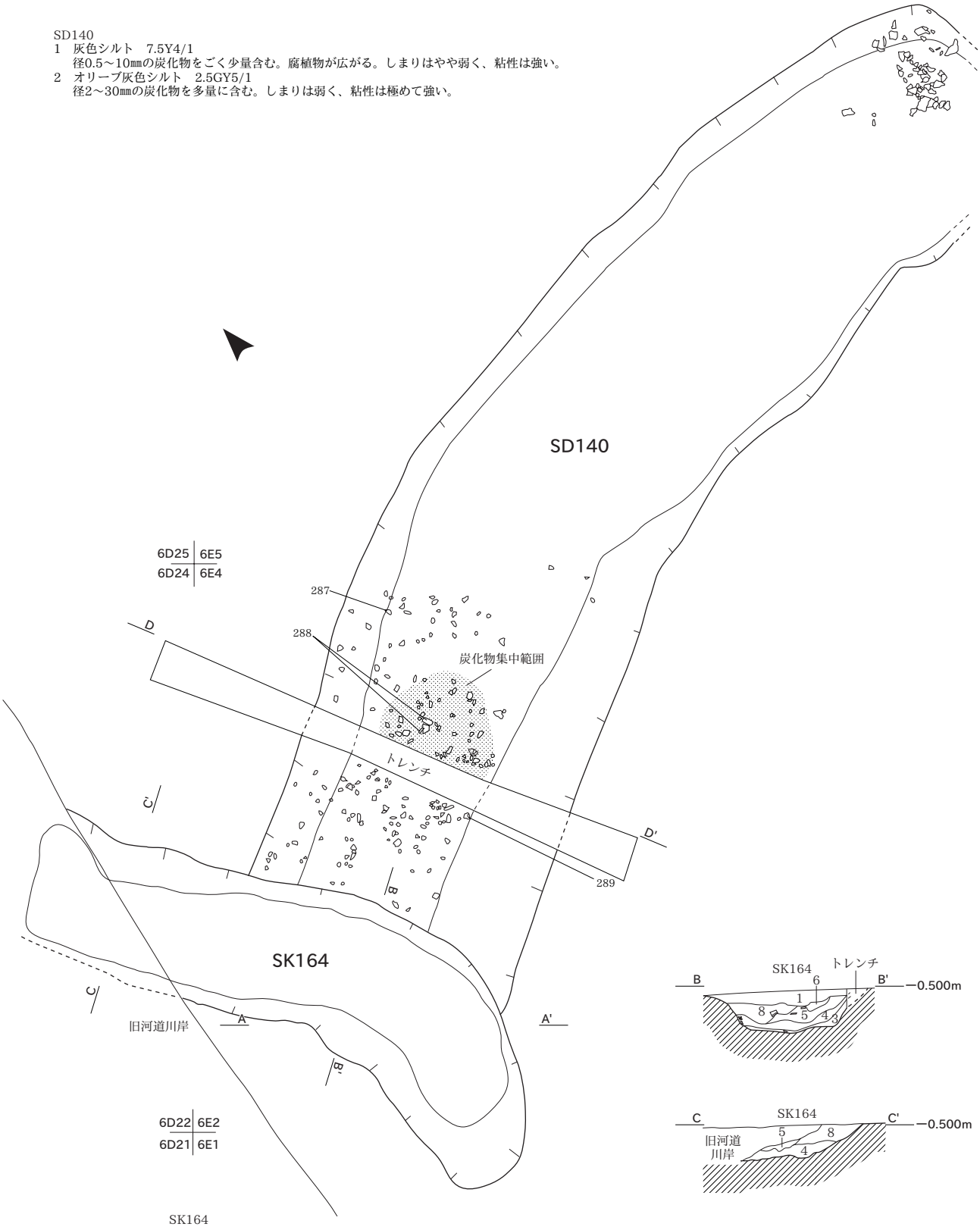
SD604
1　青灰色シルト　5BG6/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
2　青灰色シルト　5BG5/1
　しみの濃い部分がある。
3　明青灰色シルト　10BG7/1
　しまりはやや強く、粘性は弱い。
4　明青灰色シルト　10BG6/1
　しまりはやや強く、粘性は弱い。

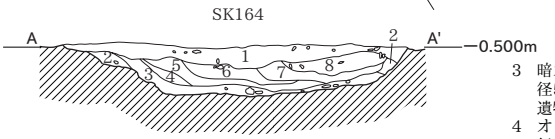
0　(1：60)　3m


SD203
10C22 10D2
10C21 10D1
SD203
1 オリーブ黒色シルト　7.5Y3/2
径1～2㎜の礫・炭化物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2 灰色シルト　10Y4/2
径1㎜以下の炭化物・腐植物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
3 オリーブ灰色砂質土　10Y4/2
径5㎜程度のシルトブロック・径1㎜以下の炭化物･腐植物を少量含む。径1㎜程度の礫をまばらに含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
4 オリーブ灰色砂質土　10Y4/2
径5㎜程度のシルトブロック・径1㎜以下の炭化物･腐植物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
SD114
1 暗オリーブ灰色シルト　2.5GY3/1
径2～3㎜の炭化物が一面に広がる。しまりはやや弱く、粘性は強い。
2 オリーブ灰色シルト　2.5GY5/1
しまりは強く、粘性は弱い。
SD40
1 灰色シルト　10Y4/1
径1～3㎜の炭化物が散らばり、遺物を含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2 灰色シルト　7.5Y4/1
径1～3㎜の炭化物が散らばる。しまりはやや強く、粘性は強い。
3 暗オリーブ灰色シルト　5GY4/1
径1～3㎜の炭化物が散らばる。しまりはやや強く、粘性は強い。
4 オリーブ黒色シルト　10Y3/1
径1～3㎜の炭化物が散らばり、遺物を含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
SD38
1 灰オリーブ色シルト　7.5Y4/2
撹乱されている。しまりは弱く、粘性は強い。
2 オリーブ灰色シルト　10Y5/2
しまりは弱く、粘性は強い。
3 灰色シルト　10Y4/1
径2～3㎜の炭化物が散らばる。しまりは弱く、粘性は強い。
4 オリーブ黒色シルト　10Y3/1
腐植物がやや広がる。しまりは弱く、粘性は強い。
SD114
9D18
9D12 9D17
9B24 9B25
9C4 9C5
SD40
撹乱
9B21 9C1
8B25 8C5
旧河道川岸
P42
SD38
木
0 (1：40) 2m
0 (1：60) SD38 3m
−0.400m



SD140
1　灰色シルト　7.5Y4/1
　径0.5～10㎜の炭化物をごく少量含む。腐植物が広がる。しまりはやや弱く、粘性は強い。
2　オリーブ灰色シルト　2.5GY5/1
　径2～30㎜の炭化物を多量に含む。しまりは弱く、粘性は極めて強い。

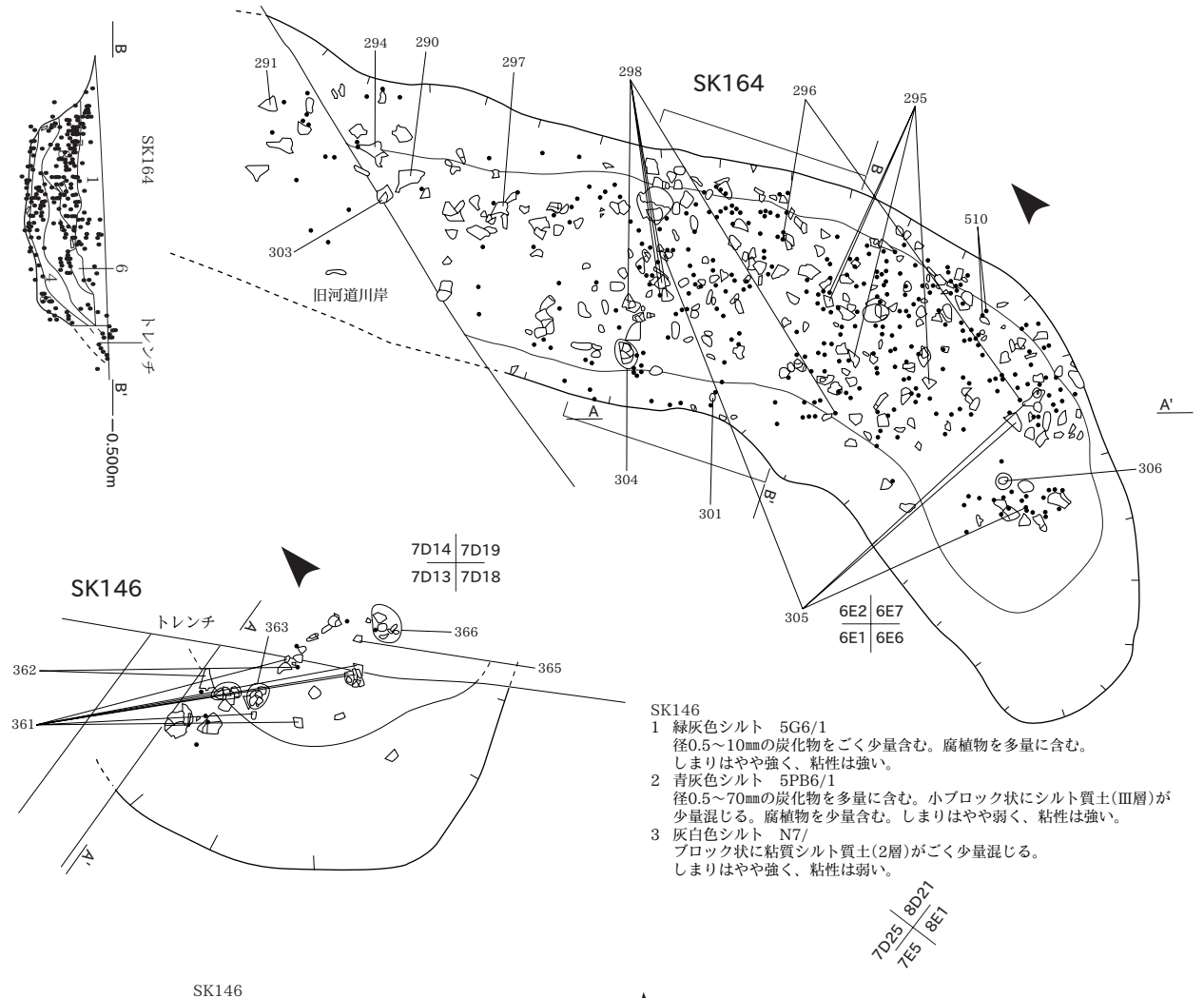




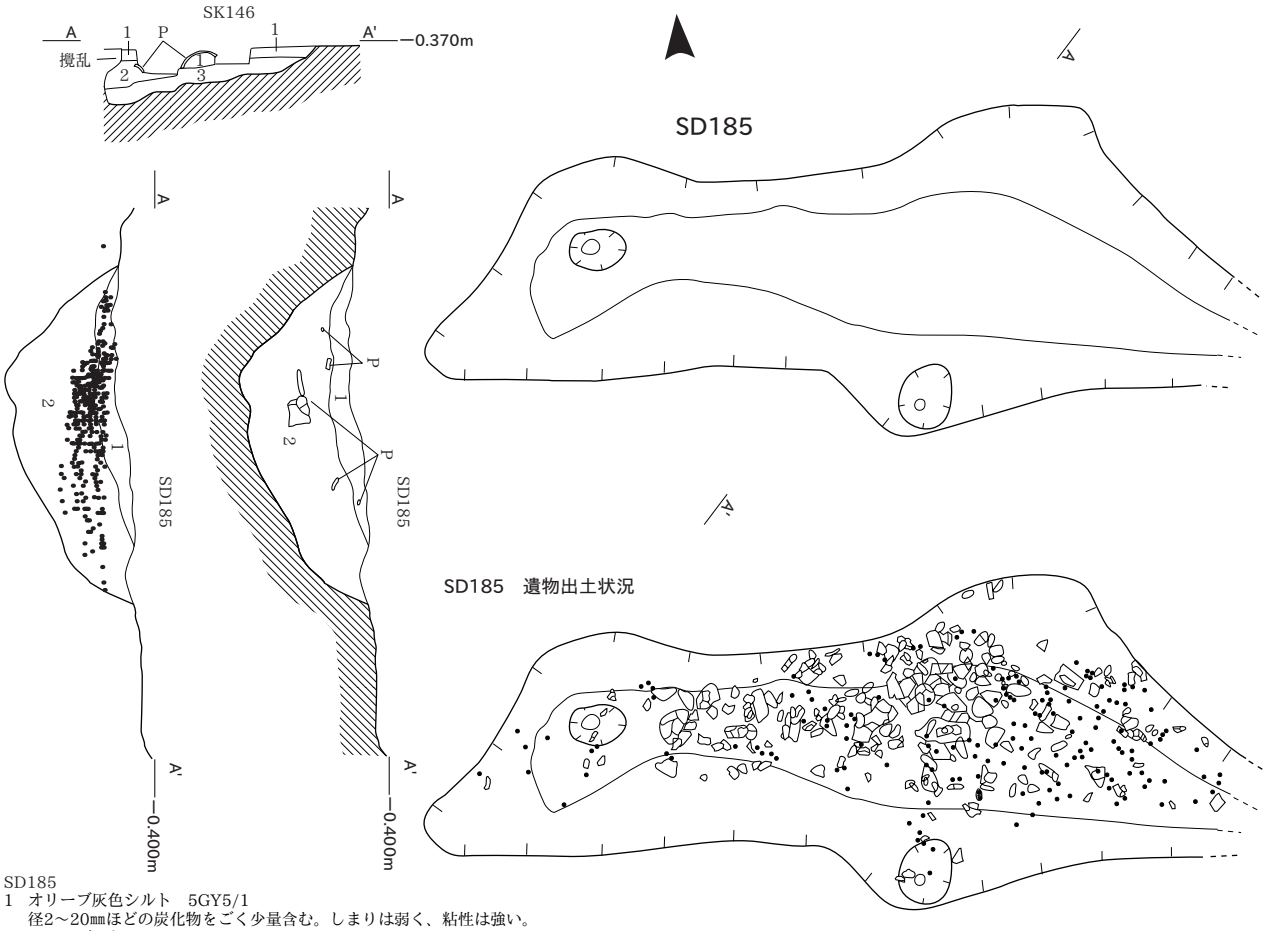
SK164
1　灰色シルト　7.5Y5/1
　径5～10㎜ほどの炭化物を少量含む。遺物を含む。ブロック状に砂をごく少量含む。しまりは弱く、粘性は強い。
2　灰色シルト　7.5Y4/1
　径2～5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。遺物を含む。しまりは弱く、粘性は強い。
3　暗オリーブ灰色シルト　2.5GY4/1
　径5～10㎜ほどの炭化物を極めて多量に含む。遺物を含む。しまりは弱く、粘性は強い。
4　オリーブ灰色シルト　2.5GY5/1
　径2～4㎜ほどの炭化物をごく少量含む。砂をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
5　暗オリーブ灰色シルト　2.5GY4/1
　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)がまだら状に混じる。しまりは弱く、粘性は強い。
6　暗オリーブ灰色シルト　5GY4/1
　径3～20㎜ほどの炭化物を多量に含む。遺物を含む。しまりは弱く、粘性は強い。
7　暗オリーブ灰色シルト　5GY4/1
　径2～10㎜ほどの炭化物を多量に含む。しまりは弱く、粘性は強い。
8　暗オリーブ灰色シルト　2.5GY3/1
　径2～20㎜ほどの炭化物を多量に含む。遺物を含む。しまりは弱く、粘性は強い。

0　(1：60)　3m

SK164　遺物出土状況

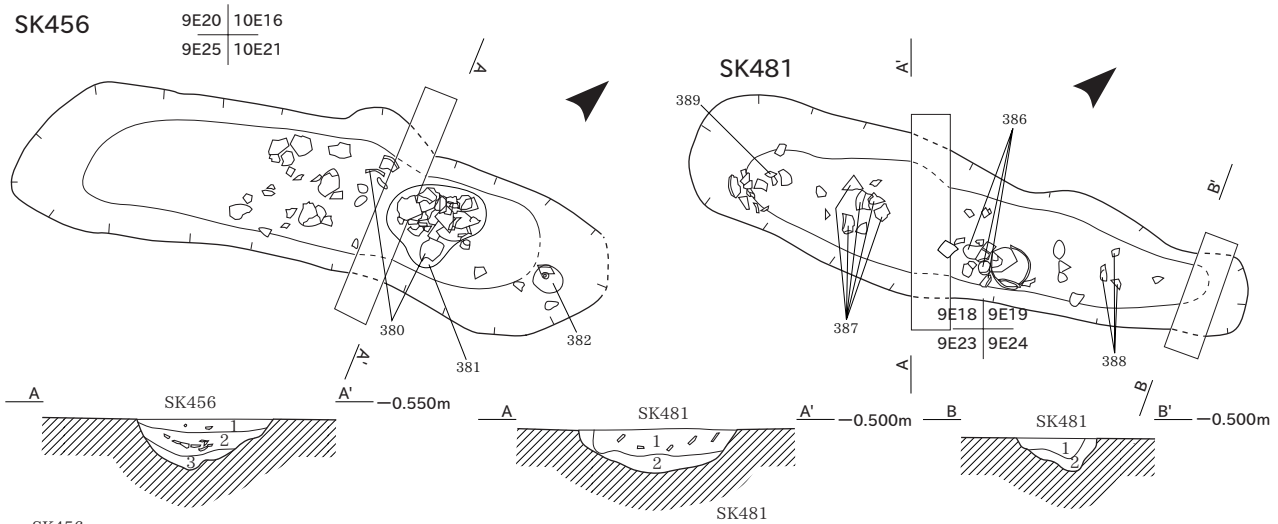


SK146
1　緑灰色シルト　5G6/1
　径0.5～10㎜の炭化物をごく少量含む。腐植物を多量に含む。
　しまりはやや強く、粘性は強い。
2　青灰色シルト　5PB6/1
　径0.5～70㎜の炭化物を多量に含む。小ブロック状にシルト質土(Ⅲ層)が
　少量混じる。腐植物を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
3　灰白色シルト　N7/
　ブロック状に粘質シルト質土(2層)がごく少量混じる。
　しまりはやや強く、粘性は弱い。



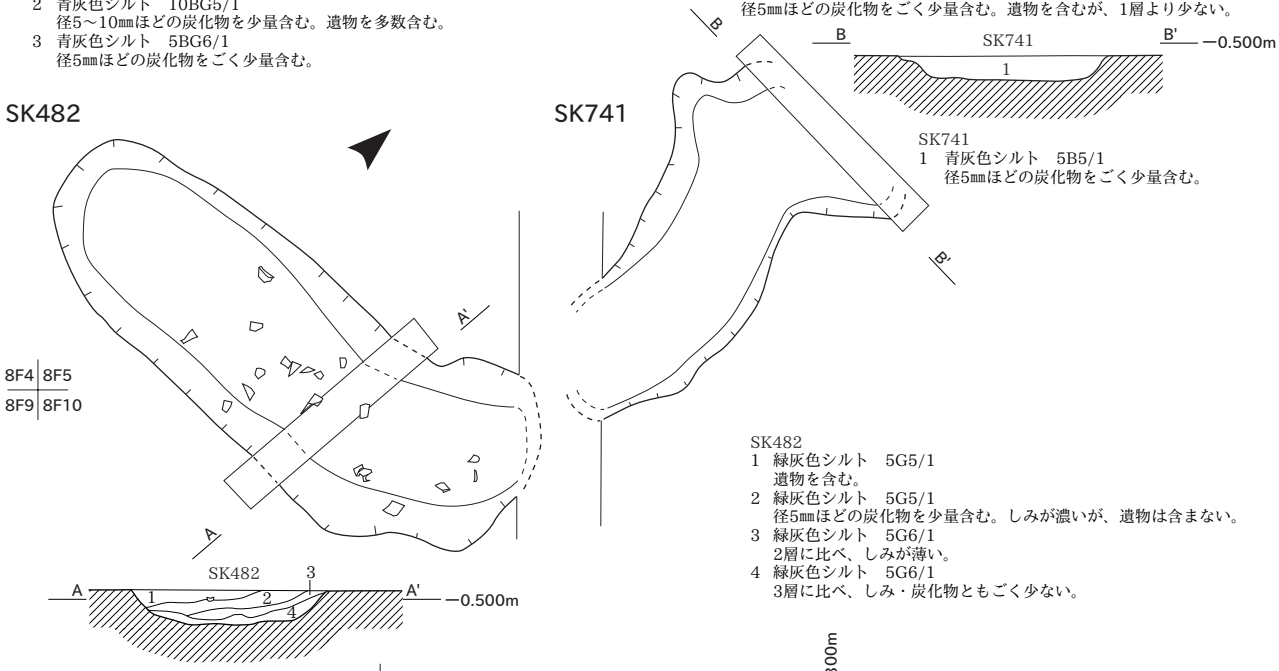
SD185
1　オリーブ灰色シルト　5GY5/1
　径2～20㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しまりは弱く、粘性は強い。
2　オリーブ黒色シルト　7.5Y3/1
　径2～5㎜ほどの炭化物を少量含む。しまり・粘性は弱い。

0　(1：40)　2m



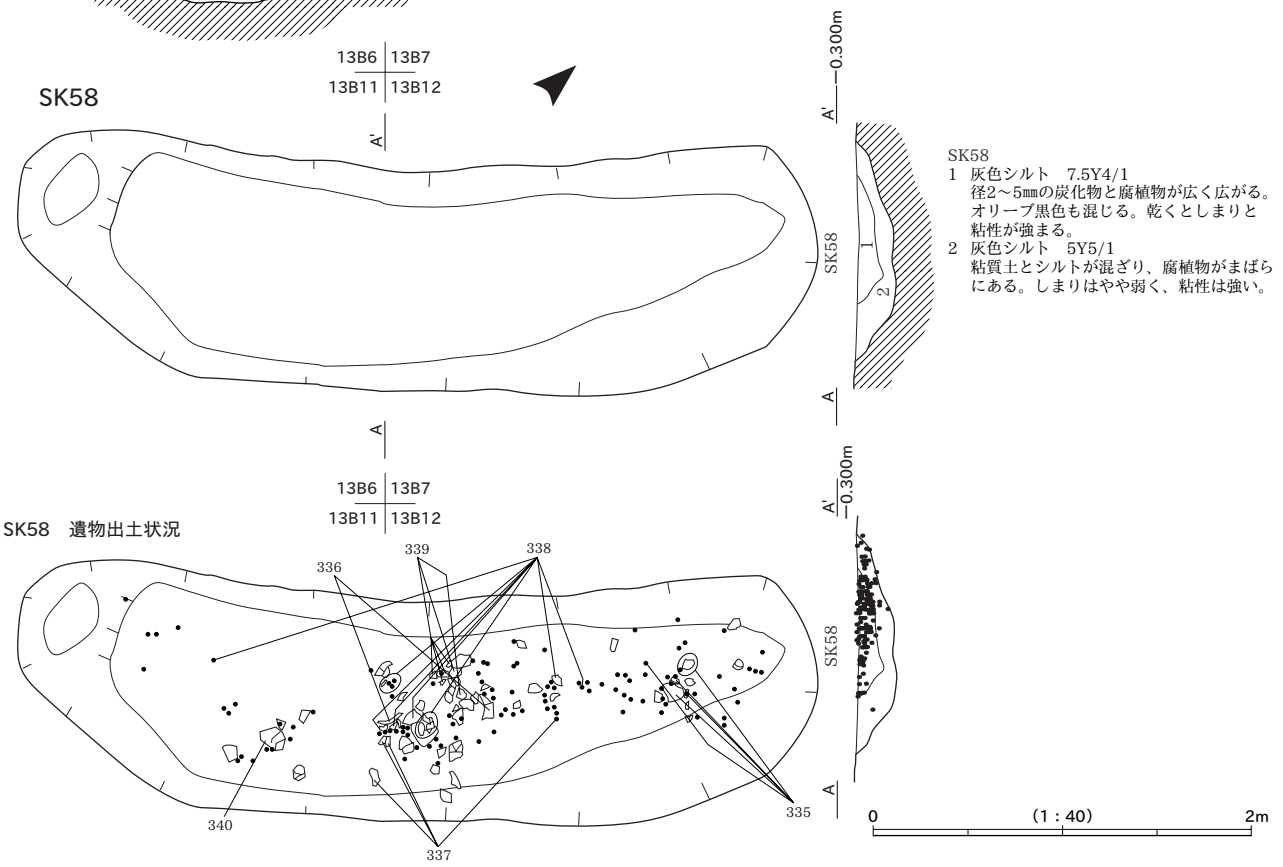
SK456
1　青灰色シルト　10BG6/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。遺物を多数含む。
2　青灰色シルト　10BG5/1
　径5～10㎜ほどの炭化物を少量含む。遺物を多数含む。
3　青灰色シルト　5BG6/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。

SK481
1　青灰色シルト　5B5/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。遺物を含む。
2　暗青灰色シルト　5B4/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。遺物を含むが、1層より少ない。

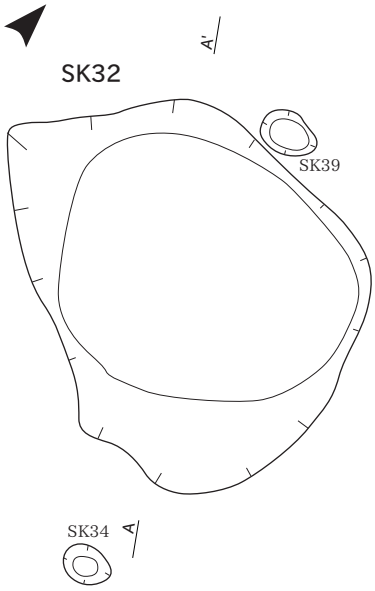


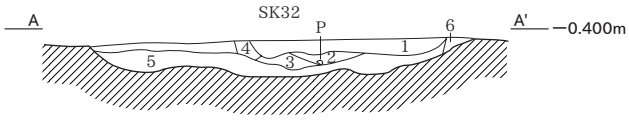
SK741
1　青灰色シルト　5B5/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。

SK482
1　緑灰色シルト　5G5/1
　遺物を含む。
2　緑灰色シルト　5G5/1
　径5㎜ほどの炭化物を少量含む。しみが濃いが、遺物は含まない。
3　緑灰色シルト　5G6/1
　2層に比べ、しみが薄い。
4　緑灰色シルト　5G6/1
　3層に比べ、しみ・炭化物ともごく少ない。



SK58
1　灰色シルト　7.5Y4/1
　径2～5㎜の炭化物と腐植物が広く広がる。オリーブ黒色も混じる。乾くとしまりと粘性が強まる。
2　灰色シルト　5Y5/1
　粘質土とシルトが混ざり、腐植物がまばらにある。しまりはやや弱く、粘性は強い。

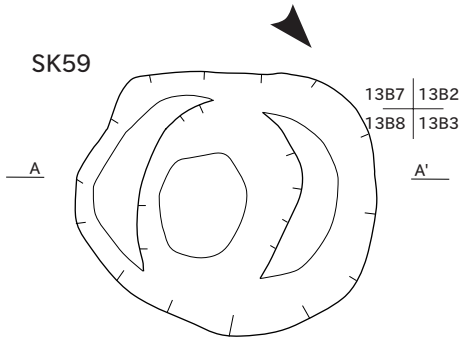


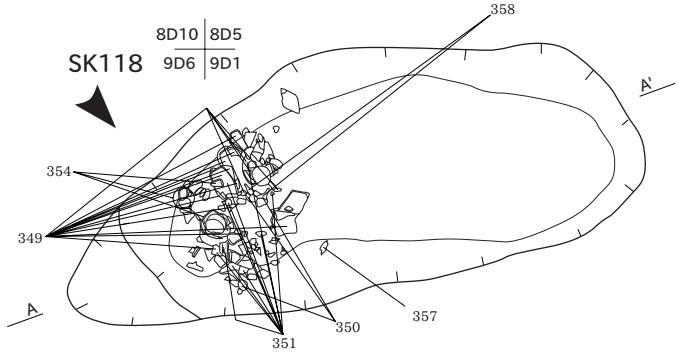


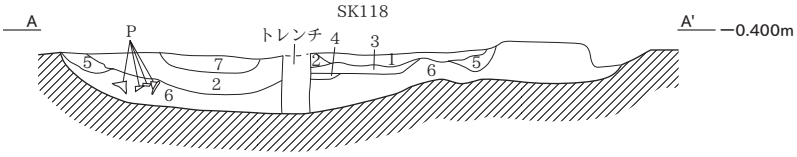
SK32
1　暗オリーブ灰色シルト　2.5GY3/1
　径30mm以下の炭化物を含む。粒子は細かく、しまりはやや強く、粘性は強い。オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルトがまだらに混じる。赤色塗彩土器出土。
2　灰オリーブ色シルト　7.5Y5/2
　少量の炭化物を含む。しまりはやや強く、粘性は弱い。灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルトと暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルトがまだらに混じる。赤色塗彩土器出土。

8C23	8C24
8D3	8D4

3　灰オリーブ色シルト　7.5Y4/2
　少量の炭化物を含む。粒子は細かく、しまりはやや強く、粘性は強い。赤色塗彩土器出土。
4　灰オリーブ色シルト　7.5Y5/2
　少量の炭化物を含む。粒子は細かく、しまりは強く、粘性は弱い。赤色塗彩土器出土。
5　オリーブ灰色シルト　2.5GY5/1
　粒子は細かく、しまりはやや弱く、粘性は弱い。赤色塗色土器出土。
6　オリーブ灰色シルト　2.5GY6/1
　粒子は細かく、しまりは強く、粘性は弱い。

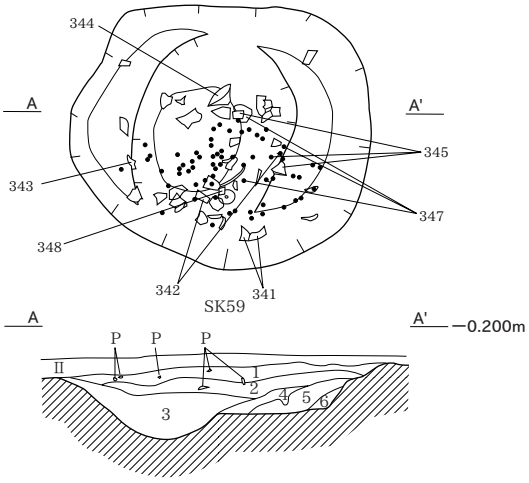




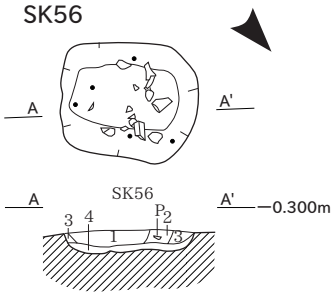


SK118
1　オリーブ黒色シルト　5Y3/2
　径5～20㎜の炭化物を含む。
　しまりはやや強く、粘性は弱い。
2　オリーブ黒色シルト　5Y2/2
　径1～2㎜の炭化物が広く広がる。
　しまりはやや強く、粘性は強い。
3　灰オリーブ色シルト　5Y5/2
　径1～2㎜のオリーブ黒(5Y3/2)がブロック状に広がる。しまりはやや弱く、粘性は強い。
4　灰オリーブ色シルト　5Y5/2
　径1～2㎜の炭化物が広く混じる。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。
5　灰色シルト　7.5Y5/1
　細砂が少量混じる。しまりはやや弱く、粘性は強い。
6　灰色シルト　7.5Y5/1
　しまりはやや弱く、粘性は弱い。
7　灰オリーブ色シルト　7.5Y5/2
　径5～10㎜の炭化物が広がる。
　しまりはやや弱く、粘性は弱い。

SK59　遺物出土状況

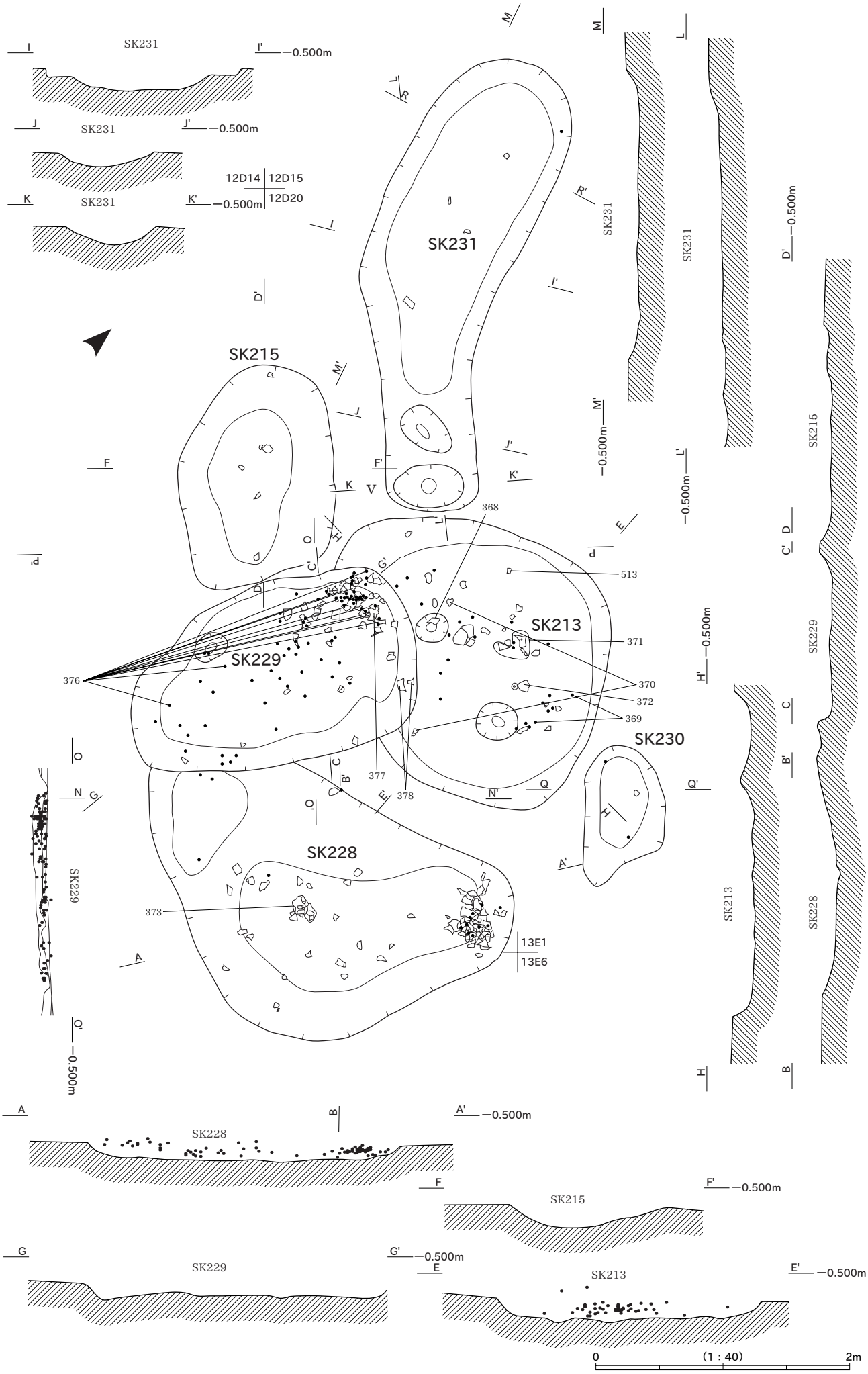


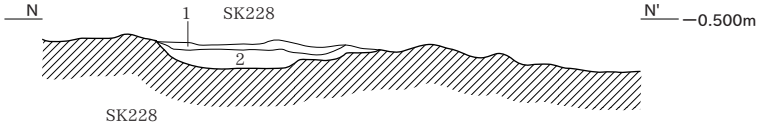
SK59
1　灰色シルト　7.5Y6/1
　炭化物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　灰色シルト　7.5Y6/1
　炭化物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
3　灰色シルト　7.5Y5/1
　径10㎜以上の炭化物を多量に含む。しまりはやや弱く、粘性は極めて強い。
4　灰色シルト　7.5Y5/1
　炭化物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
5　緑灰色シルト　5G6/1
　炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
6　灰黄色シルト　2.5Y6/1
　しまりはやや弱く、粘性は極めて強い。



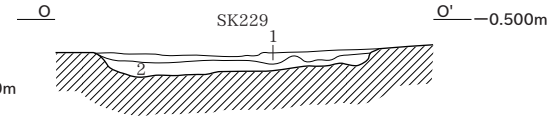
SK56
1　黒褐色シルト　2.5Y3/1
　径3～5㎜の炭化物が広がる。しまりはやや強く、粘性はない。
2　黒色シルト　2.5Y2/1
　径3～5㎜の炭化物が広がる。遺物を含む。しまりはやや弱く、粘性はない。
3　オリーブ黒色シルト　5Y3/2
　炭化物をごく少量含む。しまりはやや強く、粘性はない。
4　灰オリーブ色シルト　5Y5/2
　炭化物をごく少量含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。

0　(1：40)　2m

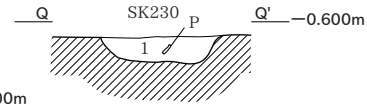

SK231
SK215
SK229
SK213
SK230
SK228
12D14
12D15
12D20
13E1
13E6
368
369
370
371
372
373
376
377
378
513
0
(1 : 40)
2m



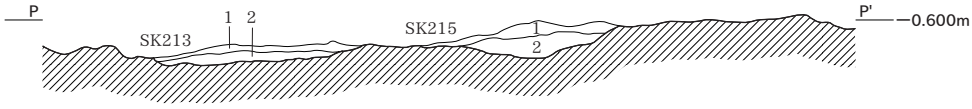
SK228
1　青灰色シルト　5PB5/1
　径2～5㎜の炭化物を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。
2　暗青灰色シルト　5BG4/1
　径5㎜ほどの炭化物を多量に含む。ところどころに少量の火山灰を含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。



SK229
1　暗青灰色シルト　5BG4/1
　径5～10㎜の炭化物を多量に含む。火山灰を多く含み、
　ところどころに腐植物が混じる。しまりはやや弱く、
　粘性は弱い。
2　青灰色シルト　5PB5/1
　径1㎜ほどの炭化物をごく少量含む。しまり・粘性は弱い。

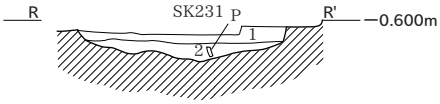


SK230
1　灰色シルト　7.5Y4/1
　径1㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　しまりはやや強く、粘性は強い。



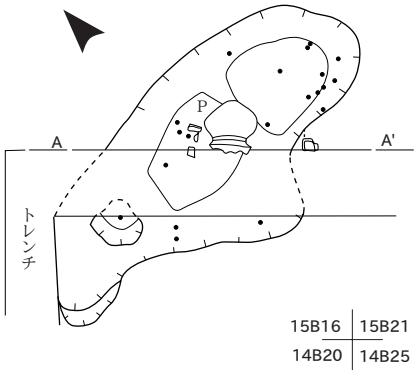
SK213
1　青灰色シルト　5PB5/1
　径2～5㎜の炭化物を少量含む。
　しまりはやや強く、粘性は弱い。
2　暗青灰色シルト　5BG4/1
　径5～30㎜の炭化物を多量に含む。
　ところどころに少量の火山灰を含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。

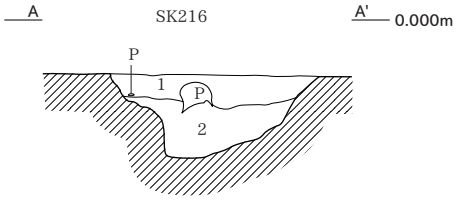
SK215
1　青灰色シルト　5PB5/1
　径2～5㎜の炭化物を少量含む。
　しまりはやや強く、粘性は強い。
2　暗青灰色シルト　5BG4/1
　径5㎜ほどの炭化物を多量に含む。
　ところどころに少量の火山灰を含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。



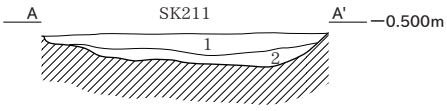
SK231
1　黄灰色シルト　2.5Y5/1
　径3～10㎜の炭化物をごく少量含む。
　火山灰、腐植物をまばらに含む。
　しまりはやや弱く、粘性は弱い。
2　灰色シルト　7.5Y4/1
　径1～3㎜の炭化物、腐植物をごく少量
　含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
　部分的に粘性が強い。

SK216



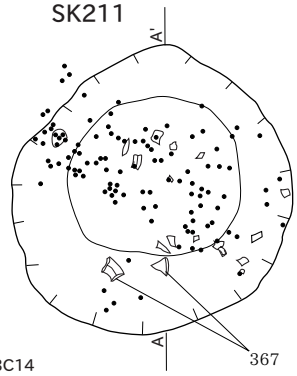


SK216
1　暗青灰色シルト　5B4/1
　径5～10㎜の炭化物・火山灰を少量含む。遺物を含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。
2　暗青灰色シルト　5B4/1
　径2～5㎜の炭化物をごく少量含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。

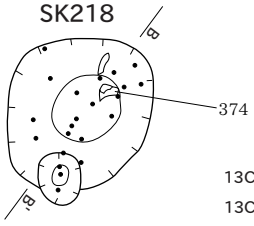


SK211
1　黄灰色シルト　2.5Y5/1
　径5～10㎜の炭化物を少量含む。遺物を多数含む。
　しまりはやや強く、粘性は強い。
2　灰色シルト　7.5Y6/1
　径1～2㎜の炭化物をごく少量含む。
　しまりはやや強く、粘性は強い。

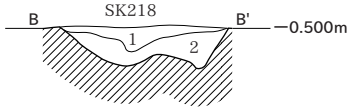
SK211



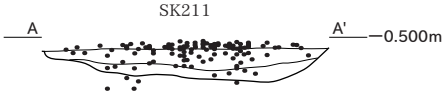
SK218



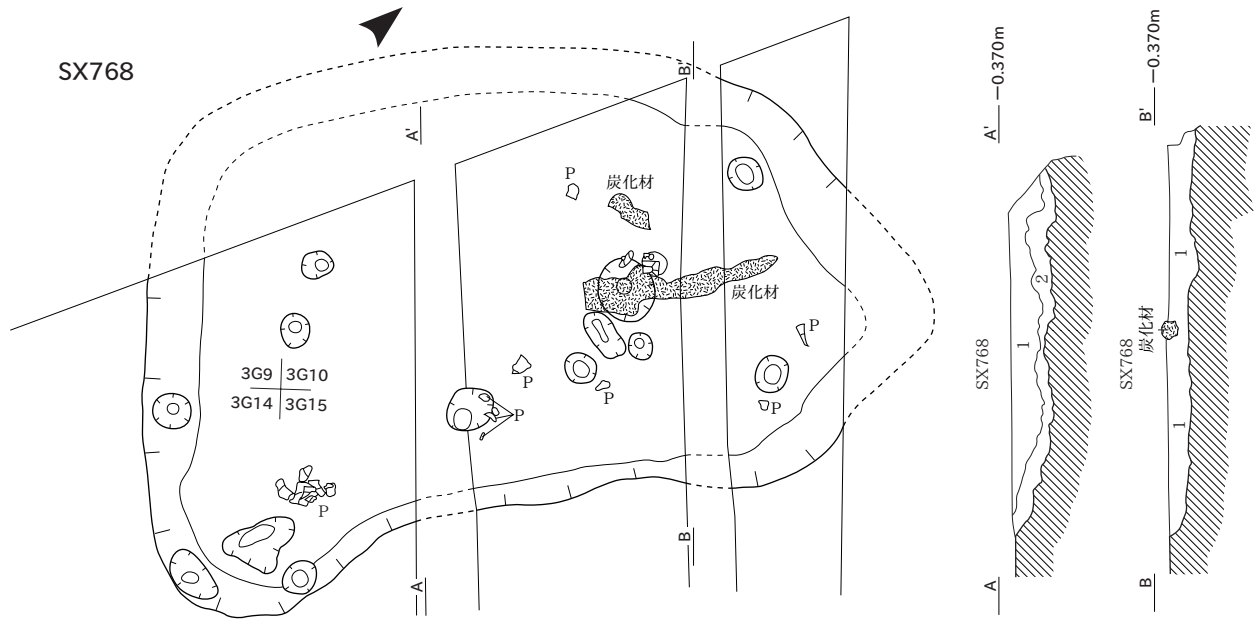
13C13 | 13C14
13C18 | 13C19



SK218
1　青灰色シルト　5PB5/1
　径5～10㎜の炭化物を少量含む。遺物を含む。
　しまりはやや強く、粘性は強い。
2　黄灰色シルト　2.5Y5/1
　径1㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　しまりはやや弱く、粘性は弱い。

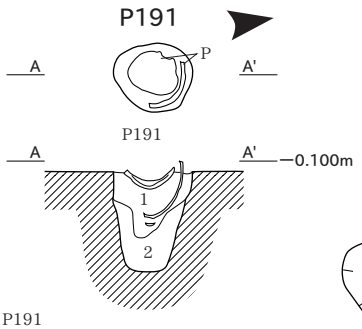


0　(1：40)　2m



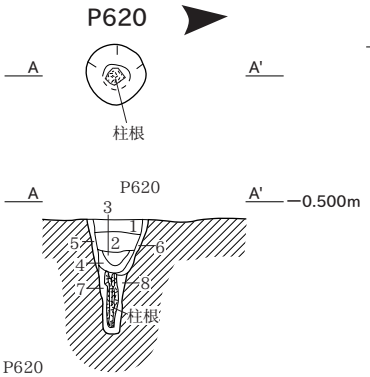
SX768
1　暗オリーブ灰色シルト　2.5GY4/1
　径2～30㎜の炭化物を極めて多量に含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。
2　暗オリーブ灰色シルト　2.5GY4/1
　径2～5㎜の炭化物を少量含む。
　しまりはやや弱く、粘性は強い。

0　(1：40) SX768　2m



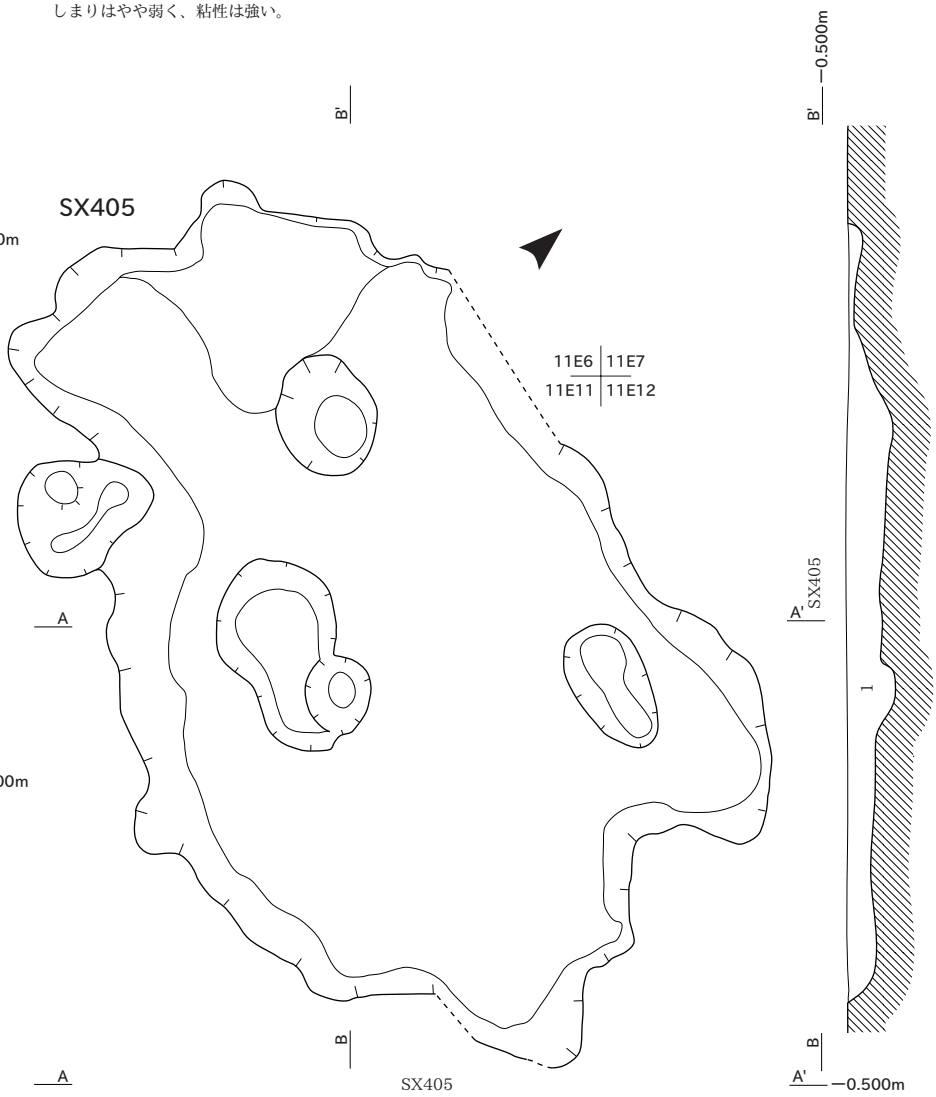
P191
1　青灰色シルト　5B5/1
　径5～10㎜の炭化物をごく少量含む。
　しまりはやや強く、粘性は弱い。
2　明青灰色シルト　5B7/1
　1層に比べて、炭化物は少ない

0　(1：20) P191　0.5m



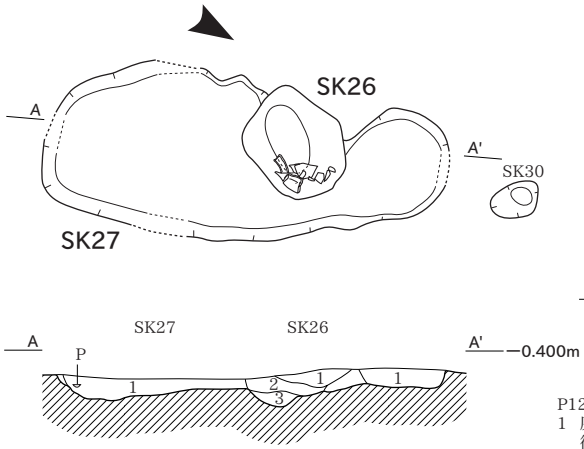
P620
1　青灰色シルト　5B6/1
　径5㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
2　青灰色シルト　5PB6/1
　径20㎜の炭化物を１つ含む。
3　明緑灰色シルト　5G7/1
　2層に比べ、粘質が強い。
4　明オリーブ灰色シルト　2.5GY7/1
　径3㎜ほどの炭化物をごく少量含む。
　2層と比べ、粘質が強い。
5　暗青灰色シルト　5BG7/1
　径10㎜の炭化物を１つ含む。
6　暗青灰色シルト　5BG7/1
　径5～10㎜の炭化物をごく少量含む。
7　緑灰色シルト　5G6/1
　炭化物を含まない。柱根出土。
8　緑灰色シルト　5G6/1
　炭化物を含まない。

0　(1：40)　2m



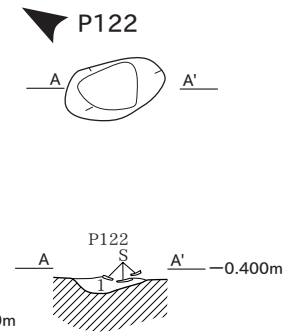
SX405
1　青灰色シルト　5B5/1
　径10㎜ほどの炭化物と遺物を少量含む。
　しまりはやや強い。

0　(1：60) SX405　3m

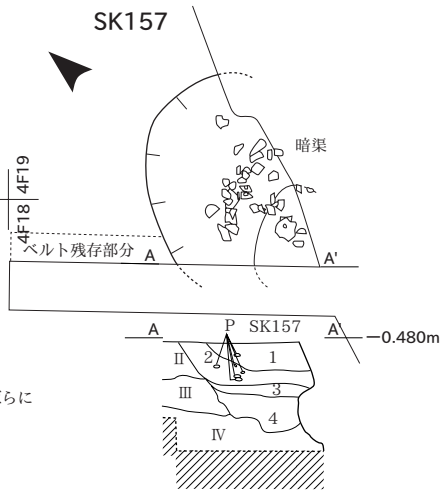


SK26
1　灰色粘質土　7.5Y4/1
　炭化物粒混じる。しまり・粘性あり。遺物出土。
2　灰色粘質土　7.5Y5/1
　灰白色粘土混じる。炭化物含む。しまり・粘性あり。
3　灰色粘質土　3Y4/1
　炭化物含む。しまり・粘性あり。

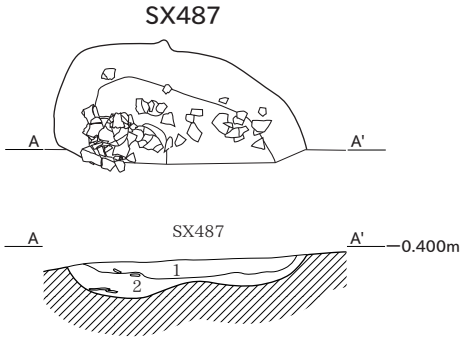
SK27
1　灰色粘質土　10Y5/1
　炭化物含む。しまり・粘性あり。遺物出土。



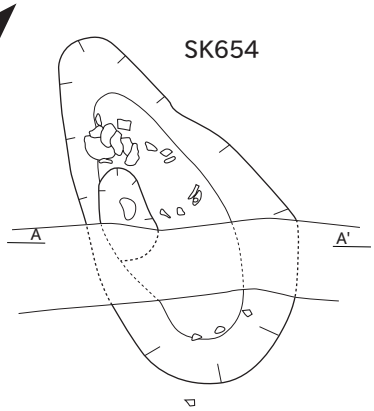
P122
1　灰オリーブ色シルト　7.5Y4/2
　径2～3mmの炭化物が散在。腐植物もまばらに含まれる。しまり弱。粘性なし。

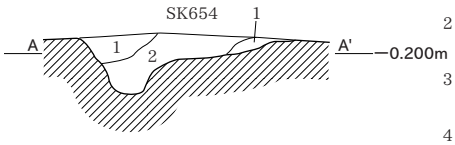


SK157
1　にぶい黄橙色粘質シルト　10YR6/3
　径0.5mmの炭化物が散在。腐植物を少量含む。
　しまり・粘性あり。
2　にぶい黄橙色粘質シルト　10YR6/3
　径0.5～20mmの炭化物を多量に含む。
　にぶい黄橙色(10YR7/3)粘質シルトをブロック状に
　少量含む。しまり・粘性あり。土器片多数出土。
3　青灰色粘質シルト　5BG6/1
　径0.5～20mmの炭化物・腐植物を少量含む。
　しまりややあり、粘性あり。
4　青灰色粘質シルト　5BG6/1
　径0.5mmの炭化物・腐植物をごく少量含む。
　Ⅲ層を小ブロック状に含む。しまりややあり、
　粘性あり。

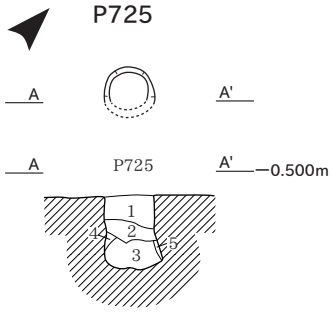


SX487
1　青灰色粘質シルト　5BG5/1
　径5mmの炭化物をごく少量含む。粘性・しまりあり。
　遺物多量に出土。
2　青灰色粘質シルト　10BG6/1
　径5mmの炭化物をごく少量含む。粘性あり、しまりややあり。
　遺物出土。



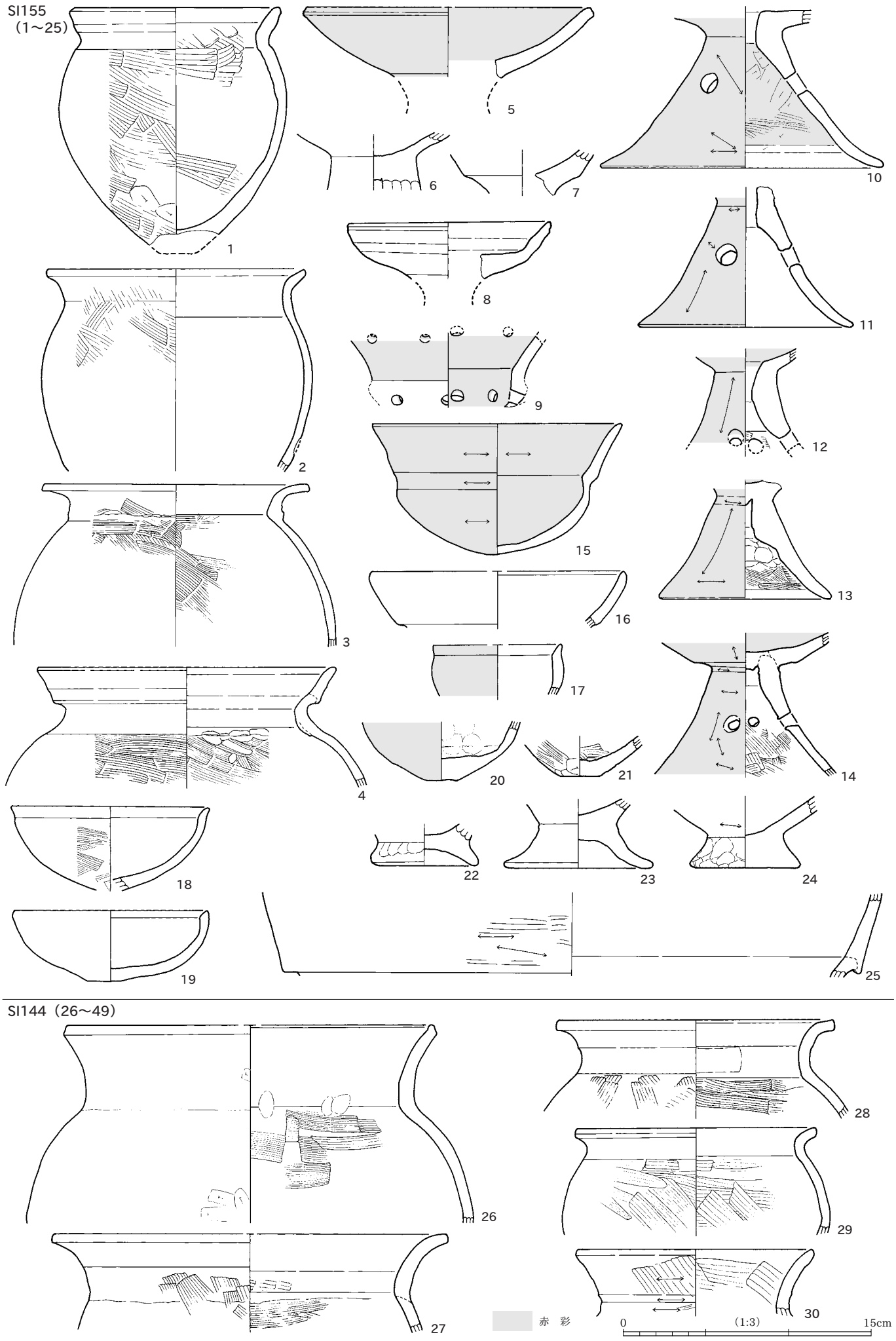


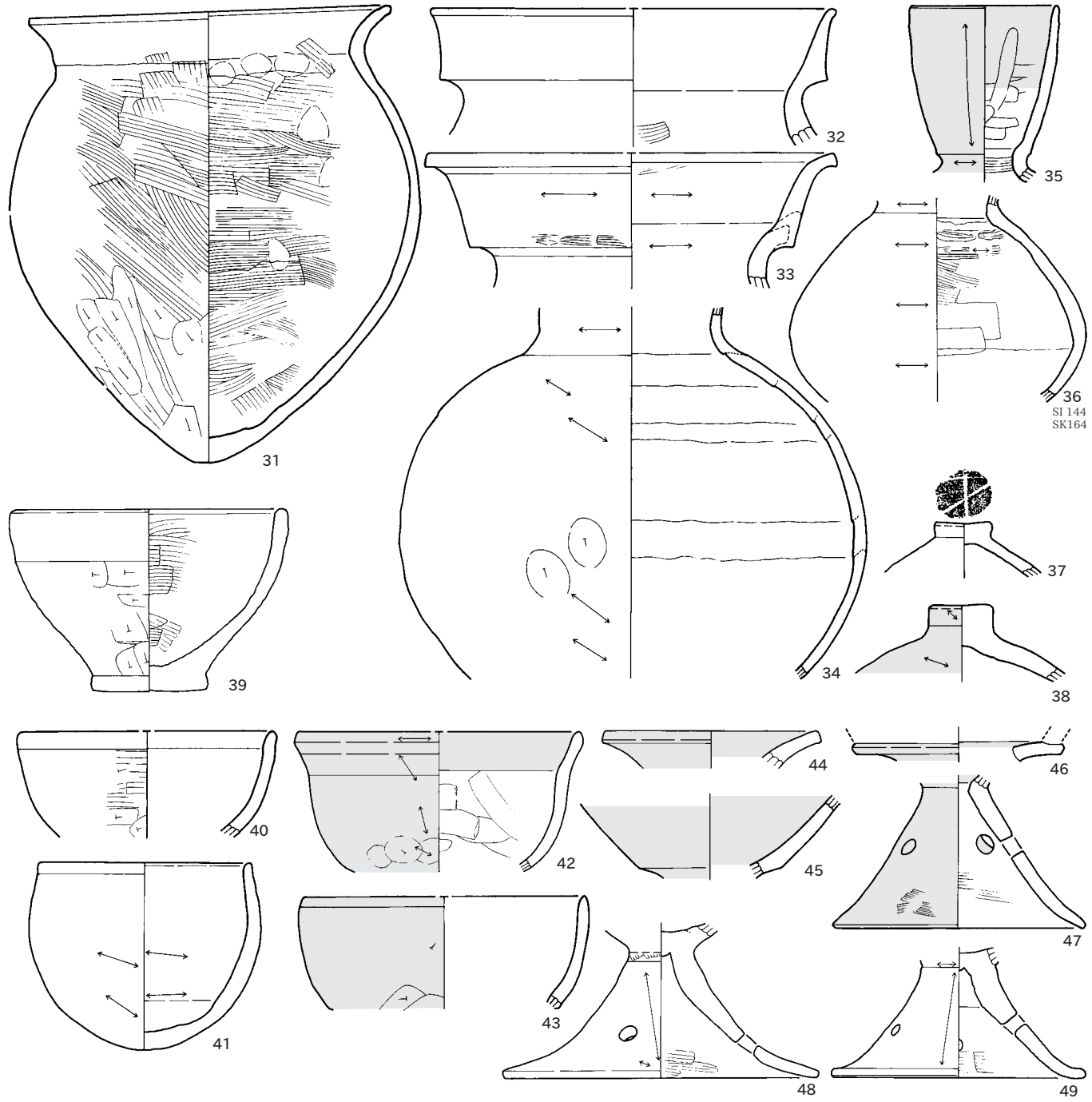
SK654
1　灰オリーブ色粘質シルト　5Y5/2
　径1～10mmの炭化物を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
2　オリーブ黒色粘質シルト　5Y3/2
　径2～20mmの炭化物を多量に含む。粘性あり、しまりややあり。



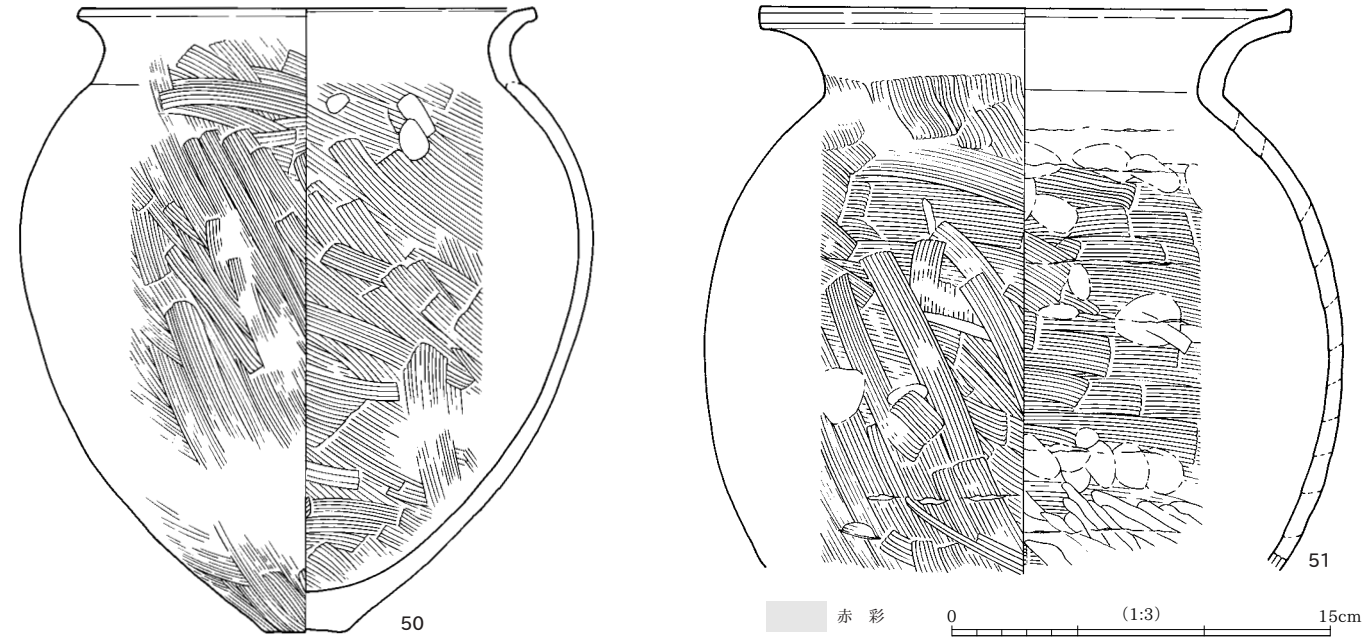
P725
1　明青灰色シルト　5B7/1
　径1mmの炭化物をごく少量含む。
　粘性ややあり、しまりあり。
2　青灰色シルト　5B5/1
　下部に多量の炭化物が帯状に堆積。粘性やや
　あり、しまりあり。
3　緑灰色粘質シルト　10G6/1
　径3mmの炭化物を少量含む。粘性あり、
　しまりややあり。
4　緑灰色シルト　10G5/1
　炭化物をほとんど含まない。3層より粘性が
　やや強い。粘性ややあり、しまりあり。
5　緑灰色シルト　10G5/1
　炭化物をほとんど含まない。3層より粘性が
　やや強い。粘性ややあり、しまりあり。

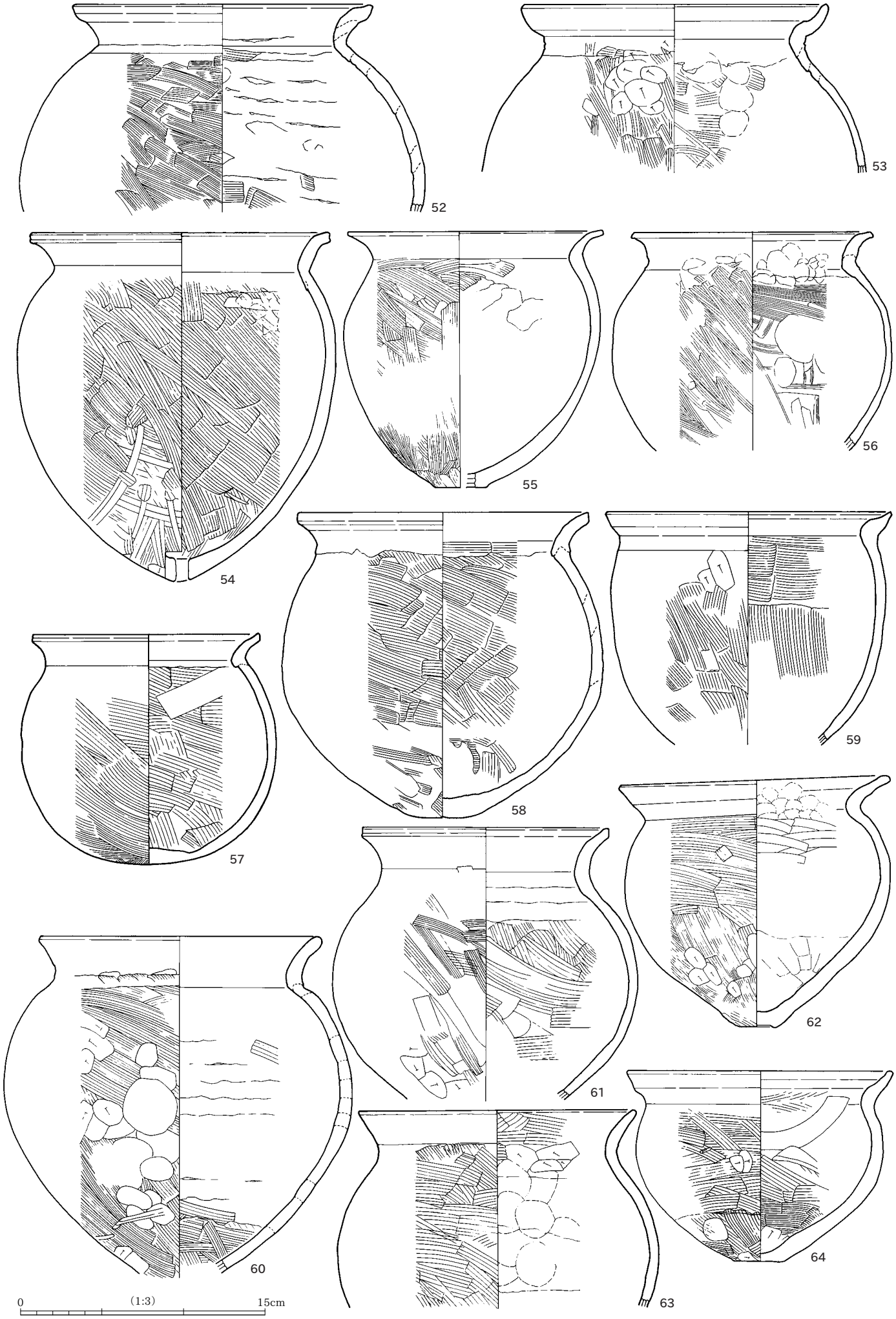
0　(1：40)　2m

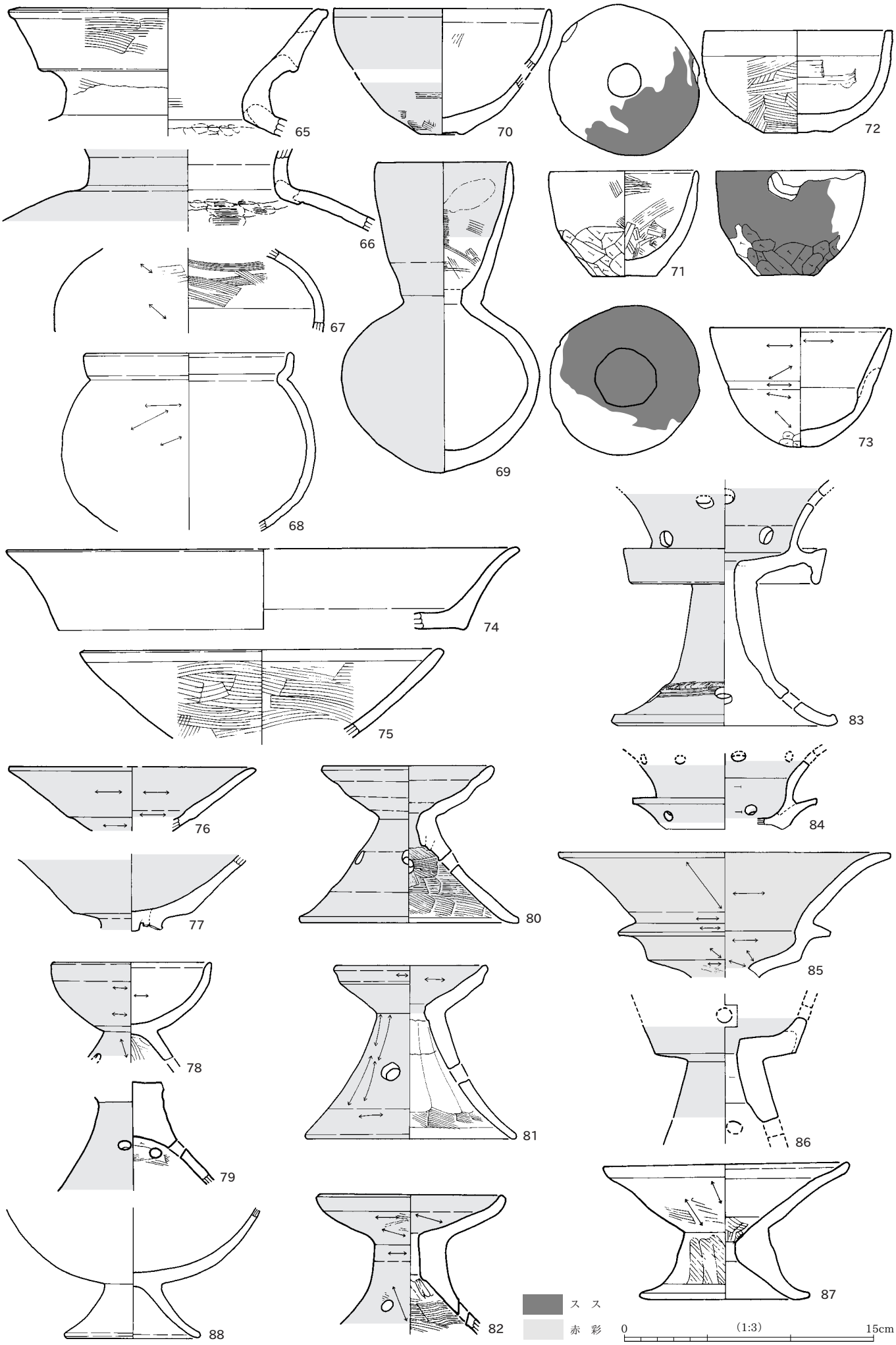

SI155
（1～25）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
SI144（26～49）
26
27
28
29
30
赤　彩
0
（1:3）
15cm


31
32
33
34
35
36
SI 144
SK164
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

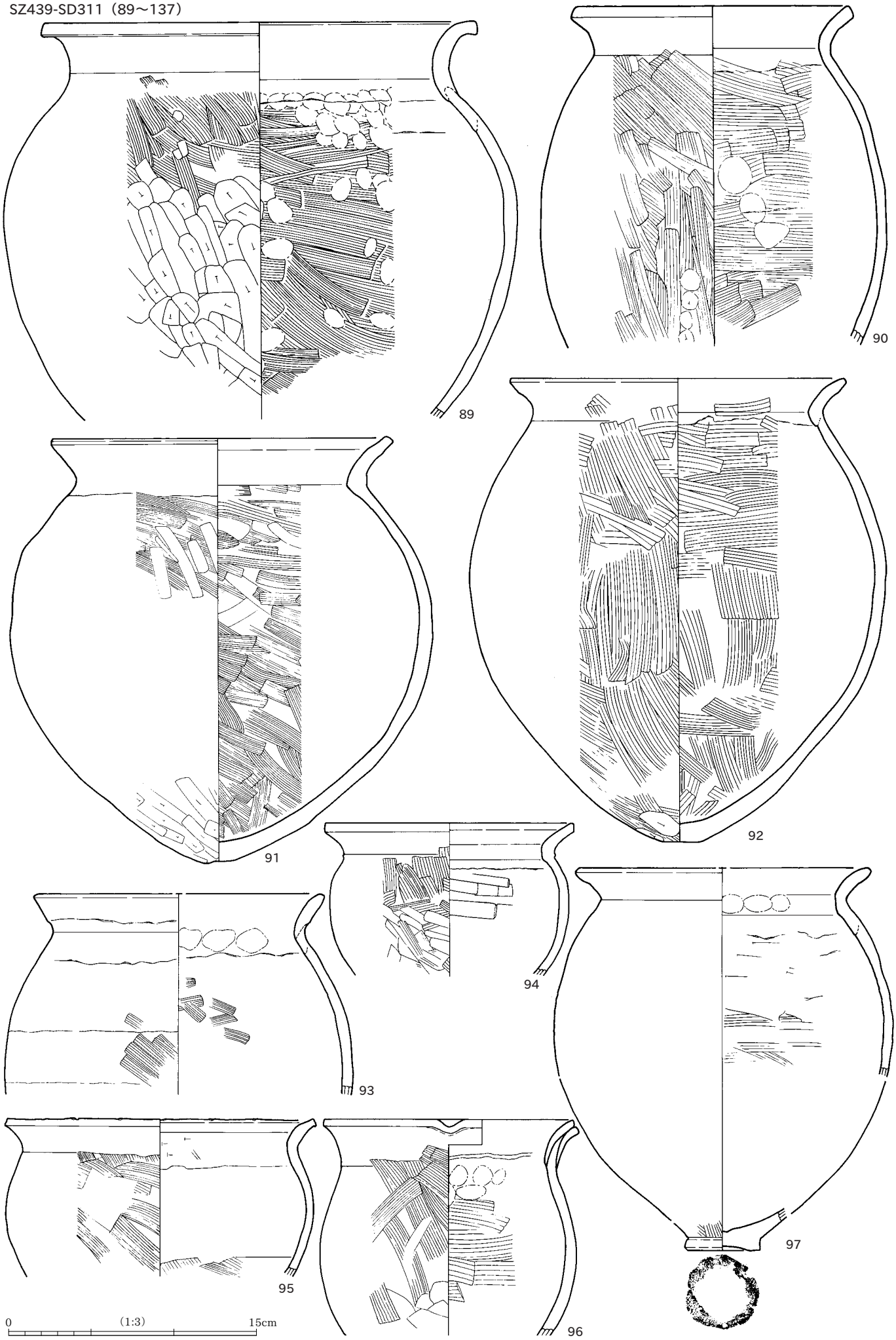
SI36（50～88）

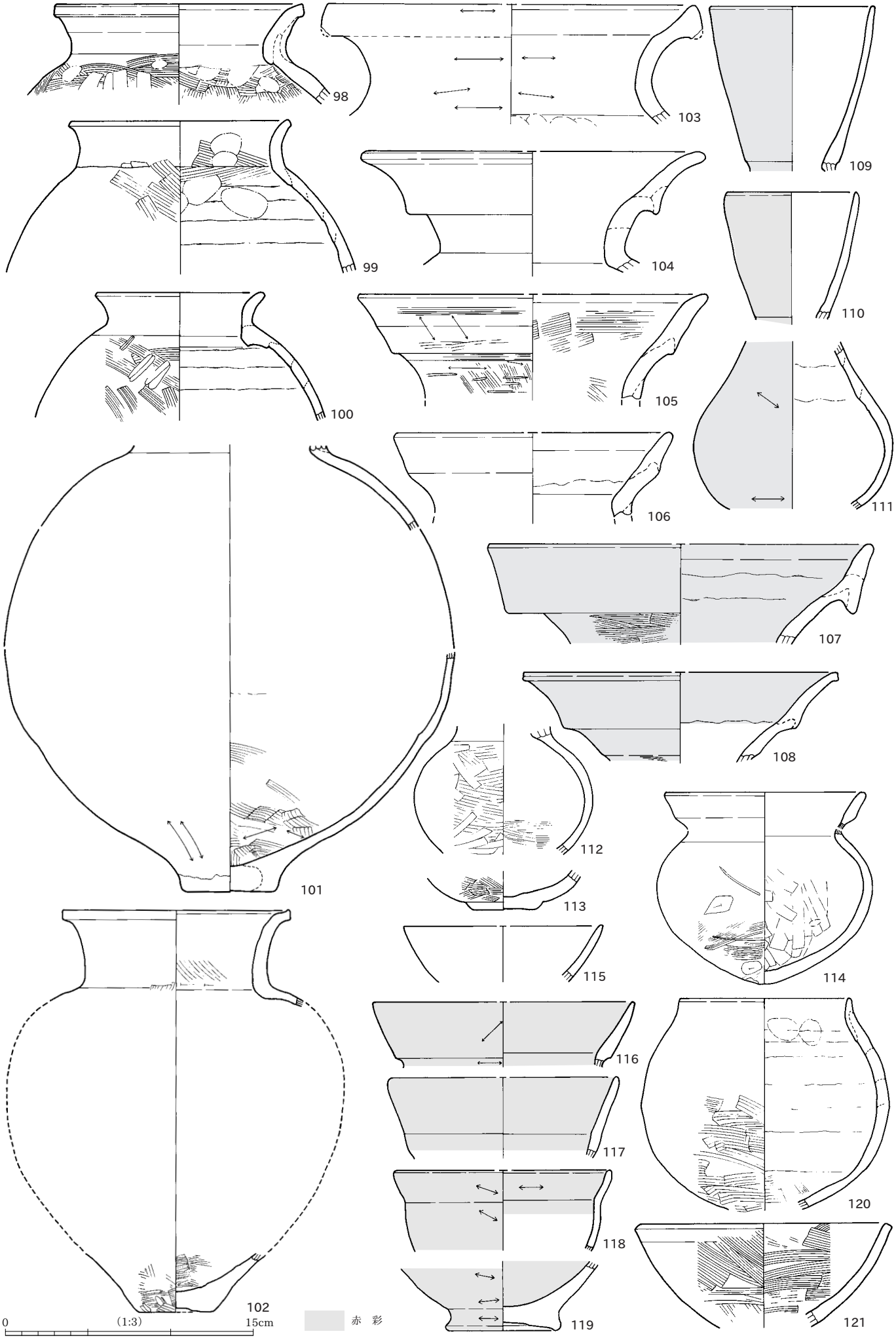

50
51
赤 彩
0
(1:3)
15cm

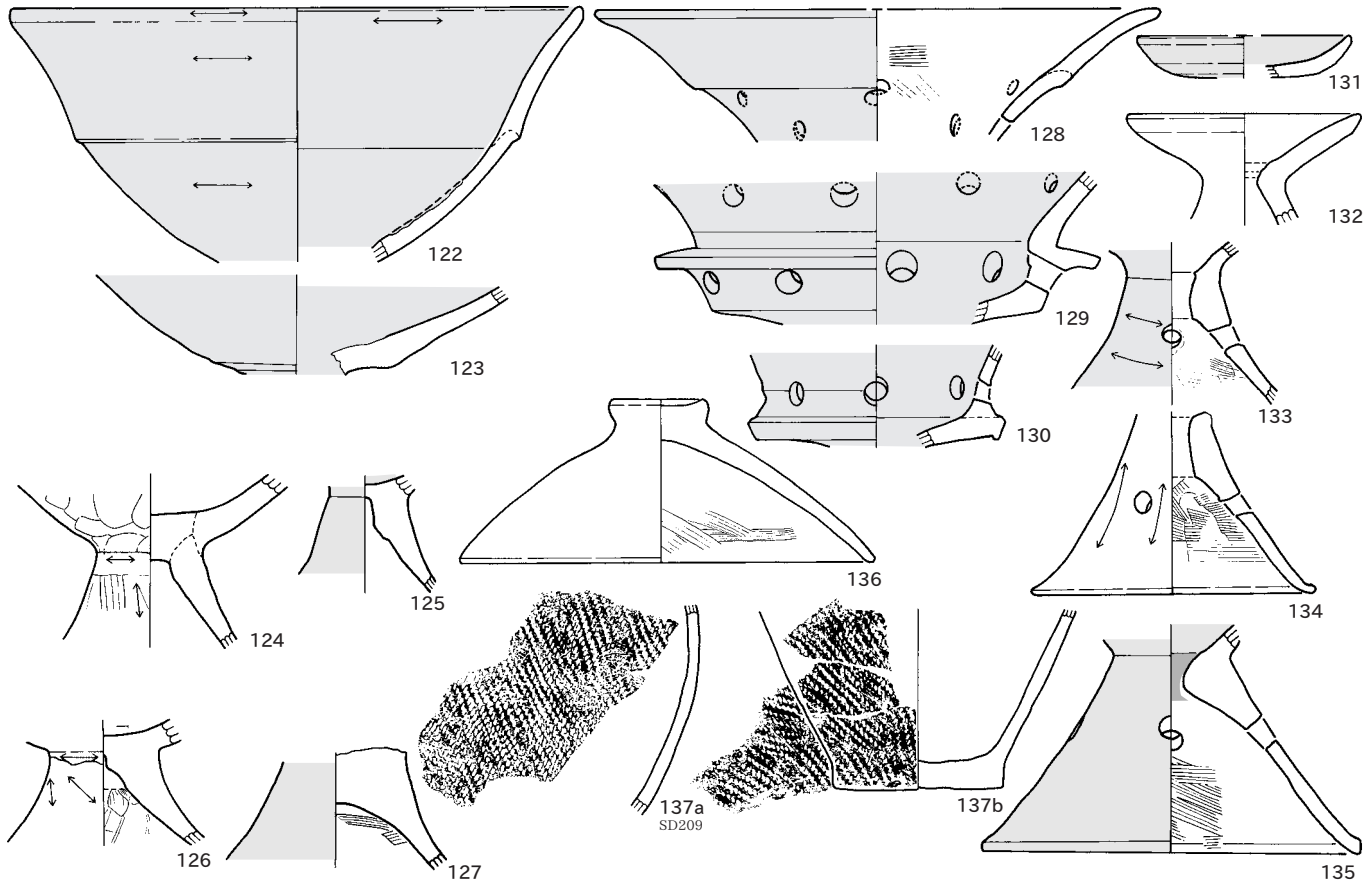

52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
0
(1:3)
15cm


65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
ス　ス
赤　彩
0
(1:3)
15cm

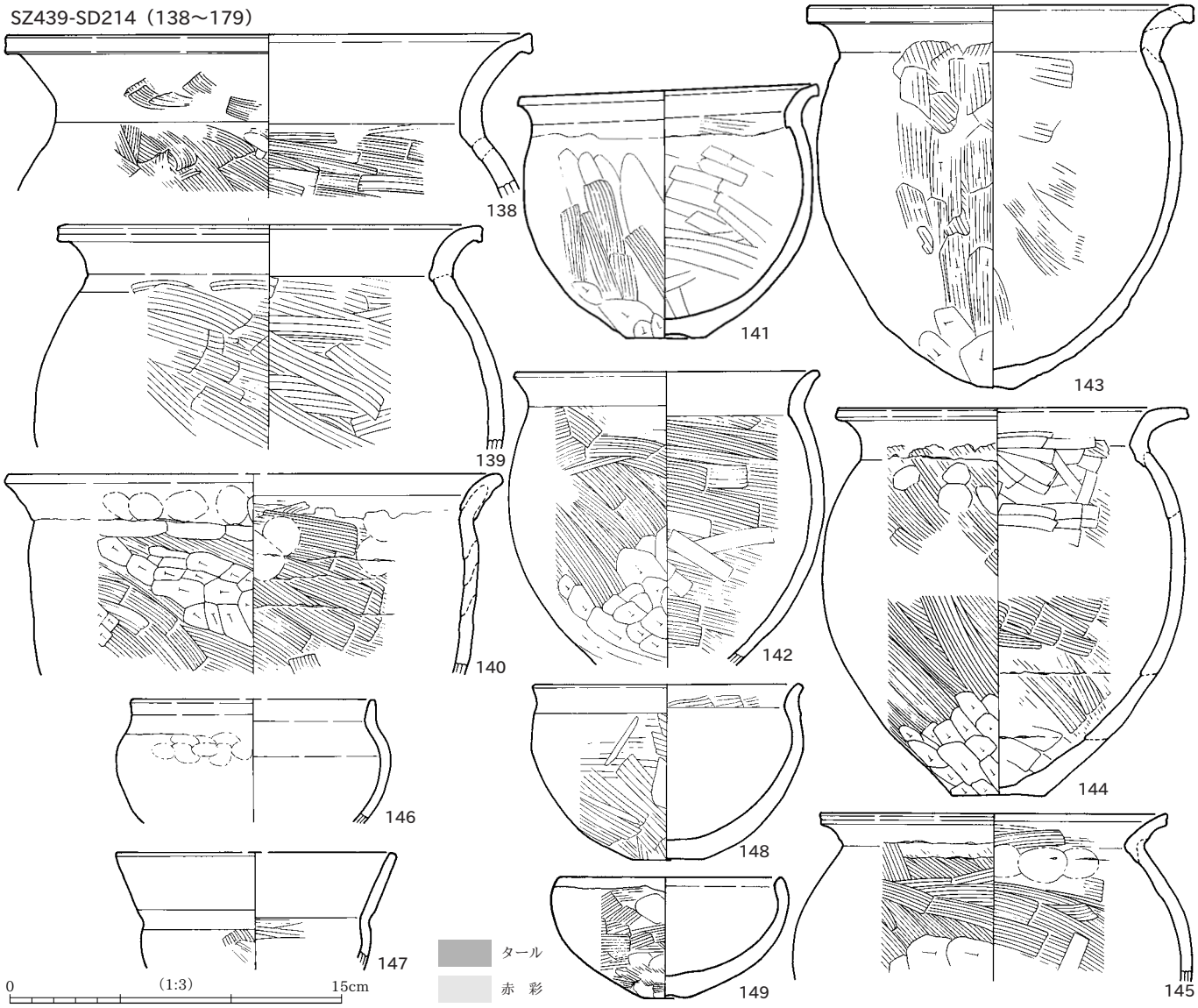
SZ439-SD311（89～137）

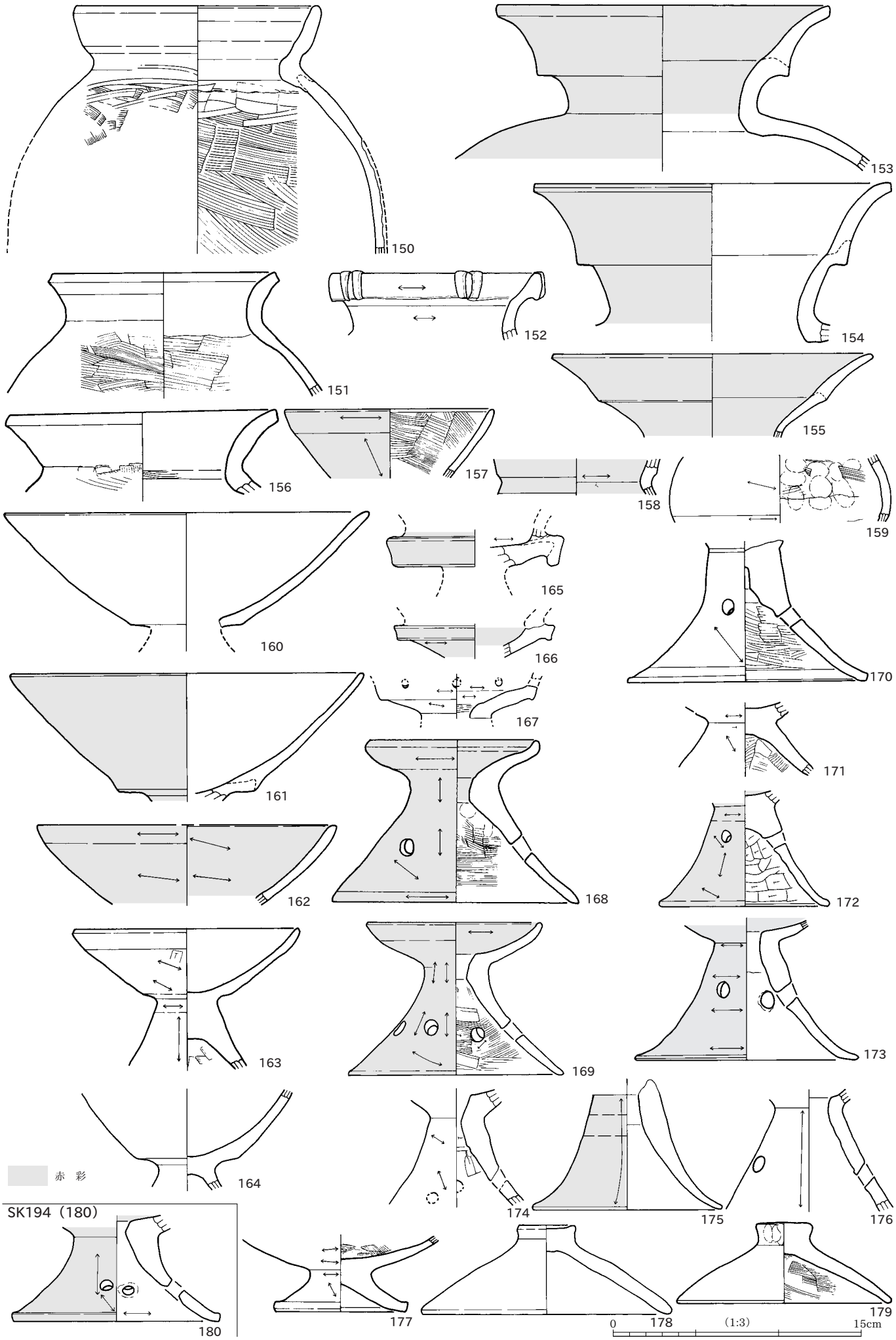



98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
0
(1:3)
15cm
赤 彩

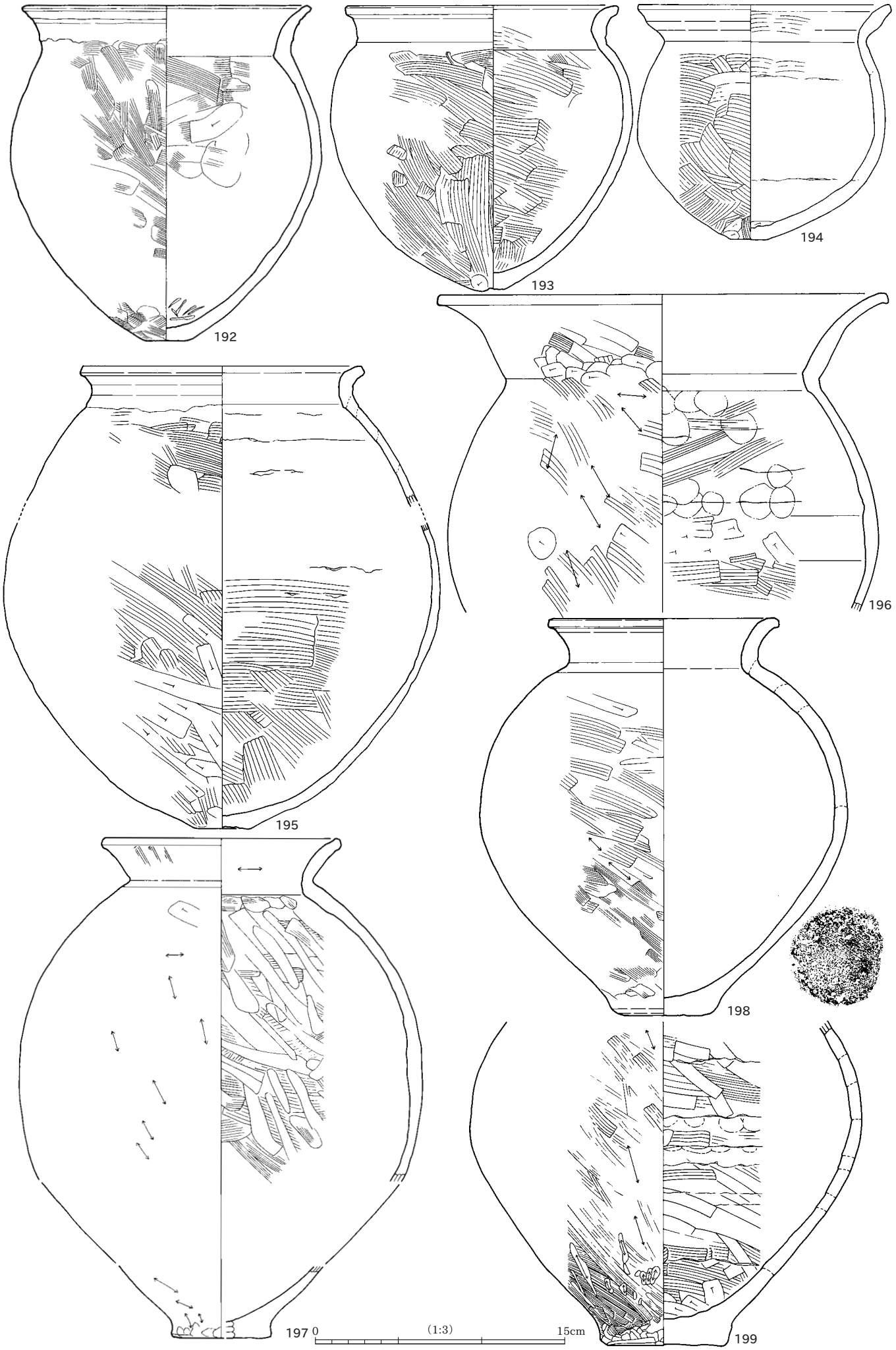


SZ439-SD214（138～179）

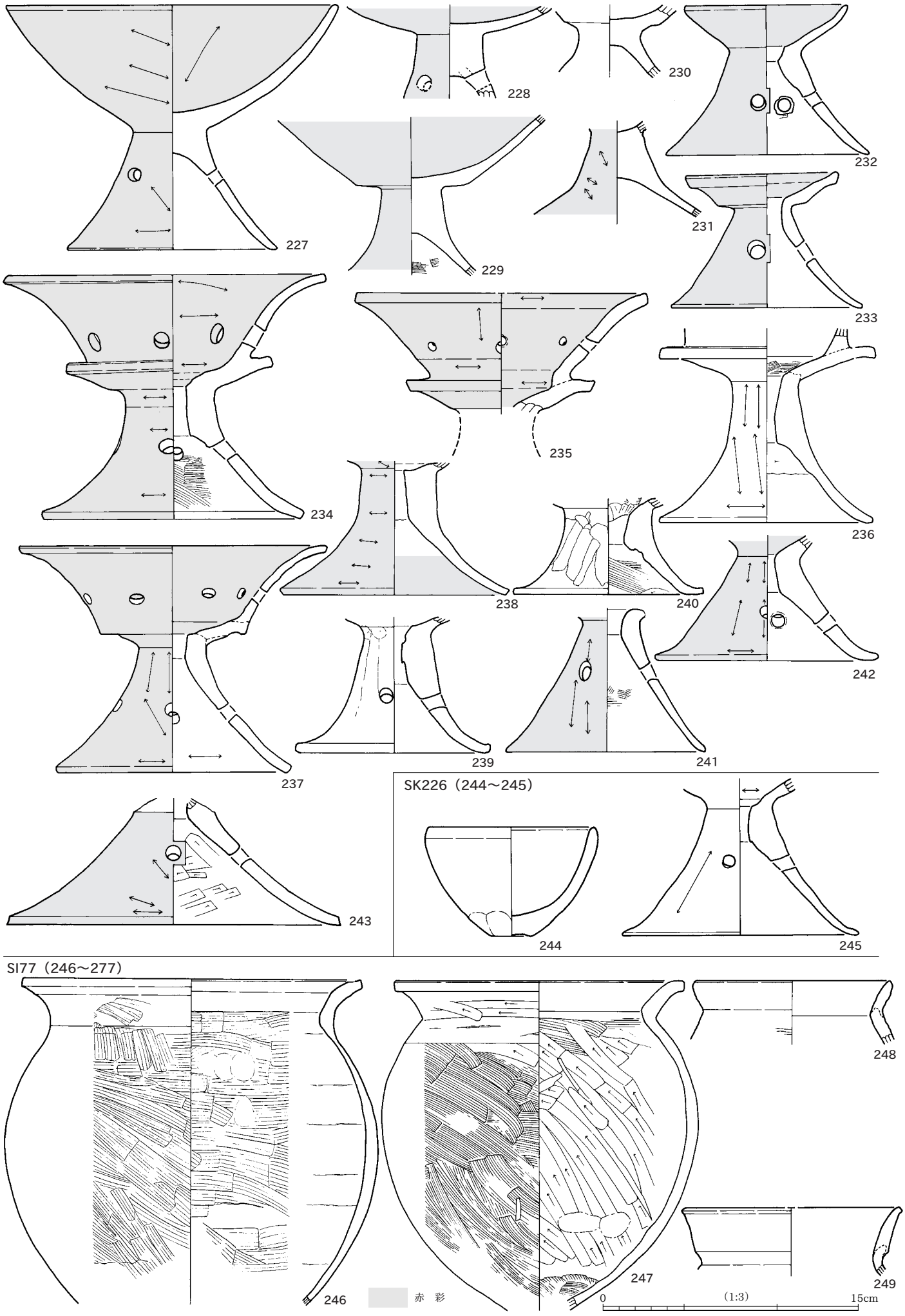


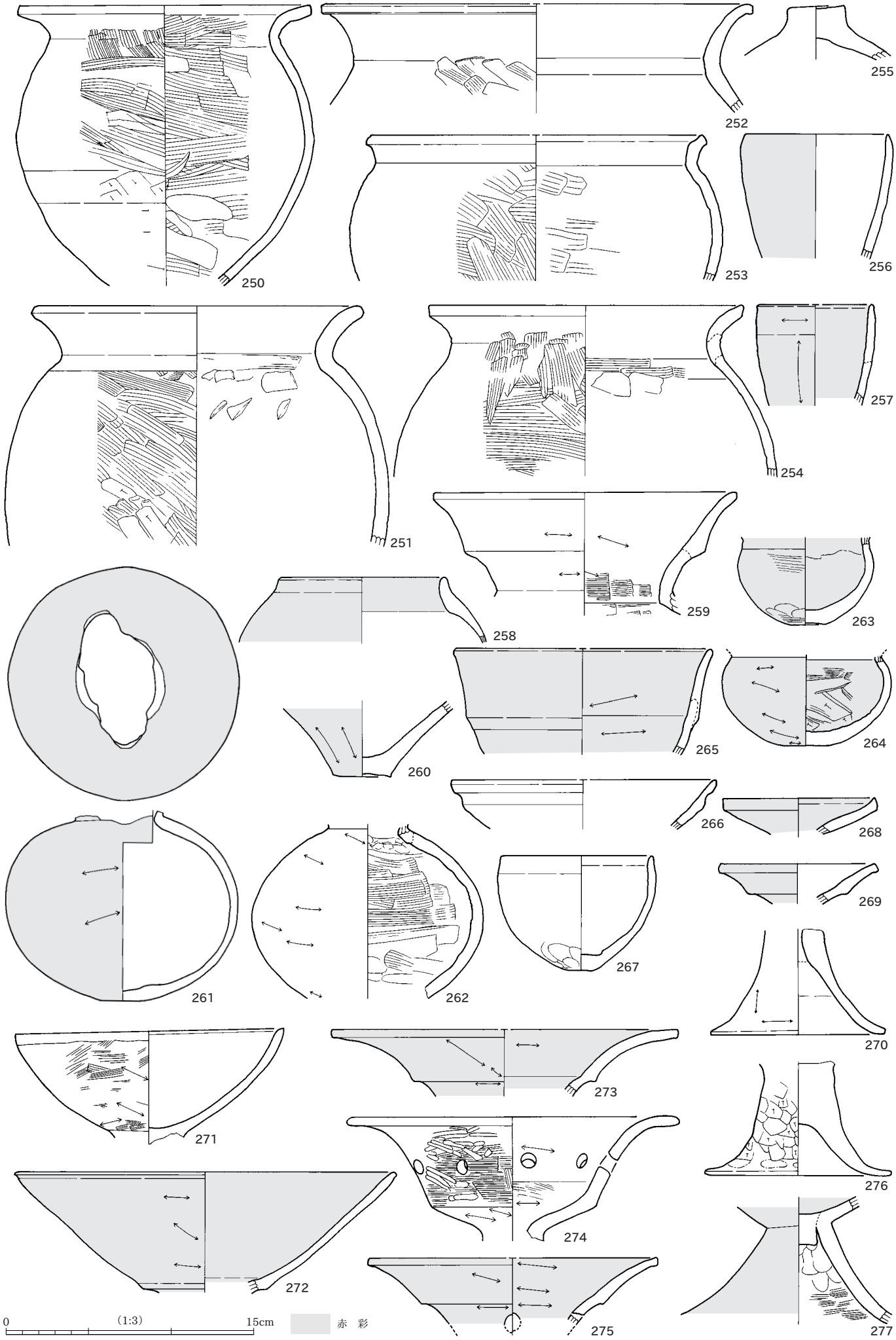

150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
SK194（180）
赤 彩
0
(1:3)
15cm

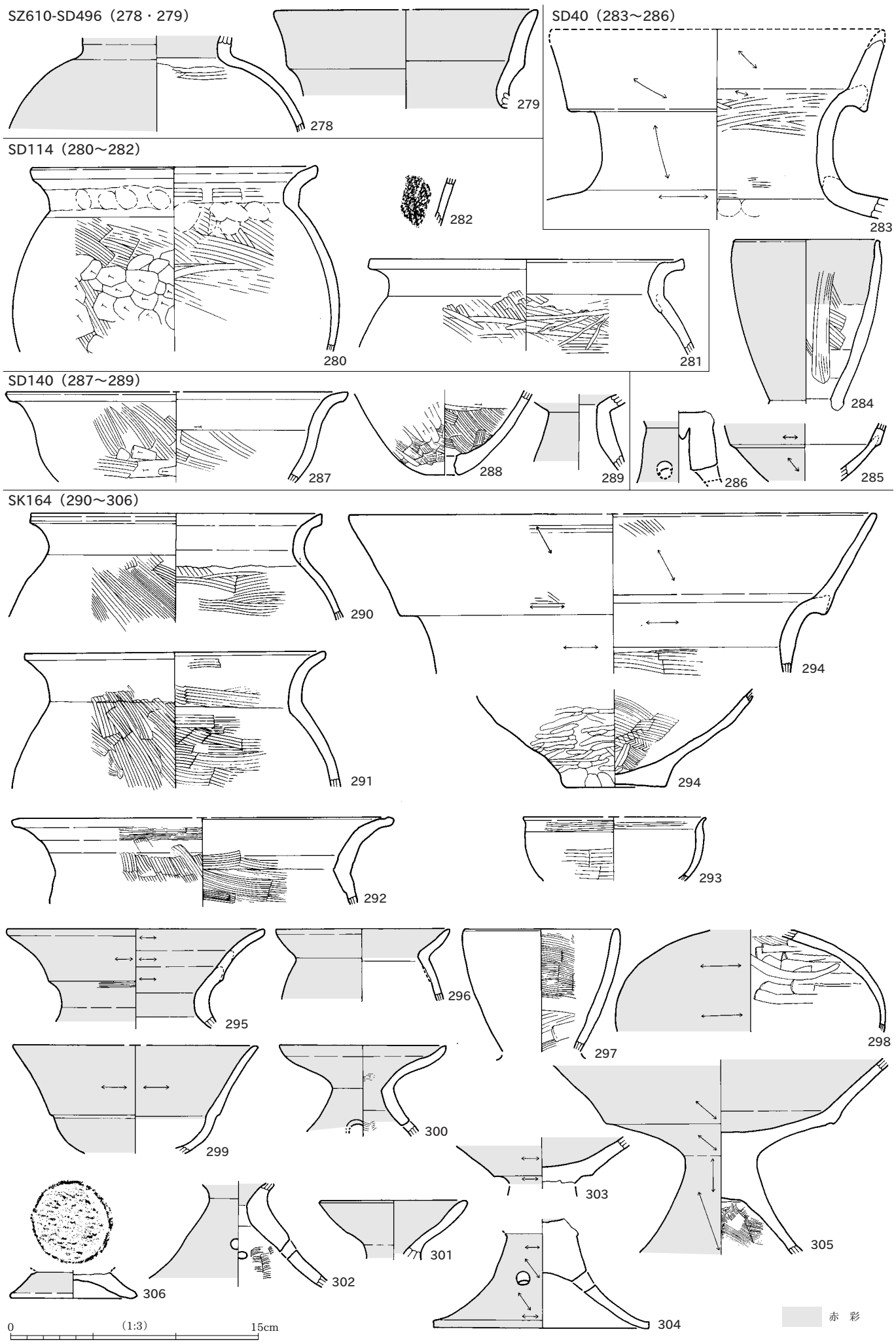
SZ439-SD209（181～243）
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
0
(1:3)
15cm


192
193
194
195
196
197
198
199
0
(1:3)
15cm

200
202
201
205
203
206
207
208
204
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
赤 彩
0
(1:3)
15cm

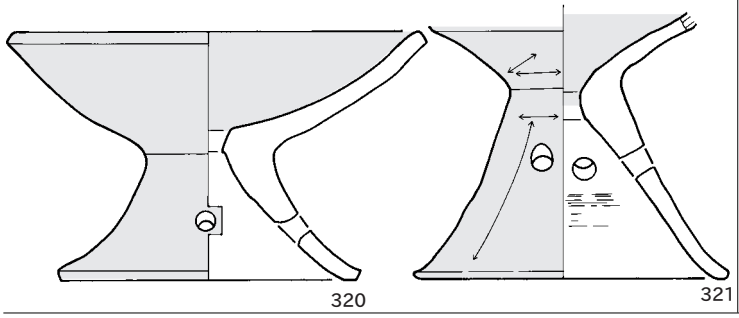

227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
SK226（244～245）
244
245
SI77（246～277）
246
247
248
249
赤　彩
0
(1:3)
15cm


250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
0
(1:3)
15cm
赤 彩

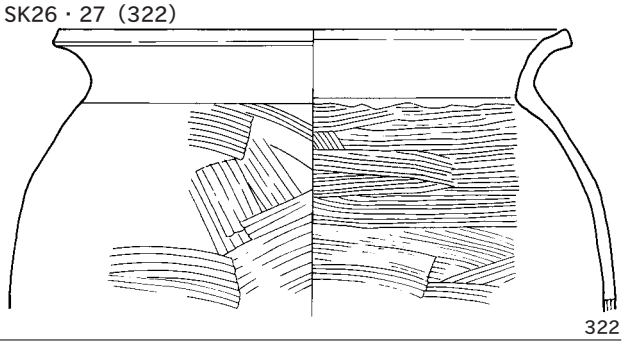

SZ610-SD496（278・279）
278
279
SD40（283～286）
283
SD114（280～282）
280
281
282
284
SD140（287～289）
287
288
289
286
285
SK164（290～306）
290
294
291
294
292
293
295
296
297
298
299
300
303
305
301
302
306
304
0
(1:3)
15cm
赤　彩

SD185（307～321）
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
0
(1:3)
15cm

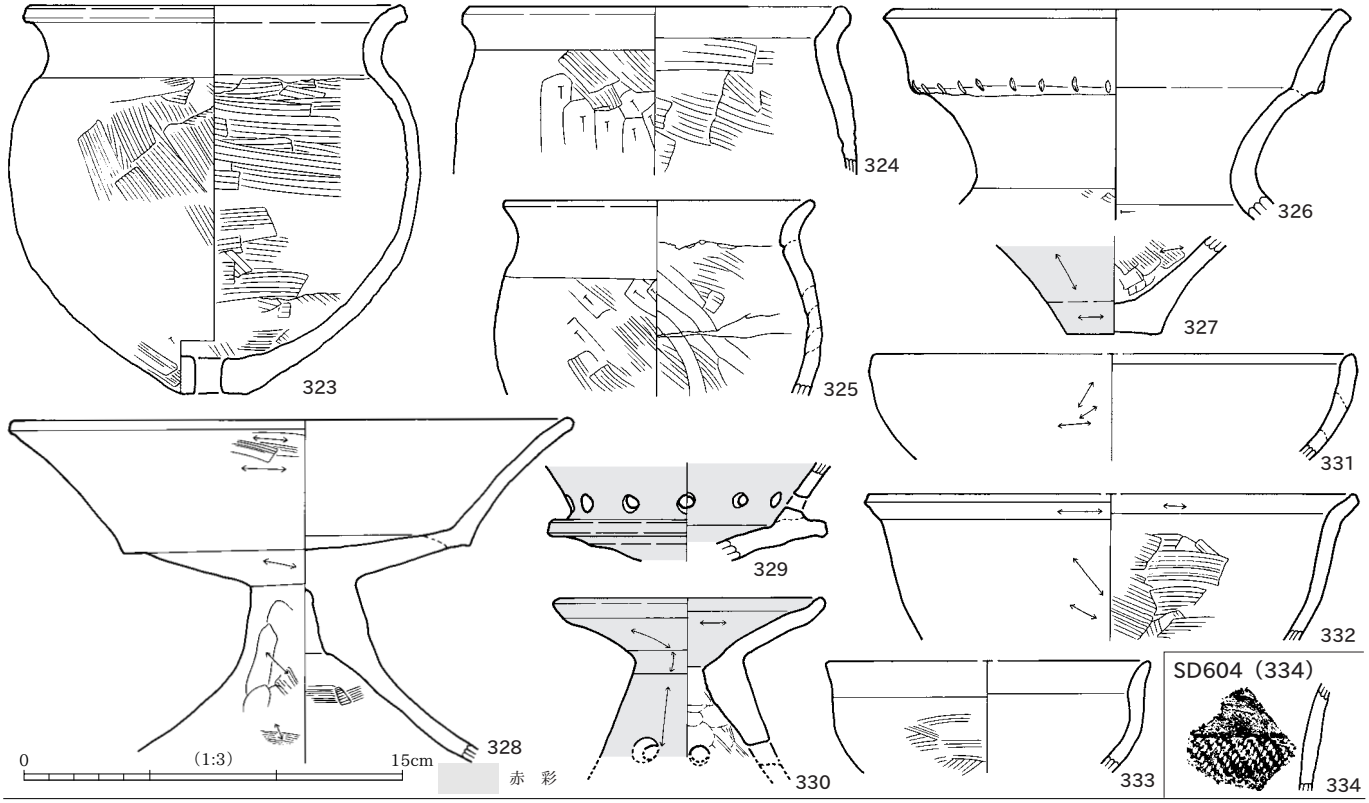
SD185（320・321）



SK26・27（322）

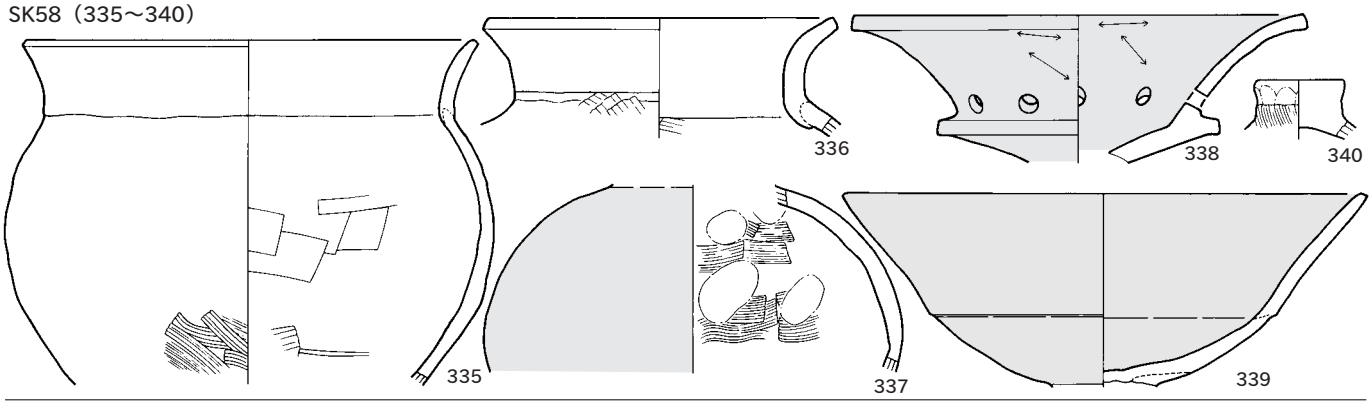


SD203（323～333）

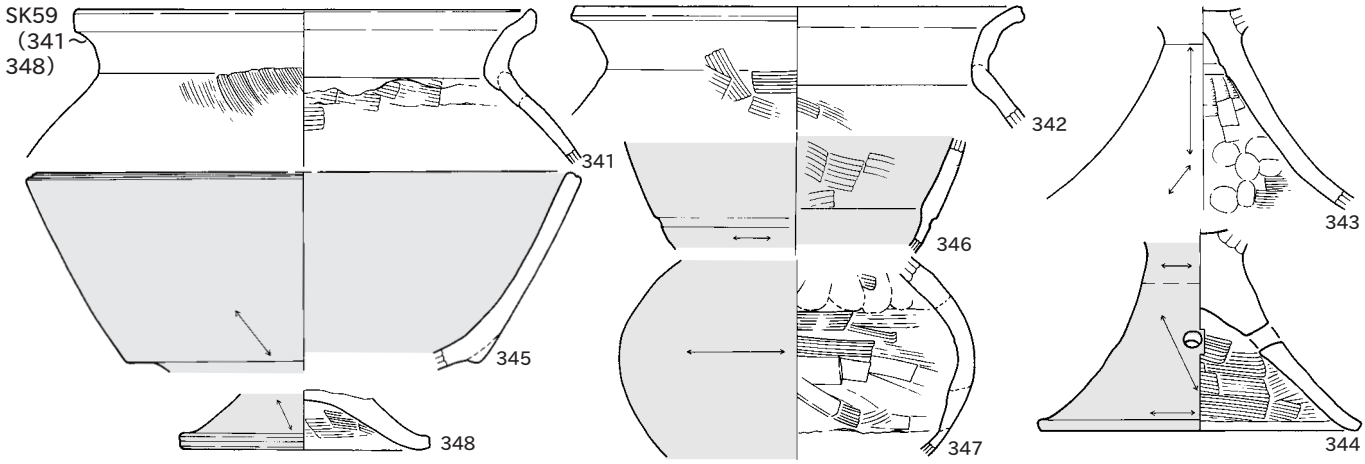


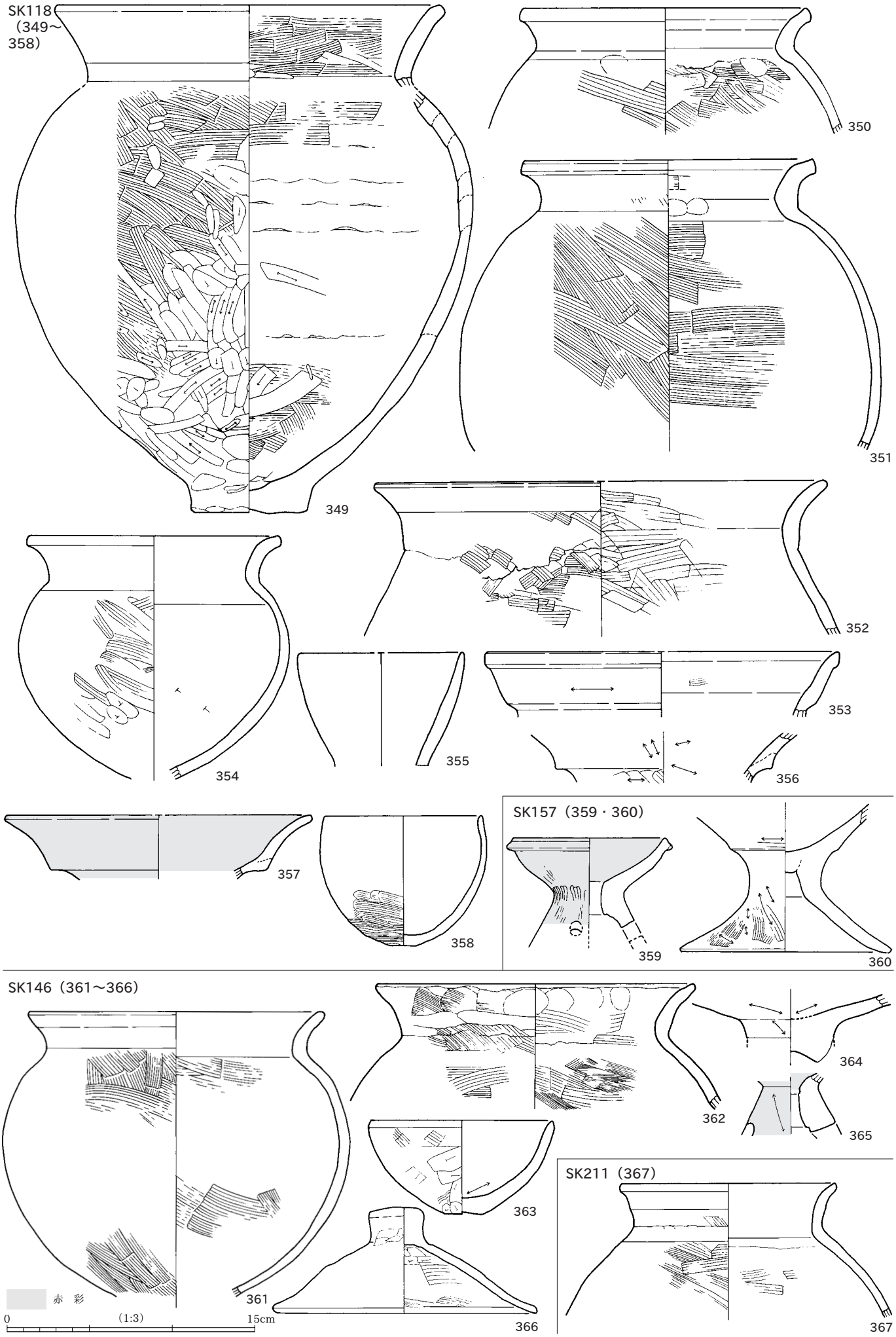
SD604（334）

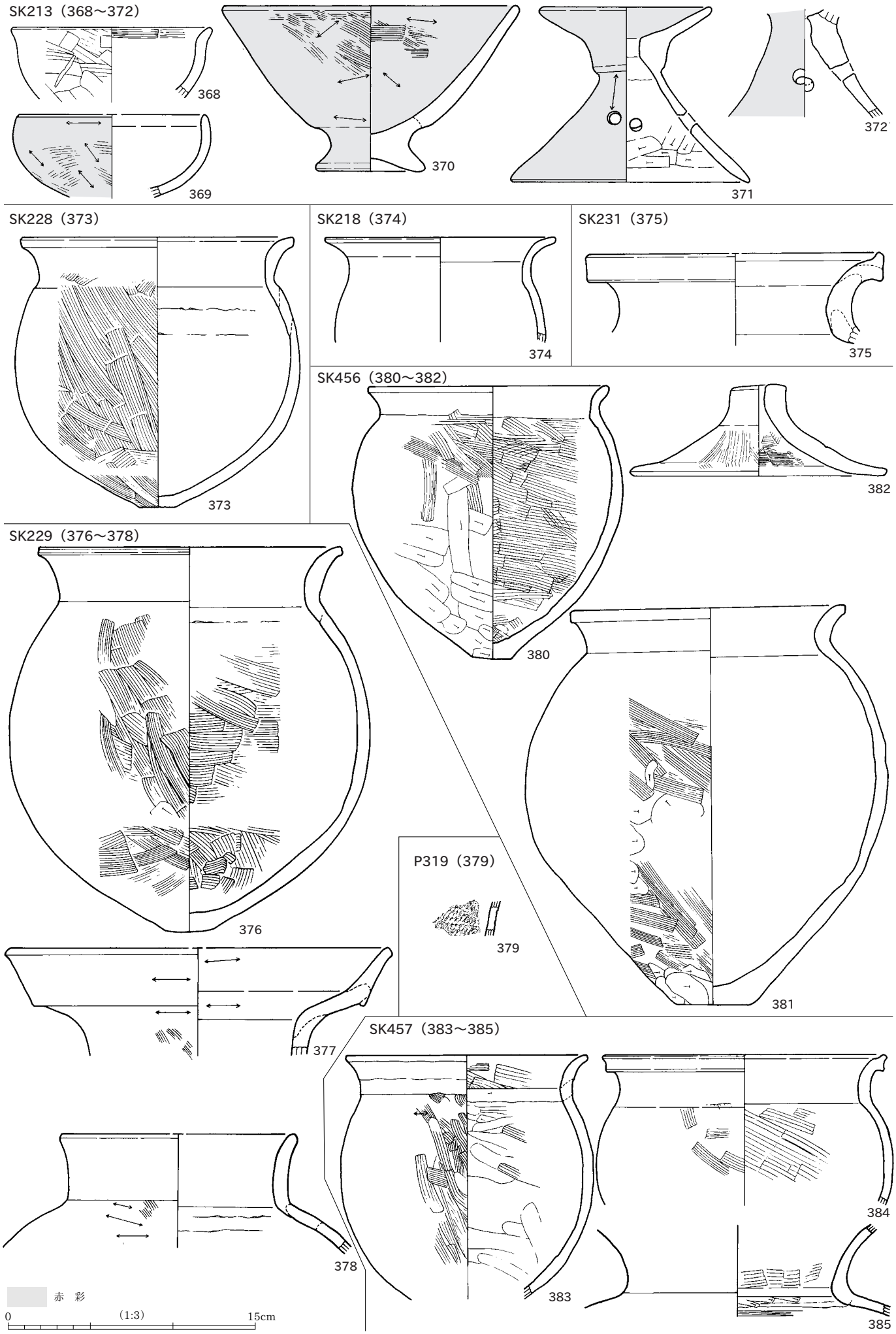
SK58（335～340）

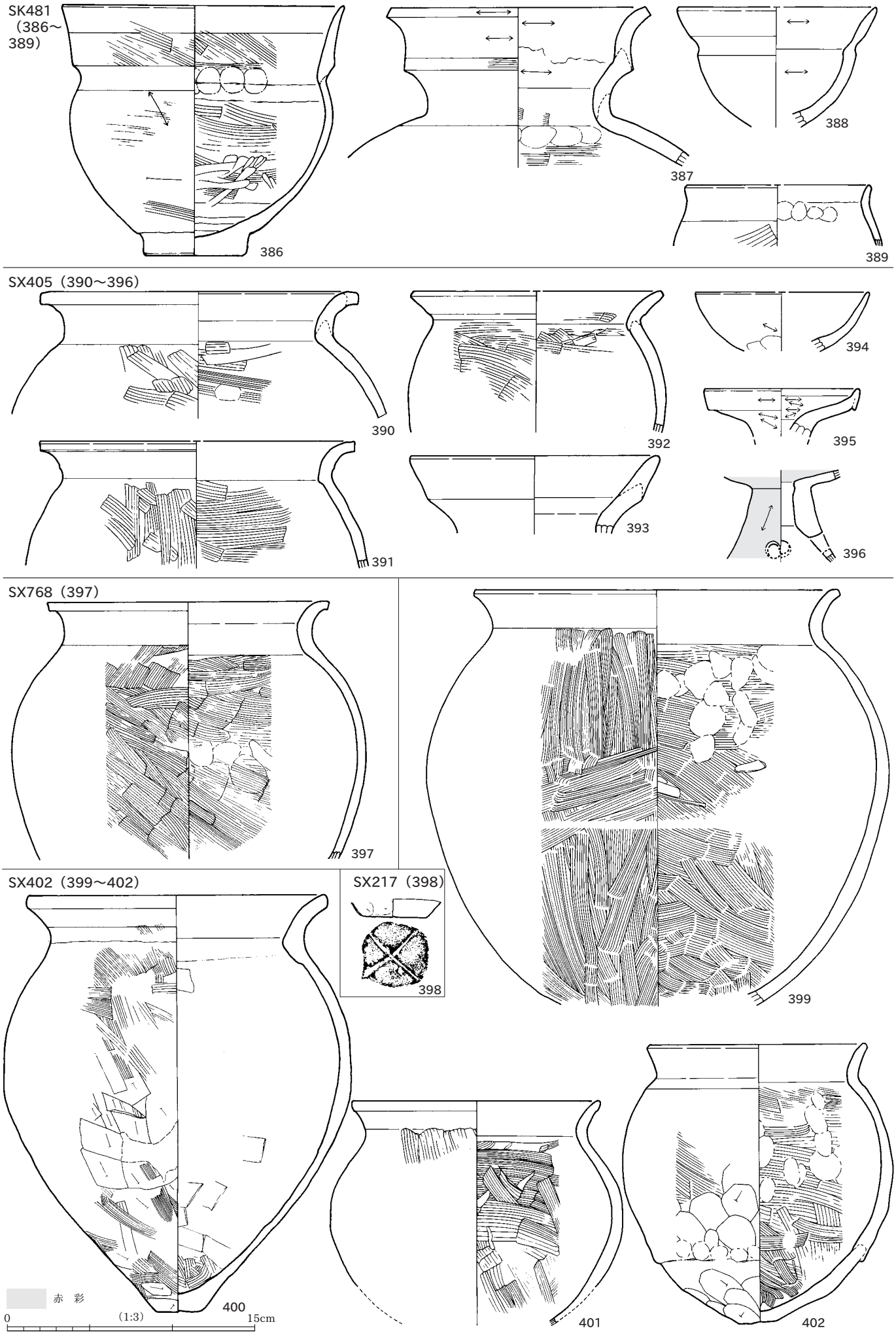


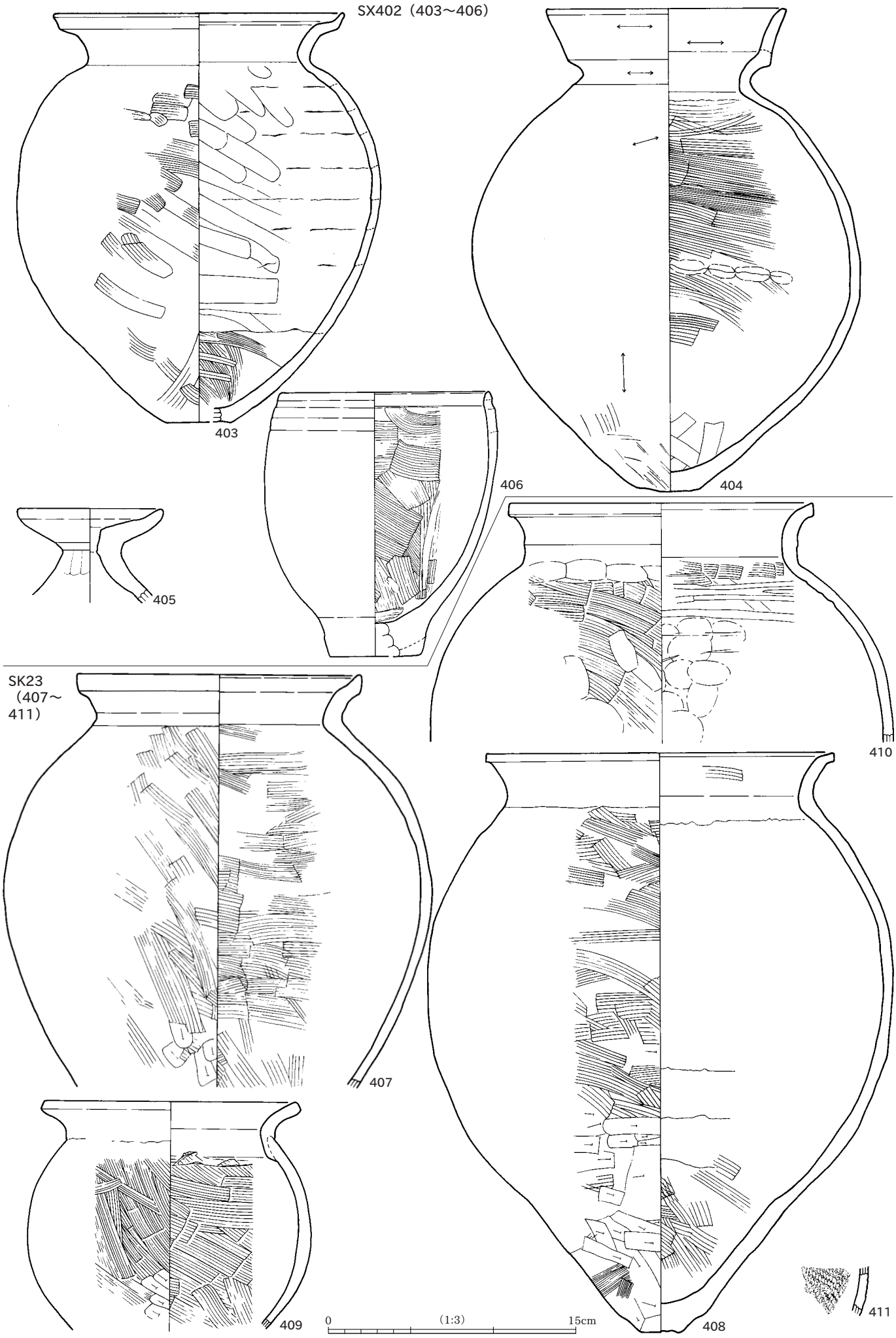
SK59（341～348）

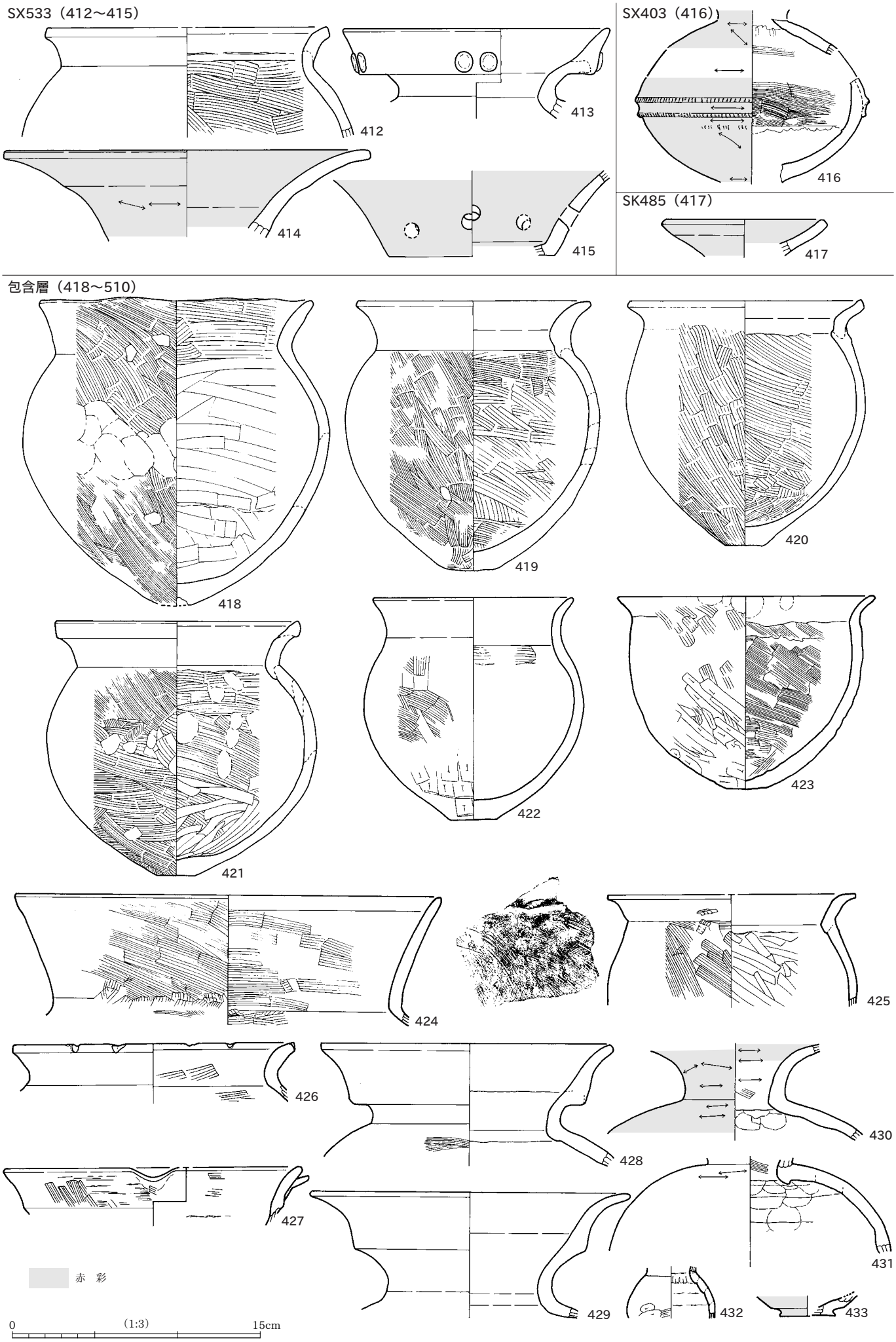


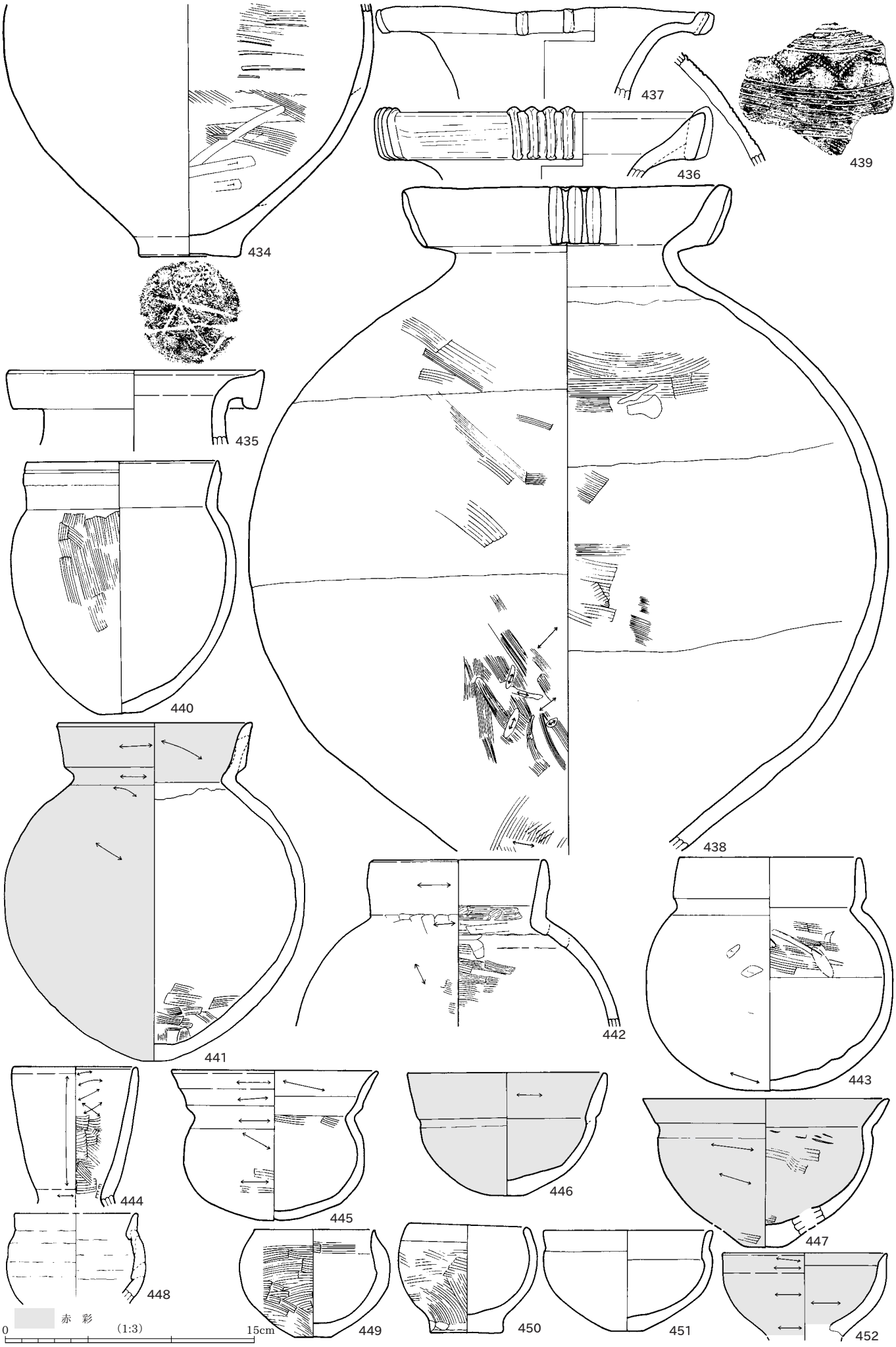

SK118
（349～
358）
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
SK157（359・360）
359
360
SK146（361～366）
361
362
363
364
365
366
SK211（367）
367
赤　彩
0
（1:3）
15cm

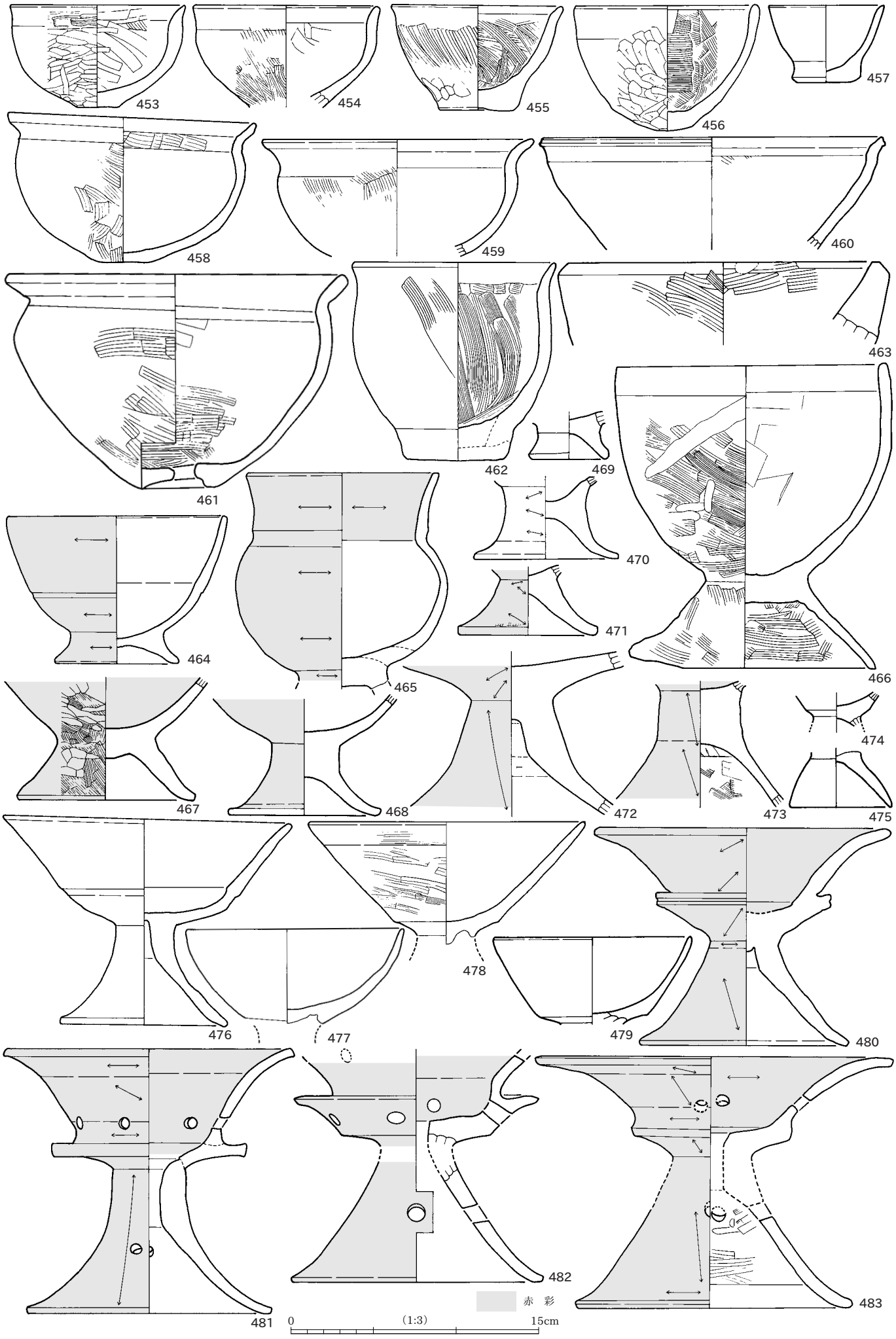

SK213（368～372）
368
369
370
371
372
SK228（373）
373
SK218（374）
374
SK231（375）
375
SK456（380～382）
380
381
382
SK229（376～378）
376
377
378
P319（379）
379
SK457（383～385）
383
384
385
赤 彩
0
(1:3)
15cm

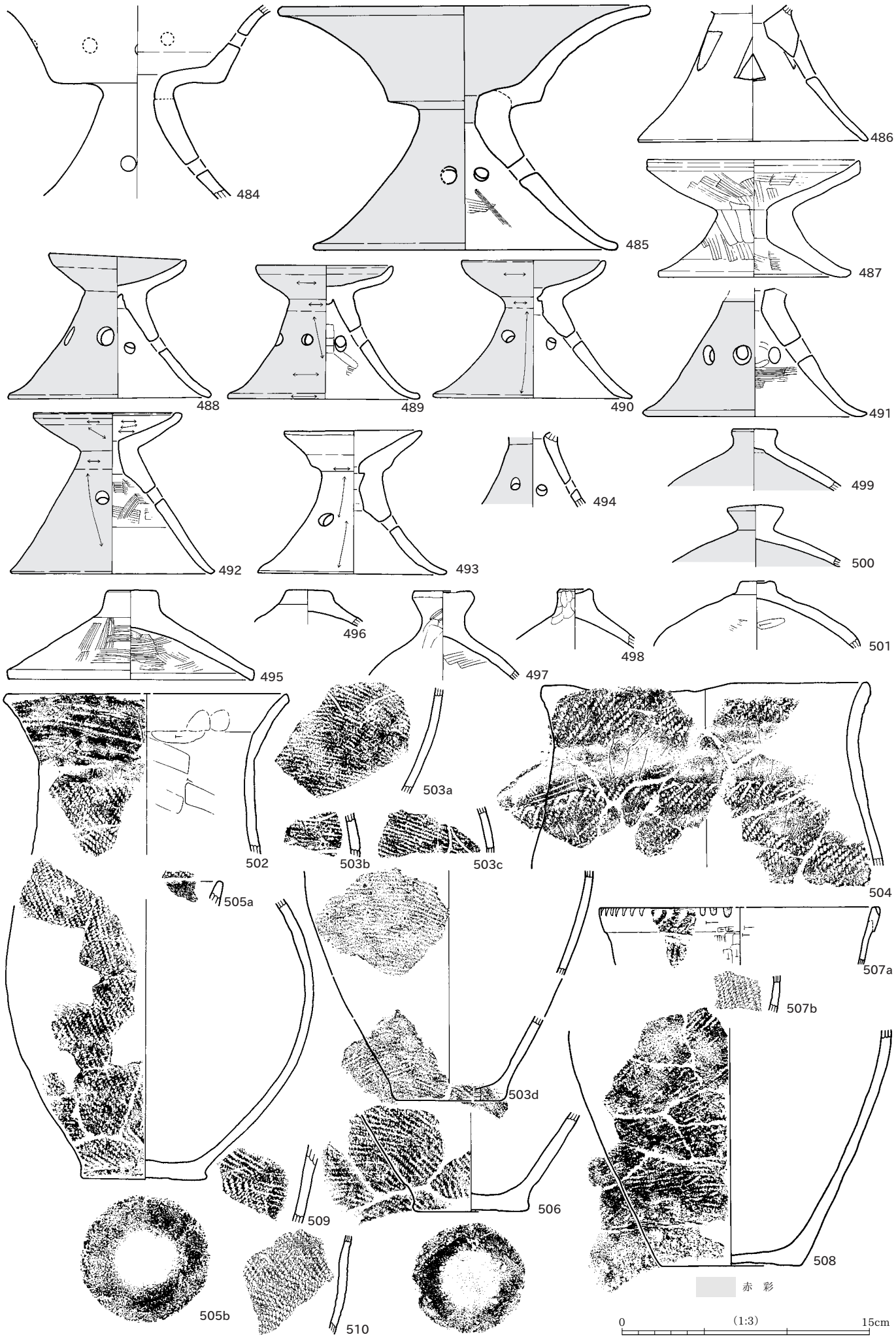

SK481
（386～
389）
386
387
388
389
SX405（390～396）
390
391
392
393
394
395
396
SX768（397）
397
399
SX402（399～402）
SX217（398）
398
400
401
402
赤 彩
0
（1:3）
15cm


SX402（403～406）
403
404
405
406
SK23
（407～
411）
407
408
409
410
411
0
(1:3)
15cm

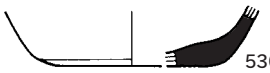

SX533（412～415）
412
413
414
415
SX403（416）
416
SK485（417）
417
包含層（418～510）
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
赤　彩
0
(1:3)
15cm

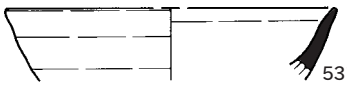

434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
赤 彩
0
(1:3)
15cm


453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
赤 彩
0
(1:3)
15cm


484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503a
503b
503c
503d
504
505a
505b
506
507a
507b
508
509
510
赤 彩
0
(1:3)
15cm

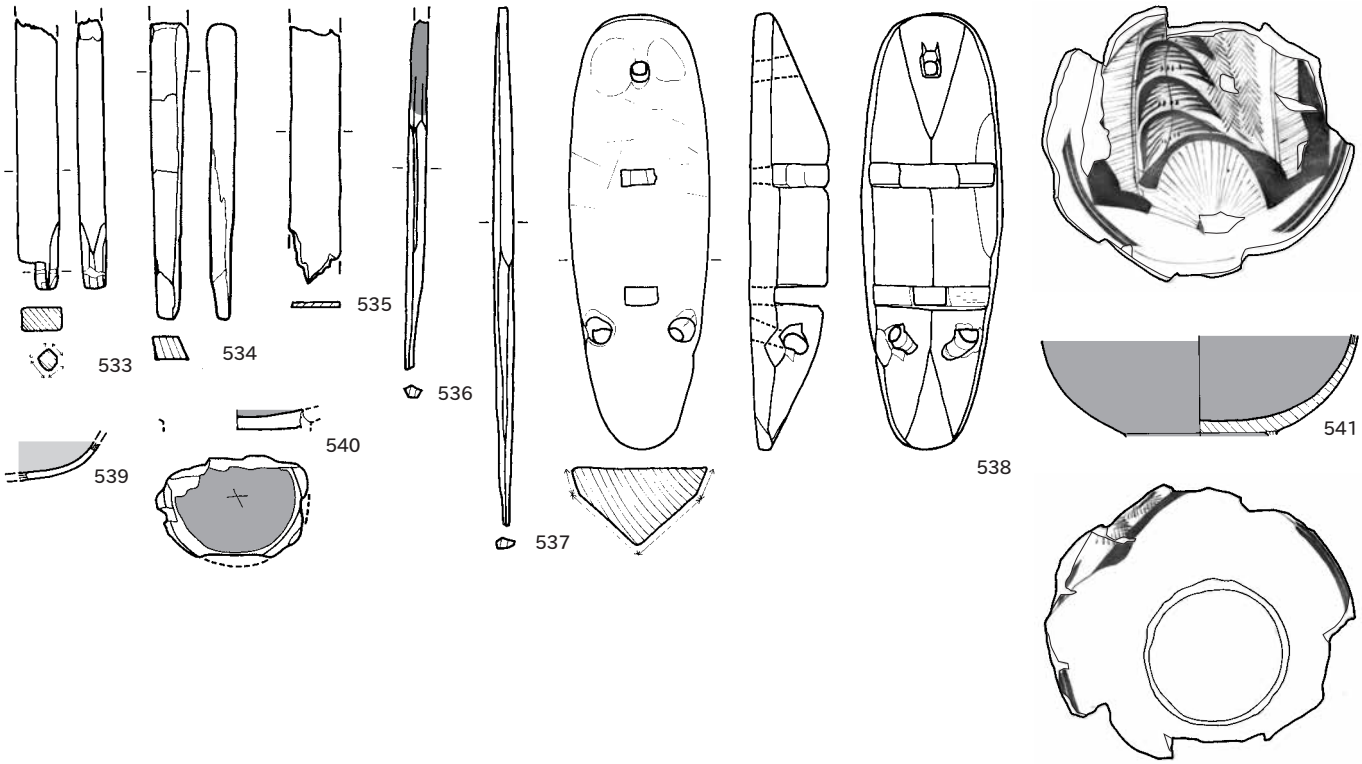
511
512
SK213
513
514
515
SK164
516
SI144
マモウ
517
SZ439-SD311
518
SZ439-SD311
519
SZ439-SD214
520
SI36
521
SI36
522
523
SI144
524
525
526
527
P620
528
P498
529
SI144
スリ
0 (1:5) 20cm (521,527,528)
0 (2:3) 5cm (511,517,518,526)
0 (1:2) 10cm (522～525)
0 (1:3) 15cm (512～516,529)
0 (1:4) 20cm (520)


530

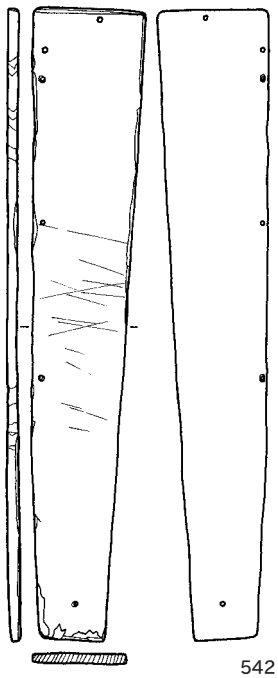

531

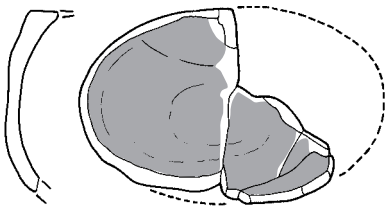
532

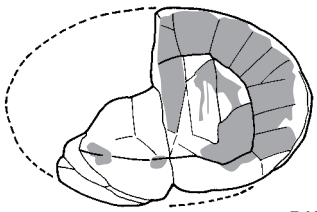
旧河道（533～541）

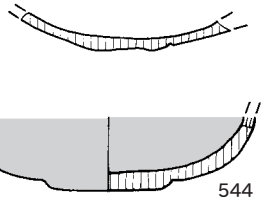


包含層（542～547）

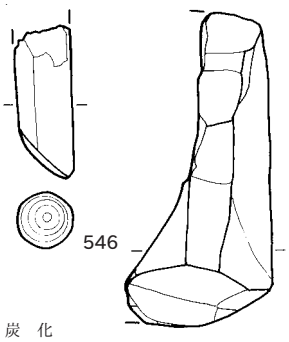

542

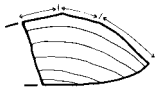



543


544

545


546


547

炭　化
黒　漆
赤　漆

0　(1:4)　20cm（538）
0　(1:3)　15cm（その他）

Ⅰ区　全景（東から）

Ⅱ区　全景（北西から）

36Tr　15・16G グリッド　落ち際検出状況（西から）

35Tr　15D グリッド　落ち際検出状況（南から）

43Tr　17F グリッド　生痕化石（南から）

Ⅰ①区　メインベルトセクション（南西から）

Ⅰ②区　南西壁セクション（北東から）

8E 区　南西壁セクション（北東から）

Ⅰ②区、7D区　完堀（南西から）

7D区　北西壁セクション（南東から）

Ⅰ②区　8E区　完堀（南東から）

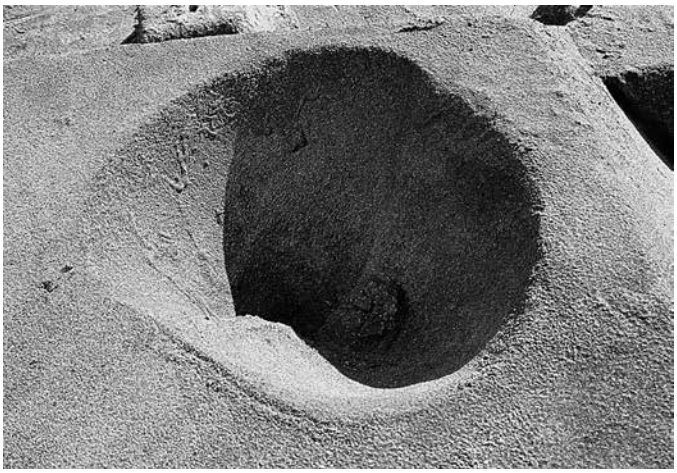
10G区　下層検出状況（西から）

Ⅱ区　北西壁セクション　19Gグリッド

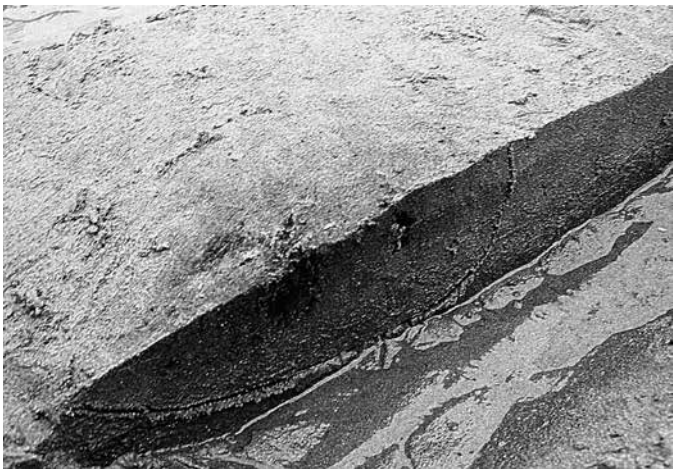
Ⅱ区　北西壁セクション　19Gグリッド

Ⅱ区　北西壁セクション　16H～19Gグリッド　（北東から）

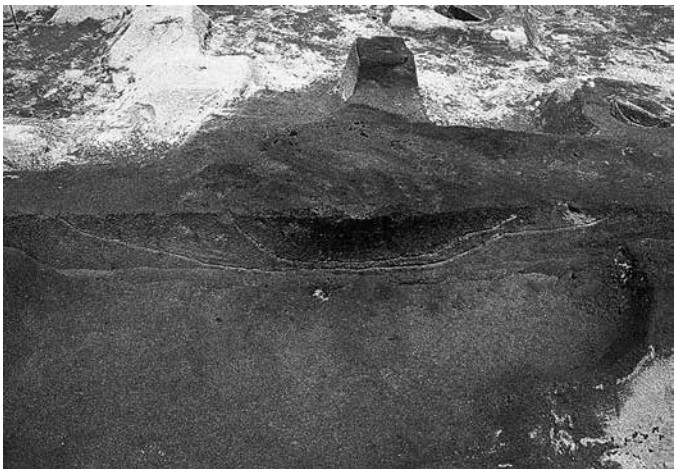
44Tr　南東壁セクション　19Eグリッド（北西から）



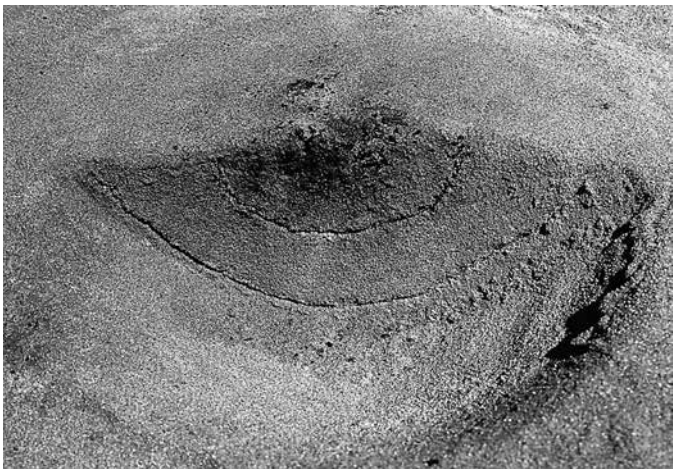
P27　遺物出土状況（北から）



P80　セクション（北から）

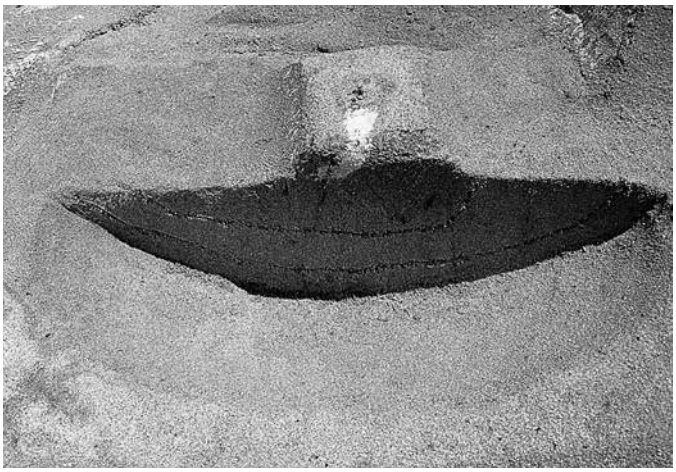


SK82　セクション（南東から）

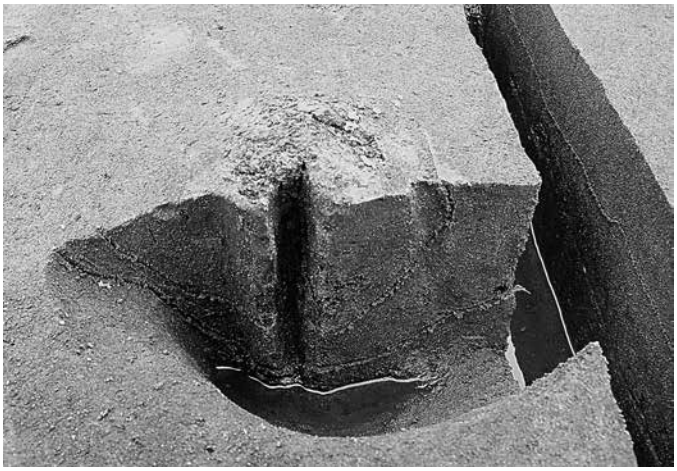


P87　セクション（南東から）

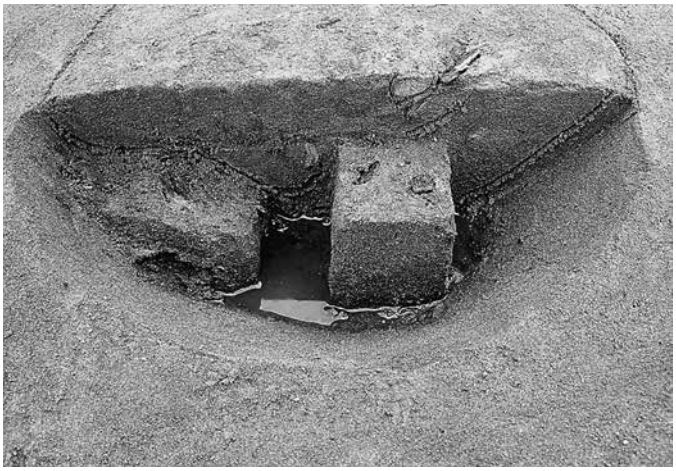
P88　セクション（南東から）



SK90　セクション（西から）



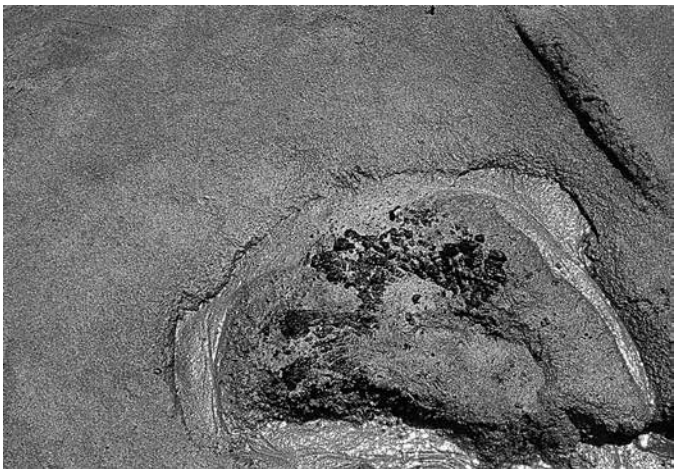
P97　セクション（南から）



P98　セクション（南東から）

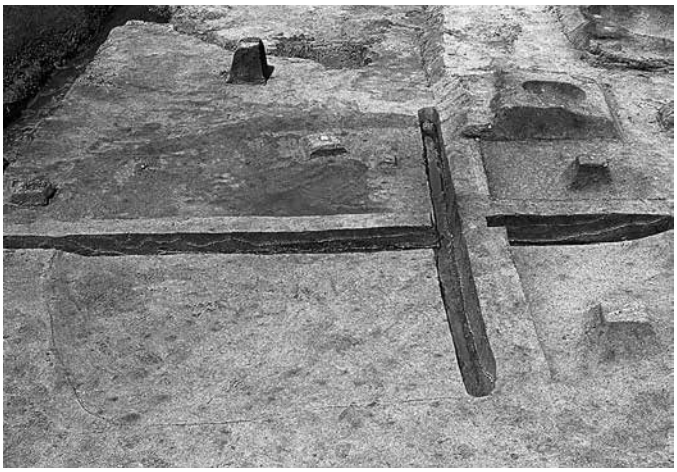
P113　セクション（南東から）

P201　セクション（東から）



炭１・２　検出状況（北西から）

8E区　材の検出状況（南東から）



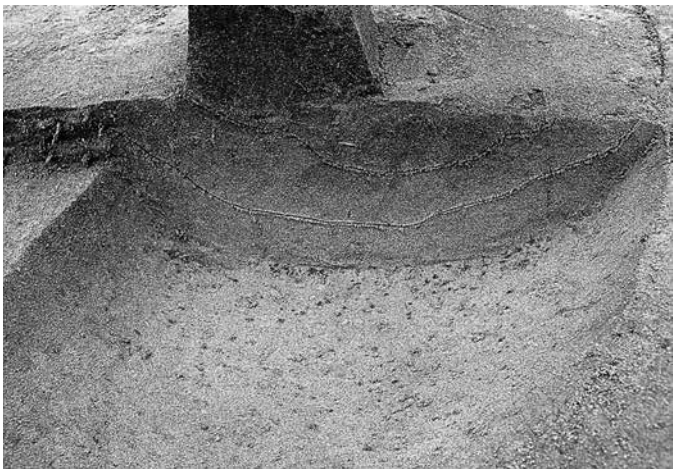
SX103　セクション（北東から）

SK108　セクション（北西から）

SK109　セクション（北西から）

SX115　セクション（南から）

SK139　セクション（南東から）



SK218　セクション（南から）

風倒木224　遺物出土状況（南東から）

16Hグリッド　一括土器出土状況

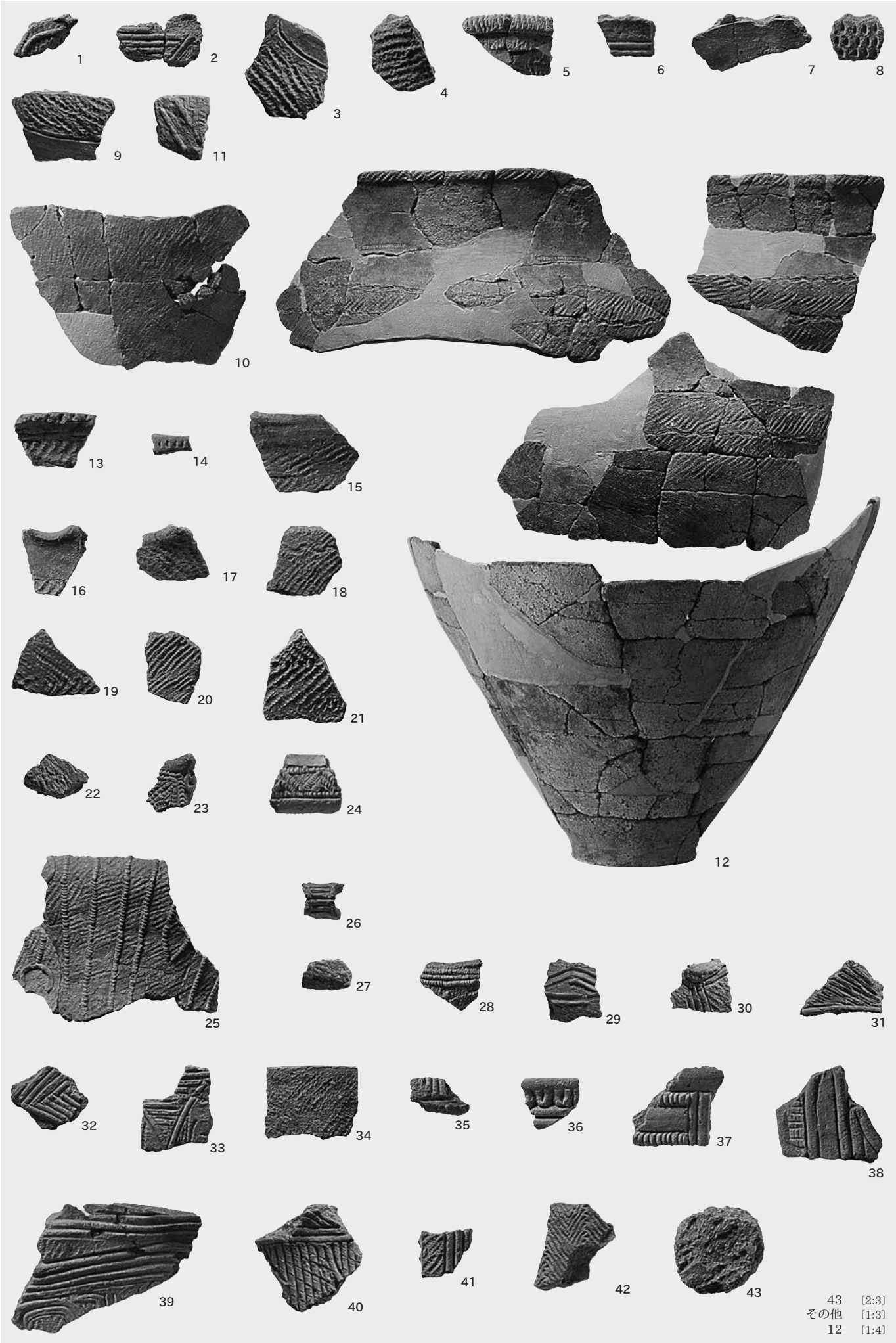
SK3　セクション（南東から）

SK3・P26　完堀（南東から）

SK5　検出状況（東から）

SK5　セクション（北東から）

図 版 86　馬見坂遺跡　縄文土器（1）　P114、SK8・90・107・108・109・153、SX78・103・111・225・風倒木91・224、包含層



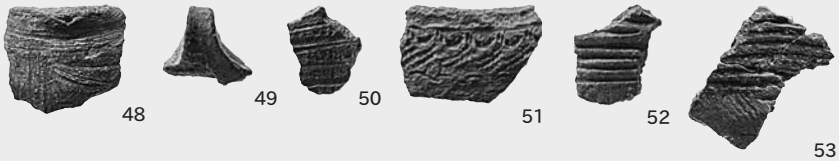
43　〔2:3〕
その他　〔1:3〕
12　〔1:4〕

44

45

47

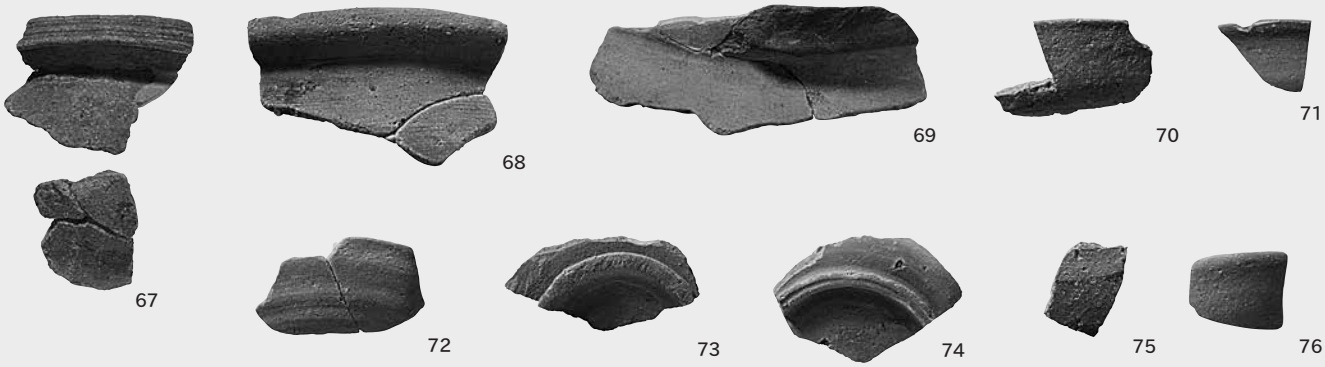
46


48 49 50 51 52 53

54 55 56 57 58 59

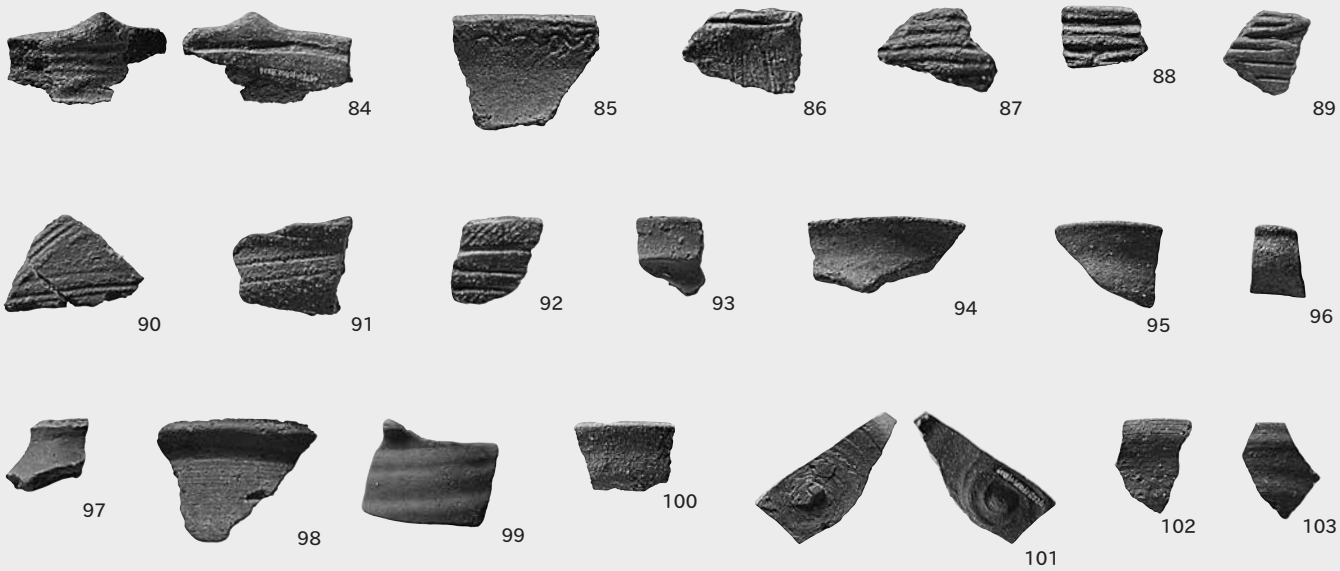
60 61 62 63

64 65 66

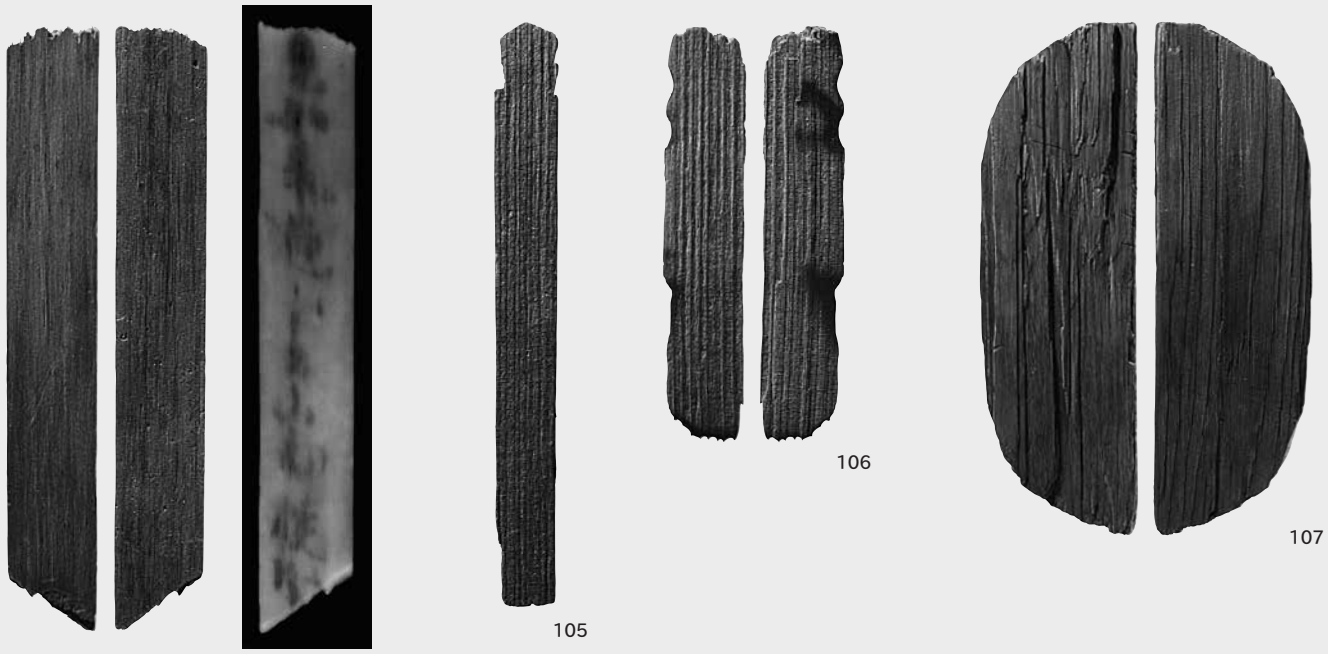

67 68 69 70 71 72 73 74 75 76

77 78 79 80 81 82 83

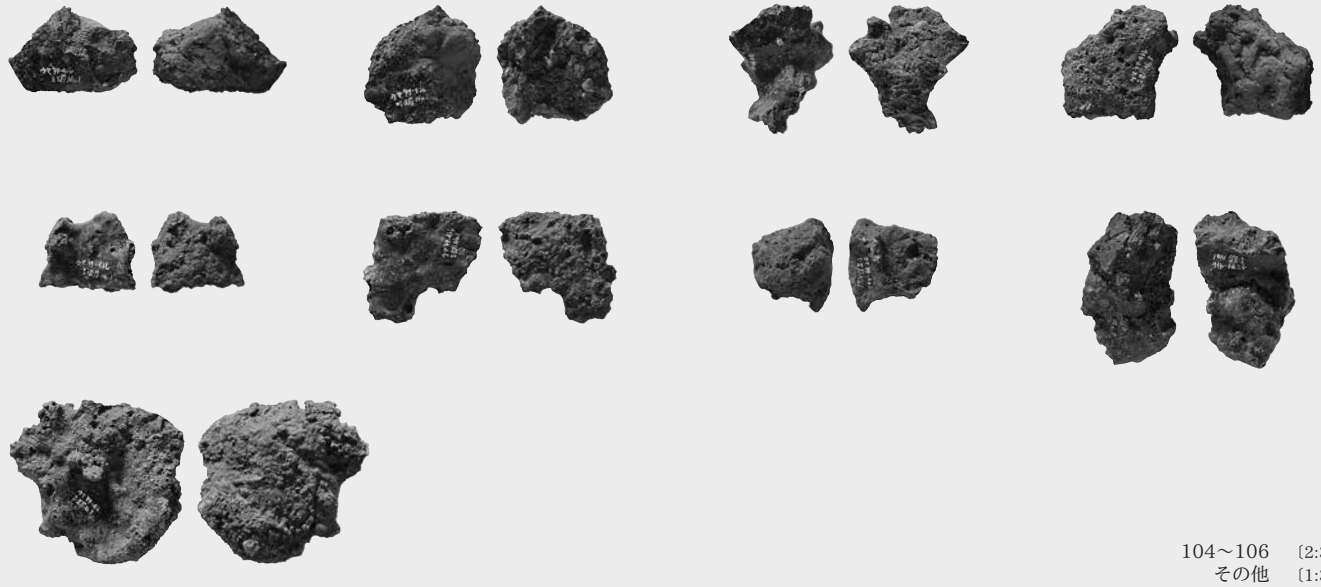
54～61・64　〔2:3〕
その他　〔1:3〕
47・63・65・66　〔1:4〕



赤外線写真



鉄滓（1999年度4トレンチ出土）

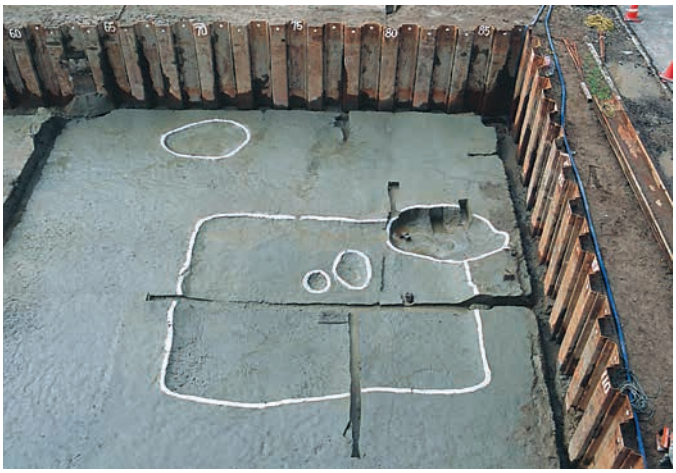


104～106　〔2:3〕
その他　〔1:3〕
107　〔1:4〕

調査区全景（南西から）

調査区全景（南東から）

基本層序　4Aグリッド（西から）



SI2　完堀（南から）

SI2　EWセクション（南から）

SI2　炉　検出状況（西から）

SI2　遺物出土状況（北から）

SI2　遺物出土状況（北東から）

SK4　遺物出土状況（北から）

SK4　遺物出土状況（北から）

東海系壺出土状況　2A グリッド（東から）

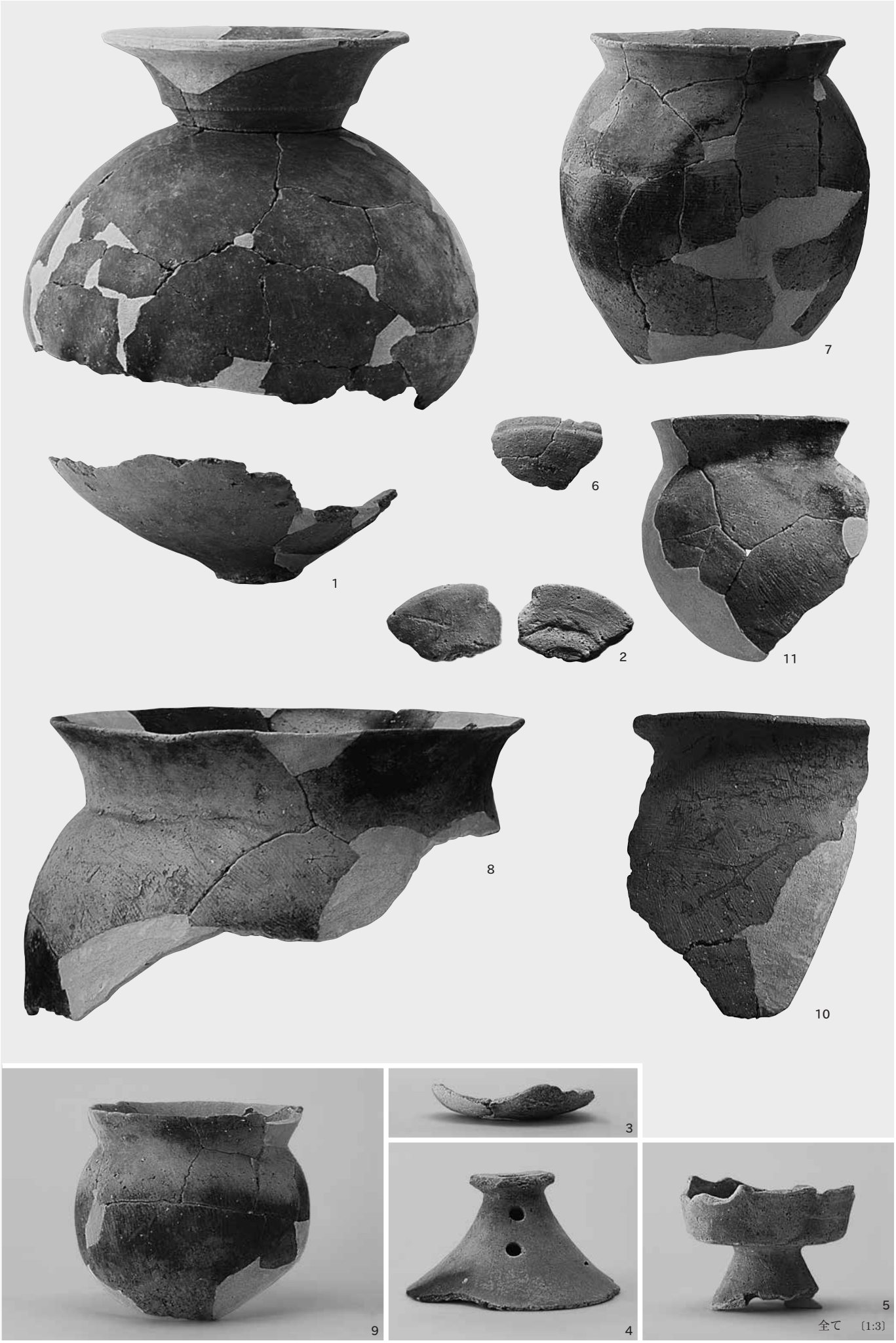
大型壺出土状況　2A グリッド（南から）

台付鉢出土状況　2A グリッド（西から）

有台鉢・甕出土状況　2A グリッド（南から）

甕出土状況　3A グリッド（南から）

包含層遺物出土状況　2A グリッド（北から）



全て　〔1:3〕

全て　〔1:3〕

22

23

24

28

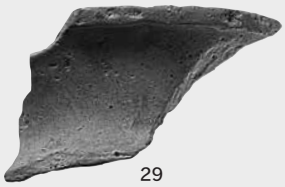
25

26

27

34

36


29

33

30

32

35

37

31　全て　〔1:3〕

遺跡遠景（南東から）

遺跡遠景（西から）

遺跡近景（真上から）

基本層序　10D21 グリッド（西から）

SD185　遺物出土状況（西から）

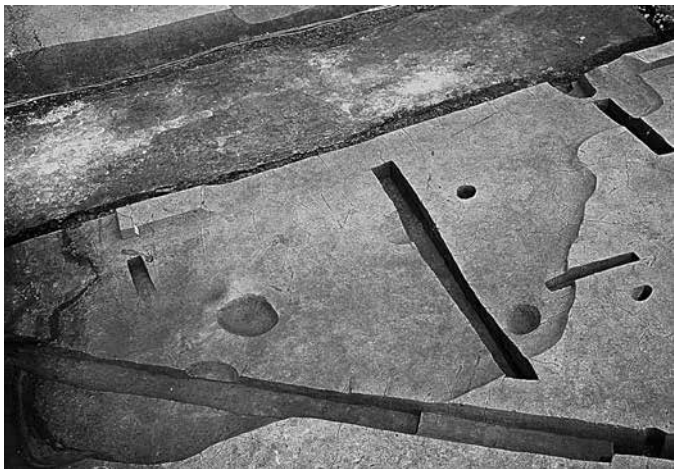
SZ439-SD311　遺物出土状況（西から）

SZ439-SD209　遺物出土状況（北から）

SI155　遺物出土状況（西から）

SI155　遺物出土状況（南西から）

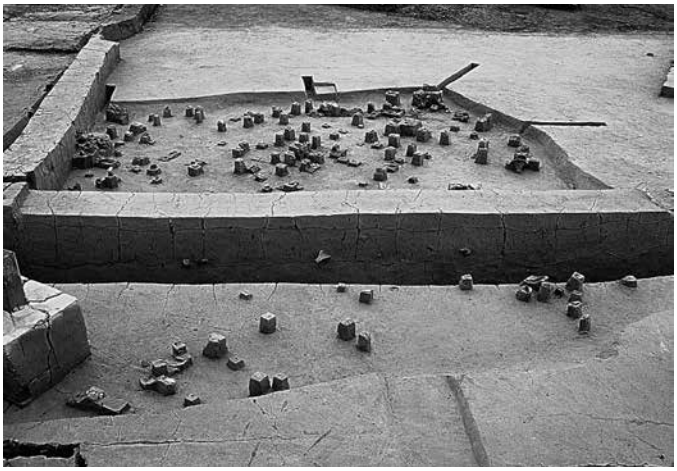
SI155　セクション（南西から）



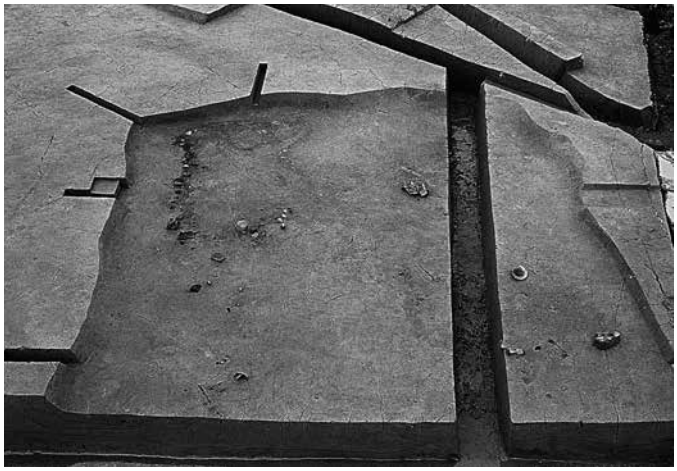
SI155　完堀（南から）

SI144　北西隅遺物出土状況（南から）

SI144　北西隅遺物出土状況（北から）

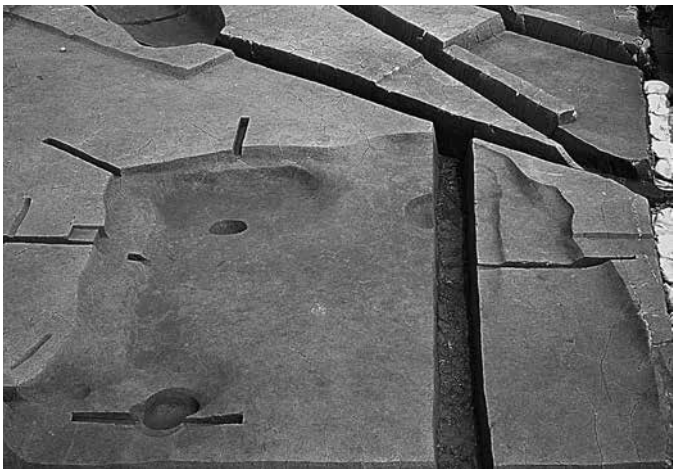


SI144　E-E'セクション（東から）



SI144　１層完堀（南から）

SI144　遺物出土状況　5E20 グリッド　1 層（西から）



SI144　完堀（南から）

SI36　遺物出土状況

SI36　遺物出土状況（北から）

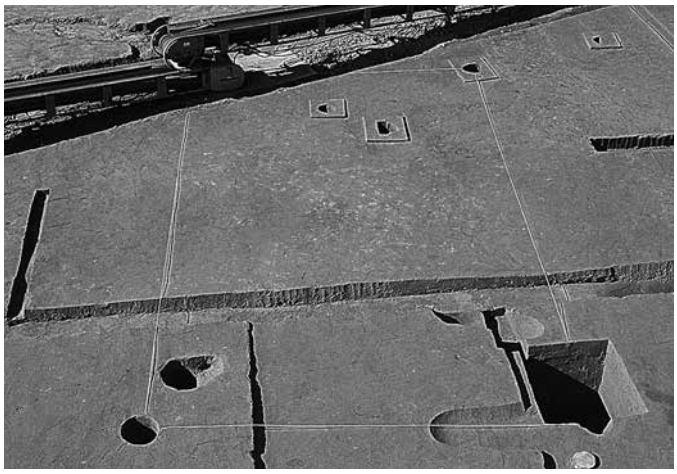
SI36　セクション（西から）

SI36　完堀（南西から）

SI144・SI155・SB530・SB540　完堀（南西から）

SB81・SB82・SB90　完堀（東から）

SB731・SB732　完堀（南東から）



SB733　完堀（南東から）

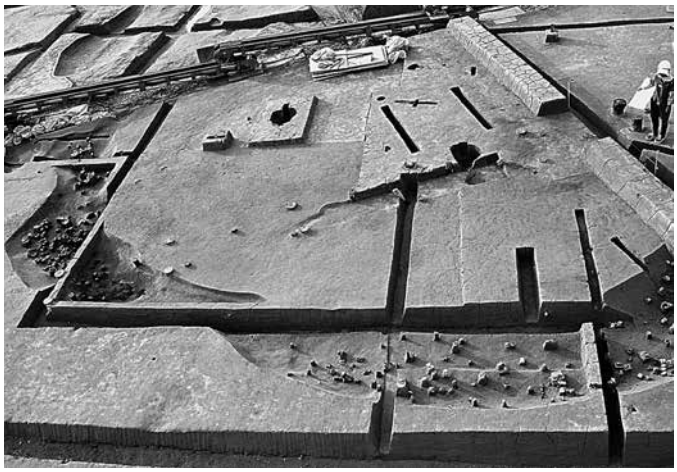
SB732-P498　セクション（西から）

SZ439　完堀（真上から）

SZ439　セクション（南から）

SZ439-SD311　遺物出土状況（北東から）

SZ439-SD311　遺物出土状況（西から）



SZ439-SD311　遺物出土状況（東から）

SZ439-SD311　遺物出土状況（北東から）

SZ439-SD311　管玉出土状況（北から）

SZ439-SD214　D-D'セクション（北から）

SZ439-SD214　遺物出土状況（南西から）

SZ439-SD214　遺物出土状況（西から）

SZ439-SD214　炭化材出土状況（西から）

SZ439-SD209　遺物出土状況（西から）

SZ439-SD209　遺物出土状況（南から）

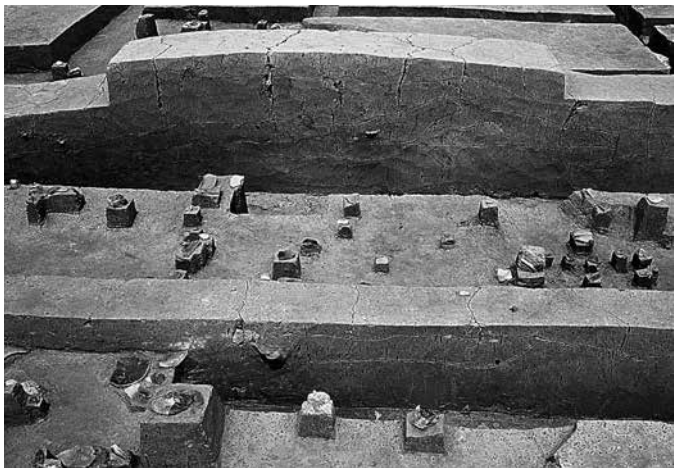
SZ439-SD209　遺物出土状況（東から）

SI77　遺物出土状況（南から）

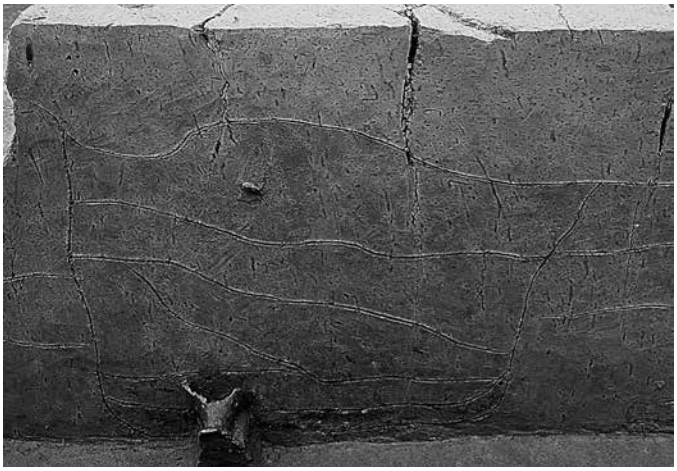
SI77　遺物出土状況（南から）

SI77　炭化材出土状況（北から）

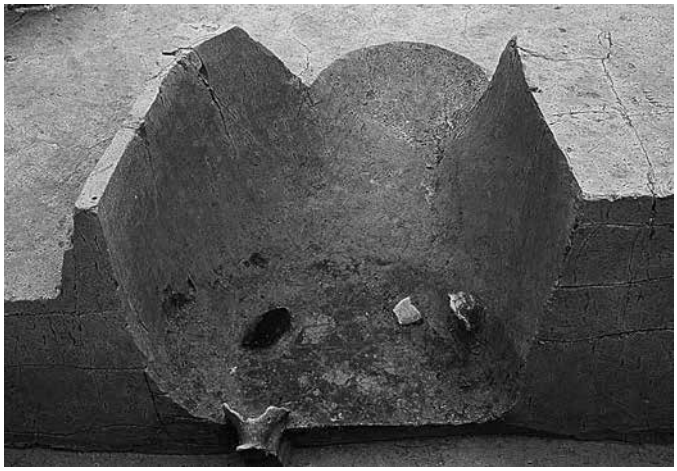
SI77　炭化材出土状況（南から）



SI77　A-A'セクション（東から）



SZ439-SK226　セクション（北から）

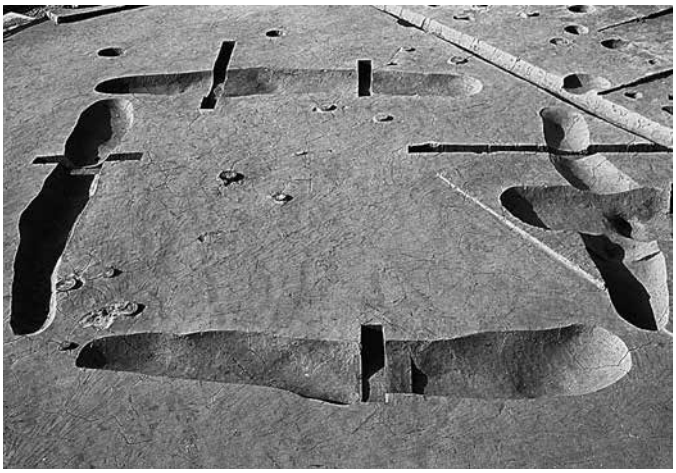


SZ439-SK226　完堀（北から）

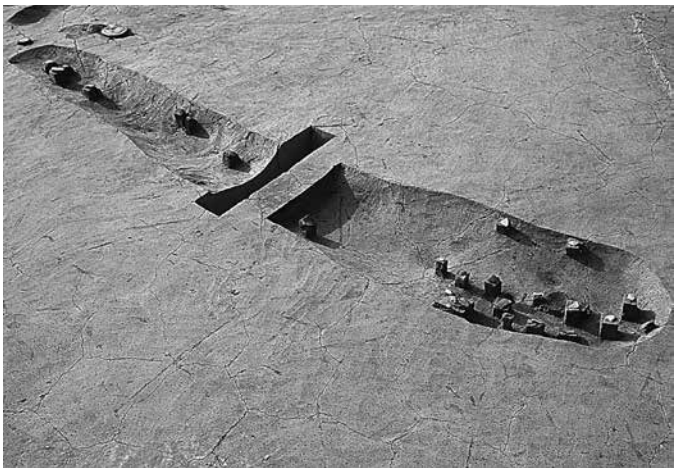
SZ439（SB344-P232）セクション（東から）

SZ610・SD604・SB731・SK481　周辺完堀（真上から）

SZ610　遺物出土状況（南から）



SZ610　完堀（南から）



SZ610-SD496　遺物出土状況（東から）

SD38　セクション（東から）

SD40　完堀（北東から）

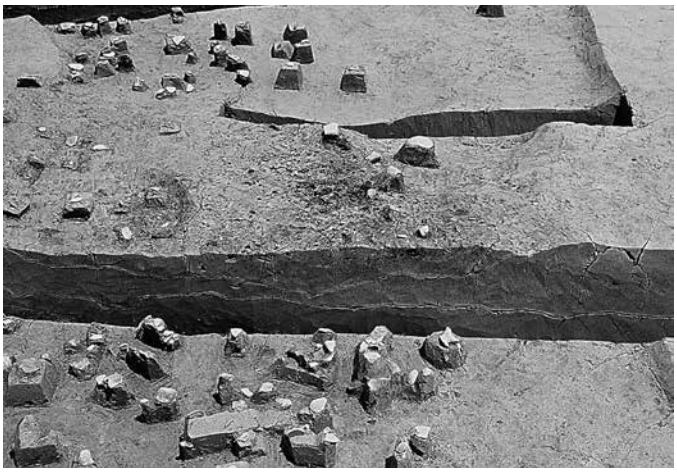
SD114　セクション（西から）

SD203　遺物出土状況（北から）

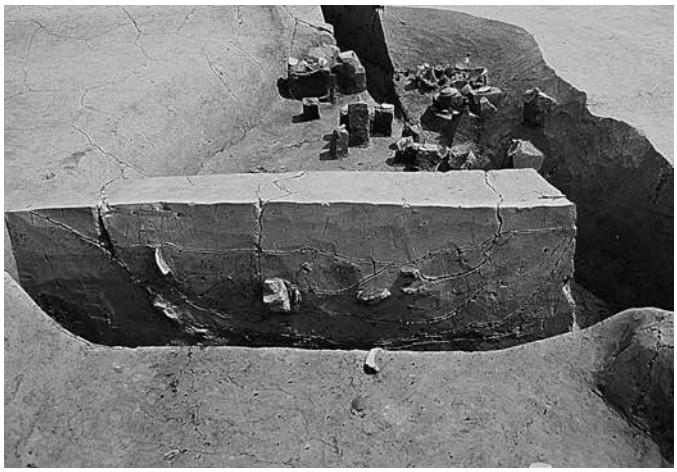
SD203　遺物出土状況（南から）

SD203　遺物出土状況（西から）

SD203　セクション（西から）



SD140　セクション（南西から）



SK164　セクション（北西から）

SK164　完堀（南東から）

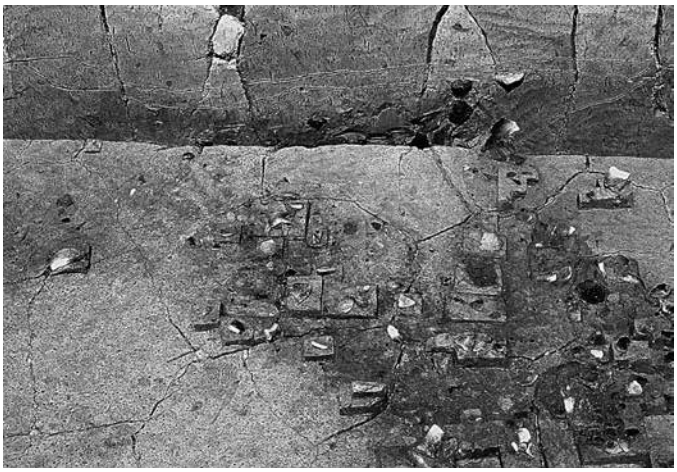
SK164　遺物出土状況（西から）

SK164　遺物出土状況（西から）

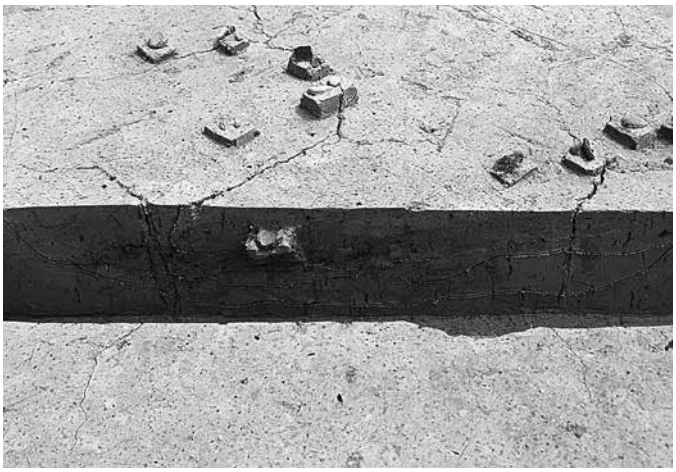
SK164　遺物出土状況（南西から）

SD185　セクション（北西から）

SD185　完堀（北から）



SD185　遺物出土状況（南東から）



SK482　セクション（南から）

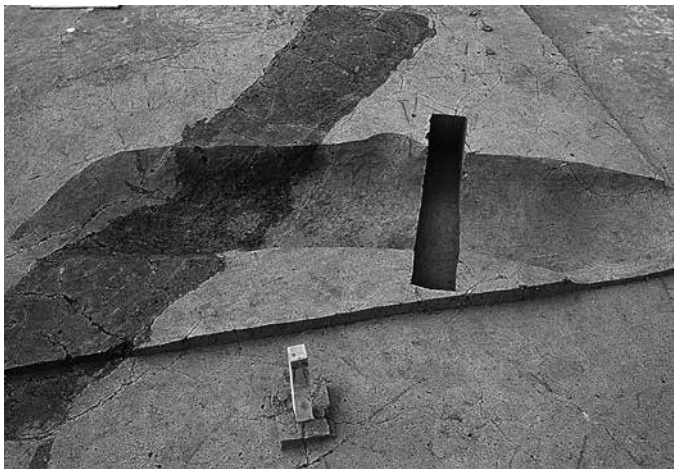
SK481　完堀（東から）

SK481　遺物出土状況（東から）

SK58　遺物出土状況（西から）

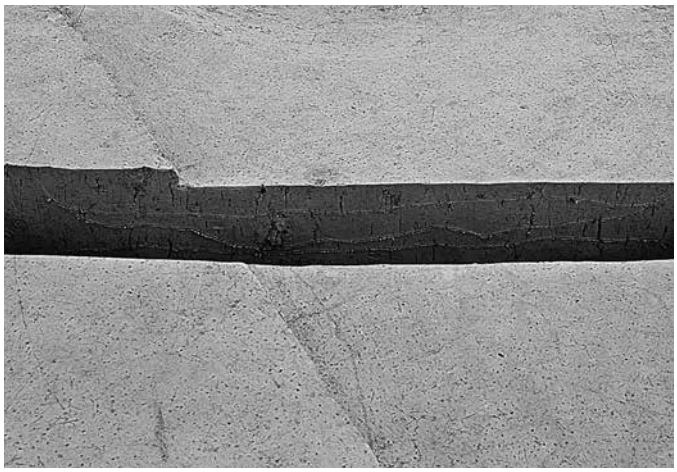
SK58　遺物出土状況（西から）

SK456　遺物出土状況（南から）



SK456　完堀（東から）

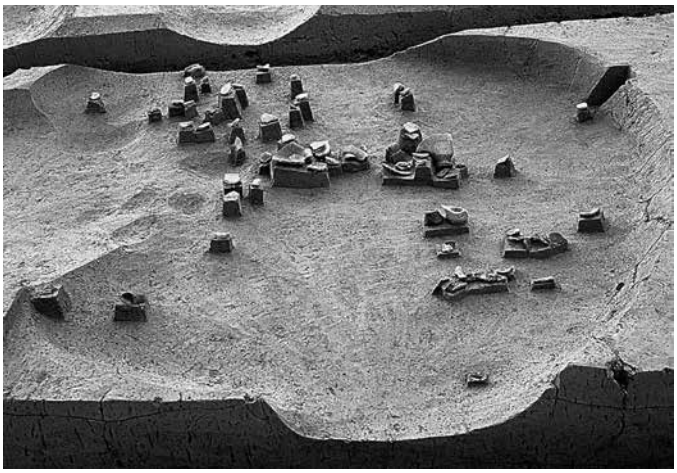
SK56　遺物出土状況（北西から）



SK231　セクション（北から）

SK59　遺物出土状況（北から）

SK118　遺物出土状況（東から）



SK213　遺物出土状況（南東から）

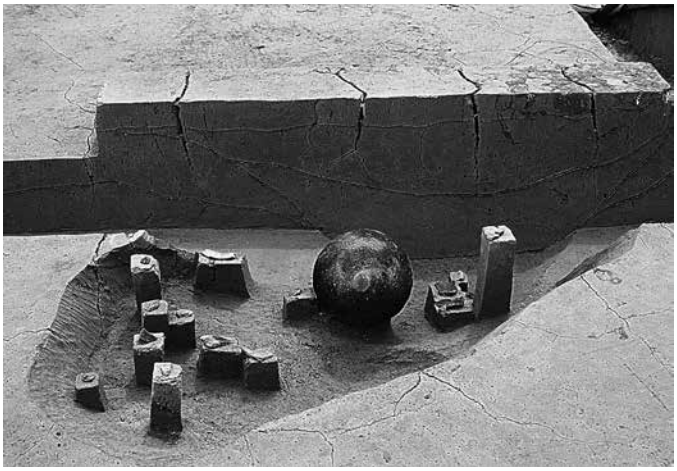
SK213　遺物出土状況（北東から）

SK228　遺物出土状況（北から）

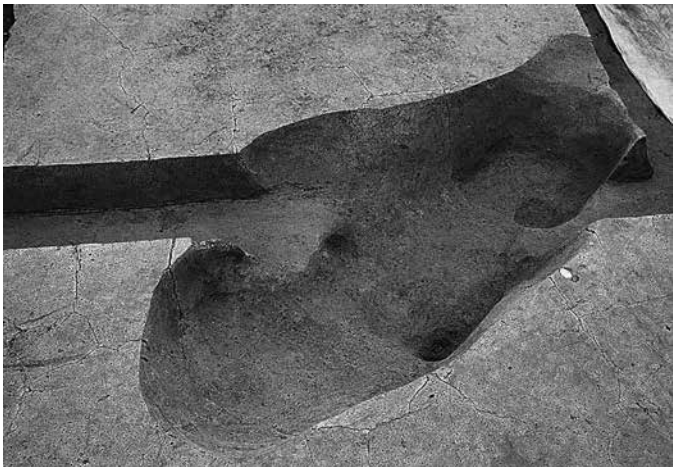
SK228　遺物出土状況（北東から）

SK229　遺物出土状況（北から）

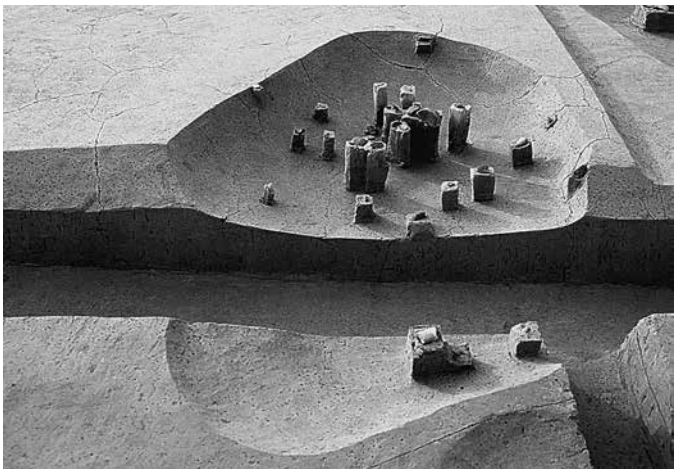
SK229　完堀（南から）



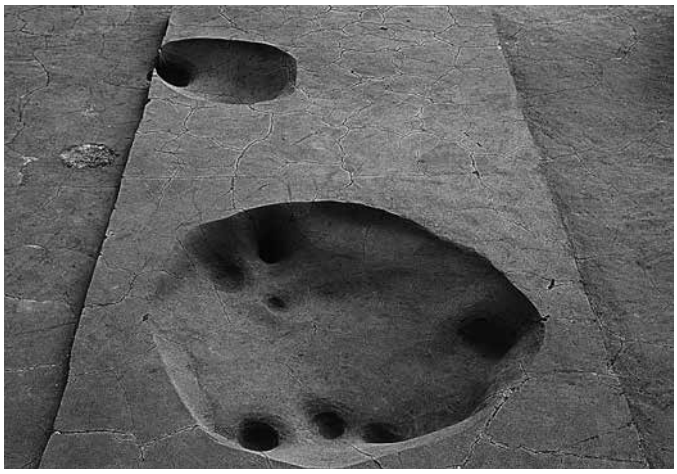
SK216　遺物出土状況（東から）



SK216　完堀（東から）

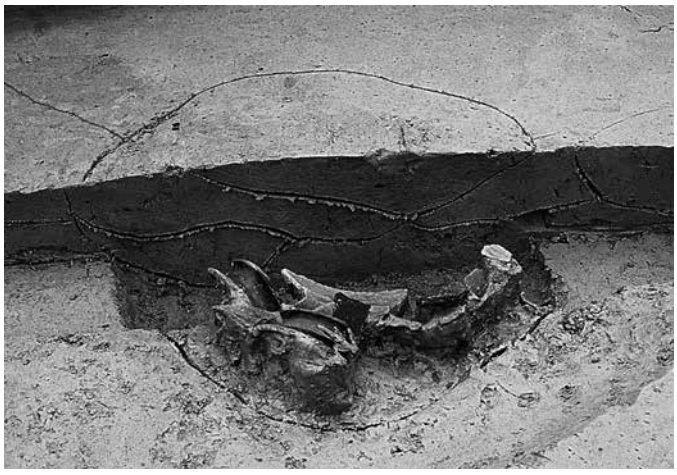


SK215　遺物出土状況（北東から）



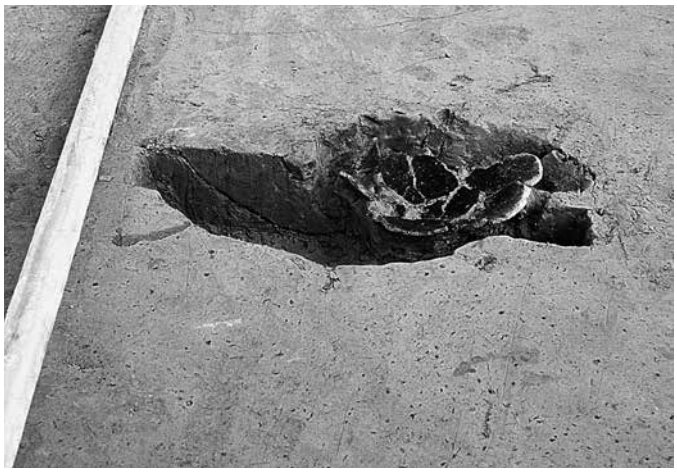
SK211　完堀（東から）

SK218　セクション（西から）



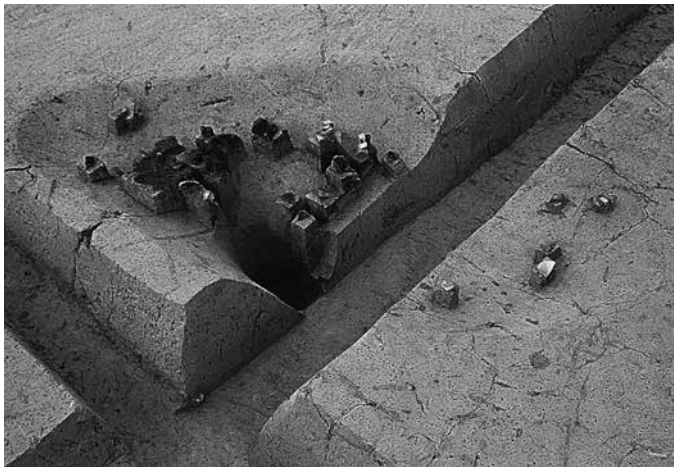
SK26　遺物出土状況（東から）

SK32　セクション（南東から）

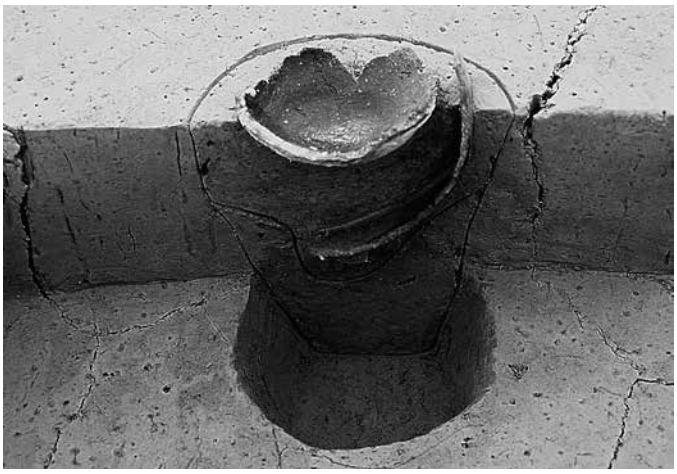


P122　遺物出土状況（西から）

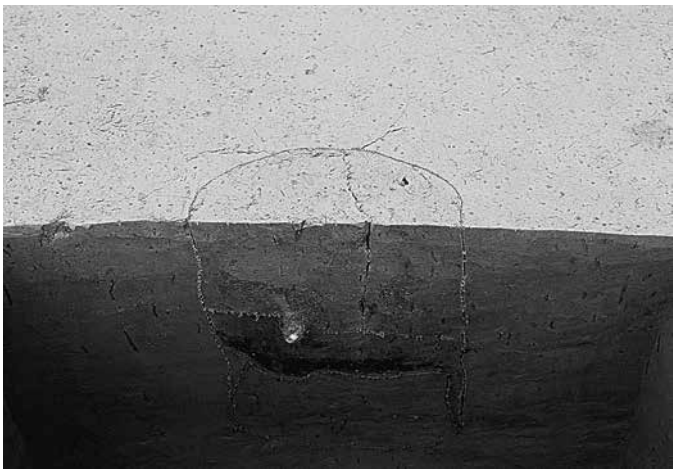
SK157　遺物出土状況（南から）



SK654　遺物出土状況（南から）



P191　セクション（東から）

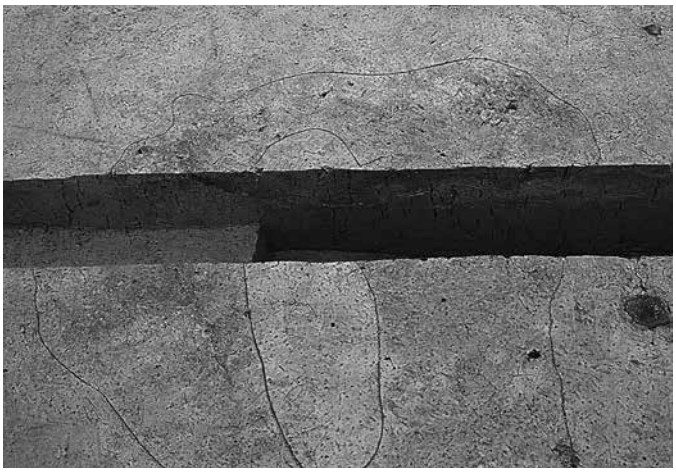


P725　セクション（東から）

P301　遺物出土状況（北から）

P620　セクション（東から）

SX768　遺物出土状況（南東から）



SX405　検出状況（南から）

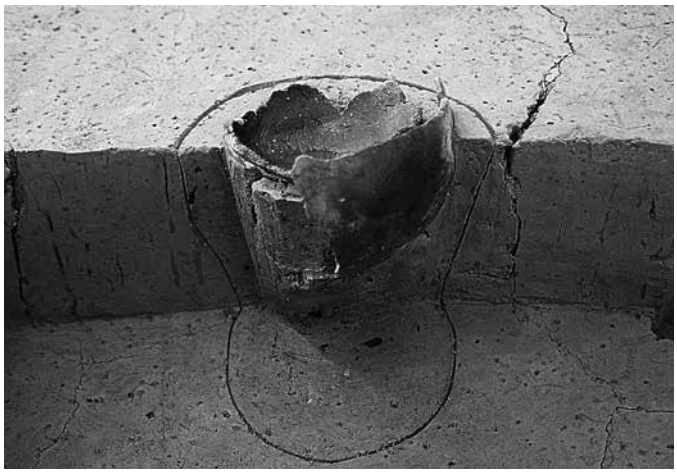
SX487　遺物出土状況（西から）

包含層　遺物出土状況　12B グリッド（南から）

続縄文土器出土状況　8C24 グリッド（東から）

包含層　遺物出土状況　9D12・17 グリッド（東から）

Ⅱ層遺物出土状況　8F7 グリッド（南から）



Ⅱ層遺物出土状況　10F11 グリッド（南から）

Ⅱ層遺物出土状況　9G1 グリッド（南から）

Ⅱ層遺物出土状況　9G1、8G5 グリッド（南から）

Ⅱ層遺物出土状況　11E12 グリッド（南から）

Ⅱ層遺物出土状況　13D21 グリッド（北西から）

SI36出土土器

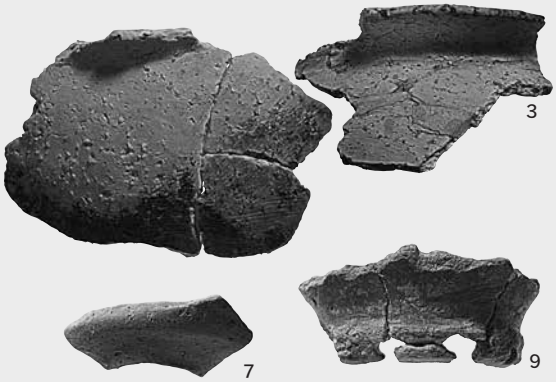
SI155出土土器

SZ439出土土器

SI77出土土器

1

2


3 7 9

4

5

6

8

12

10

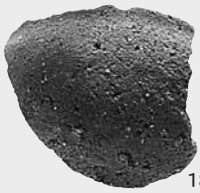
11

13

14

16

17


18

19

15

20

21

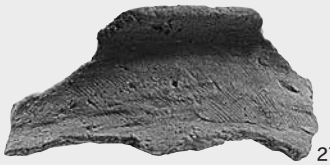
25

22

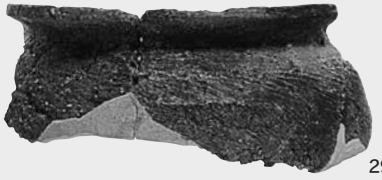
23

24

26

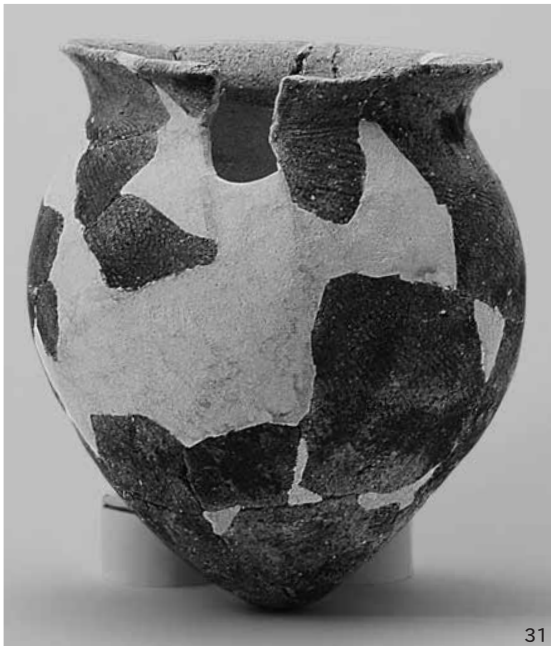

27

28


29

30

全て　〔1:3〕


31

32

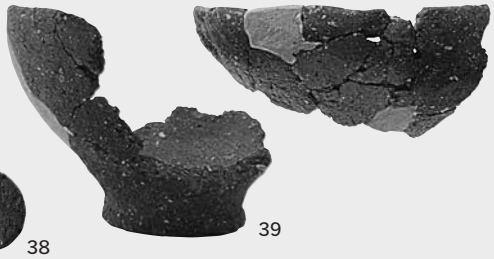
33

34

35

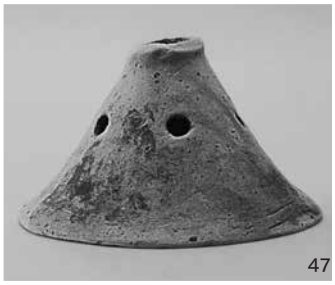
36

37


39

38

41


47

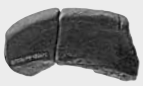
40

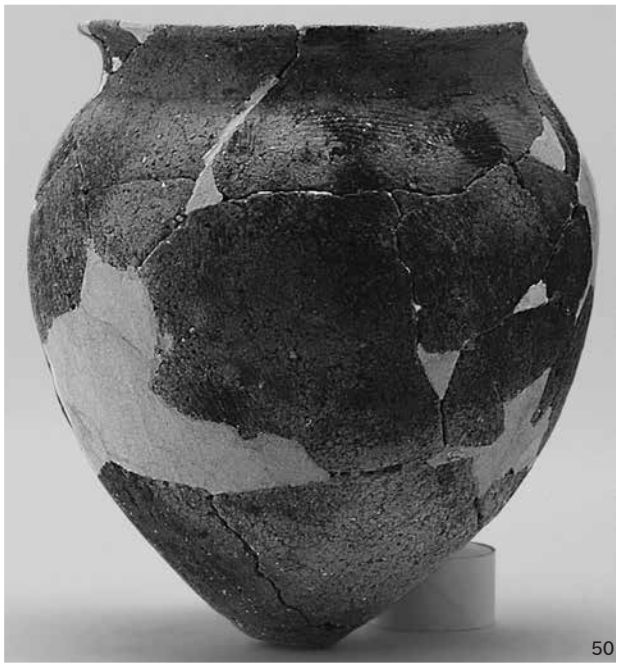
42

43

44

45


46


50

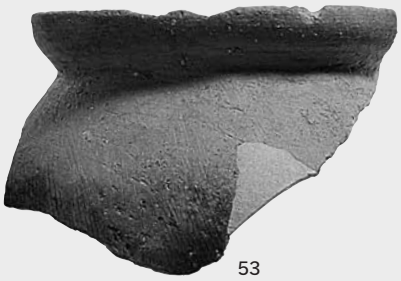
48

49

51

52

全て〔1:3〕

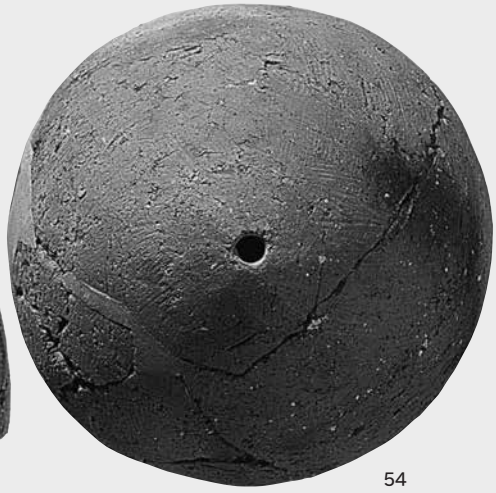

53

54

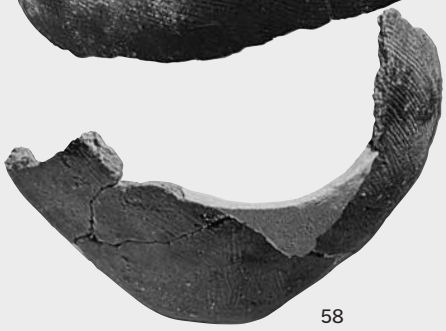
55

56

57


54

62


58

59

61

60

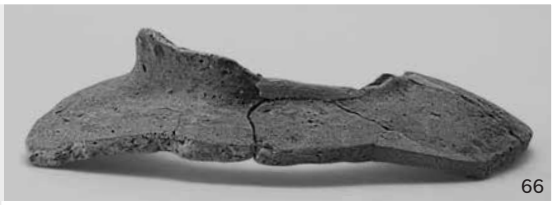
63

全て　〔1:3〕

64

65

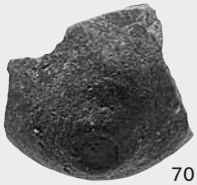
67


66

68

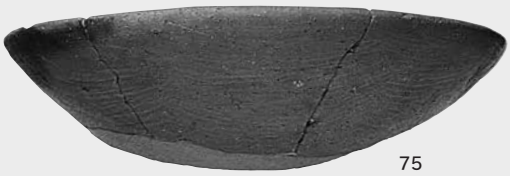
69

73


70

71

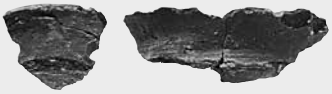
74


75

76

77

72



84

79

87

80

85

83

81

78

82

86

88

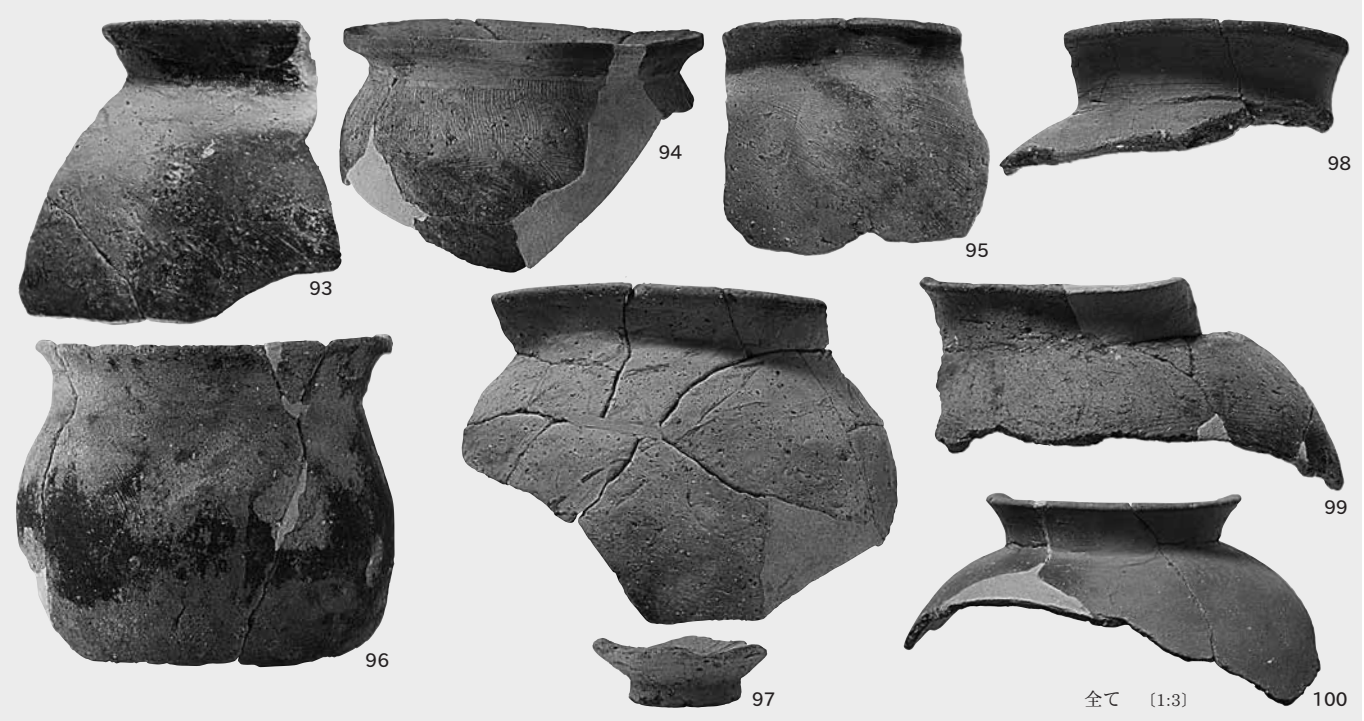
全て　〔1:3〕

89

90

91

92


93
94
95
98
96
97
99
100
全て　〔1:3〕

101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134

全て　〔1:3〕

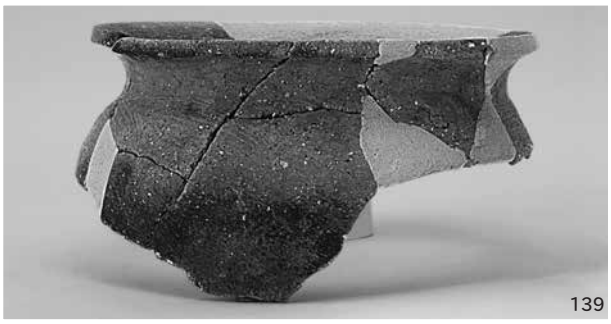
135

137a

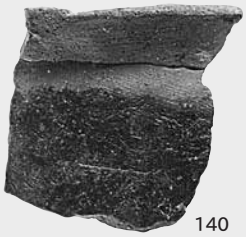
138

136

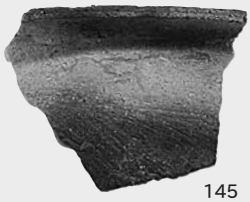
137b


139

141


140

142


145

146

147

143

148

149

150

144

153

151

152

154

全て　〔1:3〕

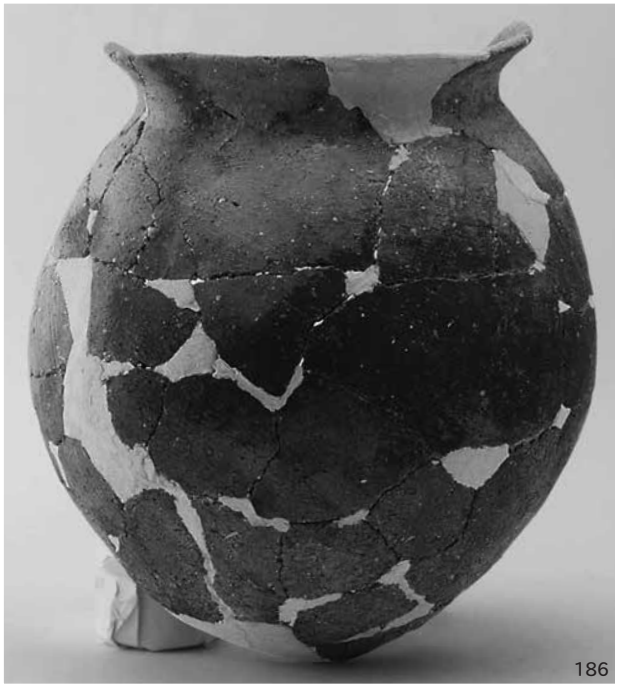
155
157
158
156
159
160
163
162
161
165
166
167
168
164
170
171
172
169
175
177
178
179
173
180
174
176
181

全て　〔1:3〕

182

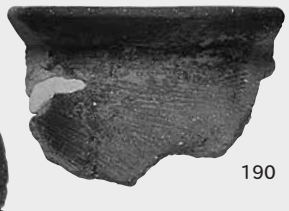
185

183

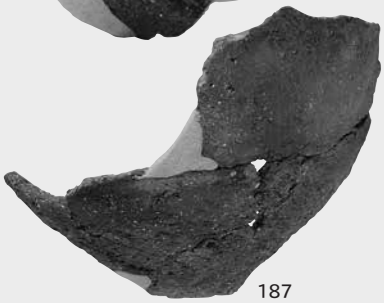

186

184

189


190

191


187

188

192

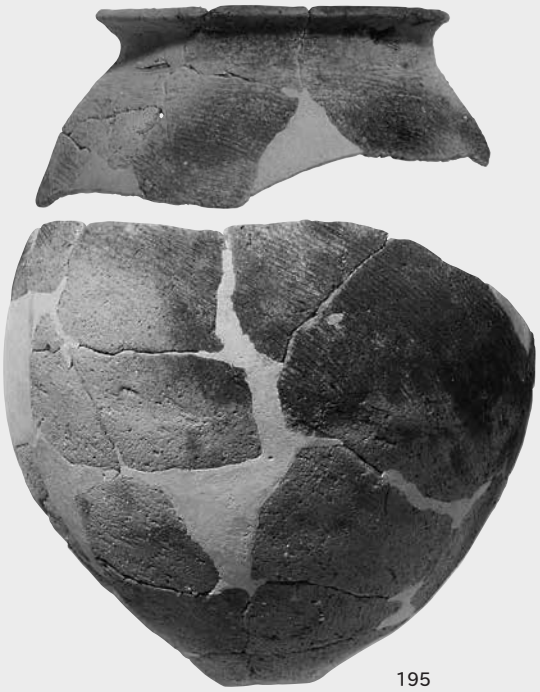
全て　〔1:3〕

193

194

196

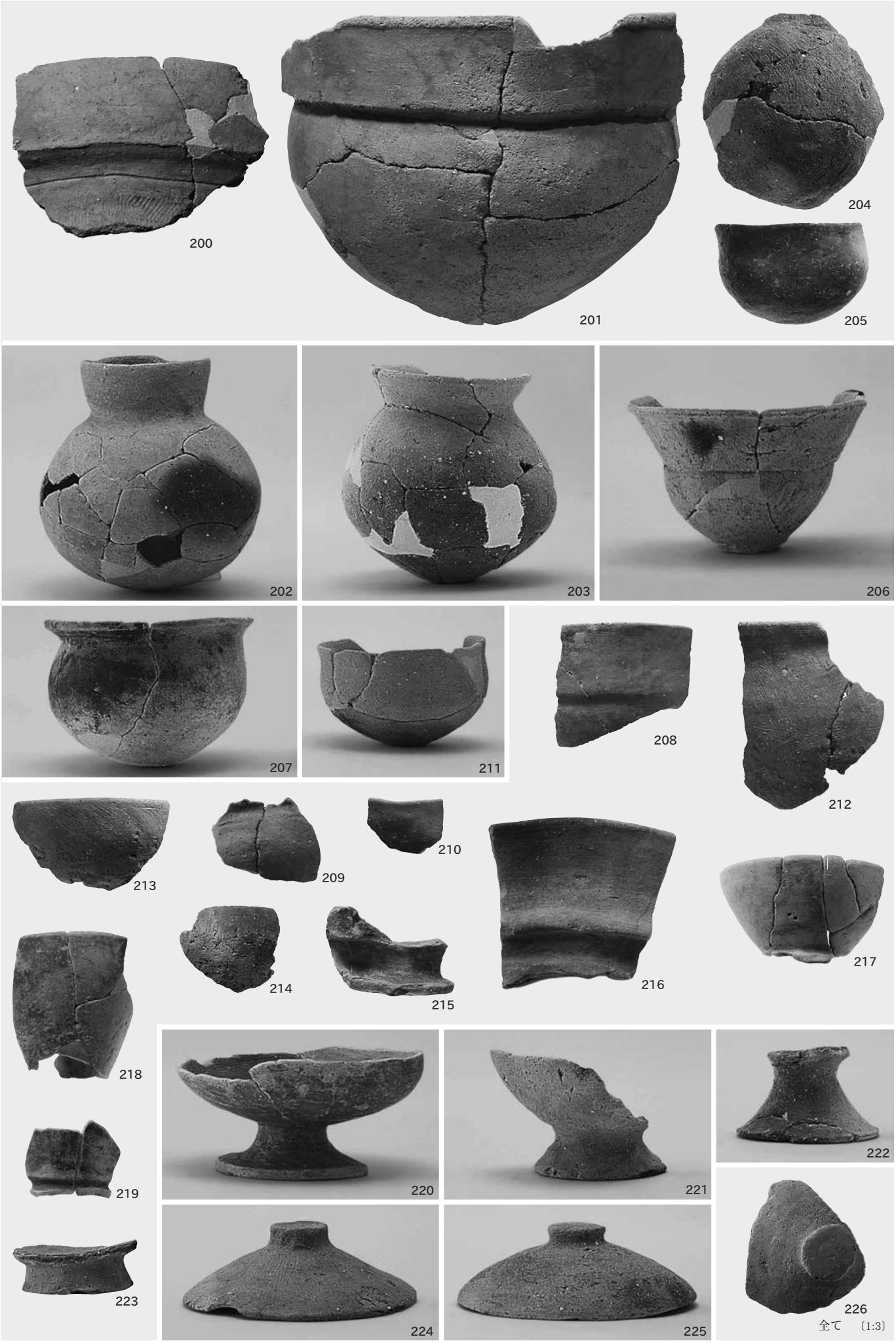
198


195

197

全て　〔1:3〕

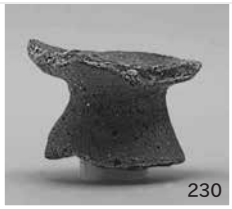
199


200
201
204
205
202
203
206
207
211
208
212
213
209
210
217
214
215
216
218
219
220
221
222
223
224
225
226

全て　〔1:3〕

227

228


230

231

229

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

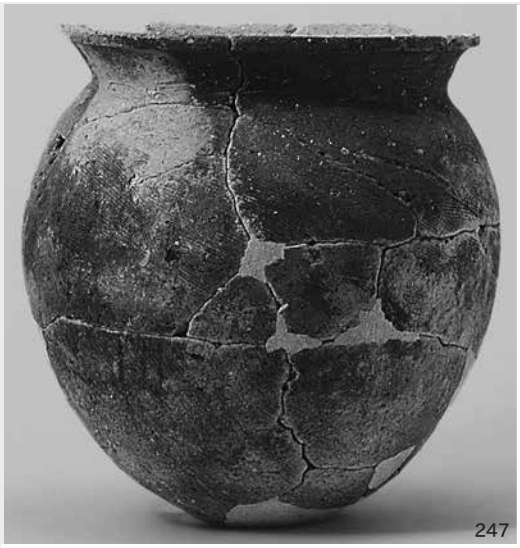
245

246

243

244

全て　〔1:3〕


247

250

248

249

252

251

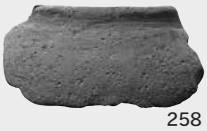
253

254

255

256

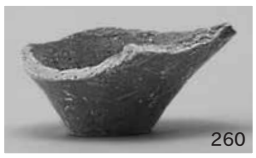
257


258

261

262

259


260

264

265

266

267

269

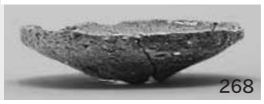
261

263

270

271

268


268

272

273

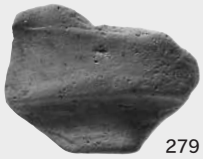
274　全て　〔1:3〕

276

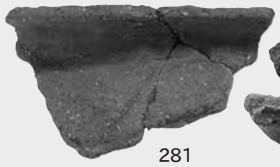
277

275

278


279

280

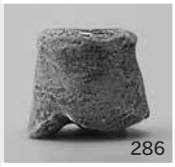

281

283

284

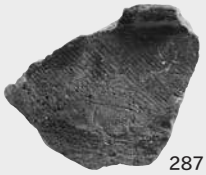
282

285


286

288

289


287

290

291

292

293

295

298

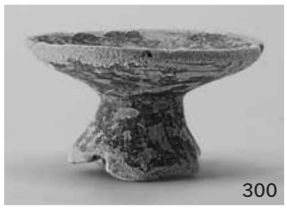
299

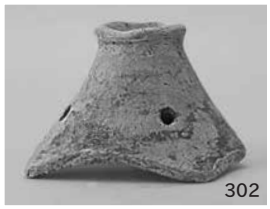
294

297

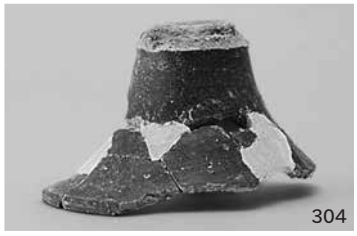
296

301


300


302

303


304

306

305

307

全て　〔1:3〕

308

309

310

312

315

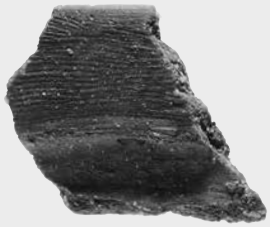
311

314

316

313

317


318

全て　〔1:3〕

319

320

321

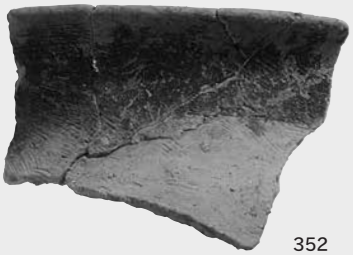
322
324
323
325
332
326
327
329
333
328
330
331
334
336
339
335
338
341
337
342
345
346
343
344
340
348
347

全て　〔1:3〕

350

349

351



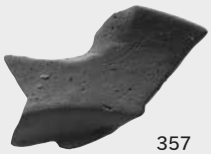
352

353

355

354

356



357

358

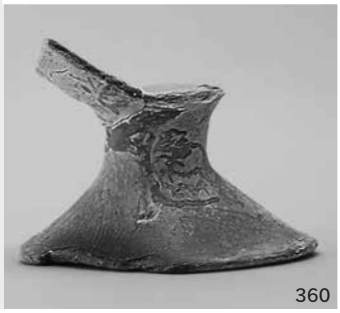
359

364

361

363

362



360

366

365

367

全て　〔1:3〕

370

371

373

372

368

369

374

375

379

377

378

384

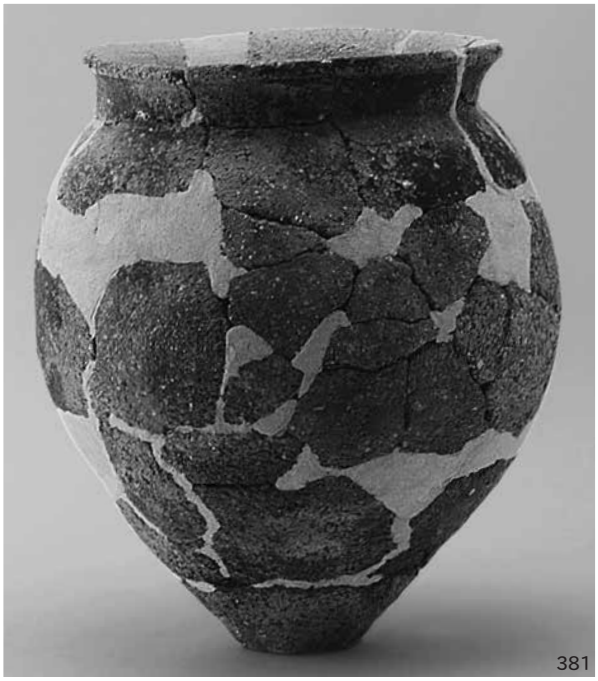
376

380

382

385

383


381

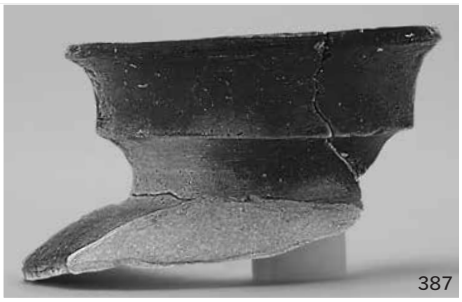
388

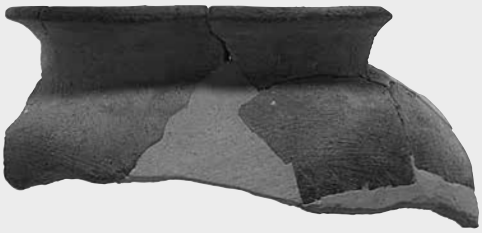
389

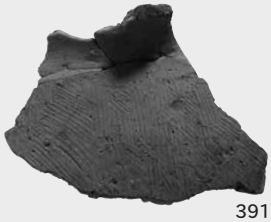
全て　〔1:3〕

386

402


387


390


391

397

392

393

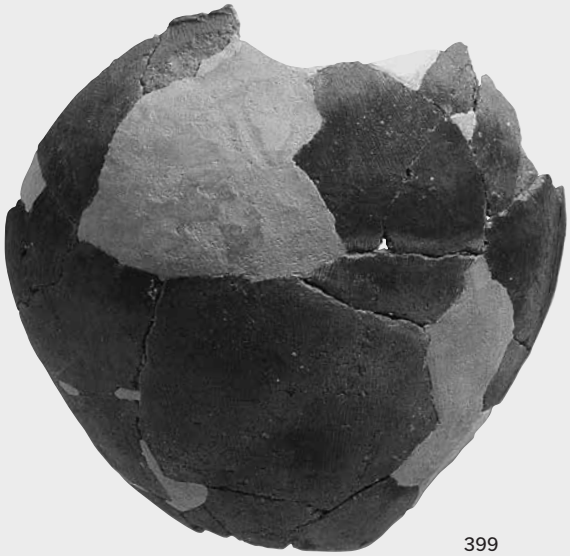
394

395

400

396

398


399

401

全て　〔1:3〕

404

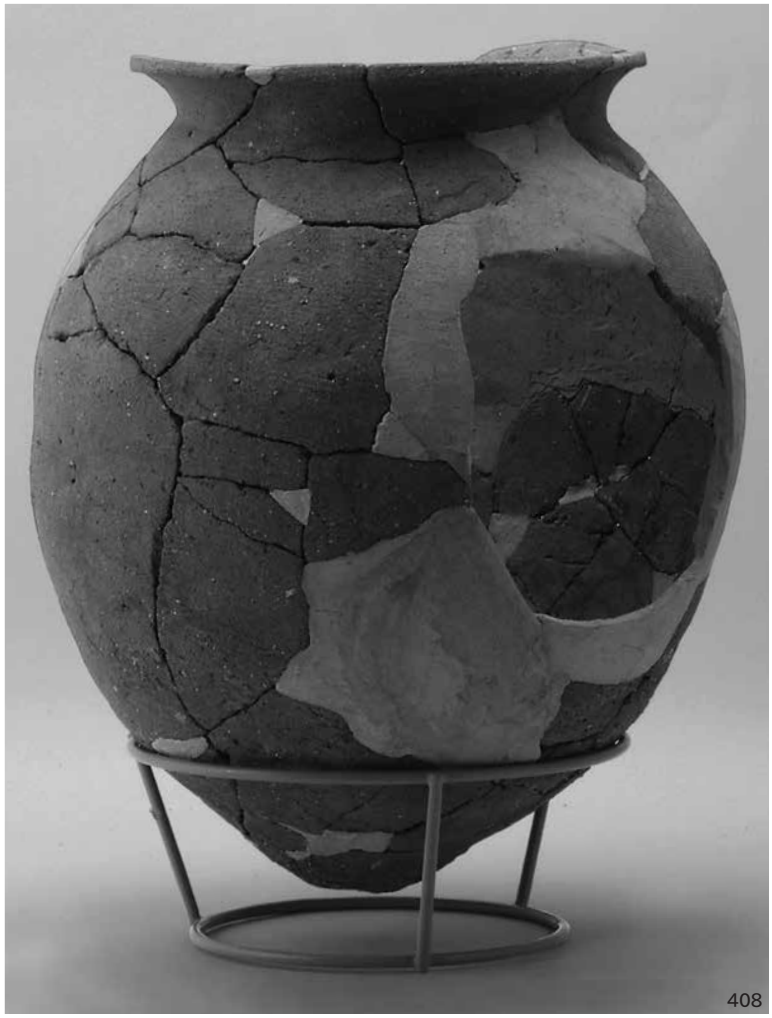
407

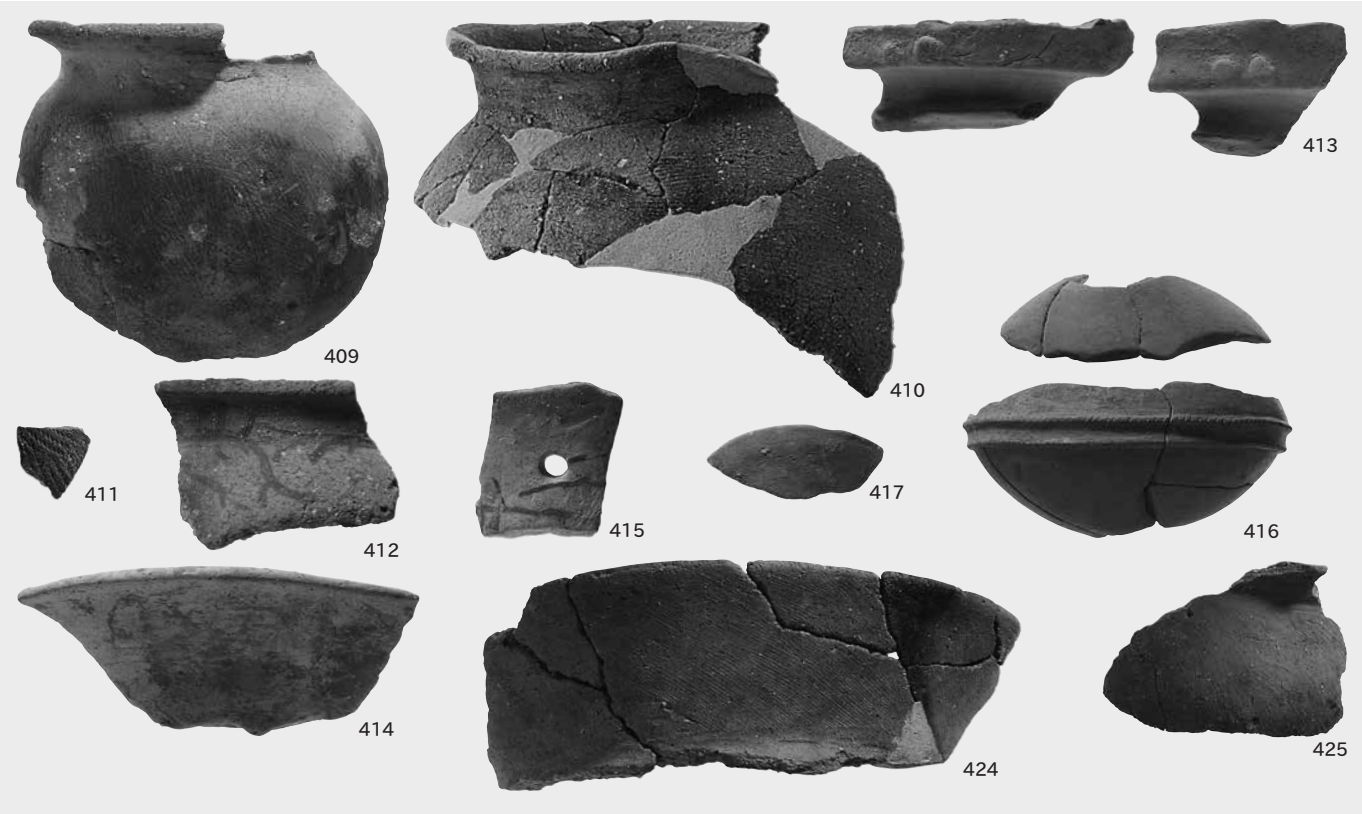
405

全て　〔1:3〕

403

406


408


409
410
413
411
412
415
417
416
414
424
425

418

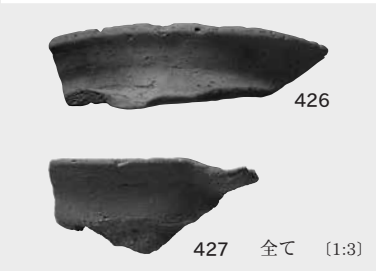
419

420

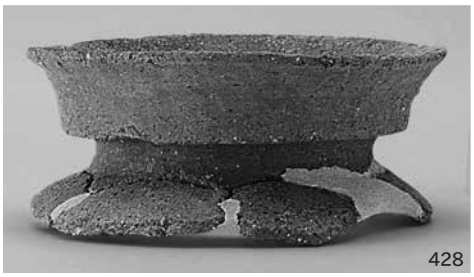
421

422

423


426
427

全て　〔1:3〕


428

429

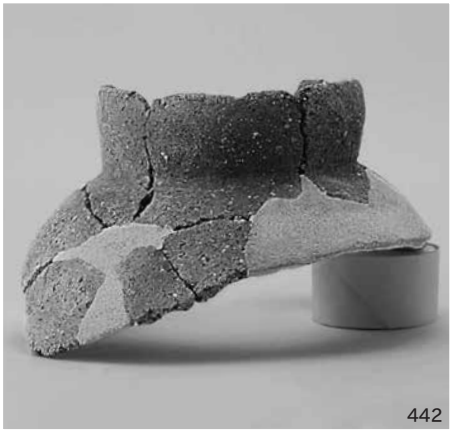
441

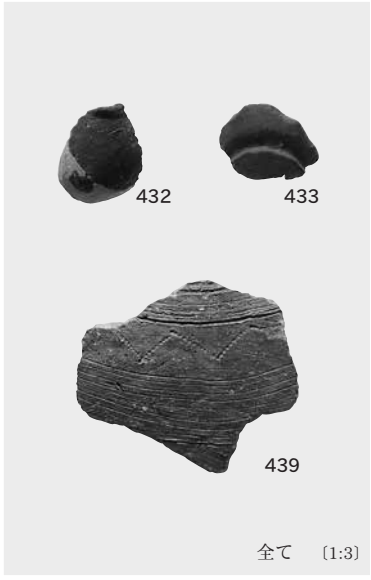
436

437

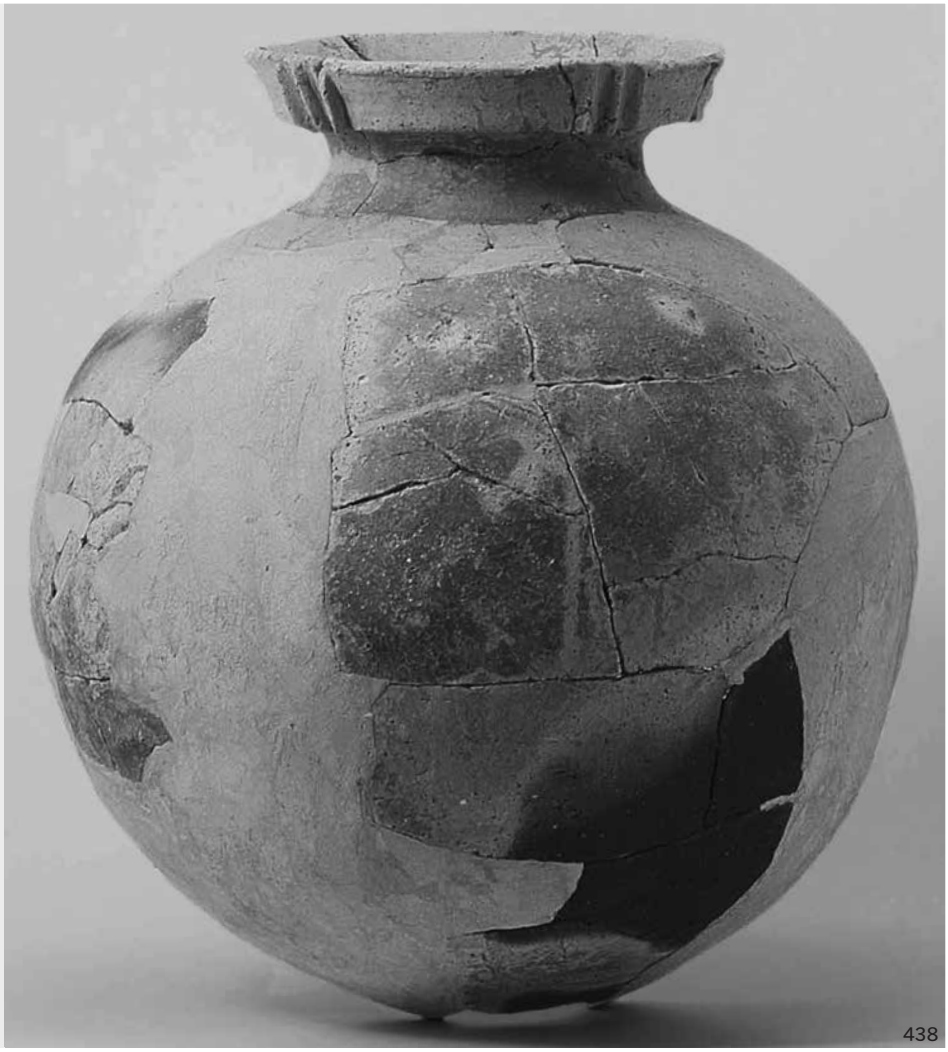
440

434

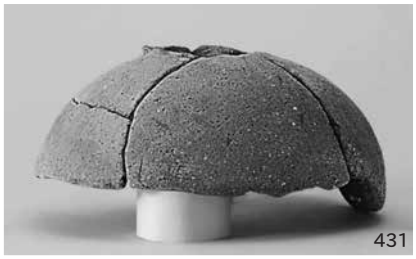

442



全て　〔1:3〕


438

430


431

435

445

446

450

456

451

452

453

455

454

443

444

447

460

448

449

463

458

457

459

464

461

462

466

461

465

全て　〔1:3〕

467

469

475

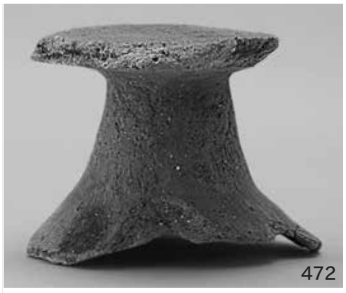
474

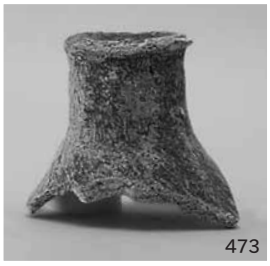
470

468

471

478


472


473

477

476

479

482

480

481

484

483

485

全て　〔1:3〕

486

487

488

489

490

491

492

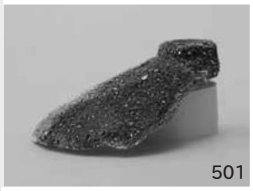
493

495

500

496

494


501

497

499

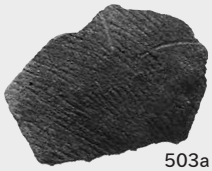
498

502

504

507a

507b


503a

503b

503c

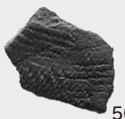
505a

506

503d

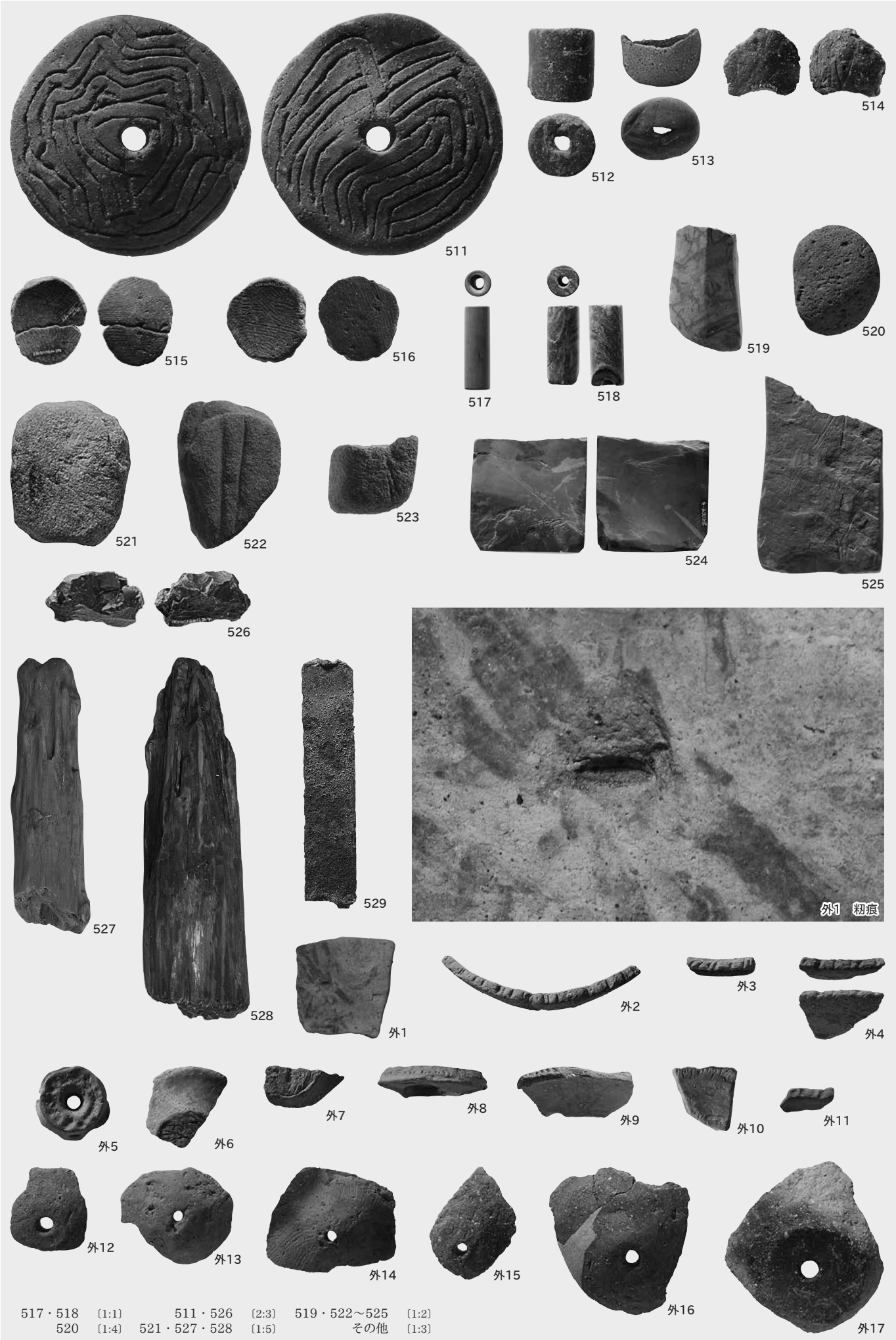
505b

508

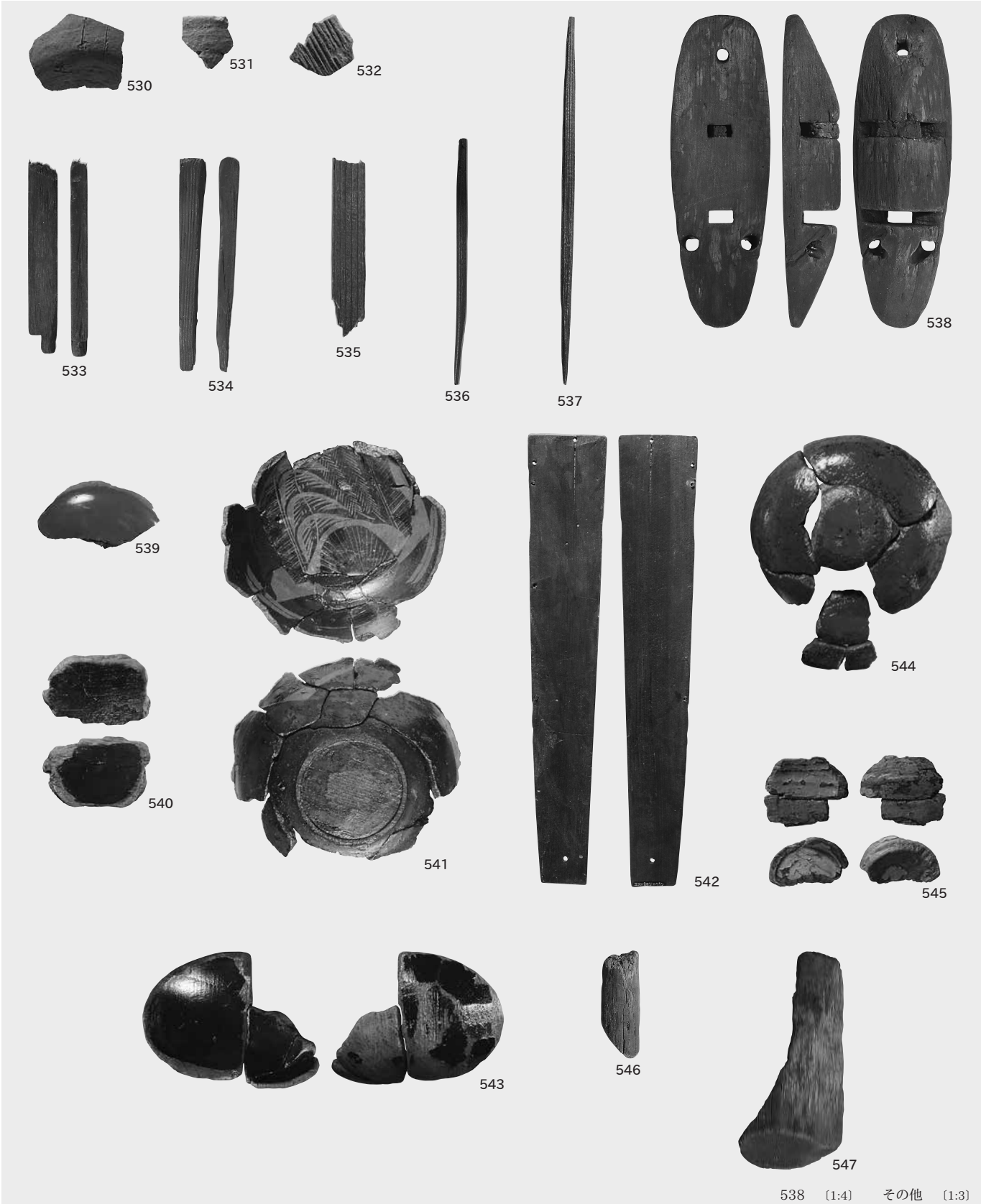

509

510

全て　〔1:3〕



517・518　〔1:1〕　511・526　〔2:3〕　519・522～525　〔1:2〕
520　〔1:4〕　521・527・528　〔1:5〕　その他　〔1:3〕


530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547

538 〔1:4〕　その他 〔1:3〕

報告書抄録

ふりがな	うまみざかいせき・しょうじゃくえーいせき・しょうじゃくしーいせき
書名	馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	XVⅢ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第165集
編著者名	土橋由理子・加藤　学・尾崎高宏・高橋　聡・波田野孝・小林芳宏・佐藤敦史・片岡千恵（埋文事業団）、高濱信行・卜部厚志（新潟大学積雪災害研究センター）、植田弥生（パレオ・ラボ）、パリノ・サーヴェイ
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新潟市金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2006（平成18）年10月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
馬見坂遺跡（うまみざかいせき）	新潟県新発田市（にいがたけんしばたし）佐々木字中ノ割（ささきあざなかのわり）1509～1532番地（ばんち）ほか	152064	52	37度56分42秒（新座標）	139度15分18秒（新座標）	一次調査19981028～19981106・19990413～19990420 二次調査19990517～19991015	7,670	日本海沿岸東北自動車道の建設
正尺A遺跡（しょうじゃくえーいせき）	新潟県新潟市（にいがたけんにいがたし）葛塚字辰高入（くずつかあざ）3059番地（ばんち）ほか	152013	291	37度55分51秒（新座標）	139度12分58秒（新座標）	一次調査19990614～19990617・20000414～20000421・20000515～20000517 二次調査20010803～20010831	260	日本海沿岸東北自動車道の建設
正尺C遺跡（しょうじゃくしーいせき）	新潟県新潟市（にいがたけんにいがたし）葛塚字正尺（くずつかあざしょうじゃく）644番地（ばんち）の1ほか	152013	344	37度55分36秒（新座標）	139度12分38秒（新座標）	一次調査19971204～19971209・19990722～19990727・ 二次調査19990920～09991224・20000405～20001031	11,000	日本海沿岸東北自動車道の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬見坂遺跡	集落跡	縄文時代	土坑・ピット	縄文土器（前期～晩期）・石器	新潟砂丘Ⅰ－2の内陸側砂丘間低地に立地
		弥生時代後期～古墳時代		弥生土器・古墳時代の土師器	
		古代以降	土坑・ピット・自然流路	土師器・須恵器・木簡・斎串	
正尺A遺跡	遺物包含地	古墳時代前期	竪穴住居・土坑	土師器	
正尺C遺跡	遺物包含地	古墳時代前期	周溝状遺構・竪穴住居・掘立柱建物・土坑・ピット	土師器・縄文施文の土師器・管玉・土製紡錘車・柱根	単一時期の良好な土器群が出土

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第165集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XVⅢ

馬見坂遺跡・正尺Ａ遺跡・正尺Ｃ遺跡

平成18年10月30日印刷
平成18年10月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986
URL http://www.maibun.net

印刷・製本　株式会社　第一印刷所
〒950-8724　新潟市和合町２丁目４番18号
電話　025（285）7161